

圍棋神髓

士

795.
H633i
W

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

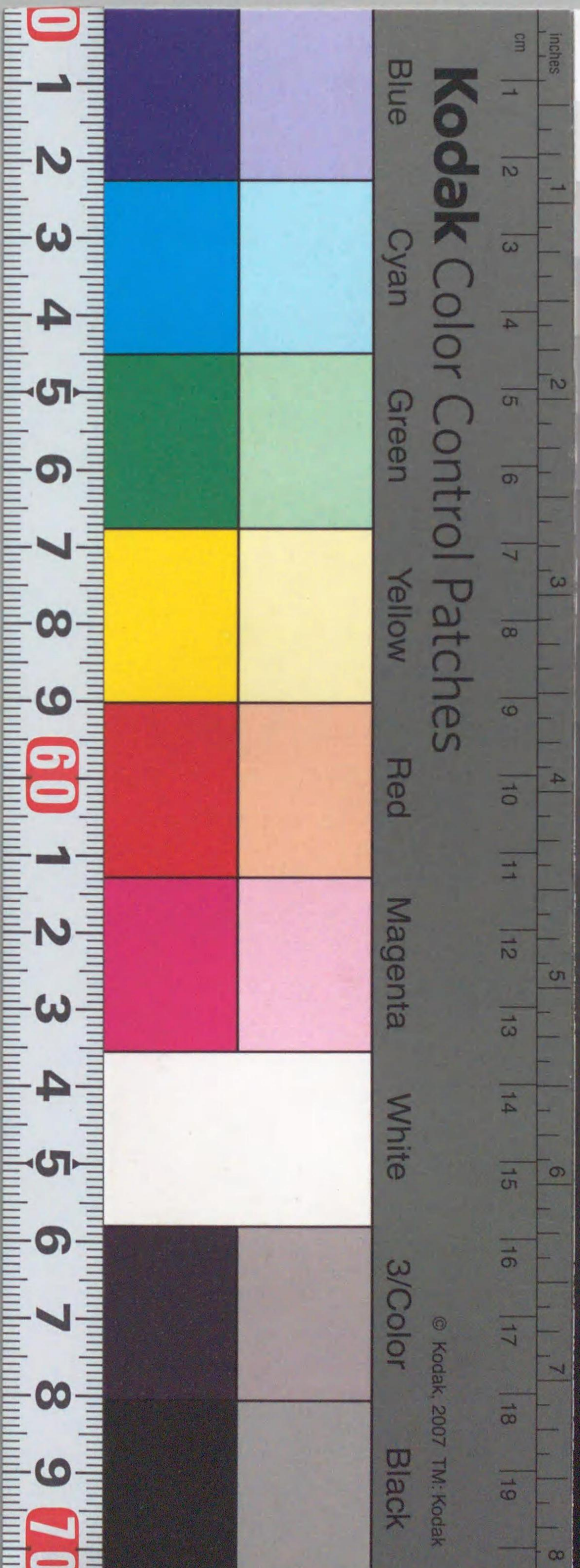


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

上

瀨越園藝文庫

寄贈者 八幡卷氏

互先定石

高日之部
日外之部

送井田大

名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

土

瀬越圃碁文庫

寄贈者 八幡恭助

松井明夫

互先定石

高目之部
目外之部

三百六十一儀
 象遵支則
 妙線詠萬景變
 化弗可測
 聖人教其子誰言
 長詐力大德
 一々拾河各和成得
 厚賜
 源藏律書轉中安
 野回正
 野明
 極



(生先哉秀坊因本の時當名襲)

主人本國名...

會國血國
 38.8.-5
 圖書館藏書

寄贈
 瀨田基文庫殿

617193

互先定石「高目」の部 目次

□高掛「タカガカリ」	自	至
△一間高掛「イツケンタカガカリ」	頁	頁
前提	三二五	三二七
下頂「シタツケ」	三二八	三二七
上頂「ウハツケ」	三二八	三三五
同—白四の隅頂—黒五の引	三三六	三三九
同—黒五のツキアタリ、七のキリ	三四〇	三五〇
同—黒五の緯	三五一	三六〇
一間夾「イツケンバサミ」	三六一	三八五
△二間高掛「ニケンタカガカリ」	三八六	三八八
□高目—對—小目掛		
叙論	三八九	
内頂「ウチツケ」	三九〇	四〇三
外頂「ソトツケ」	四〇四	四〇七
小斜走掛「コダイマガケ」	四〇八	四二二
大斜走掛「ヲホダイマガケ」	四二三	四三〇

三九七ニ危陰
手アリ

互先定石「目外」の部 目次

前提……………(二 圖)……………自 頁 至 頁
四三一

□小目掛「コモクガ、リ」

拓「ヒラキ」……………(十三圖)……………四三二 四三七

掛(テ後)拓……………(四 圖)……………四三八 四四〇

一間夾

前提……………(三 圖)……………四四一 四四二

尖(白四)……………(十六圖)……………四四三 四五二

頂(白四)……………(十五圖)……………四五三 四五七

二間夾……………(五 圖)……………四五八 四六〇

三間夾……………(四 圖)……………四六〇 四六二

□高掛「タカガカリ」

應手小斜走「コゲイマウケ」……………(十一圖)……………四六三 四七〇

同 外 頂「ソトツケ」……………(二十二圖)……………四七一 四八〇

小目黒に對する
白の掛場所

前記掛手、
意味

互先「高掛」の部 「一間高掛」
定石

▲(前提甲圖) 高掛定石とは、一間高掛(小目黒に對する白①)二間高掛(同上白②)を總稱した名稱である、乃ち茲に高掛といふは、先着の黒を假に「とすれば其に對して掛かる白第二の着手を指すのである。

「註」小目の位置に據つて居る黒に對する白の掛り場所を詳述すると①②③④の四點である、此の内③は目外の點と稱し此の掛りを發動點として一間夾、二間夾、三間夾の各種の定石が生れて出て居る、(是は從來已に講述し盡されてある)今は即ち第二の③の一間高掛に就て説く。
定石の講述に移る前に白の掛り手の性質を一言説いて置かう。

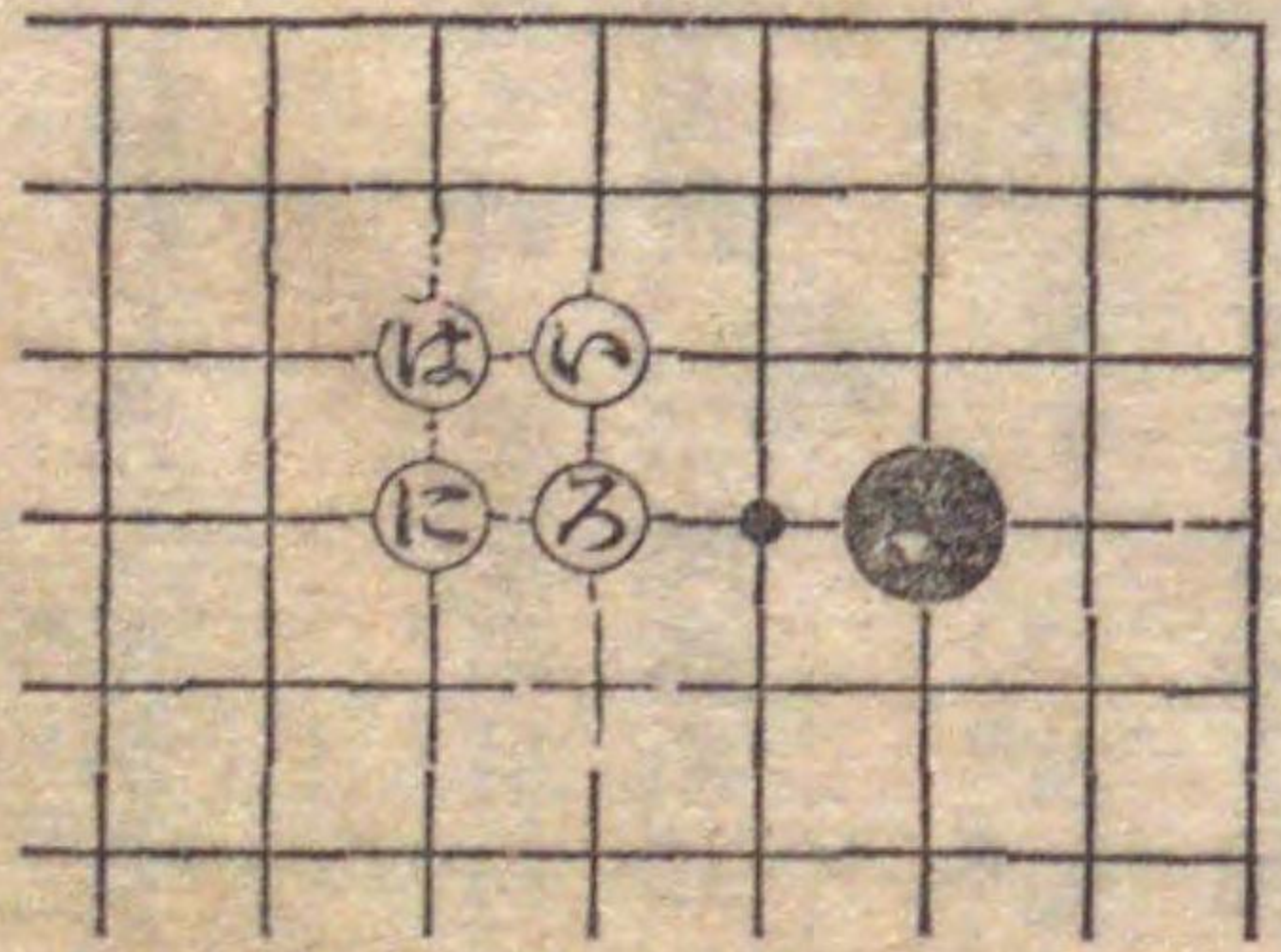
①「目外の掛」何等の場合なしとすれば此の目外の掛りが最も好良の着手である。

②「一間高目の掛」今より説かんとする此の一間高目の掛りは場合即ち附近に於ける自他配石の關係上着手す可き着點である。(要するに掛りの開局第一着點として擇ぶ可き點ではない。)

③「大斜走掛」是亦場合着手の點である。

④「二間高目掛」是は主として趣向即ち白の策戦上打つ點で時として場合問題にも連關して打つ事もある(布石法互先第二十六局初參照)

(圖 甲 提 前)



~~~~~(石 定 掛 置)~~~~~



一間高目ノ掛  
ハ場合、手ナリ

一局部ヨリ云ハ  
一間高掛ハ不利  
ナリ

如何ナル場合一間  
高目ニ掛ルカ

▲(前提乙圖) 既に説いた通り一間高目の掛は純然たる場合の手であり、場合を離れて此く掛かるは絶對に良くない手と心得ねばならぬ。

「註」 平易に言ふと、附近にある自他の布石の關係上目外の點に打ちたくても打てぬ、此く高目に打つより外手段はない、といふ様な時に打つ手であるといふ意味である(勿論大斜、二間高の二點も此の中に含んでは居るが其は他日其の定石の條で詳解しやう)

乃ち單に此の一局部の應接だけから言ふと高く掛かるは下利である、其れを具體的に示すと、「前提乙圖」の如く白○と打てば(黒の應じ方は種々あるが)普通此の圖に示す様な結果になるものと推定してよい、乃て黑白兩者の盤面に占め得た現實の地歩を觀・且つ其の前途を推測すると非常な懸隔を生じて居るのに氣付くであらう。

● 黒は隅に不拔の根據を占めた上に、●の一子によりて先手で側面活動の素地を完全に造つて居るのに反し、

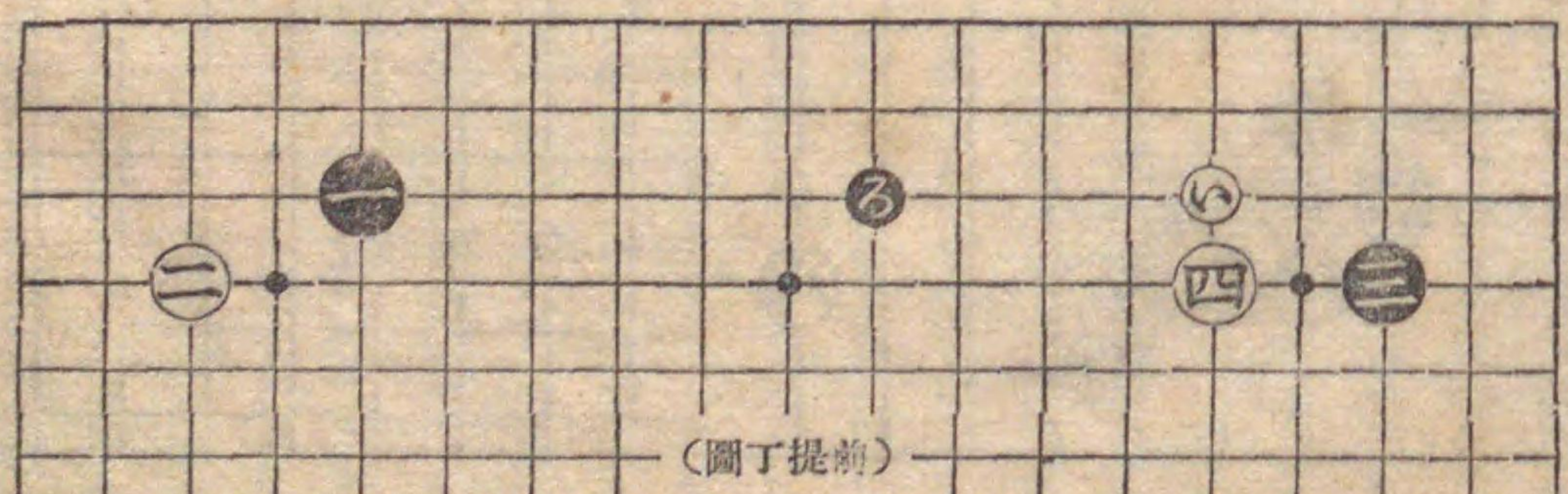
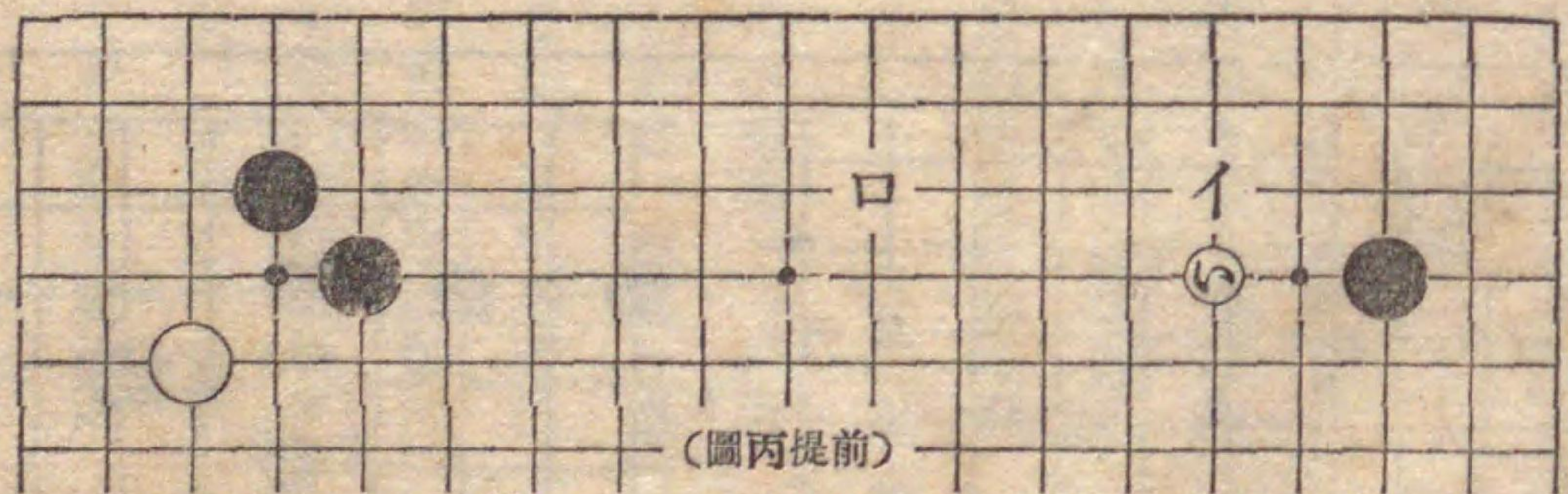
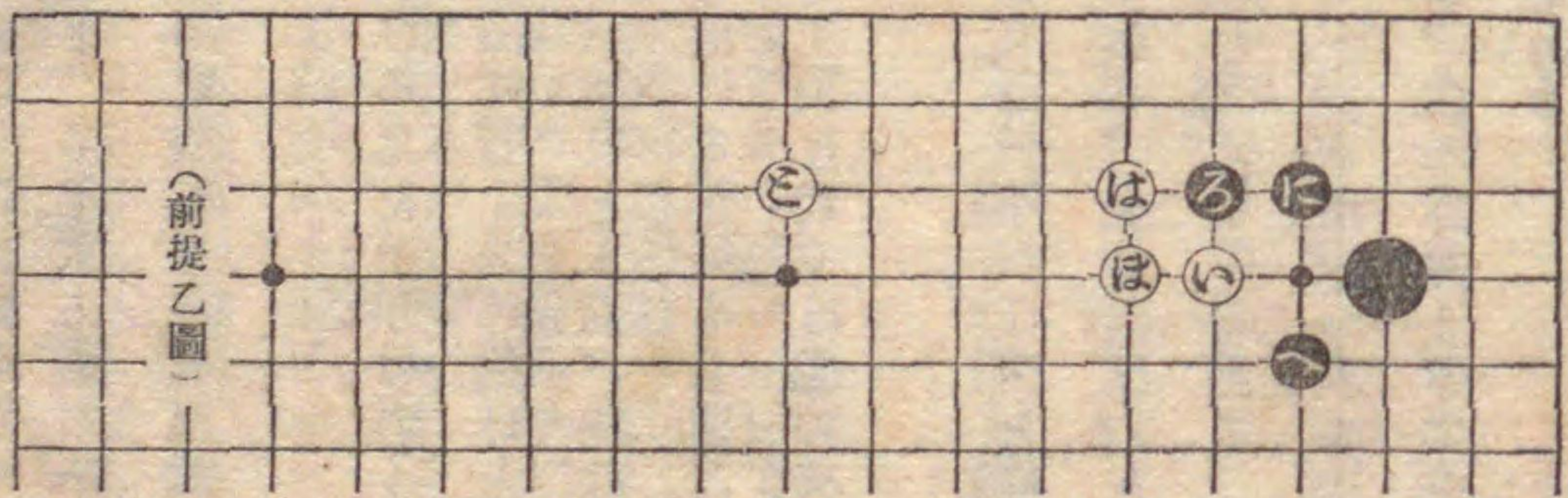
○ 白は漸く後手を以つて○と側面に三間拓の地を占め得たに過ぎぬ。是によつて見るも如何に白が不利の地に立つて居るかといふ事が解る。

「註」 勿論茲は黒先着の地點であるから、普通に應接さへしてをれば黒の方が優秀である可きは當然の事であるが、然し白も少くとも四分六の位置を占めねばならぬのである。

▲(前提丙圖) 然らば如何なる場合に白は一間高目に掛からねばならぬか、といふと例令ば本圖の如く隣隅即ち左上に目外の白に對する黒の尖ても行はれ居る様な場合に右上の黒に對して白が

(イ)と目外に打てば黒に忽ち(ロ)と三間夾をされて非常な不利の地に陥らねばならぬ、サリトテ此處を手抜して全然黒の獨占到委すといふ事は忍ばれぬ、といふ様な場合に○と高目に掛つて黒の應接を見るのである。

▲(前提丁圖) 或は本圖の如く、黒一の目外に對して白二と掛かり、黒に三と打たれて同姿勢に導かれた時、○と打てば忽ち「左上目外」の位置を利用して○と夾まれるから、此ゝる場合は白は四と高く掛るが適宜の處置である。



~~~~~(石 定 棋 置)~~~~~


白ニ使命

白ニ対スル黒ノ
應手
場合ヲ云ハレハ
下頂ヲ有リトス

確定ノ手順

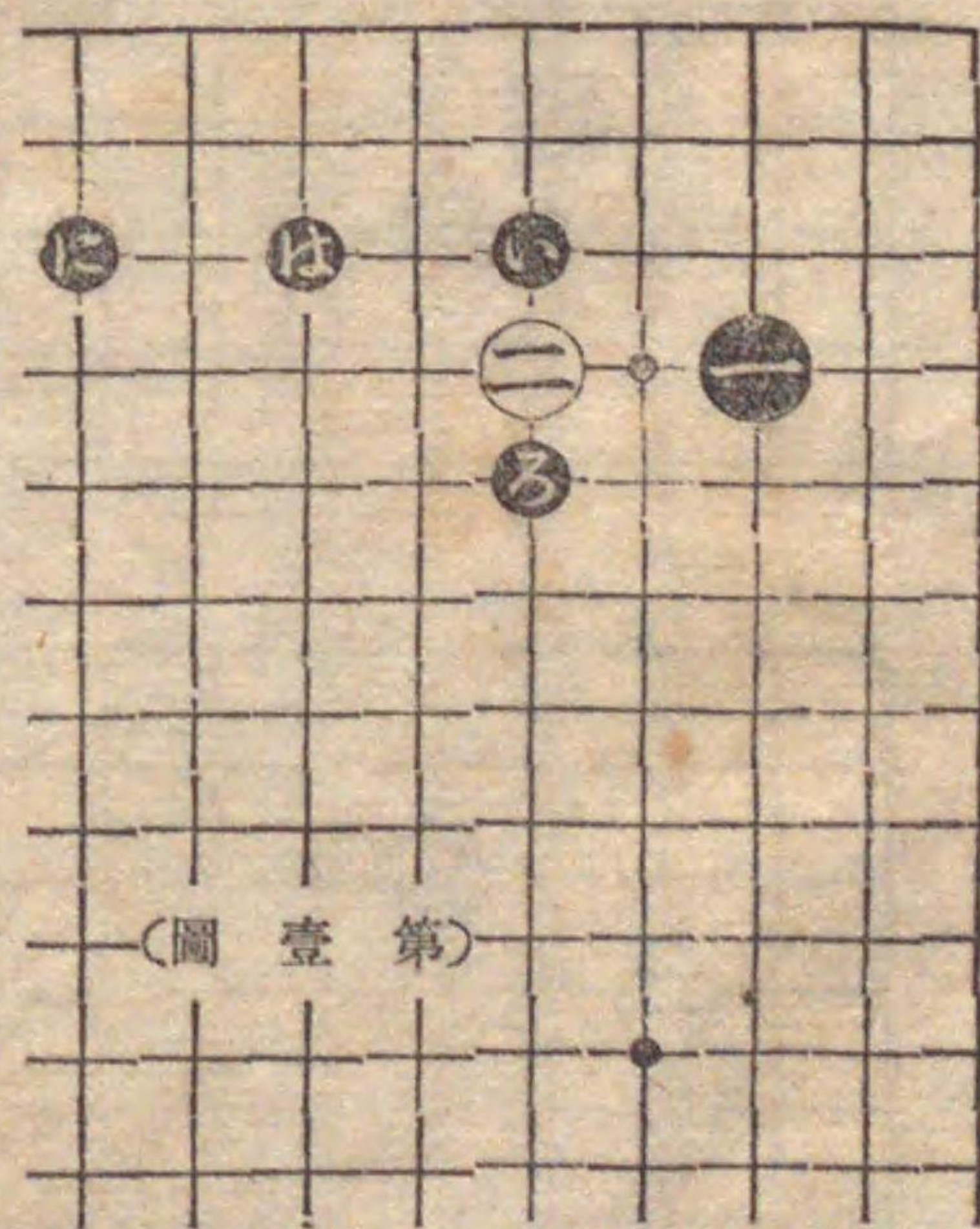
ハト側面ニ開
クヨリ外致方
ナシ
一間高掛ハ
四隅ノ治マリ
ツカヌ前ミ
絶対ニ打ク
カラス
六ノ手ヲ掛粘
スル意

確定ノ手

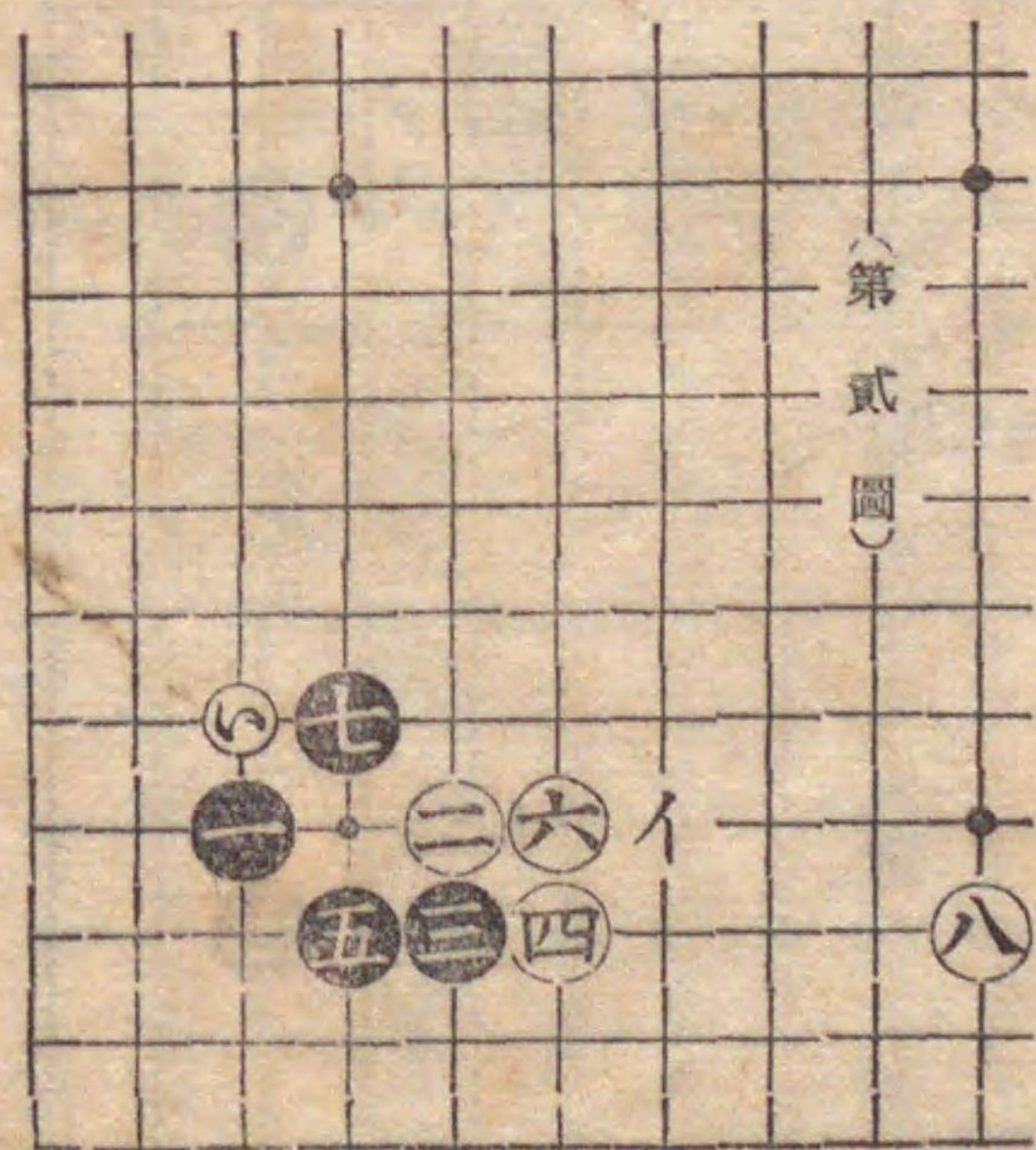
○(第壹圖) 白二の高掛は場合の必要に由つた着手である事は已に屢々繰返した通りである、要するに此の一手の使命は、黒一の締を妨げるにあるは説明する迄もない所である。

白二に對する黒の應手は、●と頂ける之を下頂け若くは内頂けといふ、●と頂ける之を上頂け若くは外頂けと呼ぶ、●之を一間夾と呼ぶ、●之を三間夾とよぶ、特殊の場合なしとすれば黒は●と下から頂けるが最も普通な着手で又最も有利な手である、●の上頂け若くは●の夾等は凡て場合による着手である。

○(第貳圖) 黒三の内頂けに對して白が外から四と抑へ黒亦之を五と引くのは確定の手である、次て白は六と堅く粘ぐ手と此の着手を以つて(イ)と掛粘ぐ手とある、白が六と堅く粘れば黒は七と尖んで、●と頂けられる手の拒ぎと同時に側面發展の準備とし、白も亦黒よりの夾を嫌うて八と側面へ地域を拓くのである。



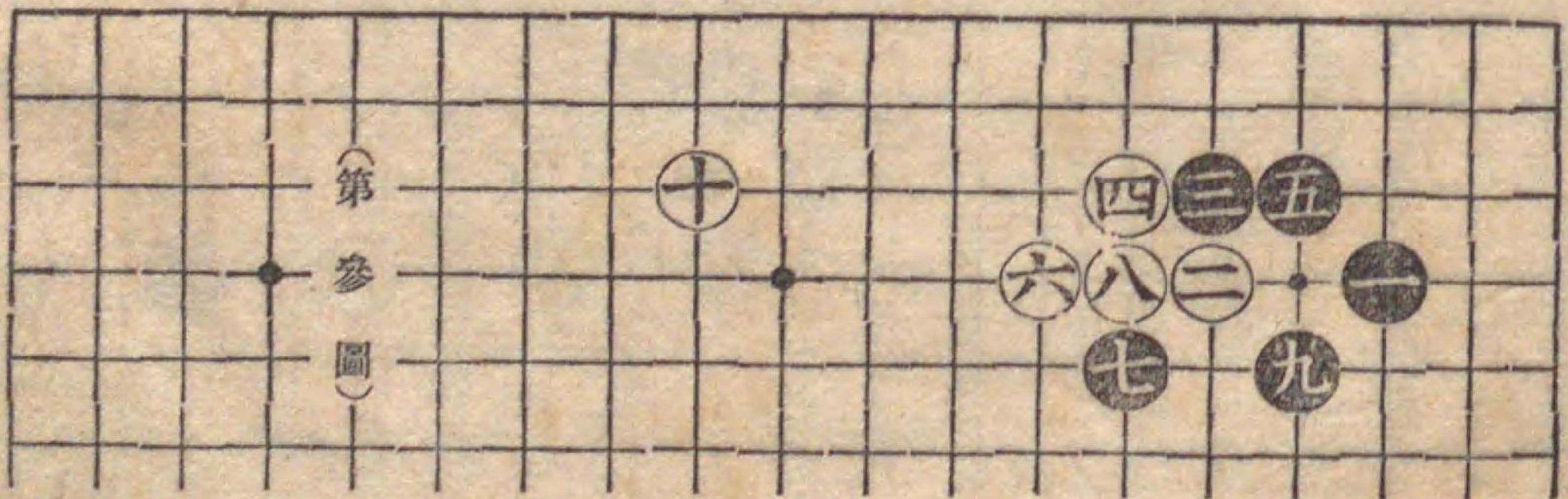
(圖壹第)



(第貳圖)

「註」 三以下七迄の手で黒に隅の利を十分占められた白は八と側面に三間拓をして地域を造るより外致し方はない、若し此の手を打たぬと忽ち此の方面から黒に夾攻められるからである、して見ると白が此く一間高に二と打つのは隣隅布石の關係上致し方がない、とは言ふものゝ四隅の治りつのかぬ以前には絶対に打つ可き手ではない、若し打てば白は第二位たる側面へ八と後手を取つて、第一位の好隅を全然黒の手に委ねる事になるからである。

○(第參圖) 白が本圖の通り六の手を此く掛粘にするのは側面へ一路廣く十と拓かうといふ意である、白六の時黒の打方が二通りある、本圖の通り七と窺いて白に八と粘がせ九と尖むのは普通の手であるが、策戦上或は手抜して此の七の手で十方面へ先鞭をつける事もある、手抜の順序は後に至つて詳解する、黒に七と窺かれて白が八と粘ぐ手、次て黒九の尖此の三着は確定の手である、白十の拓き亦普通の着點であるが、當初二の一手が場合手てなくして策戦手として打つた様な時は、此の十の一着を更に躍進させて左上に迫るかも知れぬ(第五、六圖參照)

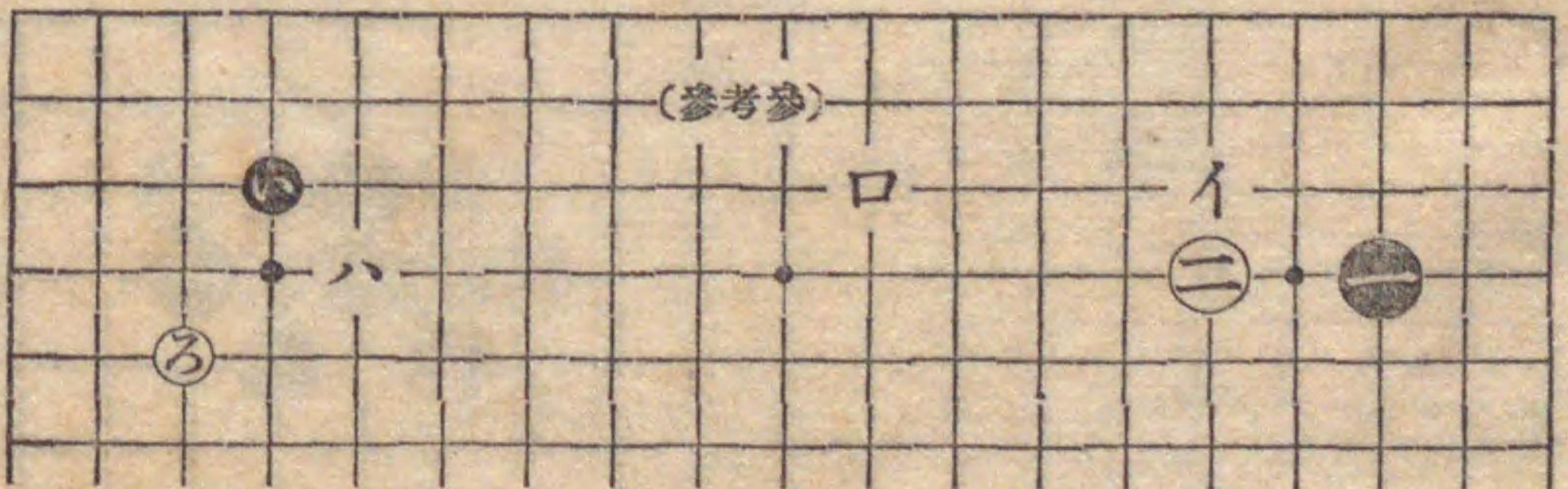
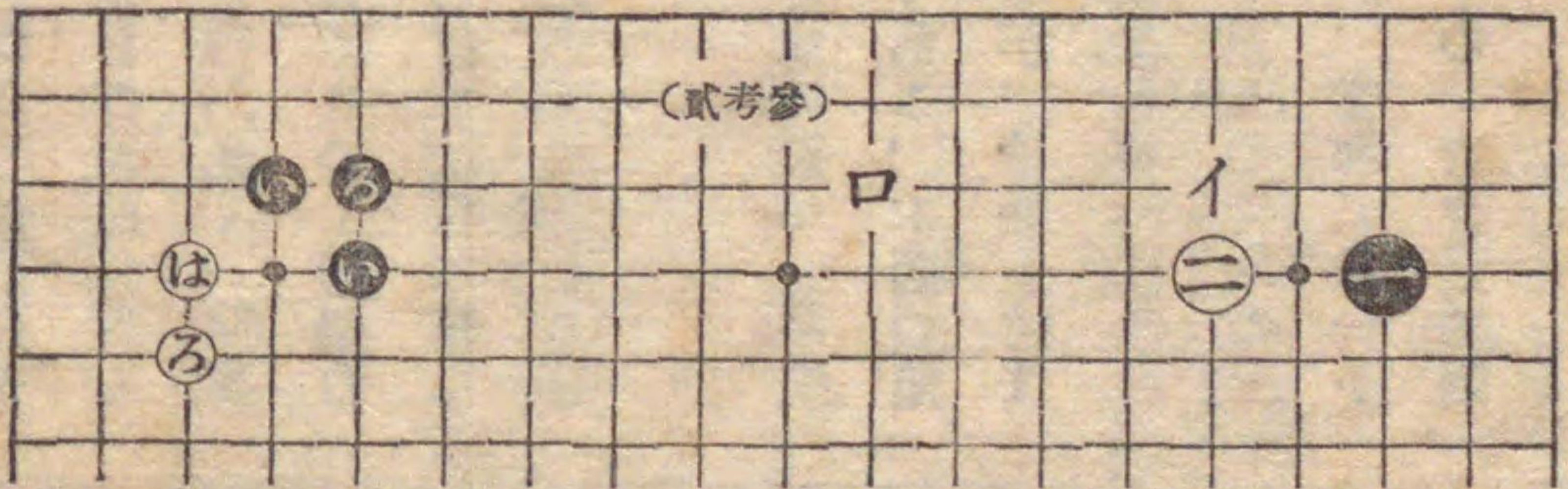
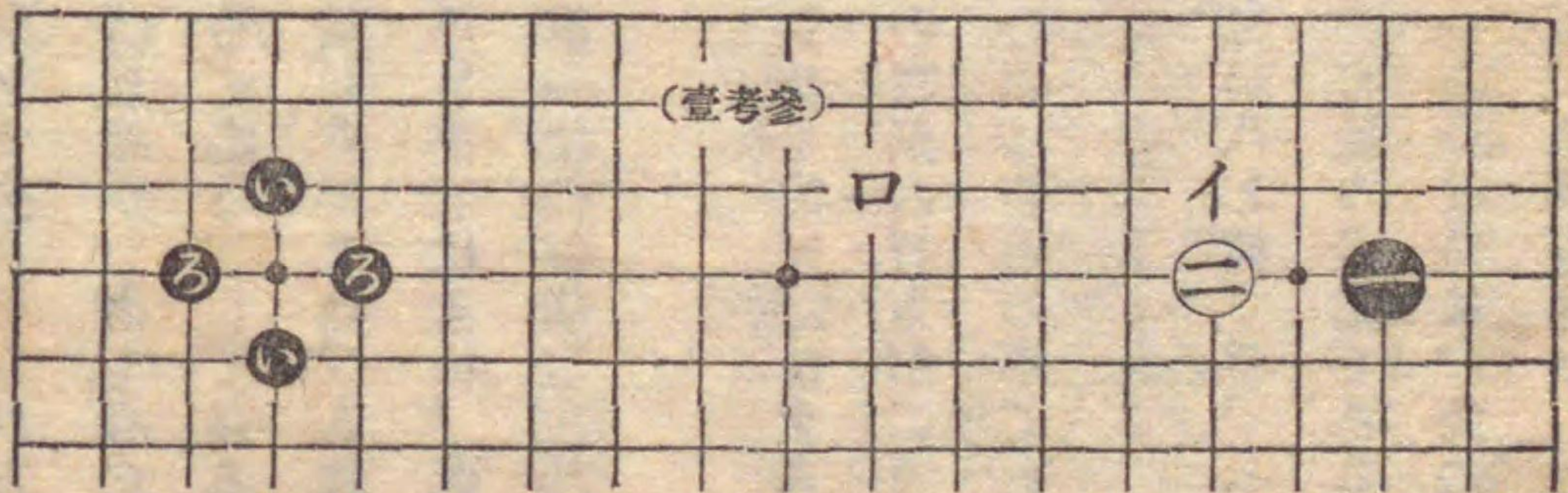


(第參圖)

小目一対し
二ト高々掛ラネ
ハナラヌ隣隔開
係如何

□問、黒小目の一に對して白が
高く二と掛からなければなら
ぬ隣隔の布石状態を尙詳細に
心得たし。

○答、▲「参考第一圖」に示す様
に、左上隅に黒●●の高締か
或は●●の高締のある時。
若くは▲「参考第二圖」に示す
様に、左上隅白○の掛りに對
し黒が●●の尖を以つて應じ
て居る時、或は白○の小目に
對し黒●●の目外掛りのある時
何れも白が二の手で(イ)と掛
かれば黒に(ロ)の夾を利かせ
られる患のある時である。



小目一対し高
々掛ル策戦
手段ノ解

○白イヤ直ミ
ロト夾ハイヤ出
来ヌ

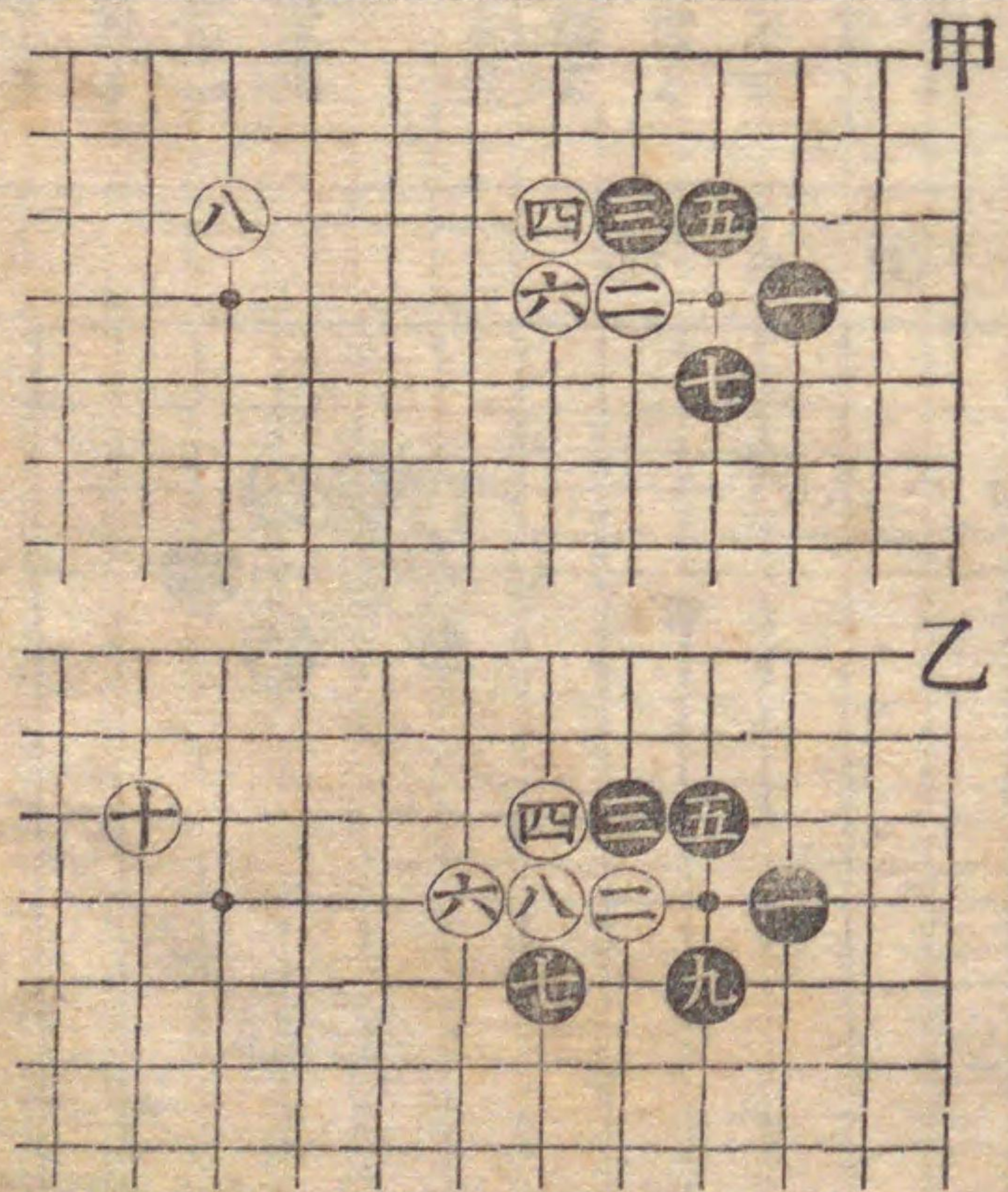
甲乙ノ比較
甲ハ常ノ手
乙ハ策戦場
合ノ手

□問、白二が場合問題で此く一間に高く掛かるといふ事は承知しました、然らば策戦問題として打
つは如何なる意味ですか。

○答、▲(参考第二圖)の如く左上隅に黒●●の小目に對し白○の目外の掛りが行はれて居る様な場合
は白二を敢て此く高く打つ必要はない、何故なれば直ちに白が二の手で(イ)と低く掛つたとして
も黒は之を(ロ)と夾む譯には行かぬ、(若し夾めば直ちに白○から(ハ)と掛けられて低地を這はさ
れるは賭易き道理である)然るにも拘はらず白が二と高く行くとがある、此は附近の布石状態か
ら餘義なくされて行くのではなくて白自身の
策戦計劃からして行く手であるから之を策戦
問題の手といふのである(第五圖参照)

▲甲、乙、兩種の價値の比較

然らば「甲」の如く六と堅く粘りて八と三間に拓
くのと「乙」の如く六と粘りて十と四間に拓く
のと何れが優れりやと言ふに、「甲」に比して
「乙」の方は七のノゾキの一子加はつて居るだけ
少し黒方面は利である、が然し此の利と言ふは
極めて微細な問題で、其よりは白が「甲」の場合
に比して「乙」の方が大に働いてをるのである。
して見ると白は何時でも甲の如く堅く粘ぐより
は「乙」の如く粘ぐ方が有利であるかといふと
必しも左様でない、といふ面白い理由がある、
其は次に述べやう。



~~~~~(石 定 棋 置)~~~~~



前頁に説いた「甲」の手順は此の定石の普通の應接である即ち何等局面に其の必要がなければ一路でも躍進したに越した事はない、然し局面の關係によりては「甲」の如く打つを利とする場合もあらう、乃ち「乙」を策戦及場合の手としておく。

○(第四圖)例せば局面(イ)の點の如き白よりするも黒よりするも良好の着點たるを失はぬ好場所がある様な場合、上側此の處にも多少の餘地を存して黑白双方より打着すべき好點を造り、之を見合ひの場所としておく策を立て、白は六の手で態と堅く粘ぎ、八と尋常に備へて形勢を觀望して居るので、若し黒が(ハ)と來れば白は(イ)を占めやう若又黒が(イ)に據らば白は(ロ)と拓かうといふ手に出る、此ういふ場合に、當初六の手で(ロ)に掛粘ぎ黒(ハ)白六の後白の拓さが(ホ)の點に來て居ると其の(ホ)の點より(ロ)に一間飛は徒に勢力重複の嫌があつて、随つて見合の場所たる資格を缺くのである。

斯ル場合ニハト打チ形勢ヲ觀望ス  
イロハ見合、場所

此打方研究ヲ要ス

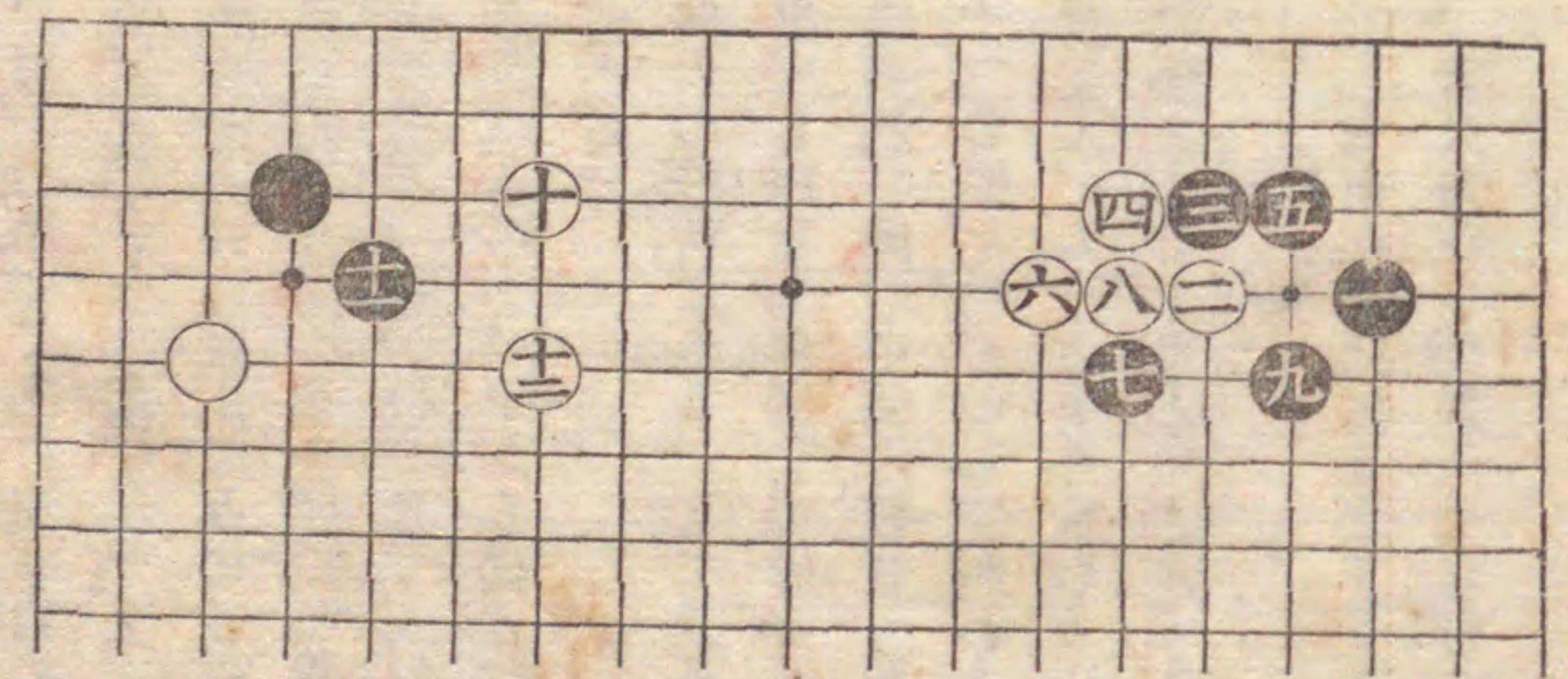
乙、場合策戦手ノ一例

甲ノ打方ナルモ此打方味アヘシ

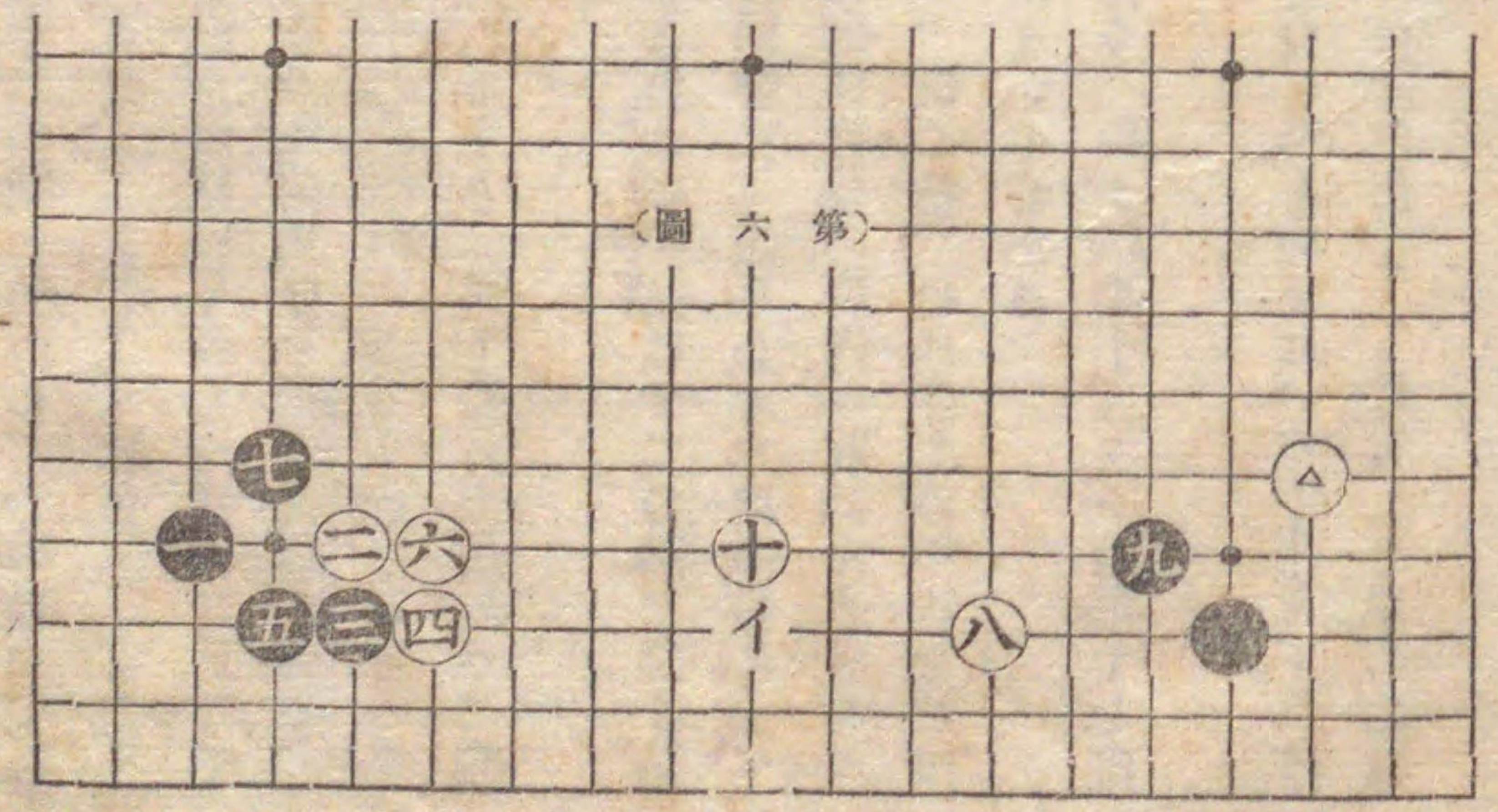
手ヲ按クモイヨリ攻ムル能ハス(三百二十一頁参照)

○(第五圖)本圖の如き黑白の交換が左上に行はれて居る時は白二は敢て高くかゝる要もないが、其を此く高く打つたのは、次で十の手で側面への拓きを更にハタラカして小目の黒一子を攻め、其を十一と動かして其の動機を利して十二と單關し自然に自己の地域を造らうといふ策である。

(圖 五 第)



(圖 六 第)



五(先定石)



黒常形ヲ外  
シ七ト打ツ一  
種ノ策戦ナリ

白ニハト頂レテ  
打方  
八以下五着ハ  
確定ノ手

白六ノ手若シ  
中側ノ拓ヲ絶  
對白ノ手ニ收メ  
トスル時ハ打カス  
白六ノ手ニテ  
ラツグ時黒ハ七  
手ニテ十ノ点ニ打  
ツ外ナシ  
十四以下五着ハ  
確定ノ手

○(第七圖) 白が六と掛粘をした時、黒七の手で(イ)に窺き白に十二の點を粘がして十の點に尖む前掲の打方は普通であるが、黒は一種の策戦として本圖の通り七と打つ事がある、是は言ふ迄もなく白の拓からとする地點を奪つて茲に先鞭をつけて左上尖みの我石からの發展を策した活動た着手である、然し其の結果白に八と頂けられて此の方面に多少問題の起るのは萬止むを得ぬ次第である。白に八と頂けられては黒は九とグスム外なく、次て白十黒十一白十二の此の八以下五着は確定の手順である、次て黒は十一の一子を(ニ)と打びる手と、下から(三)と縛ねる手と二通りの打方がある、(四)と打びる手の次第は次の繼續の通りである。

「註」 要するに此の變化の誘因は白六の掛粘にある、して見ると白六の掛粘は十二の點を堅く粘ぐに比して左方へ一路廣い拓きの出来る利益を保留して居ると同時に、黒をして本圖の様七へ先鞭をつけしめる惧もある、其て白が若し此の中側の拓きを絶対に自分の權内に收めやうと考へたならば六の掛粘は出来ない堅く十二の點を粘ぐの必要がある、堅く粘ぐのは黒七の手拔を制限する所以で、黒は七の手で十の點に尖んで(イ)より外致し方はないのである。

○(繼續圖) 黒十三の行は白を上下に隔て、打たうといふ意である。白十四黒十五白十六黒十七白十八の五着は確定の手順である。

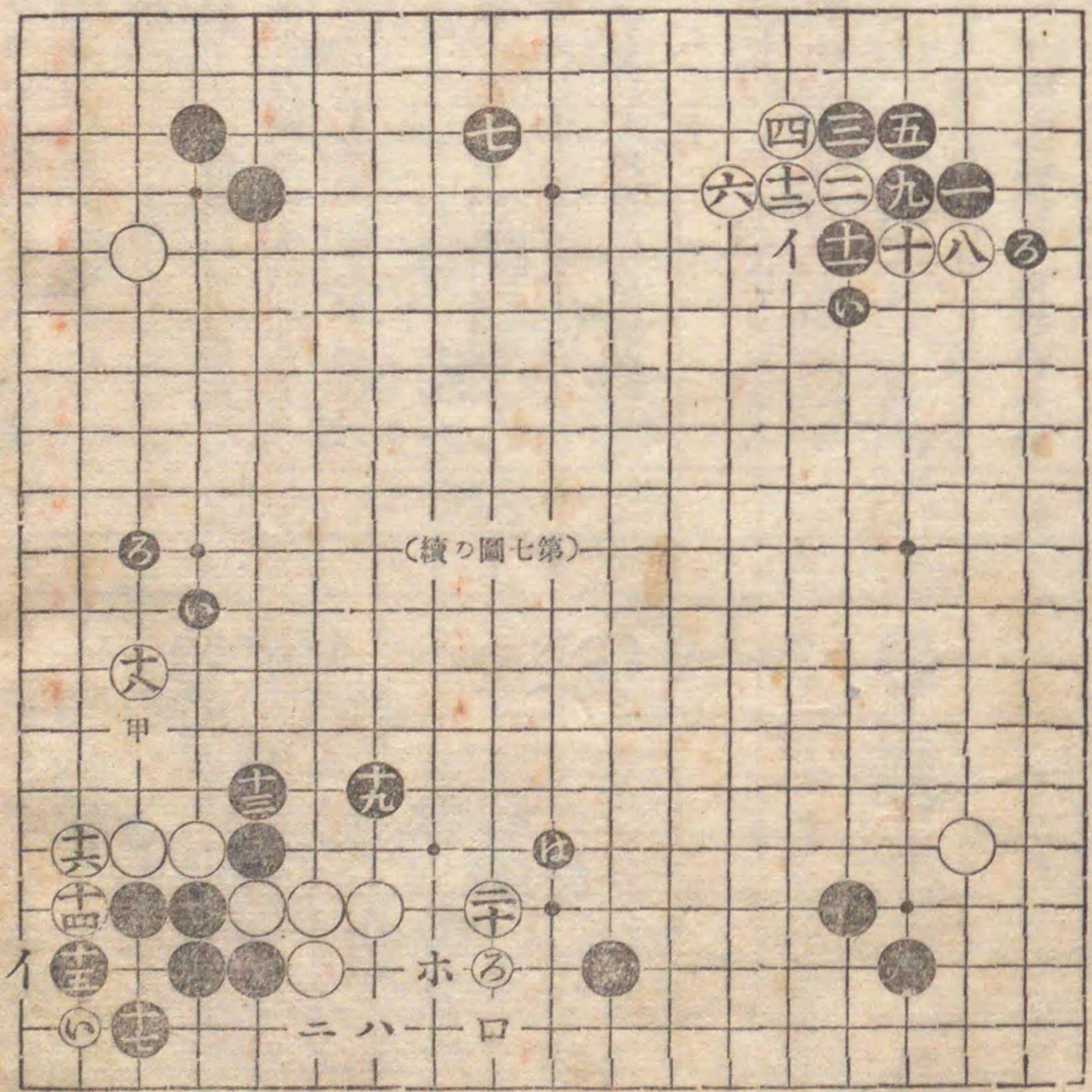
「註」 黒若し十七の手を手抜して(甲)方面から圍はうとすると白に(ニ)と夾まれ、黒(イ)に下れば白に十七に行ひられて手數足らず、若又白(三)の時黒十七に抑へれば白に(イ)ト盤られて却の危険に陥るのである。

黒ニナノ手  
如何(攻撃点)

白二十は一路低く(ニ)と打つてもよい其は根據に重きを置く手であるが其の代り、黒に(ニ)と上を圍まれる惧がある。二十と此く高く打つておけば外面を包まれる危険は無いが黒に(ロ)と櫛を覗はれる手が残つて此の石には先づ根據がないものと覺悟して居ねばならぬ、黒二十一の手は或は(ニ)より壓するか或は(ニ)から迫つて打つかは問題である。

「註」 假令白二十の手が低く(ニ)にあつても後に黒から(ハ)と打てば白(ニ)と遮ぎり其の時黒に(ホ)と打たれては根據は出来ぬ。

(圖七第)



(續り圖七第)

五(先定石)



黒十三ト下カ  
緯ネル意

黒十七ト行  
ハ考モ

注意スキ  
手

黒十七ト時白  
イト押スハ不  
可ナリ

黒十三十五ヲ  
打タスレテ手  
ヲ抜クハ不利

結論  
黒先鞭ヲツ  
ケタセテ一着ハ  
確ニ効カラズ保  
持シテ居ル

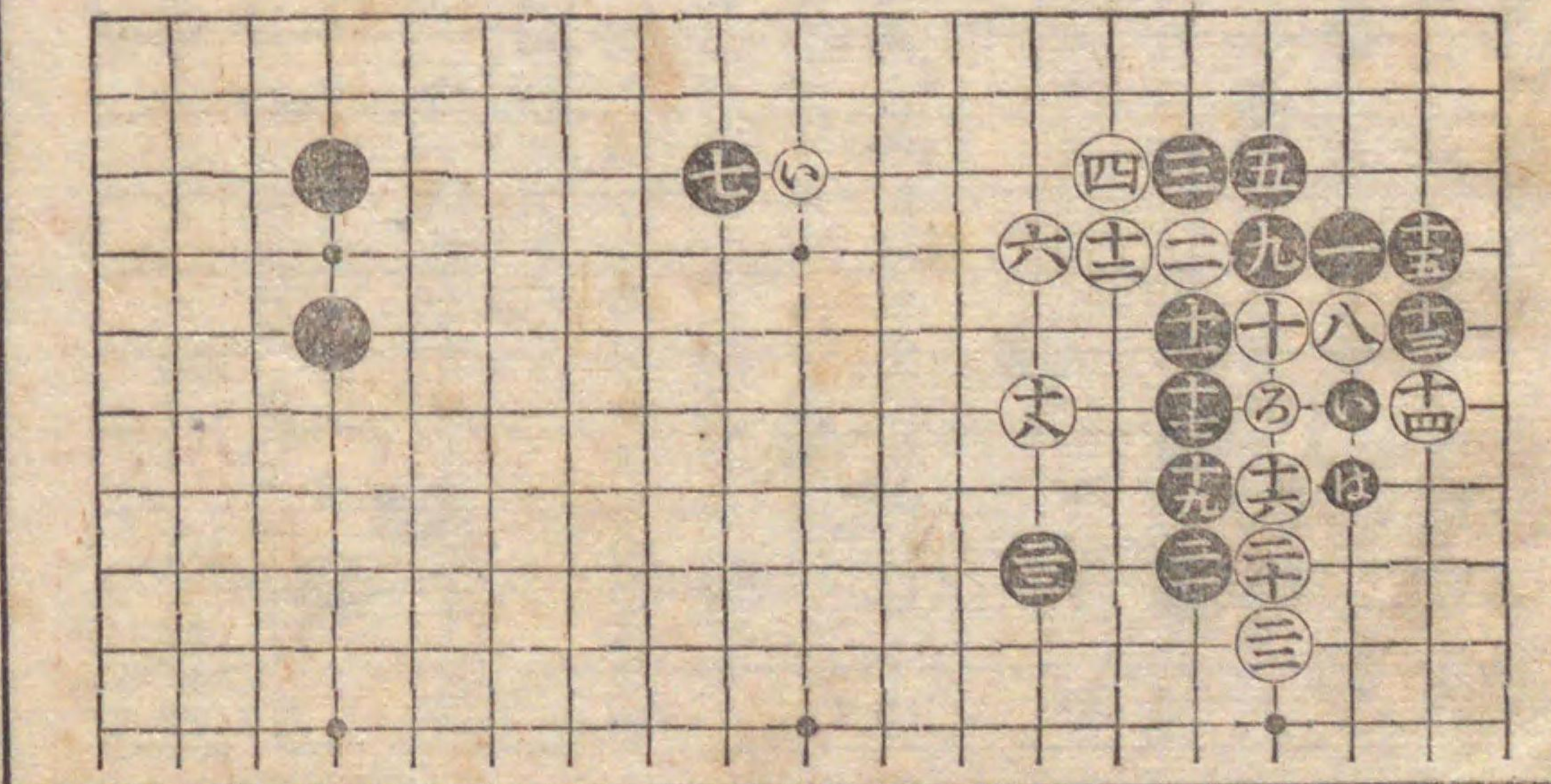
結論  
白六ノ手ノ掛  
粘ハ容易ニ  
打ツカササル  
手ナリ

○(第八圖) 本圖は「第六圖」の第十三手からの變化である、黒が此く十三と下から緯るのは先づ隅に於て利を占めておいて、中邊黒十一の一子を動き出す機會を待たうといふ手である、乃て白に十四と抑へさせて十五と堅く粘ぐ手は勿論決つた着手であるが、白十六に應じて十七と行ひ出すのは考へものである。(若し直に行ひ出すとすれば本圖の通り二十三迄運ぶが普通の應接である)

「註」 本圖の中で注意すべきは、白十六の手で十七の點から黒十一を抱へる手である、若し白十六を十七へ打つと忽ち黒に○と截られ白○の時黒に●と行ひられて白は愚形に歸し黒に大利を占められる事となる。

▲(參考甲圖) 黒十七の時白が其の頭を○と押すのは甚だよろしくない、乃ち黒●白○黒●白○黒●白○黒●といふ結果になつて、一旦黒を愚形にした様ではあるが、次て白が(イ)から緯ねれば黒は(ロ)と行ひる、若又(ロ)から迫まれば(イ)に逸しられるといふ譯で、結局左右の白は未だ一眼の眼形も出来ぬといふ不利を自ら招くに止まるのである。

(圖 八 第)

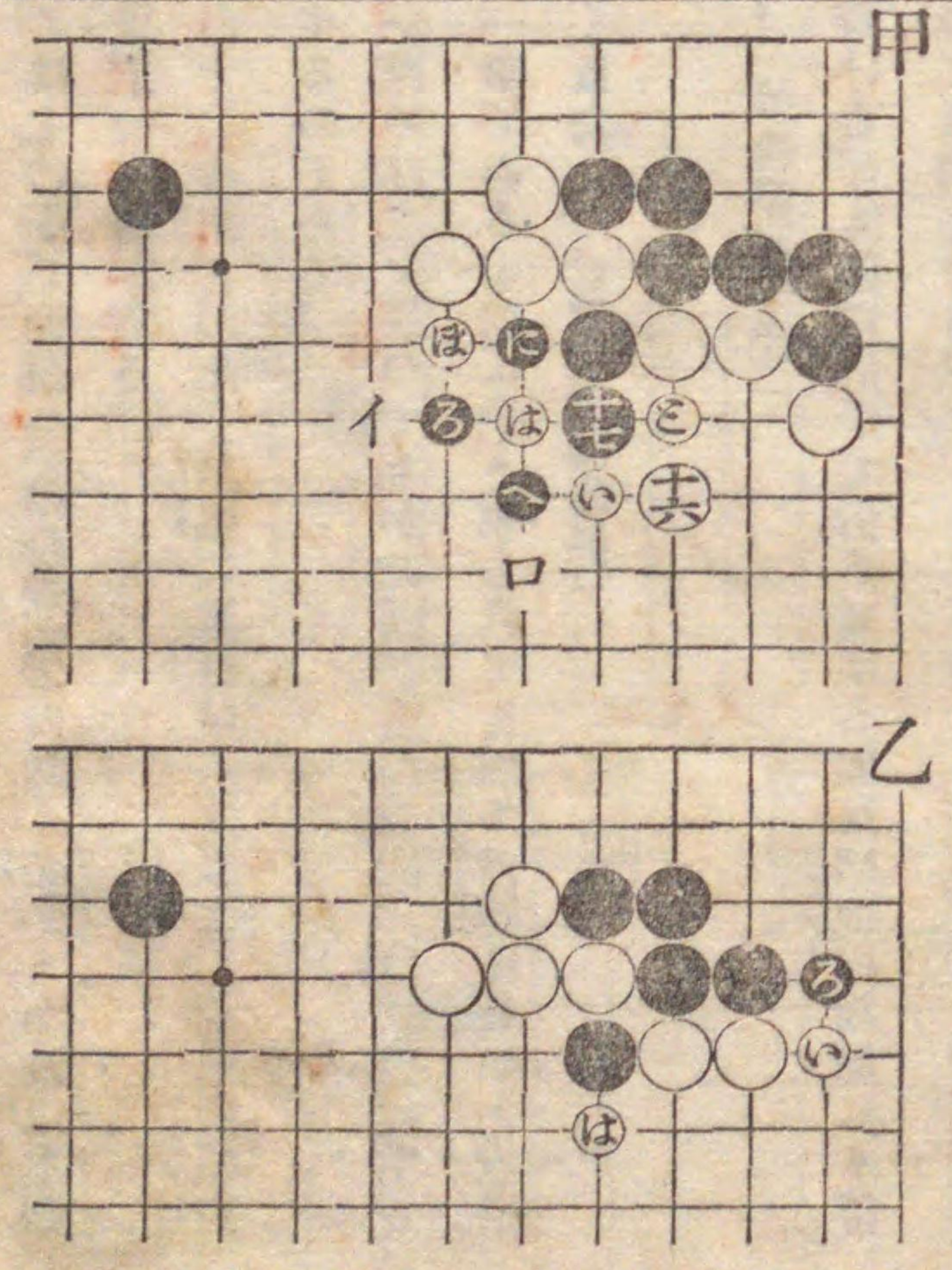


▲(參考乙圖) 黒が第七圖に示した十三、十五の緯粘をせずして此の處を手抜するのは良くない、其の故は本、「參考圖」の通り白に○と下られ黒●と應じた時白に●と完全に黒一子を捕られ、何等の味も残らぬ事になる。

結論 要するに「第七圖」の結果若くは「第八圖」の結果、其の孰れになつても、黒が先鞭をつけた七の一着は確に其効力を保持して居る譯である。

溯つて言ふと白二が最初高く掛つて來た主旨は黒に夾ますまいといふにあるから、黒三白四黒五迄は白の策が成り立つた觀がある、茲て白が六と掛粘がず、十二の點を堅く粘いてさへ置けば、黒は十の點に尖むより外致し方はなく白又星下○に拓いて當初の目的を達する譯であつたが、白たま／＼一路廣く七の點に拓かうといふ考から六と掛粘いだ爲め、終に黒に乗せられて却つて七と要點を奪はれ、初の二の主旨を破壊される事となつたのである。

して見ると白は「第七」「第八」兩圖の様な結果に萬一ならうとも決して差問はないといふ時でなくば六の手の掛粘ぎは禁物であるといふ得ねばならぬ。



(石 定 先 五)



黒三ト外カラ  
頂ケルトキハ  
ニ途ヲ選ビ  
自由ヲ保ツ

外頂ニ先ケル  
應ノ注意ヲ  
要ス

白六ノ手

黒七ノ打方ニ  
三種アリ

黒九ノ手確定

○(第九圖) 黒が此の如く三と外から頂けるは七の手で側面へ(第拾壹圖)の如く拓かうか或は本圖の如く覗いて隅を活やうか、といふ二途を選ぶの自由がある。

但し本圖の通り運んだ此の外頂の最後の白十二の拓さが此く星脇に迄行ける結果は、前記内頂白掛粘の(第二百十九頁第三圖)と同一に歸するのである。

本圖の如く黒が外から三と頂ける前に於て一應の注意を拂つておかねばならぬのは、白に四の手で隅三々の要點へ向つて○と手段を弄される一事である、白に○と來られても敢て差悶はないと覺悟の出來た上は此く三と外から頂けるのも悪くはない。(第拾四圖参照)

白四の時黒は五と引くより外仕方はない。

白六の手は極めて稀に○と行ひる手がある。(第拾參圖参照)

黒七の手は全然手抜して十二の點へ先鞭を着けるのも面白手である其は右側及び征の關係にも待つのであるが其の變化は次(第拾壹圖)を以つて詳解しやう。

黒七の時白は八と堅く粘り可きて此の手を九の處へ下るは打つまじき惡手である。(坤圖——参照) 黒七の手を以つて九の處に頂ける定石が古い棋書に出て居るが極めて味の悪い手て是亦好まじからぬ着手である。(乾圖参照)

白八の時黒が九と引くは確定の手。

白が十と外から抑へるは普通の手であるが、白は時として此の黒を外から包んで終はうといふ策

白十ノ手ニテナ  
所ヘツキ込ニ  
テハ如何

白十ノ手ニテナ

白十ノ手ニテナ

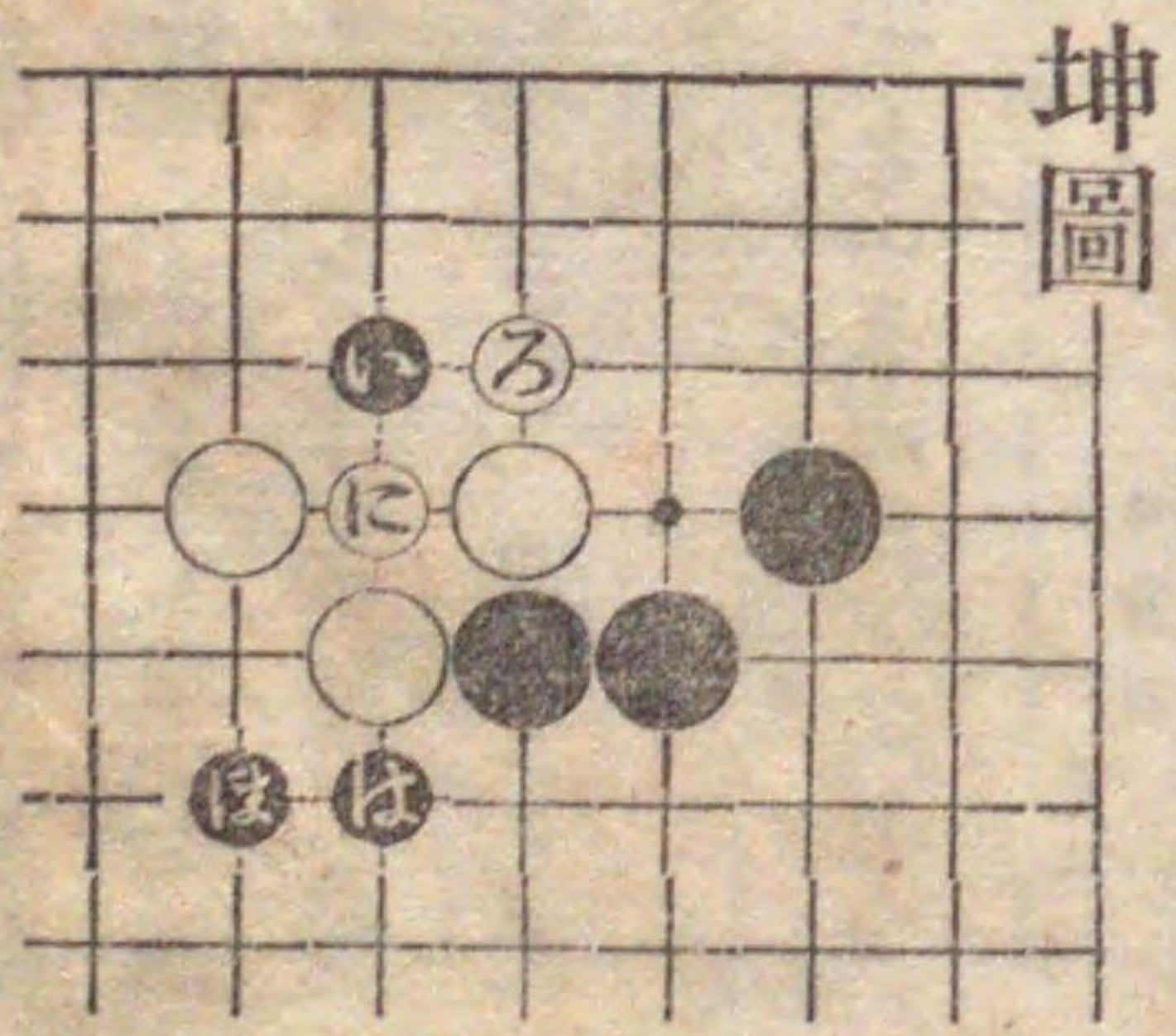
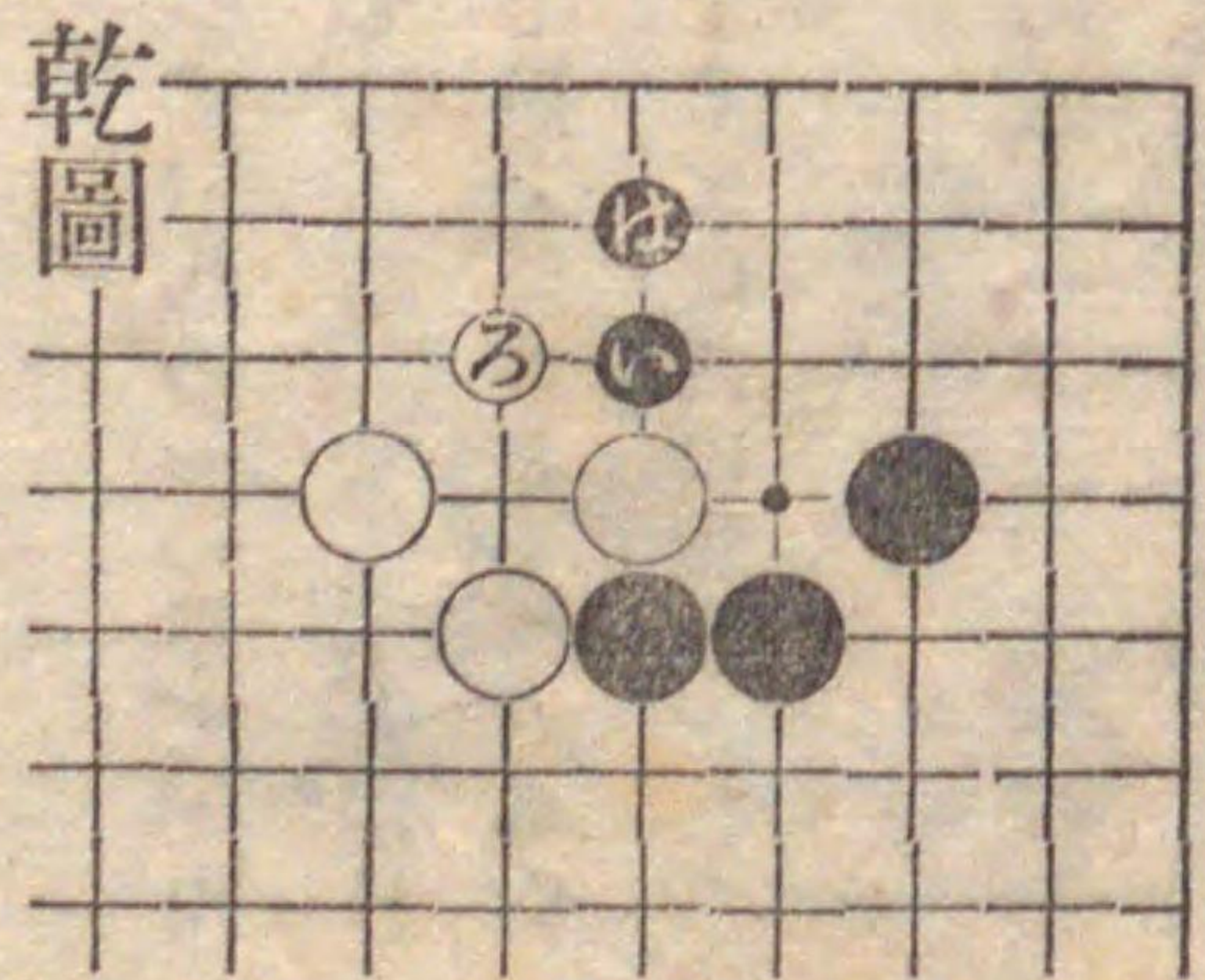
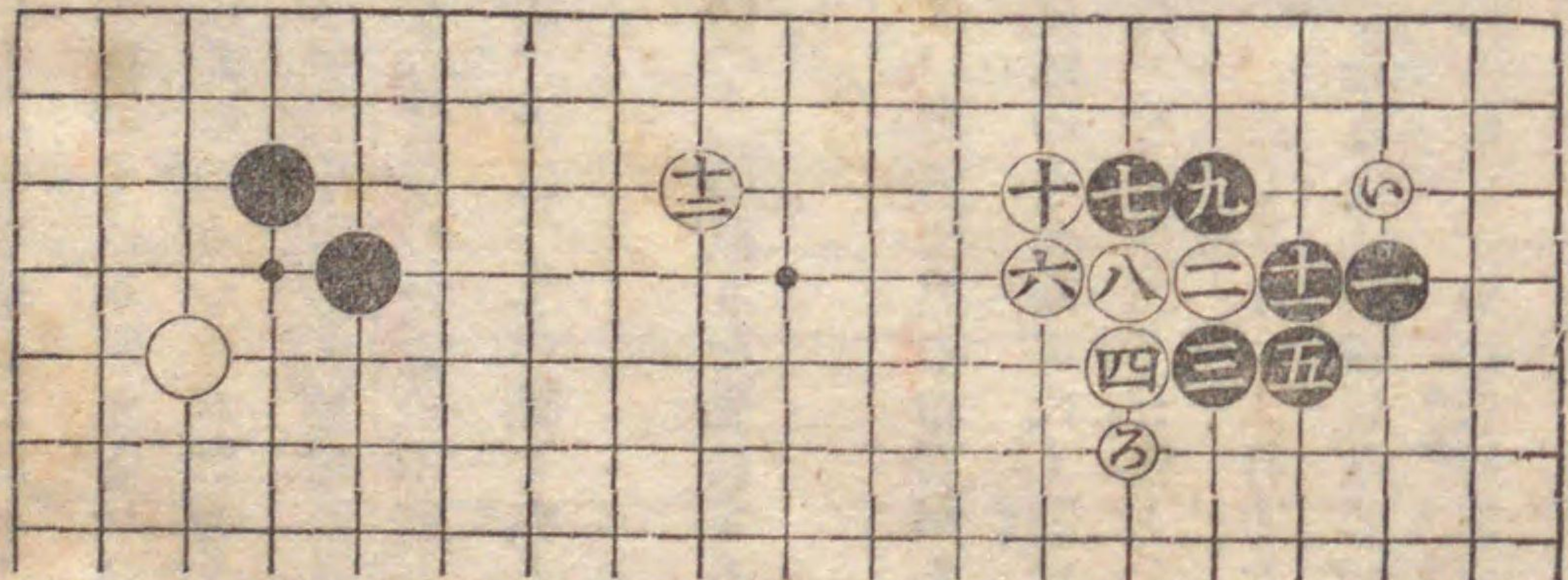
戰の時に十の手で十一の處へ衝き込んで來る事がある、其の變化は(次圖)に於て詳解しやう。

白が本圖の通り十と外から抑へ黒は十一と隅から極りをつけ白亦後手で十二と側面の拓きをすれば、双方共是で納りはつくのである。

▲(參考乾圖) 第九圖黒七の手で此くと夾めば白に○と縛られ○と下つておく、是は(第拾壹圖)の様に塗りつけられるのを嫌つた手であるが何時迄も隅に味の残る面白からぬ手である。

▲(參考坤圖) 第九圖黒七の次誤つて白が九の點即ち此の參考圖の○の點に押へると黒に○の縛ねを利かされ白○に粘いだ時○と行ひられて大不利を蒙らねばならぬ。

(圖九第)



(石 定 先 互)



白カトツキ込  
ミ来ラハ如何  
應スヤ

十以下二十五迄  
変化もし若し  
手順ヲ誤ハ  
誤リヤん方ノ不  
利ナリ

此形ニシテ  
白ノ打手如何

参考二圖ノ打  
方ヲ味フコシ

結論

○(第拾圖) 白が本圖の如く十と衝き込んで来る主意は何等場合問題によるのではなく単に上を塗らうとの策である、然らば黒は此く外面を包まれて終つては不利かといふに敢てさうでもない、隅に於て約二十目の實利を占めて居る之に對する白は此の塗りつけた勢力を利用して外部に利益を得るの未知數で、容易の業ではない、本圖白十以下黒二十五迄の應接には變化はない、双方とも此の手順通りに運ばねばならぬ、若し手順を誤つたならば誤つた方の不利となる。  
此の形は次に白が①と打つて黒に(イ)と粘がせるか、或は(イ)の點を截るか、といふの二法がある、其は征の問題と又は白の策戦とによるのである。  
②と先づ窺く手からの變化は(参考一)の通りに運び(イ)の截りを先にする手の變化は(参考二)を見れば明了する。

▲(参考一) 白が一と窺いて黒に二と粘がせるのは、對隅に黒の布石があつて、此の一の手で、たとへ二の點を截つたとしても二子の黒を征に提る見込のない時に此く窺いて二と粘がせて三と頂け黒四の時五と押へておくのは無論であるが、白は時として黒二子を征として提り得らるゝ時でも尙白の趣向上此くノゾいて粘がせる手が無いでもない、然しさういふ打方をするには白の立場として五と押へる後手を覺悟の上でなくてはならぬ、其て此ういふ結論になる。

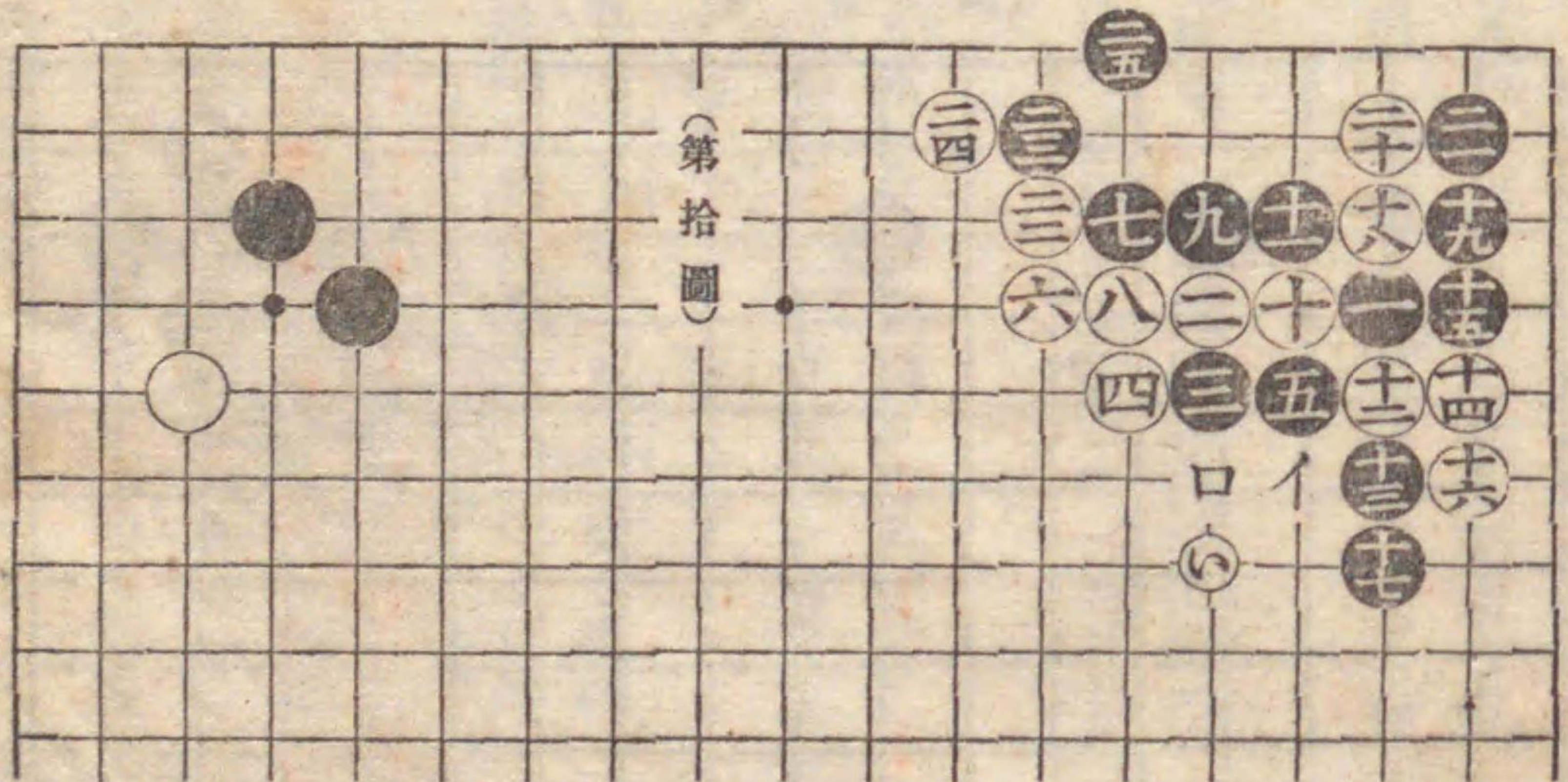
■白は二の點を截つて黒二子を征に提る事が出来る時か、或は當參考圖の通り一、三、五と後手を引いて差間のない時でない限りは、前圖(第拾圖)第十の衝込を容易に決行する譯には行かぬ。

参考三圖ノ打  
方ヲ味フコシ

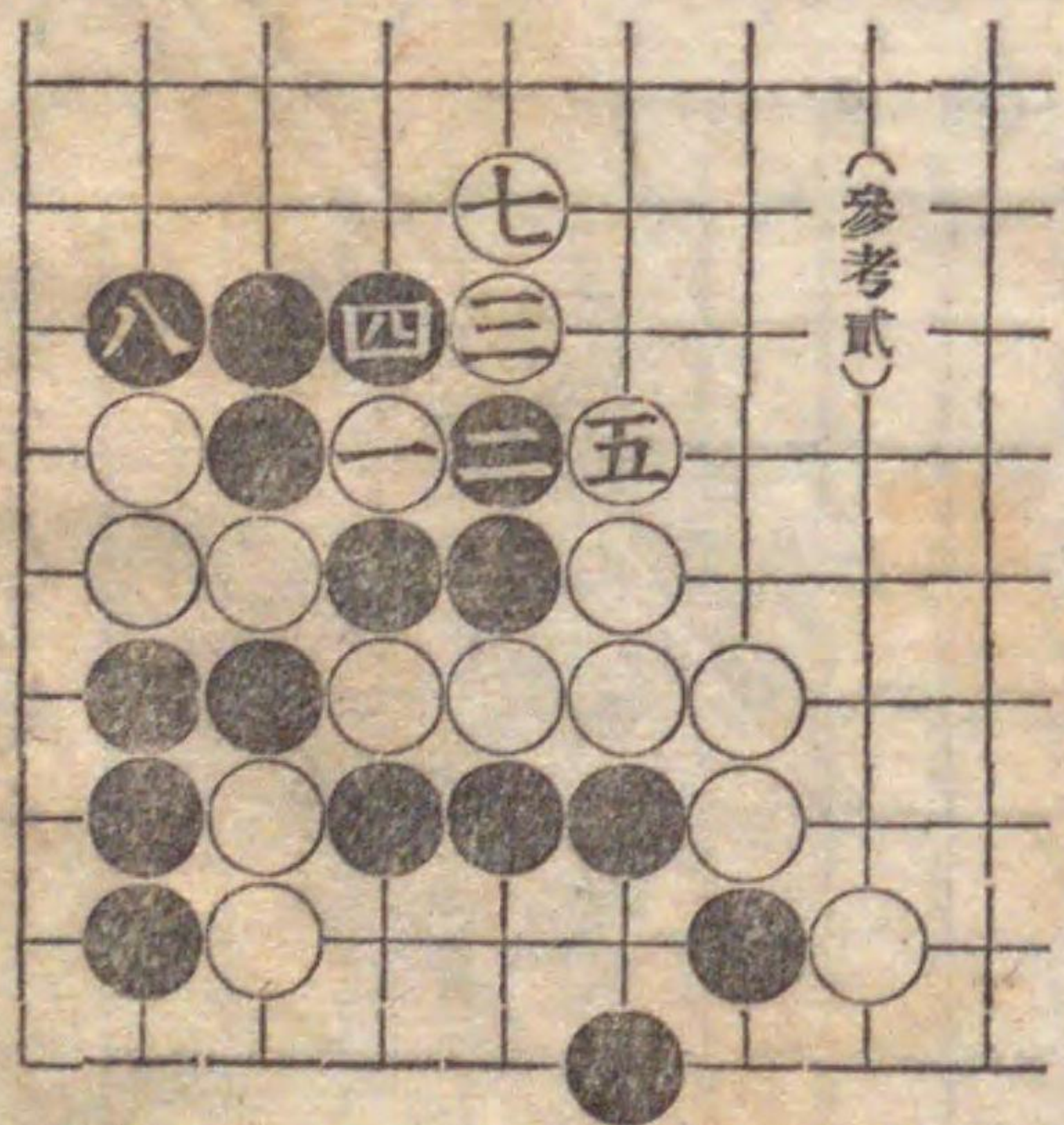
結論ノ注ナリ

此の參考圖の後白(イ)黒(ロ)白(ハ)黒(ニ)となつて完全に黒は封鎖されるが、然し白には①、②、③の三斷點が残るから餘り面白くはない。  
▲(参考二) 黒二子が征で提れる際は白が一と截るは當然の手で黒二白三の時黒五の點に逸出すれば白に四の點に粘がれて其迄であるから、黒は餘儀なく四と提り白五と絞り、黒一の點を粘ぎ白七、黒八となつて一先づ治まるのである。

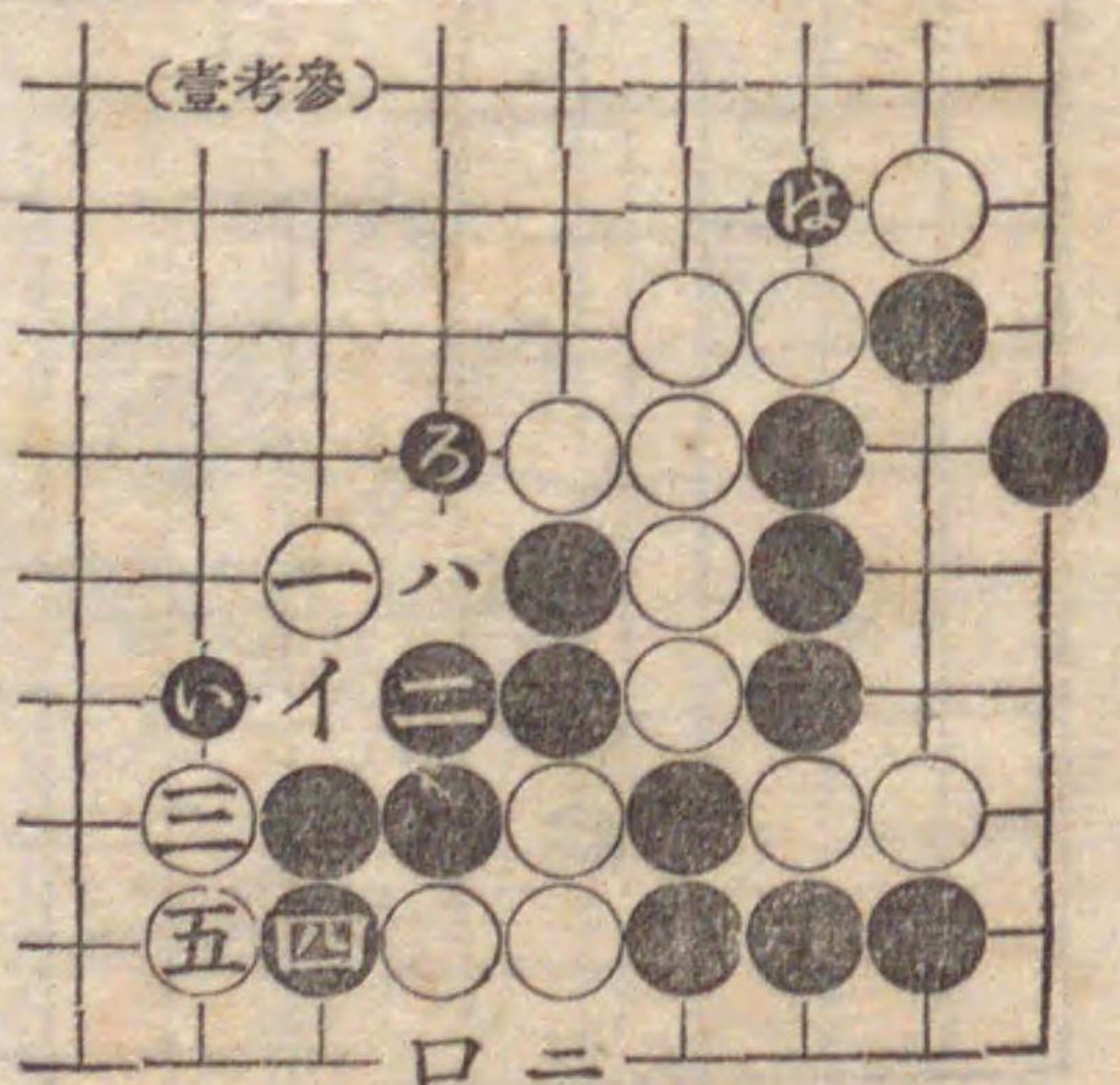
「註」要するに(第九圖)で示した白十は趣向とは言へ利益を見る事は困難な手であるから、容易に打たぬ事と心得ねばならぬ。



(第拾圖)



(參考三)



(壹考參)

五(互)先(定)石(石)



白八以下黒七  
追確定の手

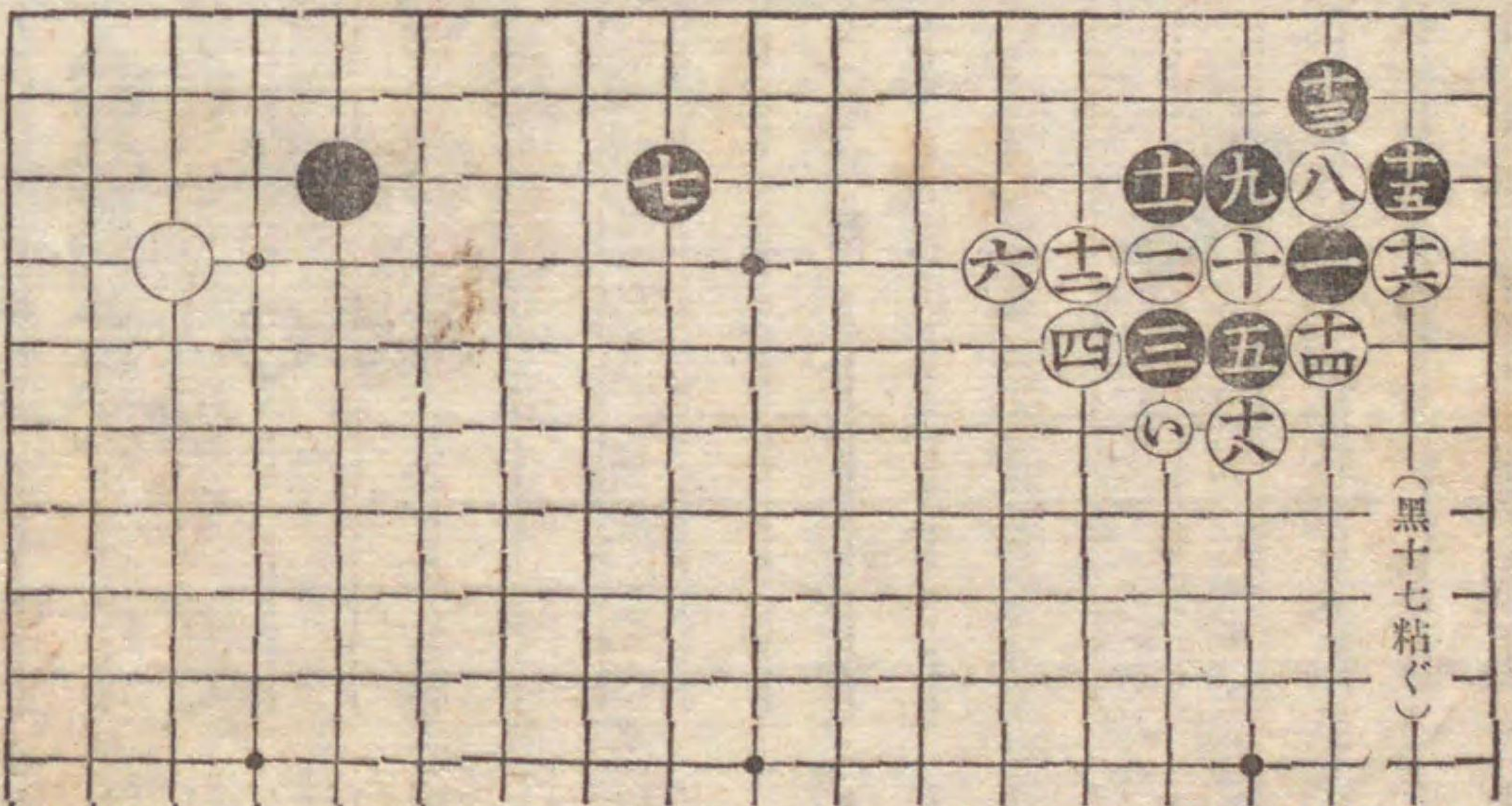
黒七手後、利害

○(第拾壹圖) 本圖は「前第九圖」第七手からの變化である、即ち白の側面の拓きを妨げて自ら茲に先鞭をつける主旨の際である、白八以下黒十七の粘迄は確定の手順である、對隅即ち左下隅に白の布石があるか又は黒白共に布石のない時は此の三、五の二子は白に十八と打たれて征に提られねばならぬ、征に提る事の出來ぬ時は白は次の「第拾貳圖」の通りに運ばねばならぬ。

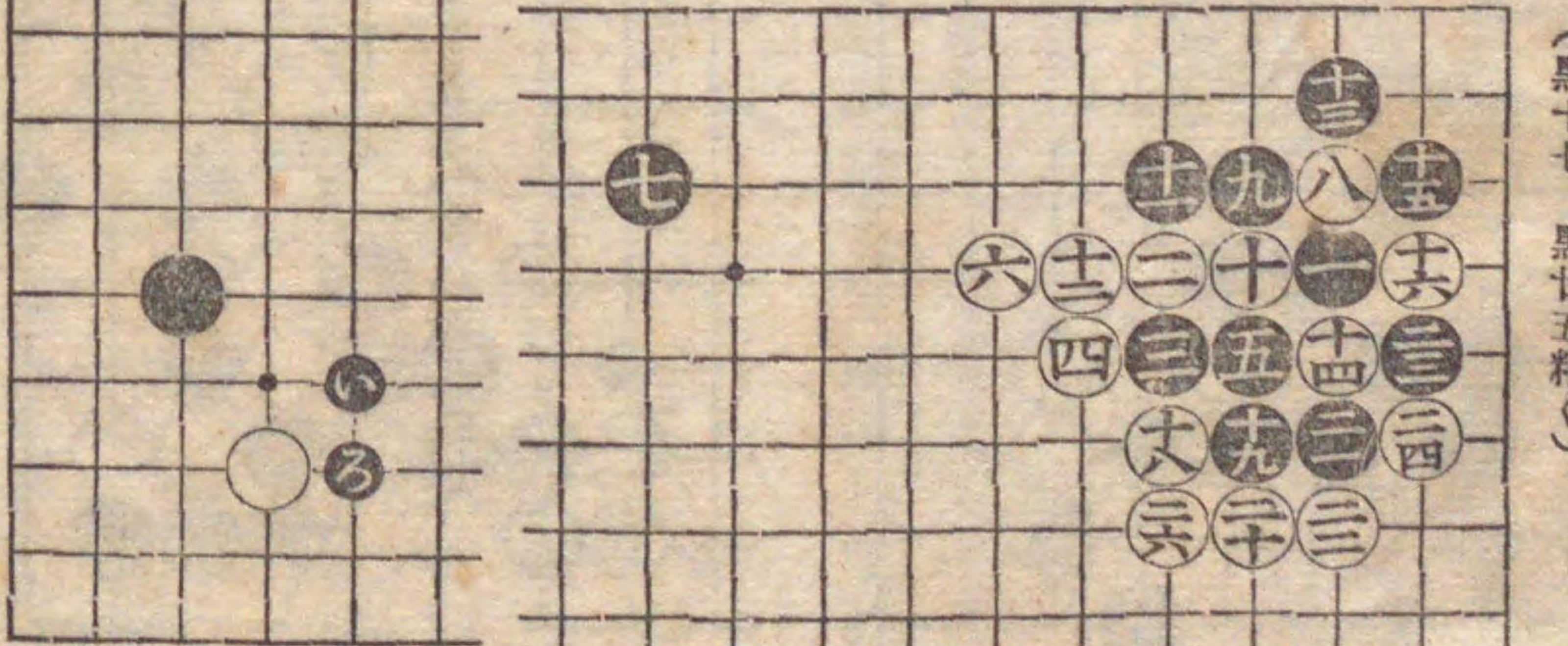
黒七の手抜の利害問題

▲三、五の二子が征として提られる患のない時は黒七の手拔が

(圖 壹 拾 第)



(圖 貳 拾 第)



(黒十七、黒廿五粘ぐ)

三五ノ二子征、  
取レ又時ノ打方  
注意ス

ハタライて居る事は言ふ迄もない。

▲三、五の二子がヨシ征に提られる時と雖も已に此く側面に好拓をして白の發展地を妨げて居る以上は黒としては決して不利ではない。

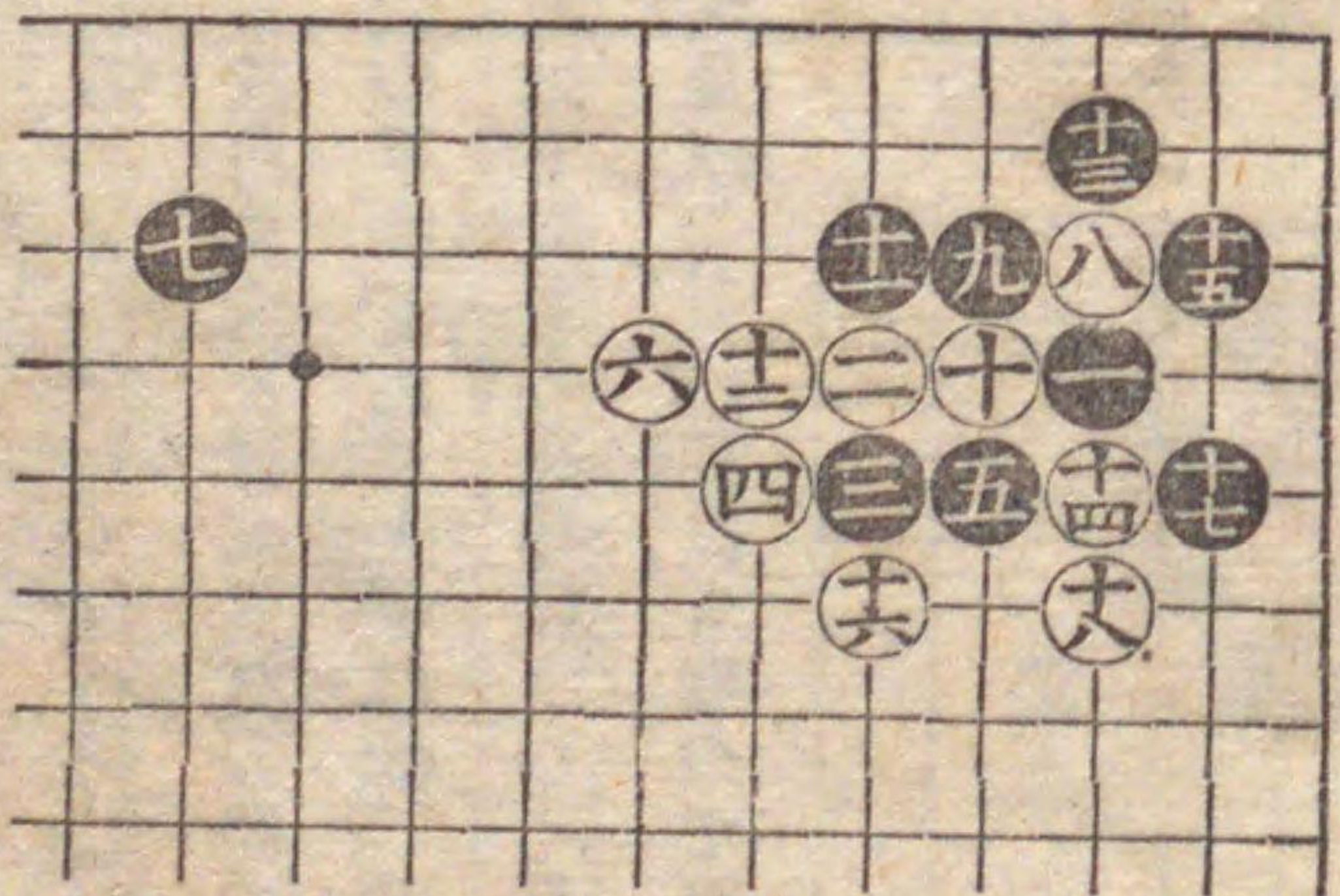
▲且つ三、五が征に提られる際と雖も、黒は對隅に向つて征待として●と一子を下し、白が○と提つた時更に●とモ一手下す事が出来る。

此の場合對隅(左下)に白の布石がなければ普通であるが若し圖の如く白の布石があつて黒から●●と二子打たれる結果は白に取りては實に慘憺たるものである。

○(第拾貳圖) 前圖白が十八と打つて二子の黒を征に提る事の出來ぬ時は本圖の如く上から迫り結局二十五と粘がして二十六と自己の缺點に備へるのである。

「註」此の手續の内注意すべきは白十六のアテである、若此の手が打つてないと白が上から十八と迫つた時(參考天圖)に示す様に黒が下から二子を捨て、打つ惧がある、乃て初に白十六、黒十七の交換を遂げておけば此かる患はない。

(天圖)



(石 定 先 互)



本圖白六ト  
行ル意如何

序石手

白六ト立ツ  
場合

黒土手、  
常用、妙手  
手筋

○(第拾參圖) 白が本圖の如く六と行びるのは◎方面に廣く拓きたい、といふ考の時此く打つて態と黒に七と截らせ八、十、十二と自然の手順を以つて、茲に長壁を先手で築かうといふ策である、(或は必しも廣く拓くとは限らず(ロ)(ハ)等に缺點ある故窄く(ニ)と三間に拓く事もある)此の六は一、三、五の三子の黒を右側方面から高壓する力がある、乃て若も黒が七の手を手抜して他へ轉じたならば忽ち白に(イ)と三々へ頂けられ非常の不利を蒙らねばならぬ、其故白に六と行びられた時の黒七の一着は命令手と言つてもよい、然らば黒に七と截らせるのが白六の手段であるとすれば、其の策に乗つて七と截つた黒は不利益かといふに決して左様でもない、七以下數着の交換によつて黒の得た隅の實利も決して少いものとは言へぬ、且つ黒からは(ロ)の斷點及び(ハ)の截提も殘つて居るのは遺利と見る可きものである。

此の白が六と立つ策戦の行はれる場合の左上隅の配石關係を言ふと

圖の如く白小目○黒目外●相對して居る場合、白◎に對する黒◎◎の尖のある場合。

白◎の二間高掛に對する黒◎◎の斜走のある場合。

等と見ておけばよい、要するに此の白六の行は輕々に打つ可からざる着手である。

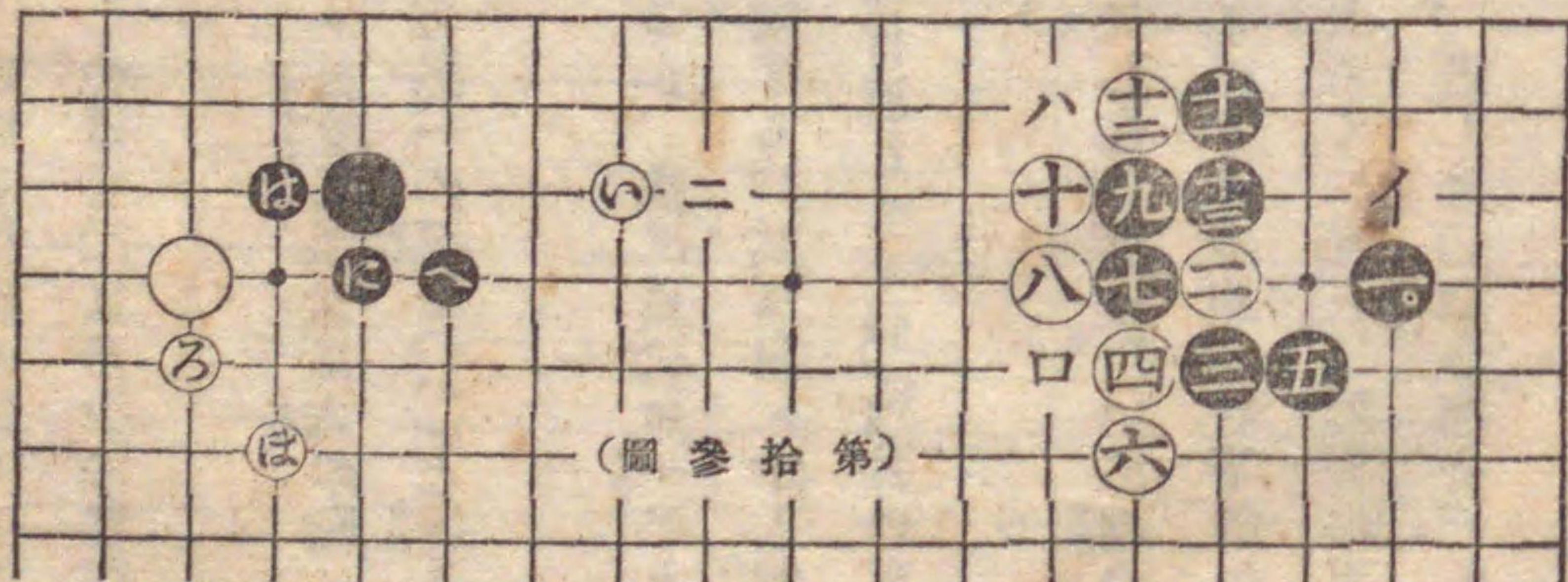
「註」 黒が十一と尖む手は少しく棋を學んだ者にあつては敢て珍らしくない手である、が然し常用の妙手(?)といつてもよい、所謂る手筋の一種なるものである、若し此の手を俗に棒下に下つ

此打方注  
意ヲ要ス

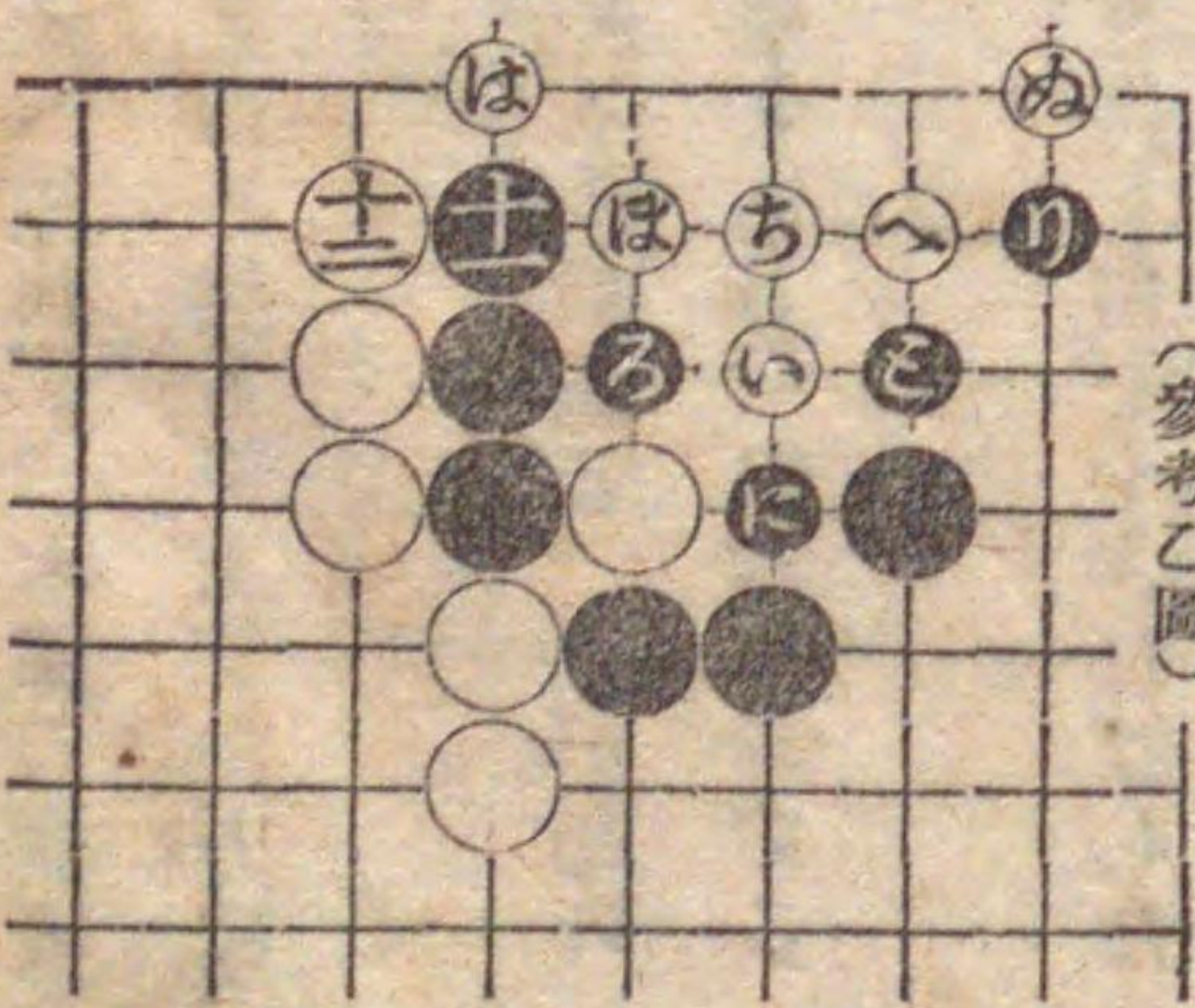
たならば次の參考乙圖に示す様な不結果を見ねばならぬ。

▲(參考乙圖) 黒十一と下り白に十二と押へられて捨て、おくと後に白から◎と尖まれ、黒◎白◎黒◎白◎とアテ、黒粘ぎ、白◎黒◎とアテ、白◎と粘ぎ黒◎の時白に◎と綽ねられて尙後手である、之を前圖の結果たる參考甲圖の隅十數目の利を確保して尙◎の斷點◎の截提の利迄遺つてをるのに比較すると、其の利不利は非常な差である。

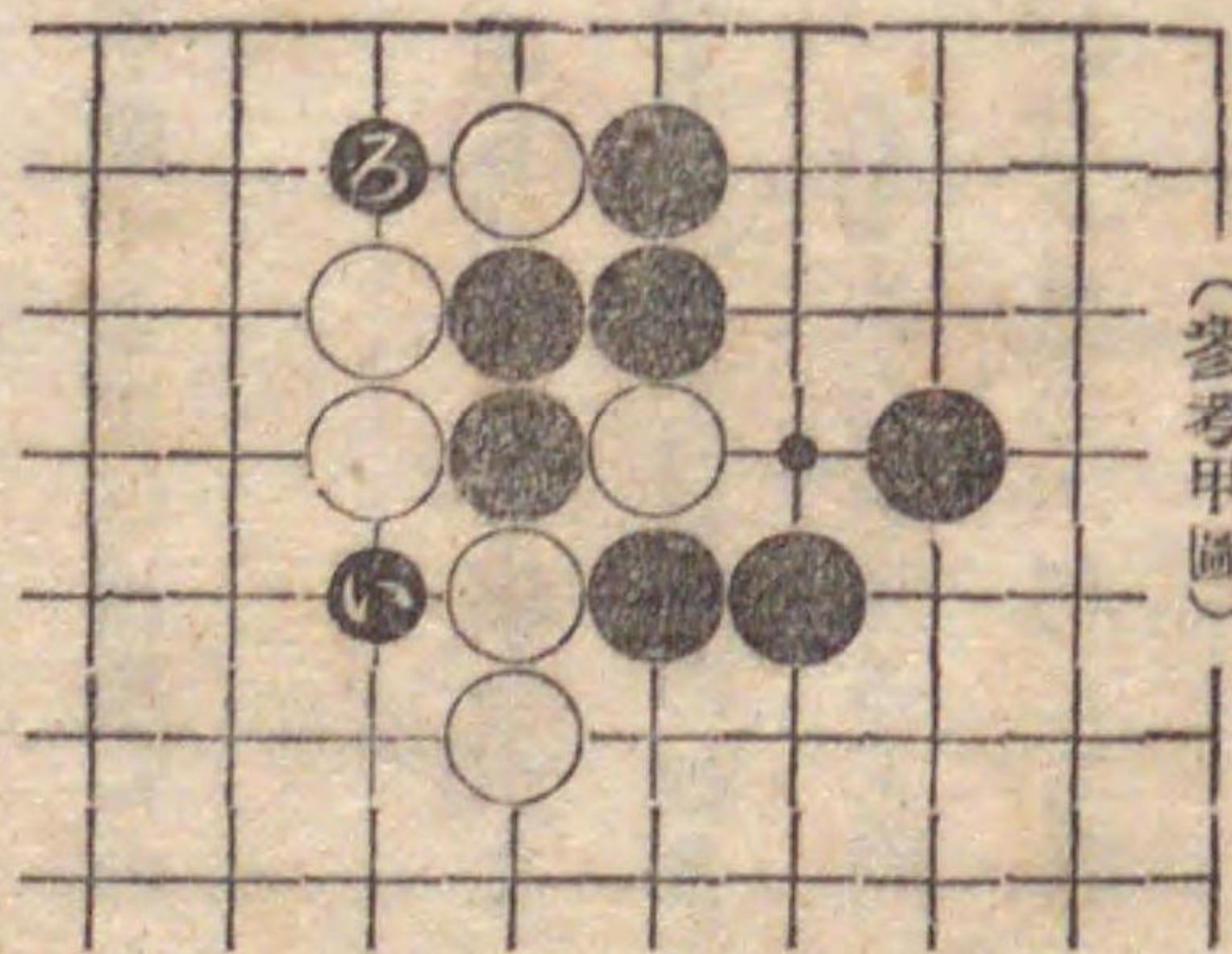
「註」 勿論之は白十二の後、黒手抜の結果であるが、扱手拔せず◎と後手を引くとしても十二と白に押へさせて白を非常に堅固にさせたのは少なからぬ不利である。



(圖參拾第)



(參考乙圖)



(參考甲圖)

先(石)定互



四三三  
預けん策  
意  
黒五手三種

黒九手問題

○(第拾四圖) 是は前圖四の手からの變化である、白四を前圖の如く三の頭へ縛ねず、本圖の様に隅三々の點へ頂けて來る事もある、是は隅へ先鞭をつけて茲に多少の實利を占め然る後上側左方に向つて地を造らうといふ策である。

白四に對し黒は本圖の如く五と引く手と或は(ロ)と衝當る手又は六の點に縛る手がある、黒が此の五と引いた時、白は圖の如く六と行る手と、下から黒一の裾を(ハ)と縛る手とある、白六に對する黒七、次の白八は殆んど約束手と言つてもよい。

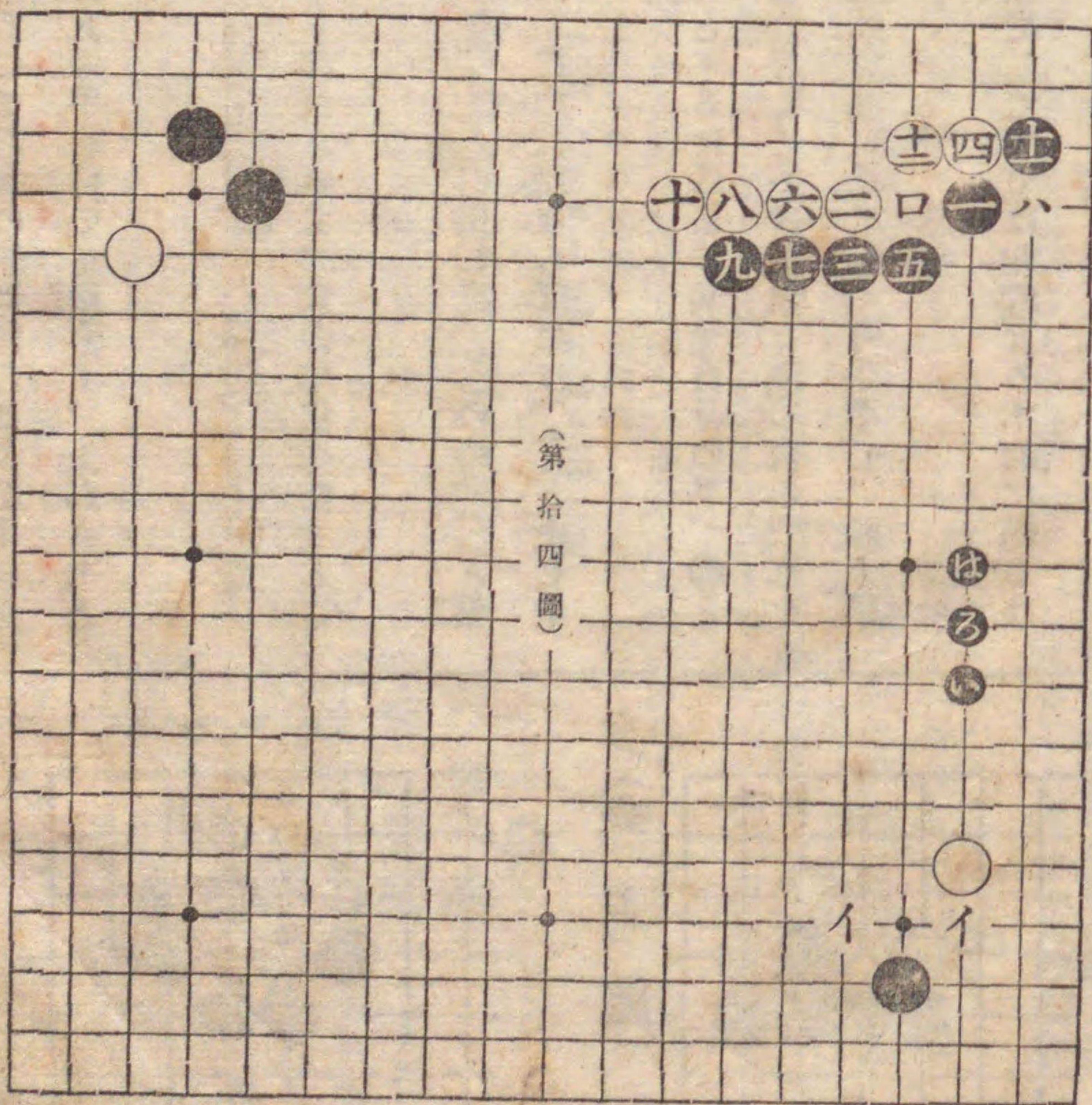
黒は七と三子押して九の手で隅十一の點に着手するか、或は更にモ一子九と押し白を十と行ばした後に(本圖の通り)隅を縛ねるかは問題である、要するに其は白に十と行びられて彼白の得る利益と、黒が九と押しして黒自身の得る利益との比較から打算して來ねば、其の可否を斷ずる事は出來ぬのである。

本圖の結果は白の策を遂行せしめた形である、が然し白の手に附いて廻つて而も利を得る場合がないでもない、其は主として背面の關係如何で、例せば本圖の如く右下隅に黒(小目)白(目外)の如き布石ある場合は、黒は十三の手を以つて(九)と二間夾若くは(八)と三間夾に出て、右下の白を攻ると同時に右上からの廣濶な拓きをする事が出来るから、若し此の如き場合であれば敢て黒の不利とも言へぬのである。

本圖黒五後

若又右下隅に黑白對峙の布石が無くて、單に黒(イ)(イ)の高締でも已に行はれて居る様な場合であれば、黒は十三の手で(九)と右側星下に打つのが上下の均衡上且つは大場の利として好適の着點である。

「註」 本定石の黒の手に就て其の可否を論ずると、五と引いた手は緩い嫌がある、即ち此の一着の緩慢のために、六と上へ行びる手と、(ハ)と下から縛ねる手と、の二つを任意に撰ぶ權利を白に與へる事になる。



(第拾四圖)

(石 定 先 五)



白六ト縛ル意  
如何

白ノ謀ヲ  
討ツレ

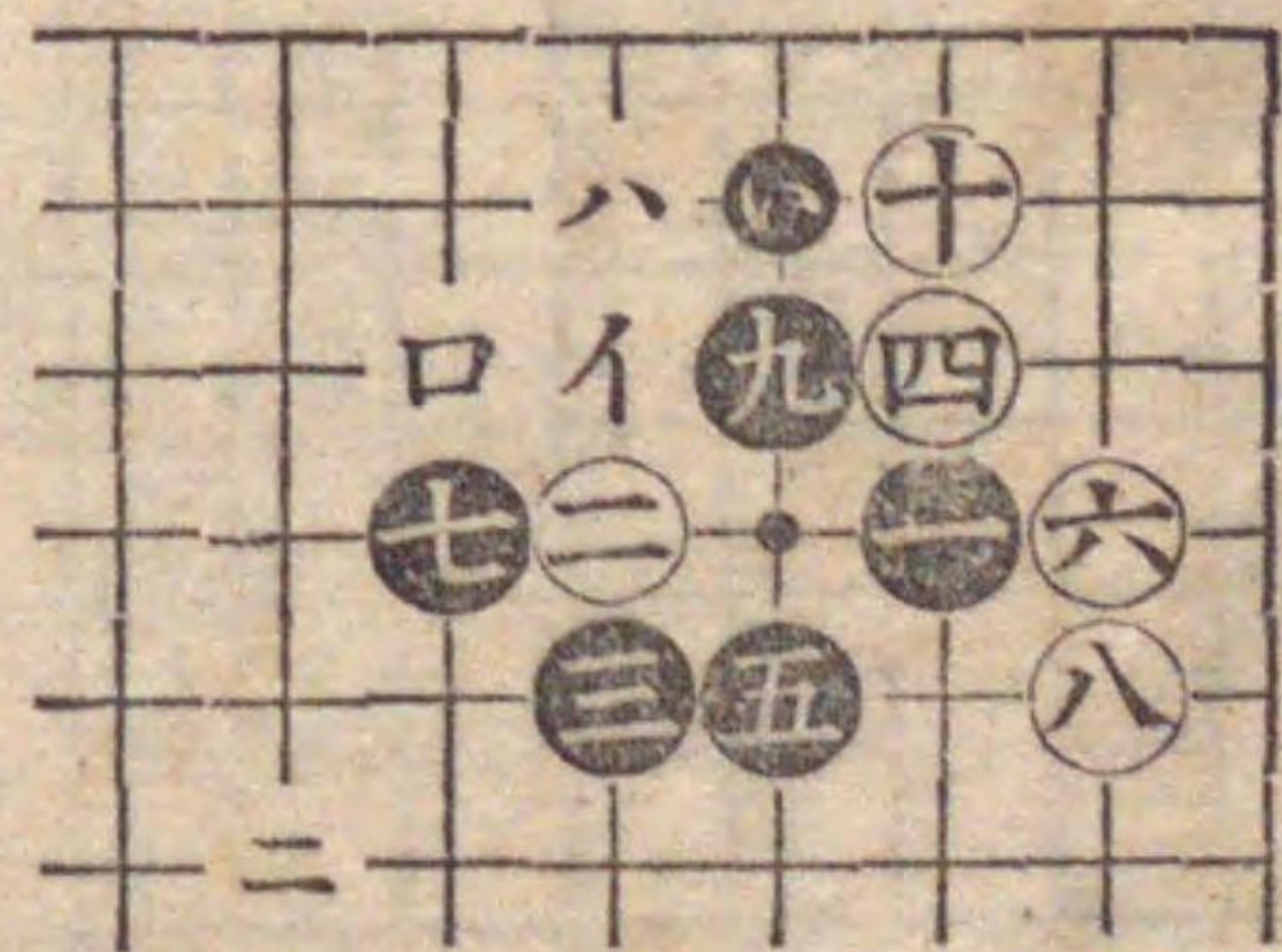
黒ニ粘

○(第拾五圖) 白が六と下から縛ねるのは、次の参考圖の如き結果に黒を導かうといふ策である、乃て黒は之の手に付いて廻らず、上から七と縛ねて白の謀を討つがよい。  
已に七と上面の鋒を推かれた上は、白は背面へ八と逸出するより途はない、其の時黒は九と押へ、白を十と行びさせて、此の處當分治まる譯である。

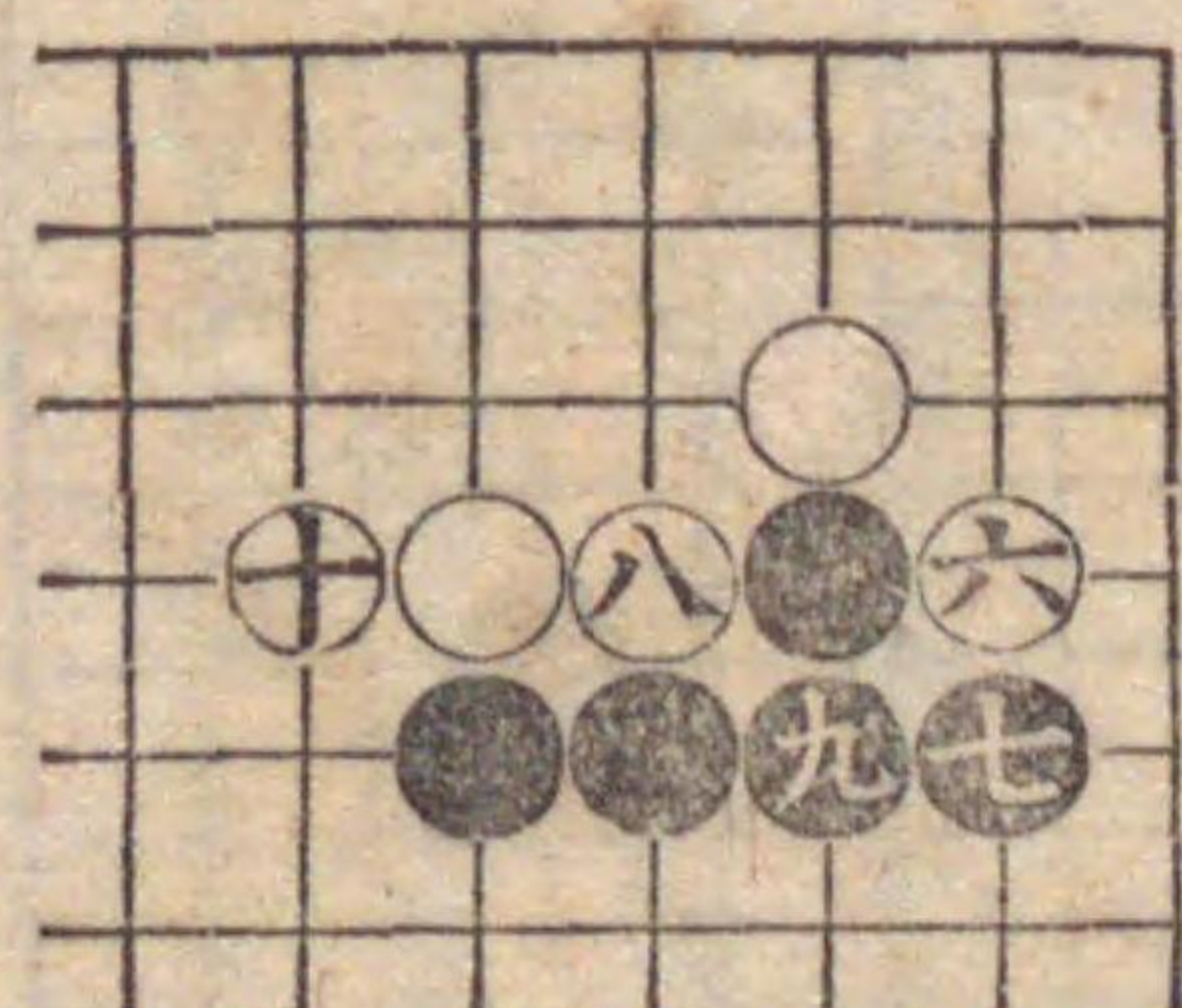
後に至つて此の形は白から二の一子を(イ)と引出し黒(ロ)の時(ハ)と盤る手もないと言へぬ、若し白に此く打たれたならば黒は(ニ)と上を粘いておかねばならぬ。  
乃て黒が此の(イ)の引出しを防がうとするには是非共黒自身の手で(カ)と押しておくのが最良の手である、(キ)と押してあげば他日隅の白の眼形を奪ふ手にならぬとも限らぬ。但し是は時機を見て行く可き手で、餘り早く打つ手ではない。

▲(参考圖) 此く一々白の命令に服従して居ては非常なる不利に陥るは明白なる道理である。

(圖五拾第)



(參考圖)



此呼吸ヲ吞  
込ム

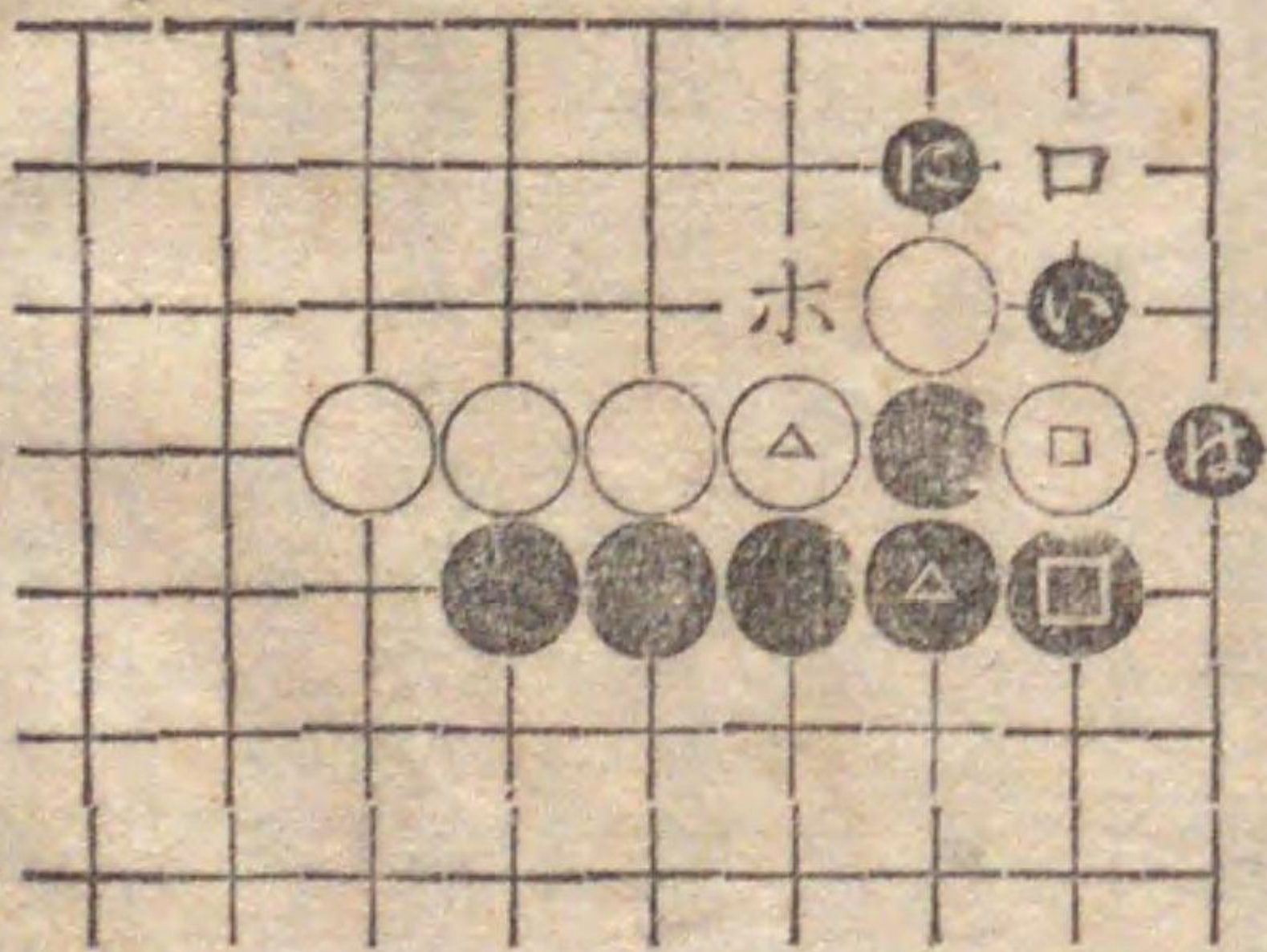
此問答ヲ  
能ク味フ

(参考圖の續き) 是は極初心者の爲めに婆心一言を添ふるの爲である、前掲第十五圖で示した通り白が六と下から縛ねて来た時は必ず敵の鋒を避けて反對に上の方から白二の頭を七と縛ねて其の虚を衝く呼吸を吞込まねばならぬ。某初心者が質問を寄せて

『高等研究互先定石第三百三十八頁の▲(参考圖)に於て、此く一々白の命令に服従して居ては非常なる不利に陥る云々の事なるも、吾々の見る所を以てすれば彼の参考圖の如く打ちし結果(下記参考圖)黒は非常なる堅固なる長壁を築きしに反し隅の白はキズばかりにして、若し黒より(カ)と截られれば白(ロ)とアテるも黒に(キ)と提られたる後更に一着後手を引きて(カ)の點に粘ざる可らず、若し此の一手を閉却すれば更に白より(キ)と截り提られ土崩互解の不利を來す可く、此の處白利益といふ説受とり難し如何』

と申越された、成程お説一應は尤の様である然しながら此ういふ處は大局の計算といふ事と自他の強弱といふ事とを考察した上でなくては得失可否は論じられぬ。今此の『参考圖』に就て言ふと側面の黒が堅固になつて居るだけに(黒から言ふと)●と截り●と提り更に●と截る手が極めて愚なのである、且つ此の白の形(上側方面)が始末がついて居る黒が●と截り更に●と截るといふ事が直ちに白の死命を制する事になるのならば其は別問題であるが、黒白双方共現下の形に就て見ると何れも形が熟して居ない、即ち黒が●と截り(□印)白一子を●と提り更に進んで●と截り白(ロ)の一子を提るといふ事は自他勢力に消長を來す程の手ではなく畢竟一隅一局部の小利の争たるに過ぎぬ、且つ黒から●と截り●と提つて見ても其の利は極めて少いが、白に●と粘がれると相當の利を占められるといふ處である、又溯つて言ふと白が初(□印)へ縛ねたのは黒に(ロ印)へ抑へさせて(△印)へアテつけ△印に粘がさうといふ意であるから『第十五圖』に示す通り白の謀のウラをカイて上面を包み下側と振り替つてこそ互角の勢を占める事が出来る、本参考圖の様は一々白の命令に服して其の手に就て廻つて居ては利が得られ様筈がない。

(圖續繼考參)



(石定先互)



最新手

四ト頂ケル意

五、セヨキ手

必ス粘ク手

△注意！ 以下第十六圖第四の手の説明は前「第九圖」及前「第十四圖」の四の手の説明の補足の意を以つて兩圖と參酌して研究されたし。  
○(第十六圖) 黒に外から三と頂けられた時白の打方としては前第九圖の如く四と上から三の頭を縛めるか、或は第十四圖の如く隅三々の點へ四と頂けるかが普通である、が或は八の點に行ひておく手もある。

△註 黒が三と頂けた時此の八の點に白の行びるのは從來あまり見受けぬ手であつて最近本因坊師と鈴木四段との對局に現はれて居る、恐らく師が新工夫の手であらう、此の行びる手は、黒が五の點に衝き來らば十六の點に曲らう、又黒五の點に來らず十六の點に押して來るか或は(ロ)に引かば四の點に頂けやうといふ意を含んだ手である。

隅へ四と頂ける意は、前(第十一圖)の如く黒に七の手で背面に廻はられるのを嫌うた手段と見る事が出来る。

白四の三々頂に對し黒が前(第十四圖)の様に(ロ)の點に引くのは稍緩慢の嫌がある。

乃て本圖の通り五と衝き當り七と截る手段が場合に適應しさへすれば弛みが無くてよい手である。

黒十一は場合によつて十二の點を截つて白を絞る手段もある(下記第十七圖參看)

白十二は(イ)の點に掛粘ぐ手がある(下記第十八圖)以下參照

黒十三は必ず此く堅固に粘ぐ可く之を(イ)と掛粘ぐと後に至つて損失を招く(下記參考乙圖參看)

白十四の手は征の關係が良ければ直に(イ)と曲る手がある。(參考丙圖參看)

白十六の手を以つて(ニ)と抑へる手は下記(參考丁圖)を參看するとよい。

白十六の曲りは直に(ニ)から押へて攻めやうといふ手である。黒十七の頂けは隅へ動いて白を捕獲

十七ノ手ハ働ケル

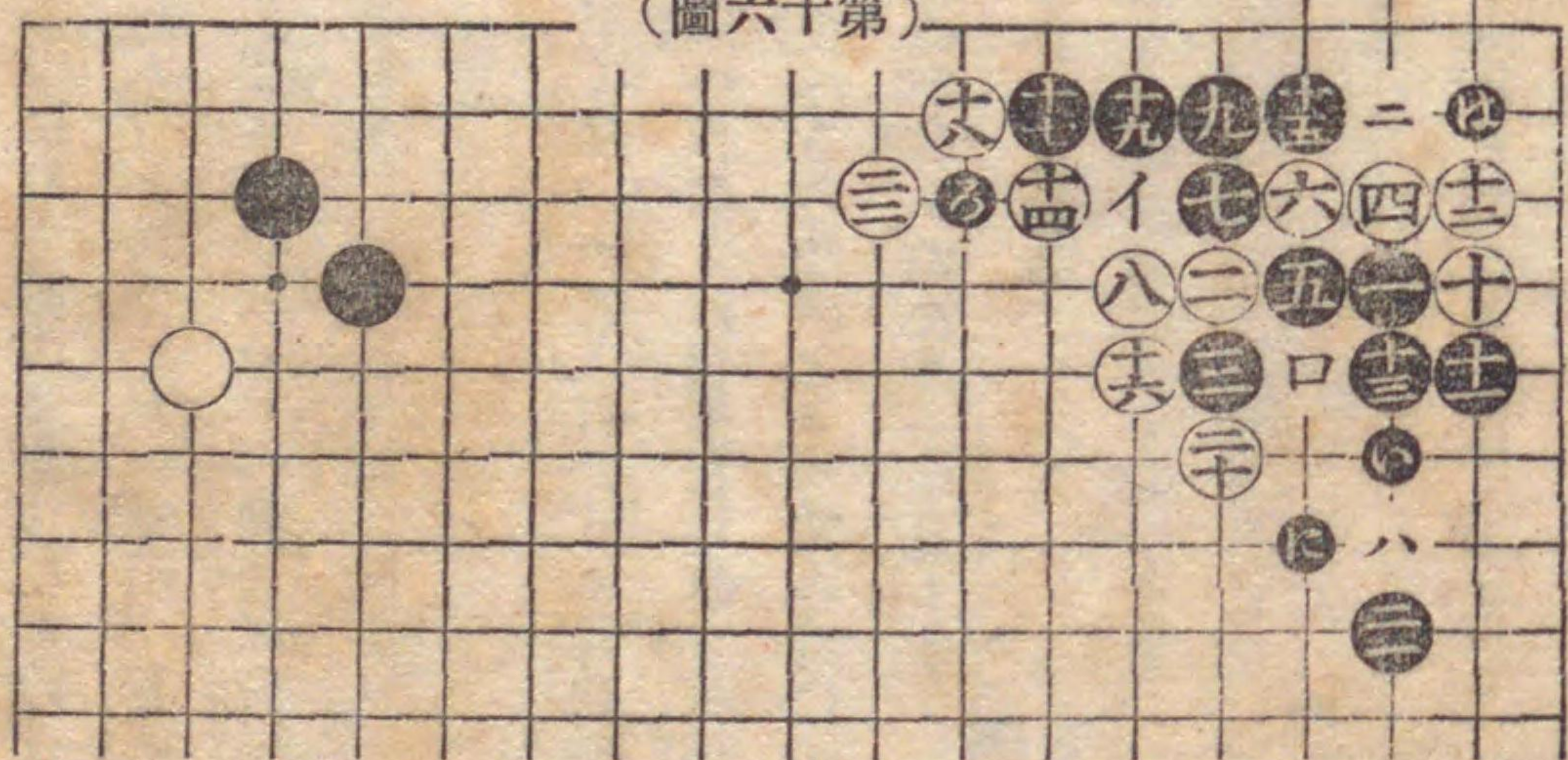
黒王故ノ策ヲ拒ム

手筋

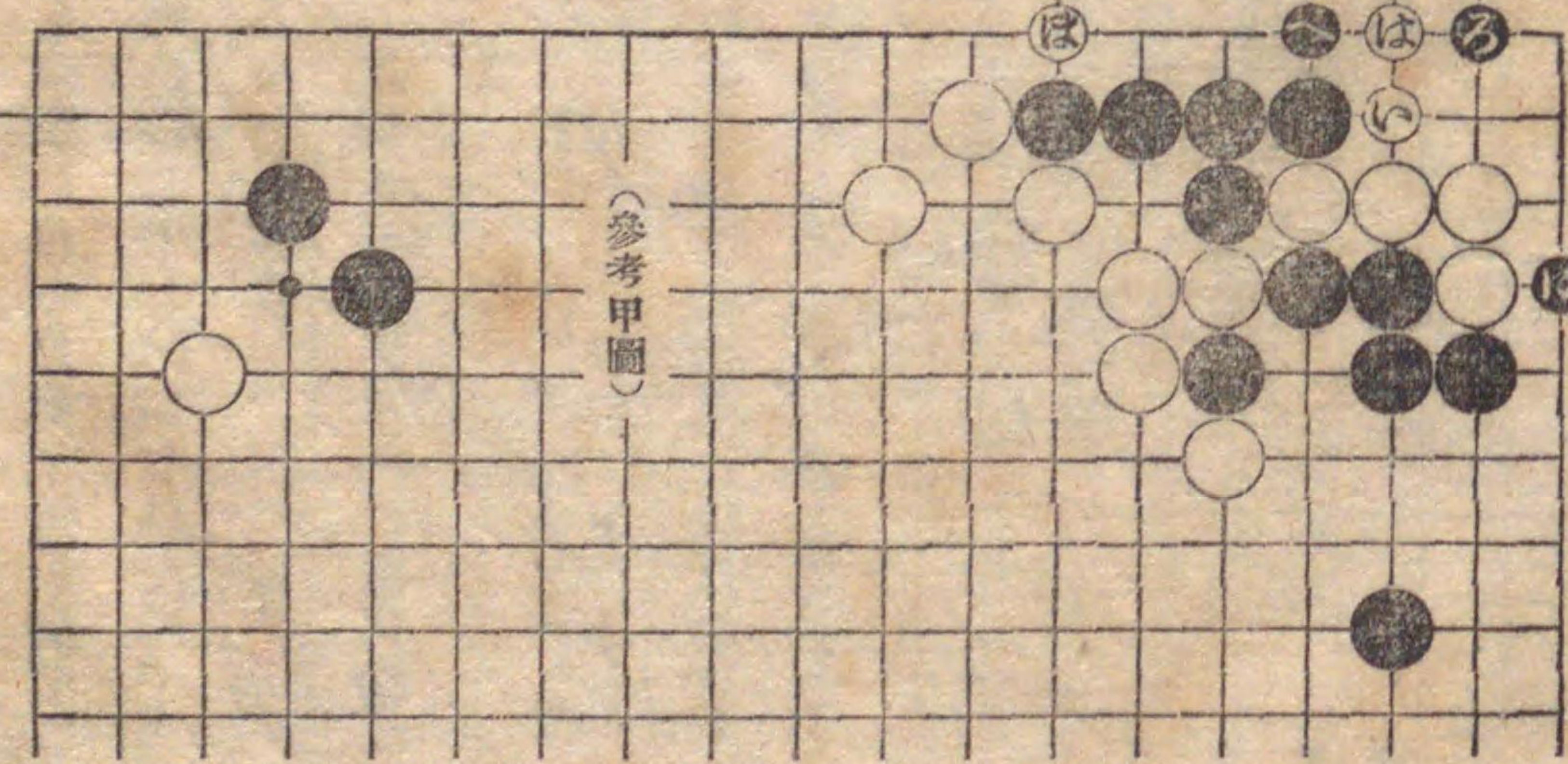
する手を外部に働かしたのである、即ち白に十八と押へさせ、十九と引いて(イ)に斷點を造り白をして二十二と掛粘を餘義なくせしめたのが此の十七の一手のハタラキである。  
白二十は(ハ)の邊から五子の黒を包まうといふ手である。  
黒二十一は白二十の手に含む策を拒いだので、或は此の手で、一路高く(イ)と打つてもよい、が其は主として右下方面の布石關係によるのである。

△(參考甲圖) 第十六圖の結果に於いて、白が若しも(イ)と來れば、黒は(イ)と置くのが着理である、次で白(ロ)黒(イ)白(ロ)黒(イ)となつて、六子の白は擒とならねばならぬ。

(圖六十第)



(參考甲圖)



~~~~~(石 定 先 互)~~~~~


十三、掛粘
ヨリ失敗
宜証

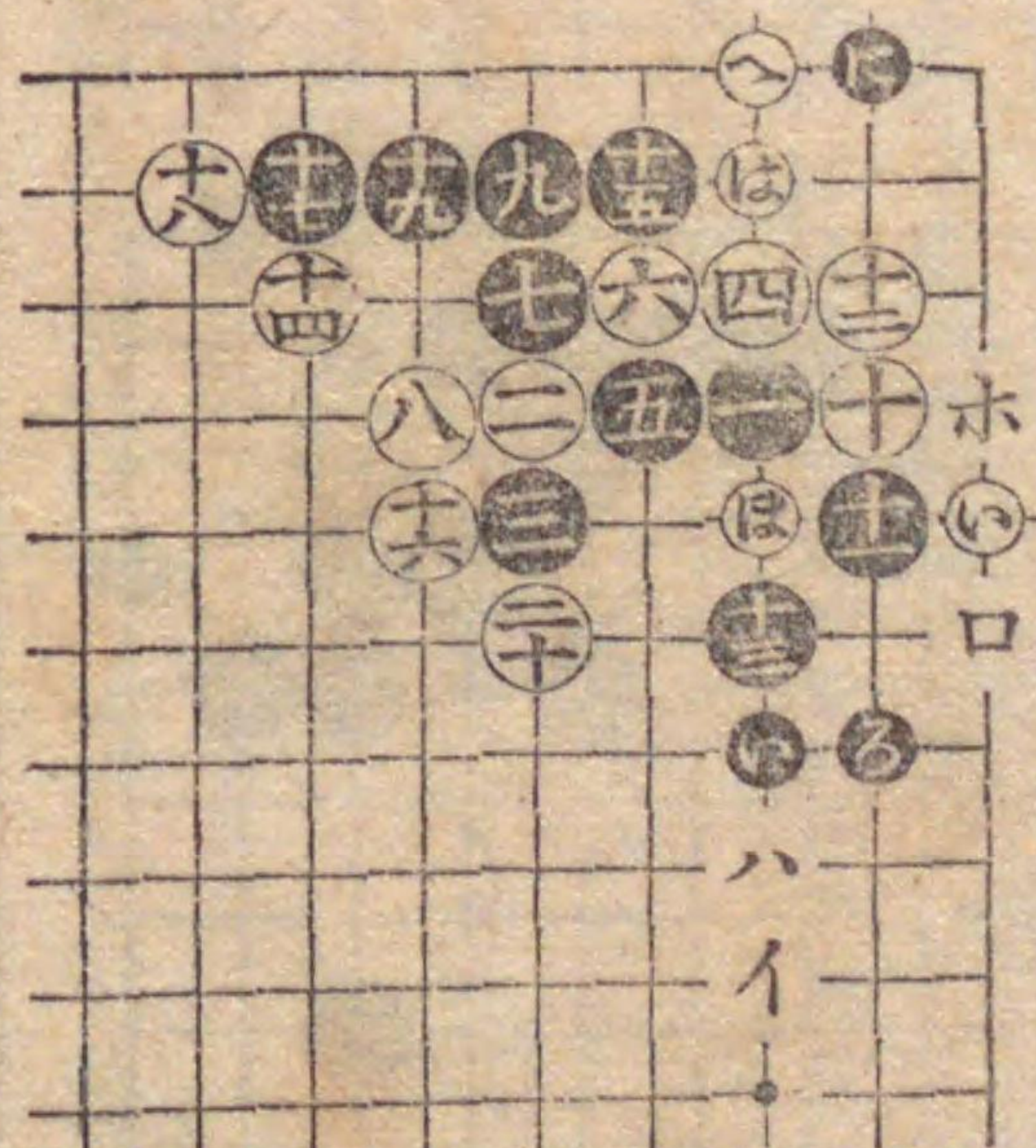
十四、手テ曲ルニ
付注意

△(参考乙圖) 前第十六圖の第十三の手に於て黒は堅固に粘がねばならぬ掛粘は一見好姿勢の様で却つて後に至つて不利を招くの惧がある、と言つておいたが、其は本圖白に二十と續ねられた時十三の黒が堅固にさへ粘いてあつたならば本圖の(ハ)の點に二間拓する事が出来るが、圖の如く掛粘にしてある結果は、二十一の手で(イ)の二間拓は勿論(ハ)の一の間飛さへも出来ぬ、單に(イ)と行びておくより外に途はない。

何故なれば若し二十一の手を(イ)若くは(ハ)と打たば次に白から(イ)と續ねられた時(ロ)と押へる譯に行かぬ、白(イ)の時(ロ)と押へたならば忽ち白に(イ)と打込まれ全部捕獲の大厄に逢はねばならぬ、其故白(イ)に對して(イ)と一手控へるの外はない、其の時白に(イ)と押へられて黒が(イ)と置いても白に(イ)と下りられた後(ホ)の續ねが利かぬため一手足らずの黒負けといふ反對の結果を呈するからである。

△(註) 此の黒十三の手の如き稍もすれば不用意に掛粘易い處であるが局部接戦の際は一手と雖も勝敗の大事に關するから慎重の考慮を拂はねばならぬ。

△(参考丙圖) 白が十四の手で此く密接して曲るのは二、八、十四、の三子が征に提られる患のない時に限るので、只漠然と



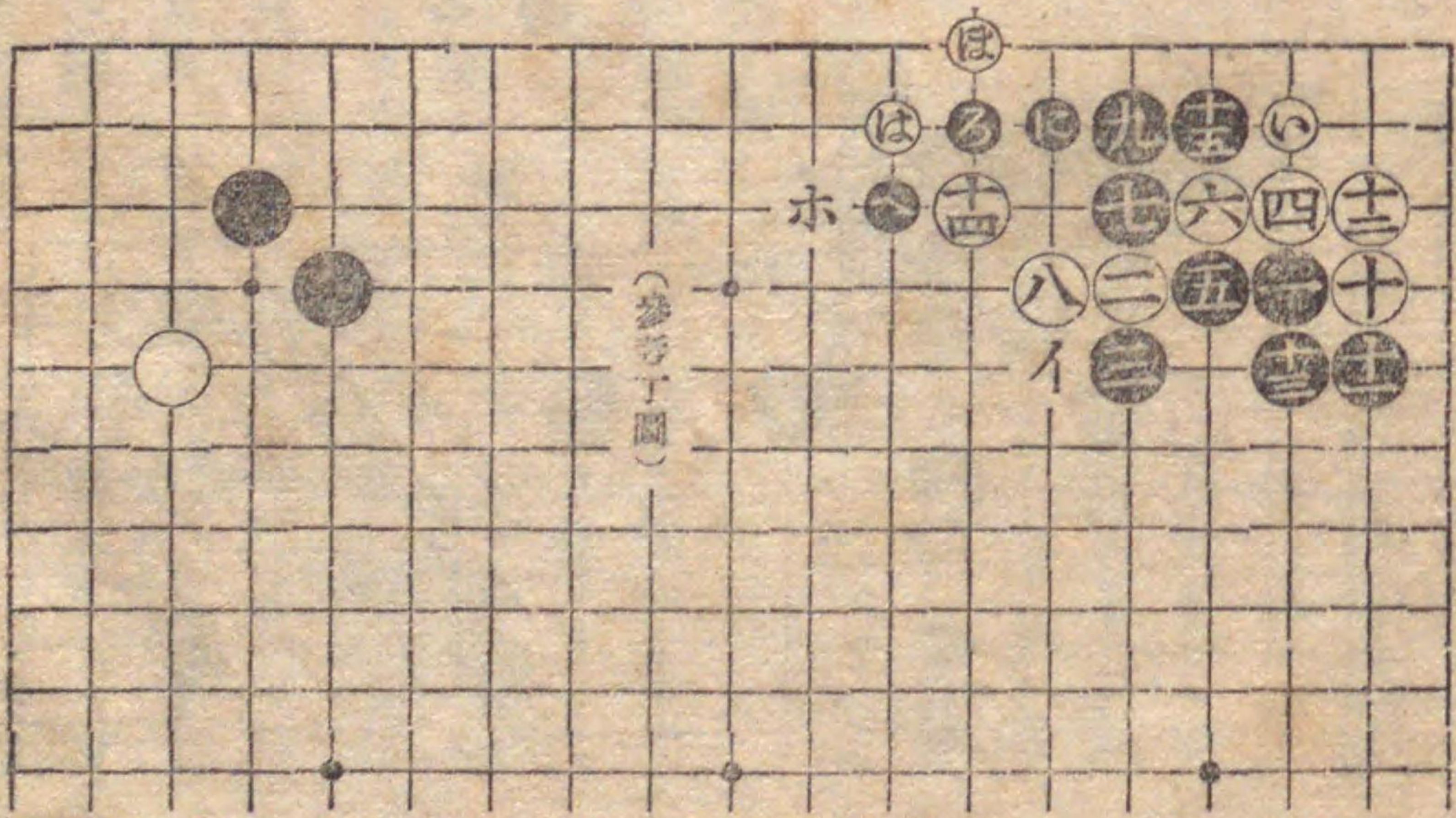
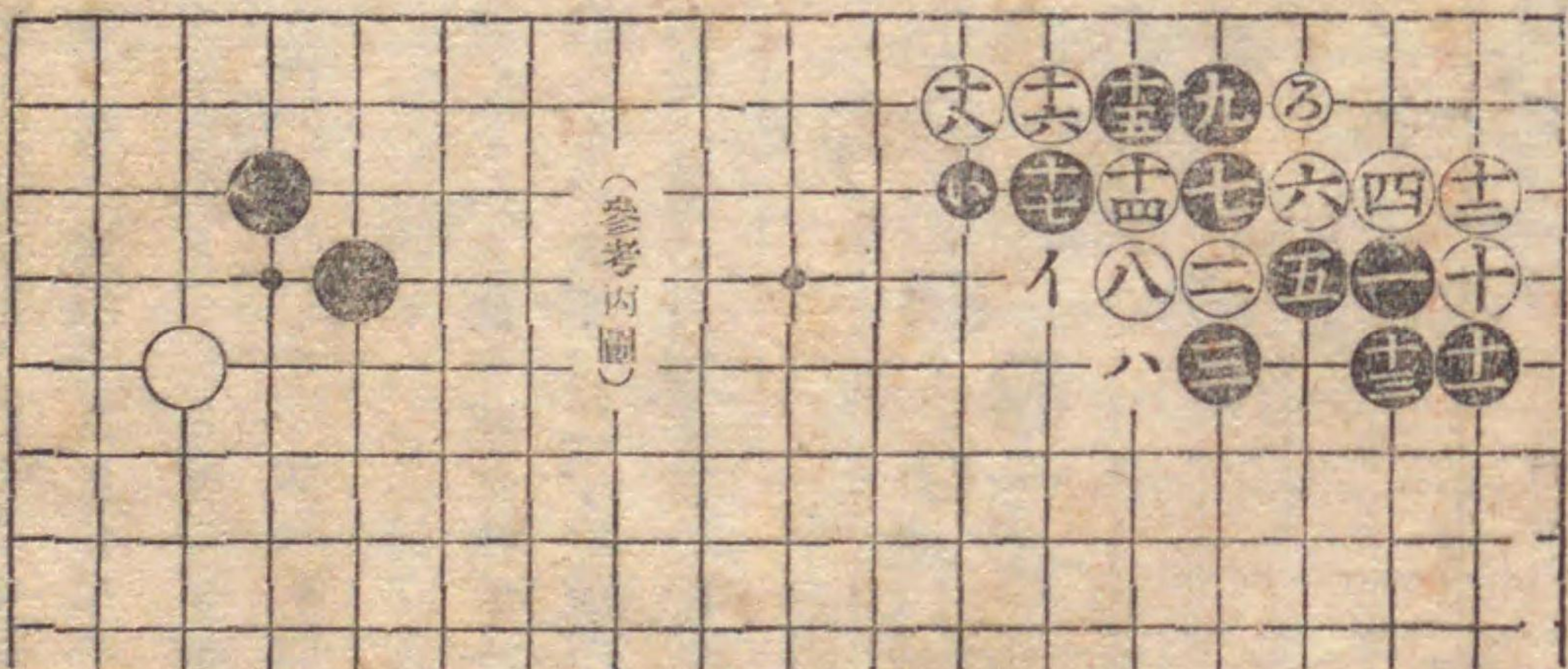
(圖乙考參)

十七、ト截リテ
征ノトリ方

十六、手ニテ
イト打タス
イト抑スルハ
不可

征の關係を考へずに十四と曲れば黒十五、白十六の時十七と截られて其迄である。尙其の征の當りに就ても精確に見定めぬと、黒からは直に(イ)と押し征とする時或は(イ)と一路押して(イ)の時の(ハ)から押し征とする事も出来る。

△(参考丁圖) 白が十六の手で(イ)と曲る可きを曲らずに十五の頭を(イ)と抑へると黒に(イ)と頂けられ白(イ)の時白は(ホ)と掛粘げば一手足らず、(イ)と(イ)と續ねれば忽ち黒に(イ)と截られて其迄である即ち十六の手で(イ)と曲らずに(イ)と抑へる事の不可能なるは明瞭である。



~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



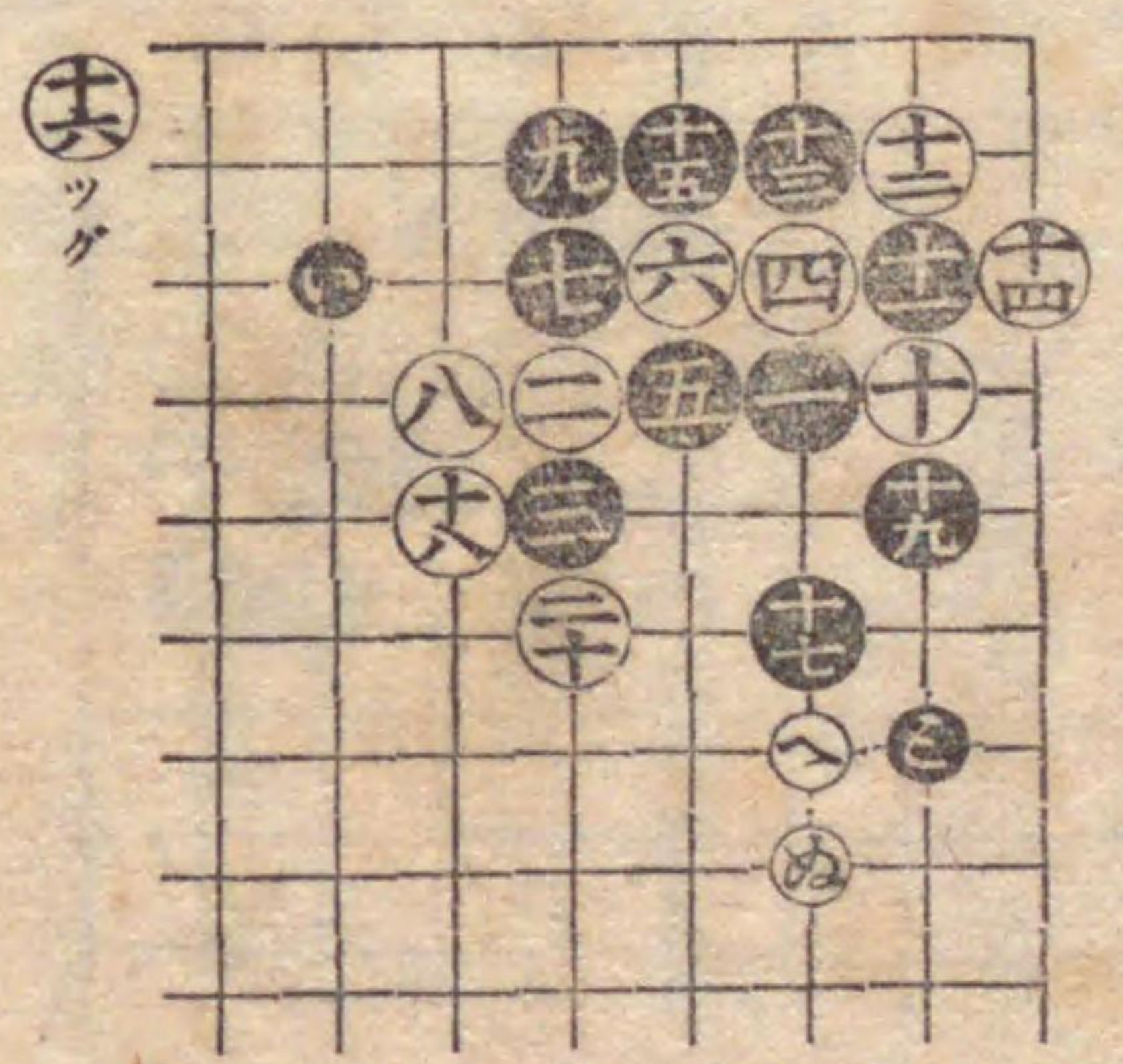
征關係ニテ  
 古ノ争ニテイ  
 ト曲ラレ、根  
 アル時ノ打テ  
 必然ハ手

○(第拾七圖) 征の關係によりて前第十六圖の第十四の手で前掲參考圖の如く密接して曲られる惧のある時、黒は其の凌ぎとして本圖の通り十一と截り十三、十五と絞つて打つ事もある、此く絞つた結果は黒十七の間飛白十八の行ひ及び黒十九白二十黒二十一等の交換は何れも必然の手である。

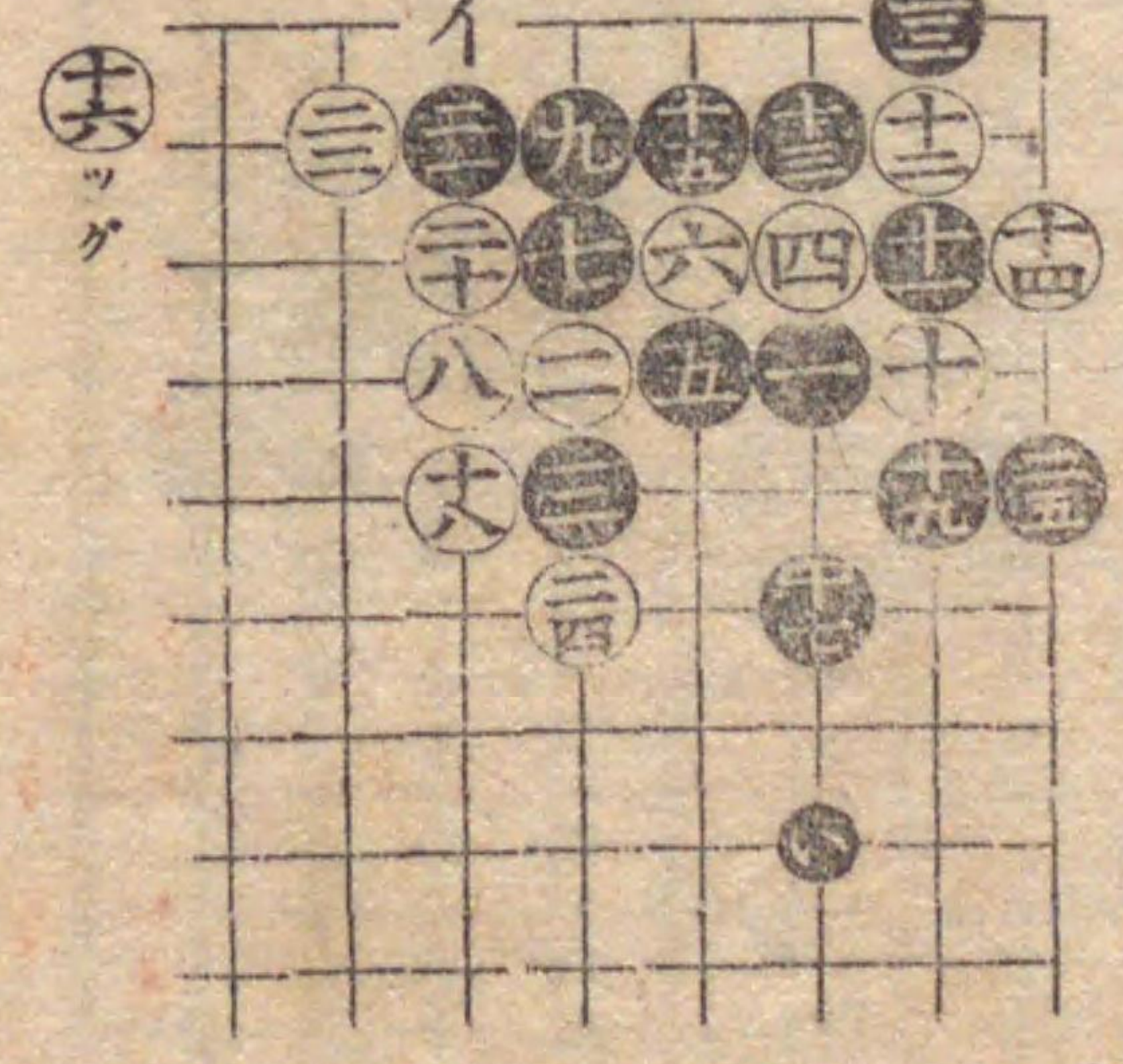
△(參考天圖) 白は十八の手で圖の如く上から曲り隅を捨て、打つ事がないとも言へぬ、其時黒は十九と抑へる、次で白二十の後黒が●と上側へ飛べば白は○●黒●白○と打つか或は單に白○と打つかである。

此の結果は黒が隅の白六子を捕る事にはなるが相當に手数がかゝる譯である。

△(參考地圖) 或は白は二十、二十二と上側方面を塗る手順に出るかも知れぬ、本圖の手順中で黒二十五の手を●と一問すれば白に(イ)と縛ねられて切にされるの惧がある。



(圖地考參)



(圖七十第)

結論

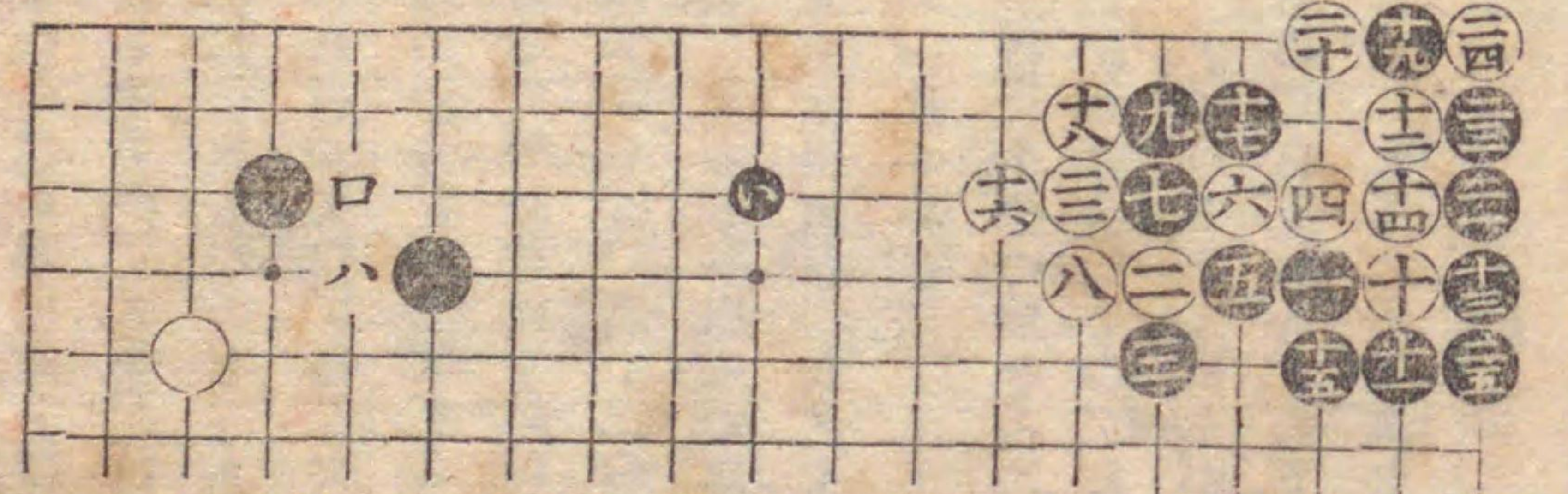
十七圖ノ截絞  
 ハ黒トシテ奴テ  
 打ソキキテラス  
 十八圖ノ掛粘  
 ハ趣向ノ手

五ノ手ニテハロ  
 引キ置クハ  
 紛争ヲ避ケル  
 要義  
 ロノ手ニカ、  
 ハノ点ニ縛ル  
 手モアリ

□結論 要するに第十七圖で示す、黒が十一の手で截り絞りを打つ手は局面を複雑ならしめる惧があるから、黒としては好んで打つ可き手ではない、即ち第十六圖第十四の手で酷しく(イ)に曲られるの惧(即征關係)ある時は最初五と種さ當る手の時に一考して(ロ)と引いておくが紛争を避くる要義である。

但し五の手を(ロ)と引くは緩慢であるから、好もしくなく、又截絞りは局面の紛争を招くの惧がある故、孰れも面白くないといふ時には、五の手を以つて二の頭(ハの點)へ縛ねる手もある、是は(第貳拾參圖)以下に詳説しやう。

(圖八第十)



○(第拾八圖) 白が此く十二の手で掛粘くのは趣向のある手である、即ち圖の如き結果に導いて劫争を開始しやうといふ策なのである然し黒が進んで劫争をするか或は其を避けるかは、一に黒の欲する儘で若し劫争を嫌ふならば黒十七の手を以つて次に示す第十九圖の如く應じるがよい。

此の劫争の結果は頗る重大なる關係を生ずる譯である、若し此の劫に黒が勝つとすれば次で●の邊から迫られて五子の白は苦境に立たねばならぬ。若又白が此の劫に勝たば黒は(イ)の邊に備へて此の方面を守る必要を生じる。白は左上に於て(ロ)と打ち(ハ)と突き貫かうといふ様な劫立てがあるかも知れぬ。

白十二ノ  
 掛粘ハ  
 趣向アリ



七九二子ノ  
凌方味ノ

黒三十九手  
如何

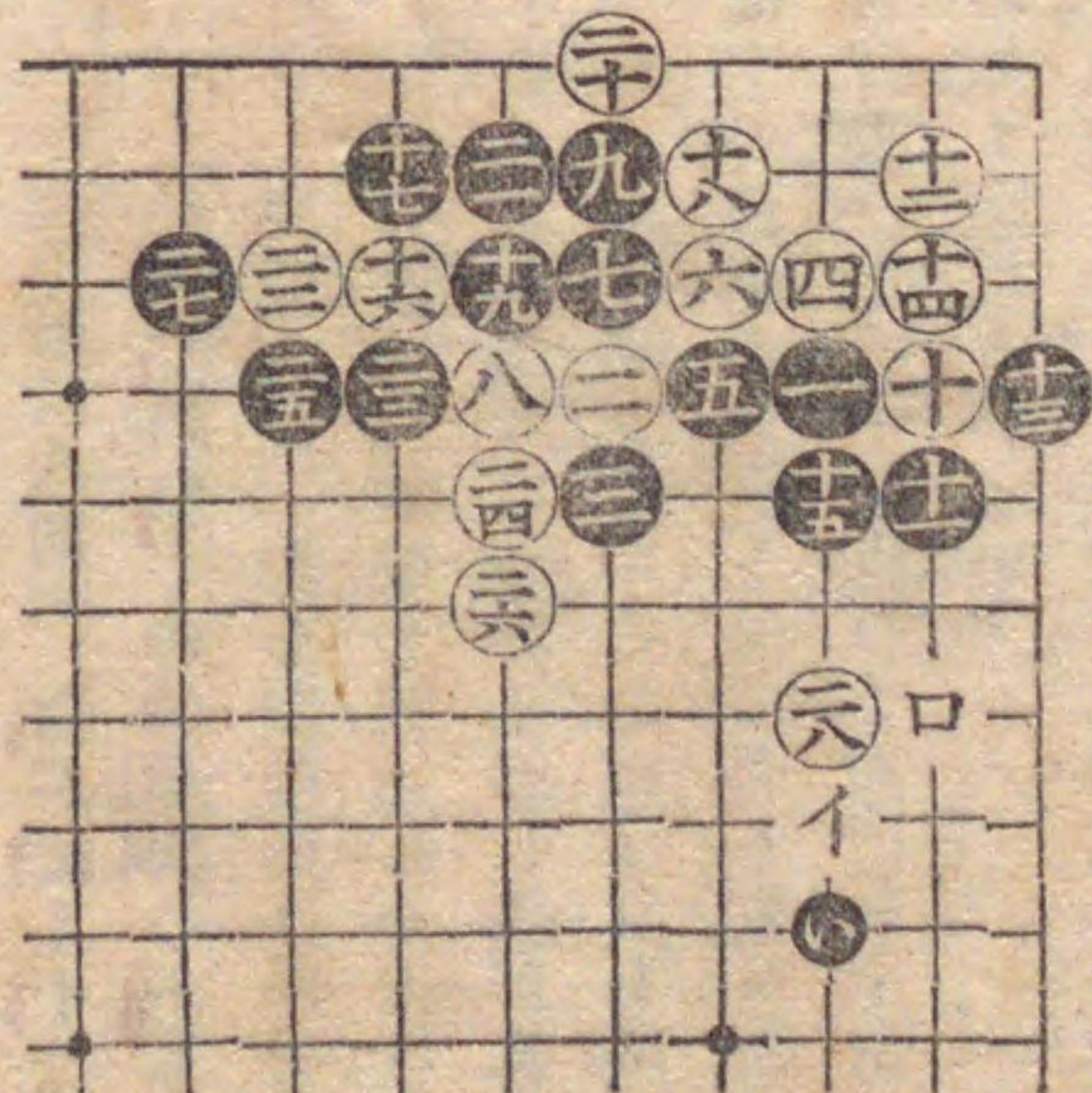
○イニ倅  
ルハ角ノ活ヲ  
保留スル所  
イニ下リ先  
手ナリ

二十五ト三子  
行ヒルガ安  
全

大子ノ黒ニ  
何レヨリ迫ル  
キヤ

○(第拾九圖) 前圖で述べた通り白十二の手は劫を争はるか活きやうか、といふ手である乃て黒が隅の劫を避けやうと思へば隅へ曲る手を轉じて側面に向つて本圖の通り白十六の腹へ十七と頂けるの外はない、其時白は十八と隅に眼形を造つて七、九の黒に密接してよく一手である、之に應ずる黒の打ち方も亦十九とダメヅマリに打つて白に斷點を造つて自ら凌がうより致し方はない。白二十の手は考ふ可き手で單に隅の活きといふ事から見れば打たぬ方がよいのである、本圖の如く十六、廿二、の二子を捨て、振替る考の時は此く倅ねて二十一と粘を利かしただけ打ち徳である。白二十二は若し征に提られるを嫌ふならば、二十三の點に粘がねばならぬ、随つて之の反面から言ふと黒が二十三と截つても白を征に提る事の出来ぬ場合であれば、黒は當初十七と外に頂ける事は出来ぬ、飽迄も前圖の如く隅へ向つて劫争を開始するの一途である。

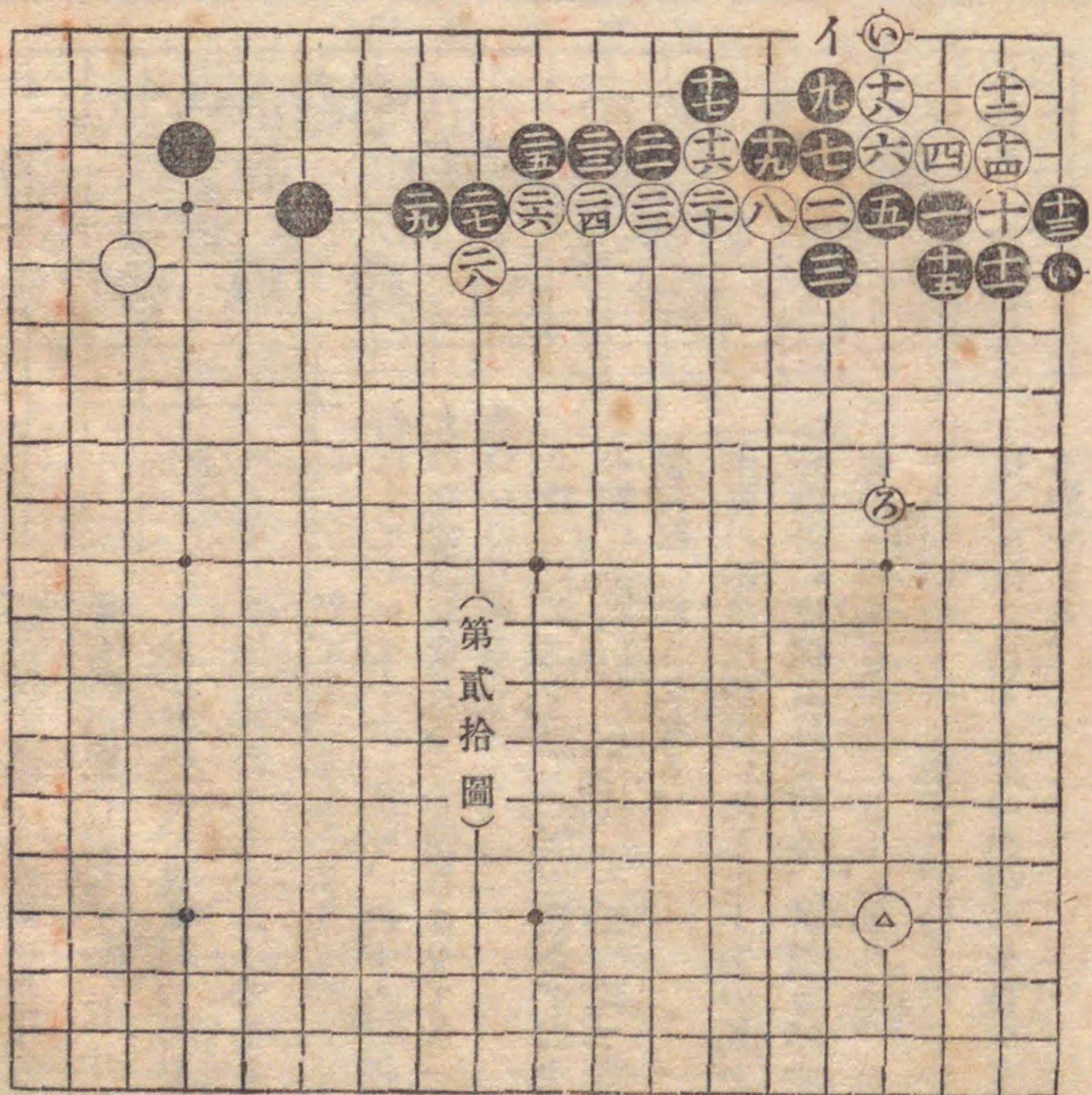
本圖の結果は黒二十七と打つて上側に十分の利を占め白は二十八と旋廻して六子の黒を包圍する勢を示したのである、次て黒からの運動は(イ)若くは(ロ)と頂ける手もあるが既に上九側に於て少からぬ利益を得て居るのであるから、右下方の形勢次第では軽く(イ)の邊から白に利かして六子の黒を捨て、打つ趣向も面白。



(第拾九圖)

○(第貳拾圖) 白が征を嫌ふ時は、前圖の如く倅ねる手で以て本圖の通り直ちに二十と堅く粘ぐのである、此の(イ)の點に倅ねざるは隅の活を保留する所以で、圖の如くなつた結果は白は何時でも(ロ)と下つて先手に隅を活きる力があるからである、左上布石の關係によりては、黒は二十五の手で二十六の點に倅出し得られぬ事は無いが、先づ此く三子行びておく方が安全である。

本圖の結果隅の白が堅固であるため黒より(イ)の粘ぎが利かぬ、尙白からは(ロ)の邊から六子の黒に迫る手順になる、若し右下隅に△印の布石もある様な場合であれば白(イ)の詰が申ぶんない好姿勢を呈する事になる。

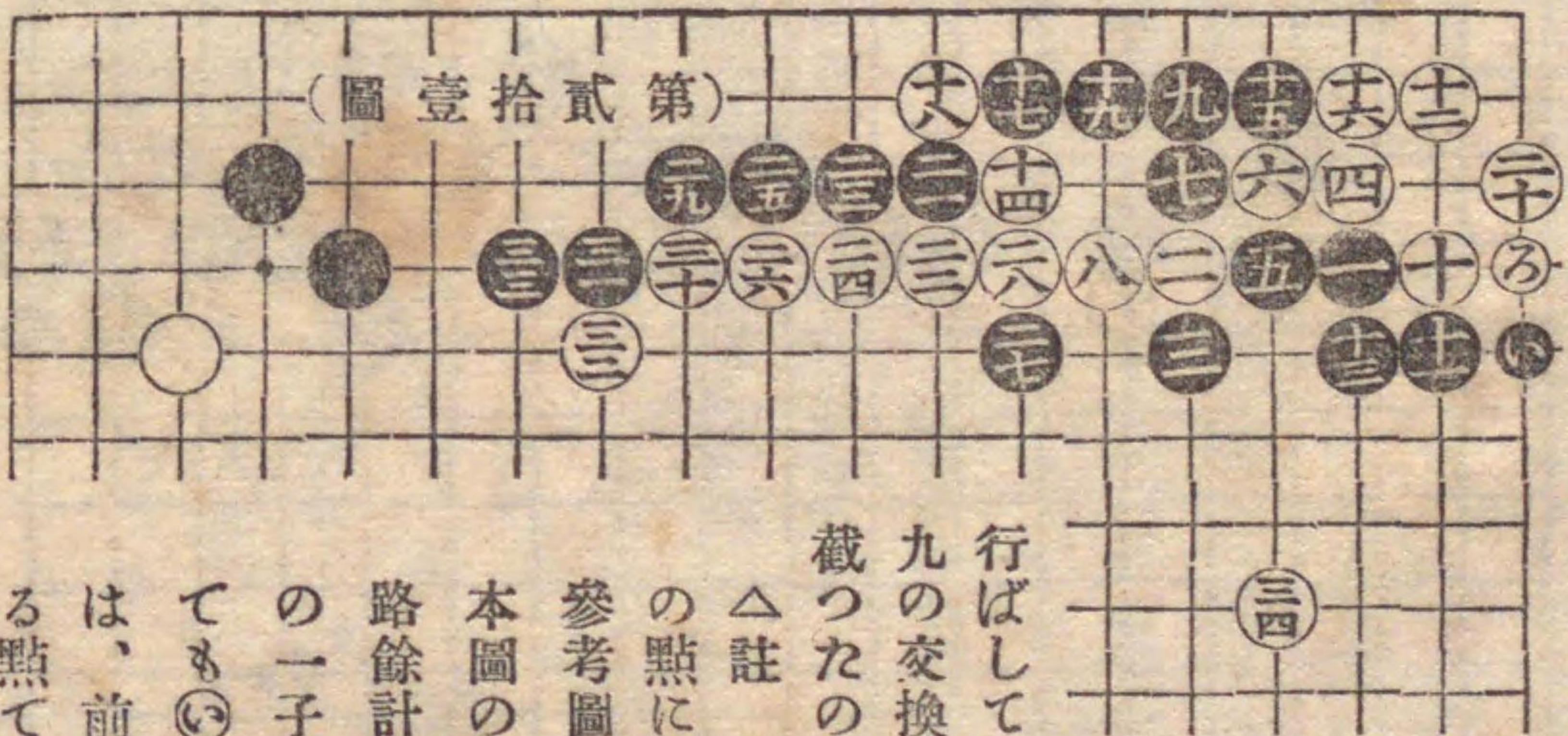


(第貳拾圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~


○(第貳拾貳圖) 黒二十七に覗の一子の利いて居るのと(イ)に下りの一手が利いて居るのとは前圖と同様である、白が三十の手で㊦と押し黒㊧に縛ね次て白㊨の時黒に手抜されて背面即右側に着手されるの惧ある時には三十の手で本圖の如く右側の要點に先鞭を着けて黒の動靜を探つて見るもよい、其の時黒が㊩とても動けば白は㊪と押し㊫に應ぜしめ㊬と打つてもよい。

本圖は全局の布置の假定圖である、此くの如き局勢にてもなつて居れば白が三十と運ぶ手は最良の姿勢を形づくる事になる。



○(貳拾壹圖) 本圖は黒十三の手で㊭の點に縛ねず單に十三と粘いだので、是は隅の白を活かして打たうといふ手である。乃て先づ十五と先手で隅に手を行ばしてゐて十七と頂け、白十八、黒十九の交換の後白に二十と活きさせて廿一と截つたのである。

△註 白が二十の手で隅を活きせず二十三の點に掛粘いだならば(三五〇頁)質問參考圖の通りになる。

本圖の結果は前圖に比して上側の黒が一路餘計に壓迫されて居る、其代り二十七の一子の覗きが利かしてあるのと、何時でも㊮の下りが先手で利いて居るのとは、前圖に比して此の黒の多少優つて居る點である。

以上四圖比較

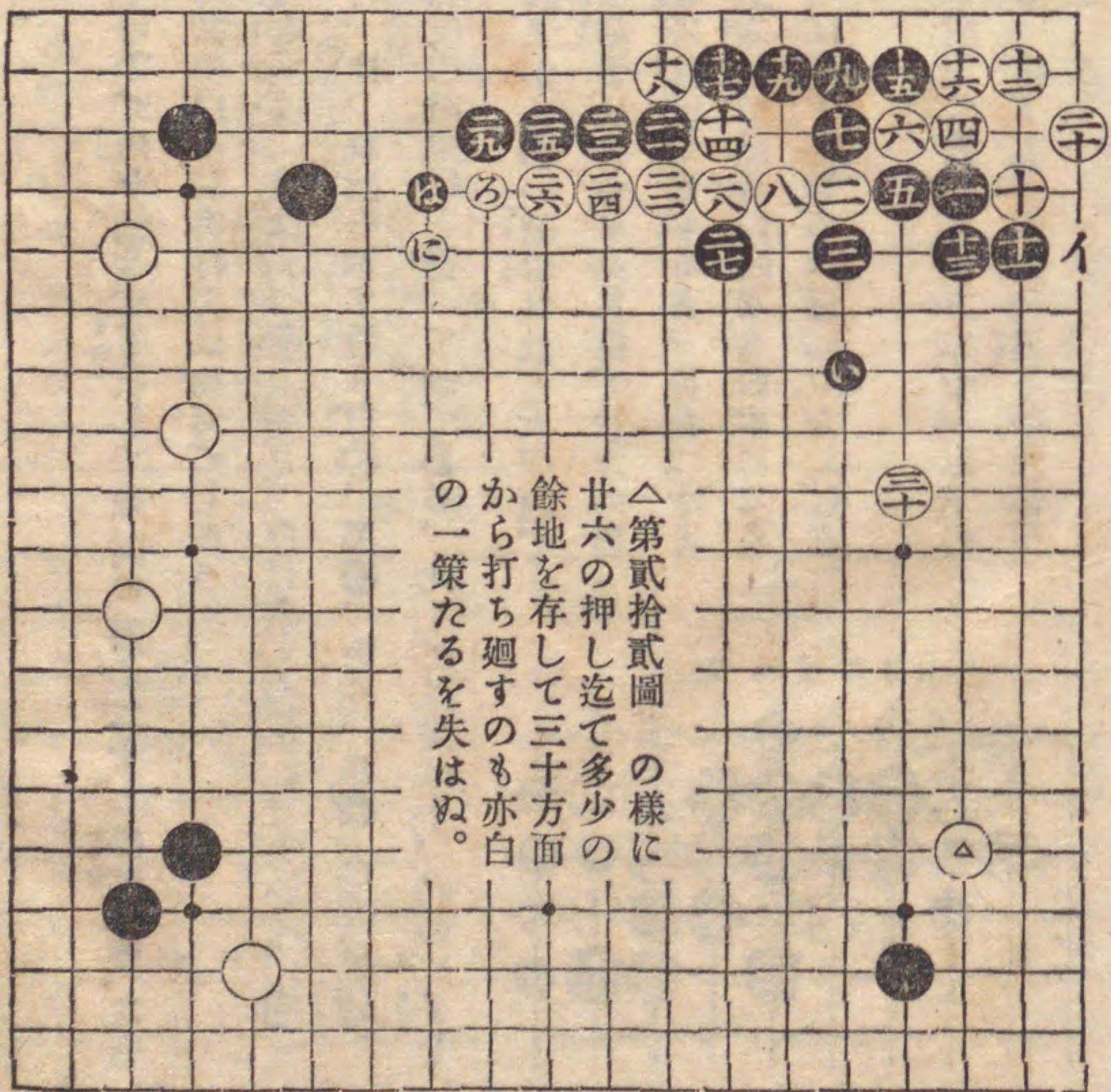
以上四圖比較評

△第拾九圖の様に白二十と縛ね其の結果十六、二十二の二子を捨て、は其の損害莫大である右下側方面に此の損失を償ふだけの十分の成算のある時でなくては容易に此かる大膽な打方は出来ぬ。

△第貳拾圖の如く單に十八の下りに止どめて隅の活を保留してゐて二十と堅く上を粘ぎ二十八迄押してゐて次で㊯方面から大勢を制して打つのも白としては面白い。

△第貳拾壹圖 黒が隅へアテずに單に十三と粘ぐのは隅を活かして打つので稍巧妙であるが白に取つても此の結果さまで不利ではない。

(圖 貳 拾 貳 第)



△第貳拾貳圖 の様に廿六の押し迄で多少の餘地を存して三十方面から打ち廻すのも亦白の一策たるを失はぬ。

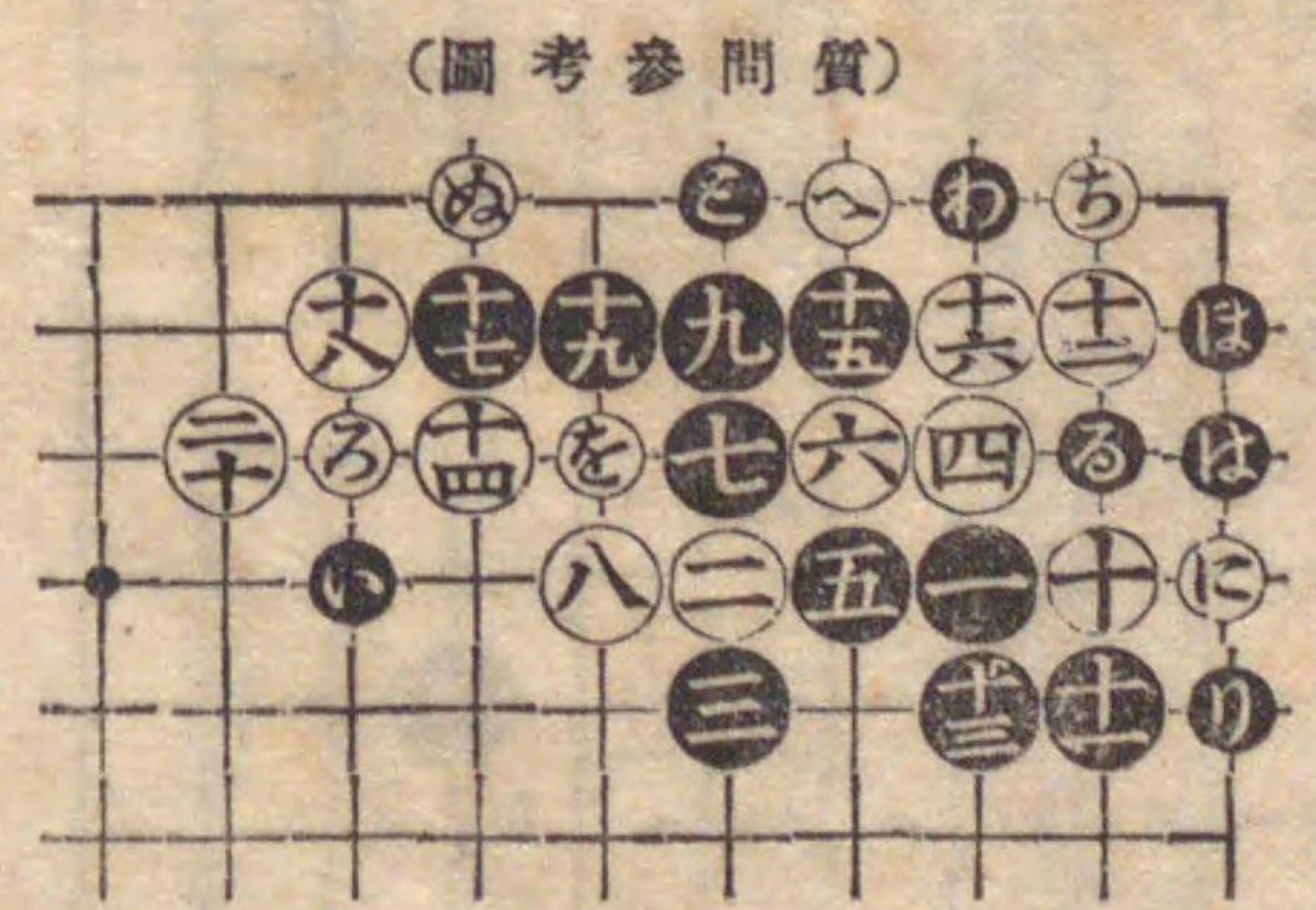
~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



△質問参考圖

●問 前の第二十一圖に於て白が二十の手で隅を活きず手抜して本圖の如く二十と掛粘いだならば、其の結果は如何なりますか、又其の白の利害得失は如何てしやうか。

○答 白若し二十の手で外を掛粘いだならば、黒は先づ●と覗き、白に○と粘がしてゐいて、●と置くがよい、其からの手順はい、ろ、は、符號の示す通り白○、黒●、白△、黒○、白○、黒●、白○、黒●、と二子の白を提り、白○の時黒●と提つて切である、此くては黒は十、○の二子を提つて極めて安全の位置に就いて居るから○の切争は敢て大問題ではない、が白の立場から言ふと此の切争に勝つて見た處で右力の黒を攻める力は無く、若し又此の切争に敗けてもすると、折角二十と掛粘いだ此の一團八子の白の自活からして計らねばならぬ事になるから、勝つてサ程の利益なく敗けては尙々不利の境遇に立たねばならぬ。  
要するに白は、やはり二十の手で隅を活きて置いて一方二十一以下の黒を上側に壓すると同時に右側に於て一以下五子の黒に迫る手段に出るのが最良の策である。



(圖考參問質)

結局

此打方復  
羽自味  
ほ、行

五と緯心場合

新

碁定ノ手順

白十ノ手三種

本圖ニ運  
左ノ布石  
關係

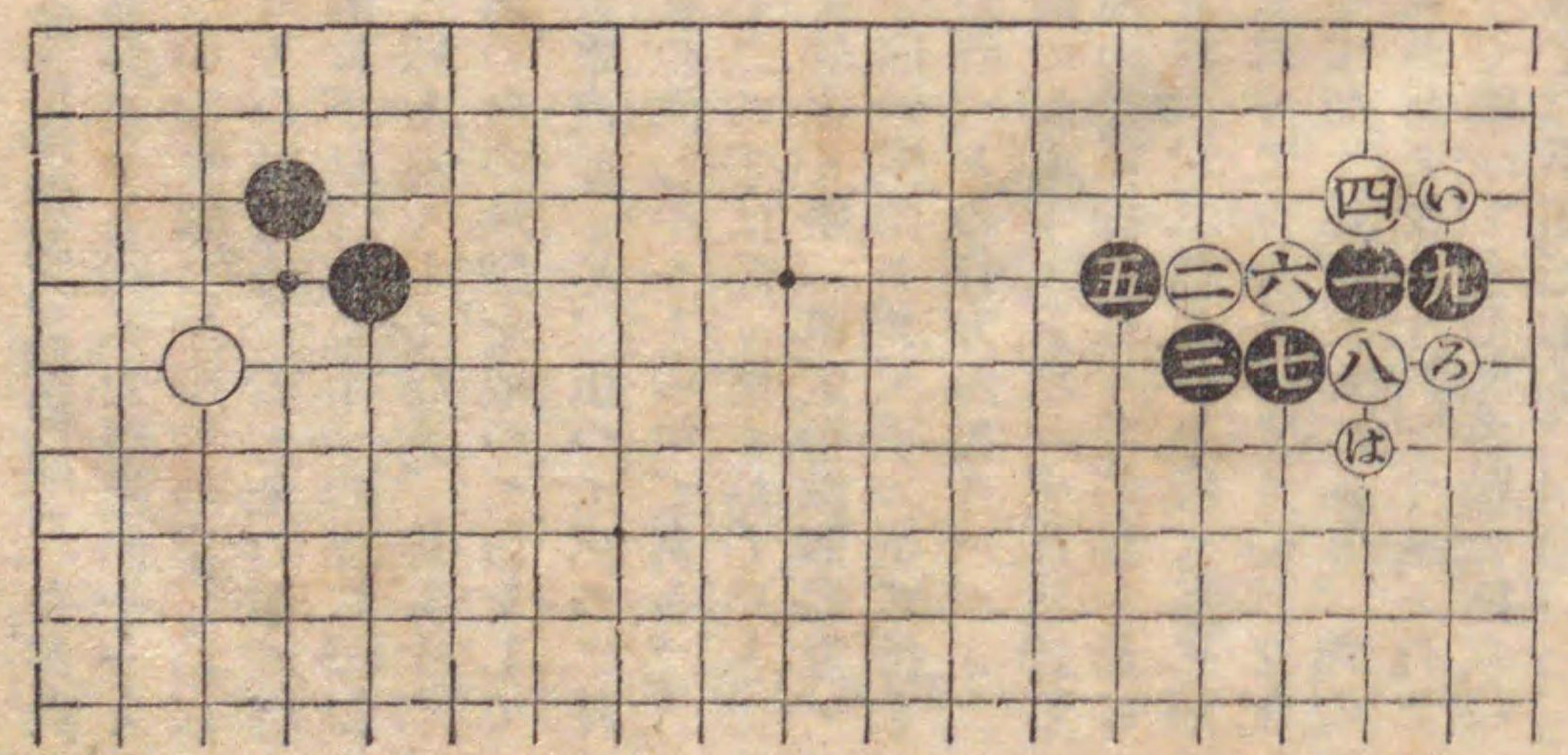
○(第貳拾參圖) 白四の頂けに應じて、黒が第十四圖の様に引くのは緩い、さりとて又第十六圖の様に突き當つて截る手は征其の他の關係で打ち難いといふ時、黒は五の手で、圖の如く白二の頭を上から緯ねる手段もある。

△註 本圖以下黒が五と上から行くのは、古來未だ有らざる處で、近き過去に於て、名人本因坊師對鈴木四段の實戰に現はれたのが殆んど初てであらう、這回秀哉師が此の手から生じる變化と手順と及び利害得失とを考査して「高掛定石」に追加せられたのである。

黒に五と上から緯ねられた時、白は六と衝き當るより外に手段はない、以下黒七、白八、黒九、迄の應接は確定の手順である。次で白は十の手を○と内から押す手と(繼續圖參看)○と外から抑へる手と(第貳拾八圖參看)○の點に行ひておく手(第貳拾九圖參看)との三種の打方がある。

△註本圖の如き形に運ぶ際の條件としても、左上の布石關係は、やはり前述第三百二十頁(參考三種圖)の場合と大差はない事と心得ておけばよ。

(圖參拾貳第)



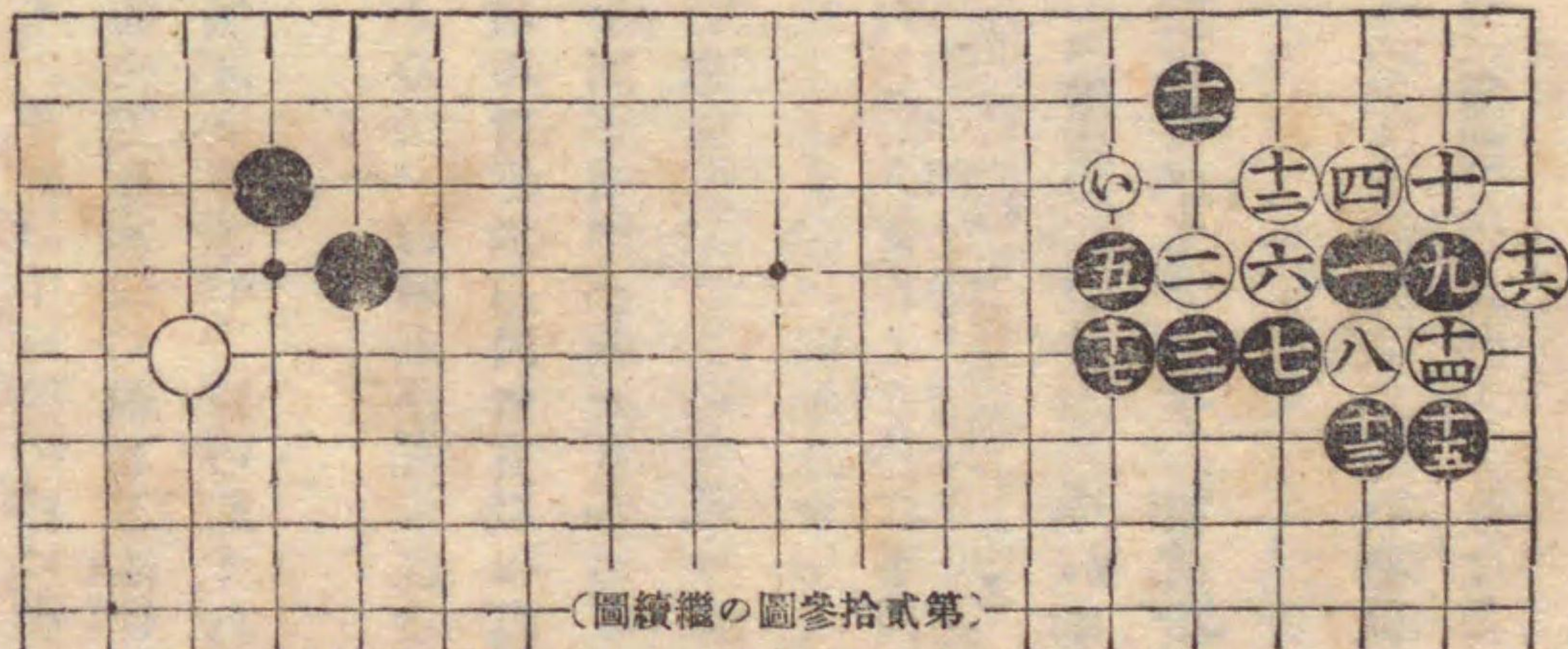
(石定先互)



二三四  
黒土手筋  
白十三手三種

本圖の結果

○(第貳拾四圖) 白が此く左側へ十二と縛るのは(十六の點の)截を防ぐの一策で、兼ねて外部の黒に斷點を造る手である。白十三の抑へは何處迄も十一の一子と相待つて白を包まうといふ手である。  
 黒十五の手で白の二子を此く截つて提れば此の方面に不拔の根據は出来る、が其の代り右側方面は破られて、白をして跳梁せしめる事になる。  
 乃ち黒十五白十六の交換の後、黒は十七と抑へねば、十五と截つた主意がたぬ、已に十七と抑へた以上は白の十八に應じて十九と粘ぐは無論命令手で、次に白に二十と右側に勢力を張らるゝは必然の結果である。  
 本圖の結果は白に黒外壁の一部を破られて居る不利の形はあるが其の代り黒は先手の利を保有して居る。



(圖續繼の圖參拾貳第)

○(第貳拾參圖の繼續圖) 白が此く隅から十と抑へた時黒が十一と打つのは棋家の所謂着理(テメヂ)なるものである、若し此の手で(十)の點に下れば白に十一の點に飛ばれて味を無くして終ふ。即ち十二の點の白の缺點を覗つて白をして勢力重複せしめ、由つて以つて外部を包圍しやうとの策である。  
 白十二の手は此く堅く粘ぐ手と、(十一)と縛出す手(第貳拾四圖參看)と十四の點にアテル手(第貳拾七圖參看)との打方がある。  
 本圖の如く十二と粘がずに白若し十四の點を抑へれば此の點を黒に截られ六、二の二子を絞られて愚形に歸する惧があるから白は之を嫌つて此く粘いだのである。此の際に於ける黒が十三、十五と外を先手で塗つて十七と手堅く粘ぐの確定的手順である。

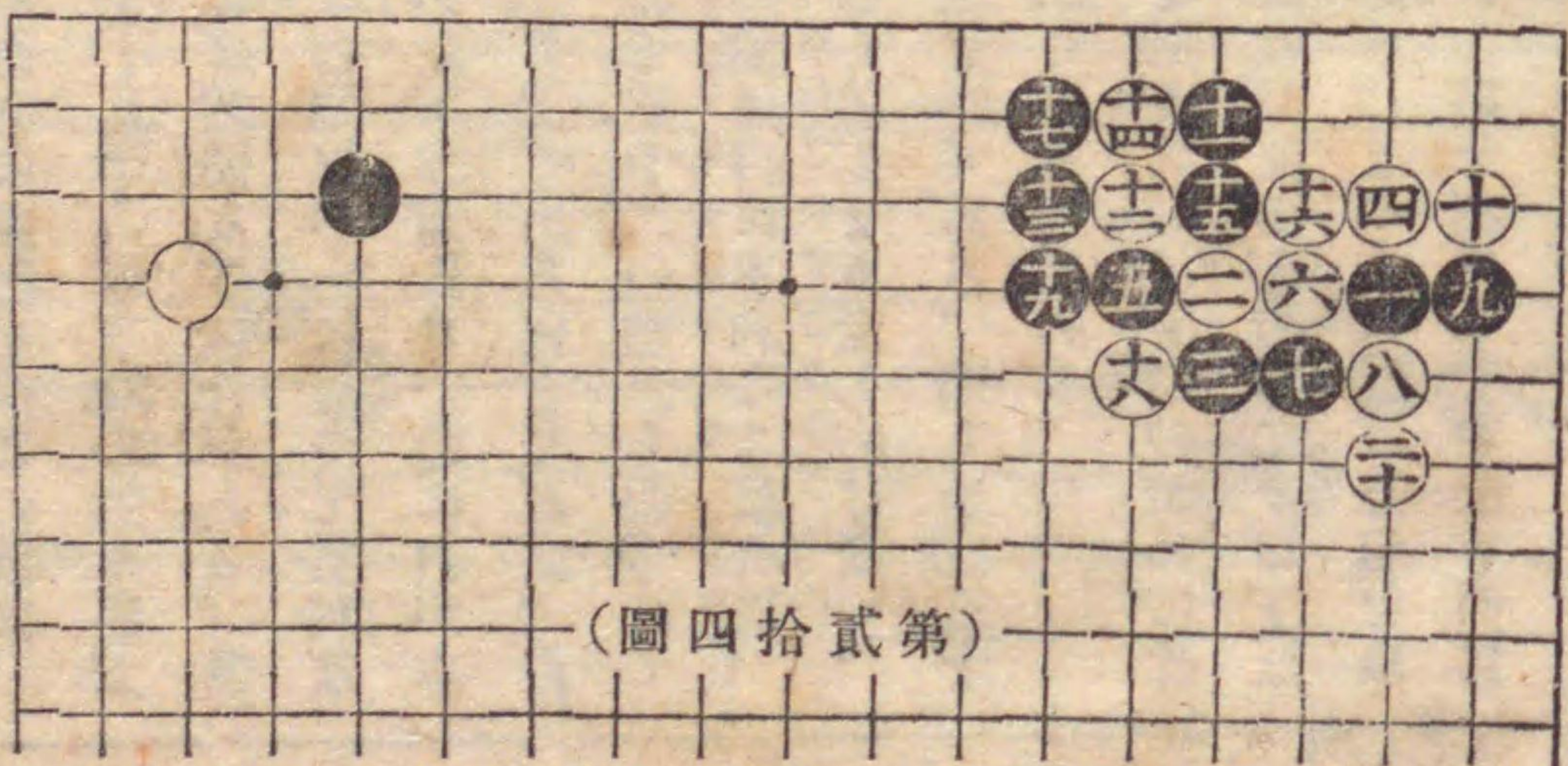
黒土手筋

確定手順

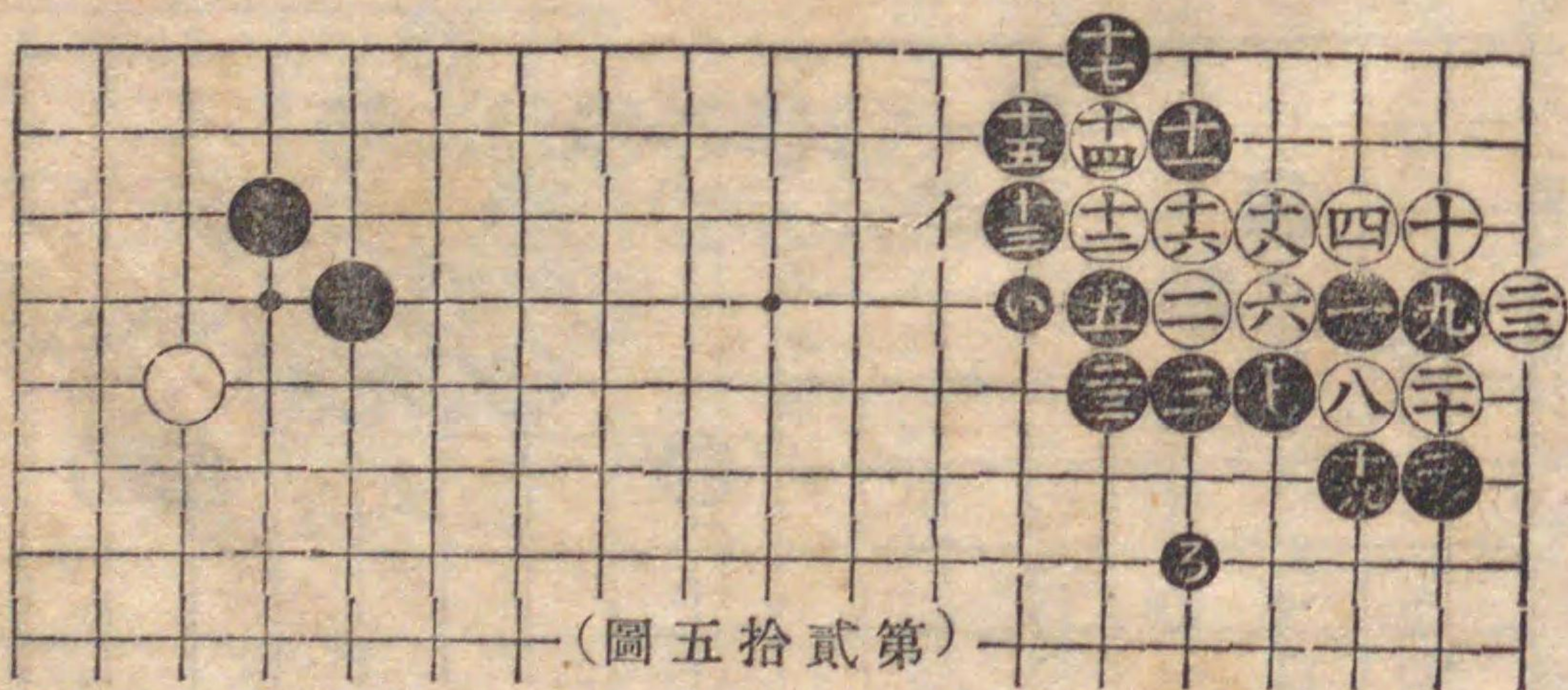
黒飽迄上り閉鎖スル考ノ時

ろ、備方

○(第貳拾五圖) 黒が若し第貳拾四圖の通り右側を白に破ぶられるを嫌い、飽く迄上を閉鎖しやうと考へたならば、前圖十五と截る手で、此く外から抑へるがよい、此の十五の手は白十二、十四の二子を續づかせて先手を取つて十九、二十一と右側を塗らうといふ手である。  
 黒十七の手は先手を以つて此の裾を收束する利益な手である。  
 黒十九の時、白が二十の手で、十三の點を截れば、黒(十九)につき、白二十、黒二十一、白二十二の交換の後黒は(十九)と備へておく或は白二十の手で(十九)、黒二十三の後白は(イ)と迫る手もある其は次圖に於て詳解しやう。



(圖四拾貳第)



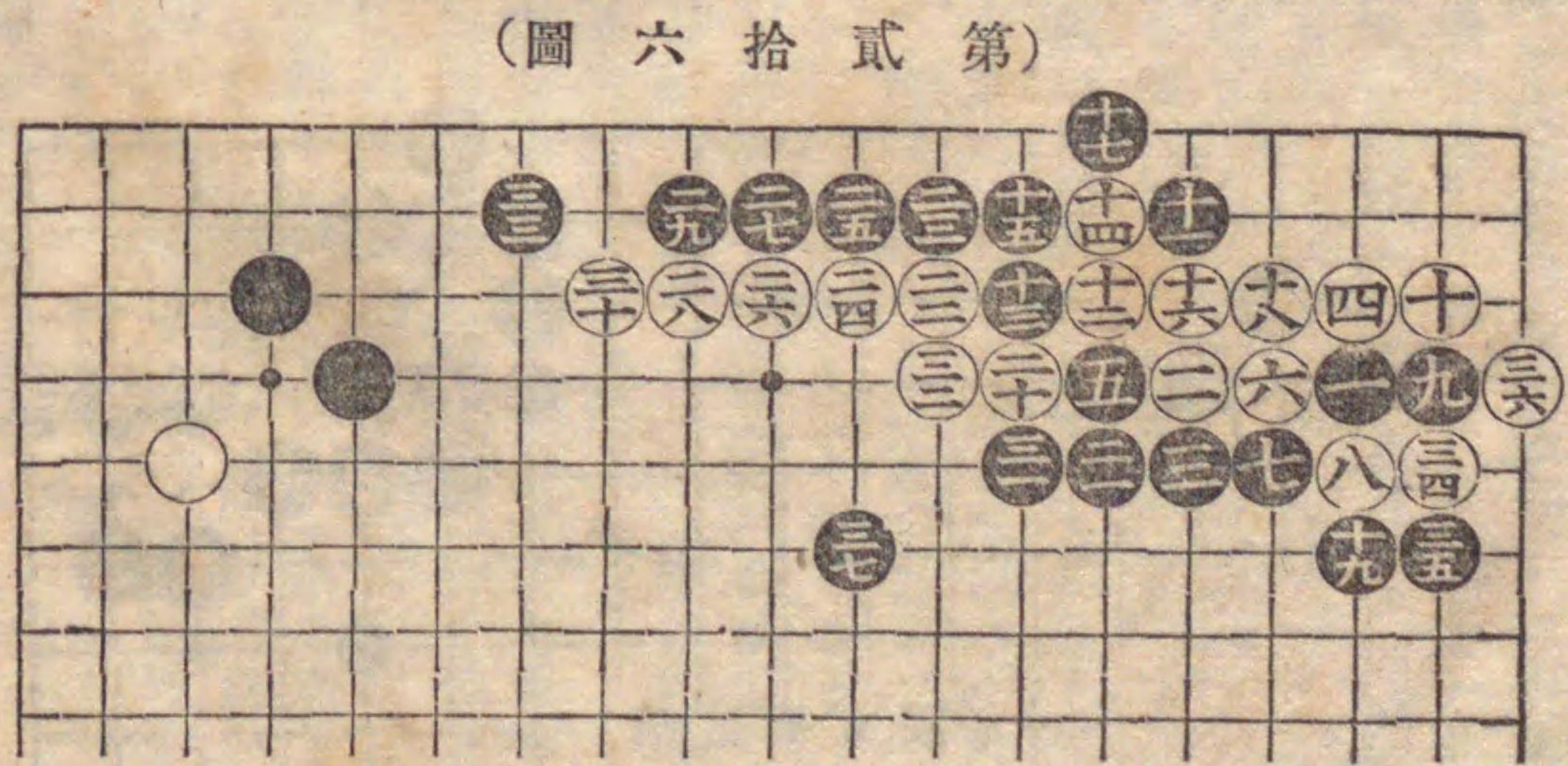
(圖五拾貳第)

石 定 先 互



白黒、年令、  
服従セ又考、時  
但征ノ条件也

○(第貳拾六圖) 白が前圖の如く黒の命令に服従せぬ考の時、先づ黒の缺點を衝いて、本圖の如く二十と截り、以下圖の如く運ぶの手段なきにしも非ずである然し是には重要な條件がある、其は左下隅方面に白の布石があつて、征の關係が白に取つて有利なる時でなくてはイケヌ、征當りの白が左下方面にない時に白が本圖の如き手順を運ばうとしても其は不可能である何となれば、白二十四の時、忽ち黒に二十五の手を以て三十二の點から截られて征に提らるゝからである。即ち、征の關係白に不利なる場合は、ヤハリ黒の命令に之れ服して前圖の如く運ぶより致し方はない。黒三十一の手を早くアテ、は上側の黒危険である、即ち黒ば三十二の斷點を見て白のハタラクを制限して居る趣がある。本圖の結果は上側に黒が造らうとして居た大地域を白の爲めに蹂躪されて終つて一見黒の不利益の様には見えるが然し二十以下三十二に至る七子の白は、黒三十七の煽りによつて行動に急迫を感じる局勢になつて來る、随つて黒は此の勢を利用して右側方面に大地域を劃さうといふ策戰を講じる事も出来る。

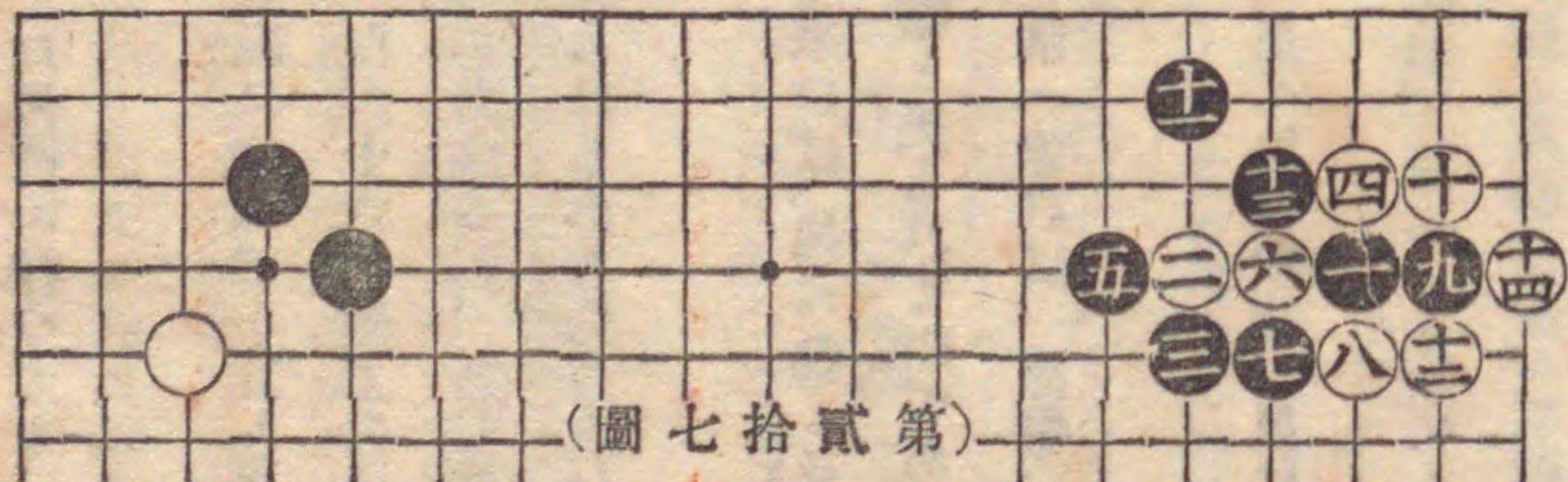


(圖六拾貳第)

白十三時、黒  
十三ノ一手アル

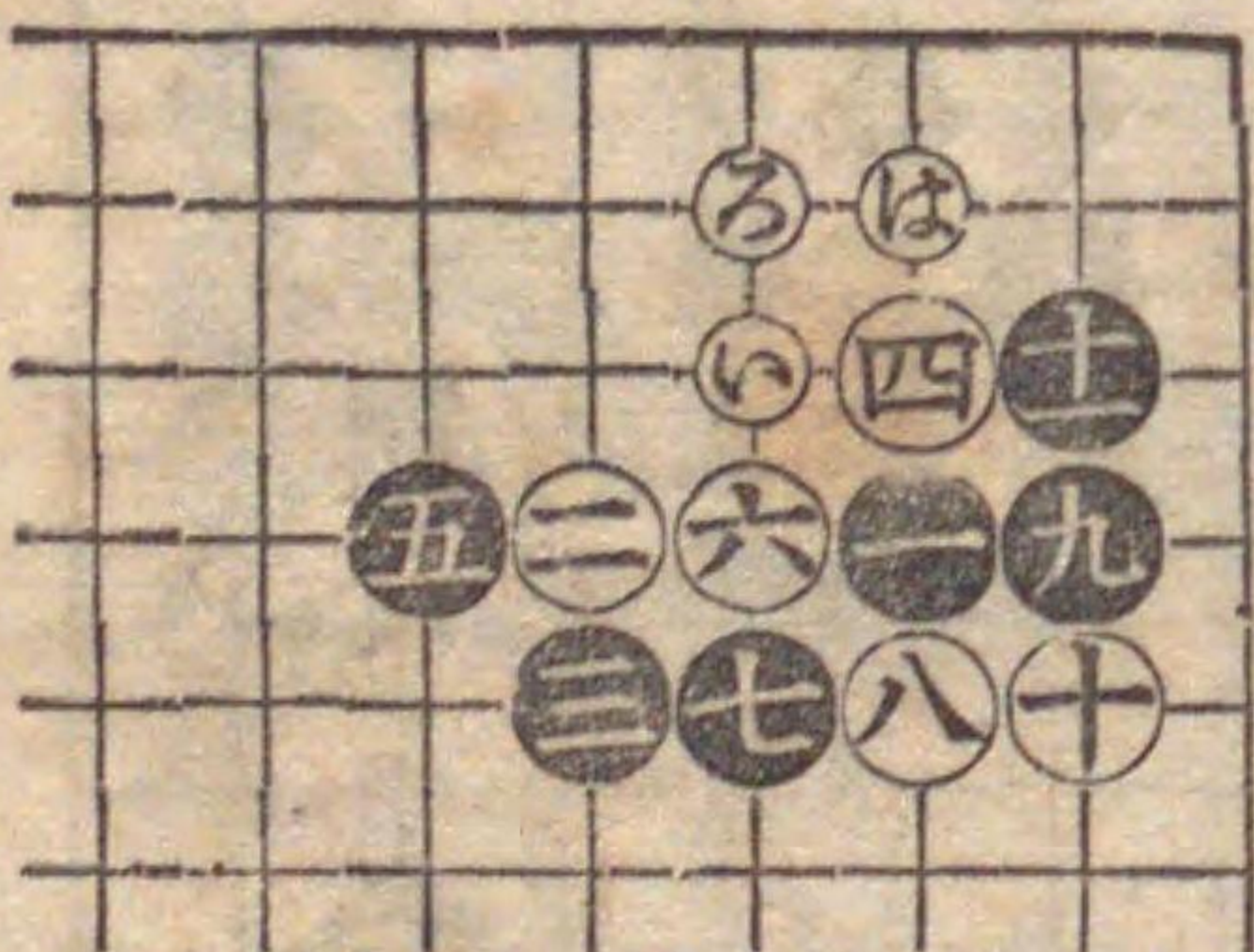
ニテ八圖  
白外カラ押ス  
良手ニアラズ  
白十三手三種

○(第貳拾七圖) 黒十一の時、白が本圖の如く十二と打つて黒の二子をアテれば黒は十三と白の缺點を衝くの一手である、白十四の打拔は命令手であるが、黒も亦十五の手で一の點に一子打缺いておき、白は手拔、黒亦手拔きて、此の處當分休戰状態となるのである、本圖の如く運べば右側を黒に閉鎖される患はないが、其の代り隅の白はカナリに勢力重複するのみならず上側に向つて黒に十分の勢力を造らせる事になるから、白としては餘り感心した打方ではなし。



(圖七拾貳第)

○(第貳拾八圖) 白が此く外から十と押すは良い手ではない、黒は十一と行びておけばよい、次て白は十二の手を以て、㊦と堅く粘るか、㊧と掛粘るか、或は㊨と行びるか、三種であるが、其何れになつても結果に大差は無い。



(圖八拾貳第)



白士ノ手ノ如何  
ニ拘ラス馬十三

黒十五ノ粘キ  
良手

劫

隅ヲ推テ外勢  
ヲ制ス

此ガメヅマリヲ  
見テ打ツキ  
ニホヘ等ノ頂  
ヲ味フヘシ

初心者ノ注  
意シテ学テ  
ハキ嚴ク手

△(第貳拾八圖の繼續圖) 白が十二の手を如何様に打つても、黒は十三と行ひるが最もよい。

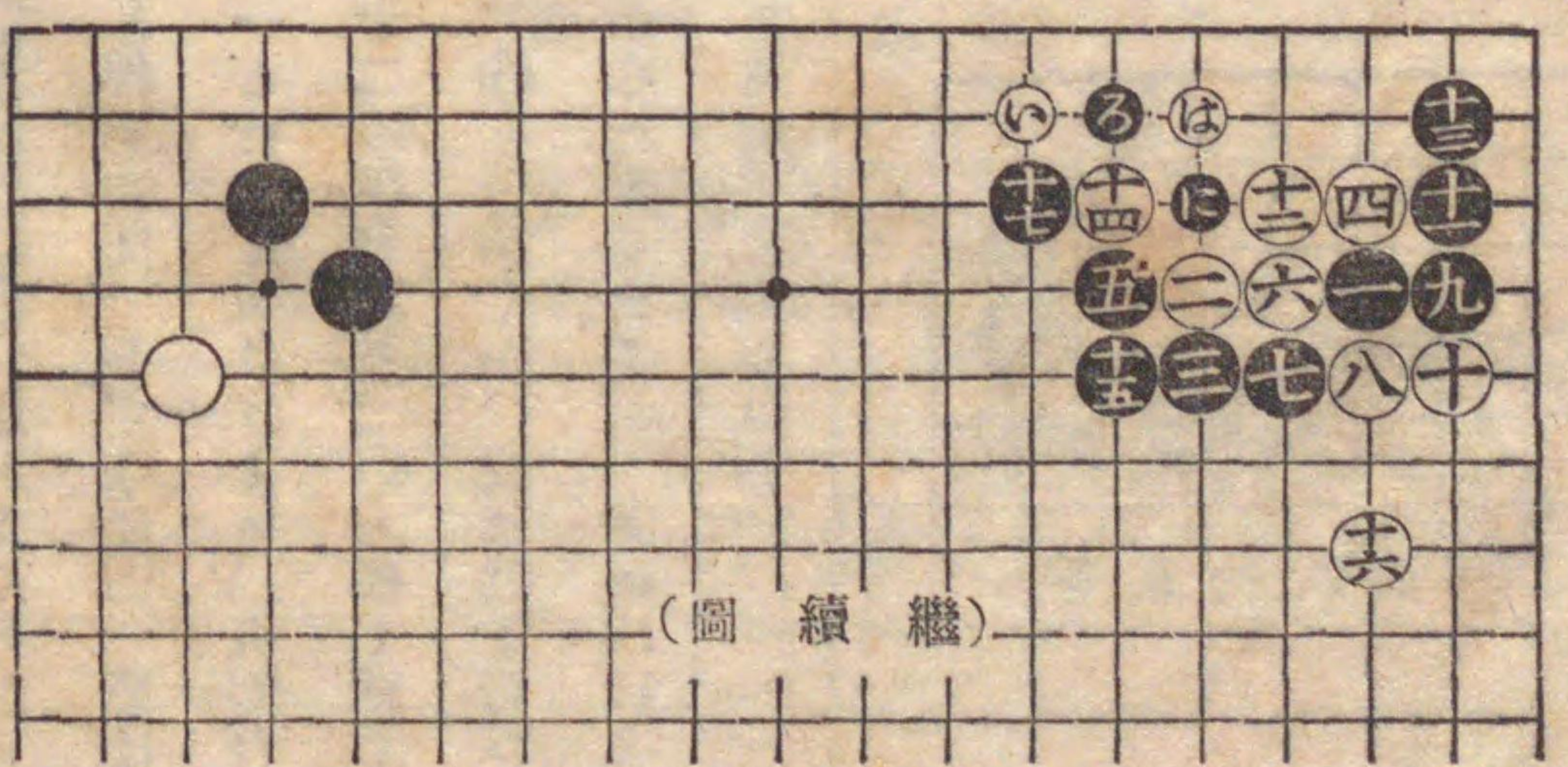
次で白十四の粘に對して黒は先づ自己の缺點に備へて十五と手堅く粘ぎ、上側右側の兩方を規ふのである、白が十六と飛ぶのは、上側は黒に迫まられても尙劫として凌ぐ事が出来るが、若し玆を黒に占められると一手で八、十の二子を捕られるから先づ之に備へて此く飛んだのである。

黒十七の抑へに對し、白が若し⑩と縛ねて來れば、黒に⑪と截られ、白は⑫と應じるより外なく、其時黒に⑬と提られて劫である。

△(繼續甲圖) 黒十七の抑への時白が⑭と隅へ迫れば、黒⑮、白⑯、黒⑰、白⑱と置つてヤハリ劫である。

△(繼續乙圖) 黒十七、次で白が⑲と隅の黒へ迫つた時、黒は本圖の如く⑳と置つてもよい。

前圖は劫として争ふ手になるが、



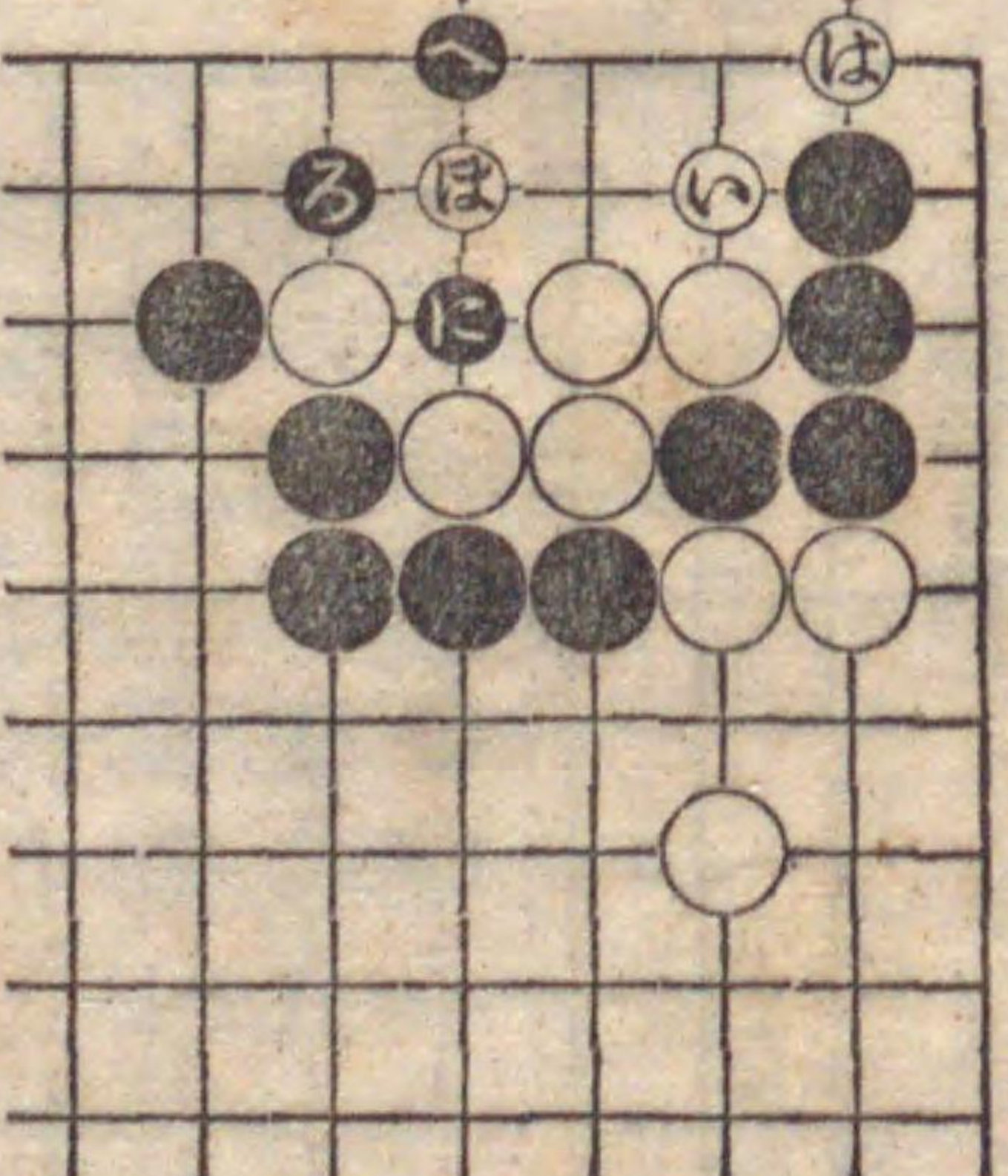
(圖 續 繼)

本圖は隅を捨て、外勢を制する手である、即ち黒⑮と置いた時、白⑯の縛ね、黒⑰の截り、乃て白は黒に手數を費させるため⑱と捨子をうち、

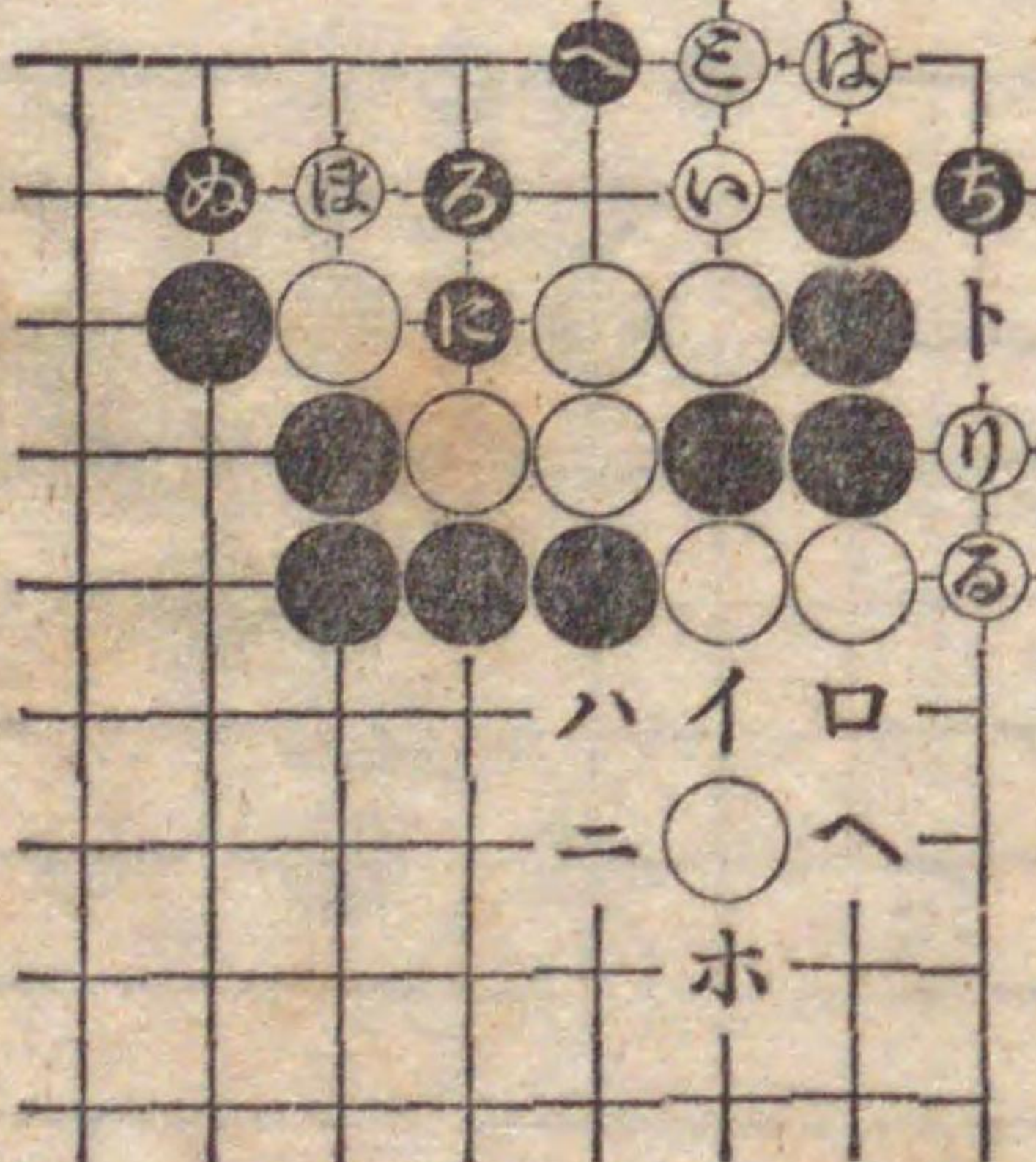
黒⑲白⑳の後黒も亦隅の提に對して白をして手數を費さしめ且つ味を残す爲め㉑と曲り、白㉒、黒㉓、白㉔と運ぶ手順である。

此く運んでおいて後に黒からは尙隅の捨子を利用して(イ)と縛込み白(ロ)黒(ハ)と打つ手、若くは(ニ)(ホ)(ヘ)等の點へ頂ける味がある、是は何れもダメヅマリの味を見て打つ手なのである。

△註 本圖に於て白が⑩と捨子を二子多くして黒を牽制した手、黒が⑪の窺きて角の押手を無くして⑫と下つた手などは初心者の宜しく注意して學ぶべき處である、尙此のダメヅマリの意味とは言ふ迄もなく外面の白のダメがつかれば(ト)と押す力がなくなるの惧がある之を利用して黒からは此の白に迫る手段のある處を指すのである。



(繼續甲圖)



(繼續乙圖)



此打方味ふこ  
酷シキ手  
リノ手

△(繼續丙圖) 又白が十二と掛粘いだ時、黒は⑤とアテ、白の粘ぎ、黒亦隅を⑥と粘ぎ、白④黒⑤の交換の後、白が⑦と右側に備へるのは前と同意である、黒⑥、白⑦黒⑧、白⑨以下符號の手順を経て結局切であるが、黒は假令隅六子を捨て、も決して不利ではない。

(此の手順 白④の縛ね、黒⑤の抑へ、白⑥の掛粘ぎ、黒⑦提り、白⑧の縛ね、黒⑨の抑へ、白⑩に切とる、黒⑪の掛粘ぎ、白⑫の縛ね、黒⑬に切とる、白⑭の押し、黒⑮の打込、白⑯の提り、黒⑰の點粘ぐ。)

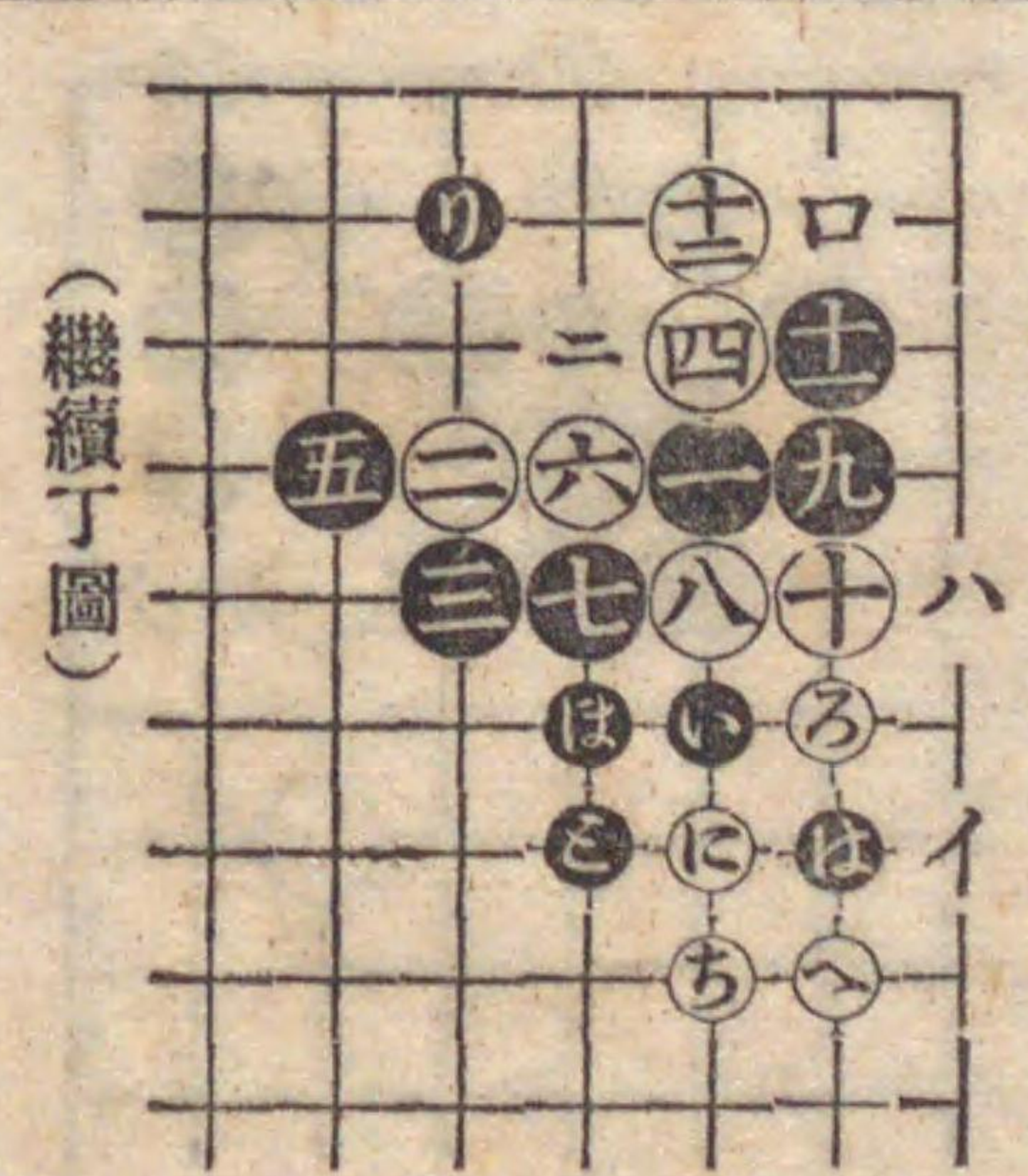
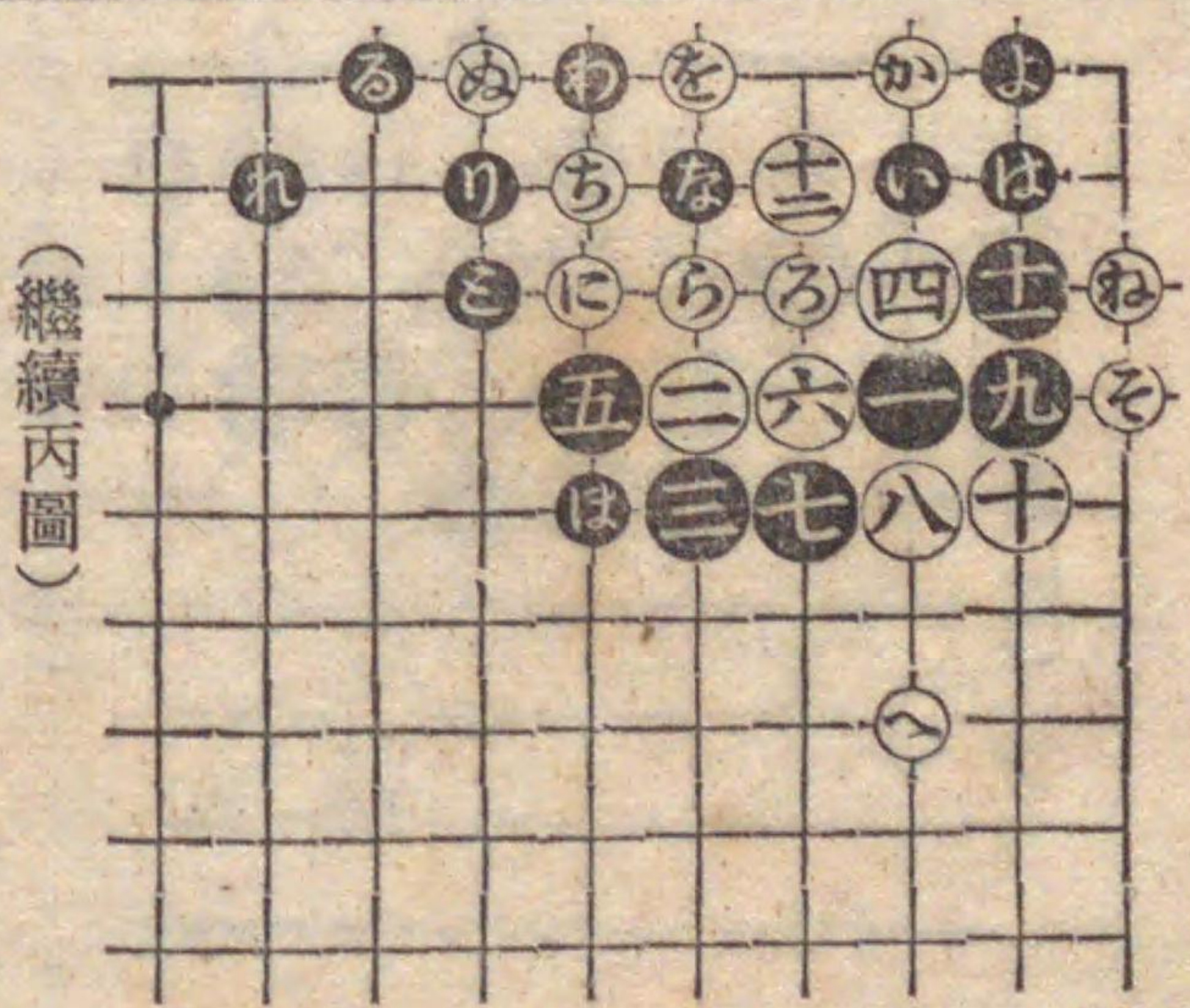
△(繼續丁圖) 白が此く十二と行ひれば、黒は⑥と抑へ、白の時⑧と二段に抑へるのが酷しい手である、次で白⑩、黒⑪、白⑫となつた時黒は⑬とアテ、白を⑭と粘がせて⑮と上側に轉じ白の斷點を覗ふのである。

黒⑯の時白が⑰と粘がず(イ)と打つて黒⑱の一子を抜いても黒はヤハリ⑲と上側の斷點を覗ふがよい、

黒⑲の時白が(ロ)と隅へ曲つて此の三子をヨシ盤るとしても黒に(二)の點を截られ二、六の二子を抜かれては不利莫大である。

若又黒が⑳とアテた時、白が隅(ロ)の點に曲らず黒は隅の三子を潔よく捨て、㉑の點に白㉒の一子を打抜いておくもよい。

△注意本圖黒①白②黒③の時白が(ロ)と曲つたならば黒は(イ)と截る前に(ハ)と三子をアテ白に(イ)と提らせて(ニ)と截るがよい。

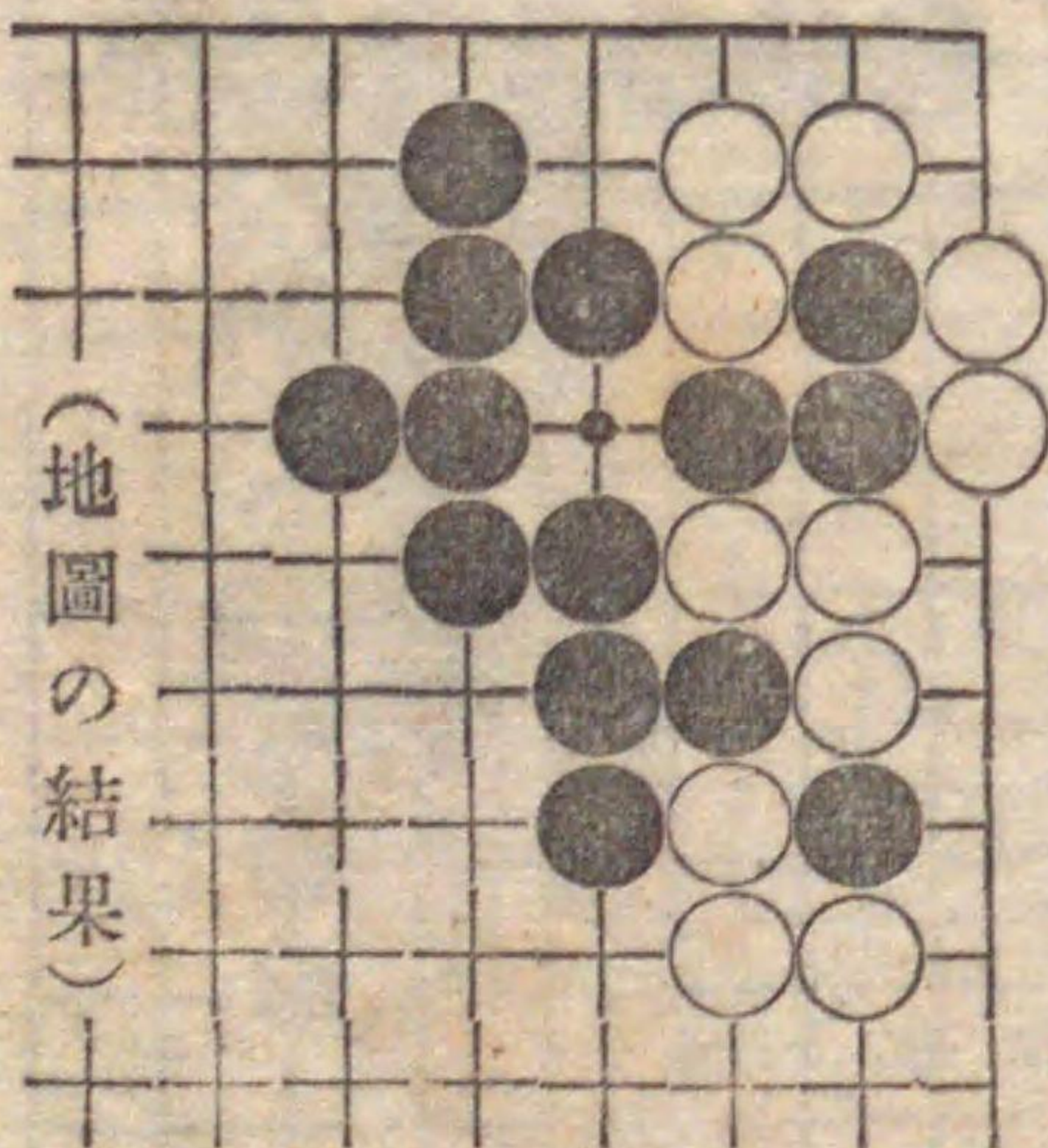
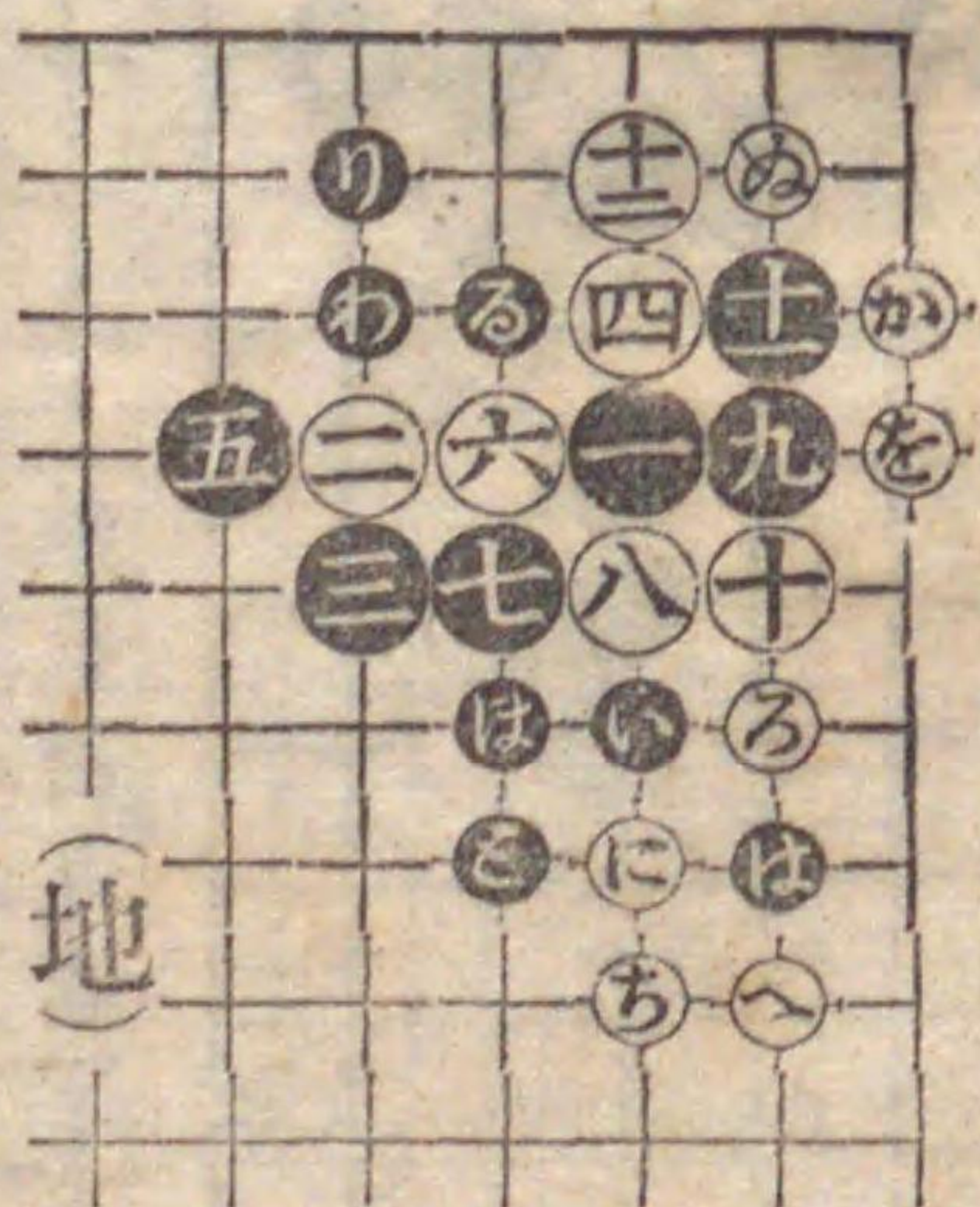
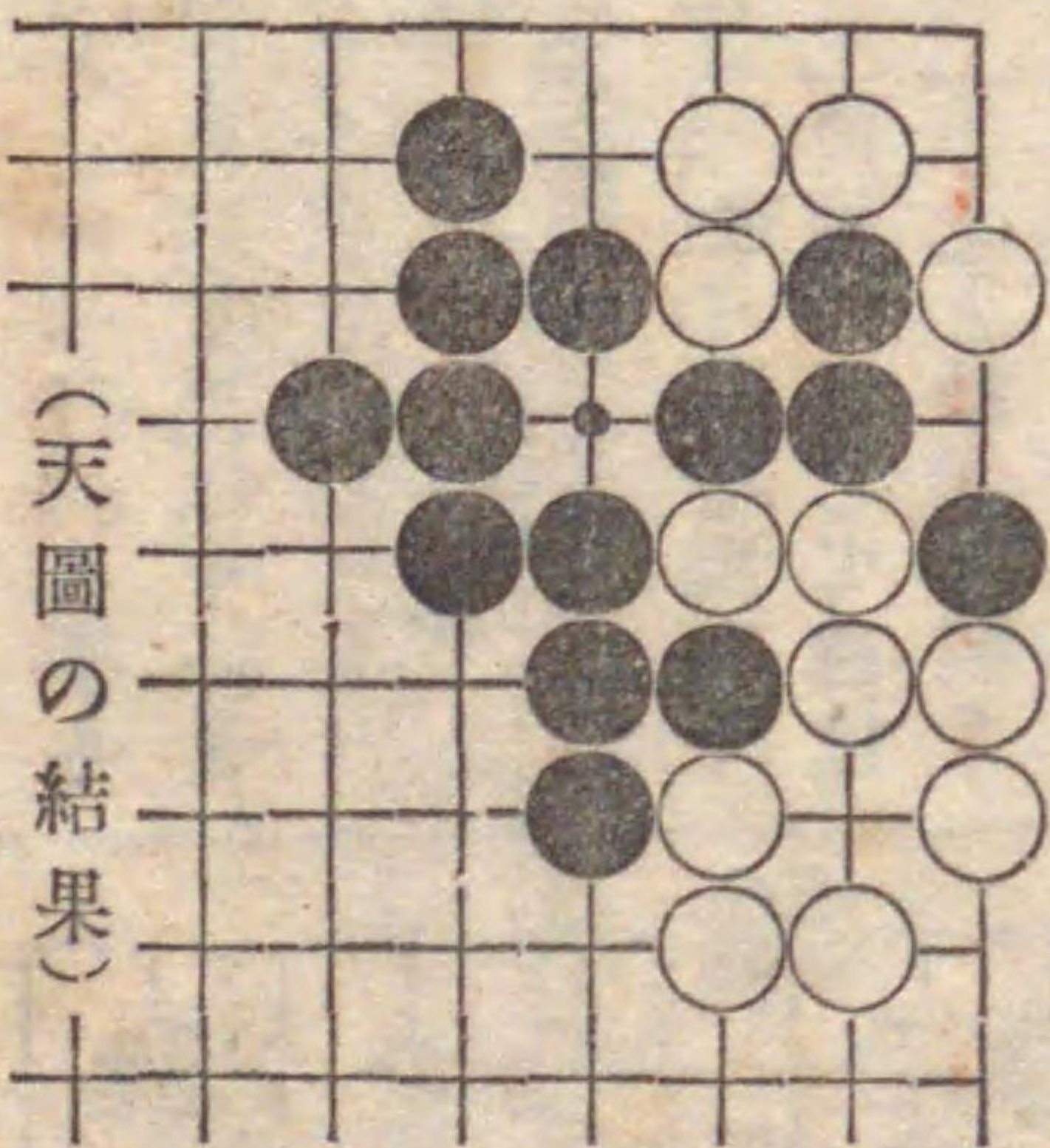
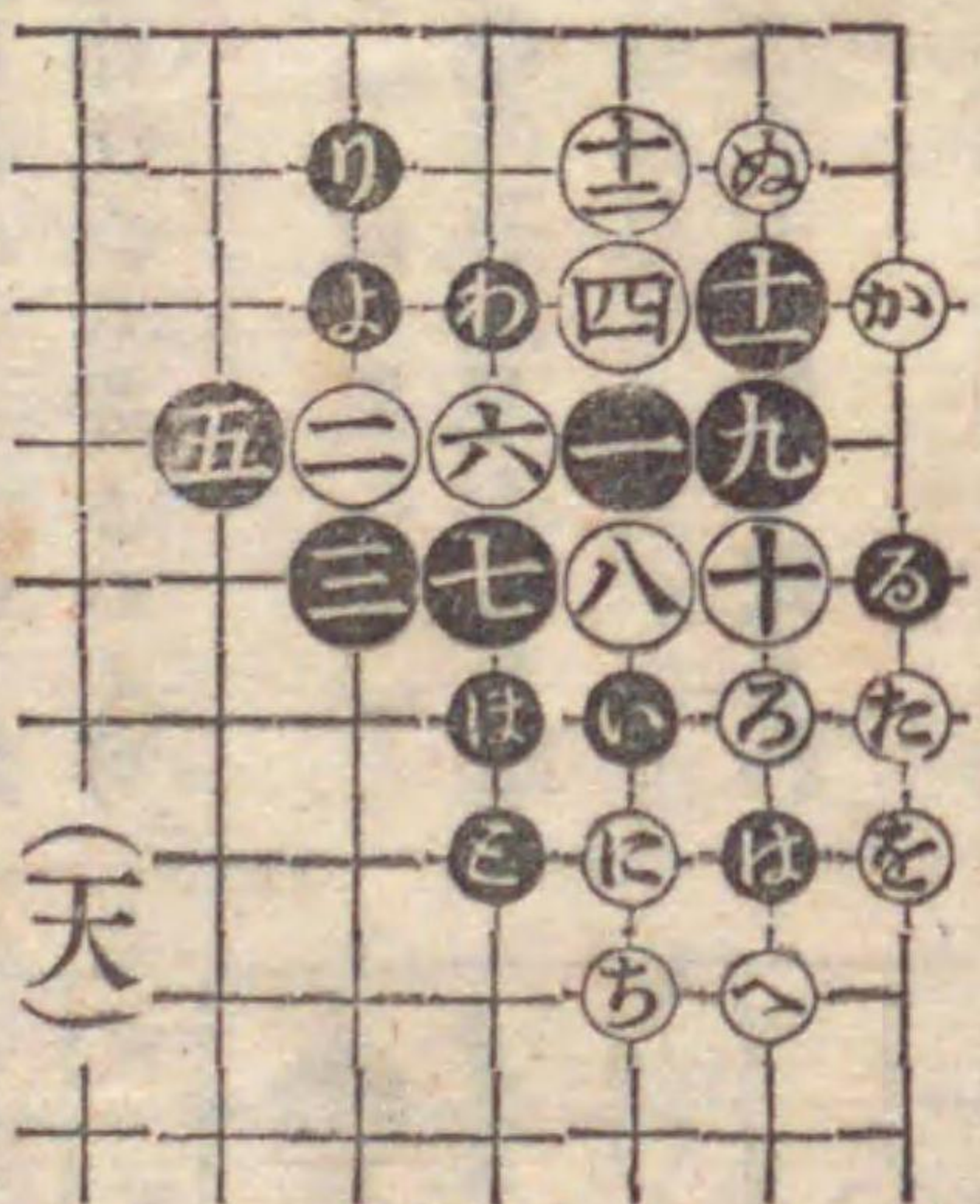


少シ注意  
此天地二圖、  
差ヲ生ス

△(天圖) 即ち白十二と行ひた後、黒①白②黒③白④黒⑤白⑥と應接を遂げて、黒が⑦と上側へ着手した時、白が⑧と隅へ曲つたならば、黒⑨と截る前に先づ先手で⑩とアテた白に⑪と提らせておく、この⑫の一子は捨子であるが、之があるが爲め白は少からぬ不便を感じる、次で黒⑬白⑭と二子どり、白は六の點に打かき、黒は二にとり、白⑮となる、此の結果は三子の先手粘が残つて居る。(結果圖參看)

△(地圖) 然るに白⑯の時黒が右側の縛を打たずして單に上二子を⑰と截れば、白⑱黒⑲の二子どり、白六に打かき、黒二にとり、白⑳と盤つて、黒は三子の提られが残る、若し之を粘がうとすれば後手である(結果圖參看)

此かる微細の處が勝敗に關する事もあるから能く注意せねばならぬ。





桂子考石ハ  
ドコ迄モ味ヲ  
残ス

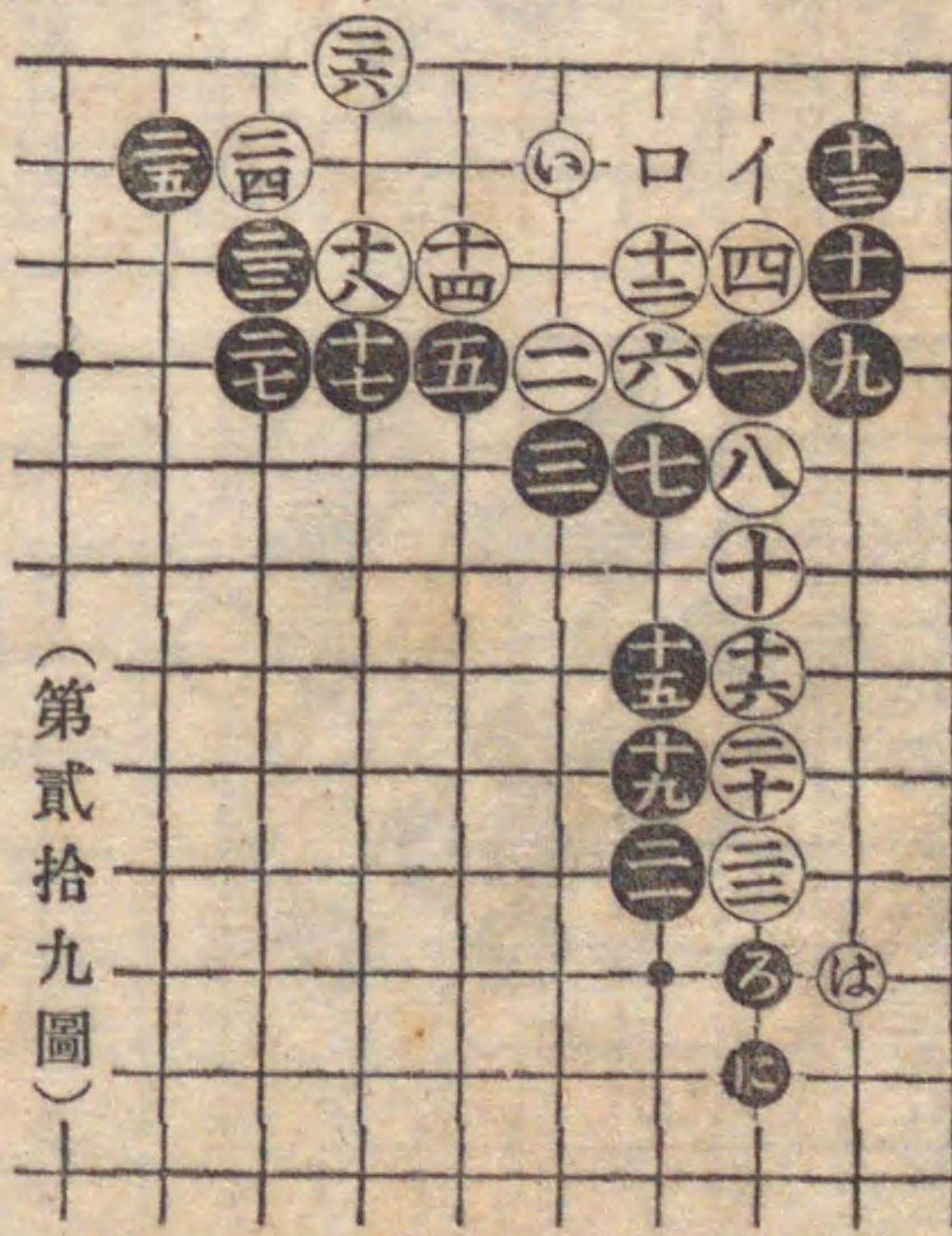
問答  
ヘノ手

○(第貳拾九圖) 白が本圖の如く十と右側へ行びる事も亦餘り良い手といふ事は出来ぬ、白十に應じ黒はヤハリ十一と隅へ曲り、白十二の粘に對して十三と行びておくがよい、次で十五と右側白十の肩を壓し、白十六の時又上側を十七と行び、白に十八と應ぜしめて再び右側を十九、二十一と壓し、次で上側に向つて二十三、二十五と酷しく壓迫を加へるのである、黒二十五の二段綽に對して白は二十六と掛粘ぐより外途はない、黒二十七と缺點を補うた時白は㊸と備へるか或は(ロ)の點に備へてもよい、其時黒は隅の四子を捨て、㊹と飽迄上から塗りつく可きである。

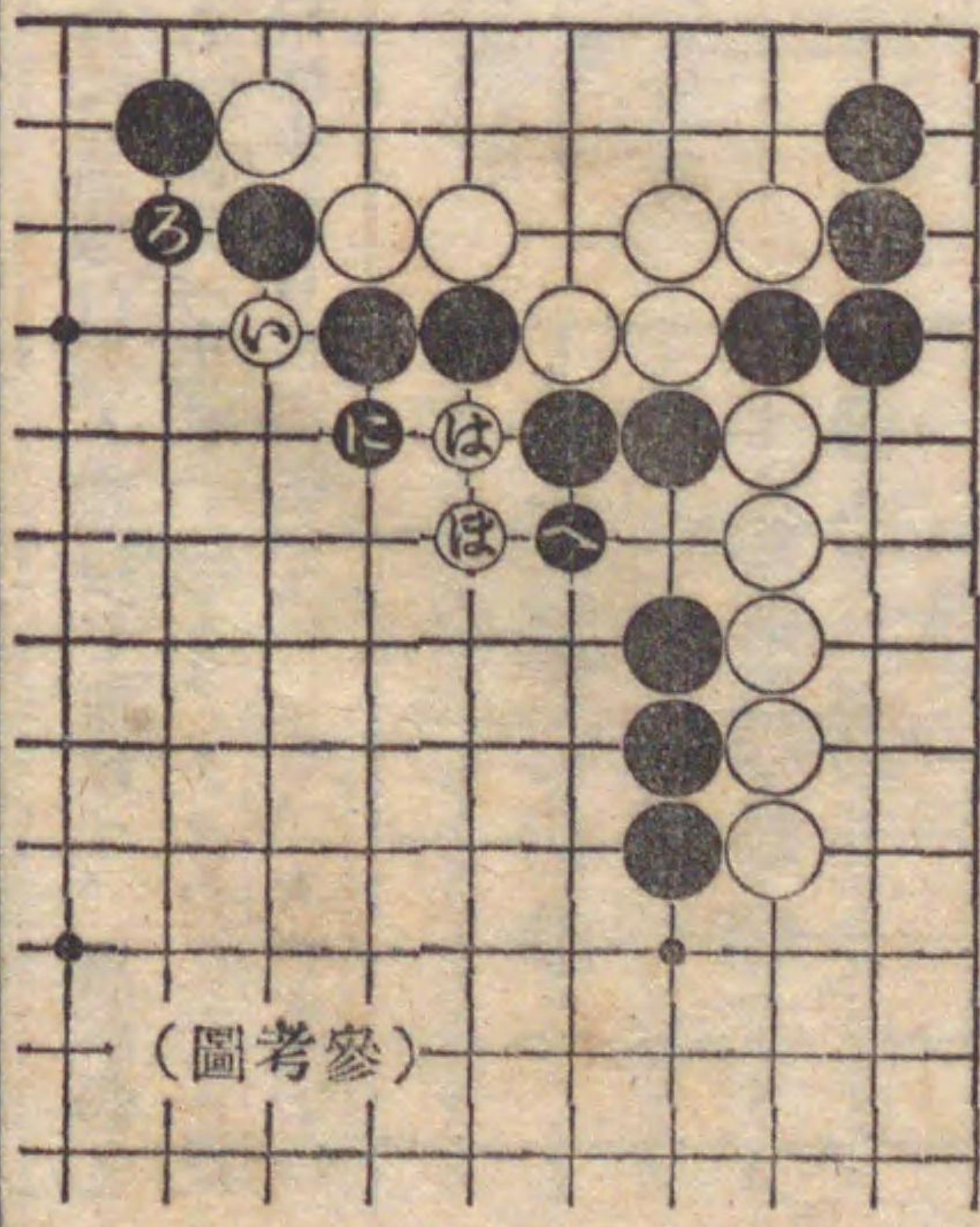
△注意 白㊸の時黒は隅を先手で(イ)と曲り黒に(ロ)と應ぜしはめては面白くない、捨てる考の子はどこ迄も味を残しておくのがよい。

△問 黒二十五の二段綽の時白に二十七の點を截られ

ては危険に非ずや。  
○答 参考圖の如く運ばばよし、決して惧なし、却つて白は外部の黒を㊹と補はしめたる爲め自滅を招くの外なき結果となる。



(第貳拾九圖)



(圖考參)

黒ニニ對スル  
白手  
いからカイカ  
はカノ四通ナリ

二ト夾カ、白一  
カヲ上側ノ拓  
ヲ絶対ニ封シタ  
ル手ナリ  
貞末ノ注

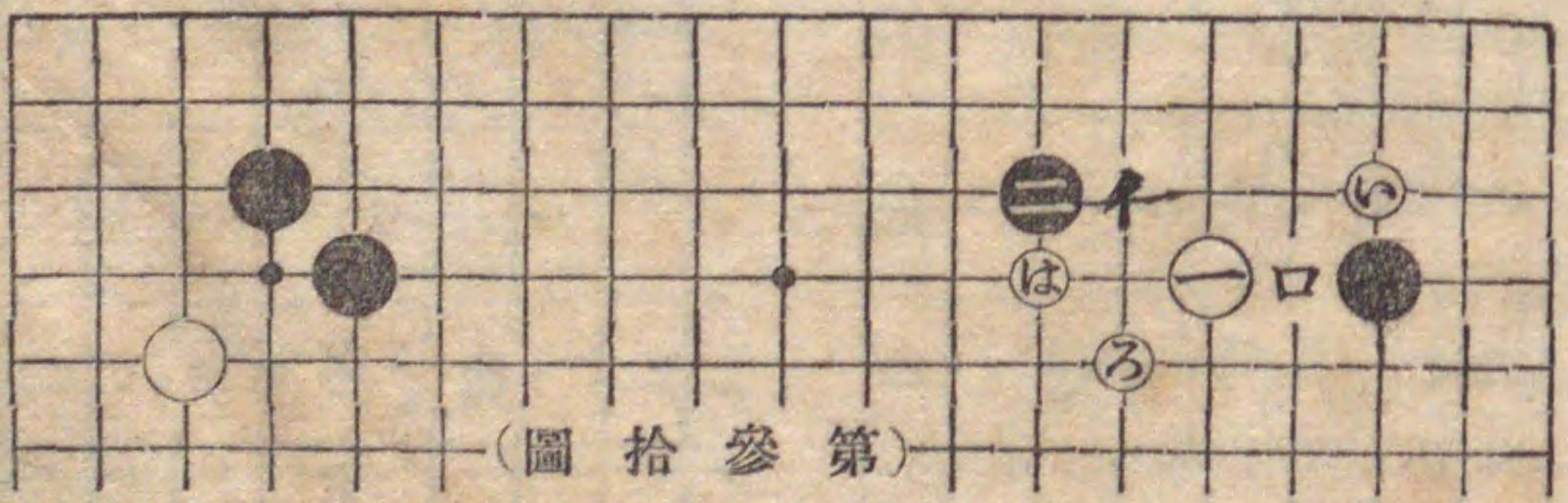
○(第參拾圖) 「黒二の夾」

高掛りの白に對して、小目先着の黒から直接に白に接觸して起す行動は前第貳拾九圖迄て畧盡きた譯である本圖以後は來攻の白を直に夾撃する手段を講ずる順序である。

高掛りの白一を、黒が二と一間に夾むのは無論左上に黒の布石のある場合で、其の布石状態は大略前三百二十頁で示したのと大差ないものと心得ておけばよい。

黒二に對する白の普通の應手は、㊸の三々頂か或は㊹の尖みか、又は㊺の頂けかである、然し白の策戦によりては(イ)の尖頂け、(ロ)の衝き當り等の手もないては無い。

△註 前述内頂若くは外頂の結果は、多くの場合に於て白に上側へ拓かれる、若し白の拓きを妨げて自ら上側の要點に據らうとすれば右上隅に於て黒は多少の犠牲を忍ばなければならぬ、例せば前第七圖若くは前第十一圖の如きである、乃て本圖以下に示す黒二の夾みは白からする上側の拓きを絶対に封じた手である。



(圖拾參第)



白三ノ頂、黒ハト緯込ハ普通通手ナリ否  
 フサレハカハカノ三種

初心者戒

孤弱

白セ、手、イカロカ

白イニ對スル黒ノ手ハ、ろは、三種

○(第參拾壹圖) 白三の頂けに對して、黒は(一)と緯込むのが普通の手であるが、場合によつては或は稀に(二)の點に衝き當るか又は左上の形勢によつては(三)と飛ぶ手もある。(但し次の手と同じく稍不利である)

△註 本圖に於て初心者の爲め特に注意してよく可きは黒四の手を以つて(二)と二線から緯ねるのは不利益である、何となれば、白一、黒二、白三、黒(二)白(一)、黒(ホ)となつた結果を見ると、一、(一)、三と連続いた堅固な白に接近して存在する黒二の一子は必然孤弱を感ずる事になるからである。

○(第參拾貳圖) 黒四の緯込に對して白が五と截り黒亦之に應じて六と沿ふのは論のない手であるが。其の際白は(イ)と緯込むか(ロ)と抑へるか二途である。

白が(イ)と緯込んだ時は、黒は之を(カ)と上からアテル手と、(キ)と下からアテル手と、(ク)と隅へ迫る手と、三通りの應接がある、其の變化の次第と可否得失とは、次圖以下に於て詳解しやう。

黒上カラハノ時

形勢互角

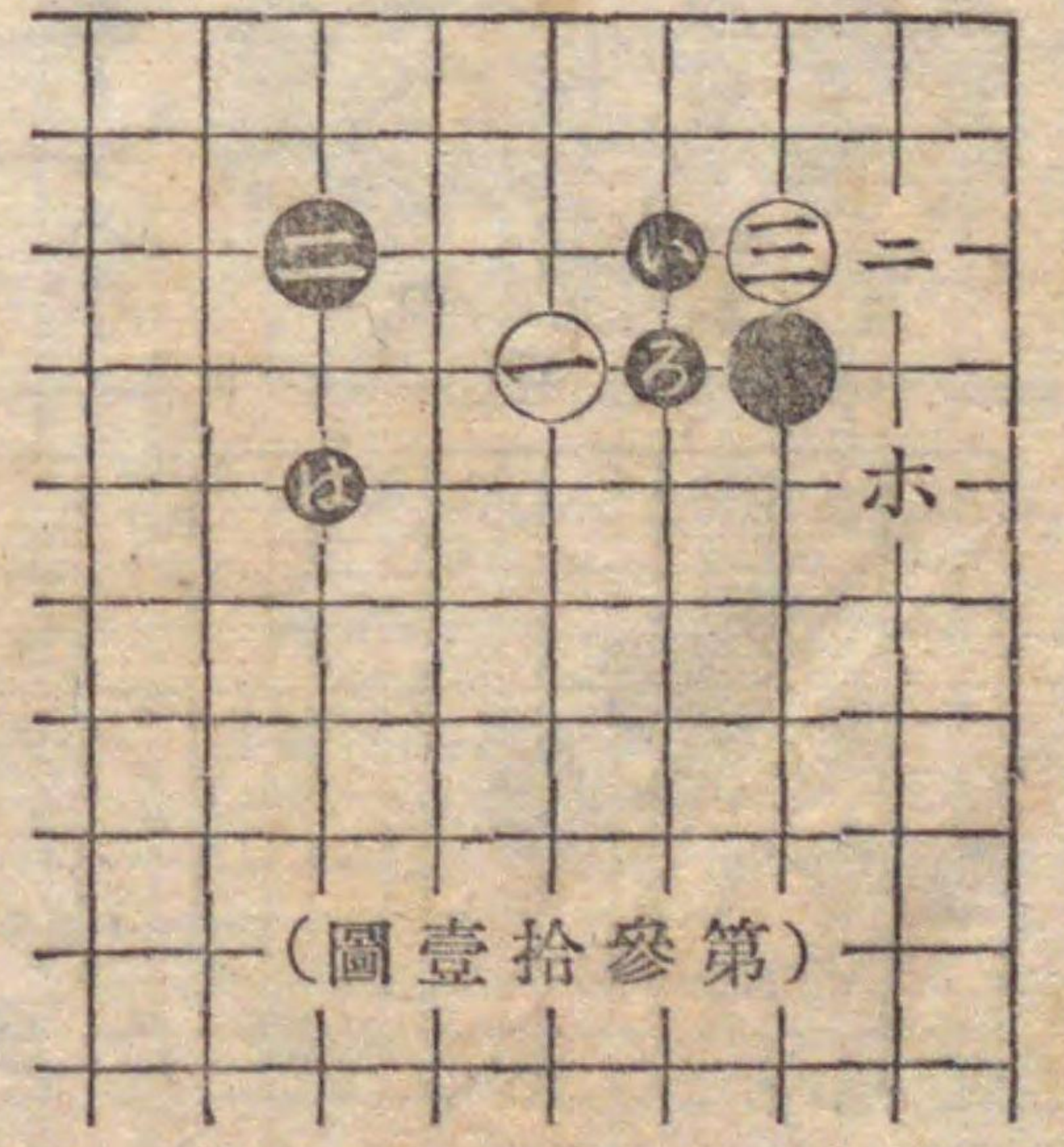
○(第參拾參圖) 白七の緯込に對し、黒が上から八とアテタ時、白は九と打つ手と、十の點に下る手とある。白九に對し黒之に關せず焉と七の一子を十と抜けば、白も亦十一と打つて黒の一子を抜く、此く運んだ結果は此の處先々互角の形勢である。

○(第參拾四圖) 白九に應じ黒が十と下る手もある、其の時白は本圖の如く十一と押すか或は十二の點に下るか白の考次第であるが、若し十一と押せば黒に十二と抜かれた後十三と抑へてお

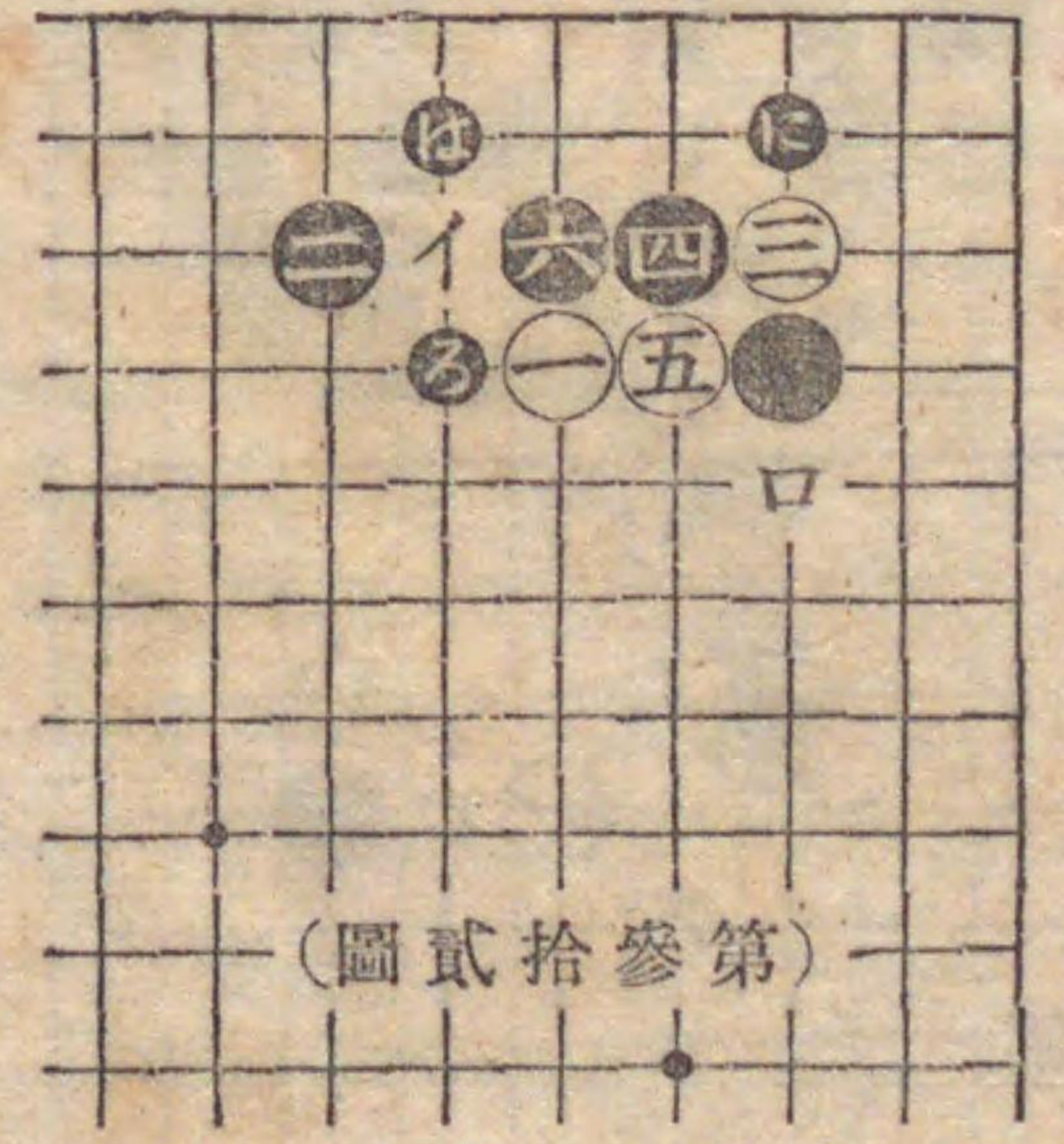
かねばならぬ、此の形は白頗る不利益である、何となれば、十二の一子抜によつて黒には何等の味も残らず堅固無比の子となるに比し白は黒二子の犠牲子に牽制され(一)と截られる味が残る、黒に(二)と截られて、白(三)と出た時、黒に(ハ)と緯ねやう、といふ味を見て居られるの不利がある。此く黒から味を見て居られるに反し白からは(ニ)の緯も利かぬ。

ハト切リテハト緯ル味

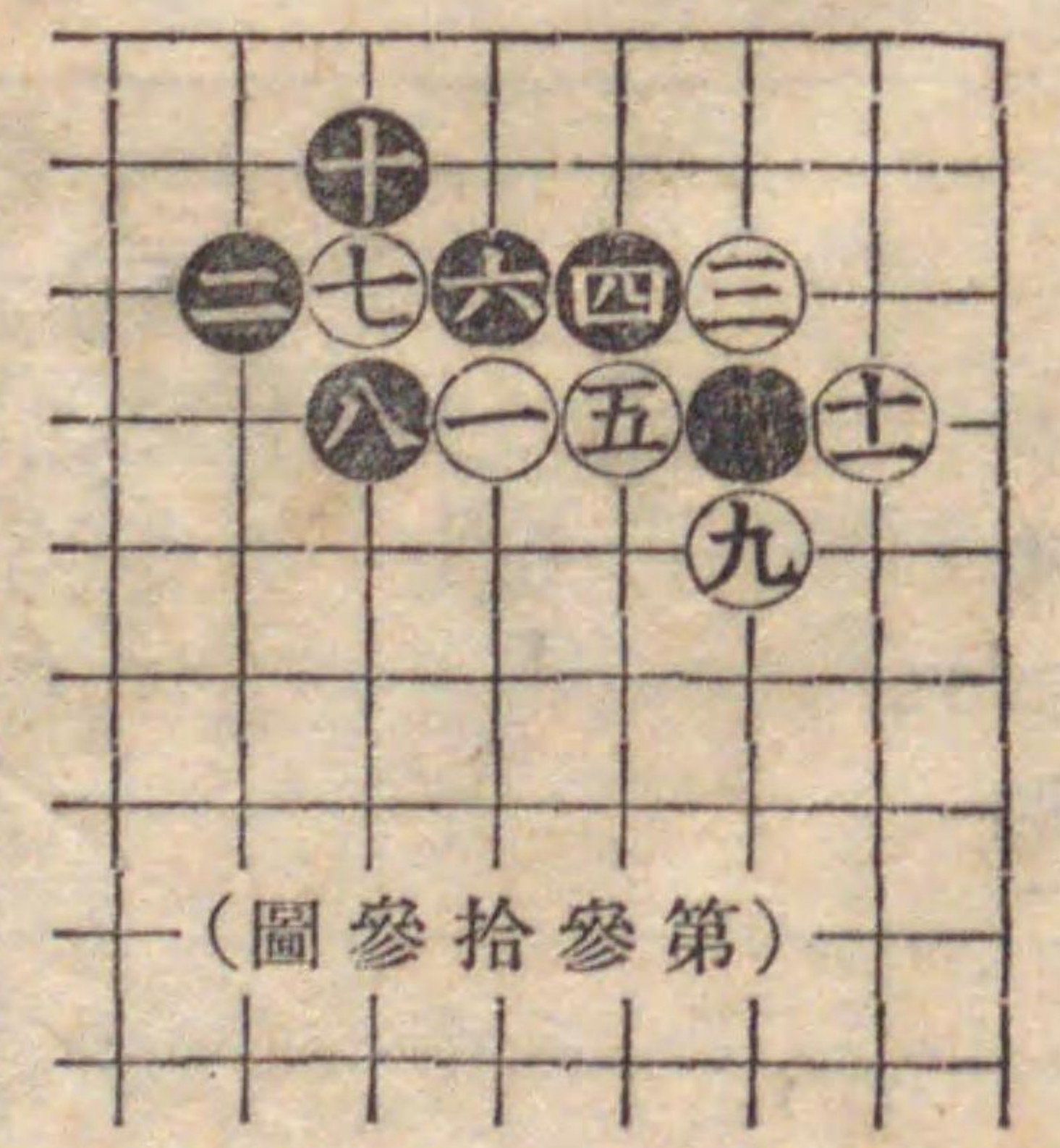
形勢白不利



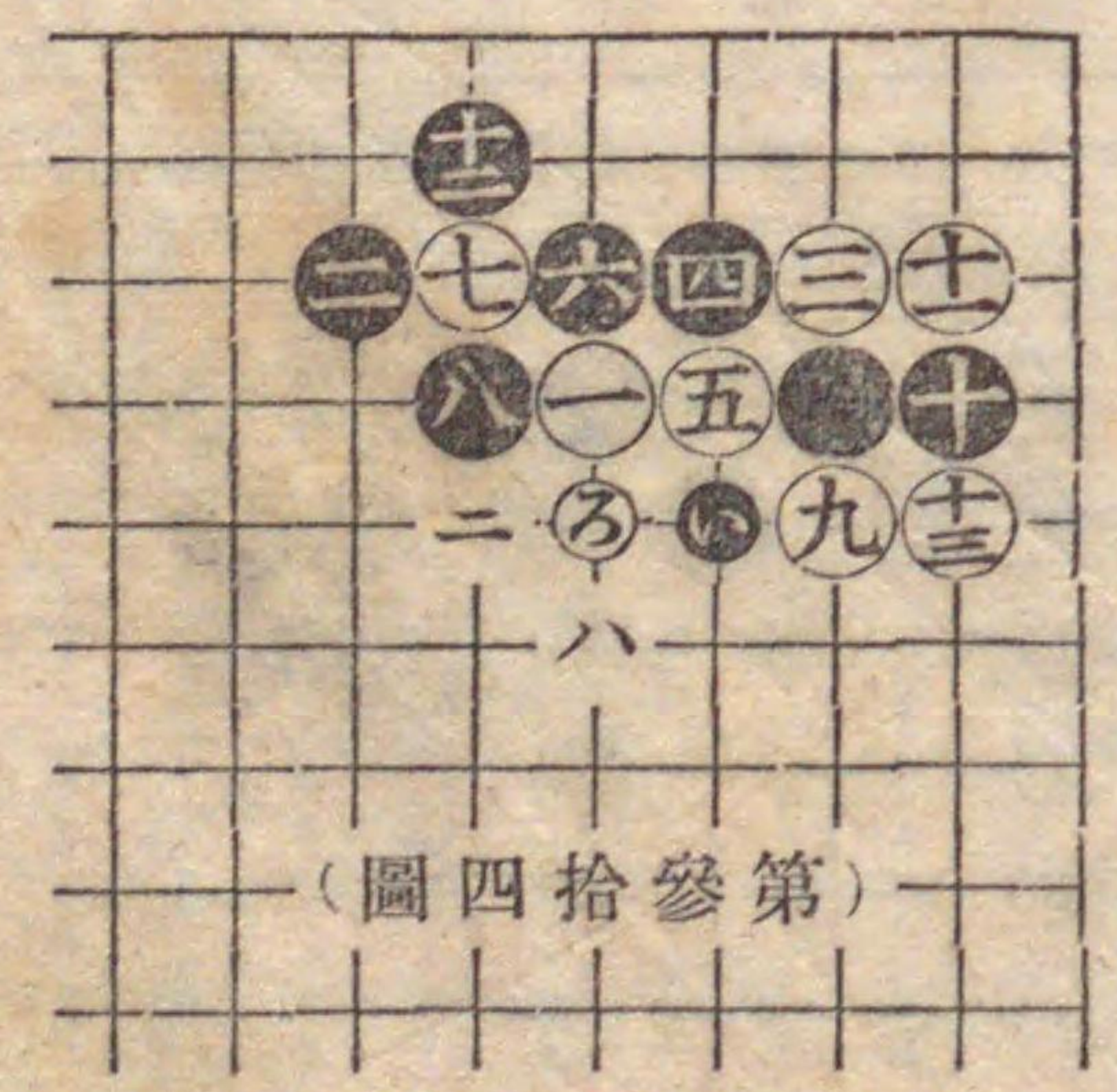
(圖壹拾參第)



(圖貳拾參第)



(圖參拾參第)



(圖四拾參第)



二目ヲ捨テルカ  
三目ニシテ捨ルカ

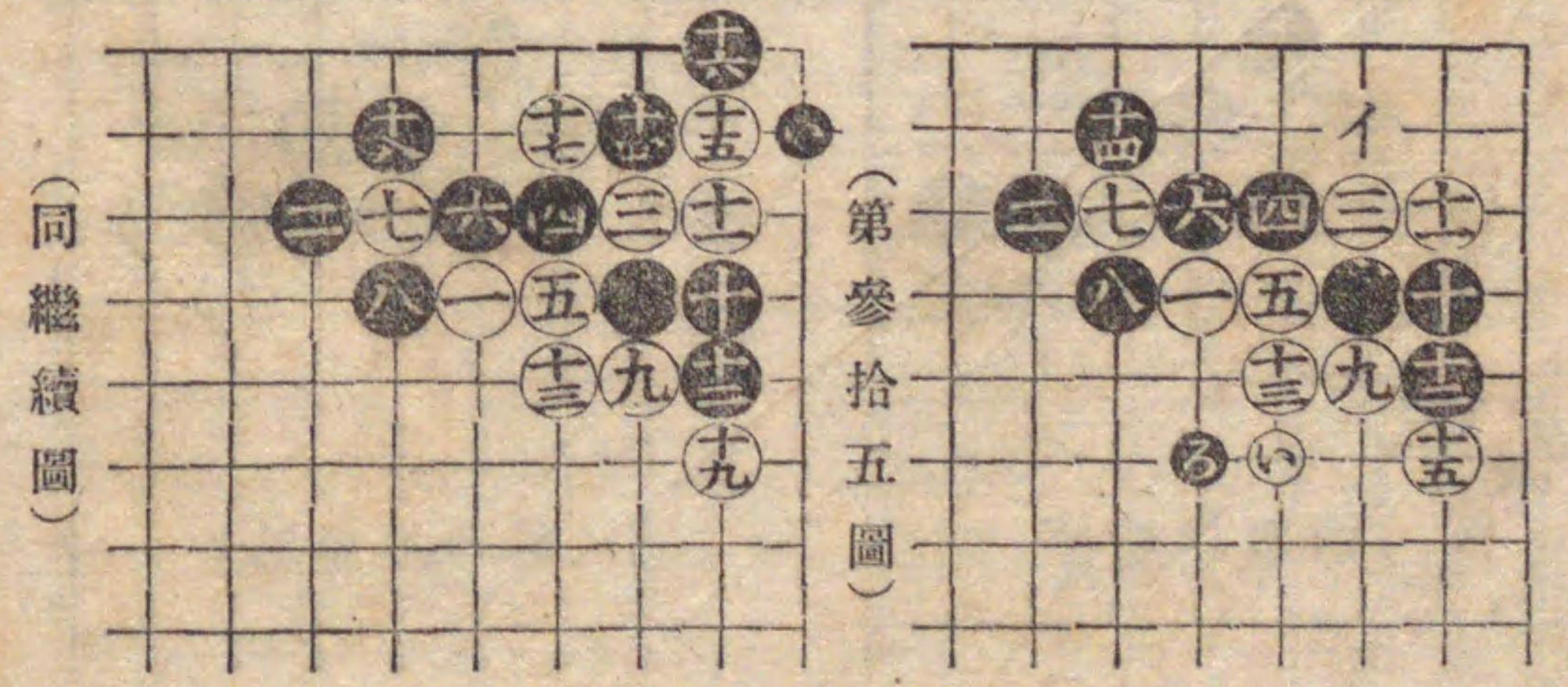
初心者ノ戒

ろノ頂ヲマツル

此劫ノ立方

○(第參拾五圖) 黒は十二の手で更に今一手圖の如く曲つて白に十三と粘がしてから十四と提る様の手段もある、前圖の如く二子で提らせるが利か、或は本圖の如く三子にして捨てるが利かは單に此の一局部のみに就て言ふと、容易に斷じ易からざるものである。  
△註 茲に初學者の爲め注意しおくは、黒十二の際白が十三と堅固に粘ぐ可きて、世間の棋書往々「白十三の手を⑥に掛粘げよ」と教へたものがあるが之は決して打つ可らざる惡手である何となれば忽ち黒に⑦の頂けの一手を利かされ非常に不利を招かねばならぬからである。  
黒十四の手を以つて、或は本圖(イ)の點に縛ねる手段もある、其の變化と應接は次圖に譲る。

○(繼續圖) 前圖黒が白七の一子を提る手を以つて此く十四と隅へ縛ねるのは劫争を開始して、前圖の如く無條件で隅の三子を提られまい、といふ手段である、之に對して白が十五と抑へれば黒は十六と縛返すのである、次て白が十七と截つた機會を利用して十八と白一子を抜き、白をして十九と應ぜしめるがよい、乃て直ちに⑧と縛ねて劫にす可きか、或は保留して他日の機會を待つかは一に黒の任意である。



(第參拾五圖)

(同繼續圖)

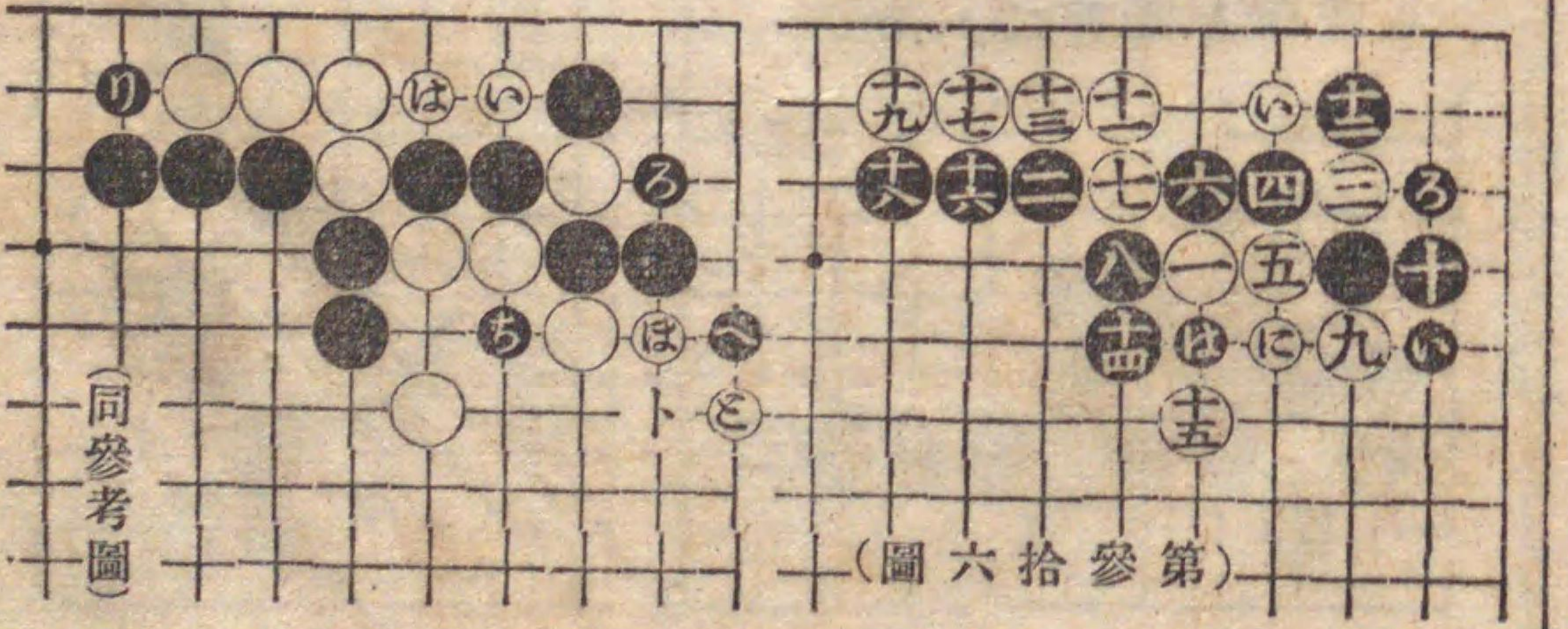
白上下ハ十九  
迄ハ必然ノ手

黒二十ノ手  
際

此打方大  
ニ注意

白十九行ヒサル  
ハカテス  
ちトキル手

○(第參拾六圖) 白が圖の如く十一と下らば、黒は隅の一子を十二と抱へてあくより外に手はない、白十三の時、黒は十四と立つて、先手で八の一子に勢力加をへておく、次て白十五、黒十六、白十七、黒十八、白十九の五着の交換は何れも必然の手である、が若し白が十九と行びる手で隅に向つて⑨と截つて來たならば、黒は次の「參考圖」の如く應接してあげばよい。  
白十九と行びた時黒は二十の手で必ず隅に着手せねばならぬ、若し隅を閉却すると白に⑩と截られて大敗である、乃て黒が二十の手で着手す可き隅の要點は、白九を掬うて⑪と曲るか、⑫と打つて白三の一子を抜いておくか、但しは、⑬と突き出し⑭と粘がして⑮と取るかの三通である。  
△(參考圖) 白が前圖十九の行びを爲さず、自己の勢力の如何をも考へずして、隅の黒に迫つて⑯と截るは無謀である、若し⑰と截らば黒⑱と提り、白⑲と絞り、黒二子を粘ぎ、次て白が右側から⑳と迫つた時、黒は㉑と縛ねてあげばよい、其時白若し㉒と抑へれば黒に㉓と截られて白敗である、若又黒㉔の時白の手が(ト)と一手緩るめば黒に上側を㉕と抑へられて黒同じく敗である。



(圖六拾參第)

(同參考圖)



甲 黒二十ト下ヲ  
曲シハ

乙 黒二十ト一子  
ヲ接カハ

丙 黒二十ト一子  
出シ白一子  
ヲ接カルト  
アル時

白九ト下ツタ  
時白後手

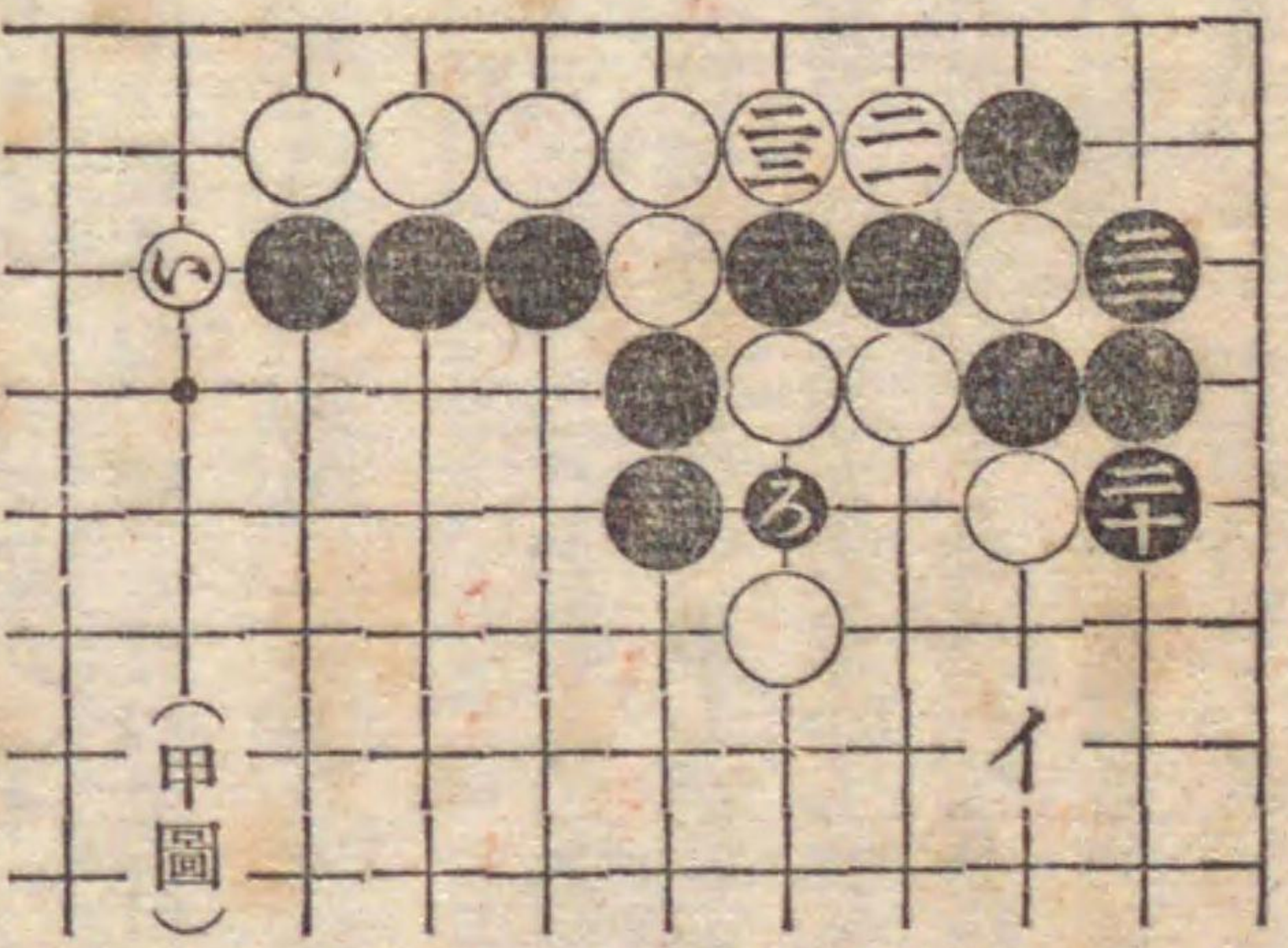
此十七ノ手

甲 白先手  
白單ニ十三トア  
テ、来トハ  
乙 白先手  
單ニ十四トニ子  
ヲ抱ヘル

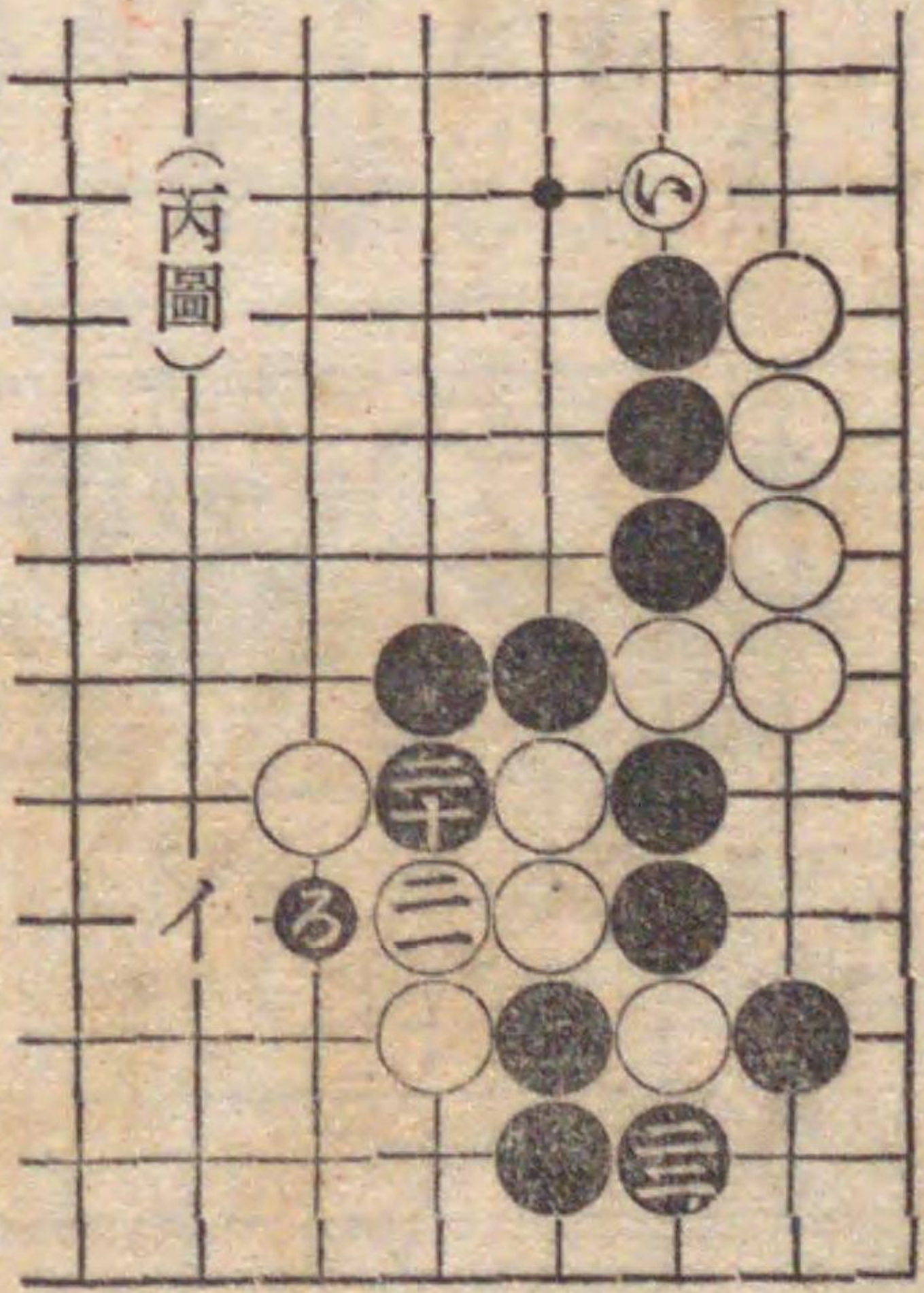
△(第參拾六圖の變化三種)

(甲圖) 乃て黒が二十と下を曲れば、白は二十一、二十三と絞つて二十五の手で㊦と上側を縛ねて右側の白四子を捨てる方針を取るか、或は四子を助けて(イ)と飛ぶかは白の任意である。白二十五の手で㊦と来れば黒は㊧と突出して㊨がよい。若又白が㊩と縛ねず(イ)に飛べば黒は上側㊪の點に行びて白を壓してあげばよい。

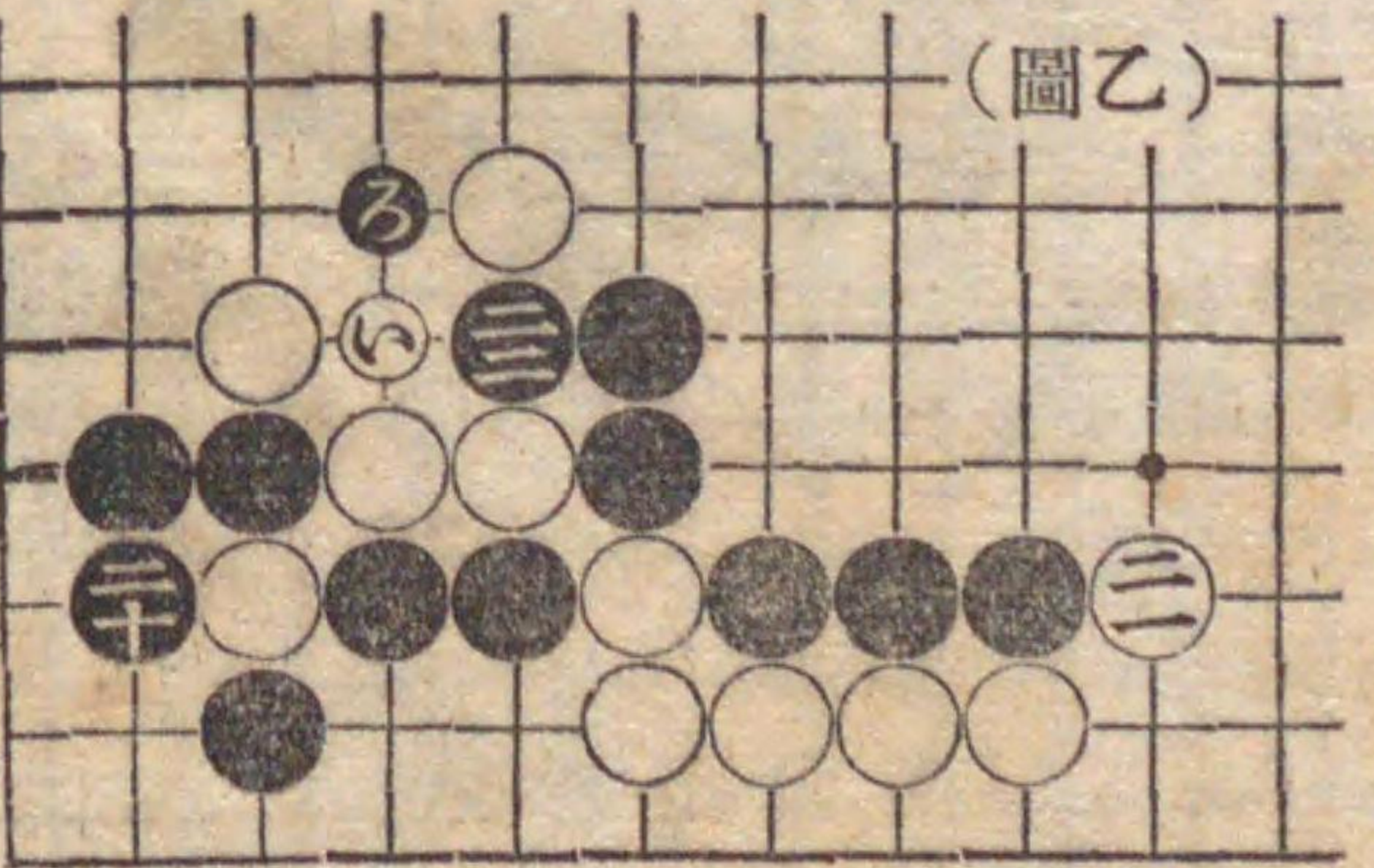
(乙圖) 黒が二十の手で側へ曲らず、單に二十と打つて白一子を抜かば、白は二十一と黒三子の頭を縛ねてあげばよい。其の時黒は二十二と突き出し、白㊫の時㊬と截つて㊭手であるが、白は恐らく今急に㊮とは粘



(甲圖)



(丙圖)



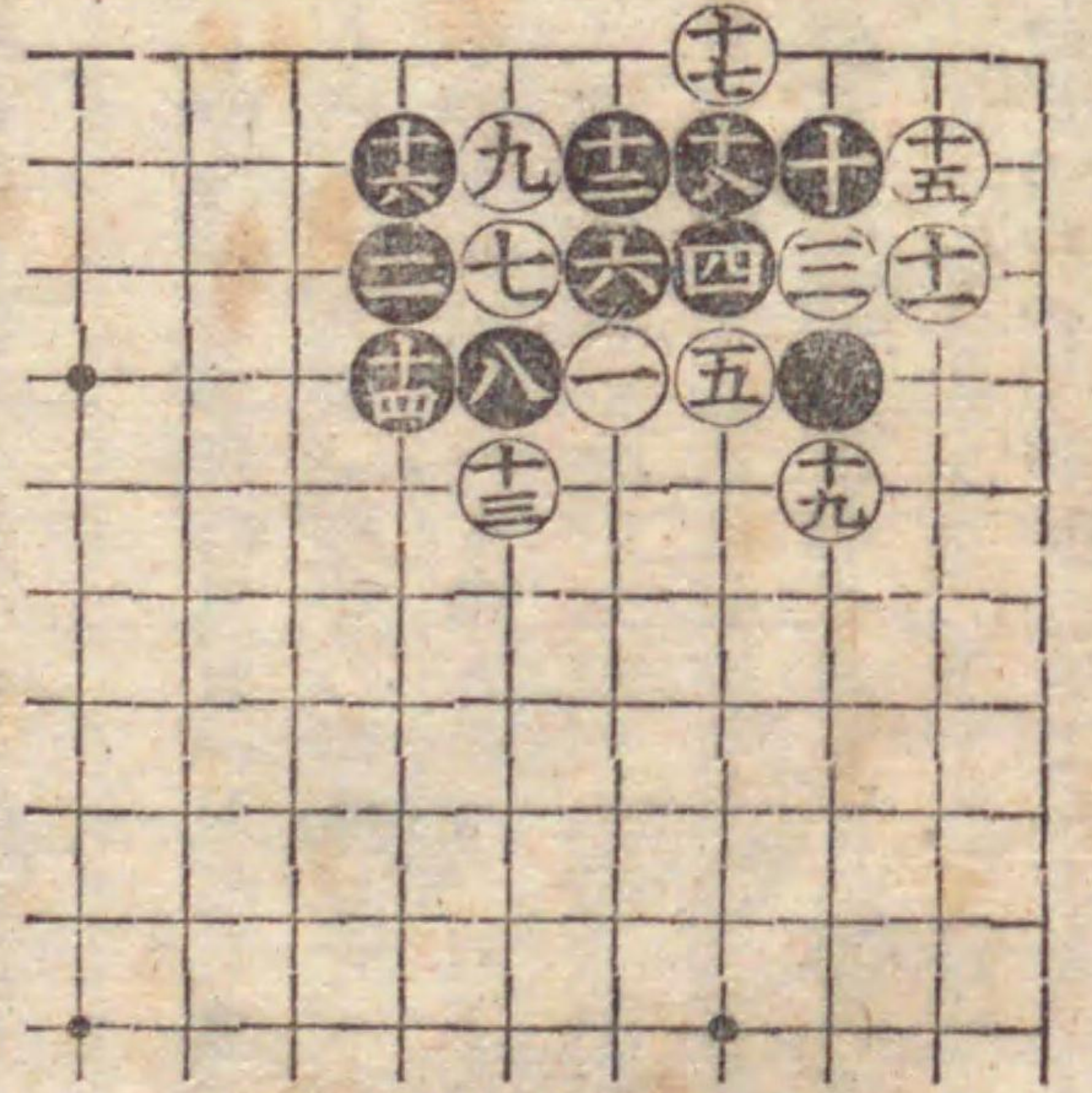
(乙圖)

がぬ、他日の機會を俟つ爲め其の儘捨て、㊯手であらう。  
(丙圖) 前乙圖の様に運んで黒二十二と突出し白に捨てゝかれるを不利と考ふる時は黒は本圖の如く先づ二十と突出し二十一と粘がして而る後二十二と白一子を抜いて㊰もよい。此の手は次で白が㊱に縛ねれば黒は㊲に截る若又白(イ)に粘がば黒は㊳の點に行びるといふ兩方を見合ふ手になる。

○(第參拾七圖) 白が本圖の如く九と下つた時、黒十のアテ、白十一の下り、黒十二の押しは確定の手である、次で白は十三とアテル手を以つて單に十九の點から取つて㊴事もある、其の變化は次の甲、乙、兩圖を以つて示す通りである。

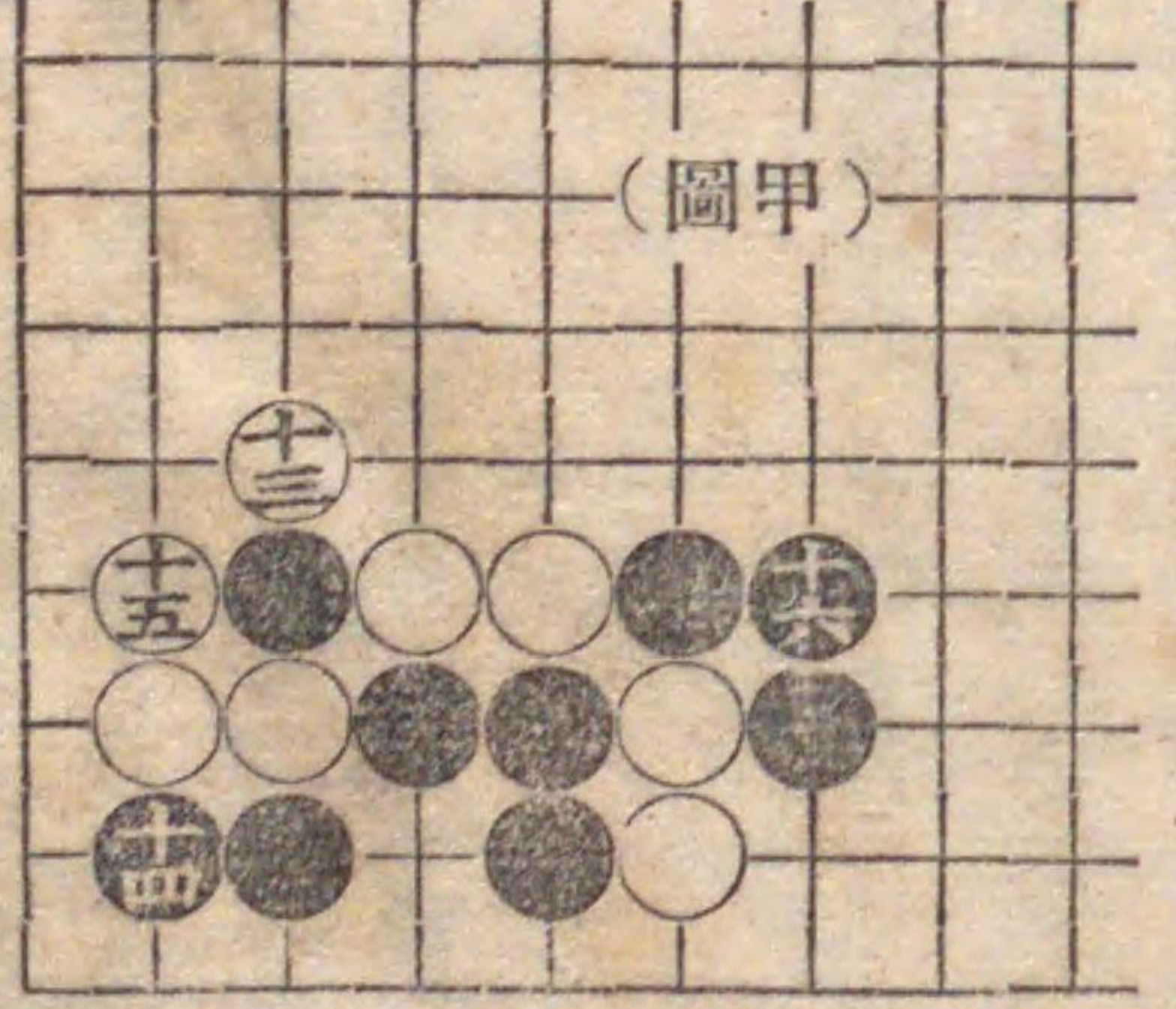
白十五の曲りに對する黒十六の押しも命令手である、白十七は先手を以て黒の眼形を奪ふ手である、本圖の結果を此の局部に就て見れば先々互角である、が但白後手である。

(甲圖) 白が單に十三とアテ、來れば、黒は十四と押し、白に十五と提らせてゐいて十六と堅く粘ぐ手であるが是は双方共治つて何等の味は残らぬ。

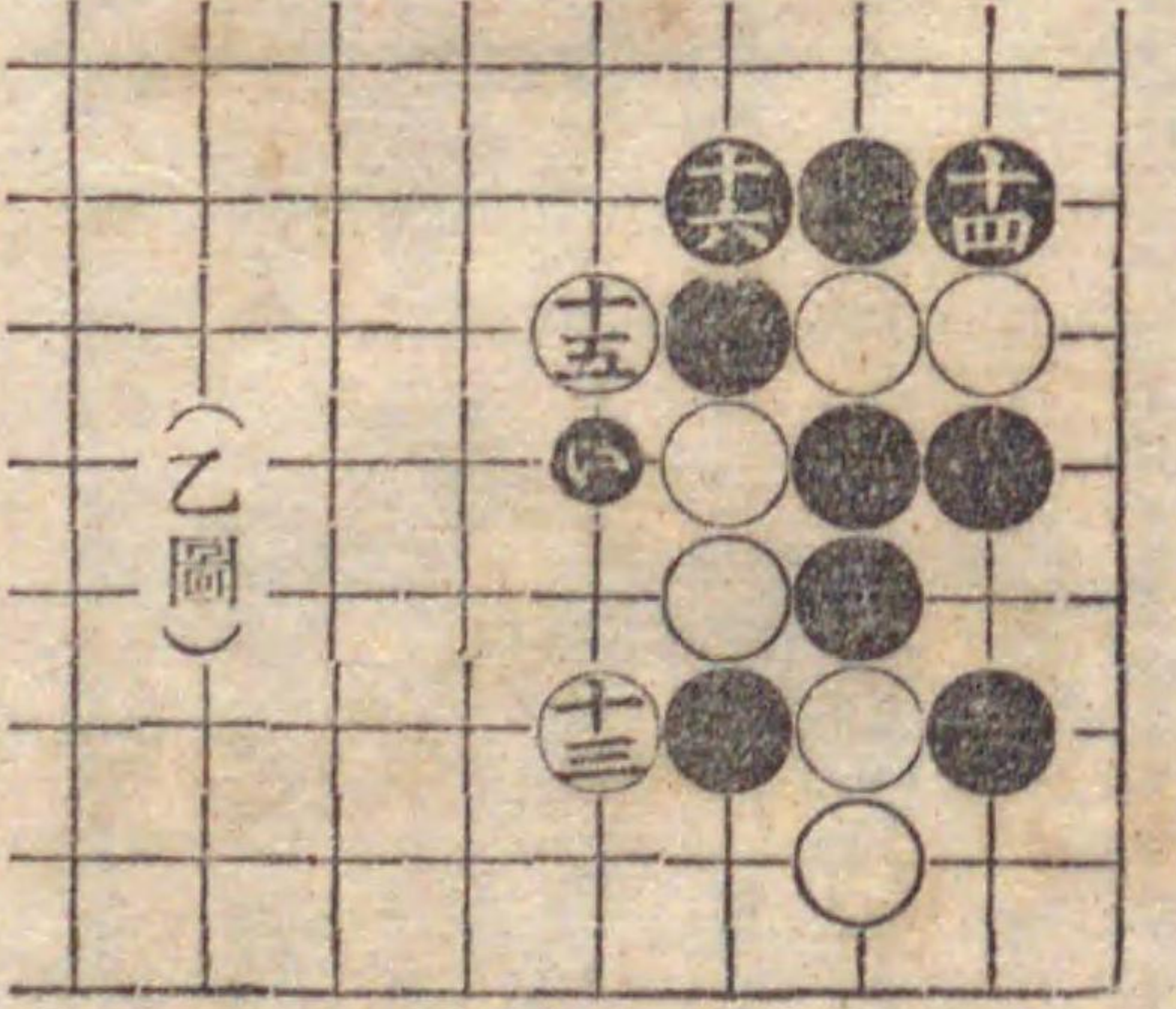


(第參拾七圖)

(乙圖) 或は黒は單に十四と二子を抱へてゐてもよい、此くは白から十五のアテを一子利かされるが其代り㊽と截る味が残つて居る。(此の甲乙兩變化は孰れも白先手である。)



(圖甲)



(乙圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~


時 黒下カハ八ノ

初學者者ノタメ

イト黒カ下ルノ
不利ヲ示ス

イト夾ム手

○(第參拾八圖) 黒が八の手を以つて此く下からアテタ時、白九と隅に向つて黒の一子に迫るのは征の不利なる時、若くは十と粘ぐ手の面白くない時此く九と打つ其の際黒は圖の如く十と打つて白一子を抜く事を忘れてはならぬ、本圖の結果は手順こそ違へ前の(第卅三圖)と同一である、萬一黒が誤つて十の手を以つて十二の點に下ると少からぬ不利益を蒙らねばならぬ、今初學者のため特に其の結果と不利益なる理由とを参考圖として示さう。

△(参考天圖) 前圖白に九とアテられた時、黒が本圖の如く○と隅へ下ると、白に○と粘がれ、黒○と曲つて截を防いだ時、白に○と押され、黒○の時白に○と迫られて○と隅へ一子抱へておかねばならぬ。更に之を解剖して見ると、

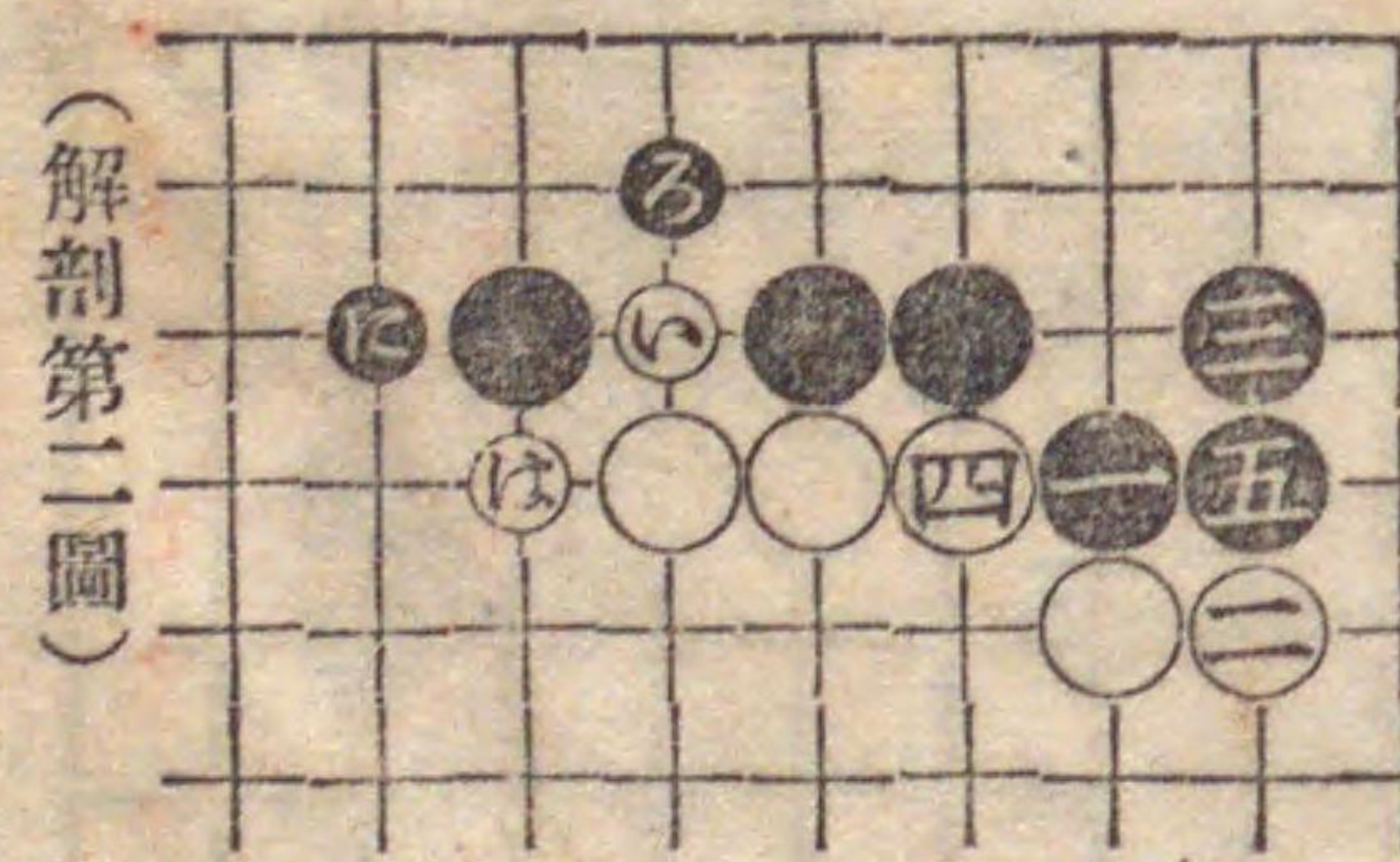
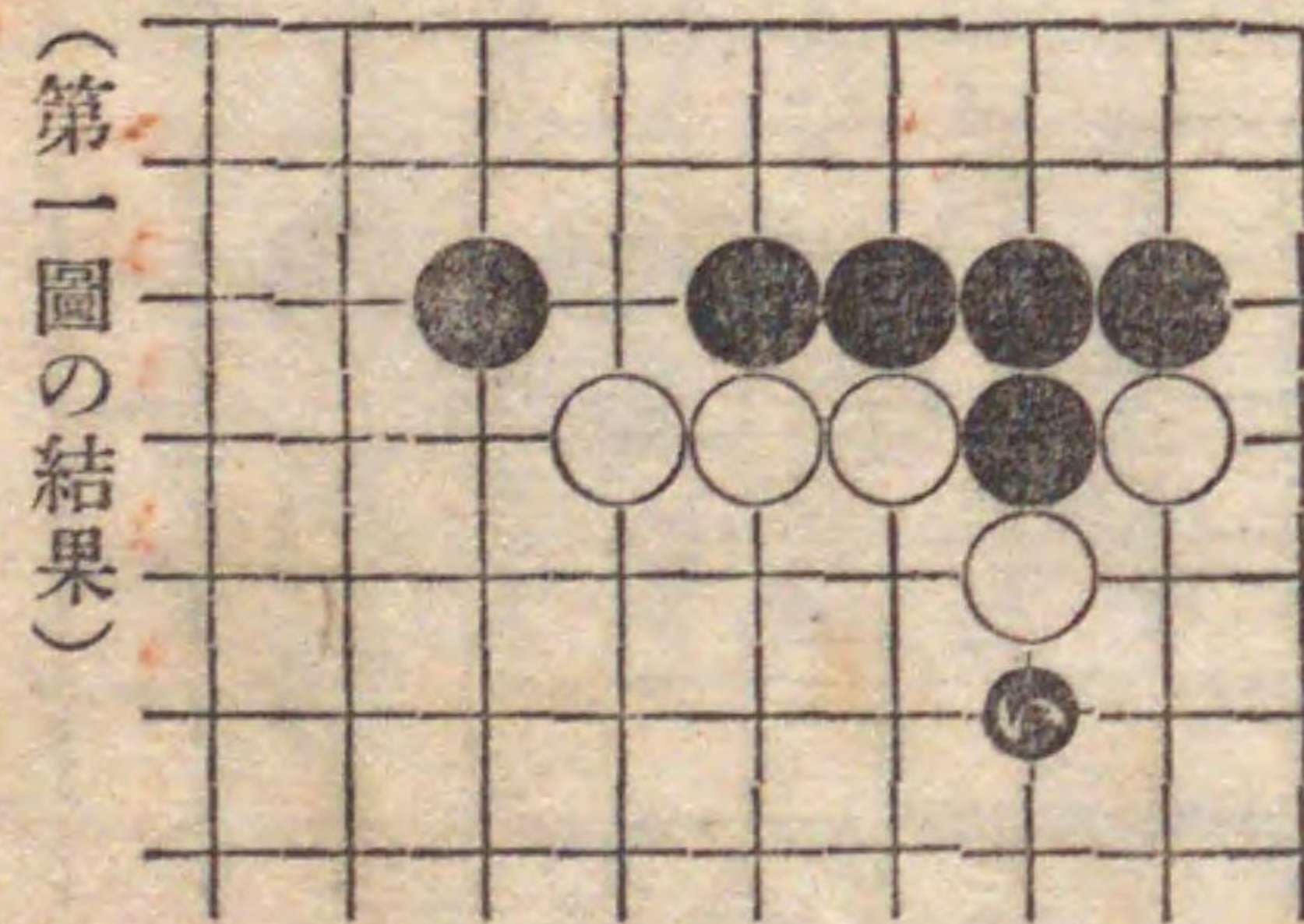
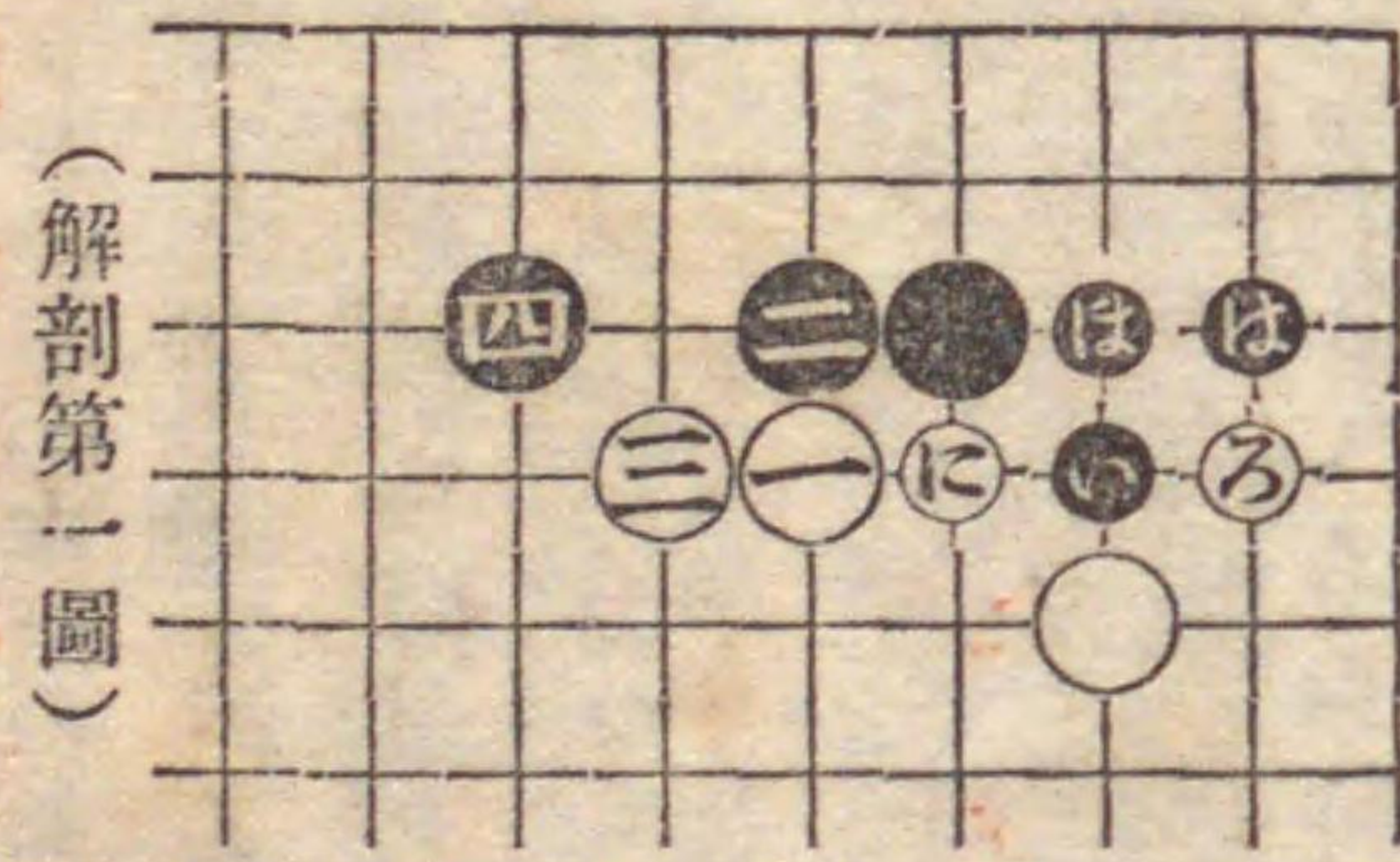
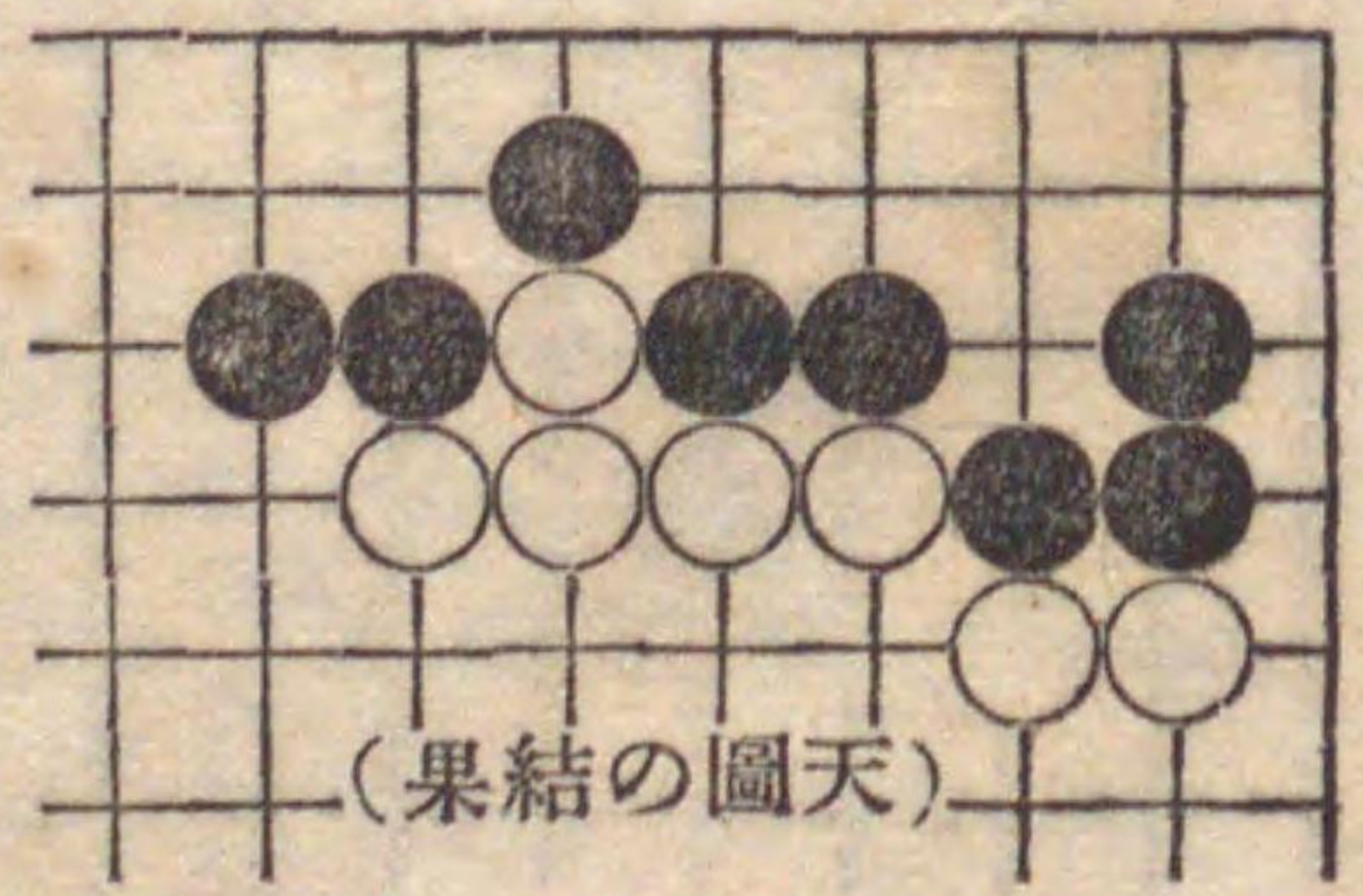
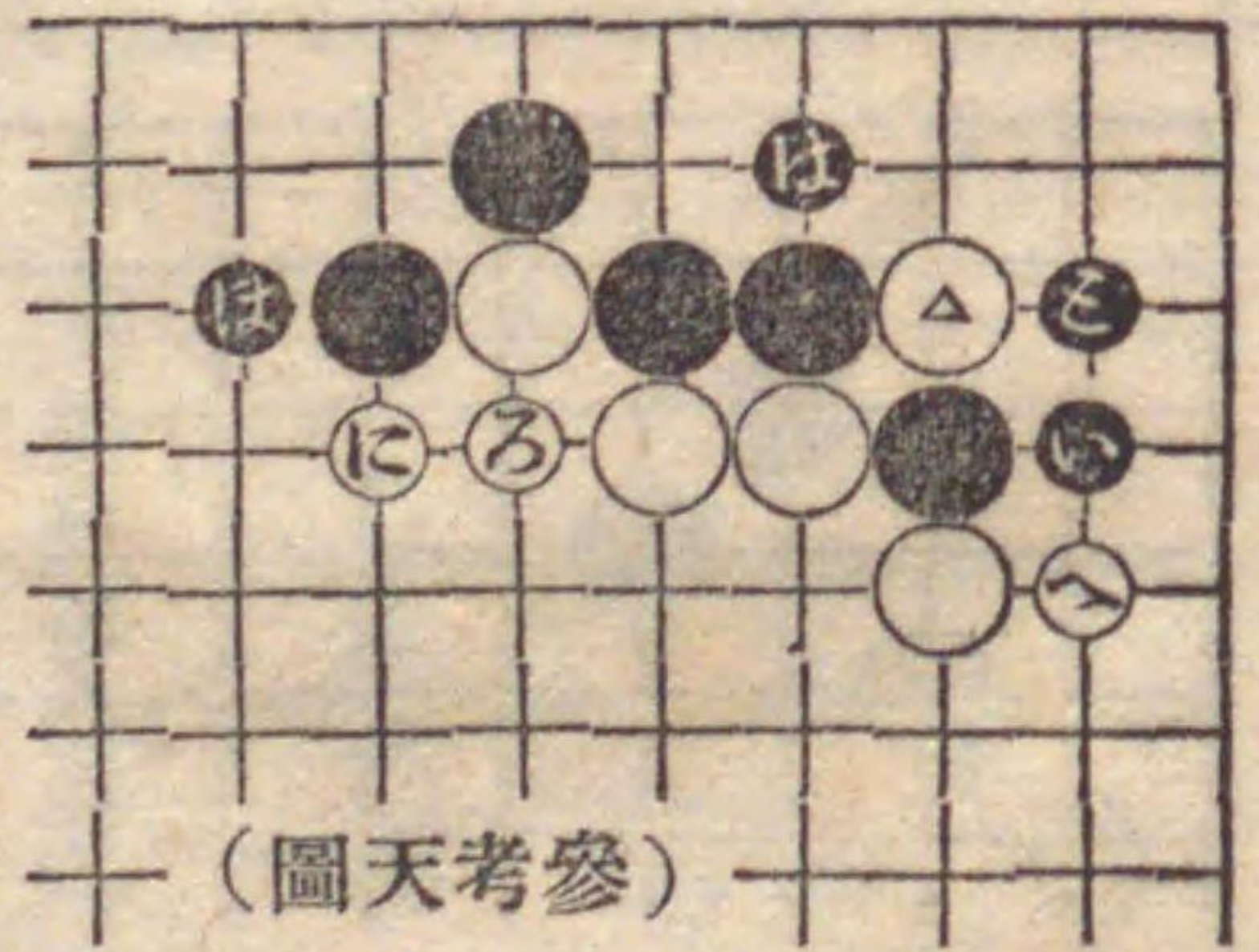
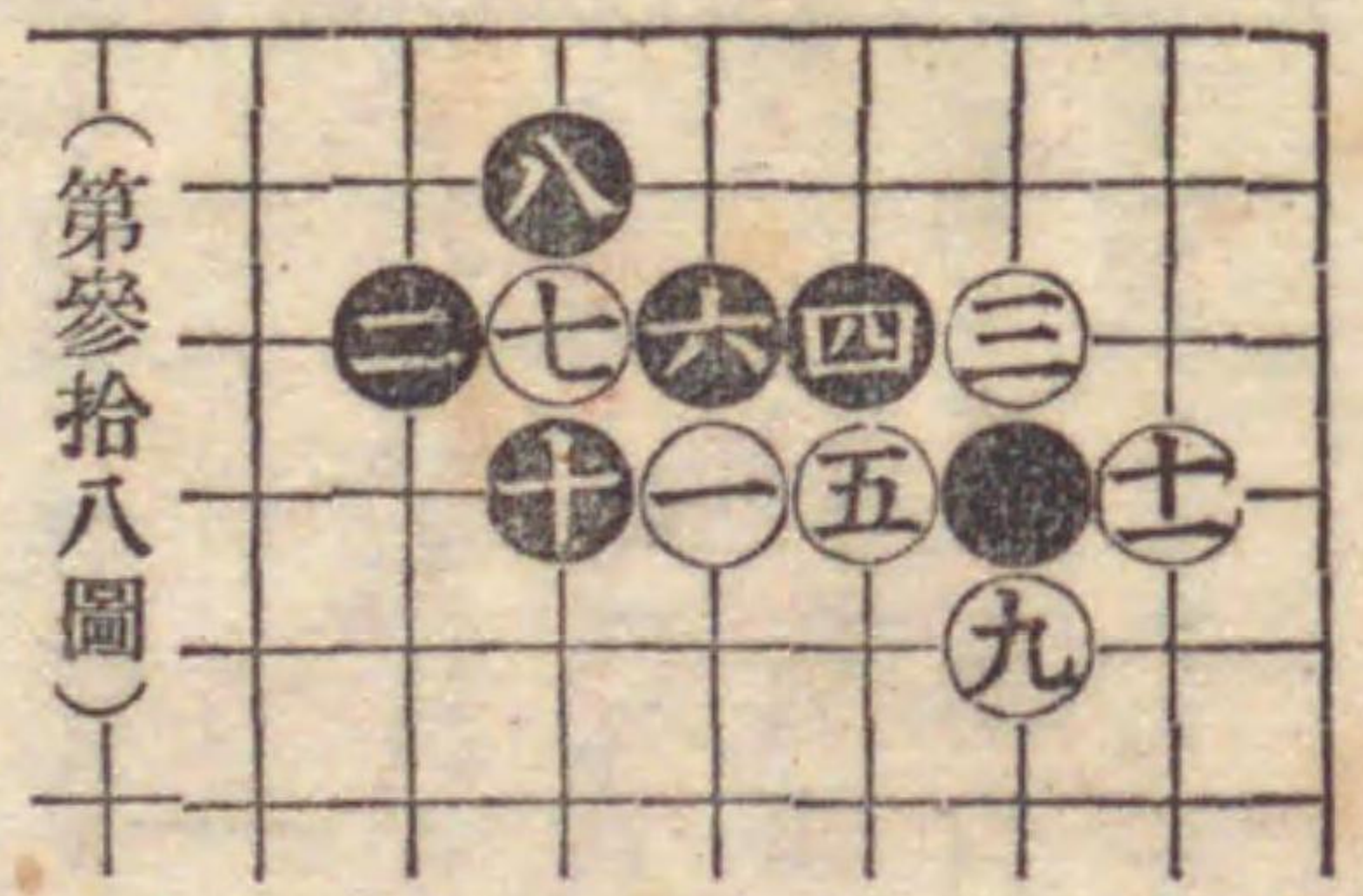
△(解剖第一圖) の如き場合に目外しめいげしの白から小目こめの黒を一と歴し黒二白三黒四の交換が遂げられてあるものと假定して、サテ此かる場合に黒は、(局勢の關係を考へた上でなくては)容易に○の尖頂は出來ぬ譯であるが、其を此く○と尖頂けたものとして、以下白○黒○白○黒○となり、其の結果としては、(同結果圖)の如く黒から○と夾む利益が保留されてあるに、反して(参考天圖)の結果圖を見れば外面に白の長壁を築かれ黒からは何等策を施す可き間隙が存して居ない、此の二つの結果圖を比較して見ると、(参考天圖)を以つて示した黒○の下りの不利なる理由は自から判明するであらう。

(注意)参考天圖の結果に於ては、天圖の△印白と黒○との二子を相殺したものと見て除いてある。

イト尖頂ヲ早ク
行クハ不利

□(解剖第一圖)の尖頂けを早く行くの不利なる理由は次號研究餘論に述べ可し)

△(解剖第二圖) 黒の「参考天圖」の結果は恰も此くの如き手順に運んだのと同一である、といふ其の手順の不合理を示したのである、即ち容易に打つ可からざる尖頂の一を打ち、更に白四に對して不用の五のダメヅマリを打つて寸毫も味の残らぬ結果になるから此の處に於て黒は二重の不利を犯して居る道理になるのである。



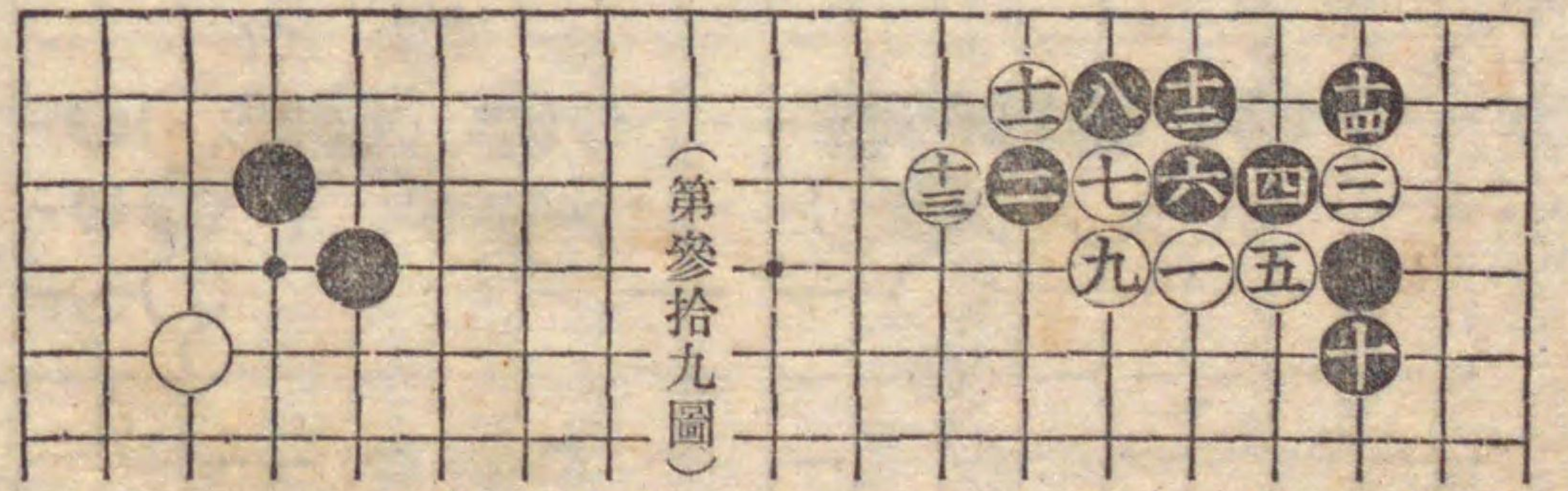
斯く白カ打々
得る場合

此劫立方
味又こ

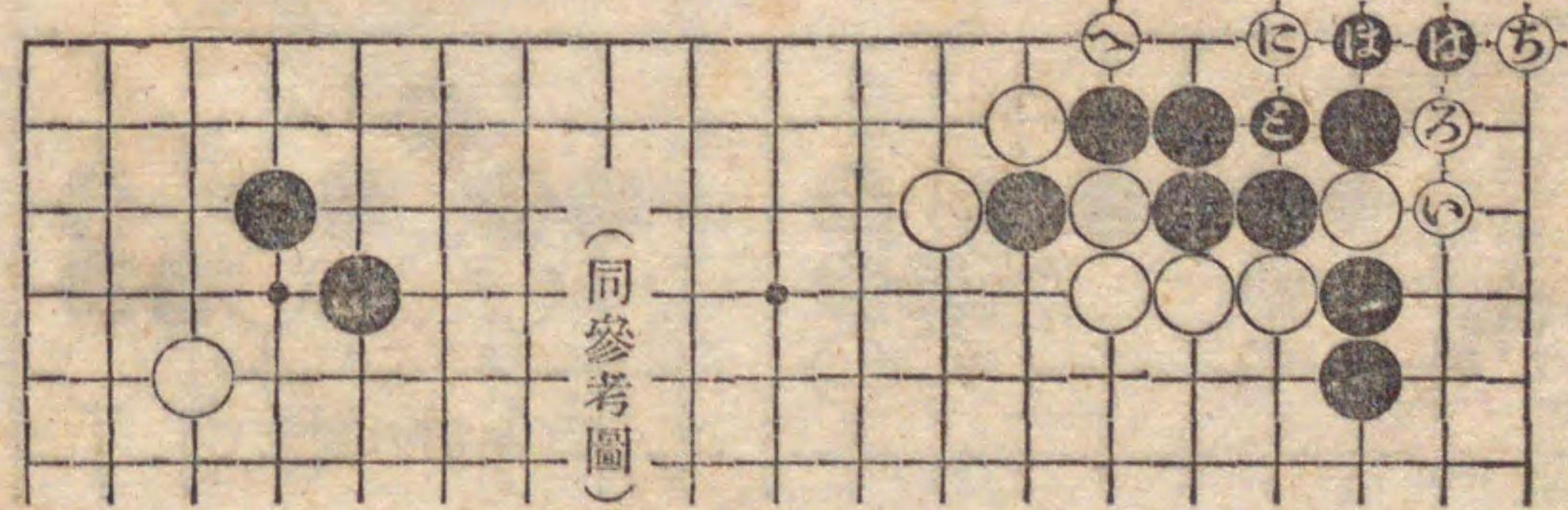
○(第參拾九圖) 黒八と下からアテた時白が本圖の如く九と粘いだならば、黒は十と右側に向つて立つがよい、次で白十一と抑へ、黒は十二と截を防ぎ、白が十三と打つて黒二の一子を征とした時、黒は隅に向つて十四とアテ、おけばよい。

此の手順に白が運ぶ必要條件は、白が十三と打つて黒二を征に提り得る場合でなくてはならぬ、若し左下方面に黒の布石があつて、二の一子が征にかゝらぬ時は、白はヤハリ前圖の如く九の手で十の點に打つより外に致し方はない。

△(參考圖) 前圖の後に於て白は機を見て○と行びる事もある、其の時黒が○の點に應ずるものとしても尙多少右側方面に味が残るのであるが、白○の時萬一黒が手扱すると白○黒○白○黒○白○黒○となつて、白から○と劫に導かれる手が出来る事を心得ておかねばならぬ。



(第參拾九圖)



(同參考圖)

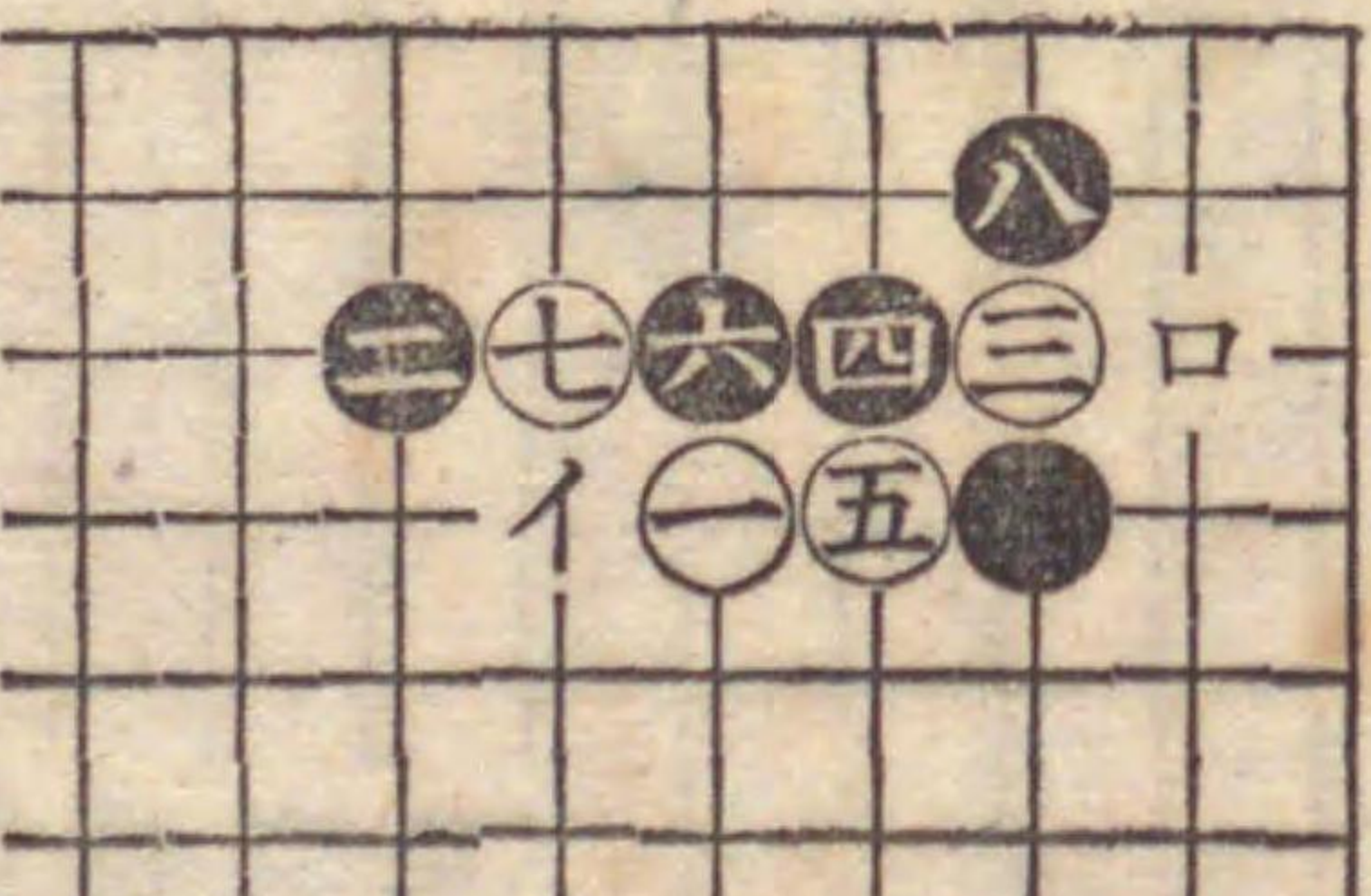
白九ノ手二種

互角
九ト下ルハ不利

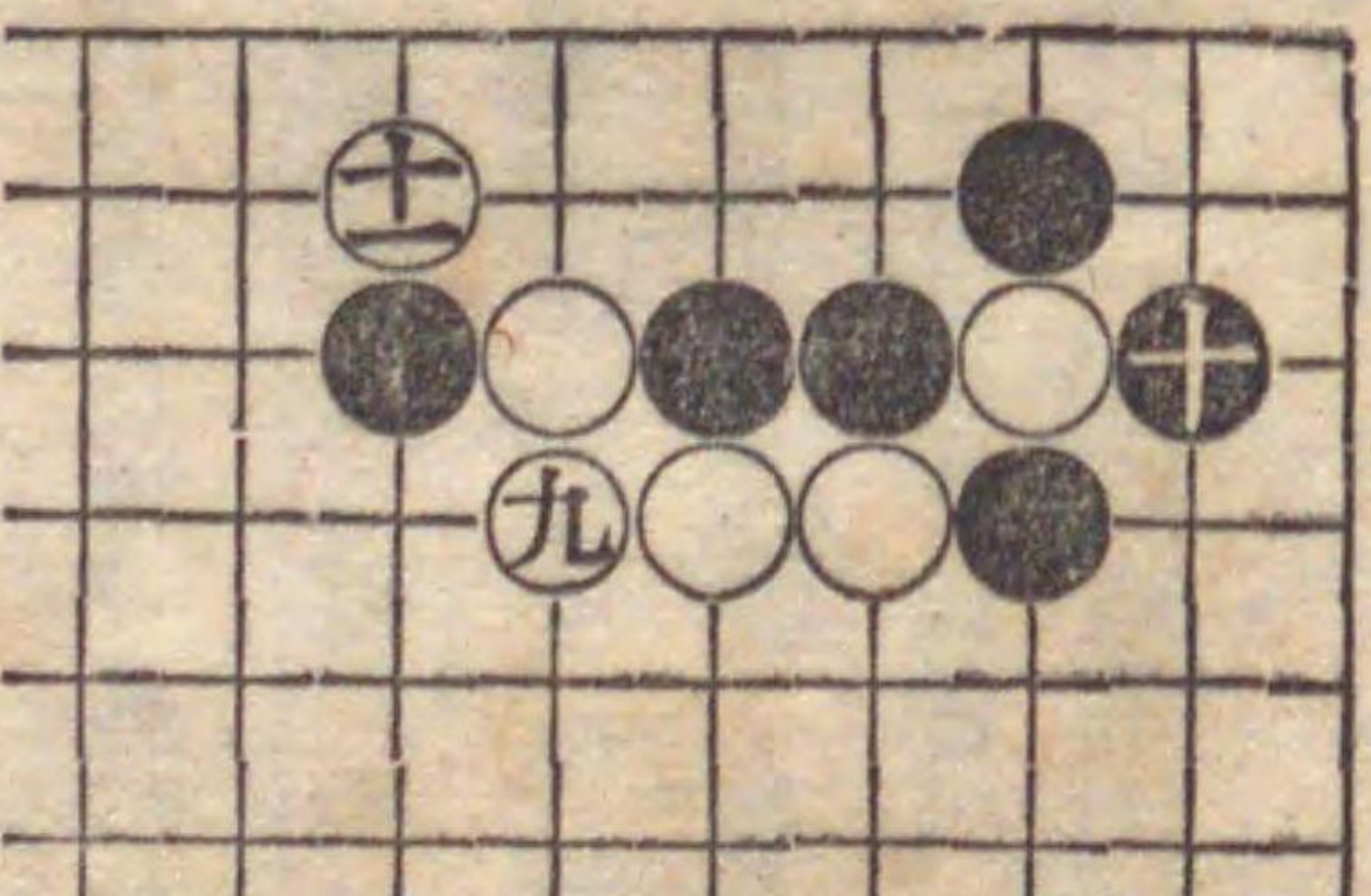
○(四拾圖) 黒が八、と隅へ縛ねた時、白は(イ)と粘ぐ手と、(ロ)と行びる手と二通りの應接がある。

△(繼續甲圖) 白が此く九と粘げば黒は隅の一子を十と打抜いておくがよい、其の時白は十一と打つて左方の白一子を浮かす手順である、此の振替りは此の一局部に就いては互角である。

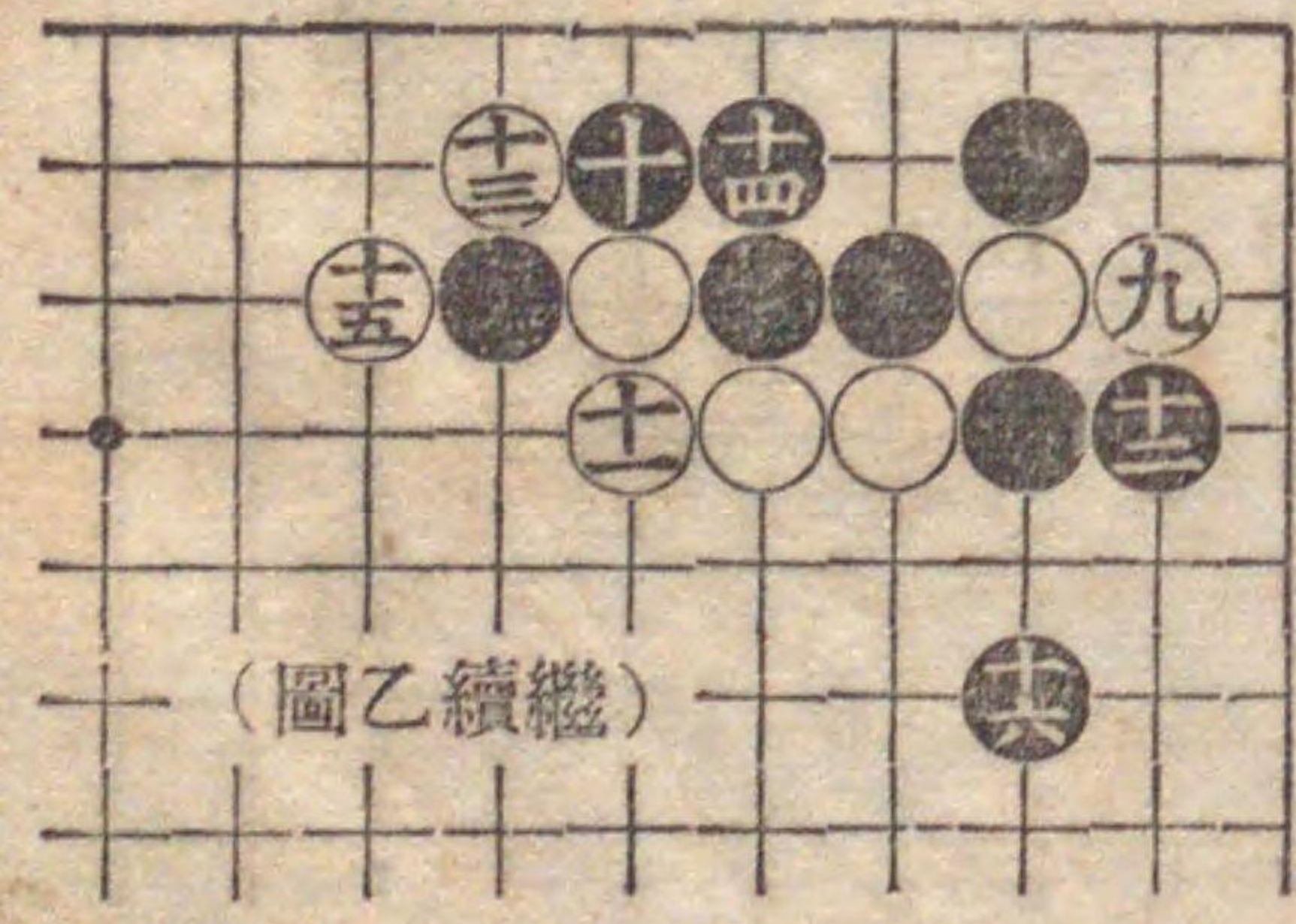
△(繼續乙圖) 白が此く九と下るのは少しく不利である、何となれば、此く九と下つた結果、黒に十と下からアテられ十一の粘を餘義なくせしめられ、十二と抑へられ、次で白十三、黒十四、白十五の必然の交換を遂げたる後黒十六と飛ばるゝに至つて、之を前の「第參拾九圖の參考圖」と比較するに、黒に取りて隅に何等の餘韻が存して居ないのみならず、黒は前參考圖に比して十六の飛は少しくハタライて居る道理である。して見ると此く黒白の勢力に多少の消長を來したのは白九の一子に基く不利と言はなければならぬ。



(圖拾四第)



(圖甲續繼)



(圖乙續繼)

白九場合ニ
手

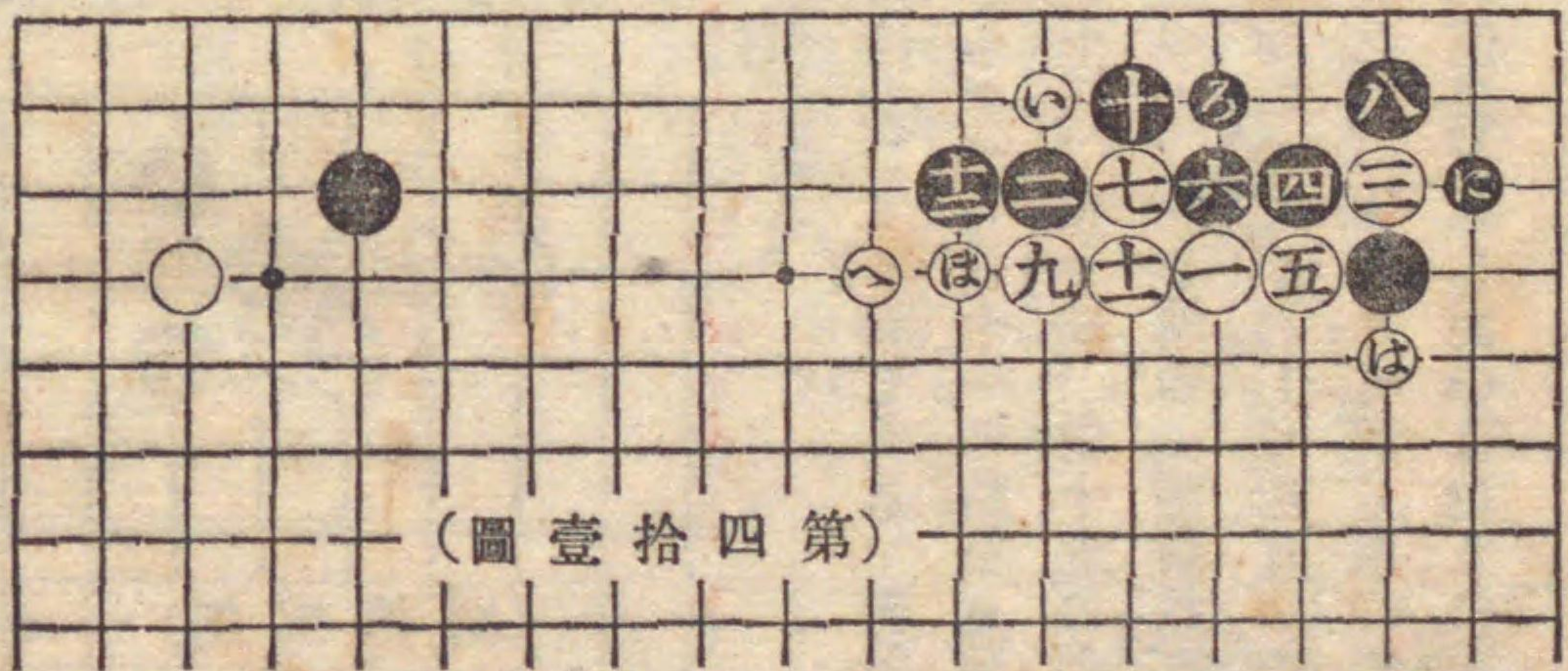
必然、手順

へ、流

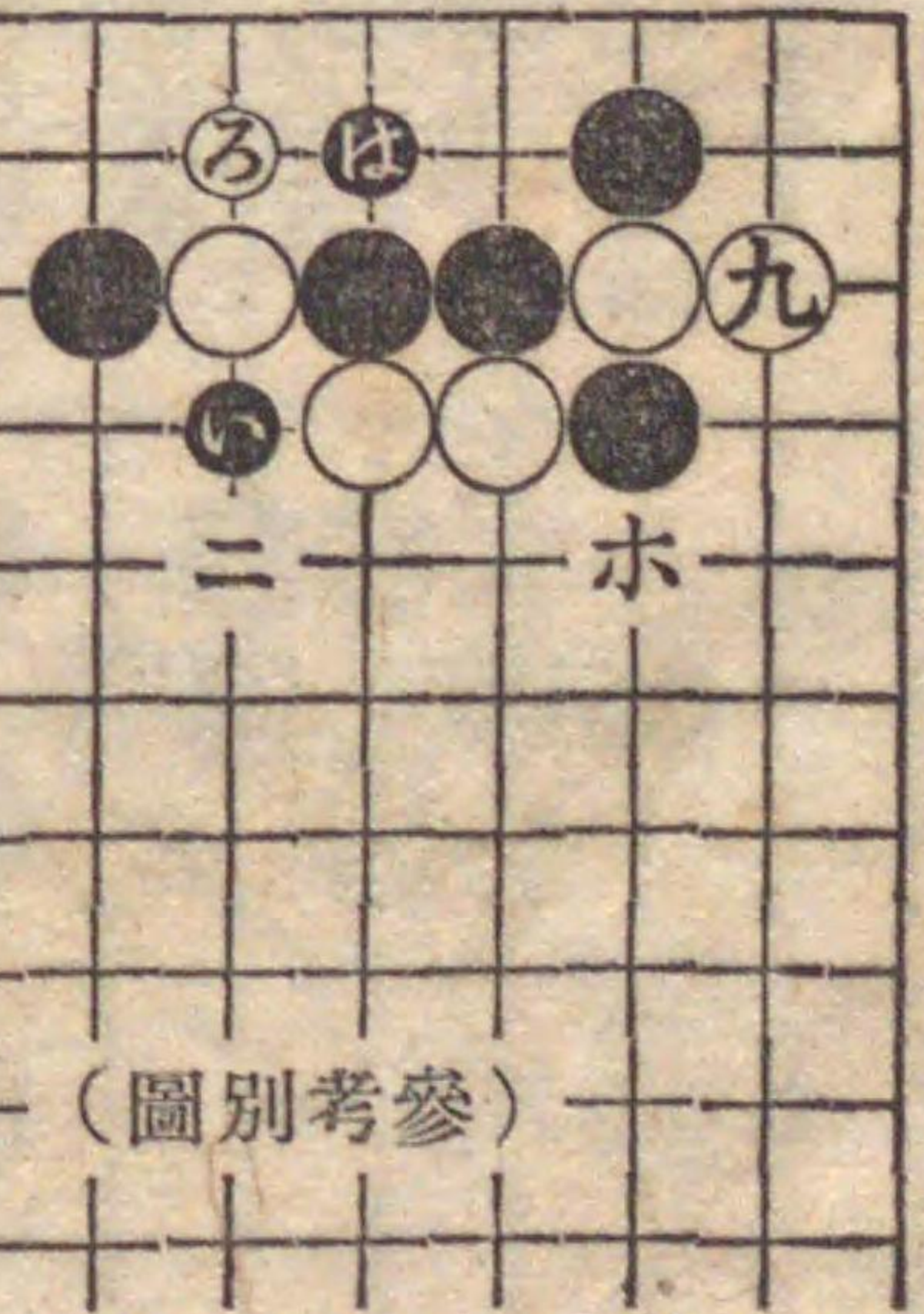
別図

九ト下ツタ時
イト上カシ
截ツタナラバ

○(第四拾壹圖) 場合によつては白は本圖の如く九と上から緯ねる手段もある、其の際黒十、白十一、黒十二の交換は必然の手順として、次で白は①と截り黒を②と粘がせておいて、③のアテを利かした後④の押しを利かさうか、或は⑤の飛を利かさうかといふ手で、左上の布石が圖の如き低き位置にある時、右上の黒を此く低く這はして勢力重複せしめやうといふ様な策戦のある時に白の執る手段の一つと見ればよい。(白は自己の長壁を利用せんとする策を含む)



(圖 壹 拾 四 第)



(圖 別 考 參)

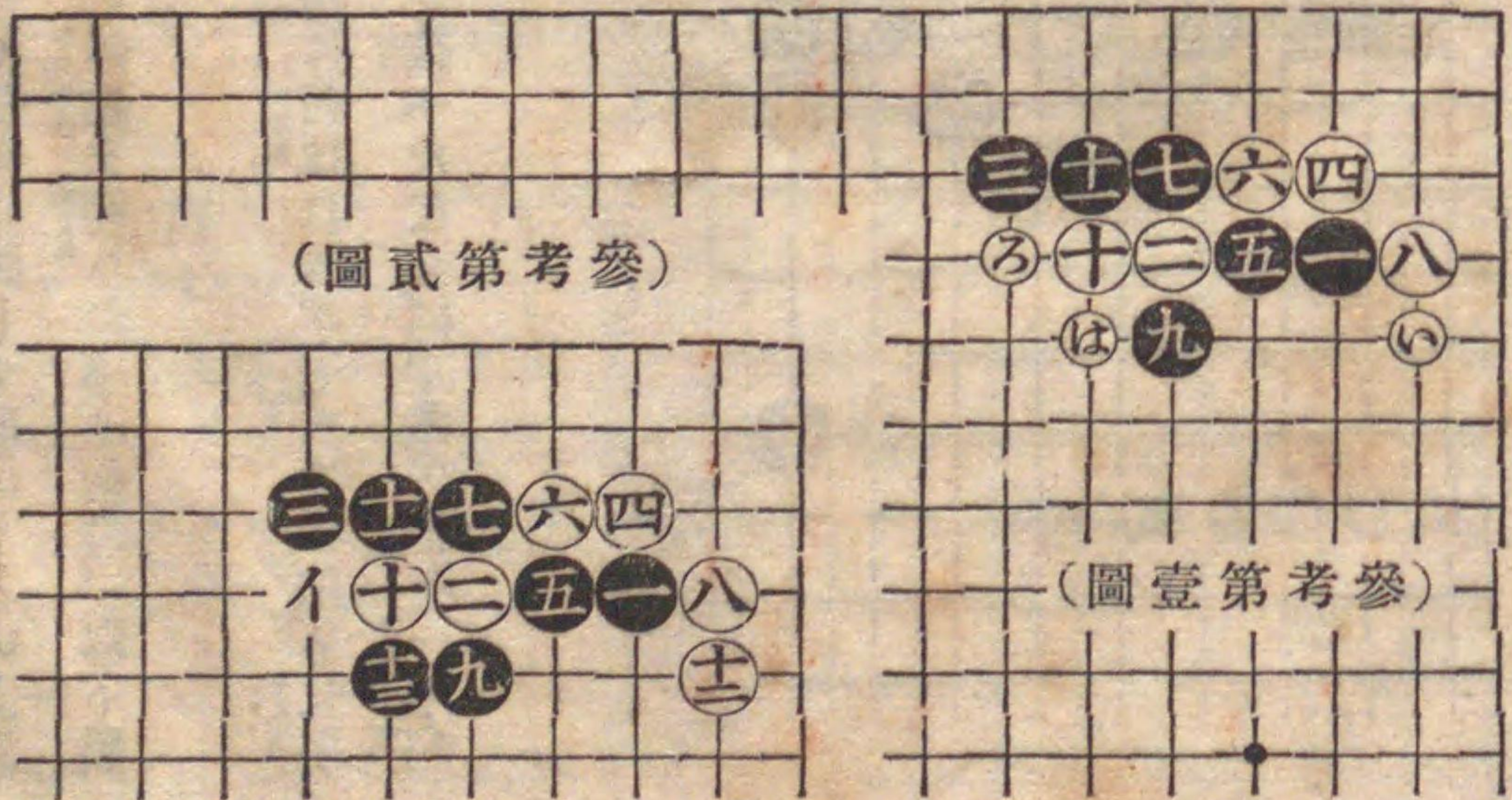
△(參考別圖) 第四拾圖の變化中、白九と下つた時、黒が若し①と上から截つたならば、白は②と下り黒亦③はと押しあつてよく手になつて、白は次で(ニ)と緯ねやうか單に(ホ)と提らうかといふ前の『第參拾七圖』と同結果に歸するのである。

突当り不利
緯込、定
置、久
九ノ手

注意スキ手

△(參考第壹圖) 白四に對して黒が五とツキアタル手は不利である、でヤハリ前圖の如く六の點に緯込む手に決めておくがよい、以下記す四種は世に行はれて居る形に就き、其の比較的棋理に合つたものを參考として示しておく。
黒五のツキアタリ以下十一に至る黒白相互の應接は必然の手順である、白の十二は、①と行る手と、②と抑へる手と、③と曲る手との三種ある。

本圖で注意す可きは、白八の緯に對して、黒が九の手で④の點に抑ふ可からざる事である、若し誤つて④の點に抑へたならば『參考別圖』の如く支離滅裂の結果を招かねばならぬ。
△(參考第貳圖) 白が十二と打つたのは中邊の二子を捨て、隅の棋子を側へ逸出するのである、黒十三は征の前途の都合によりて、或は(イ)の點から押す可きか、を能く考へねばならぬ、若し何れから打つても征が利かぬ、といふ場合は、最初五とツキアタル手からして考へねばならぬ。



(圖 壹 第 考 參)

(圖 貳 第 考 參)

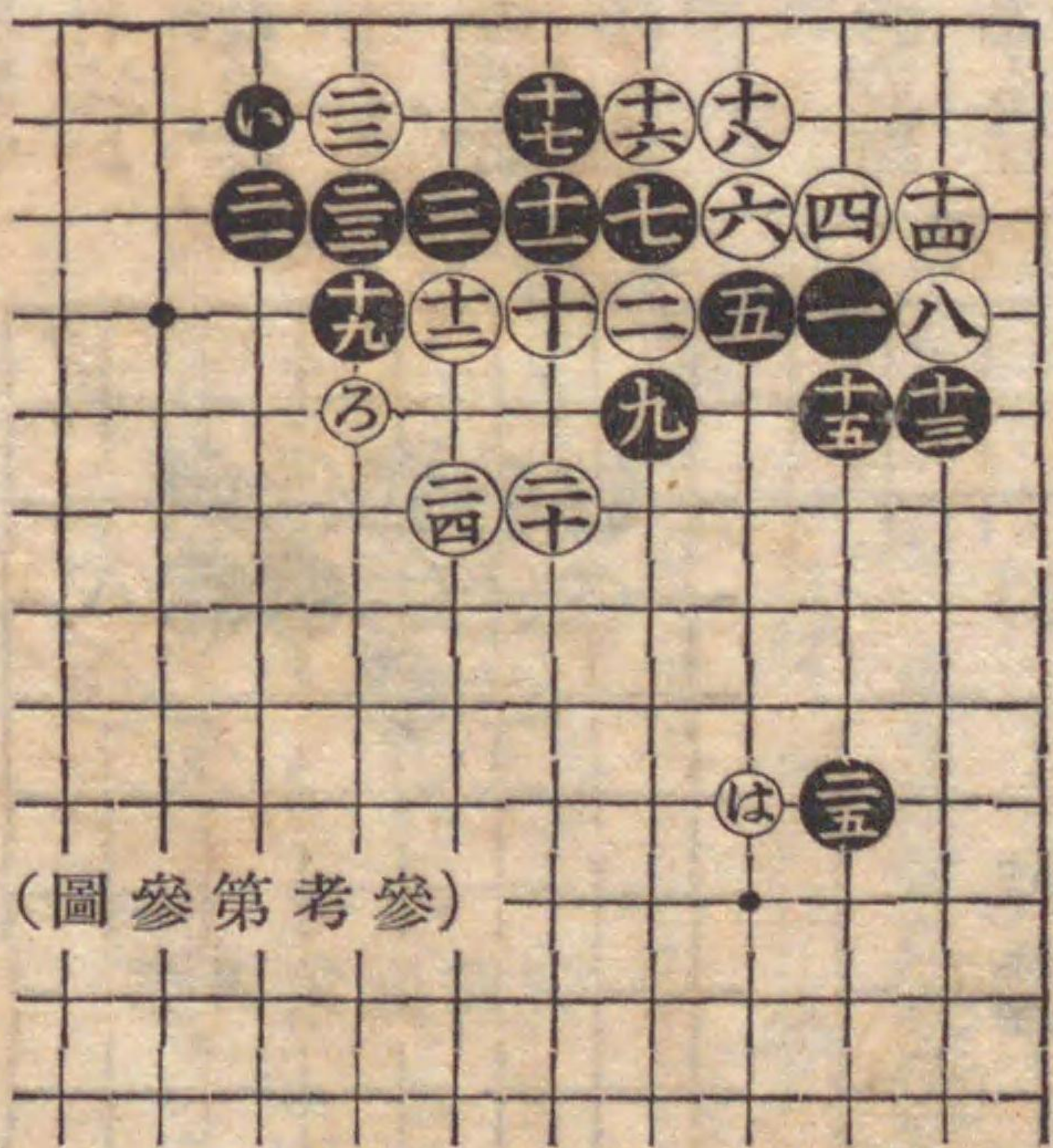
△(参考第參圖) 白十二は前圖と方針を殊にし、中邊の二子を助けて黒を兩断して戦はうといふ意である、其の際黒十三の抑へ、白十四の粘ぎ、及黒が十五と自己の缺點を補うた手は勿論、以下黒二十五に至る迄の相互の應接は必然の手順である、

「註」此の手順中、白の二十二は、着理として此かる形の時、毎に行はれる手である、即ち先手を以つて黒の眼形を奪つておく手で、黒が若し二十三の手で④と抑へたならば、④の綽を一手利かさうといふ意を含んでをる。

黒二十五は④の邊より白に攻らるゝを豫防したのである。

△(参考第四圖) 黒が十二と右に向つて曲る意も、前圖と大略同意味の手である、黒十九は此の方面から白に迫られるを豫防した手である、黒二十一が前圖二十五に比して一路窄く拓いたのは白二十が上から酷しく迫つて居るからである。

要するに以上四圖は、黒五の手の不利なるを以つて之を定石として見る事は出来ぬのである。



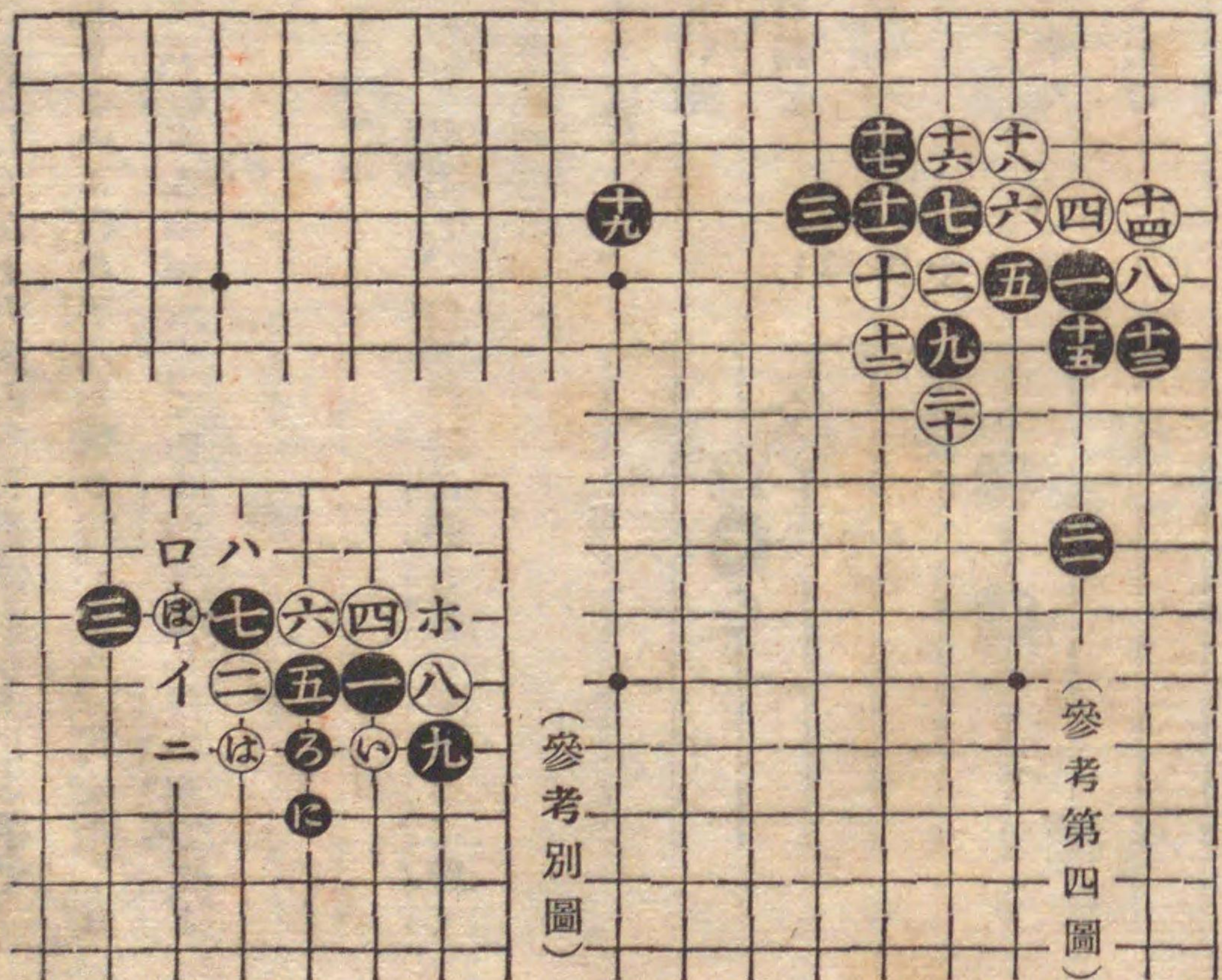
△(参考別圖) 黒誤つて九と抑へなば、白にの手で①と截られ、黒②、白③黒④、の時白に⑤と打たれて非常の不利を蒙らねばならぬ。

(變化)或は白は⑥と截らずに單に⑦とアテるもよい、其の時黒が(イ)と截る可きは言ふ迄もないが、次で白は二の二子を⑧と行びる手と、黒七を(ハ)と抜く手とある。

乃ち白十の手で⑨、黒(イ)白⑩、なれば黒は(ロ)と打つて白⑪の二子を抜くの外なく、其の時白は⑫と截つて一、五の二子を提る。

又白十の手で⑬、黒(イ)白(ハ)なれば黒は⑭の點からアテ、白七の點を粘ぎ、黒が(ニ)と角を粘いだ時、白は(ホ)と粘ぐ順序となる。

即ち如何に變化しても黒が九と抑へた悪手の報償として少なからぬ不利を醸さねばならぬ。



飛 黒五、一間

飛 飛シタ以上
隔ハ手抜
スルカ在、意

白四トホシタ
黒ハ五ト斜
ニ手
四ト尖ト意如何
黒七ノ手三種

○(第四拾貳圖) 黒が五の手で此く一間飛するのの主として左上方面の布石關係から生じる手で、乃ち隅の一子を捨て、専ら上側に大地域を形造くらうといふ様な手段を執る時である、其故此く五と飛んだ以上は白が六の手で如何打たうとも、隅は手抜するのが本意であるが、然し白の來方によりては應接して居ても差支はない。

白は六の手で○と打つか或は○と打つかである。

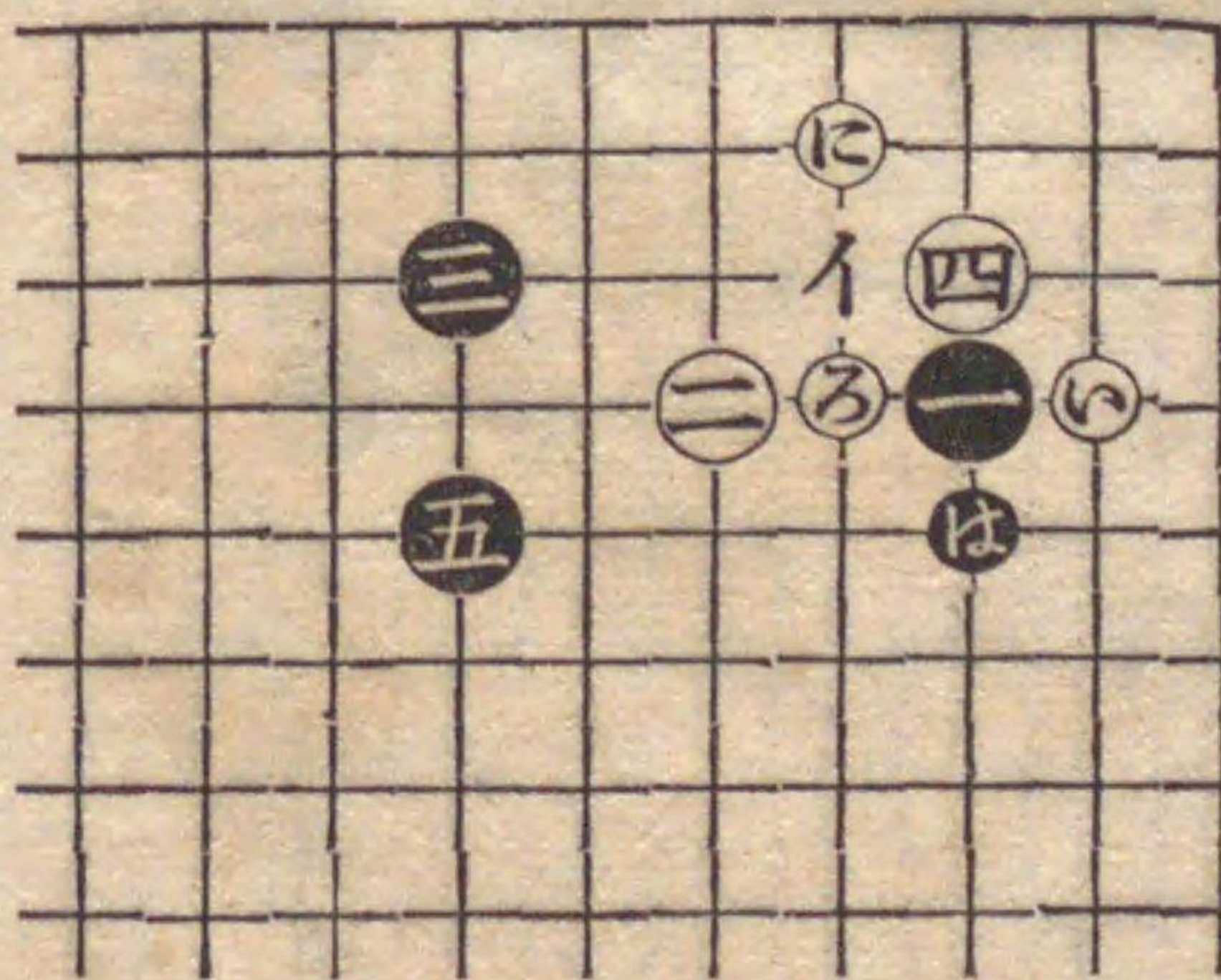
白○の時、黒は無論手抜してよいのであるが或は(イ)と繰出し、白○の時に○と引いて打つて居てもよい、又白○の時は黒は○と引き白又○と係粘ぐ手順である。

本圖の如く黒が五と飛ぶのは場合定石の一種と見ておけばよい。

○(第四拾參圖) 白が四と尖んだ時、黒五は圖の如く斜走するの一手である、次で白は○と上から黒三の肩側を壓するのが普通である、が或は趣向として○と隅に向つて頂ける事もある。

○(第四拾四圖) 白が圖の如く六と上から掛けて來た時、黒七の手は○と飛ぶか、○と尖むか、或は○と頂けるかの三種である。

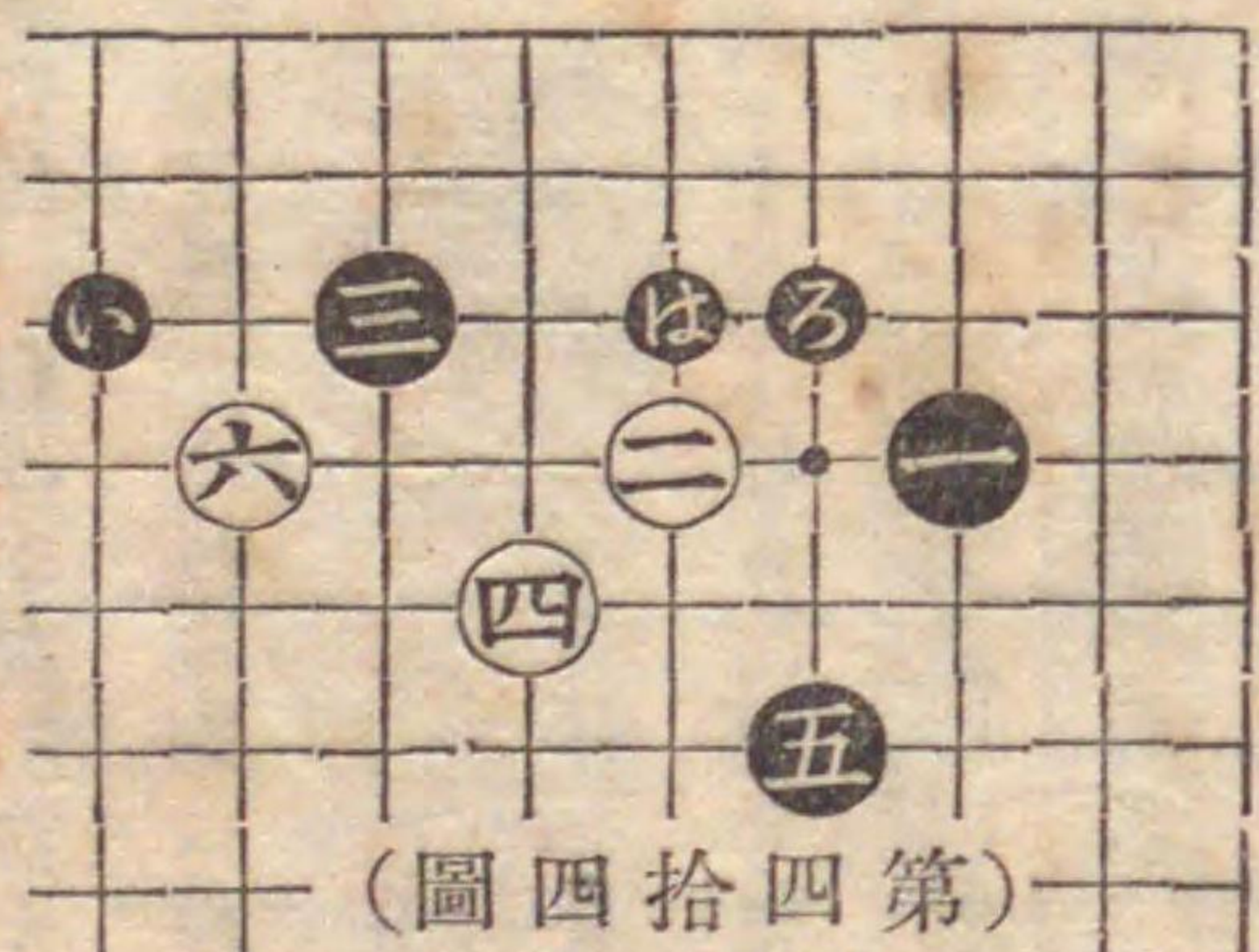
(圖二十四第)



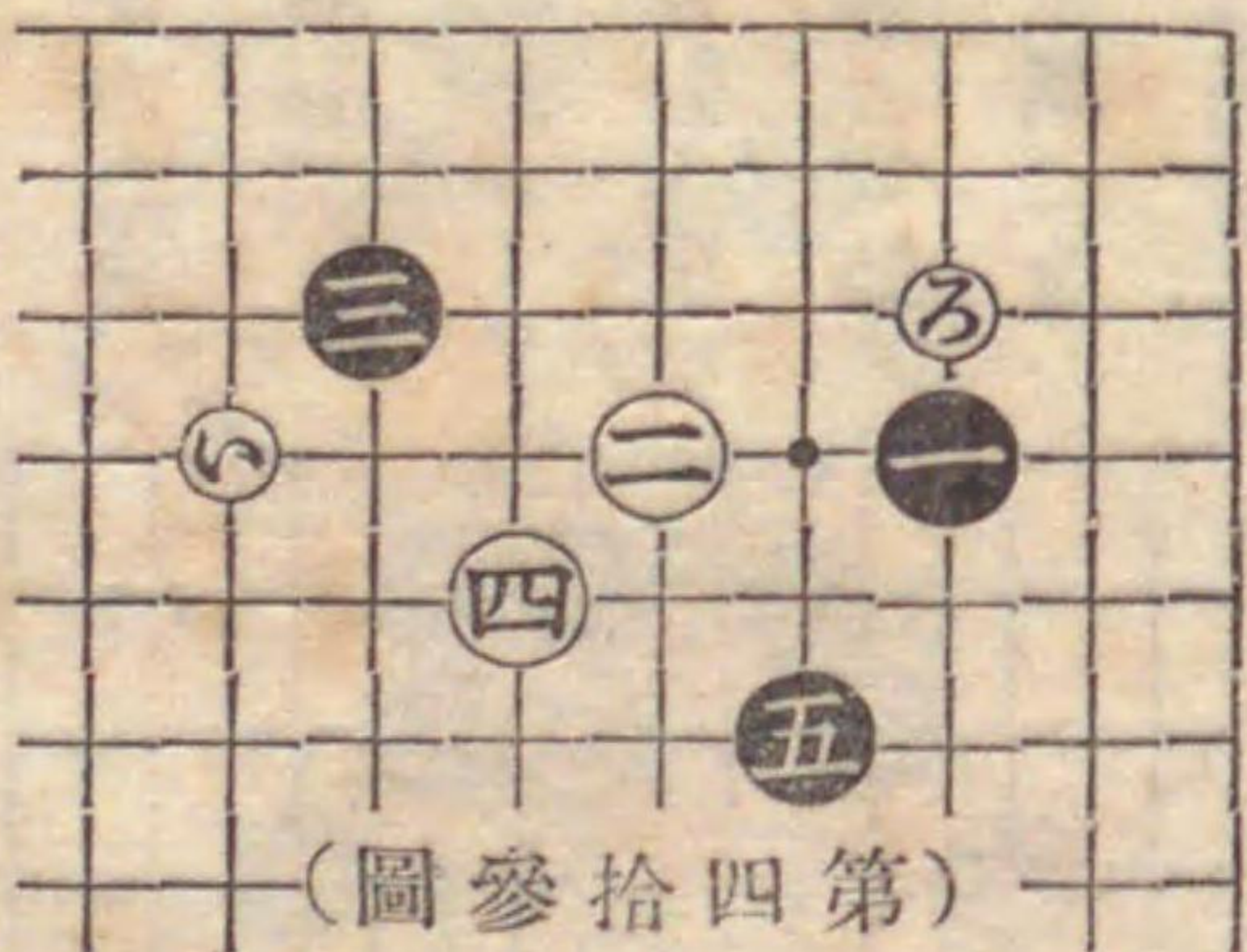
○(第四拾五圖) 黒が七と應じた時は、白は隅に向つて八と頂けるかよい、白八に對する黒九の手は、普通十の點へ繰出す可きであるが、圖の如く已に七の飛のある場合は十の點への繰出しは面白くない、何となれば、

白に○と截られ、黒○と行びた結果截斷點が多くて味が頗る悪い、既に七の飛で一方に利を占めて居るから、隅で多少の不利を招くは又止むを得ぬ。

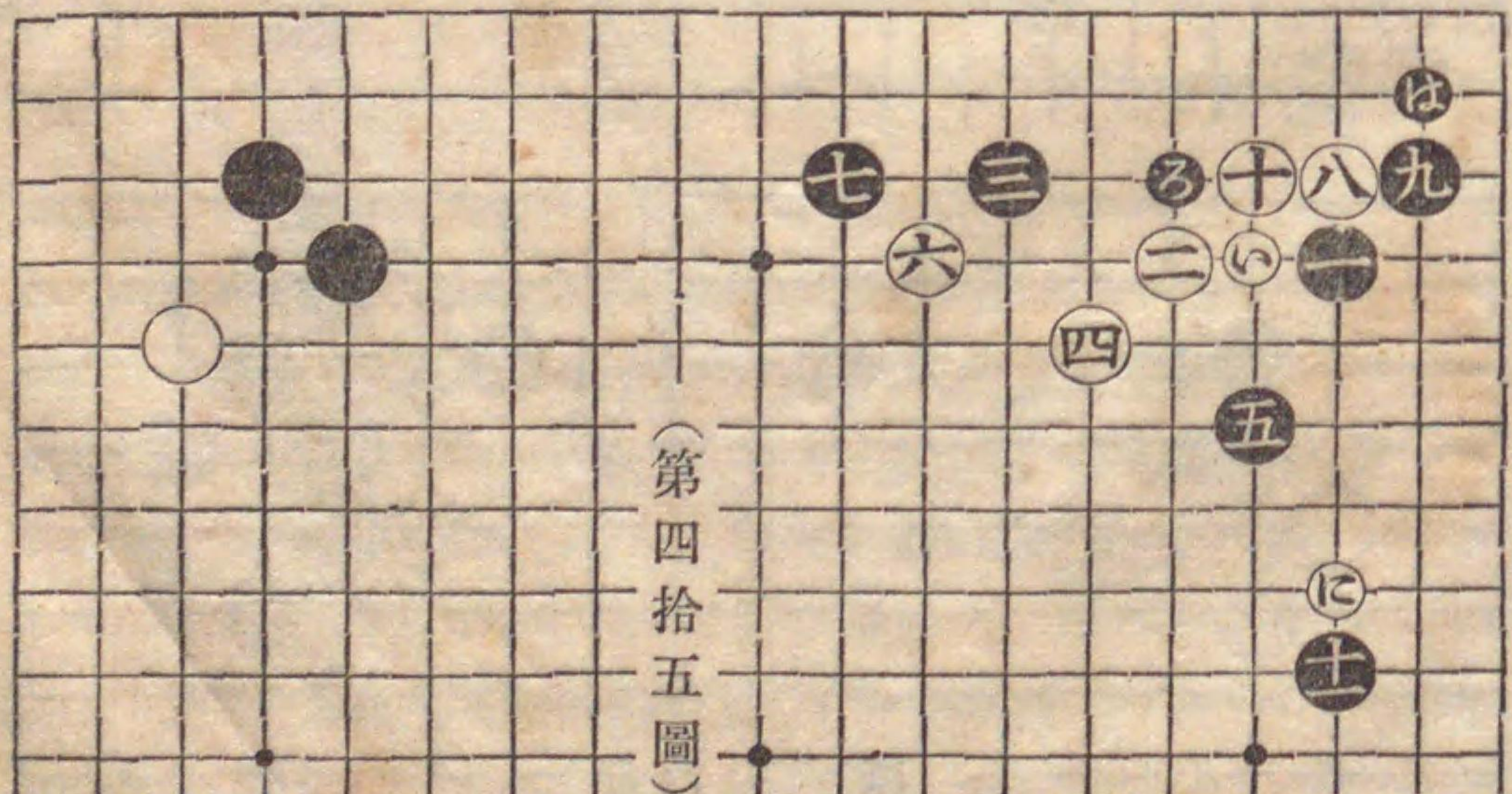
「註」黒十一を○と隅へ行びるは大悪手である、何となれば忽ち○の點から白の攻撃を蒙らねばならぬからである。



(圖四拾四第)



(圖參拾四第)



(第四拾五圖)

~~~~~(石定先互)~~~~~

大悪手

に、攻撃手点



白ハト打ツカ  
イト抑エルカ

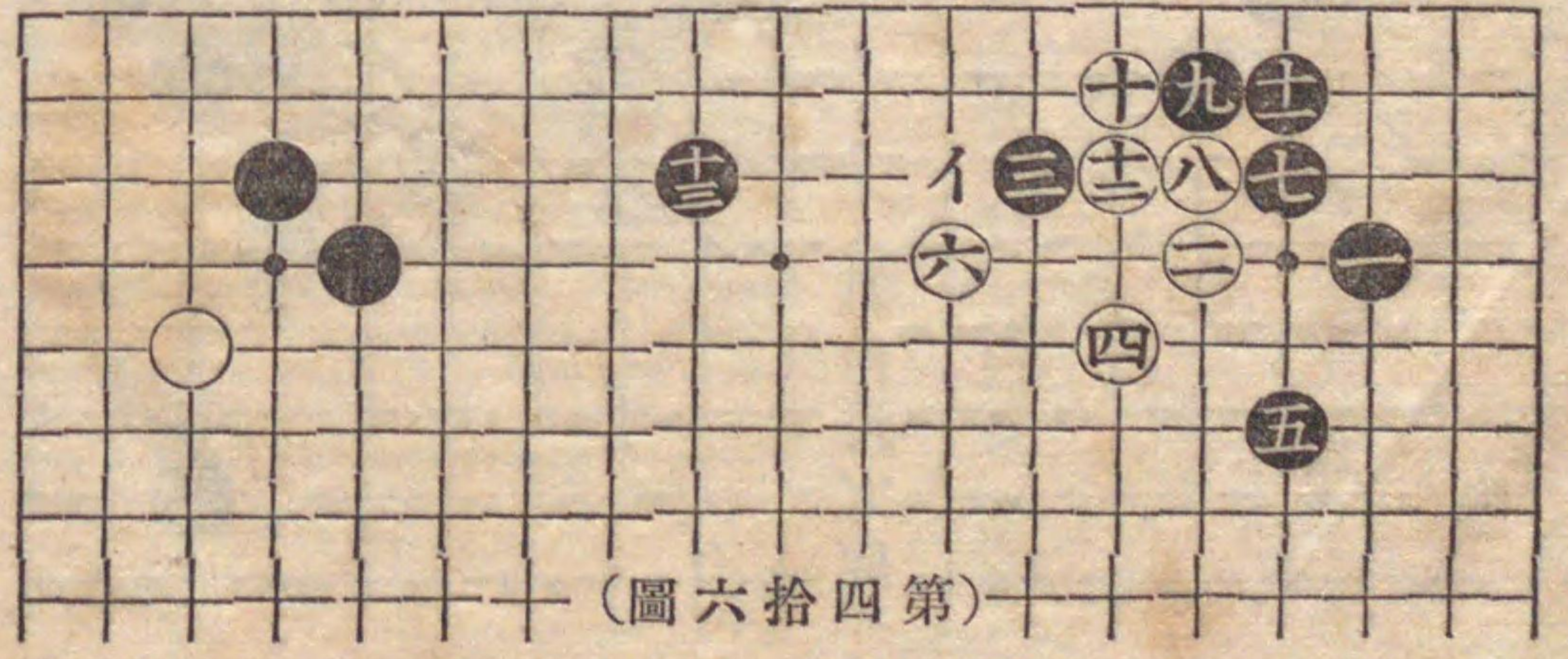
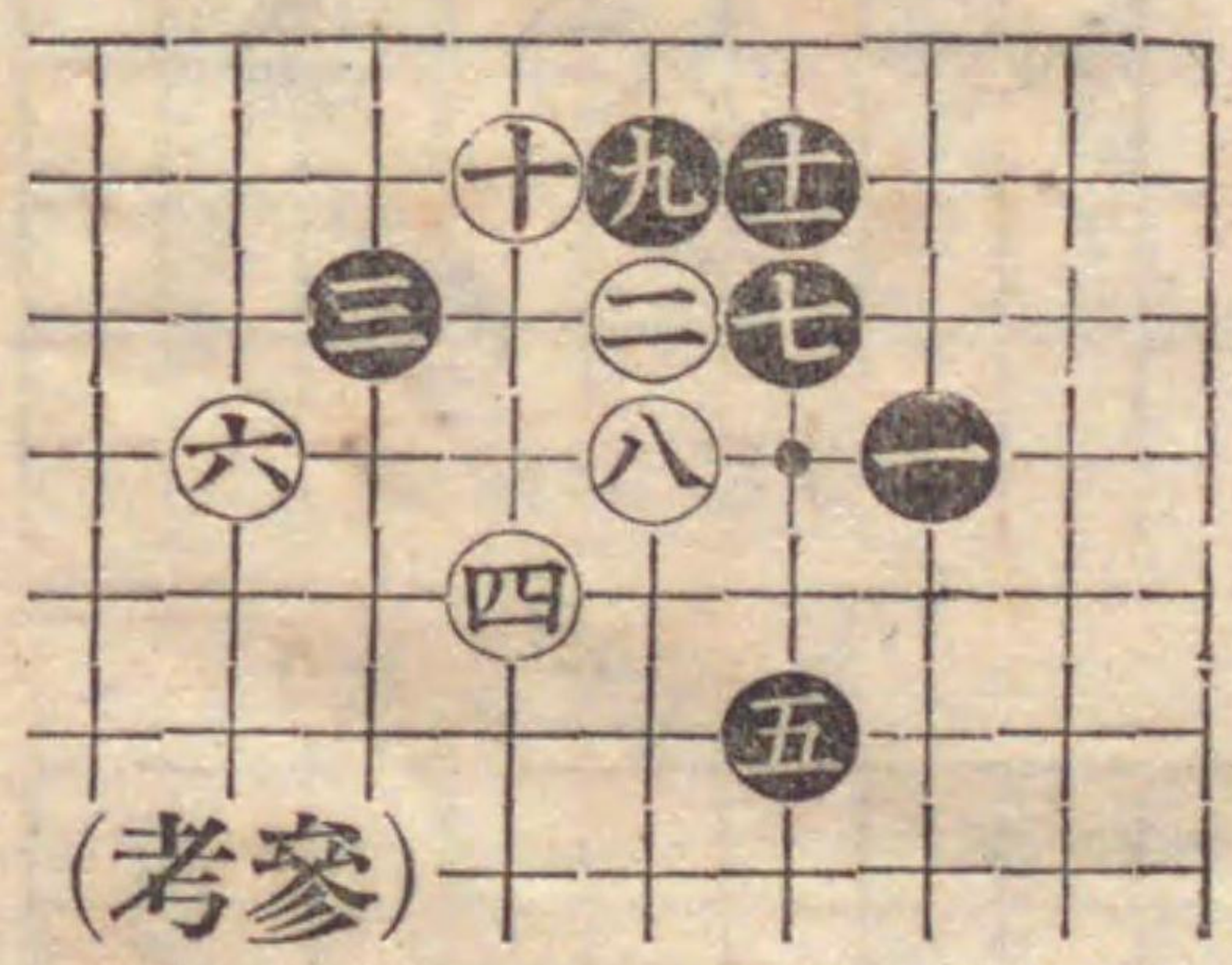
十三ノ手

白ノ欠点  
黒ノ欠点  
イノ頂越

○(第四拾六圖) 黒か隅から七と突んだ時、白は本圖の如く八と抑ふ可きか、或は此の八の手で(イ)と打つ可きかは能々考へねばならぬ、其は一に左上方面の布石關係によるので、若し本圖に現はした様な黒の尖が左上隅に行はれて居て、黒に十三の手を此く好處に拓かれる様な場合であれば、白の八、十、十二は徒らに愚を見るに止まるのである、本圖は参考圖に示す通り「一間夾斜走跳出」第四拾六圖(四拾九頁)下圖」と手順を異にして然も同結果である。

○(第四拾七圖) 白が八と上側から此く抑へれば、黒は九と尖むが必要である、此の應接は黒九が手止まりで、以後は局勢の推移によつて如何様とも打ち進む可きである。

本圖の結果は後に黒から(一)白、黒(二)と出截られる缺點が白に存在して居る、其と同時に、若し白の子か×印邊に來ると、右上隅に白から(イ)と頂越され、黒(ロ)白(ハ)黒(ニ)



常ニ行ハル  
手順

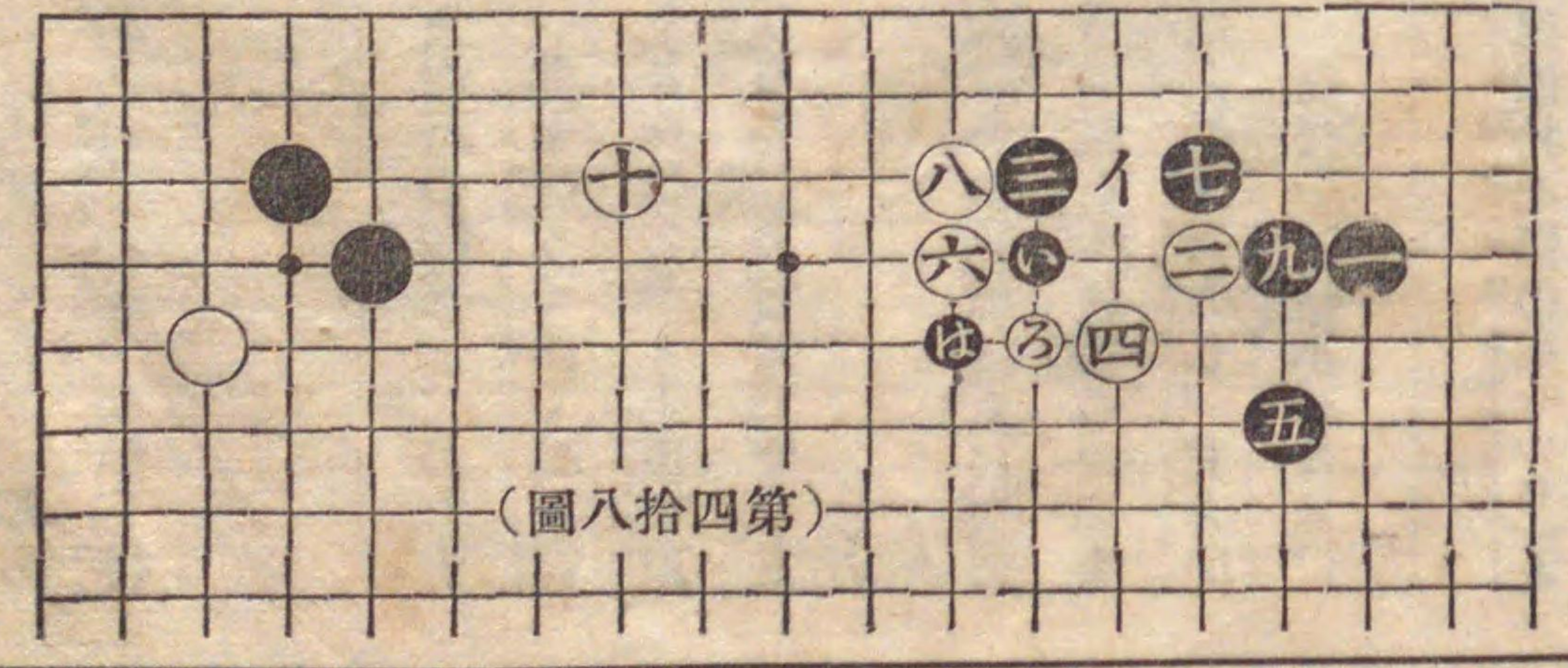
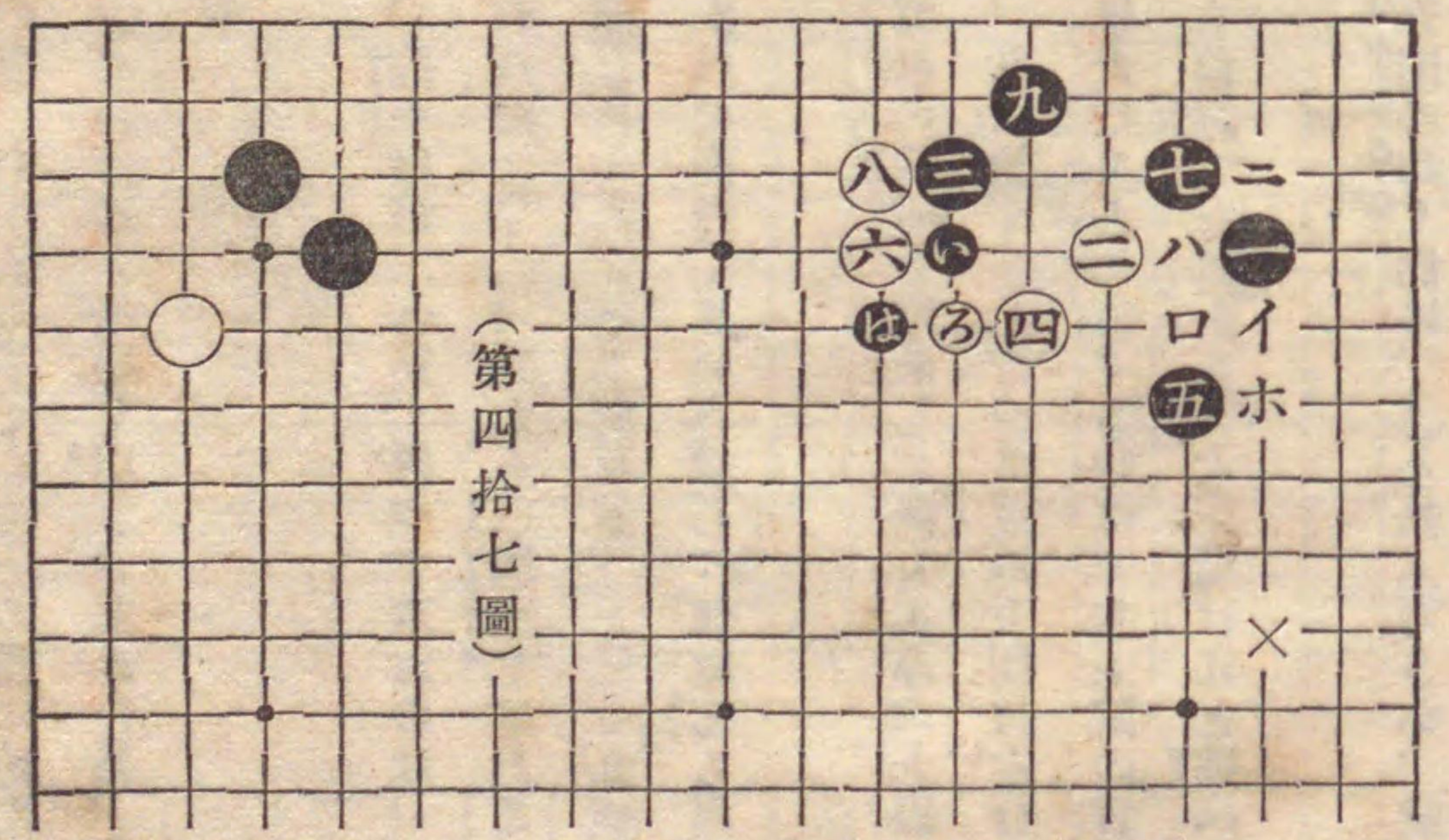
イノ緯込

白(ホ)と截斷される缺點が黒にも出來るといふ事に注意を拂はなくてはならぬ。

黒が七の尖を變じて次圖の如く運べば、此の(イ)(ロ)等の頂越の手はない、が随つて(ハ)等出截りの手も亦ない。

○(第四拾八圖) 黒が七と頂け、白八と抑へた時、黒が九とツキアタリ、隅の味を無くして治まりをツケタ時、白が十と拓く、此は常に行はれる手順で黒白共に堅固である。

「註」本圖で黒が(一)と出截れば白に(イ)と緯込まれる。





△(参考圖) 前圖の手順中、黒七の時、白が八の手で本圖⑥の點に縛出すのは大悪手である、即ち黒⑦、白⑧、黒⑨、白⑩、黒⑪と運んで白は⑫と後手を引き、其の結果、實利と大勢と兩つながら得る處のない運命に遭遇せねばならぬ。

△(再掲第四拾八圖)

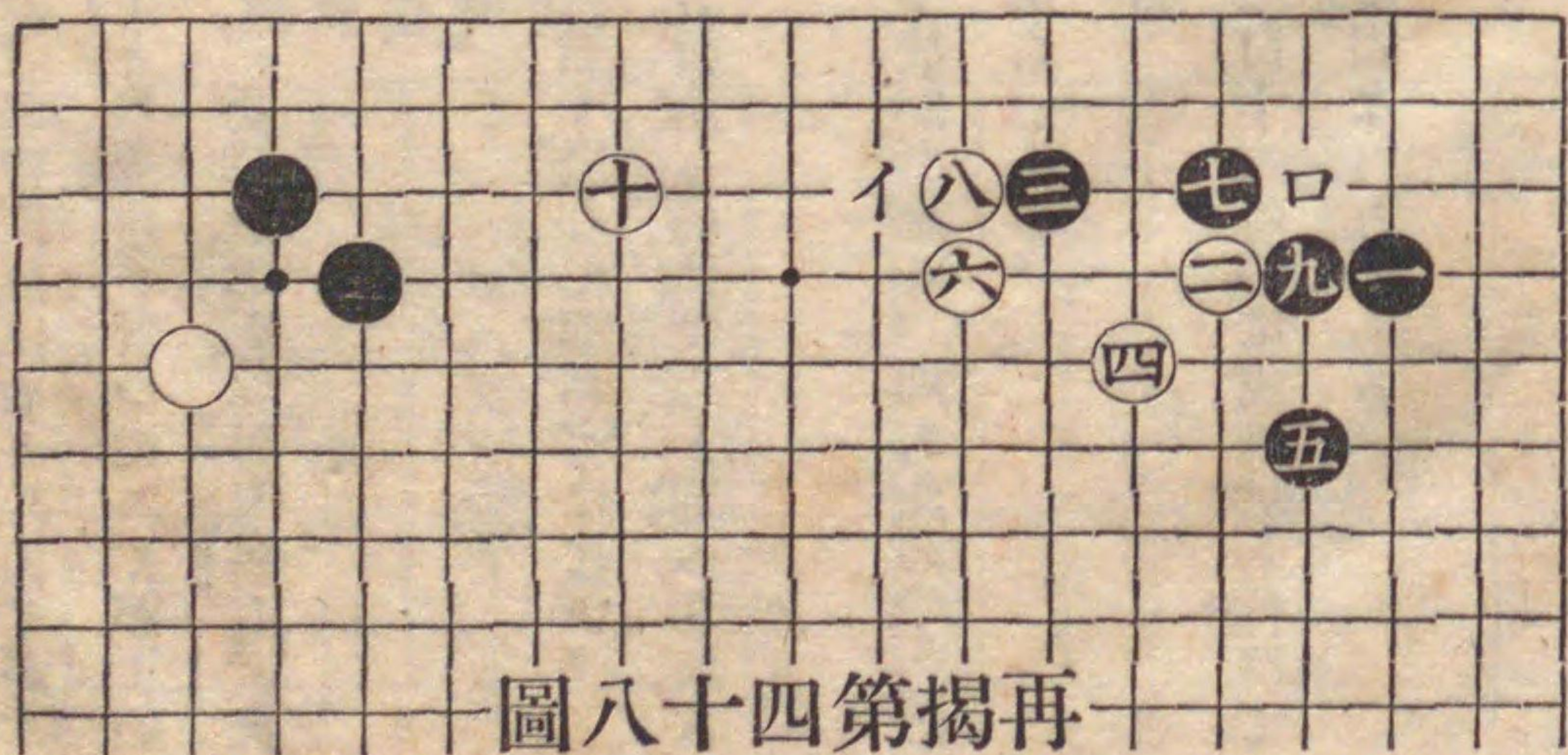
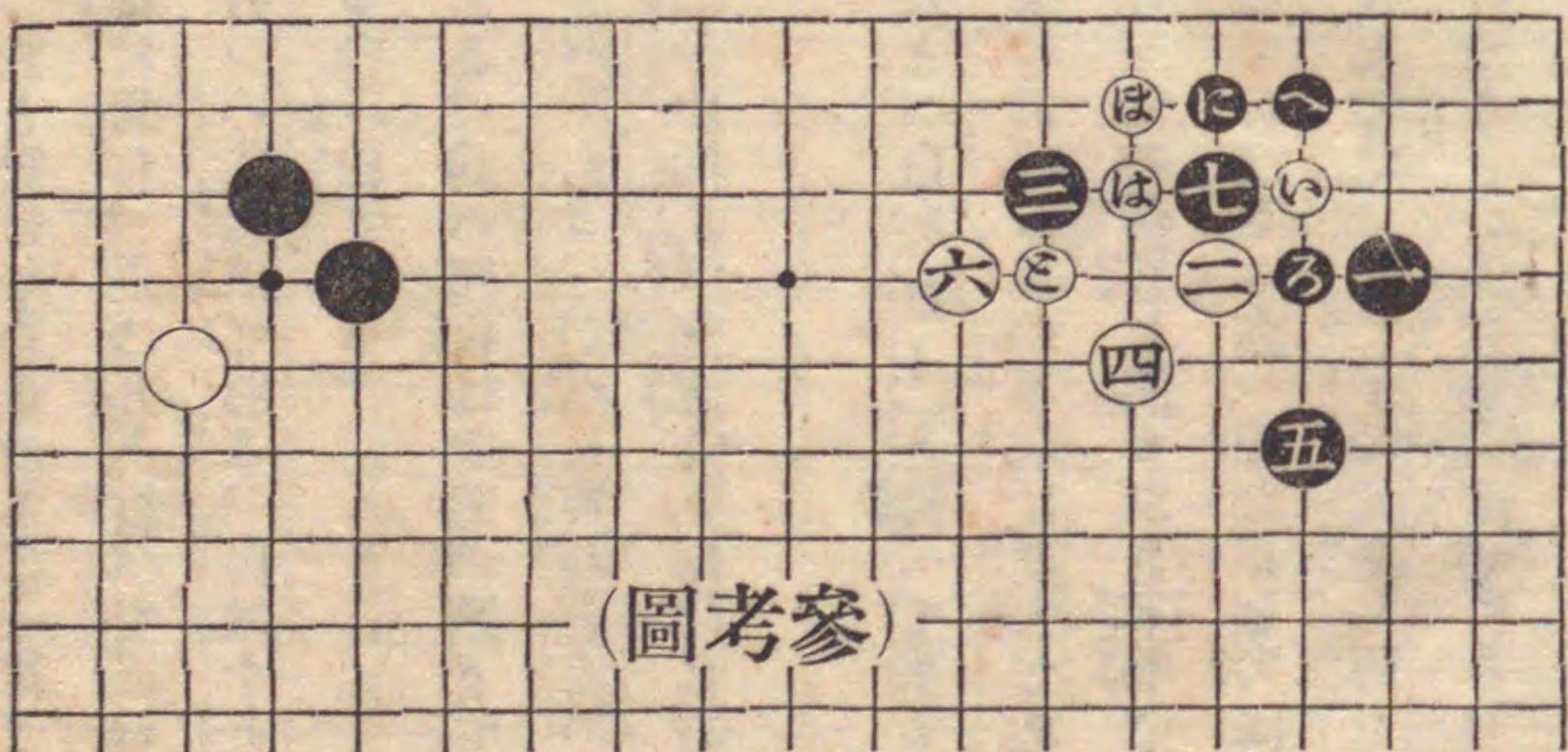
「結論」根源に溯つて論じると、抑々白が二と高く掛つて來たのは、左上布石の關係上、若し此の二を低く七の點に小斜走に掛ければ黒に(イ)の點から三間夾をされる故、其を嫌うて此く二と高掛りに打つたので、此の際黒が(第三百十八頁第二圖及第三百三十九頁第九圖)等の如く上頂下頂の普通應接をすれば白に上側へ拓かれて面白くないと感じ、何處迄も白の拓きを妨たげる意で、三と此く夾んだのである。

然るに白は飽迄も上側に拓く可き當初の主意を繼承して四と尖み六と掛けた、此の時黒は更に白の策を破つて(イ)と飛ぶ手もあるが、已に此く三と打つて白の上側に占む可き利權を大に削つた以上は、(此の三の手で單に七の點に頂けた結果と比較する時は、右上隅の實利は非常に擴大し、其と同じ時に白の利權を削つた事も少なからぬ譯であるから)七と頂け九と控へて、白に十と拓かせるも、敢て差支はないのである。

要するに、黒七の手は、第四拾五圖の如く側に(イ)と飛ぶ可きか、或は第四拾七圖の如く(ロ)と

四ト尖ミ六ト掛テ意

尖む可きか、又は第四拾八圖の如く七と頂く可きか、其の間各一長一短であつて、場合と策戰の如何によりて任意に撰擇す可きで、強て可否を斷言する事も出來ぬが、單に部分に就て見れば、黒七の手を(イ)に飛ぶ手段は重きを場合におく手、若し其れ策戰眼より見れば、第四拾八圖の如く七と頂けるよりは此の手で(ロ)と尖む第四拾七圖の方が變化の範圍の廣いだけ些少優つて居ると見る可き理由もある。





白ト頂テ時  
黒ト緯ス

十九ノ意

ハハ攻撃手点

○(第四拾九圖) 白が隅に向つて、六と頂けて来るのも亦一策である、其の際黒は七と緯出すが、最も要領を得た手である、白八の截に對し、黒は九と行びて三の一子との連絡を計つておくがよい此の手で十二若くは十九の點より打つのは悪手である、白は十とアテ、更に十二と犠牲を供し、此の二子の犠牲子を利用して上を塗るの手段である。

白十二は或は十九の點に下る手もある、其の變化は次圖の通りである。

白十八に至る結果は白の策成効の觀がある、が然し實利を占め得た黒も決して不利ではない。

黒十九は上側を手堅くして隅の白二子の活力を奪ふと同時に右側方面から白に(イ)と抑へられる手に備へたのである。

「註」黒十九が打つてあれば、たとへ白から(イ)と抑へて來ても手拔が出来る、即ち此の(イ)の點を先手で抑へられては右側方面に於ける黒の不利は莫大であるからである。

此の結果に於ては、白は(イ)の邊から上側の模様を削りなき形勢である。

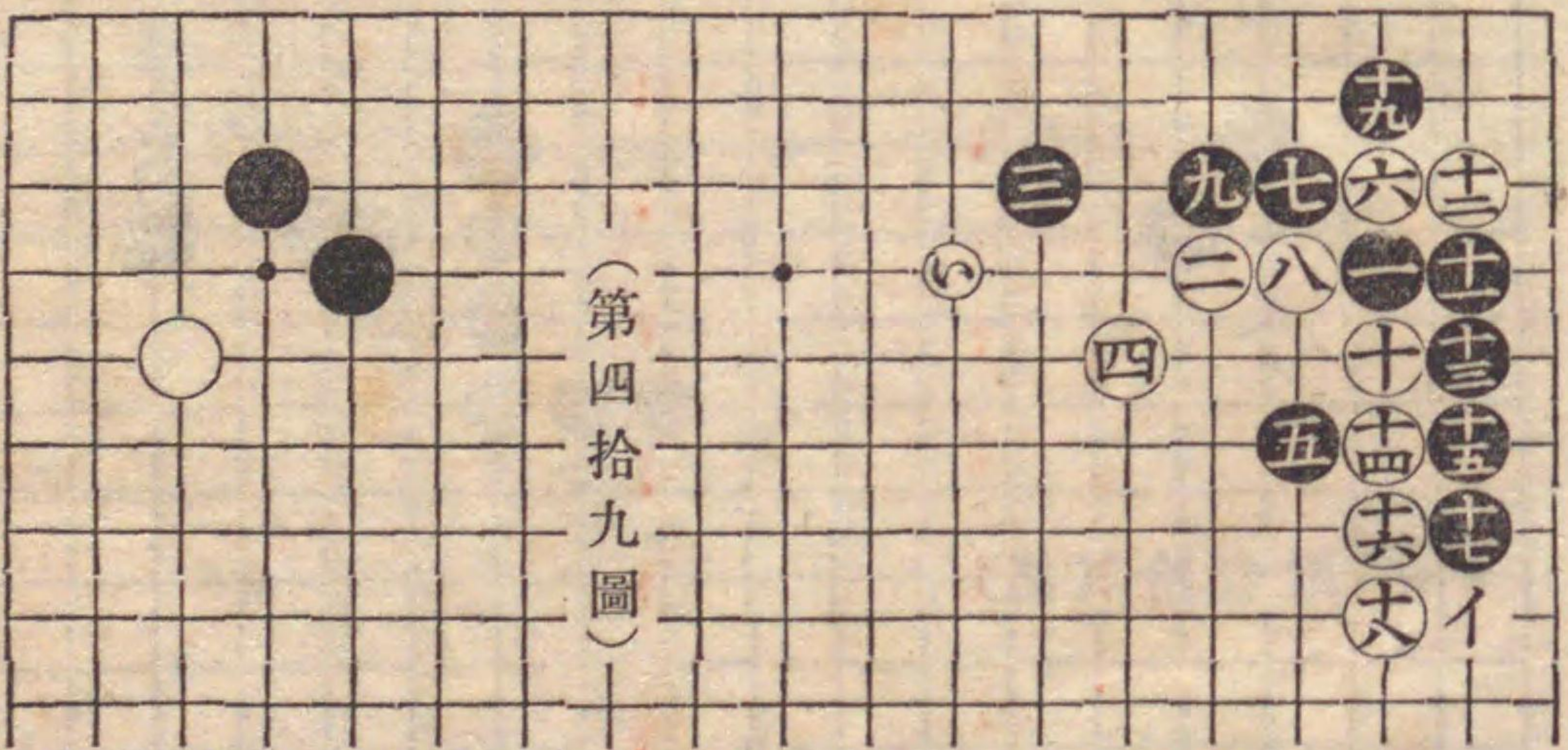
○(第五拾圖) 白が十二と上に向つて行びるも亦一策たるを失はぬ、白十六の手は或は(イ)と行びてもよい、黒が十五と押し十七と夾んだのは、白二子の死命を制した堅固な打方である。

白十八は(イ)の邊から大勢を制して打たうといふ意を含んで居る。前圖も本圖も黑白共に無難の着手である。

△(質問參考圖)

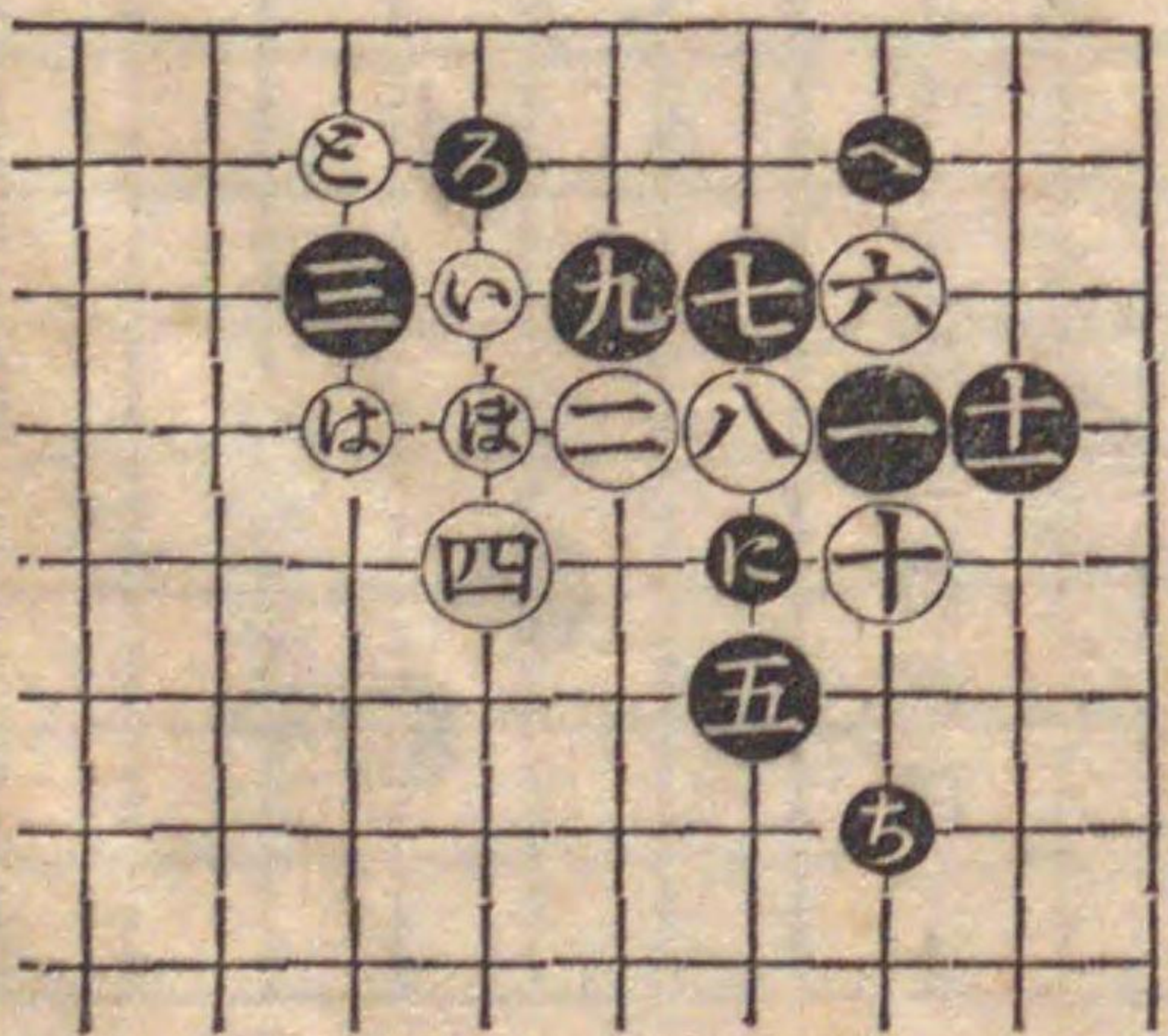
問、某棋家の實戰に於て此の形の時に、白が十二の手を以つて(イ)と緯込みたるを見たり、其の可否及び相互の正當なる應接如何。

○答、白(イ)なれば黒(イ)と應じ白(イ)の時、黒若し(イ)の點に劫をとらば、紛争に陥るの惧あるに由り、黒は(イ)と截斷するを要す、便ち白(イ)、黒(イ)、白(イ)、黒(イ)となりて黒十分に利あり、白十二の手にて(イ)と打つは、趣向としては兎も角、決して有利の手段に非ず。

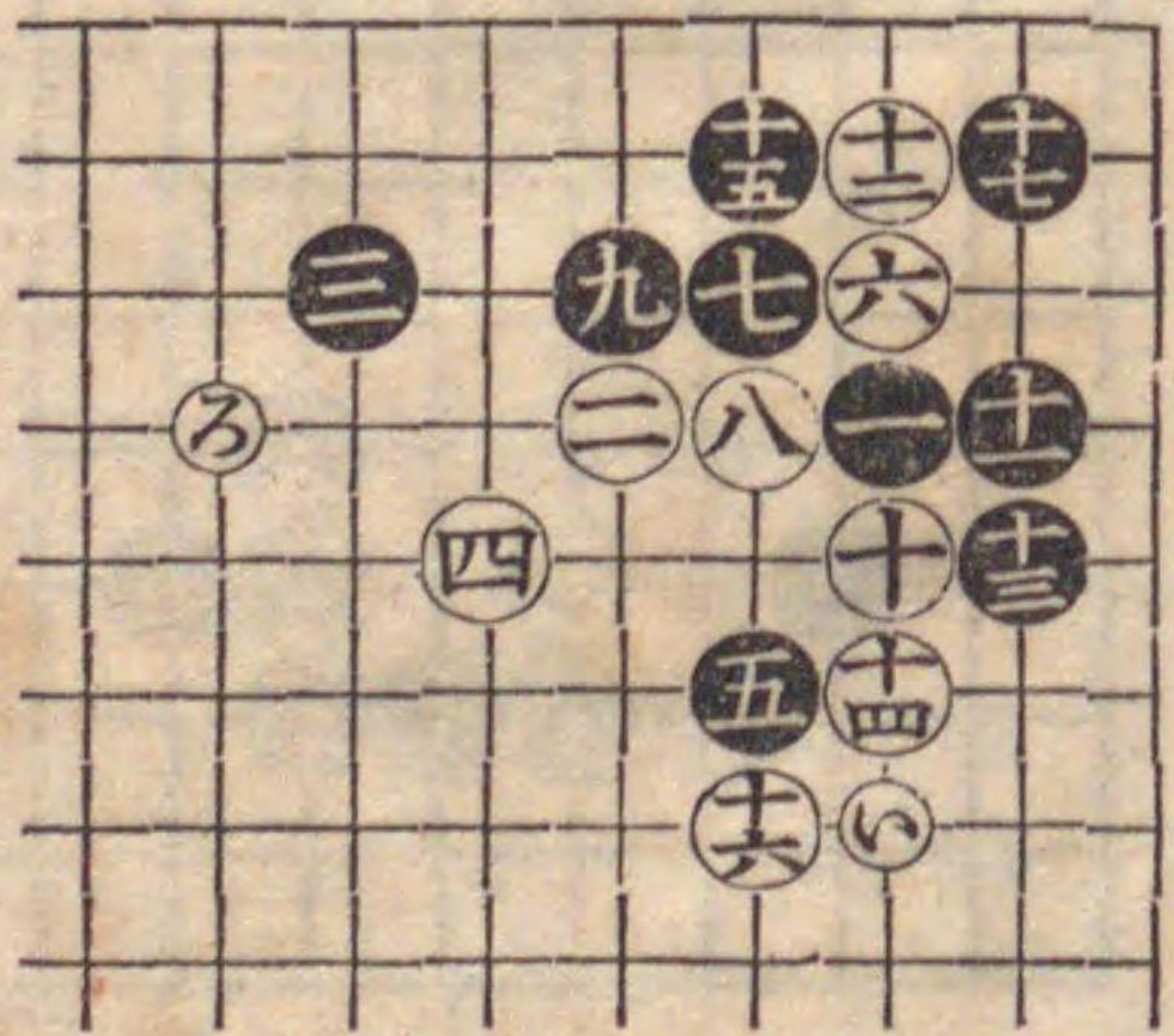


(第四拾九圖)

(圖考參問質)

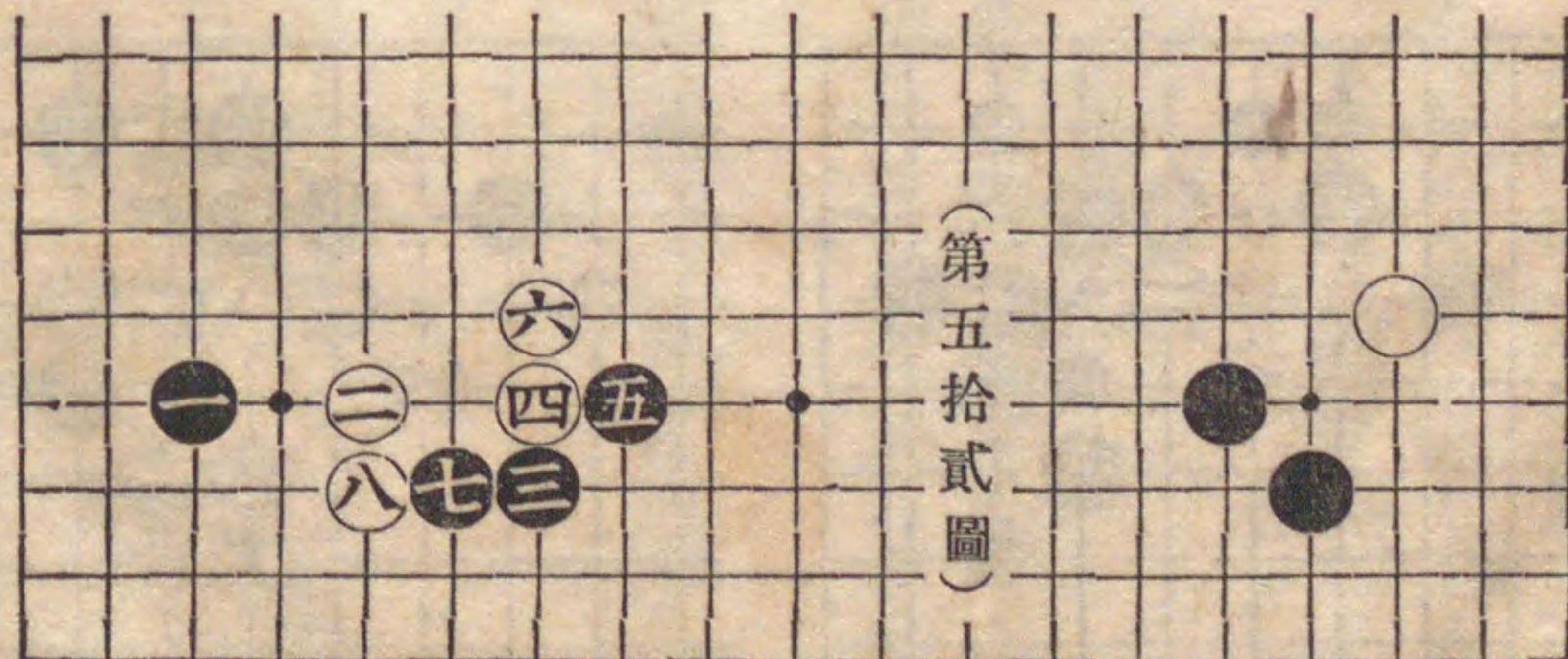
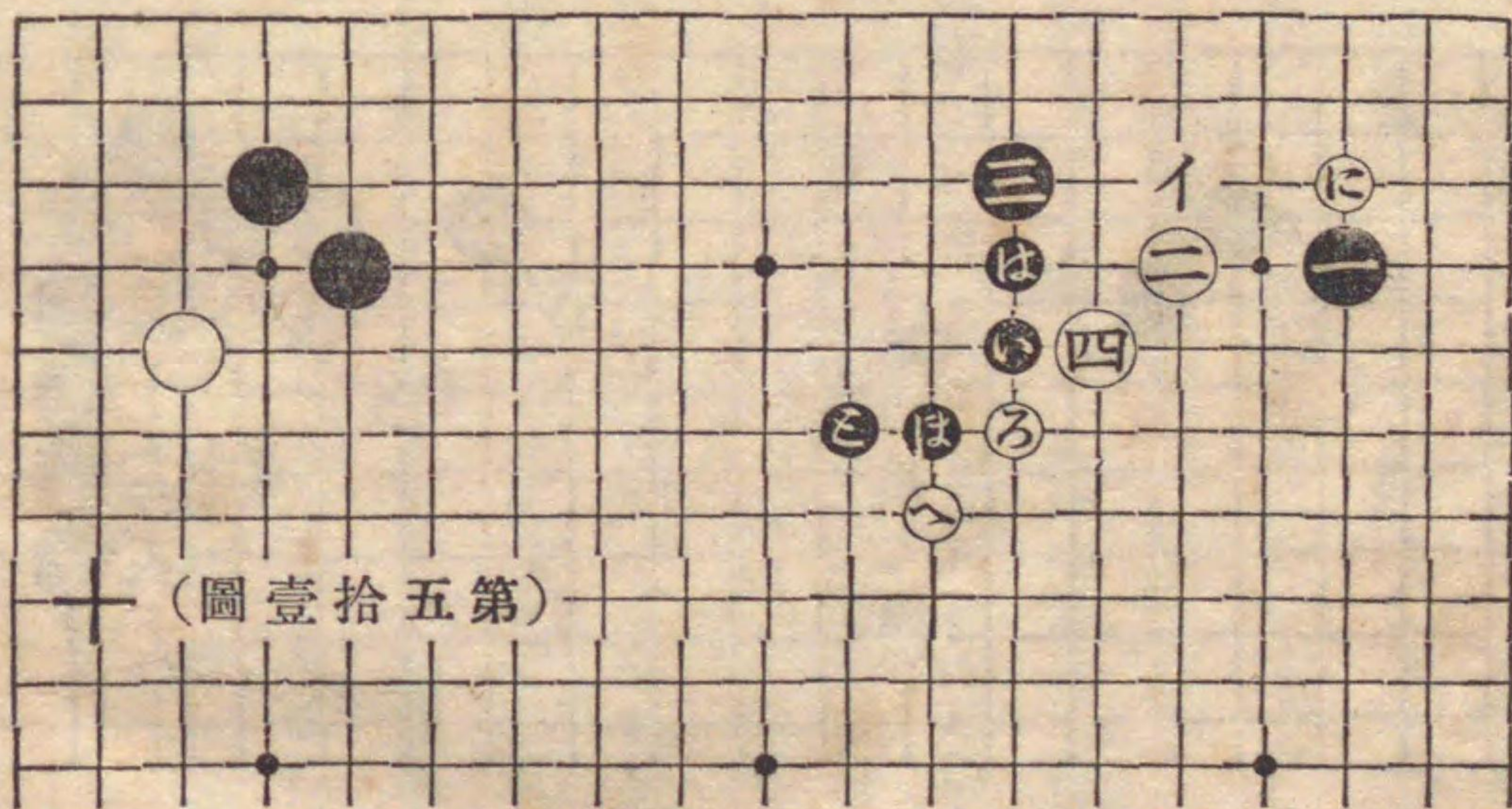


(圖拾五第)

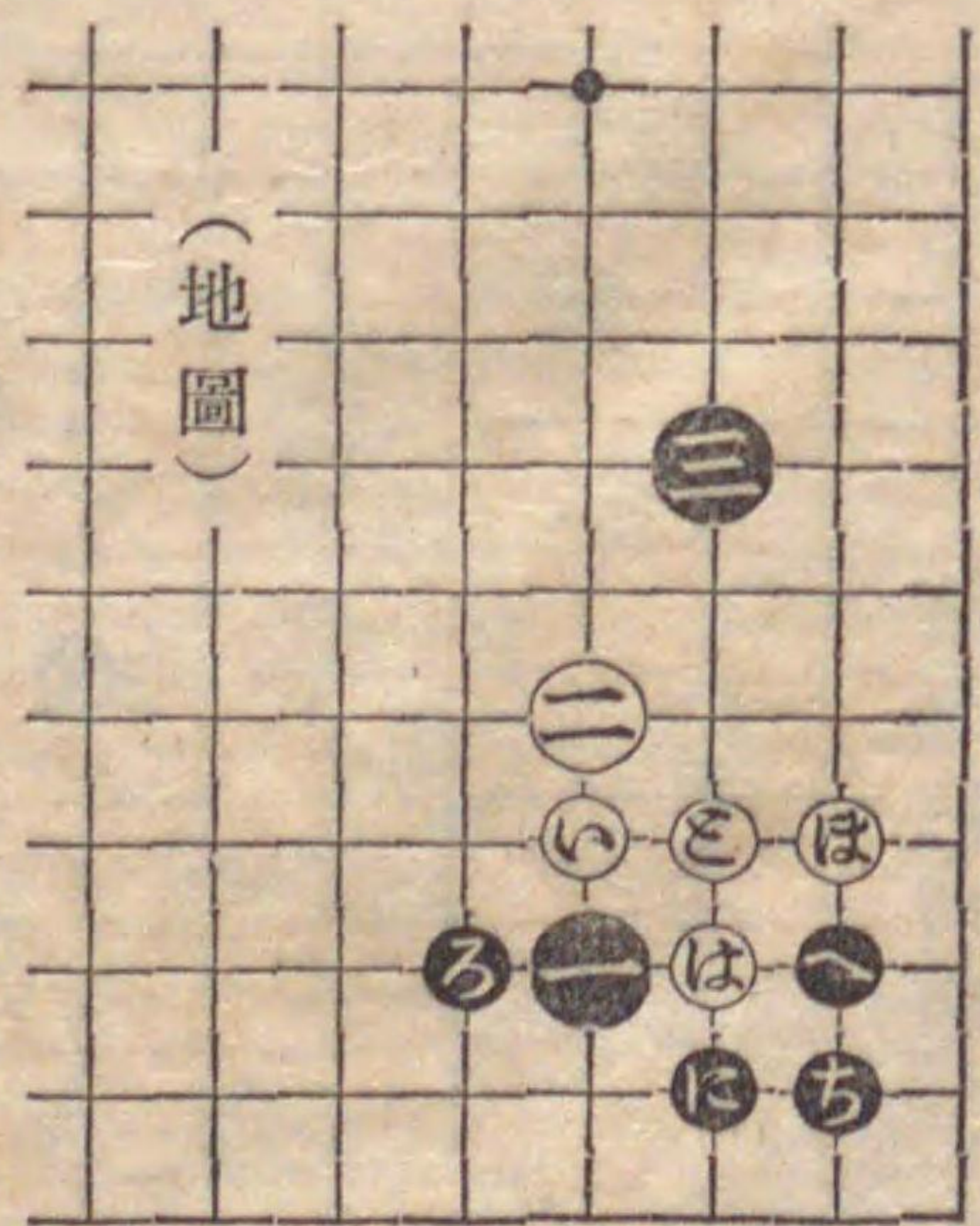
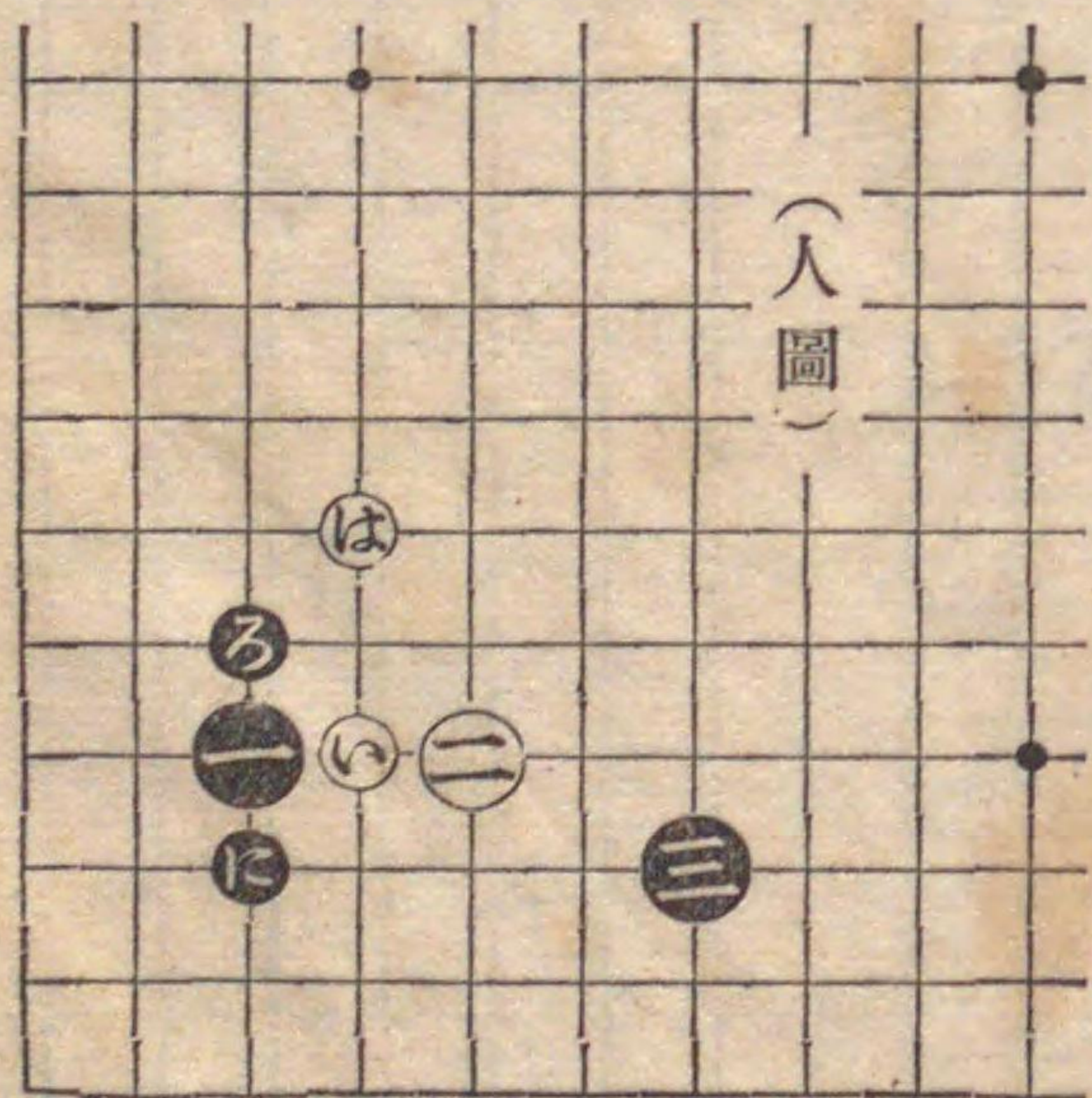
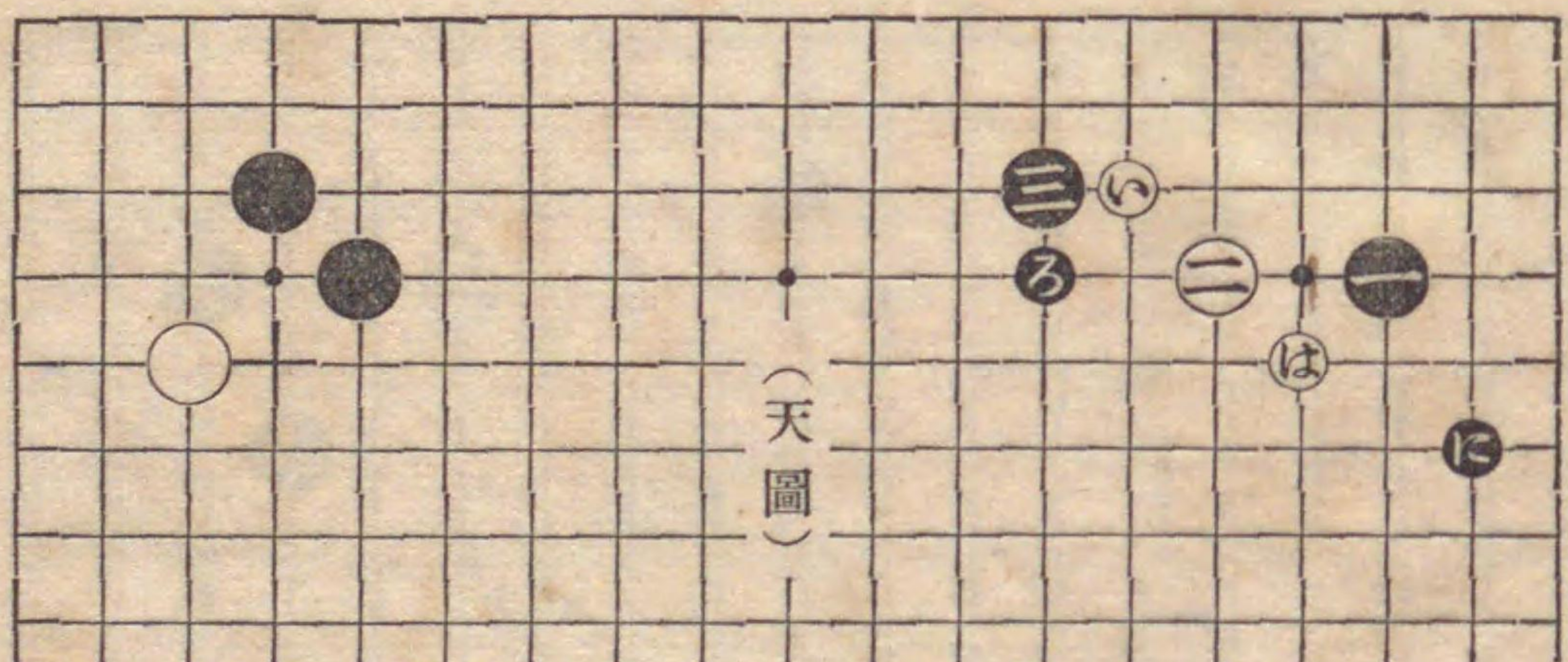




○(第五拾壹圖) 黒が五の手を以つて本圖●の點に頂ける手段なきにしも非ずである、が然し是亦場合を主とした手であつて、決して普通定石と見る可き形ではない。  
 白○の綽に對して黒が●と棒に粘いだのは(イ)の盤りを含んだ手である、白○の頂は黒(イ)の盤りを妨げたので、乃て黒は●と運んで最初●と頂けた主意を實現し上側に雄大なる形勢を造り出したのである。  
 白若し○の手で●の點に行びて上側の黒地に臨んだならば、黒は直ちに(イ)と頂けて右上隅との連絡を計つておくがよい。



○(第五拾貳圖) 白四が従來の尖の手を變更して、此く四と頂けて來たならば、黒は五と綽ね、白六の時七と行び、白八と抑へる、此の結果は白の二と八とが手順を前後しただけで、一間夾頂行定石と同一結果に歸着したのである。  
 △以下示す(天)(地)(人)三種は定石としての價値もなく、又元より摸倣す可からざる手ではあるが、古の打棋にある故參考として茲に載せておく、三種其白の不利たる勿論である。  
 「注意」○は白四の手である以下符號順を數字順に直して見るもよし。



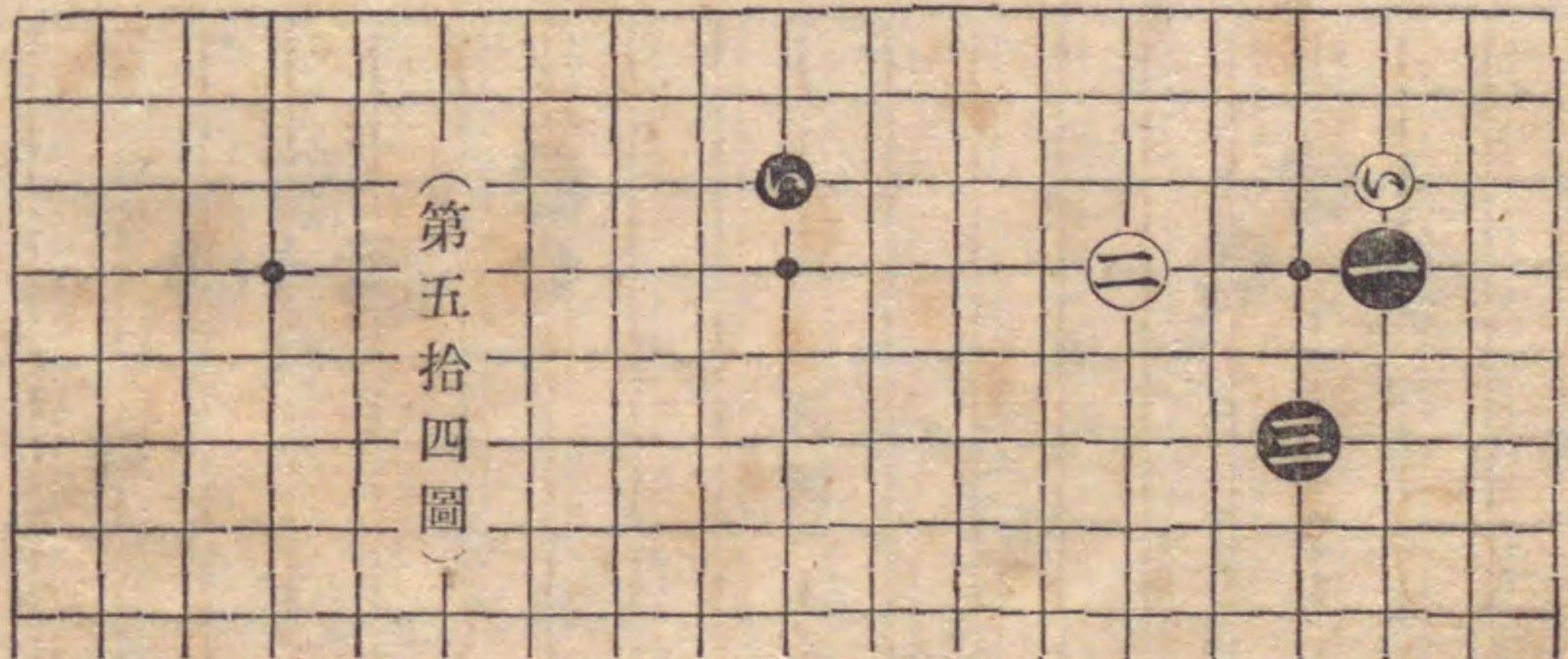


二間高掛  
此定石三白手  
日卷七八頁以  
下又參照一  
黒三手三種

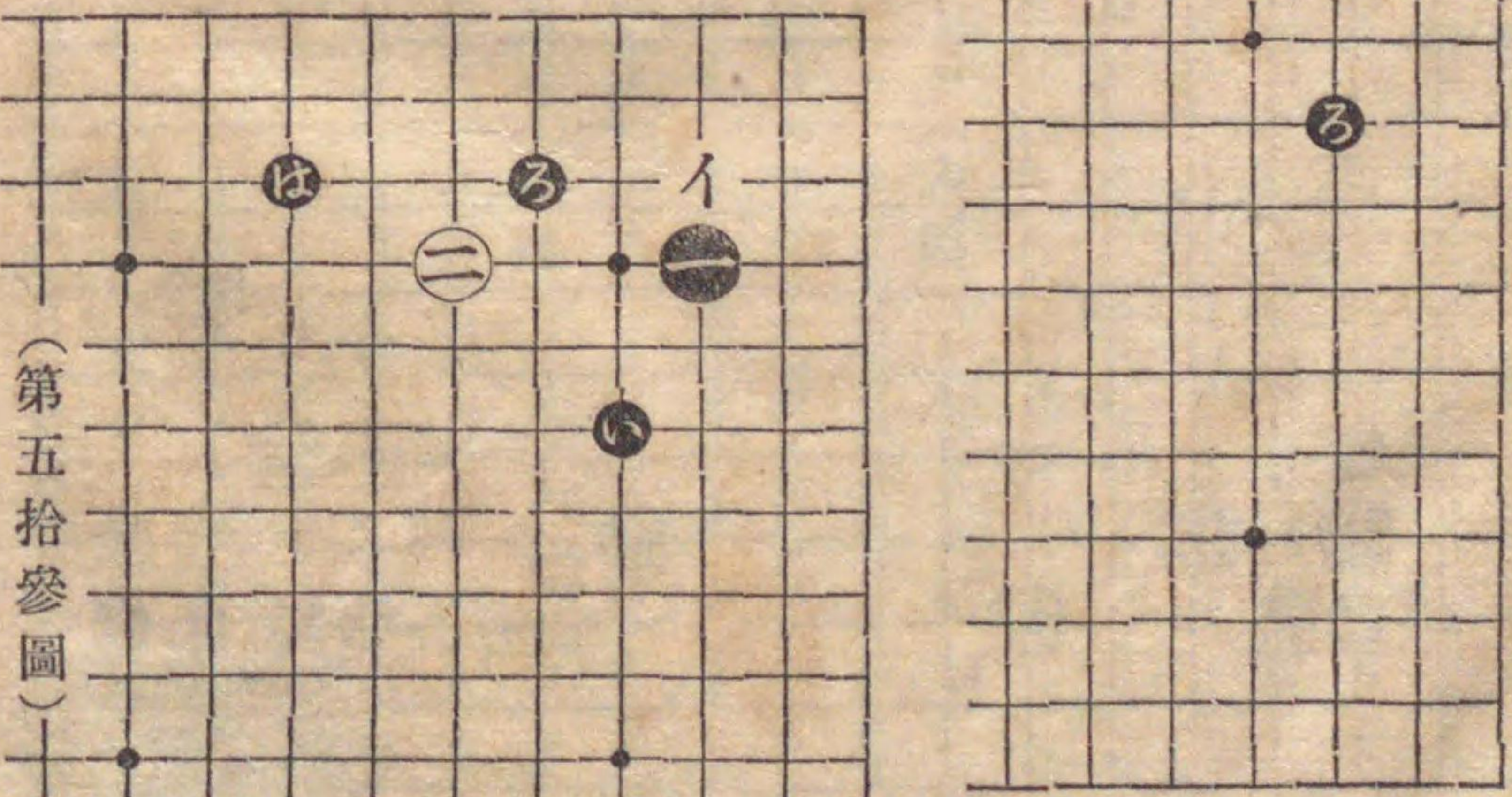
黒三手斜走  
意

○(第五拾參圖) 以下白二間高掛の定石である、白二は場合に  
よりて(イ)と頂けやうといふ意  
を含んで居る、白二に對する黒  
三の應手は、●と斜走に備へる  
か、●と露骨に白に迫つて隅の  
治まりをつけるか、或は●と一  
間に夾むかの三種である。

○(第五拾四圖) 黒が三と斜走  
するのは、白からする●の攻撃  
に備へた事は勿論であるが、此  
の手は形勢を熟させず、局勢の  
推移によりて自由に變化を試み  
やうといふ意がある、即ち上側  
から●と詰める手と、右側に向  
つて●と拓く手とを兼ね含んで  
居るのである。



(第五拾四圖)



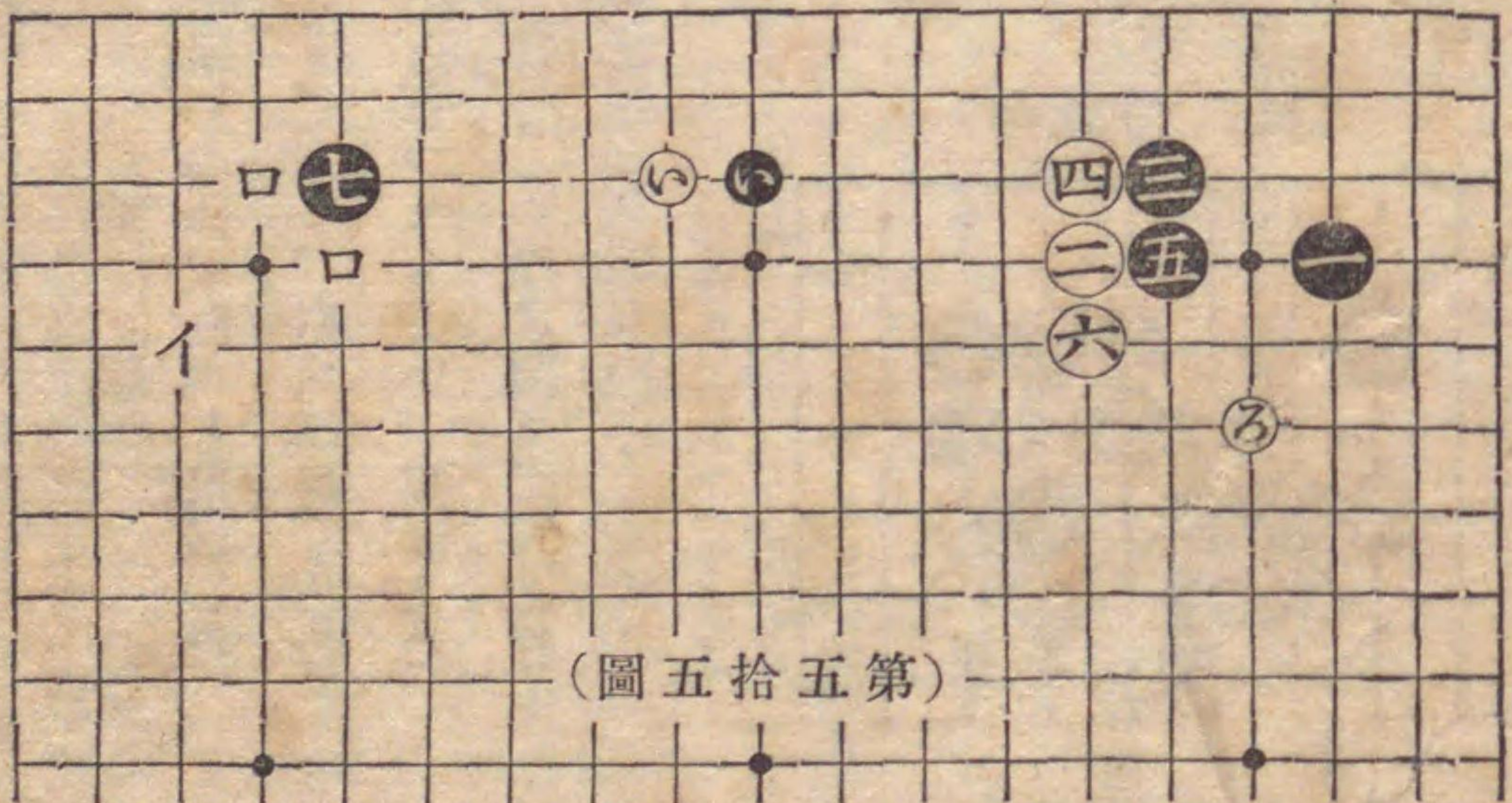
(第五拾參圖)

ろ、打手所

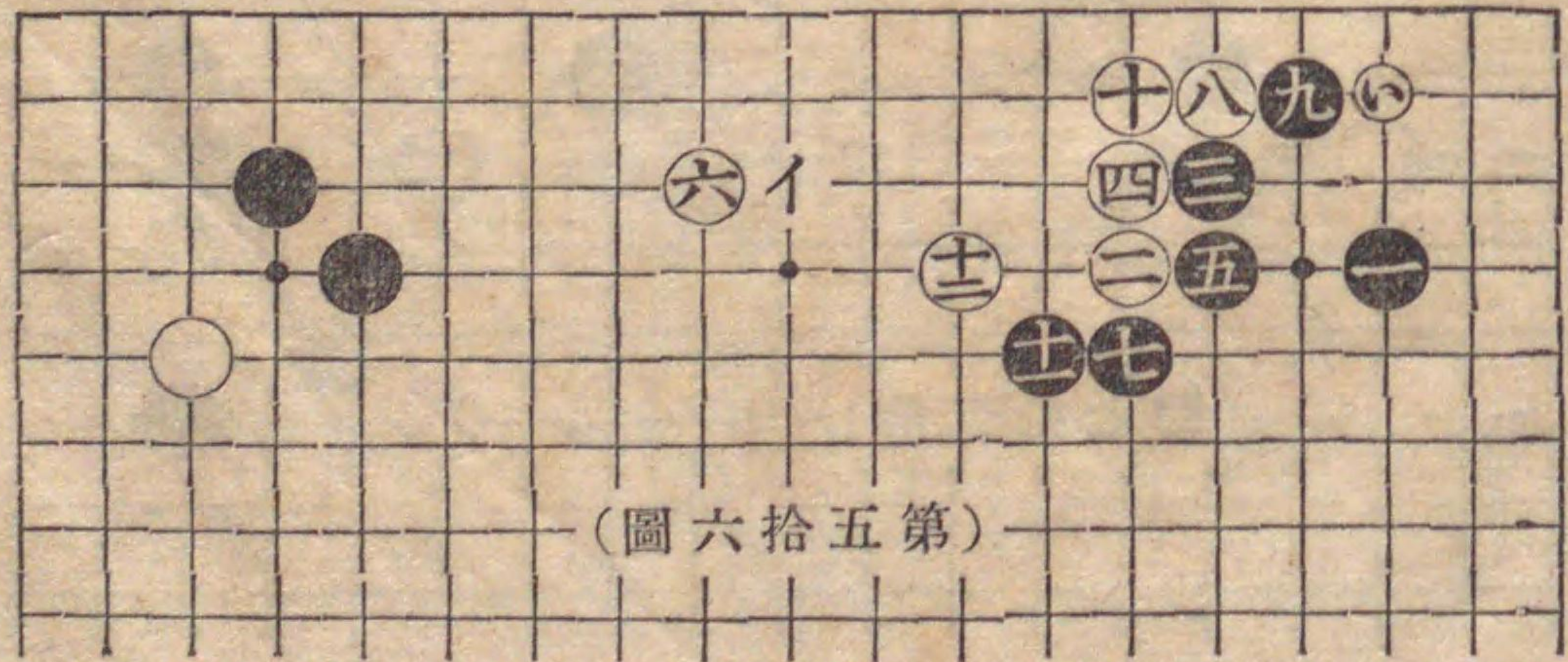
白八ノ手ノ意

○(第五拾五圖) 黒が三と迫り  
隅の治まりをつけやうと來た時  
は、白は四と押し黒五の時、六  
と立つ可きか●と拓く可きかを  
考へねばならぬ、左上隅に布石  
關係なしとせば白は六と立つの  
もよい、然して黒七と左上隅に  
據つた時●と打つて右上の黒の  
宏壯を削つておく。若し又左上  
に白(イ)に對する黒ロ、ロ等の  
布石のある場合白が六と立てば  
黒は左上からの拓きを兼ねて●  
と詰めておくがよい。

○(第五拾六圖) 白六は黒より  
(イ)と詰められるを嫌うた手だ  
ある、白の八、十は根據を固ら  
して、兼ねて右上隅に●と夾む  
味を残したのである。



(圖五拾五第)



(圖六拾五第)



黒三ノ意一向  
高ノ時ニ同シ

黒九如何ニ  
打ツキ  
白亦之ニ意  
如何、打ツ  
キヤ

此大接様作  
リ方

日巻第三十  
頁参照

隔リカヘテ置  
キ研究スルニ有  
益

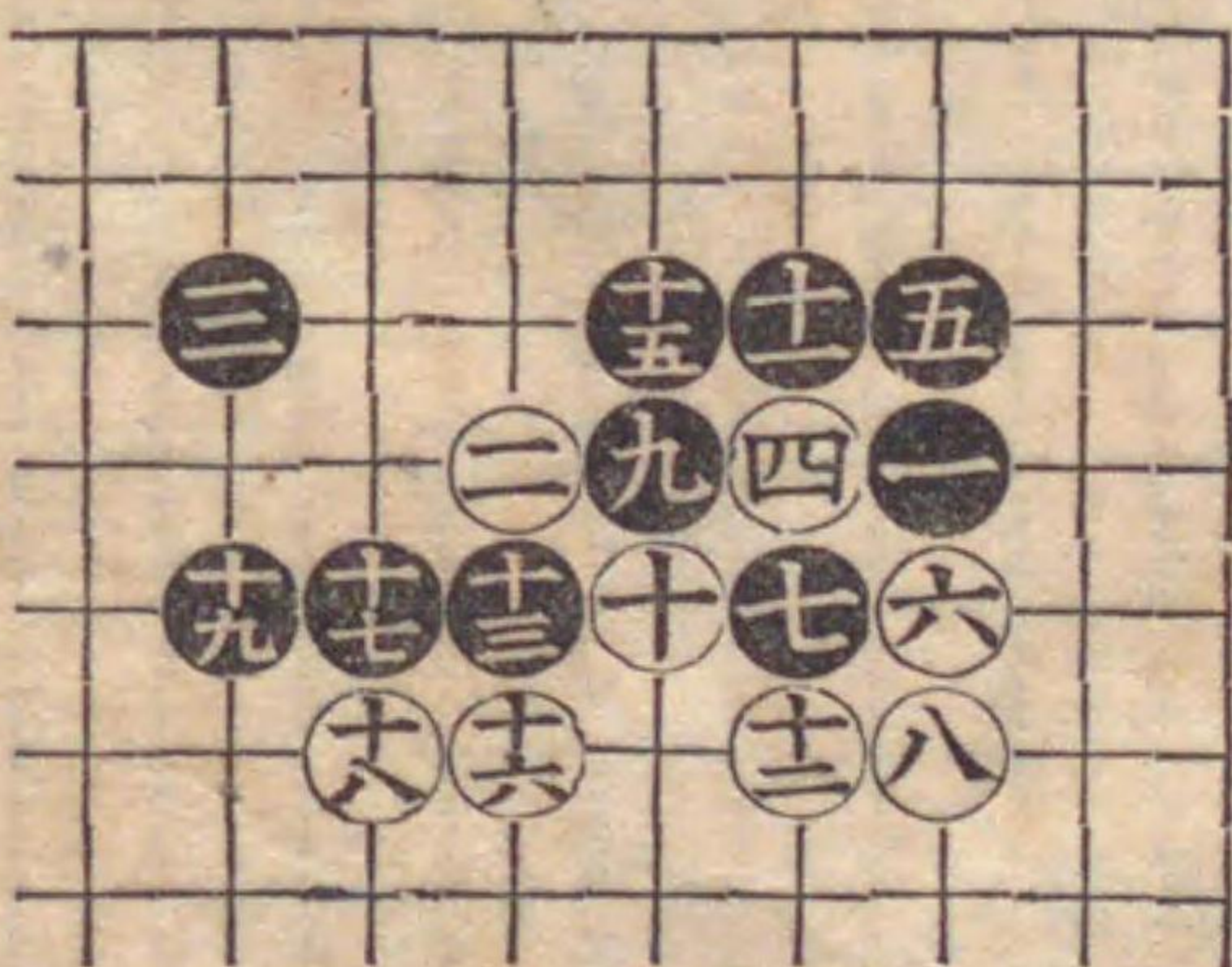
白ノ高目ニ業  
手  
黒ノ高目ニ隣  
隔トノ關係

○(第五拾七圖) 黒三の夾は、前の白一間高掛の時に黒が三と  
夾んだのと同様の意味である。

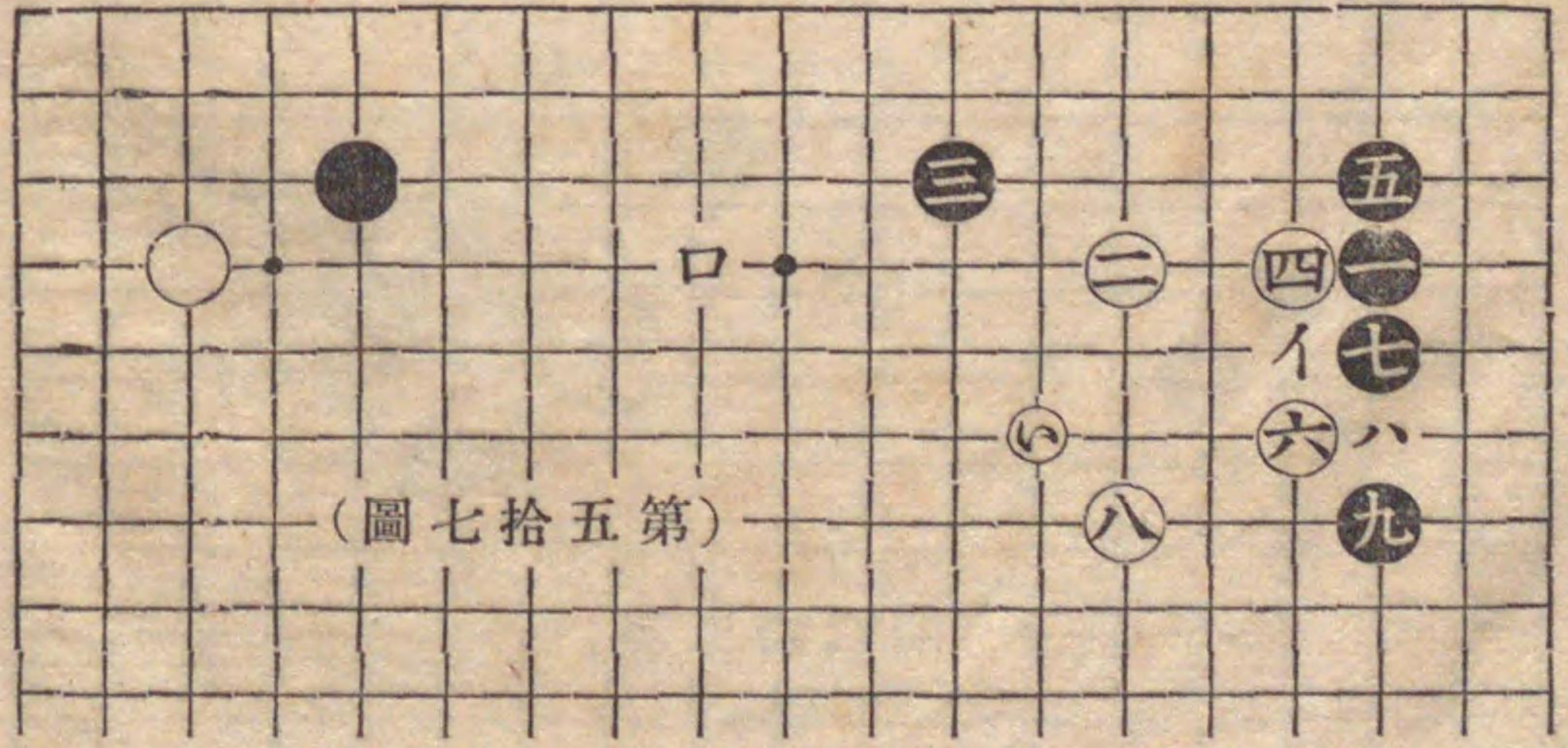
白四の接觸に對し五と下つて隅に根據を占め、白六と飛びし際  
七と行びて手堅く備へたのは確かな手である、白八は黒(イ)の  
出截に備へたので、或は此の手で(ロ)と打つてもよい、黒は九の  
手を此く右側に飛ぶ可きか、或は上側(ロ)の點に圍うて三と打  
つた意志を完うす可きかは考ふ可きである、黒が若し九の手で  
(ロ)と上側に備へたならば、白は  
(ハ)と右側を遮斷するがよい。  
本圖の後白からは(ロ)の邊より上側  
黒地を消す手がある。

○(第五拾八圖) 場合によりて白は  
右側方面に大模様を造る意で六と  
緯ね、八と行び、以下十八迄の手段  
をとる事もある、然し此の結果黒の  
實利は決して鮮少ではない。

(圖八拾五第)



(白は四の點へ一子とる)

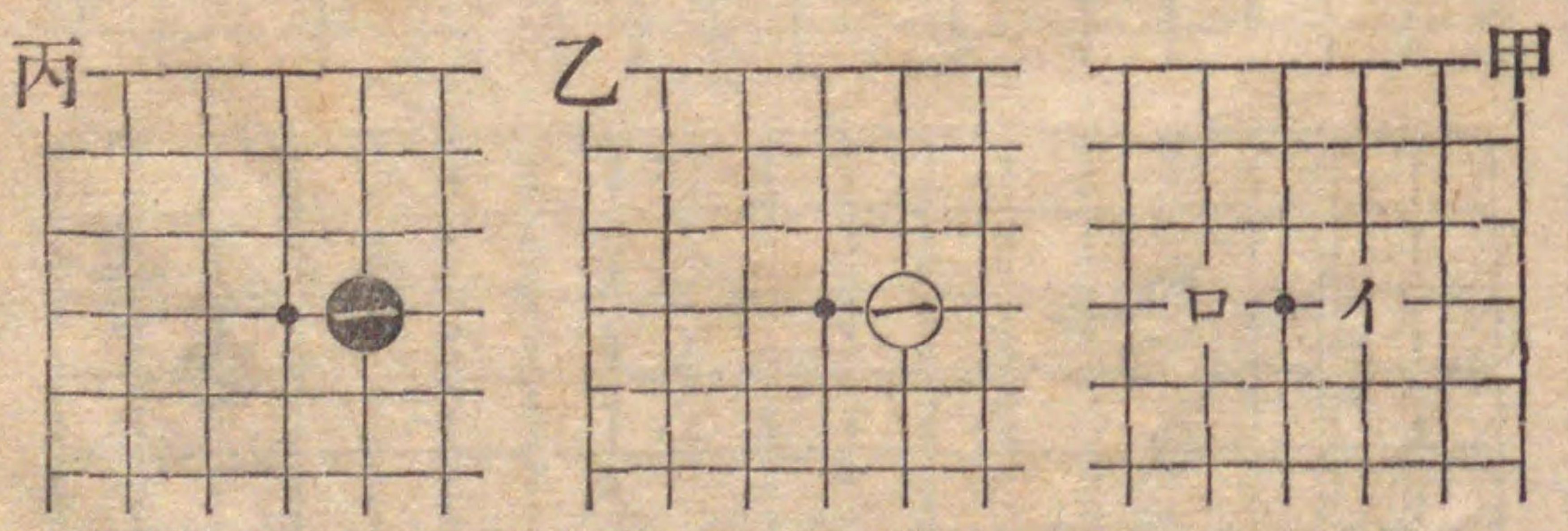


(圖七拾五第)

### 『高目に對する小目掛』

叙 論

一 此の定石を示すに當り特に盤の左上隅を用ゐたる理由。  
(甲) 即ち向つて右上隅は黒本位として見る時は、黒が第一着を(イ)と小目に下す可き點である、然るに黒が(ロ)と高く打つといふ事は棋理の上から見ても又慣例の上から見てもある可からざる事である、又假に白が(ロ)と高目に先着を下したといふ事になると、其は直ちに、黒が(イ)と打つ可き要點を閉却して居たといふ事になる。  
其故本定石は特に左上隅を撰んで手順を示す事とする(但し研究者が練習の爲め之を各隅に移し、且つ黒白の位置を變換して講究するといふ事は差支なきのみならず、大に有益である)  
二 白の高目と、黒の高目と、其の含める意味の差點、  
(乙) の如く白が先づ一と高目に據るは(未だ局勢に司配する可き時期に到達せざる際に在つては)全然趣向の着手即ち策戦よりして下した手と見る可きである。  
(丙) 然るに黒が此く高目に打つといふ事は、多くの場合之を趣向と目する譯には行かぬ、之は全然隣隅との關係上即ち場合によりて打つた手と見ねばならぬ。  
乃て以下示す定石は、假に高目の點に白の先着がある時、黒が之に對して小目に一と掛つた手順として現はして置く、是亦黒白の位置を變換して研究するは其の人々の任意である。



(石 定 先 互)



白ノ高目ニ對スル  
 凡ノ掛、小目  
 普通、三三ノ  
 打込モ常ニ行ル  
 稀ニイロヨリ  
 迫ルイモアル

黒ノ小目掛  
 對スル白ノ應  
 手ハ四種  
 大斜共五種

白手後一例

内頂

内頂ニ對スル黒  
 ノ應手

白四黒五  
 決定ノ手

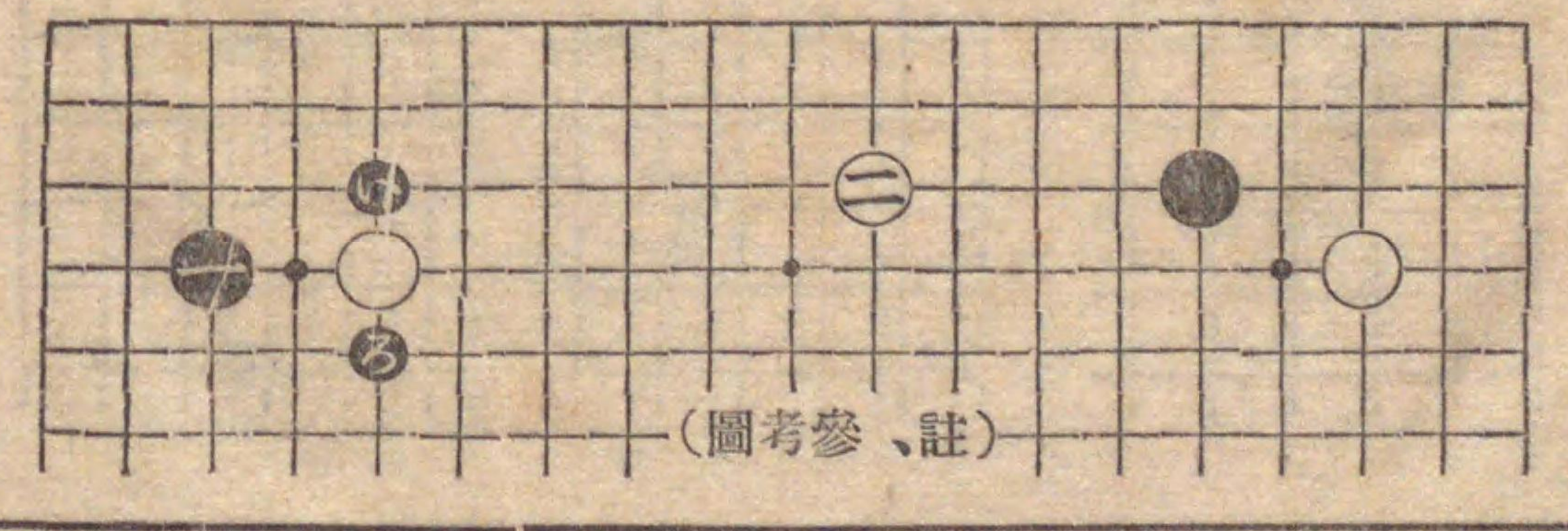
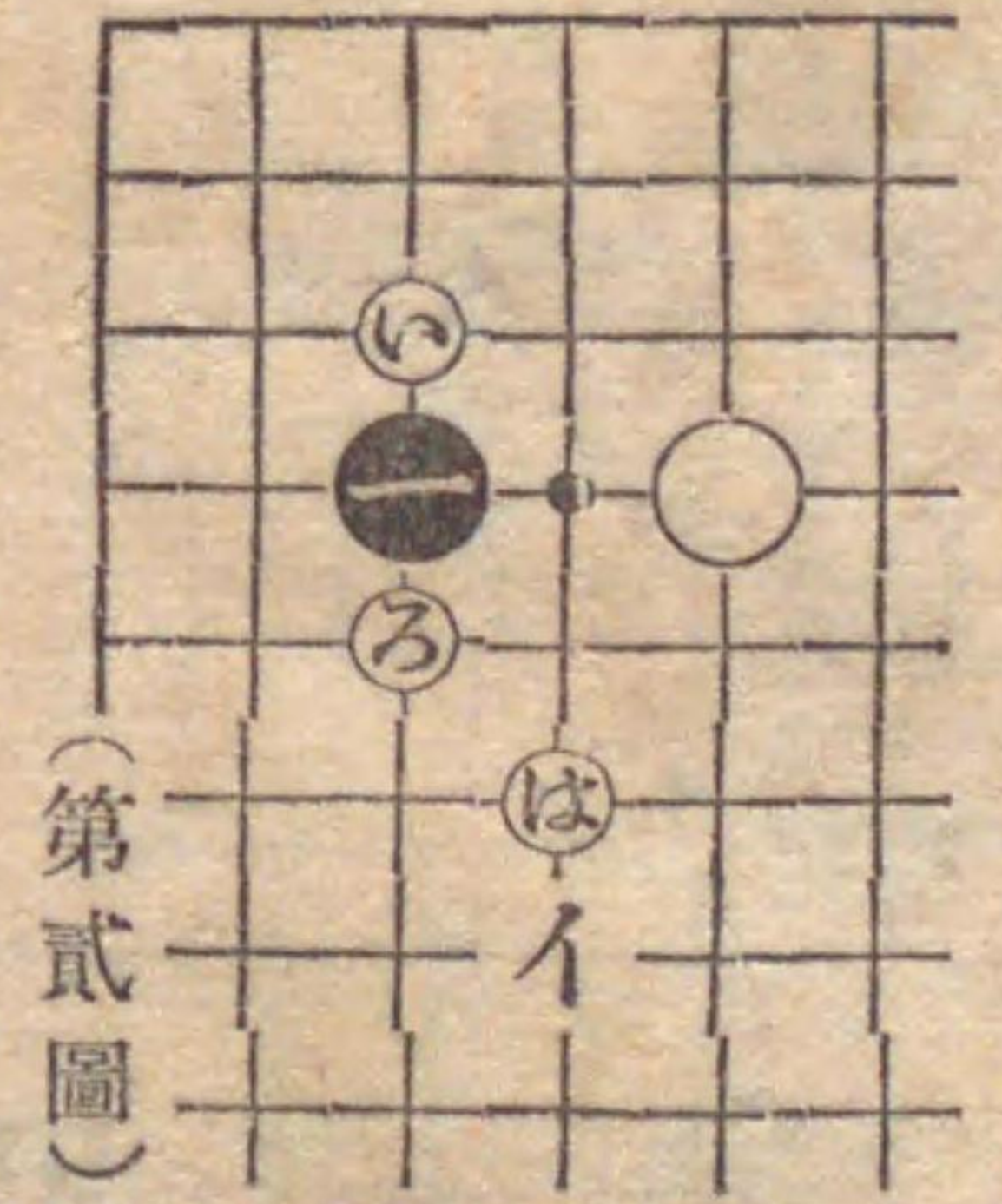
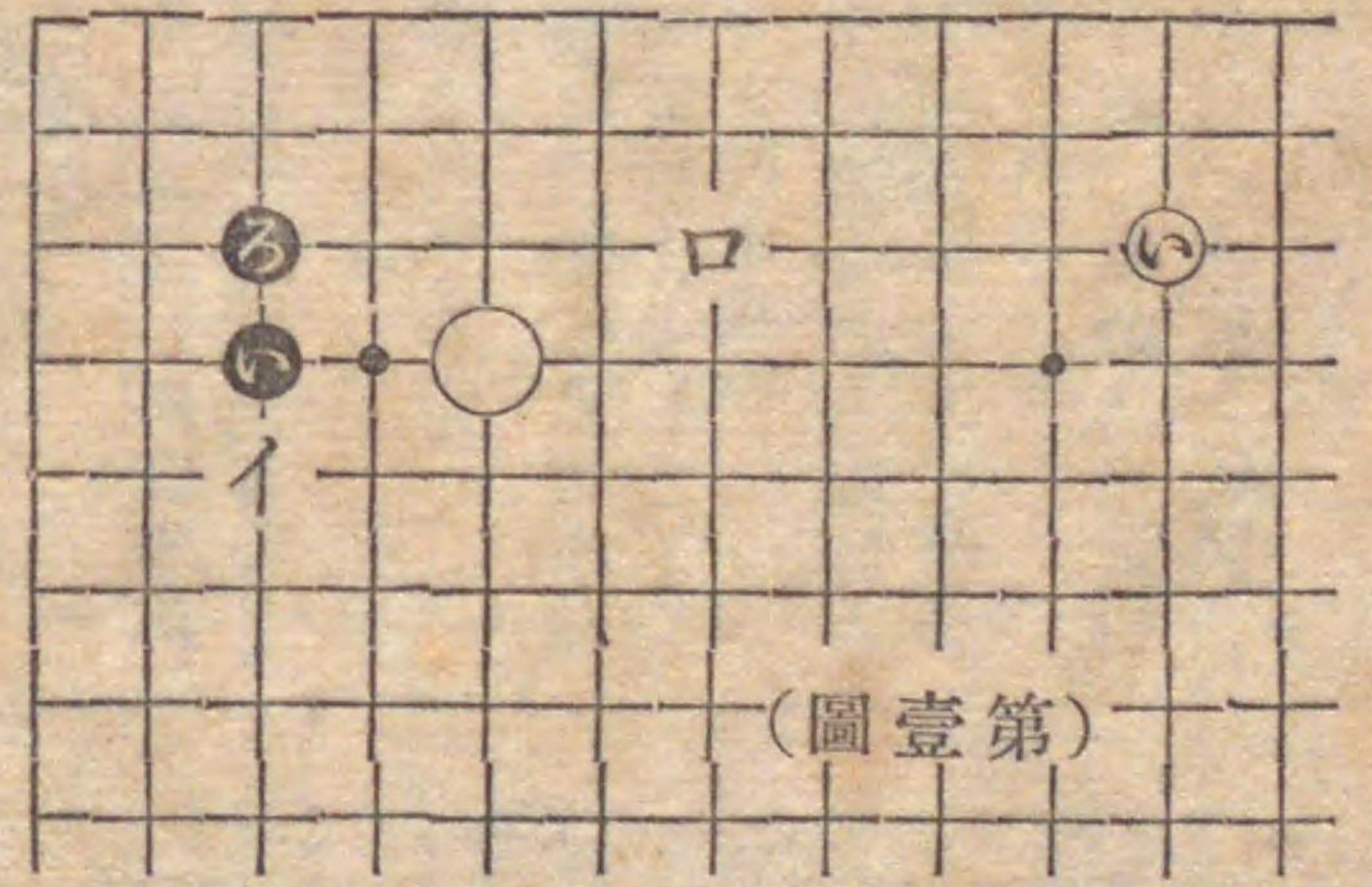
白六ノ普通  
 イト拓クイモアル  
 此拓方ニヨリ種  
 ナノ關係ヲ生ス  
 黒五ノ手火  
 卷六一頁十  
 九ノ手ヲ照參  
 ス

○(第一圖) 白の高目に對して黒の掛りは、  
 小目が普通である、若し印邊に白ある場合は  
 と三々の打込も常に行はれる。

又白の高目に對し黒が(イ)若くは(ロ)より迫る様  
 な場合も極めて稀に行はれるが、其は主として局  
 勢上から打算して、然る打方の必要を感じた際の  
 特殊の例で、定石として示す譯には行かぬ。

○(第二圖) 黒が一と掛つた時、白の應手は、  
 の内頂か、のの外頂か、の斜走掛けか、或は手  
 抜するか四通りである、又極めて稀に場合を含  
 んだ趣向として(イ)と大斜に掛ける様な手無きに  
 しもあらずである。

「註」 參考として手抜の一例を示さう、手抜と  
 いつても敢て遠く關係外へ轉するのではない、  
 例せば右上の圖の如き布石のある様な場合に二  
 と打つので、其の際黒が若くはと頂ければ、  
 前の高掛定石の手順に復歸するのである。

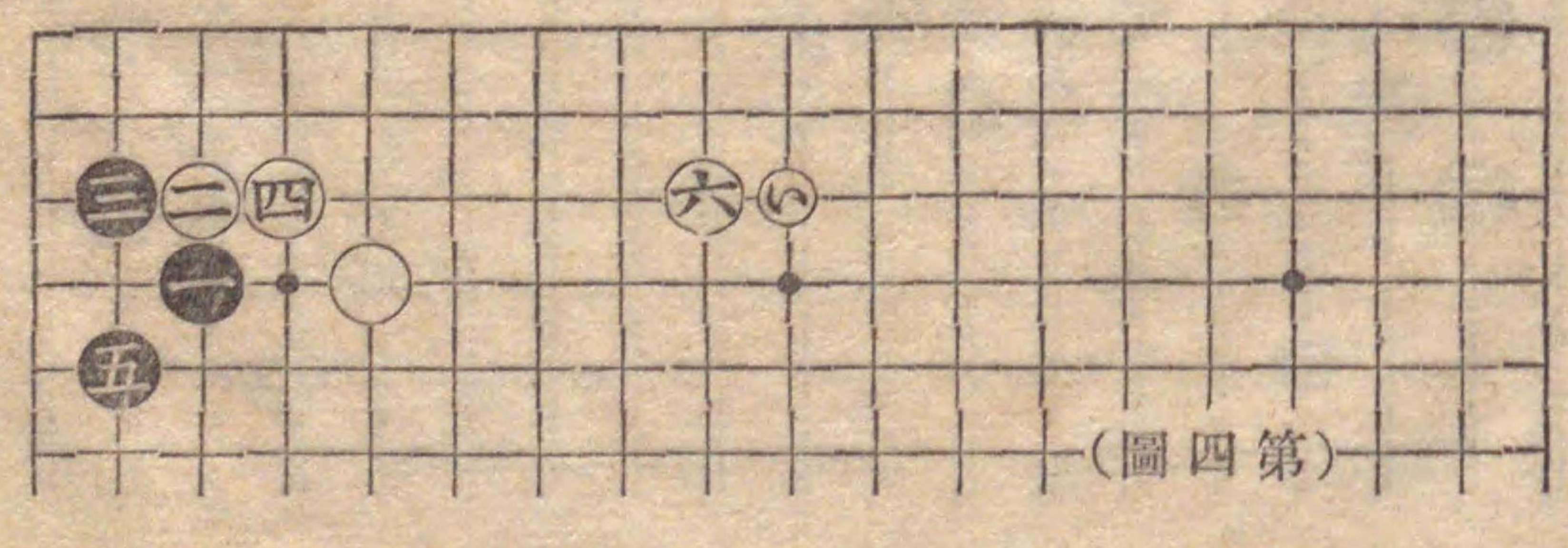
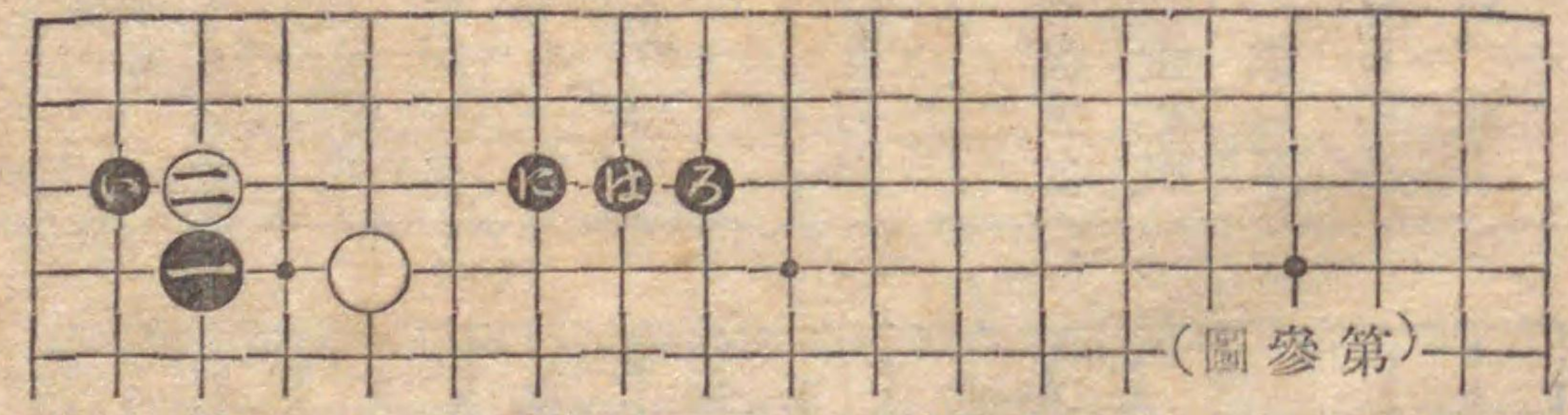


○(參圖) 白二を内頂と呼ぶ、之に對する黒の應手  
 は、隅の根據を主として同時に白を浮かす意味を以つて

と下から縛るが普通である、然し場合によりて隅を手  
 抜して、側面、等の點から迫る様な場合無きに  
 しも非ずである、此の黒三の手を等側面から行くのは  
 主として右上方面の布石關係と見るがよい。

○(第四圖) 黒三の縛に對し、白は四と引くより外に手  
 はない、黒五の係粘ぎも亦決つた手である、其の時白が  
 側面へ六と拓くのは普通の着手ではあるが、或は此の六  
 を一路廣くと星下に打つ手もある。

「註」 白の六が圖の如く狭く打つてあるのと、一路廣  
 く拓いてあるのとは、左側の黒に種々の關係を及  
 ぼし、其と同時に左側の黒の行動からして白も亦影響  
 を受ける事になる、其の詳細は以下示す諸圖を順序的  
 に講究すれば自然に了解する。



(五先定石)



白六ノ時イ  
ノ時  
黒ノ應方

白六ニテキヲ  
接キアル時黒  
如何ニ掛ル  
キヤ

白目下ニ六ノ時  
黒手救ハレハ

イト打ツ  
ハト打ツ  
面白カラス

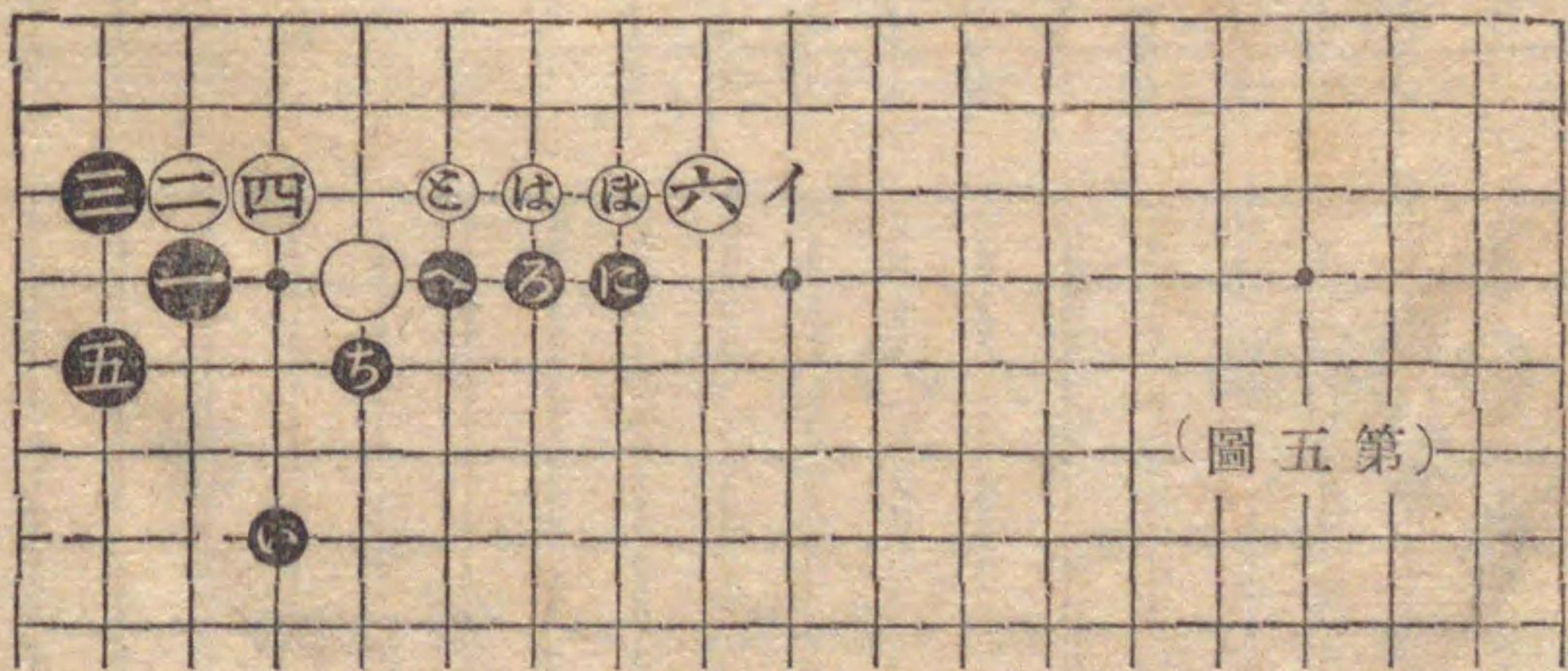
イト臨ム手  
イニ対スル白  
應キ

黒七ノ時白手  
接セヌ考ナ  
ラハ初メイ  
ト打テオシ

○(第五圖) 白が六と拓いた時、黒は如何打つ可きかといふに手抜して他に轉じて差支ない、黒七の手で●と備へるのは少し緩い、其の理由は、次で白手抜の際、●と臨み、白◎と應じ、黒◎、白◎、黒◎、白◎と運んだ結果、最初に打つた●の一子が愚に歸する事となる、之は白が手抜して黒から追つた場合の論であるが、反對に(黒◎と備へずして)白より追まられた場合を想像しても、白の上側の拓きが一路窄く六と打つてある時は、黒も受太刀となつても忍び易い理由がある、其は後に示す第拾圖の通りである。

「註」 白六が一路廣く(イ)にある場合は黒は◎と備へねばならぬ譯は次の第六圖説明の通りである。

○(第六圖) 白六と廣い時に、黒手抜すれば、忽ち白に◎と追まられる、此の白◎の手は、黒が更に手抜すれば●の點に尖んで黒を攻めやうといふ意を含んで居る、白に◎と來られては、此の黒は單に活きると云ふばかりで、白の勢力をして強大無比たらしむるの不利がある、其故白◎に應じて黒は◎と尖んでおかねばならぬ、此くても尙白に◎と引かれて形勢の雄大を致される。

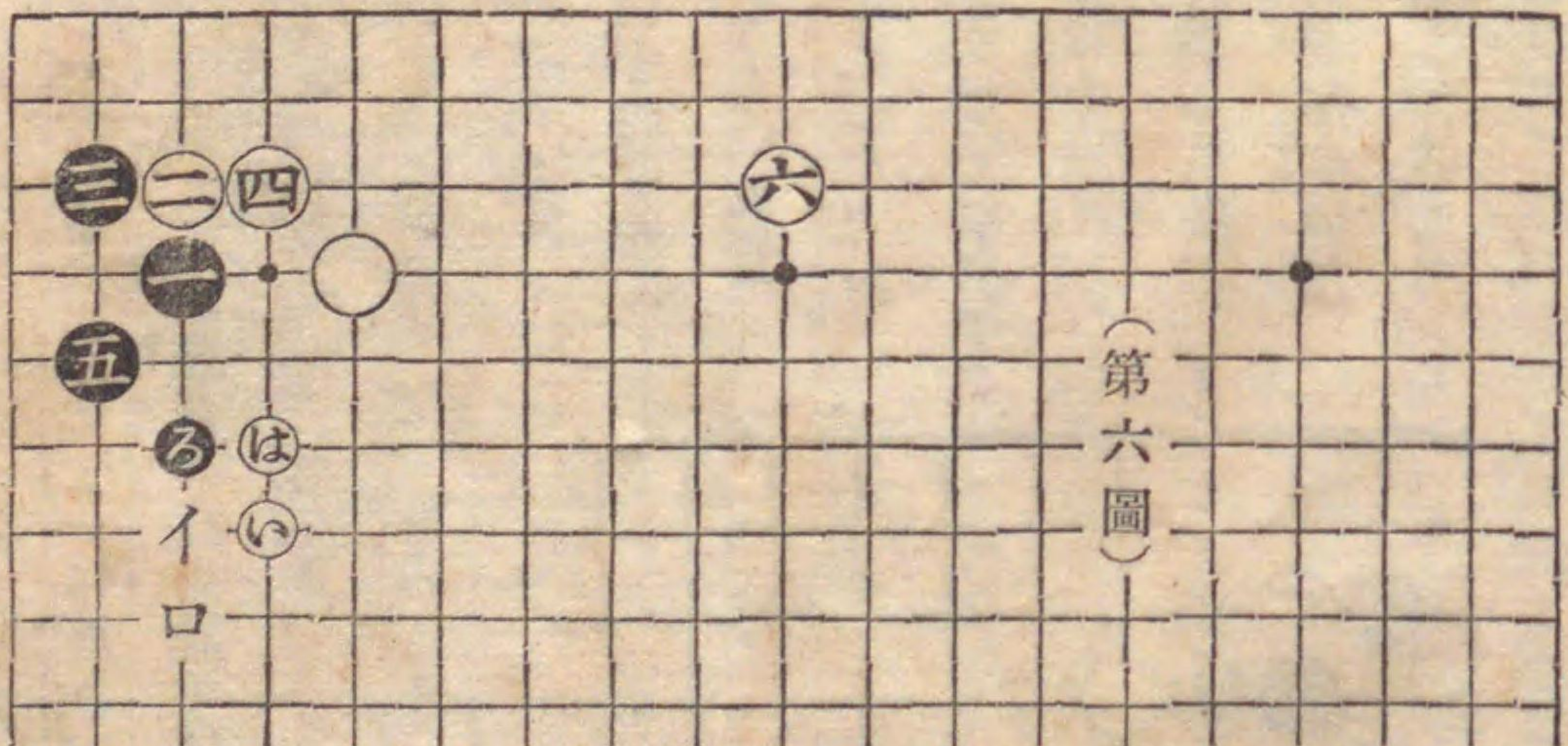


(圖五第)

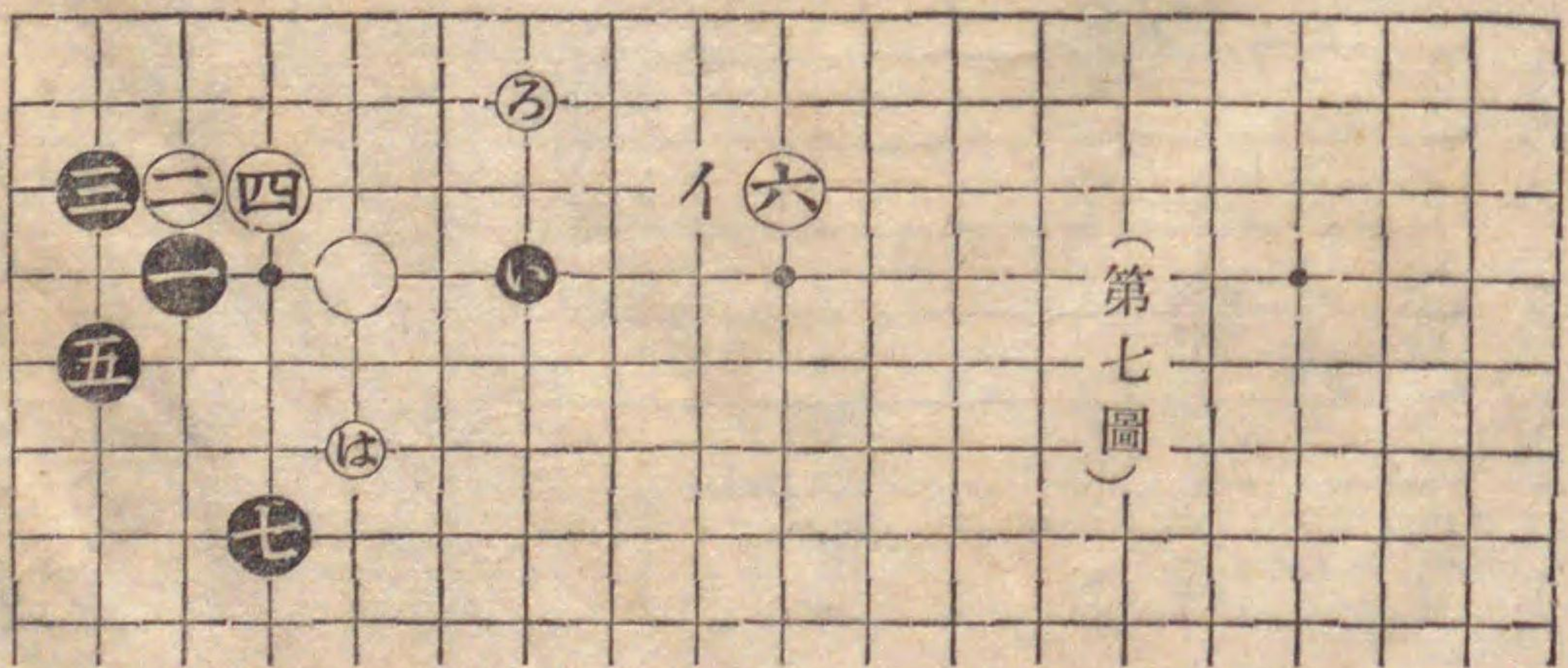
「註」 白◎の手を◎と打つのは面白くない、若し◎を◎の點から打つと黒に(イ)と走られ、白◎と押した時更に(ロ)と一歩づゝ先に出られるの不利がある。

○(第七圖) 前圖説明の理由によりて、白六と廣き時は、黒は七と備へておく可きである、此の時白は如何に應ず可きかといふと、無論手抜である、但し此の形には黒から何時でも◎と臨む手がある、黒に◎と來られた時、白が◎と低く應じて居れば無事であるが或は白は◎と飛んで黒を隔て、打つかも知れぬ。

「註」 黒七の時に白が手拔せぬ考ならば最初に(イ)と窄く打つておけばよいのである。



(第六圖)



(第七圖)



白六の時黒  
七と迫る手  
十ノ犠牲子  
十三ノ圍方

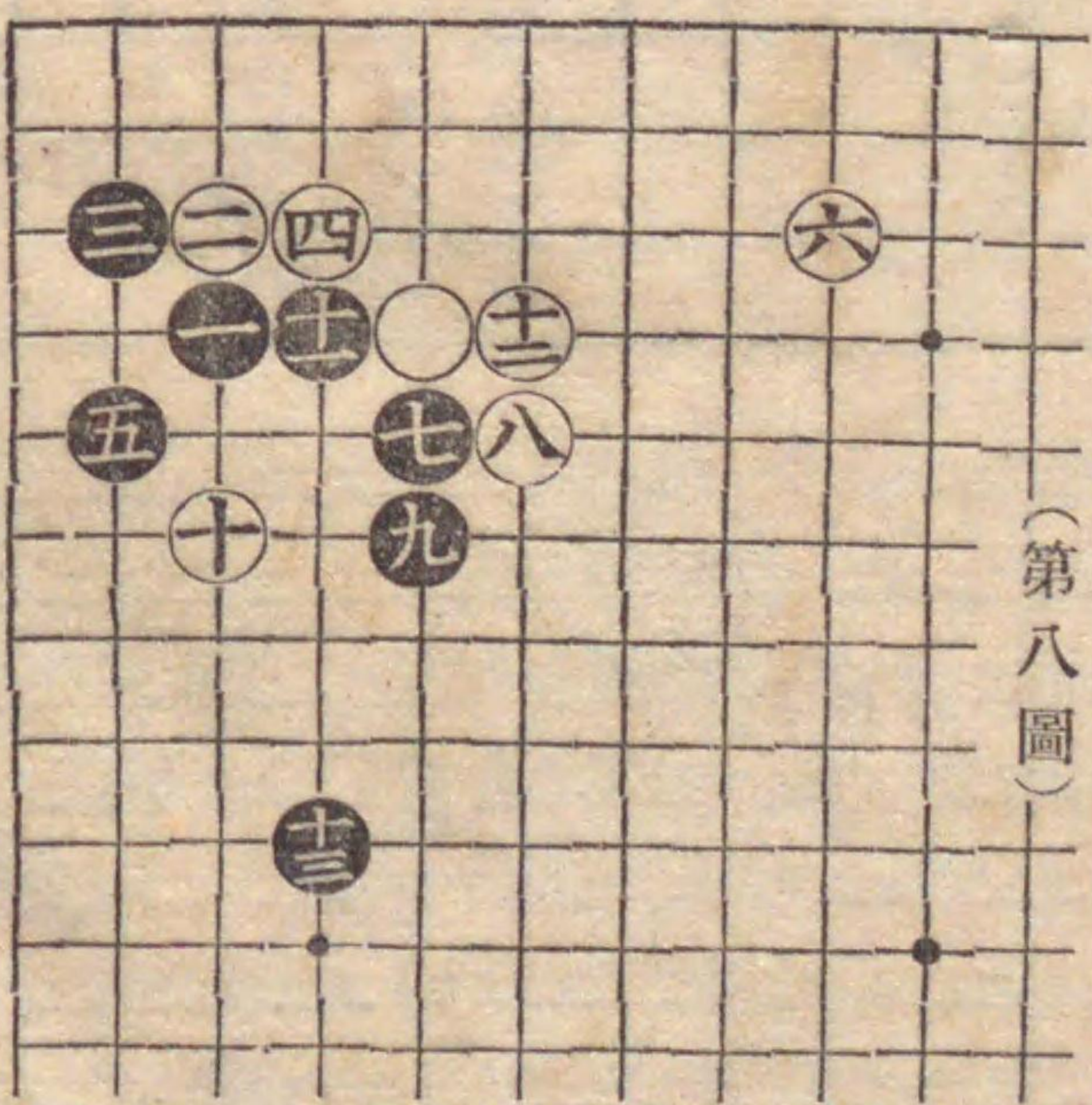
白十二敵意  
形に導く意

何處迄モイ  
ノ欠点ヲ残  
ス打方  
丈和氏打  
基ニ在リ

○(第八圖) 白の拓きが六と窄き場合に、黒は七と密接して迫る手段もある、白八の縛に應ずる黒九の行は言ふ迄もないが、白が十と犠牲子を投じて、黒を十一に導き、其の機會を以つて十二と始末しやうといふ策は巧妙である、此の十二の點に截斷點が残つて居て黒から截られては、白は手薄くなる、黒十三の圍ひは初に七と頂けた意志を完うしたのである。

○(第九圖) 黒十一は前圖の如く白に運ばれるのを嫌うて、何處迄も(イ)の缺點を残さうといふ意である、白十二は黒に(ロ)の點を截らして十三の點からアテ黒を愚形に導かうといふ手である、白十四は黒に(ハ)と打たせて十五の點を截り、黒を絞ほらうといふ意、黒十五は之を避けたのである、本圖は後に至つて、白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)と運ぶ手が残つて居る。

「註」此の形は丈和師の擲棋に出て居る、一見黒の方が姿勢重複して不利の様であるが、白六が窄いだけに左程でもない。但し(イ)と(ロ)の應接もあるといふ事を示すに止まるのである。

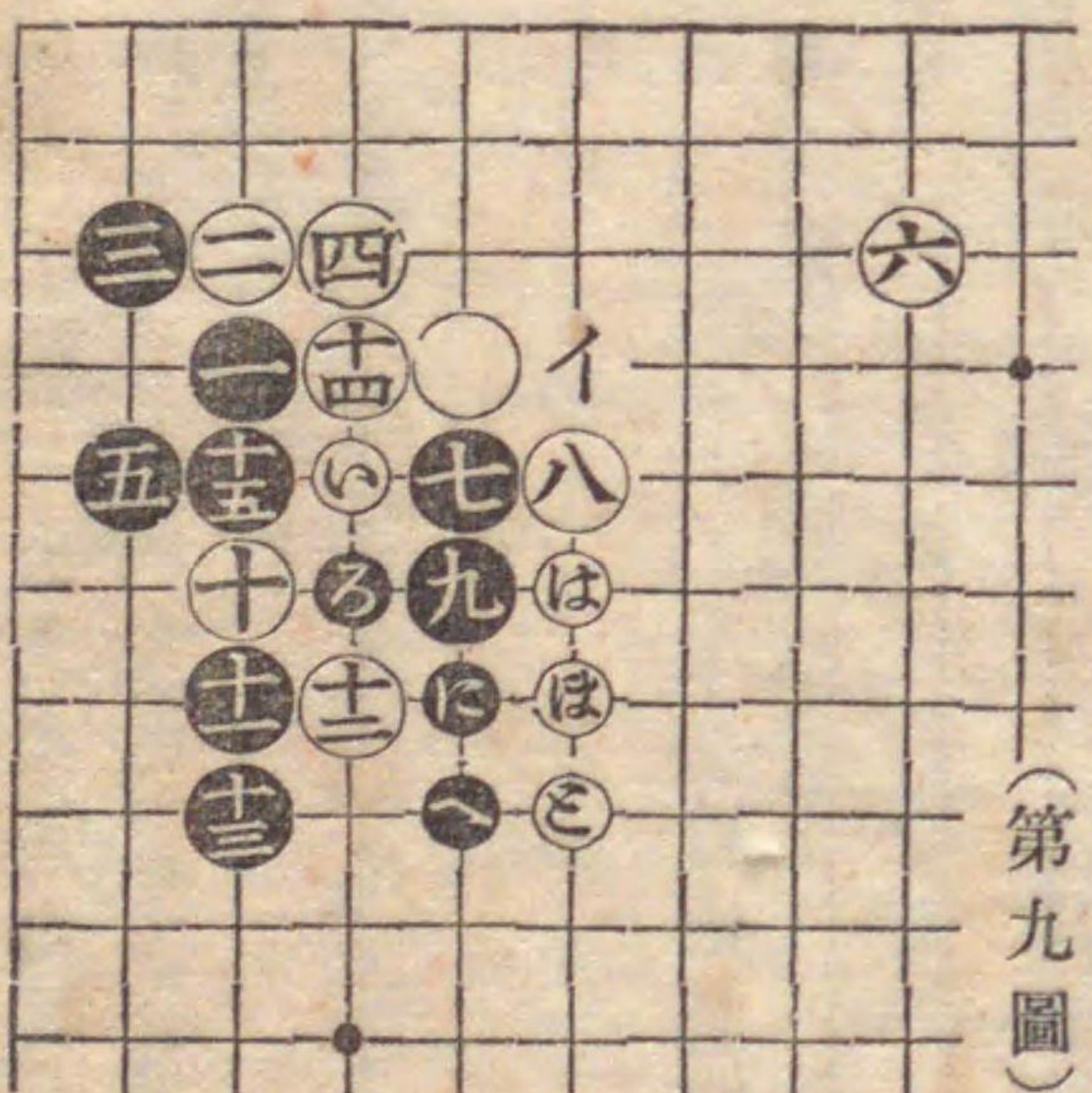


(第八圖)

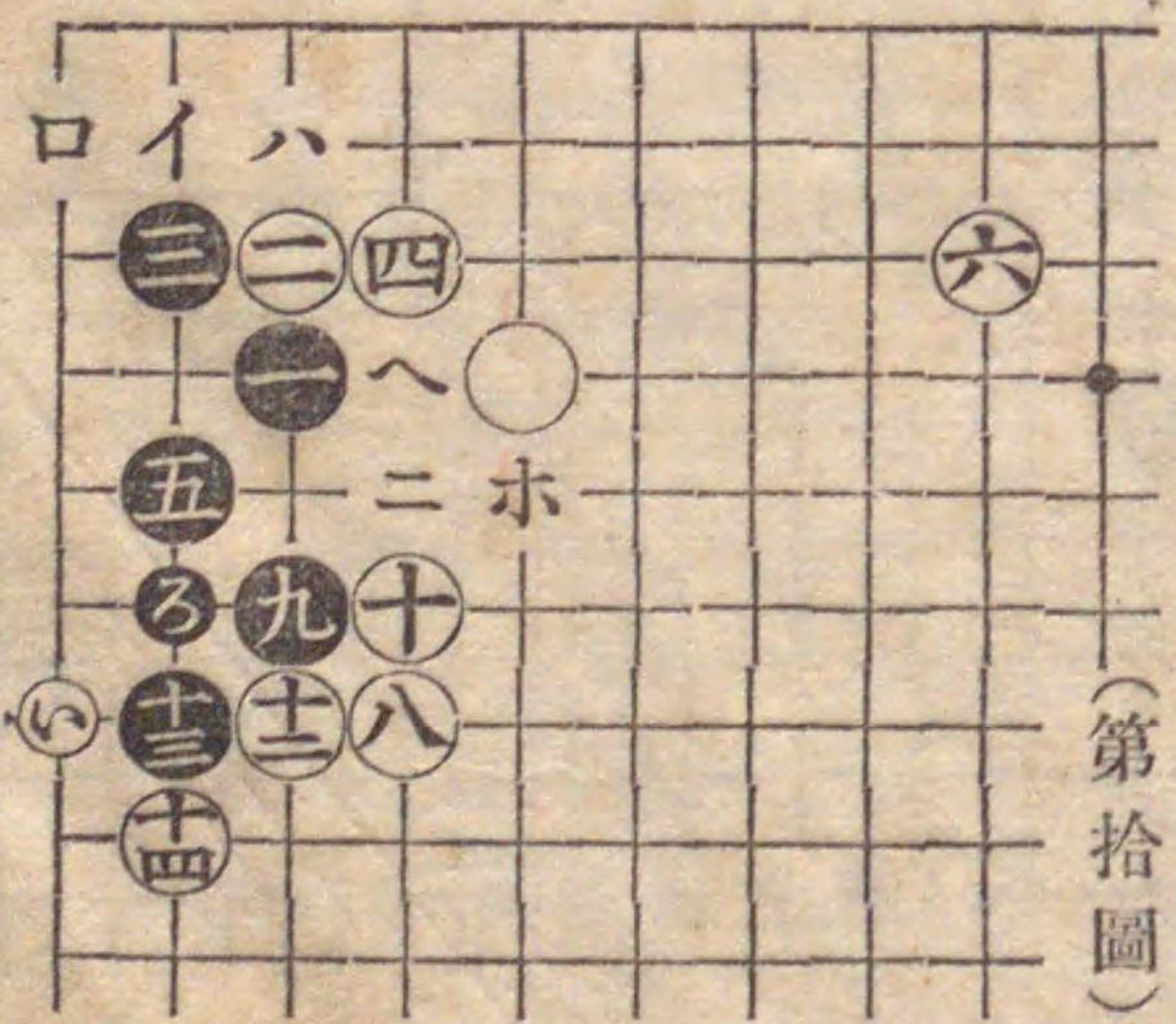
黒手後、  
要領、  
三手後、  
決ミテ黒ノ  
不利ニ在リ

○(第拾圖) 本圖の如く黒手抜きの後、白が八と迫れば、黒は九と應じ、白十の時、更に手抜して他に轉じるがよい、次で白十二の曲りに應じて十三と縛ね、白十四の抑への時、更に手抜するのである、後に白から(イ)と縛ねれば黒(ロ)と粘り又白(ハ)より(イ)と抑へれば黒(ロ)と縛ね、白が(ハ)と粘りだ時、黒は(ニ)と膨らみ、白(ホ)と鎖し黒は(ヘ)と活きる手順である、但し白は(イ)と隅から抑へるが利か或は(ヘ)と上から迫つて隅で活かすが利か、兩者の取捨は、熟思して時機の可なるまで保留しておく可きで、黒も亦急いで隅(イ)と行びる必要もないのである。

「註」本圖は七、十一、十五の三手抜の定石である、單に此の處を見ると非常な不利を犯して居る様であるが白六の拓きが窄いのと、手抜した三手は局面の他の部分でハタライテ居る譯である。から決して黒の不利とは言へぬ。



(第九圖)



(第拾圖)



白酷く黒に迫り打方

三ト夾返ス

場合

四手ノ種

類

イト下リタルヨリ生スル

不利

普通ノ應

接四五六七

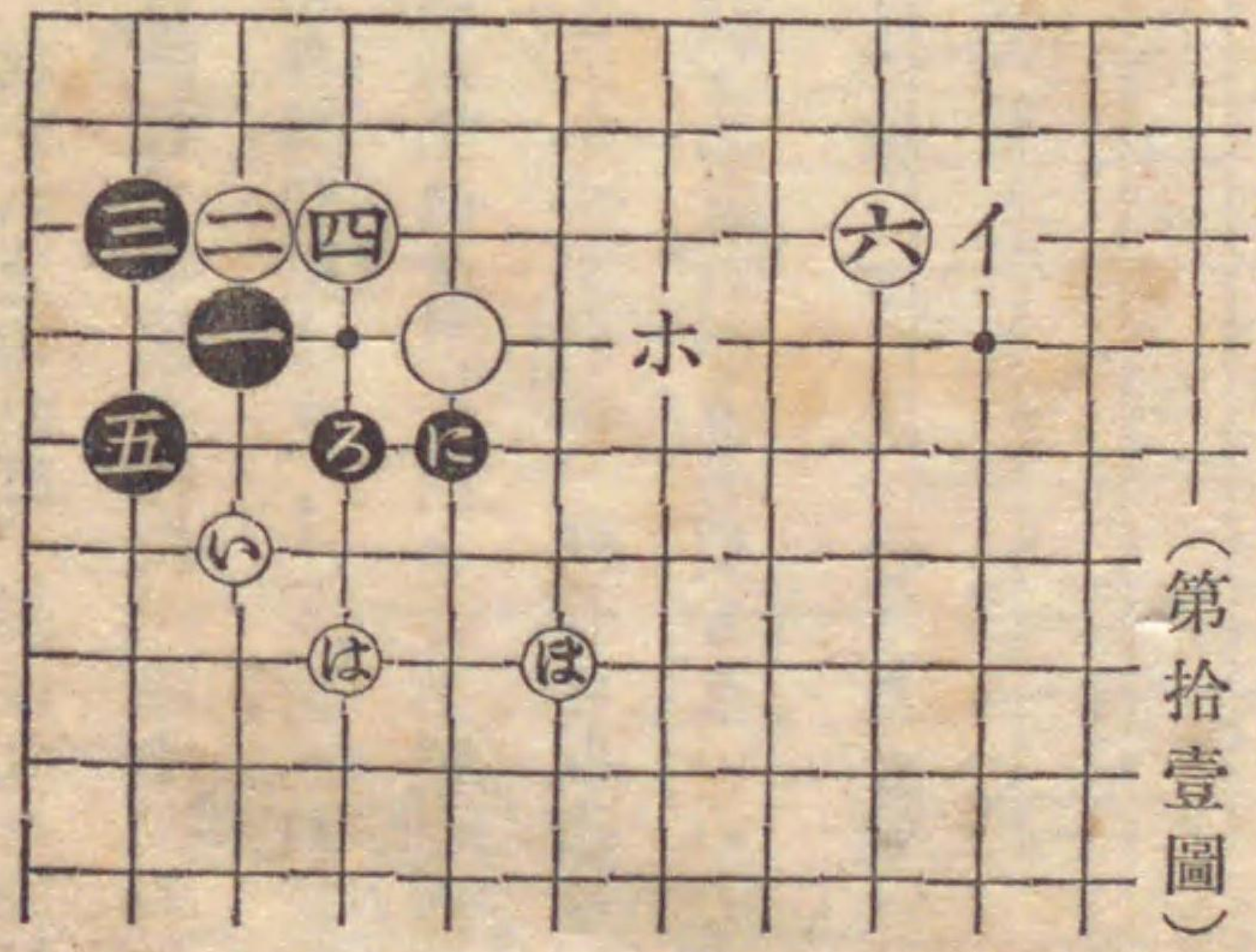
○(第拾壹圖) 白が此の黒を攻る際、必しも前圖の如く上から壓迫するのみとは限らぬ、或は本圖の如く(イ)と酷しく迫り、黒(二)、白(三)、黒(四)、白(五)と打つて、黒を中原へ逸出せしめ其の機を運用して左側下方面に利を占めやうとする様な手段もある。

「註」 白六が若し一路廣く(イ)にあれば、白は(三)と飛ぶ手で(ホ)と備へなければならぬ。

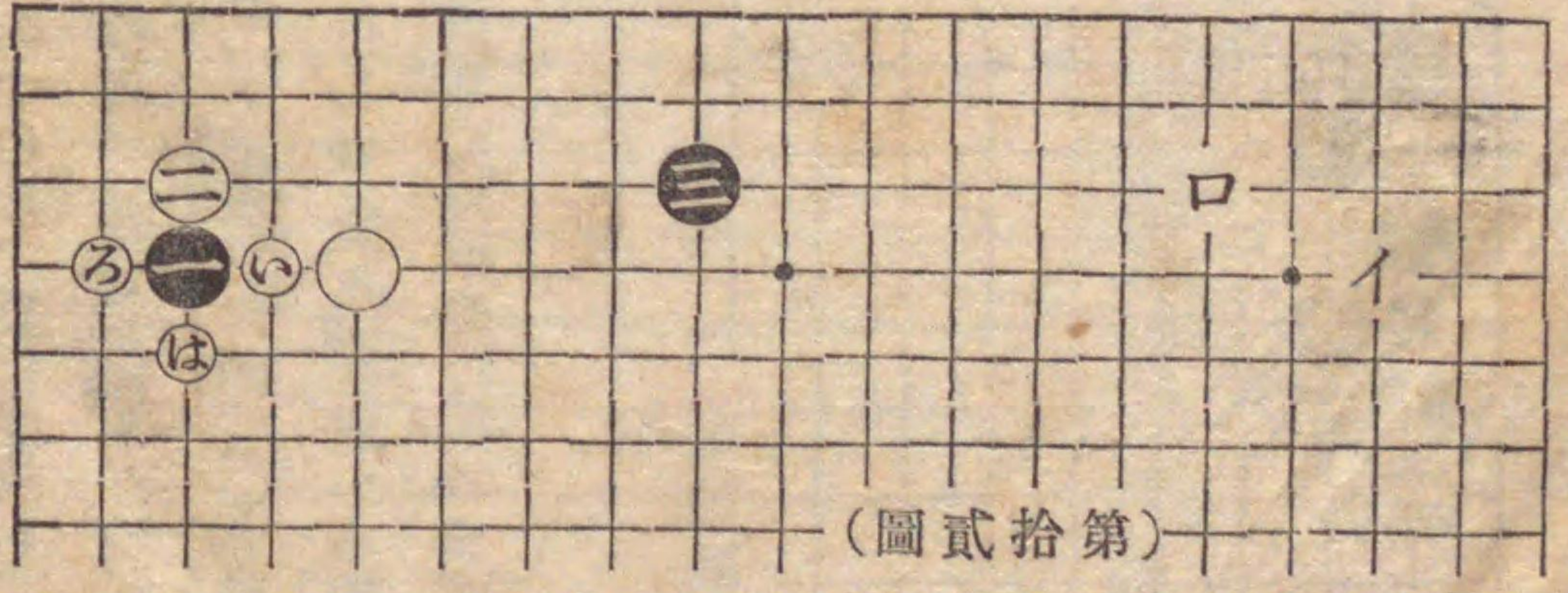
○(第拾貳圖) 黒が三と夾返すのは、主として場合の手である。

ち右上方面(イ)(ロ)等の如き黒の布石があつて、其と相待つて大地域を割さうといふ様な場合である、黒三の時、白は四の手で(イ)とツキアタルが普通であるが、或は、(三)と下から掬ふ手、又は(三)と夾む手もある。

○(第拾參圖) 白四、黒五、白六、黒七は普通の應接である、白六を(イ)に下げれば後に黒より(イ)と詰められる不利がある、或は次に示す參考圖の如き危険も伴ふ。



(第拾壹圖)



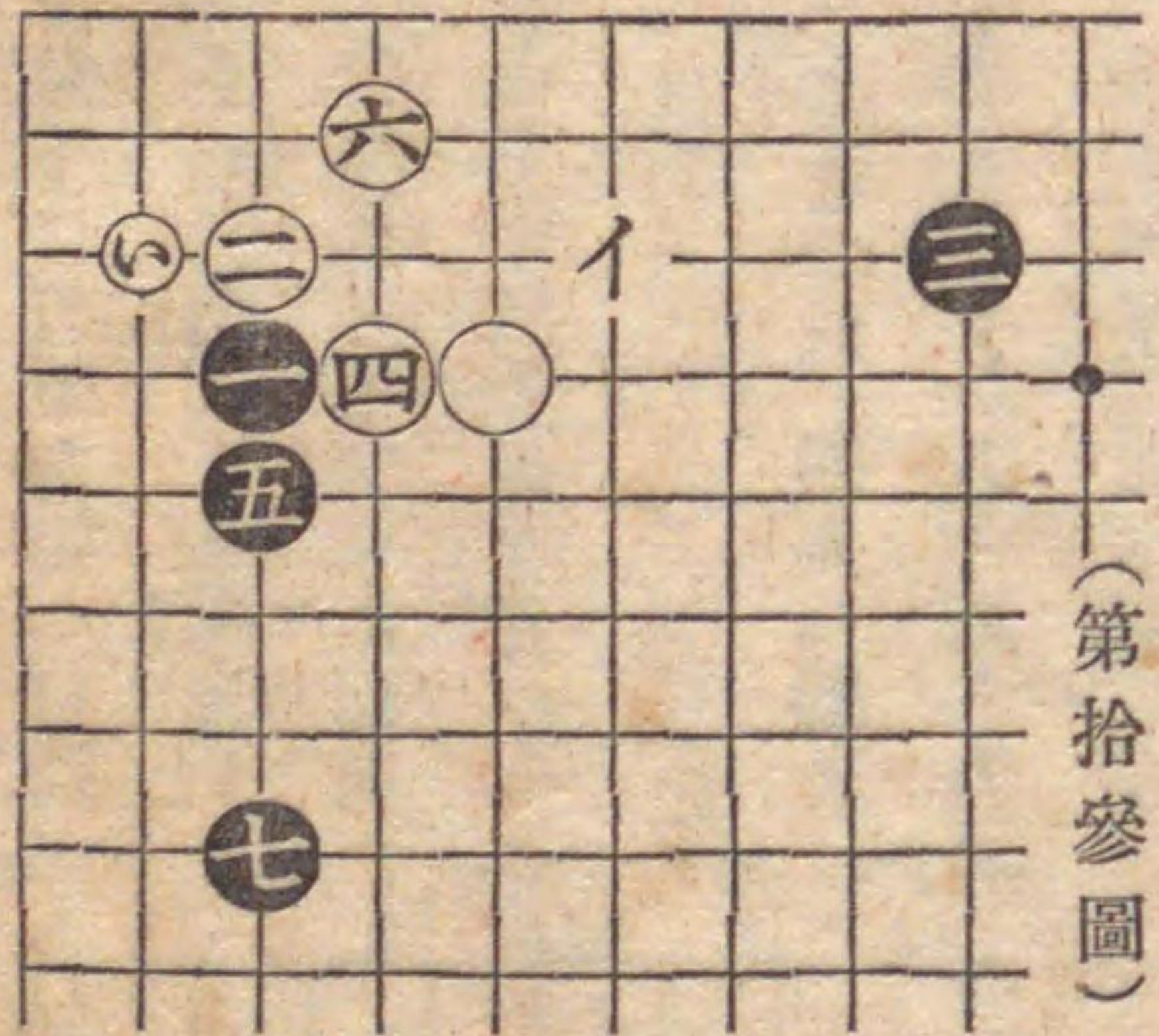
(圖貳拾第)

月卷四十六頁參照

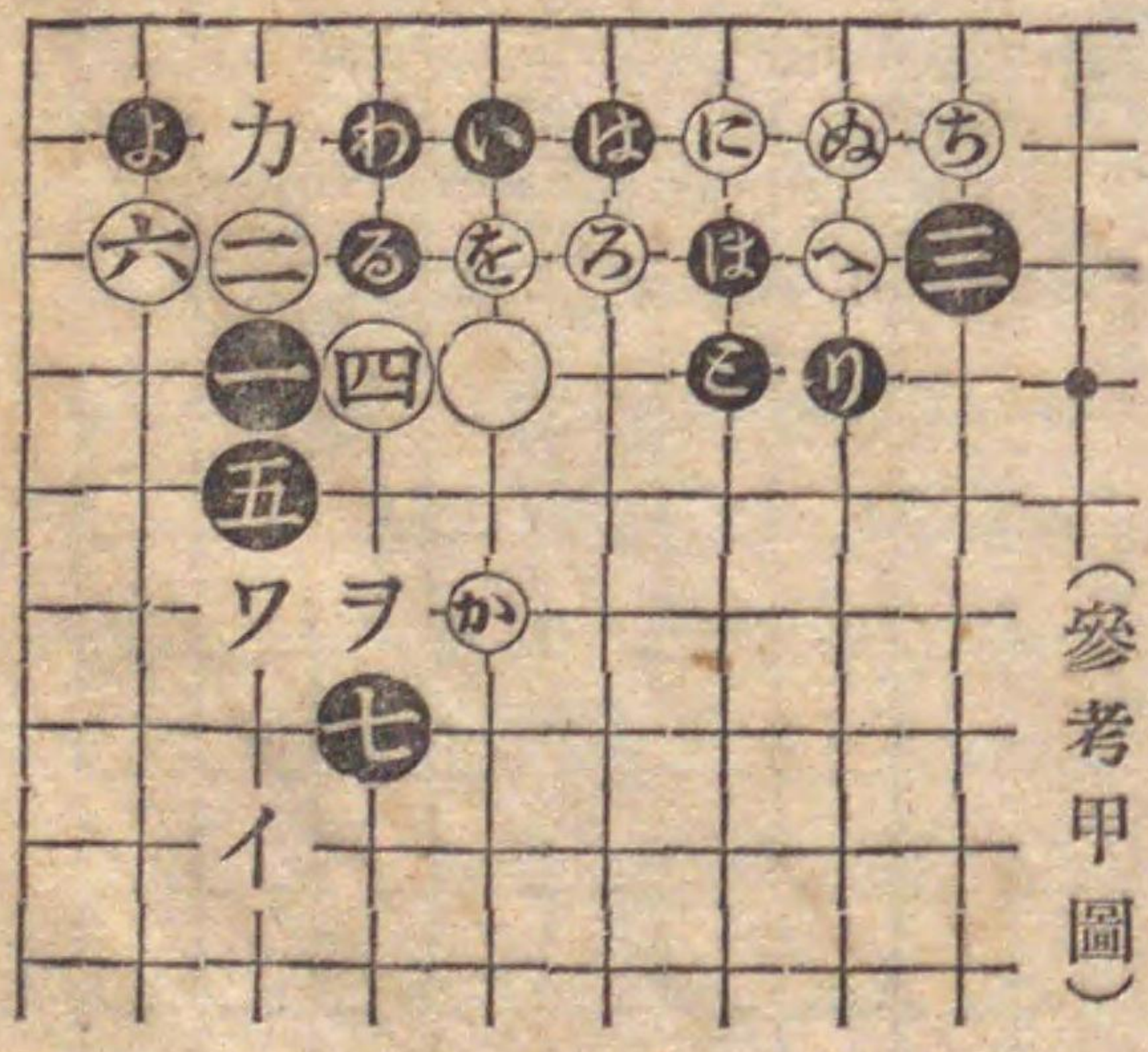
イト下リタル為ノ危険 敵ノ欠点ヲ 衝ク手

参考甲圖 後習研究

△(參考甲圖) 白が六と隅へ下らば、黒は七と斜走するがよい其時白若し手拔すると、黒に(一)と侵入される、次で白(二)、黒(三)、白(四)、黒(五)、白(六)、黒(七)、白(八)、黒(九)、白(十)、黒(十一)、白(十二)の時、黒に(一)と截られ、白(二)、黒(三)の時白は一着(二)と備へなければ手が足らぬ、乃で黒から(四)と打たれて其迄である。但し黒七が普通(イ)の點に二間拓してあれば白手抜の時黒(一)と走つても本圖の様にはならぬ何となれば白は(三)の手の時に先づ一着(ア)と掛け、黒に(ア)と應じさせてから(イ)の手順を履み、今度は(ア)に凌ぎがツキテ居るから白は(三)の手で(カ)と隅から迫つて四子の黒を提る手順になる、然し是は黒が七の手を斜走にせなかつた時の事で、黒が七の斜走すれば(三)の手は免れない、然らば黒七の時白が八の手で(三)の邊に備へておけば如何かといふに、其は後手である即ち最初に第拾參圖の如く六と係粘げば、一手で無事と先手とを占め得らるゝものを、此く後手まで引いて隅へ下る必要はないのである。



(第拾參圖)



(參考甲圖)



前考考中図  
ト比較研究ス  
キナリ

白ハハ備ヘ  
ネハナラヌ

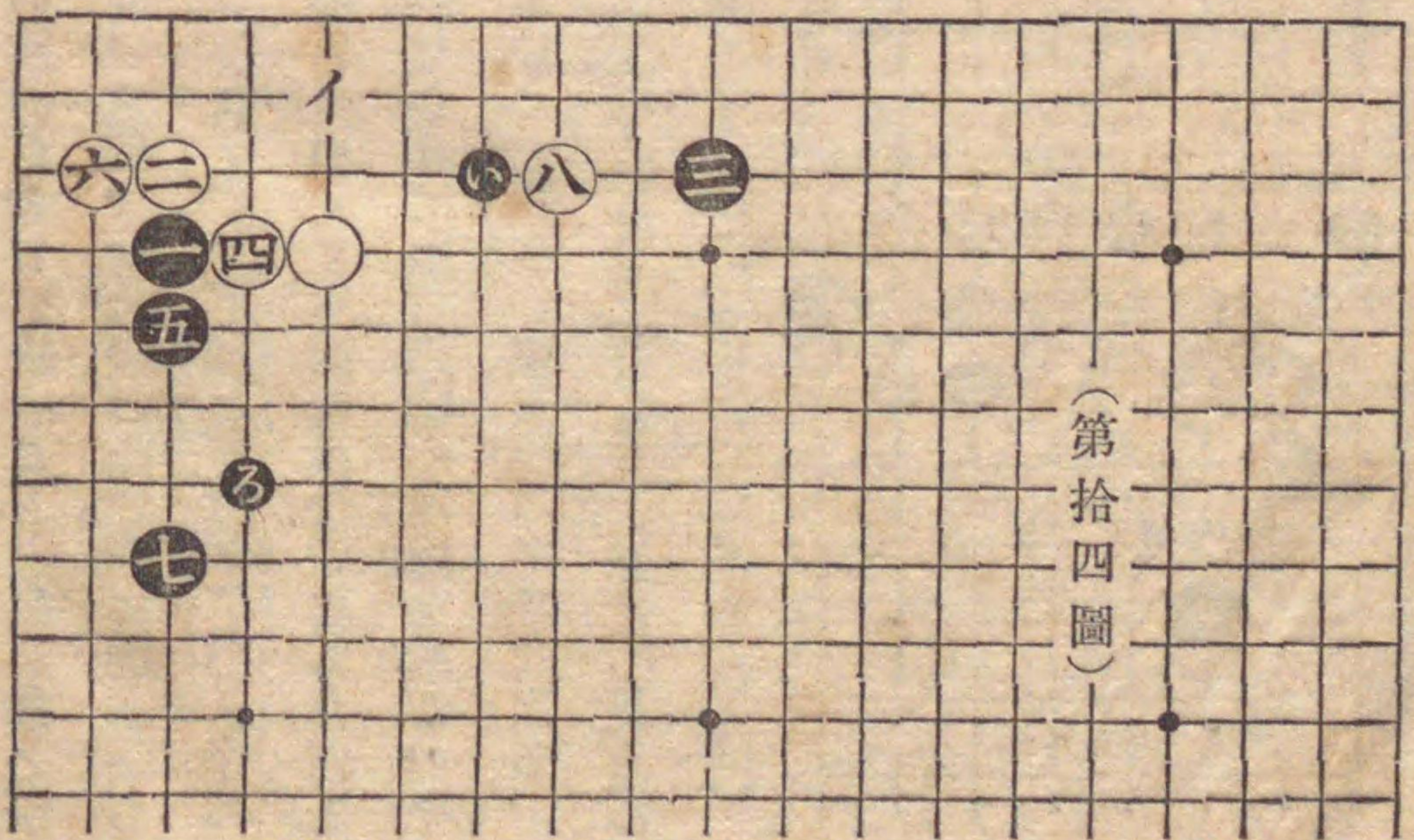
本圖ノ場合  
セヲ打ト打  
ツイハ恐クア  
ルマイ  
二間ニ夾ル  
場合

○(第拾四圖) 黒三を此く一路遠く星下に打つた時、白四黒五と運んだ後白は如何打つ可きかといふと、此の際は六と隅へ下つて差支ないのである、即ち、黒が七と低く二間に拓く可きは言ふ迄もないが、白八は必ず圖の通り備へなければならぬ。

「註」 何故なれば白が若し八を手抜すると、黒からと迫られ白は折角六と下つた利益を大に削られる、即ち此の場合窄く應じるの不利を嫌うて白が更に手抜すれば、今度は黒から(イ)と走られて猛烈に根據を犯されるの懼がある。

尙本圖の如き場合に黒が七の手を○と高く打つ事があるか如何かといふと、其は左下方面との關係にもよるが、其ういふ場合は、恐らくはあるまいと推測される。

○(第拾五圖) 前圖と反對に黒が此く隅に接近して三と打つた時に白は如何するか、といふと、白四、黒五の後、堅固



黒三ノ夾ノ意

三ト夾ハニ日  
必要條件

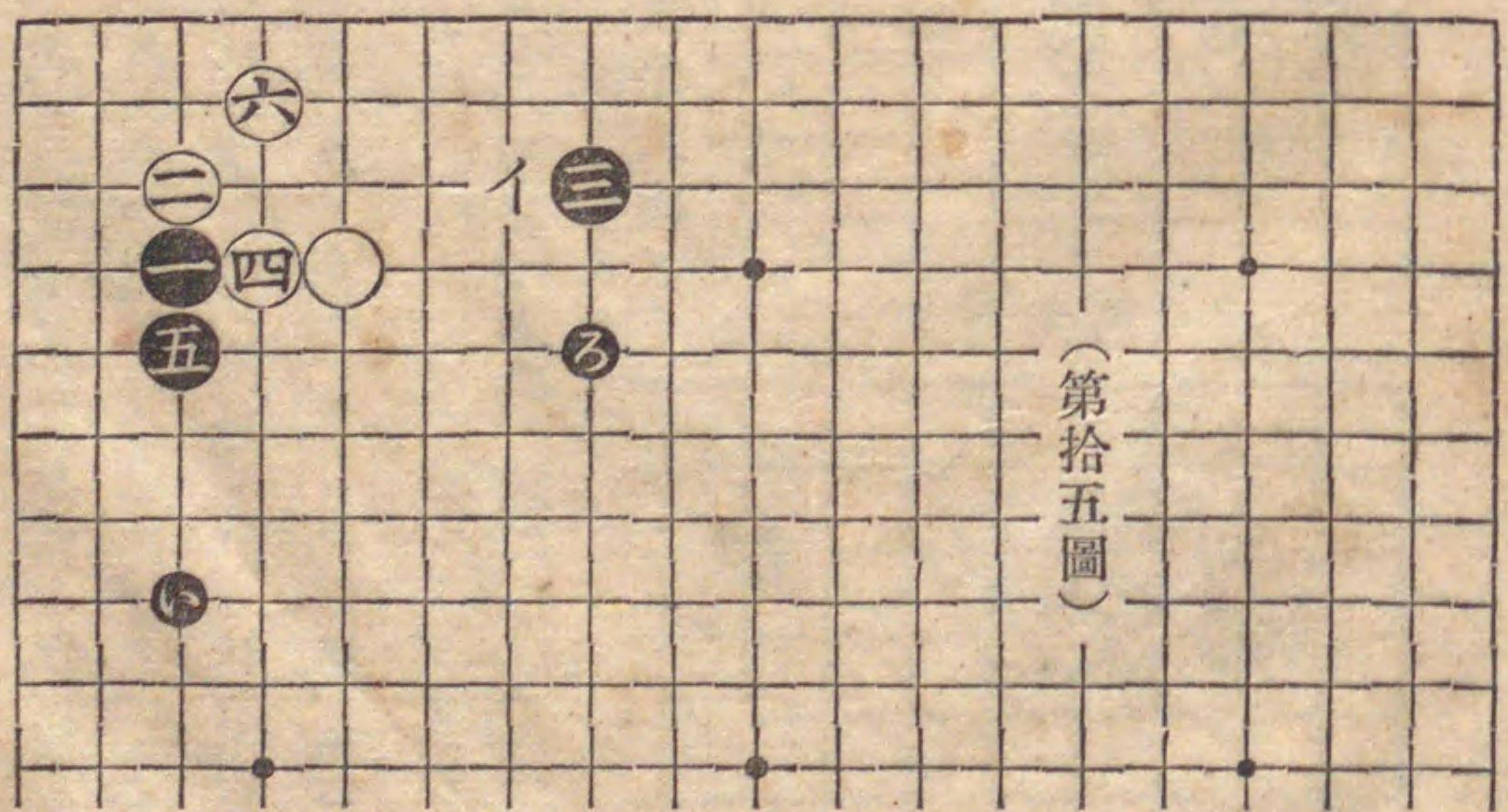
一問ニ夾ル  
場合

に六と係粘可きは無論の事である、次で黒七の手は○の點に拓くか或は○の點に飛ぶかは考ふ可きである。

『結論』

元來黒三の夾みは白に此の方面に拓かせまい、といふ用意である、して見ると其の半面には(右上布石の關係からして)夾んだ黒の三其れ自身が反對に白の爲め更に夾み攻められるといふ様な患のないといふ事を必要條件としなければならぬ、といふ理を含んで居る、乃て黒が三の手で前來所説の諸圖の様に夾む際に當つては先づ此の意を以つて能く右上方面の關係を考察しなければならぬ。

又此の第拾五圖の如く、或は更に一路進んで(イ)の點に迄隅へ(接近)して三と打つといふ事は、黒三が隅の利を窄めるといふ事も無論主眼ではあるが、其と同時に、六と係粘いで丈夫になつた隅の影響をも受けなければならぬ、といふ事を能く考へねばならぬのである。





無理ナキ意  
接ト注意  
スキ手  
質問甲図  
参照

四ト下カラ  
ハネテ来ヌ  
ラ手技カイ  
ノハネカシカ

五トハネ出  
夕時ノ打方

黒五ノ手、  
意時

問答

黒五大悪手

(第十八圖考  
照)

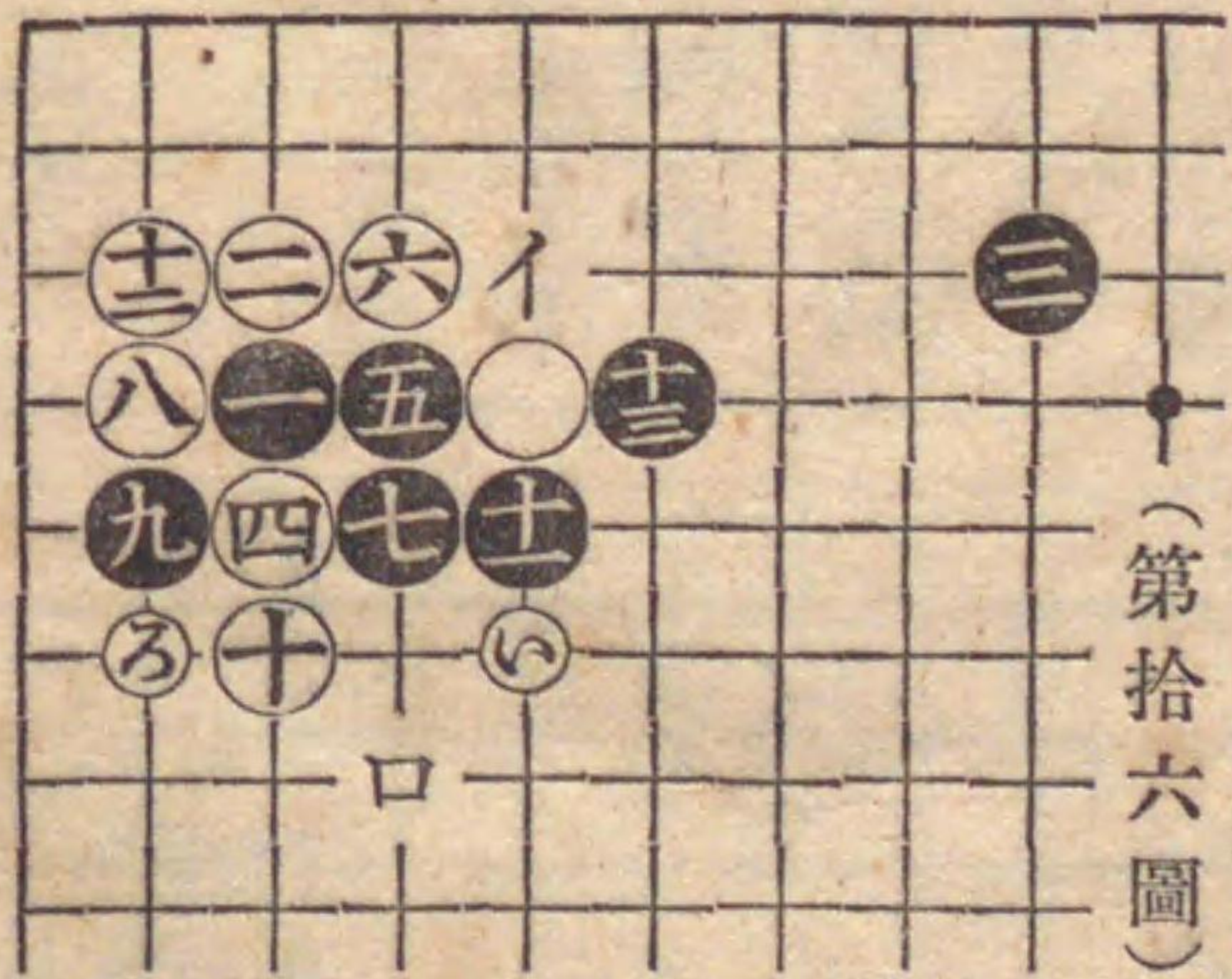
黒五ノ大悪手  
ヲ如何ニトカハ  
シヤ

○(第拾六圖) 白が四と夾んだのは、此の點に黒に行ひさせぬ意である、此の際黒手抜すれば、忽ち五の點からアテラレ白をして非常に厚壯ならしむる惧がある、黒五以下十三迄は何れも無理のない應接であるが、此の手順中、黒若し十一と曲る手で十二の點を截れば、白に⑥の點に打たれて大に不利である、白十二の手を以つて⑥の點より黒九の一子を抱へれば黒に(イ)の點を截られ是亦甚だしき不利である、黒十三の時白が(イ)と粘ぐや否やは問題である、若し白が(イ)と粘がば、黒は(ロ)と掛けて大勢を制するがよし。

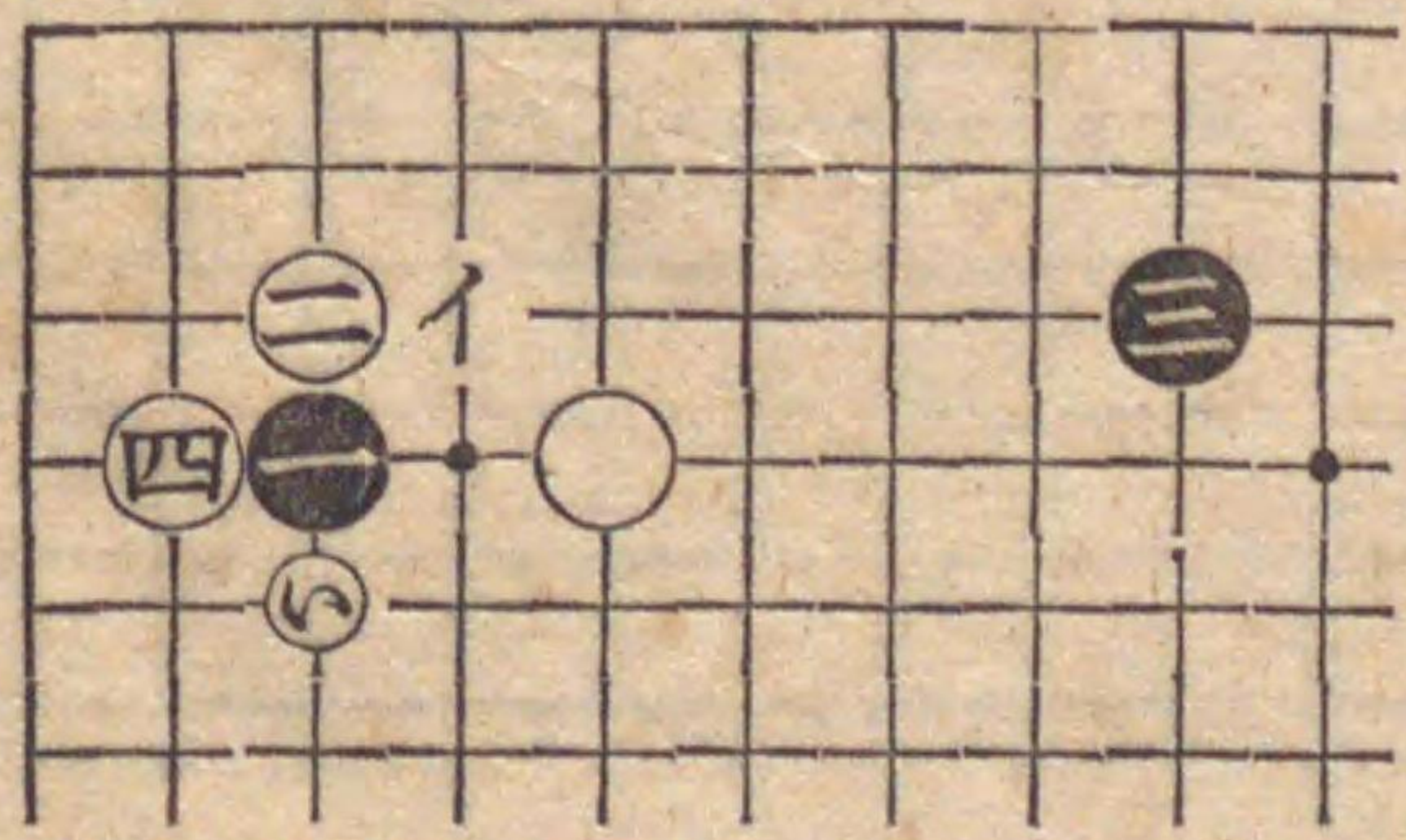
○(第拾七圖) 白が四と下から縛ねて來た時、黒の手如何といふと、手抜するか、或は(イ)の點へ縛出すかの二つである、黒若し五の手を抜かば白は⑥と縛ね上げて黒一の一子を捕つてあぐがよし、黒が五の手で(イ)の點に縛出す後の手順は次圖の通りである。

○(第拾八圖) 黒五と縛出せば、白六と截り、黒七と行ひ、白八と泳ぎ、黒九の行ひの時白十と隅を守り以つて五の一子の死命を制し、黒亦十一と飛んで左下方面に勢を張ると同時に上側三の一子と相呼應するのである。

△問ふ、某高段の碁書に、(甲圖)の如く白



(第拾六圖)

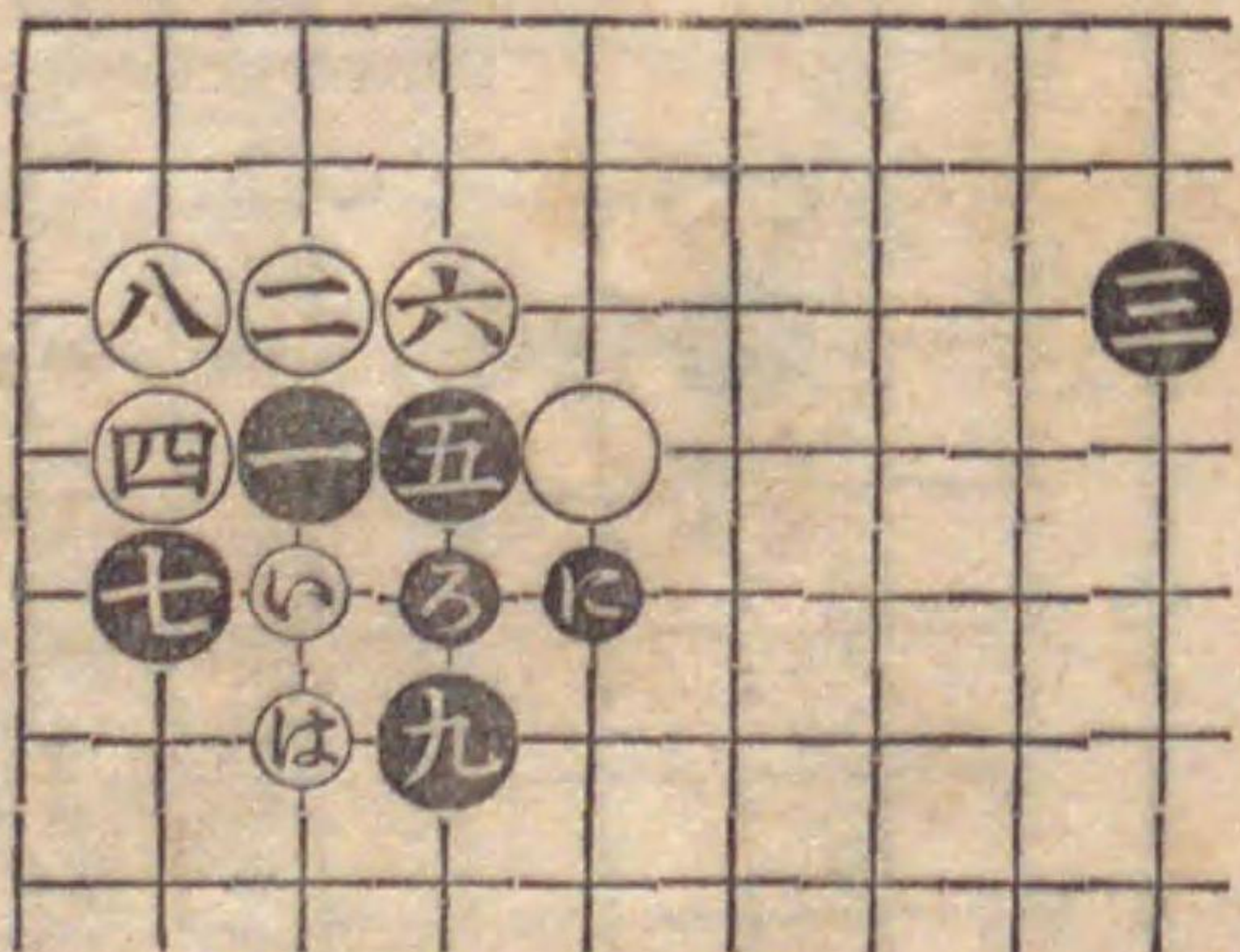


(第拾七圖)

ツキアタリ、白六、黒七の時白は隅を八と粘ぎ、黒九と飛びし形あり其の可否如何。

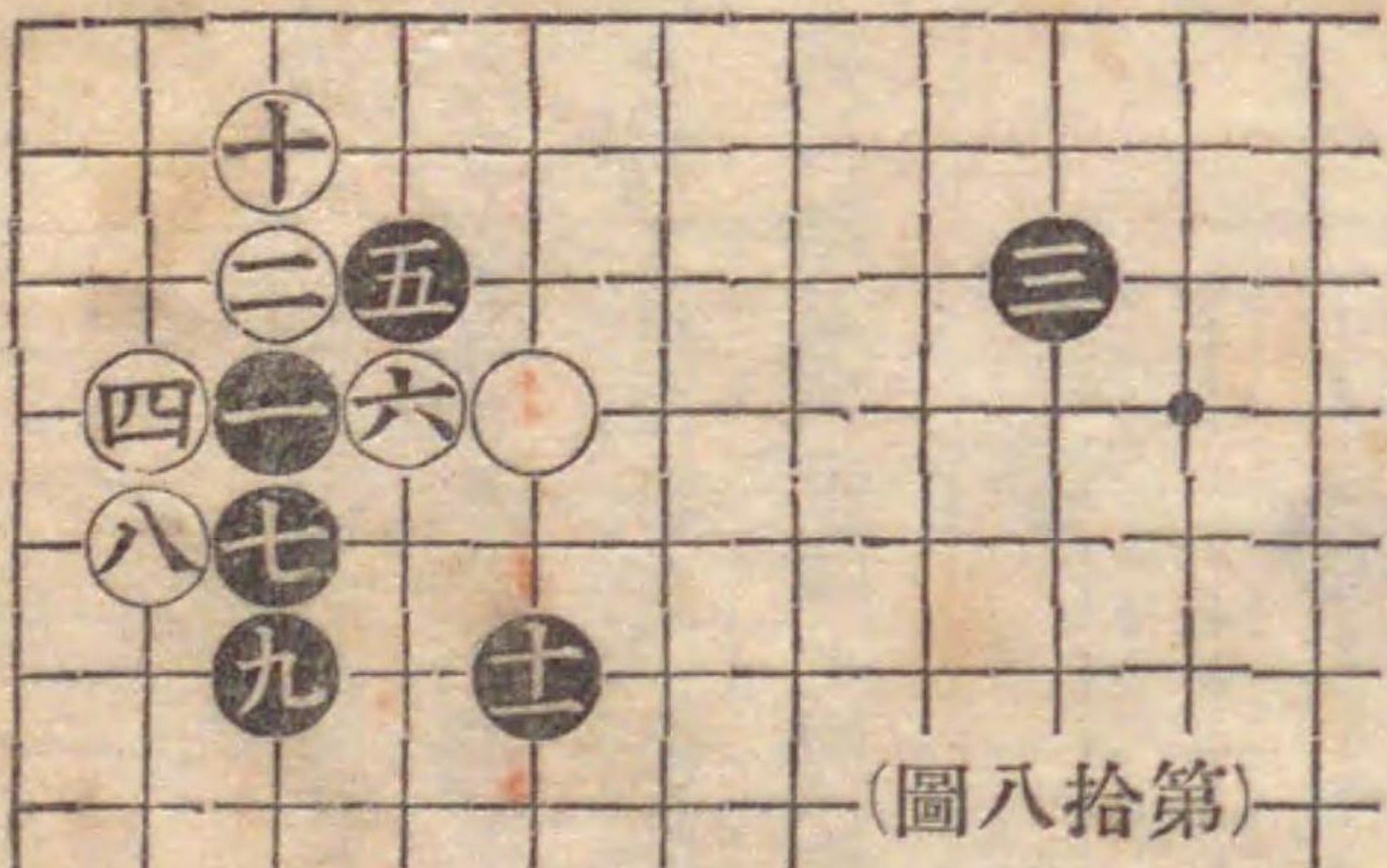
○答 黒五大悪手なり、悪手なれど白八の緩手にて、黒をして稍成効せしめたり、又此の形の時白八の手にて⑥と截り、黒⑦、白⑧、黒⑨と運ぶも其の結果は前第拾六圖と同じく黒甚だしき不利に陥らず、要するに白八の手にて黒の非を各む可き要點を逸したればなり。即ち白八は「乙圖」の如く運ぶ可し。

(圖甲問質)

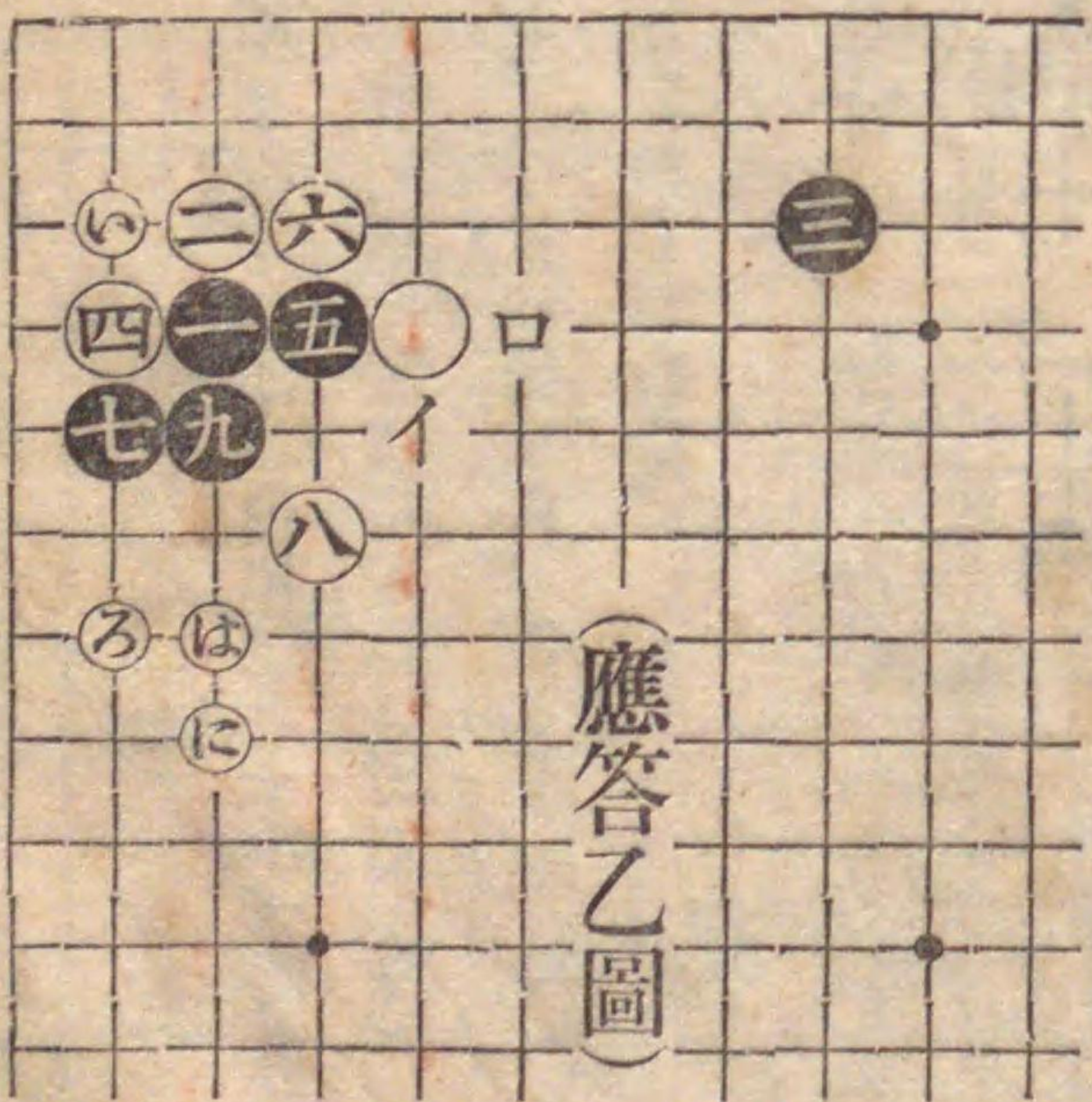


(圖乙問質)

白八の手にて圖の如く窺き、黒若し⑥の點を截らば白は九と截つて絞る可きを以つて、乃ち黒は九と粘ぐの外なく、次で白は⑥と粘ぐとも又は⑦或は⑧或は⑨の邊から包むとも自由なる可く、黒(イ)と縛出すも(ロ)と行ひられ黒は全く窮する事となる、是れ五の悪手の結果なり、



(圖八拾第)



應答乙圖



黒五ヲ手拔スルノ可否

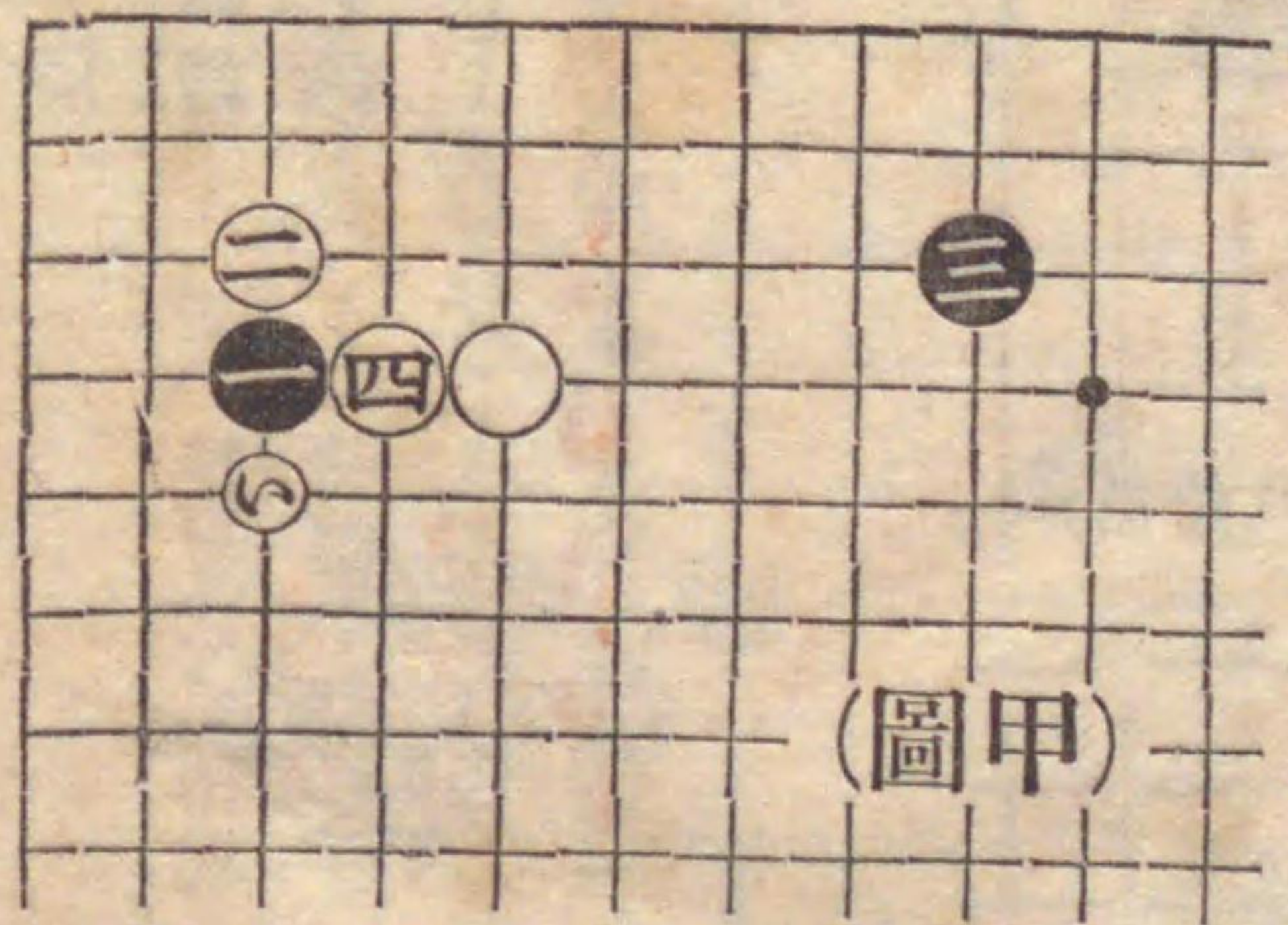
甲ノ場合  
黒五ハ手拔  
スルカラズ

丙ノ場合何  
故手拔差  
ナキヤ

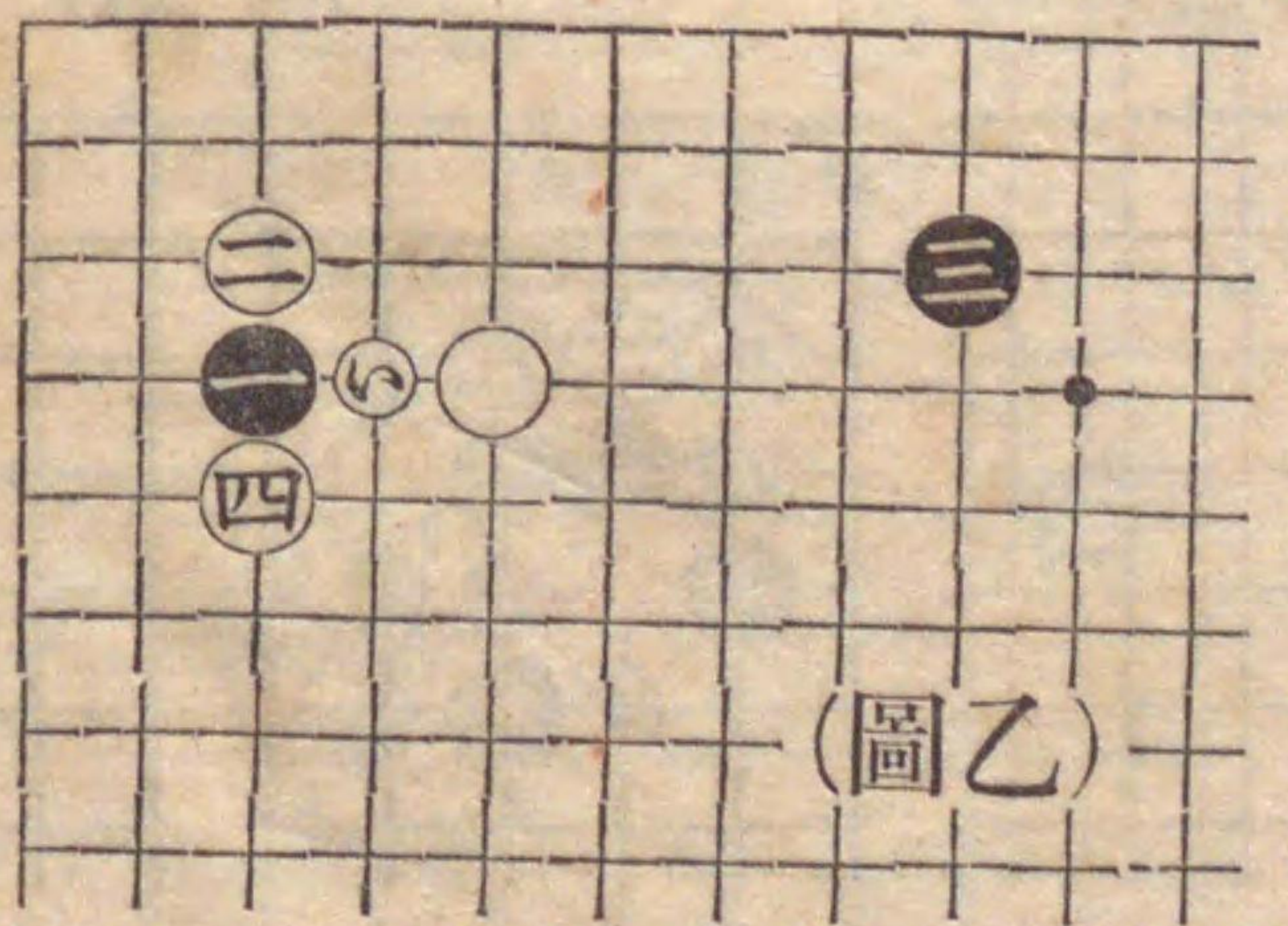
「黒五を手拔するの可否」  
結論

(甲圖) 手拔の不可なる形、此く白が二、四と迫つた時に黒が手拔すれば、白に①と一手で閉塞され、局面に何等餘韻を残さぬ結果となるから、黒五は是非共、②の點に行びておかねばならぬ。  
(乙圖) 手拔の不可なる形、此く四と夾まれた時も、黒は同じく手拔は出来ぬ、何となれば直ちに③の點から壓せられ、手順こそ違へ其の結果は甲圖と同様となるからである。

(丙圖) 手拔の差支なき形、然るに白が此く下から四と來た時は、何故黒は手拔してもよろしきやといふに次で白よりは六と抱へる手よりなき故、茲に多少の味即ち餘韻が存して居る、何となれば後に黒より④、若くは⑤、或は⑥等に迫つて尙一手白に費させる事が出来るからである。  
(參考別圖) 以上諸種と全然別問題



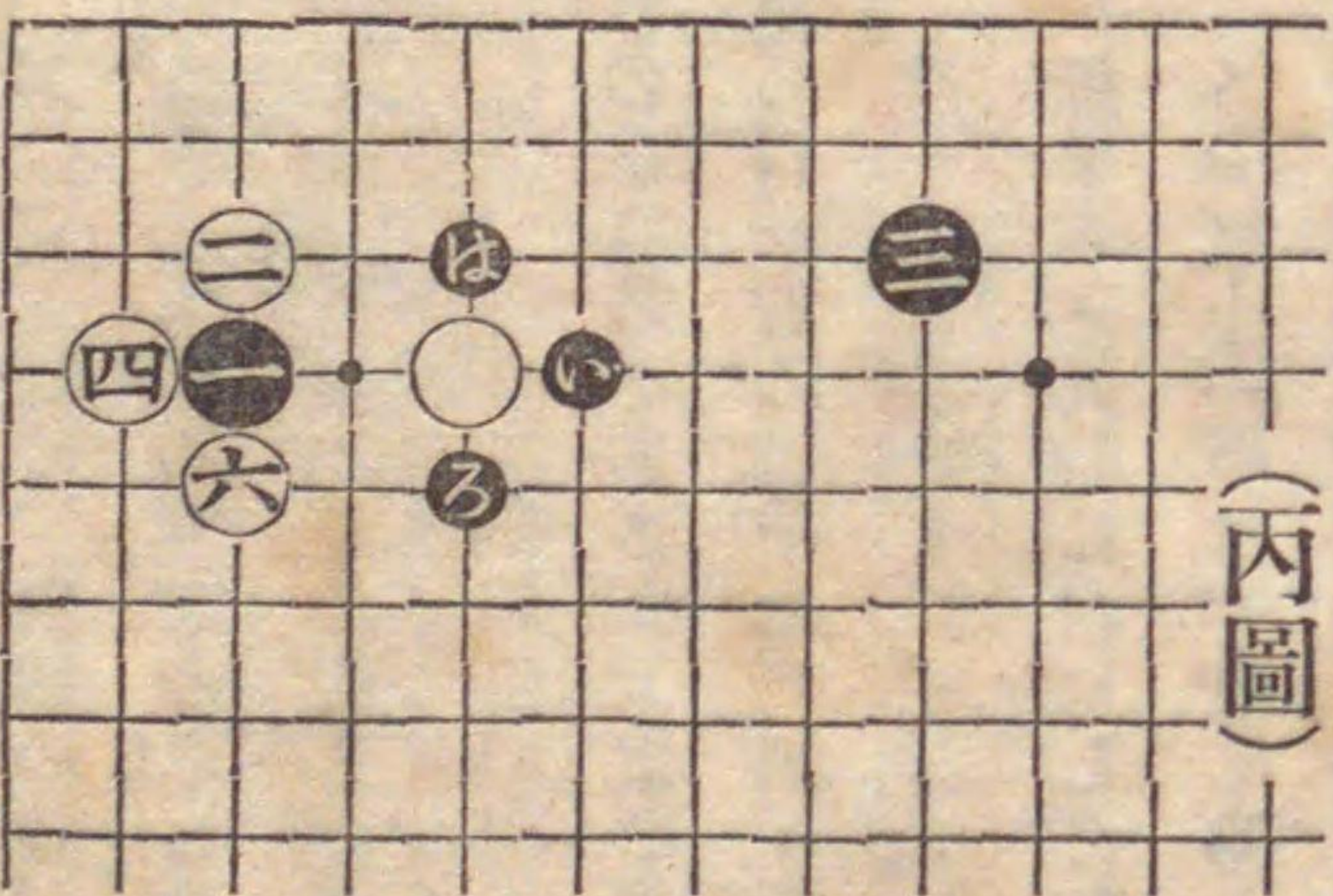
(圖甲)



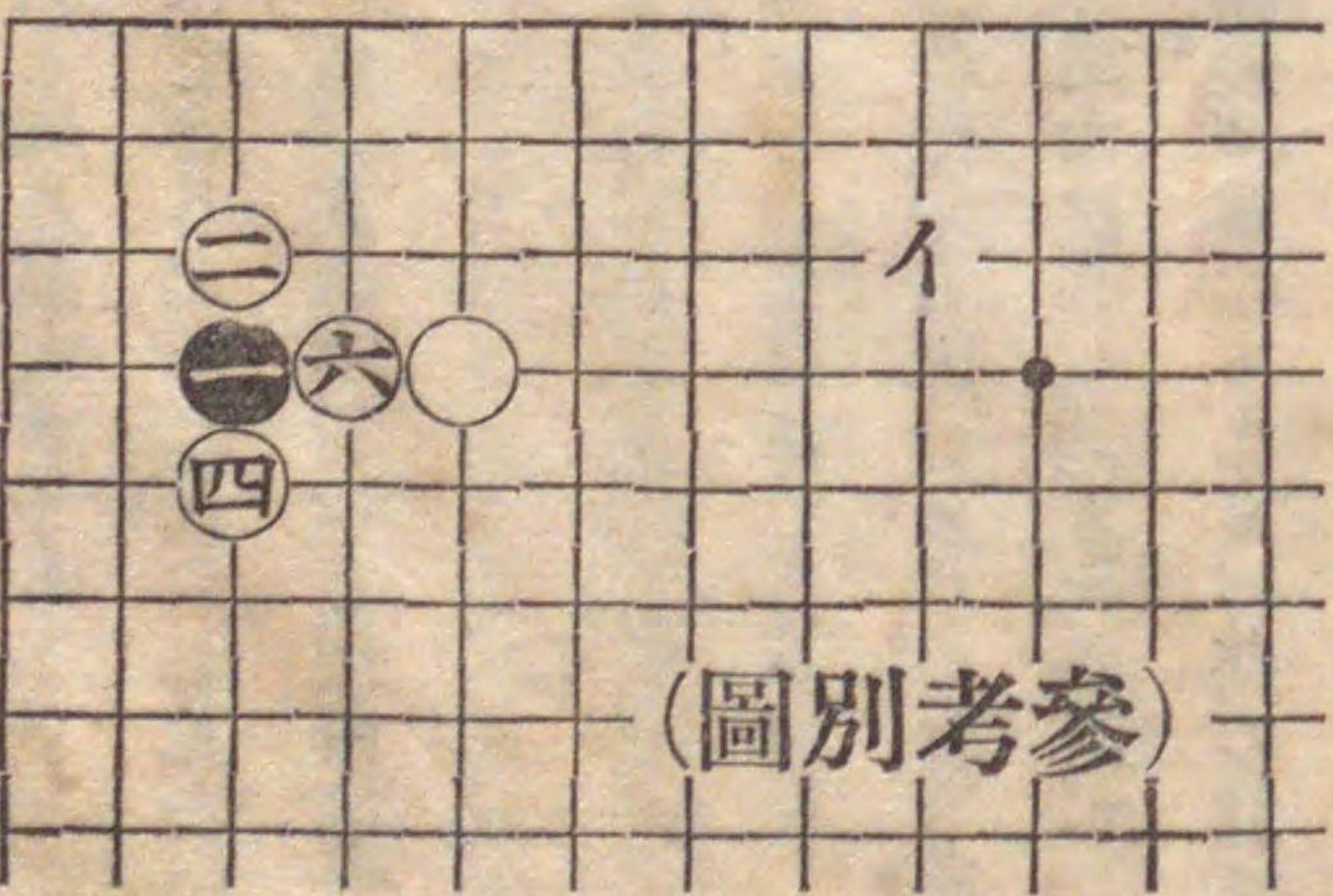
(圖乙)

三ノ手速う地  
ニ打テアレル  
白中キ  
如何ニ抱テス  
黒ハ顧慮  
ミ及ハス  
此理ヲ會  
得スルイテ切  
ナリ

の形ではあるが、參考として茲に附記しておく、其は黒三の手で(イ)の點に三間夾して無く、例せば此の三の手を局面の他に遠く打つてある様な場合であれば、白が四の手を如何打つて來ても、黒は必しも之を顧慮する要はない。  
其の理由は、附近に黒三の一子が存在して居る爲めに甲圖若くは乙圖の場合の如く一手で何等味の残らぬ提り方をされて此の隅が、堅固無比なものになるといふ事は直ちに黒三の一子の利害休戚に關係を及ぼす事になる、然るに黒が全然他の無關係の點に轉じて居るものとして、サテ黒五を手拔し、白に六と捕られたとしても、敢て不都合でないのは。  
本來は一手で締りの出来る隅を白に二手かけさせた道理になるから、黒も辛抱がし易いのである、之は別圖も黒一白六の二子を差引いて無い者として見ると白は一の點に一手で締り得可きを二、四の二着を費したと同様の結果に歸して居るからである。



(丙圖)



(圖別考參)

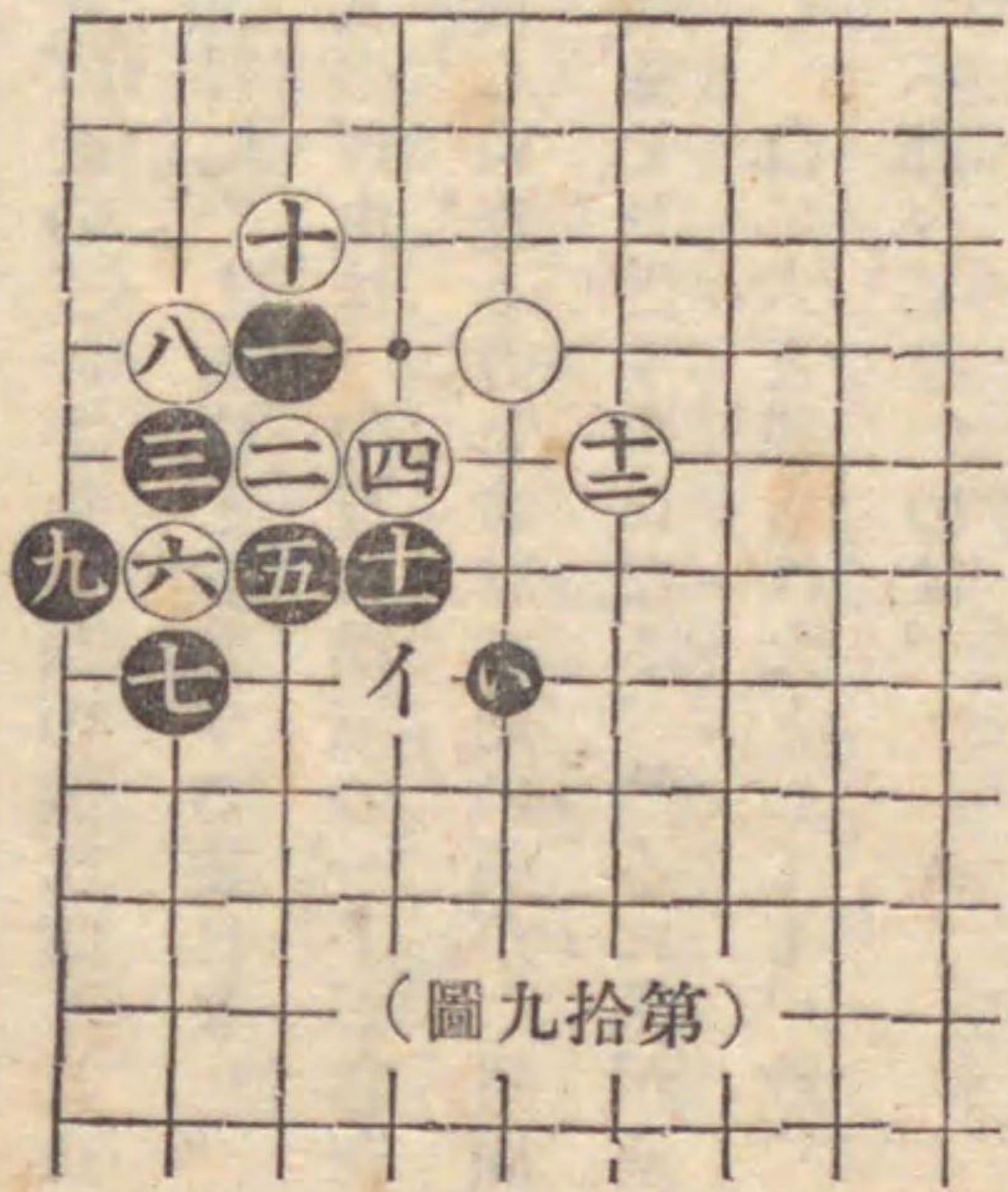


白二、外頂  
ニ對スル本手  
白、田舎手  
黒、田舎手  
六ノ手外カラ  
切ルカ通則

黒土手抜  
セヌイ  
白十二同ク  
手抜セヌイ

田舎手ニ對  
スル打方

○(第拾九圖) 白が二と外頂に来た時は、黒は三と縛ね、白四の時、五と縛るが本手である。  
「註」 白四の手を五に行ひるは所謂る田舎手と稱して棋家の卑しむ處である、參考として其の變化を次に示さう、又黒五に縛ねずして六の點に行る、是亦田舎手である、其の不利なる理由は參考地圖に示さう。



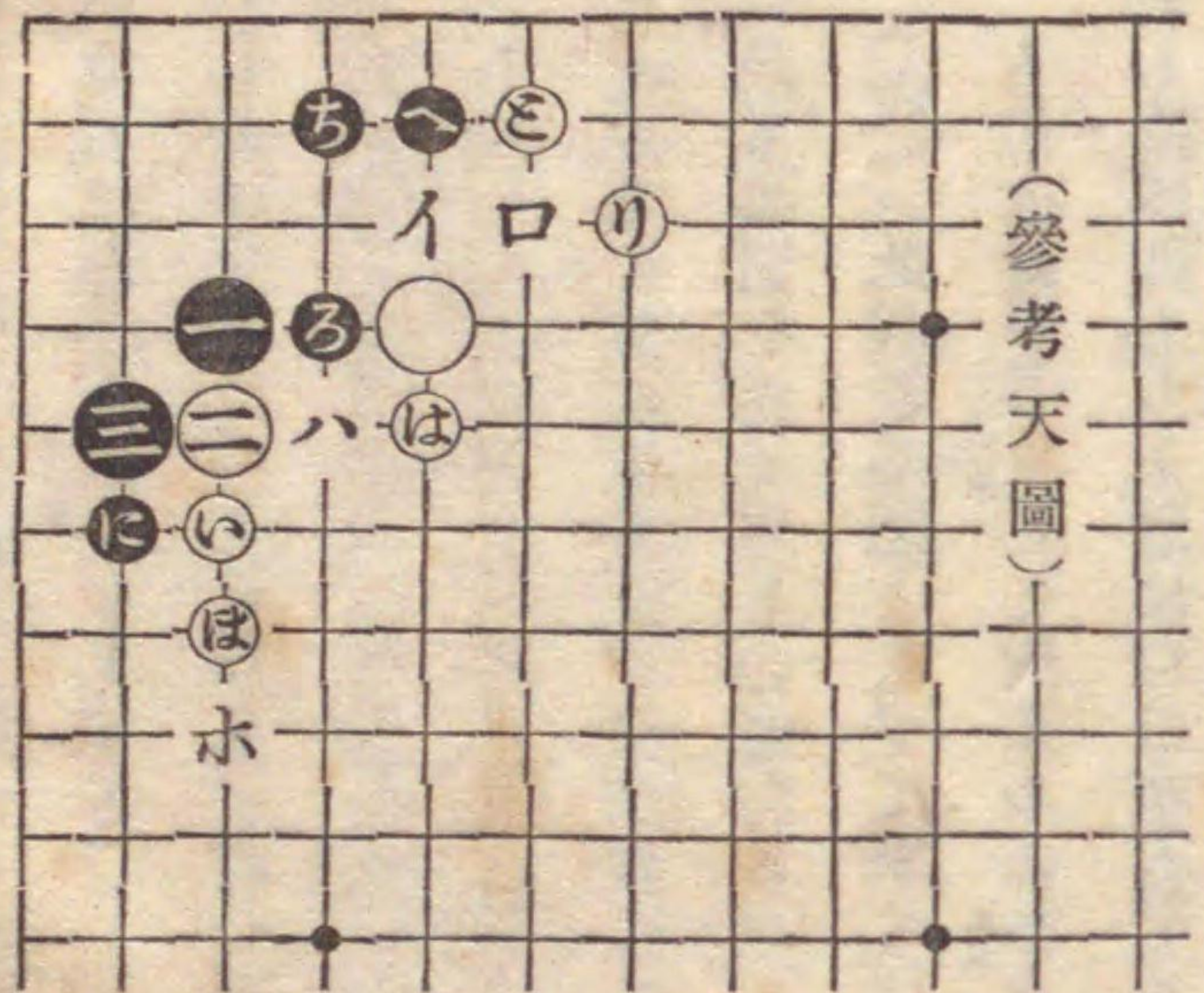
(圖九拾第)

黒五の時、白は六の手で、此く外から截るのは通則であるが、或は何等か特殊の必要あらば、八の點から截つてもよい、何れにしても黒は截られた方の棋子をアテ、打ち抜くのが定法である。  
黒十一を手抜すれば白に(イ)の點から壓せられて自ら萎縮すると同時に白をして勢力雄大ならしむるの惧がある、黒十一の手で或は(ロ)と斜走する手もある、其の意は十一の手と大差はない。  
白十二を手抜すると黒に此の點から壓せられて不利である、然し黒十一の手が若しも(イ)の點に打つてある場合は多少緩んで居るから白十二を手抜しても差支はない。  
△(參考地圖) 白が四と引く手を以て(ア)と行ひたならば黒は(イ)とツキアタリ、白(ロ)の時更に(カ)と泳ぎ、白を

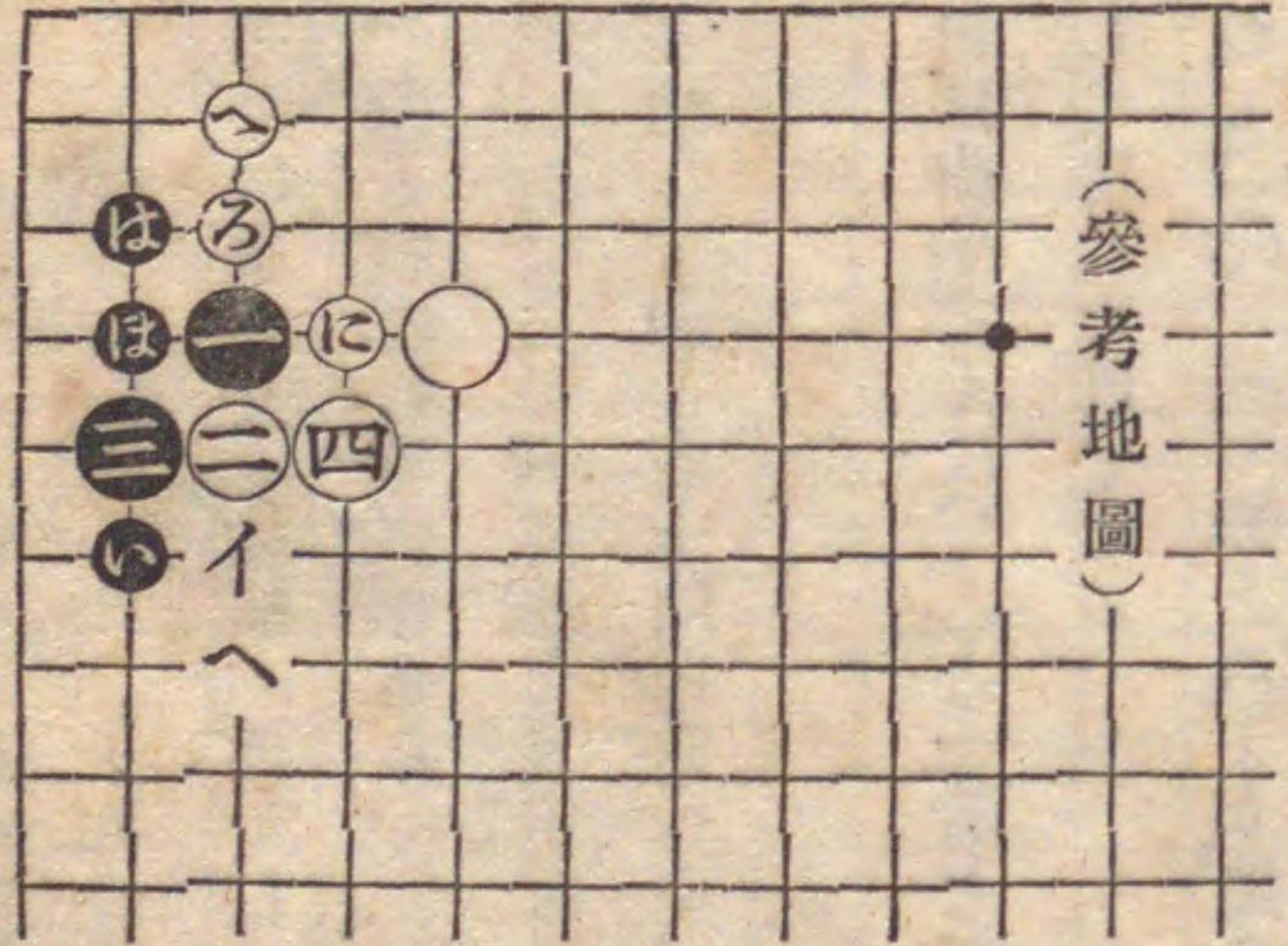
ちト引ク心  
得  
俗手ニ注意

五ノ手テイト  
低ク這フ  
不利ナリ

して(ロ)若くは(ホ)と應ぜしめて(イ)と走り、白(ロ)の時、(カ)と引いてあげばよい、白(イ)は(ロ)と引く手を一步ハタラカして(ハ)の出截に備へたのである、黒が(イ)と走る手で(イ)と縛るのは俗手である、黒若し(イ)と縛れば、白(ロ)黒(イ)白(ロ)となり(ハ)の閉鎖を先手で利かされる惧がある。  
△(參考地圖) 白が四と引いた時、黒が五の手で(イ)の點に縛ねかへす第拾九圖の本手を知らざる初學者は稍もすると五の手で(ロ)と側へ低く這ふ事がある、之は言ふ迄もない不利益千萬な手であつて、忽ち白に(イ)と夾まれ、



(參考地圖)



(參考地圖)

黒(イ)の時(ア)とアテられ、黒(イ)と粘いだ時、(カ)と隔へ下られ、或は白は外勢の都合上(イ)と隔へ下る手を以つて(ハ)と側面から壓するかも知れぬ、其の時黒は(イ)の點から縛ねなければならず、終に白の爲め手拔されるの結果となる。



黒ノ手ヲ抜  
ツキ様會  
三手抜ノ要  
領

ろノ立方

黒ノ注意

○(第貳拾圖) 白が六と隅から截れば、黒は之を七と抱へ、白八の時九と打抜いておくがよい、此の定石は白十を手止りとする。  
然し此の定石は決して好んで打つ可き手ではない其の故は、黒をして直ちに對隅に向つてと征待の一手を下され、白が⑨と抜いた時、⑩と打たれる惧がある。  
即ち黒は左上隅に先手で堅固な活をした上に、今又右下隅を獨占する事になる、次で白若し⑫と尖んで左上の黒に迫らば、黒は茲にも亦手抜して⑬と右上隅に備へる、此の三手抜の手段が黒としては最も要領を得て居るのである。

「註」 此様な手順となつて來ては、白は尙④若くは(ト)と一着を左上に費さねばならぬ、が然かも黒は茲を手抜して尙多少の味を残して居る次第である。

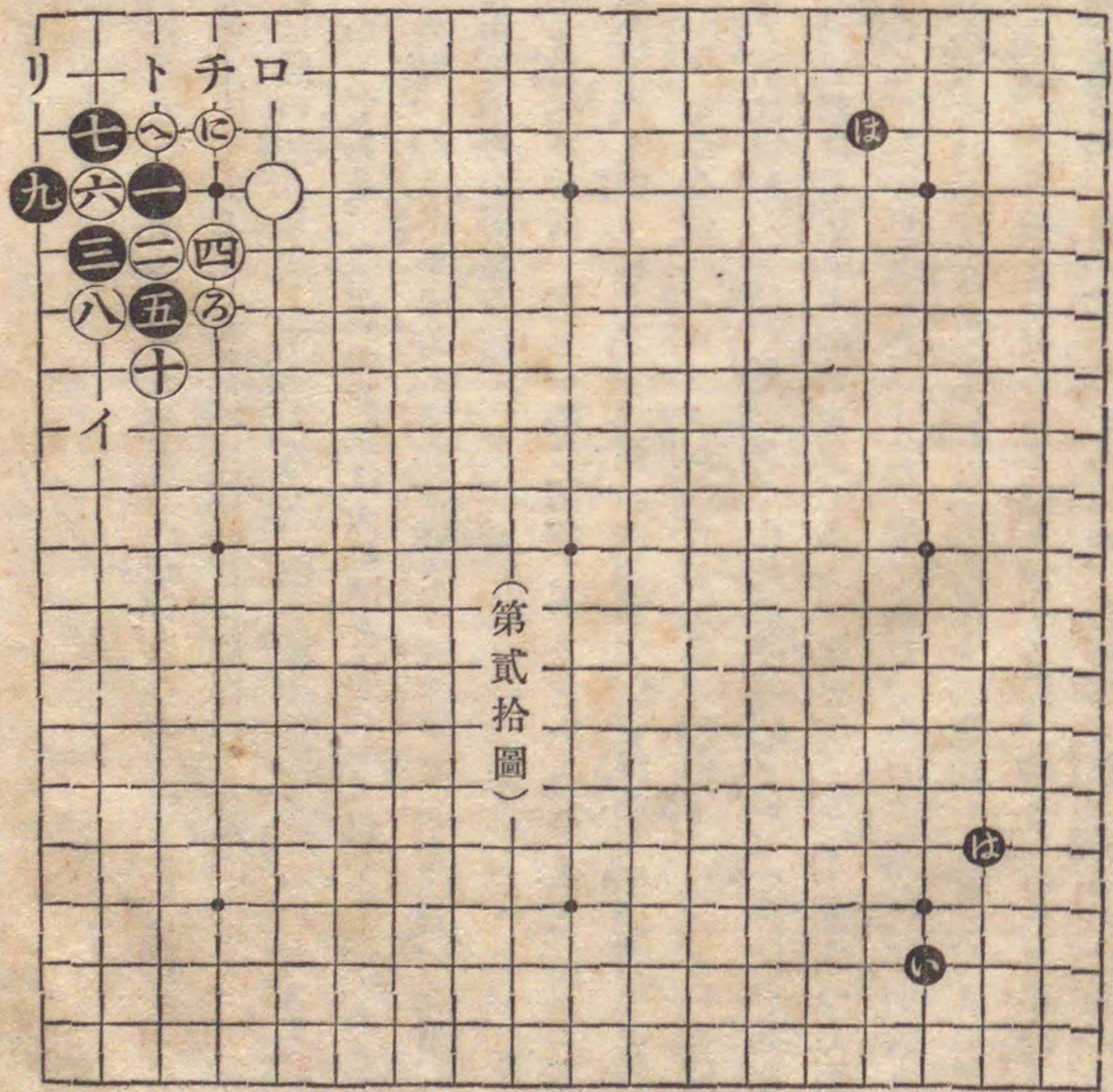
若し隣隅即ち右上隅に白の布石でもあつて、⑭、⑮、等と白より迫まられるを不利と考へた時は、黒は⑯と右下を締る手を以つて(ロ)邊に走つておくのもよい。

要するに本圖は右下隅に白の布石があれば征待を兼ねて其の布石を全然破ふられるから白の不利は問題にならぬ、ヨシ又何等布石がないとしても本圖の如く⑰と獨占の利を得らるゝ事になる。

本圖の場合に於て、黒の注意す可きは、⑱の征待ちを早く打つ可き事である、若し白に⑲等の手を運ばれた後であると、黒がヨシ⑳等と打つても白は之に挨拶はせぬ、何となれば次で黒が㉑の

點に逸出したとしても、白は平然として(イ)の點に粘いて居るからである。

「註」 白が⑫、⑬、若くは⑭、(ト)、と來た後に於ても尙多少の味が残つて居るといふ譯は、白が⑮、⑯、と運んだ後、黒(ト)と緯ね、白(チ)と抑へた時、黒は(リ)と打つて却とする手がある、若又白⑰、(ト)、の後ならば、右上方面の關係で黒の手が(ロ)邊に運んだ時は、尙一手を費さねば、隅の黒を活さられるの愚を見ねばならぬ。



(第貳拾圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~

黒ノ手ヲ口
辺ニ運ニ生
ル

『高目斜走掛』

黒ノ應手
二種

白四ノ手三種

白ハカ六ノ時
黒手後

○(第貳拾壹圖) 白が二と小斜走に掛けた時、黒の應手は●と右へ頂ける手と、○と左へ頂ける手との二通りある、●と頂けるのは普通の手であるが、○と頂けるのは寧ろ場合による手である。

「註」 ●の頂けの普通である理由は隅の治りを主とするからで、○と頂けるの場合手であるといふ譯は、側に重きをおく意があるからである。(布石の初期は大抵隅を主として側を第二におく)

○(第貳拾貳圖) 黒が三と此く頂けた時、●と外から抑へるか、○とツキアタルかが普通である、○と縛込むのは主として白の策戦に由る手なのである。

○(第貳拾參圖) 白が此く四と外から抑へるのは、黒を一隅に閉鎖しやうといふ意であるは言ふ迄もないが、黒が五と引いた時、白は此く六と堅く粘ぐ手と、此の六の手で●と係粘ぐ手、若しくは○と下る手がある、●の係粘ぎは六の一子を多少側へハタラカシた意がある、○の下りは主として隅の黒に響さうといふ手である、此の定石は白が六と粘るか、若しくは此の手で●と係粘れば、其を以て一應の手止りとするのである、乃て黒は手抜するのが正當である、次で白より(イ)と迫つて來れば、黒は(ロ)と應じ、今度は白が手抜して他の要點に着手する手順である、が若し白六の手が○と下つた時は黒は手抜する事は出來ぬから次に示す(第貳拾四圖以下)の通りに應接しておくがよい。

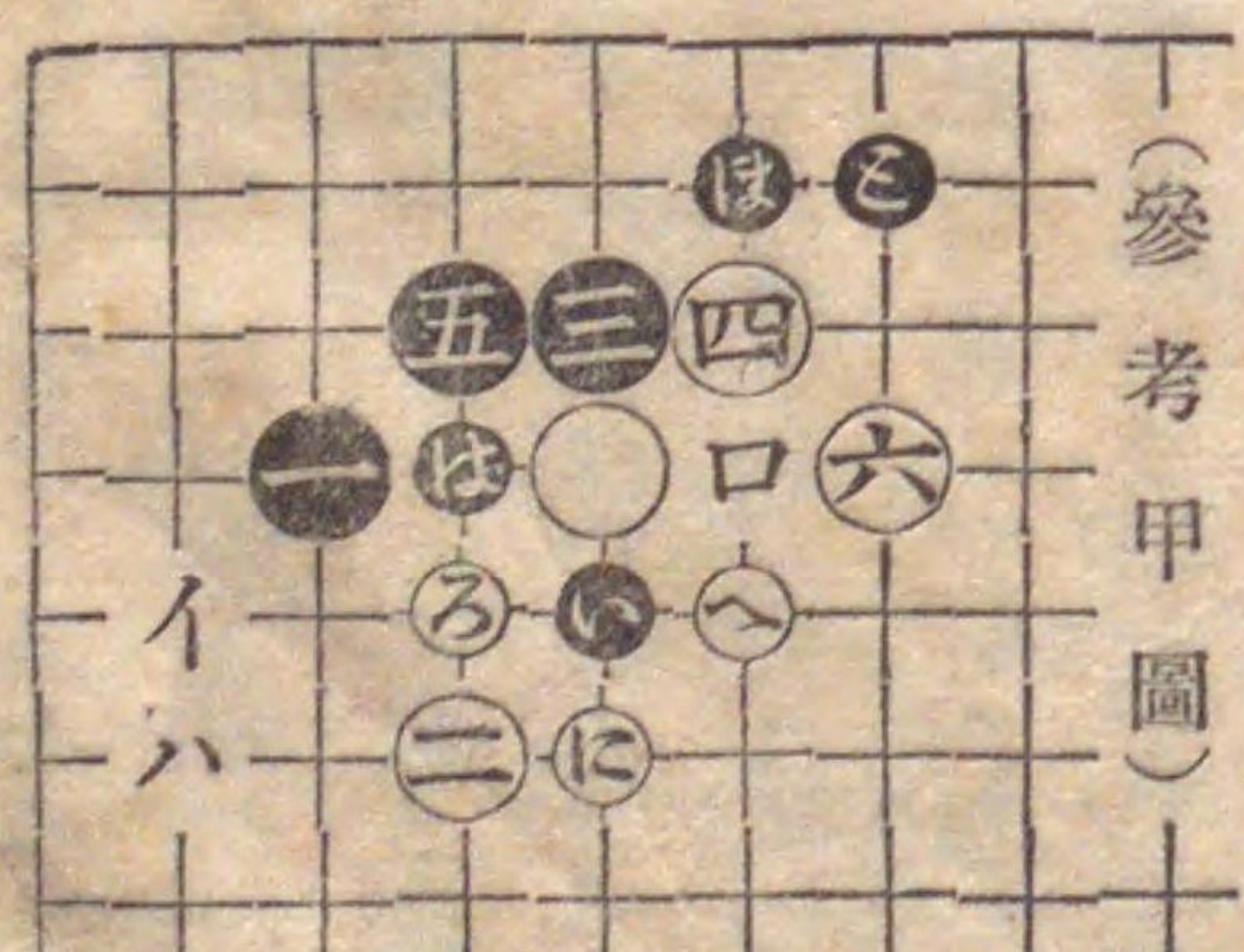
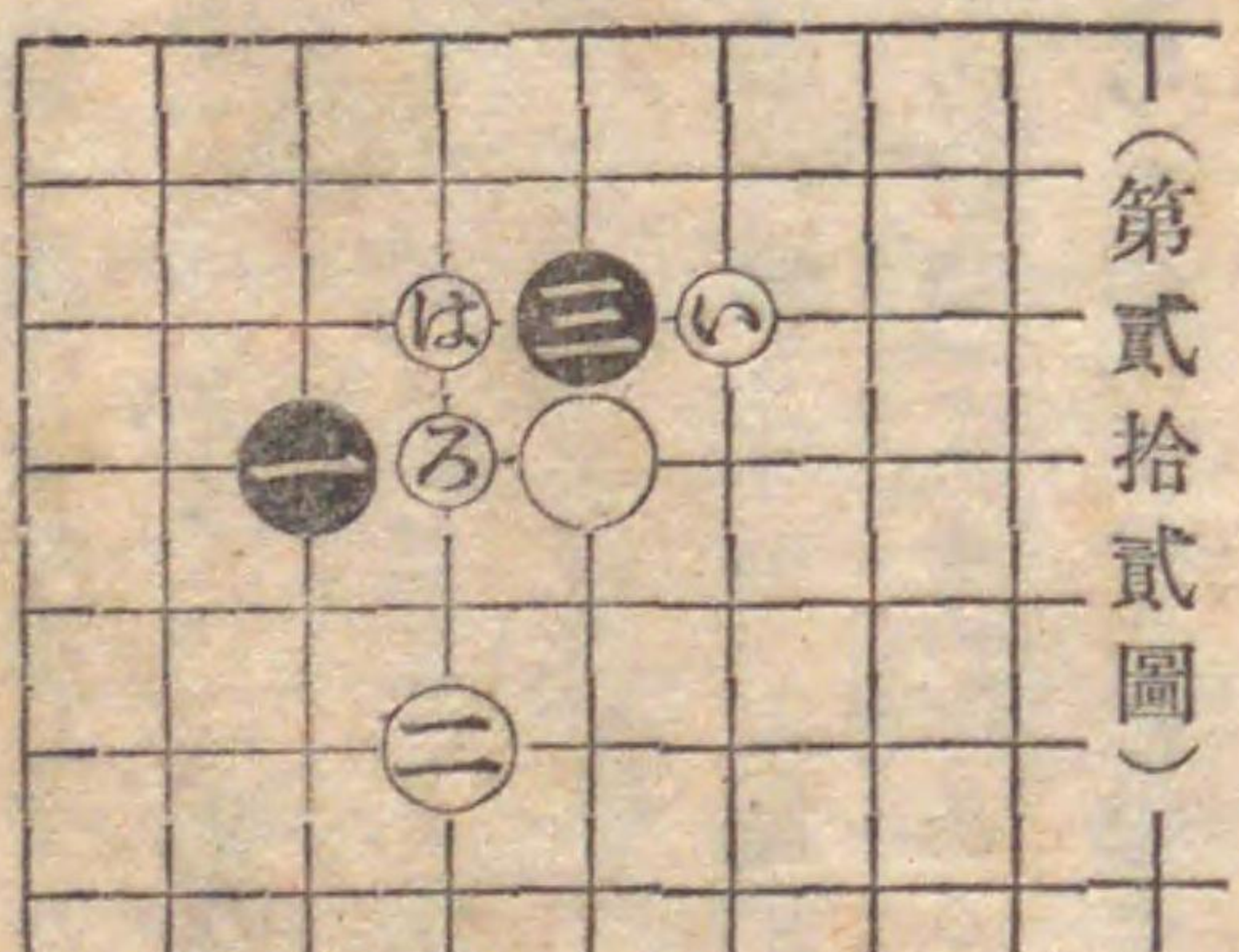
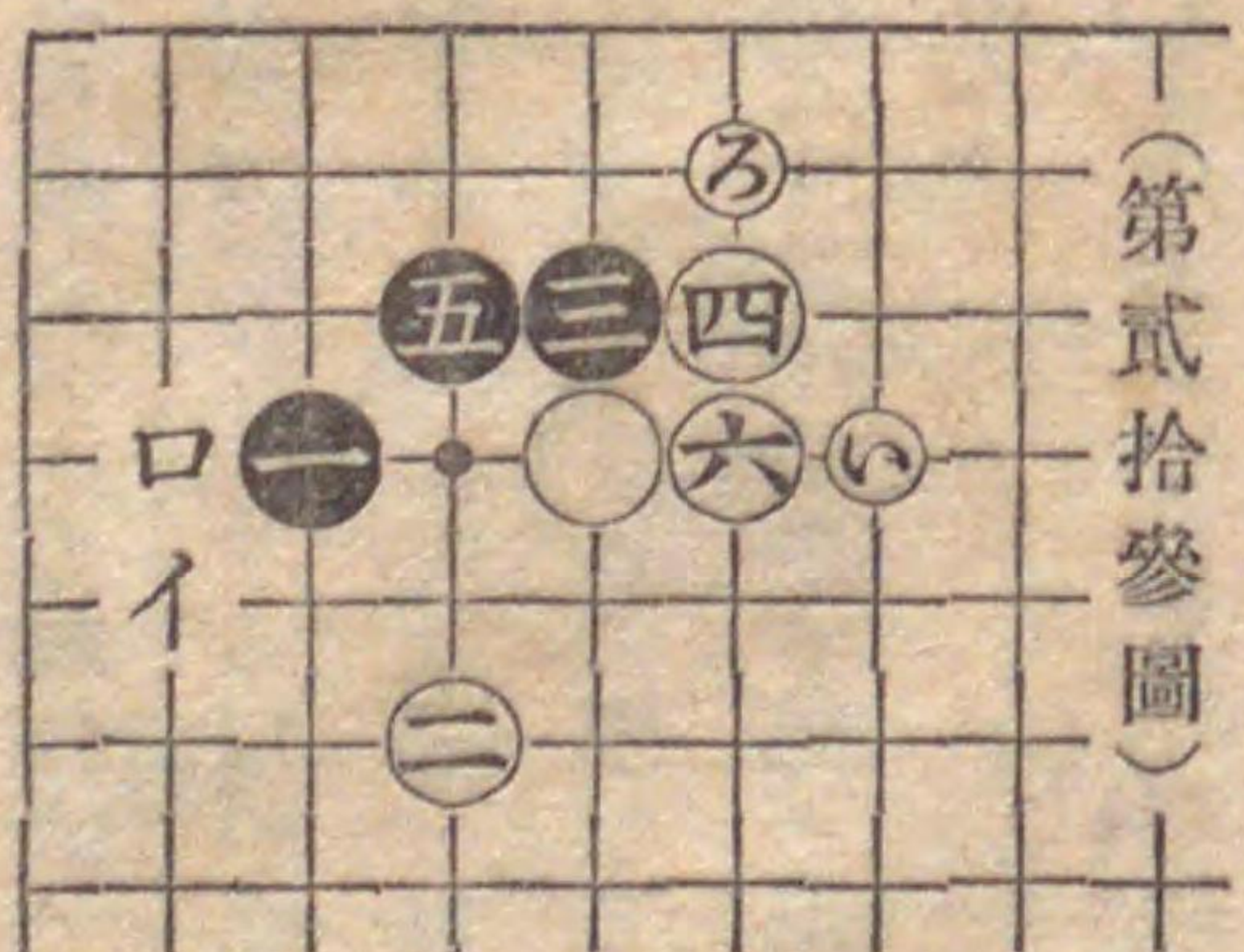
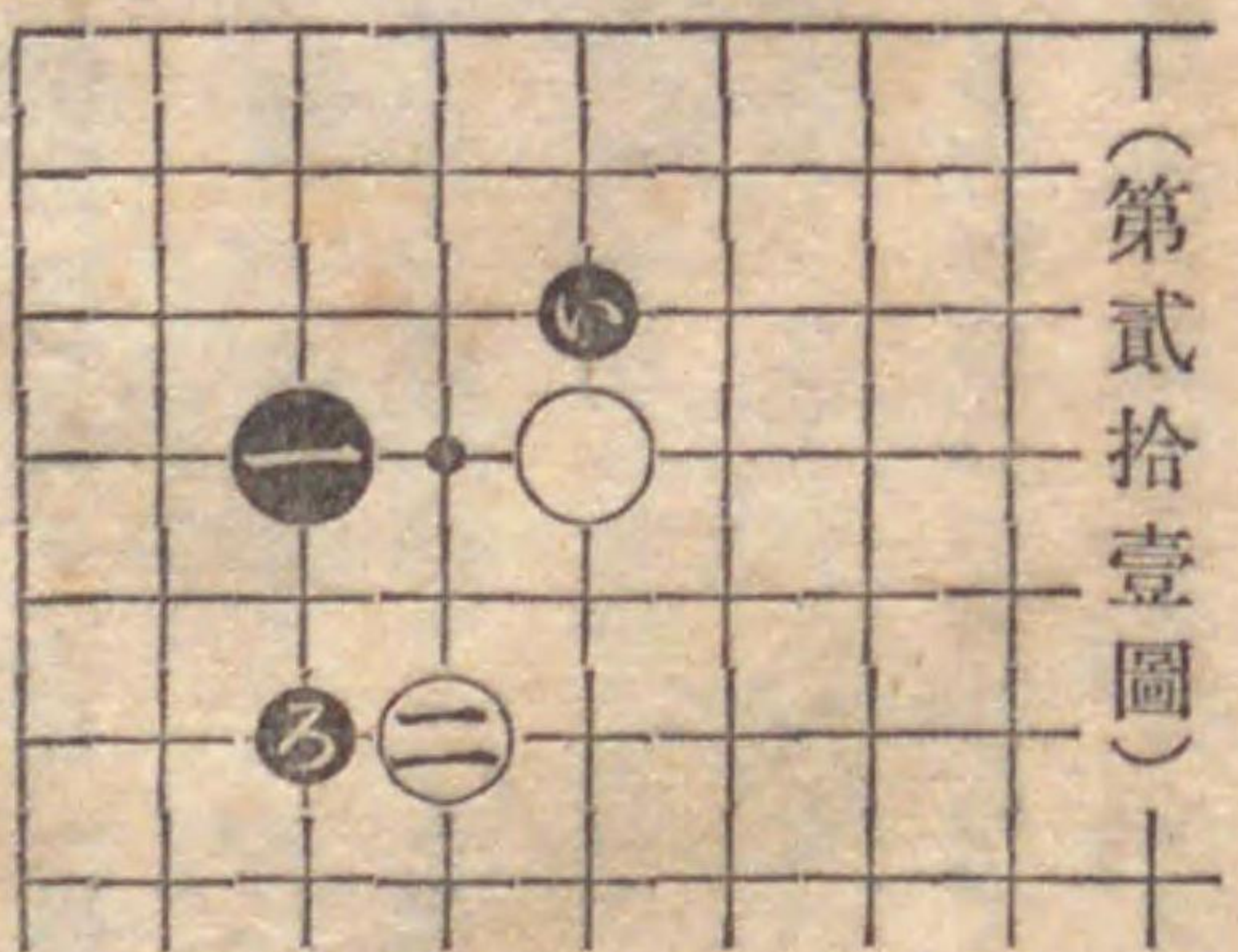
△(參考甲圖) 場合によりて黒が白より(イ)と迫まられるを不便と感ずる際、●と夾む様な手段もある、其の時白○黒●の交換は勿論であるが、白が○と外から包み、是亦●と裾を縛るのは共に手

手筋

打ちどく

筋の一種である、次で白が○と抜いたならば黒は●と側面に泳ぎ出す手である、但し此結果は、白が中央に大勢力を占める事になる、白が○と外から包む手で(ロ)の點を粘れば、黒は(ハ)と走つておくがよい。

「註」 黒が●の夾以下の手順を履んだ後に(ハ)と走ると、●の夾をせず單に走るとの差は如何かといふと、單に(ハ)と走つた後であると二の一子が軽くなつて居るか、黒が●と頂けても白は挨拶を爲ぬかも知れぬが、先づ●と夾めば白はマサカに手抜も出來ぬ、即ち黒●白○黒●白(ロ)と白に應じさせておけば打ちどくである、即ち白(ロ)と粘げは、●と上側に出る手が利かぬから(ハ)と左側に走つておくのである。



黒七ノ手ニテ
直ニト打
ツル吉手

黒い以後
打方

黒い以後
打方

△(参考乙圖) 白六の時、黒は手拔す可きである。前々圖に於て示してあいたが、古昔は黒七の手で●の點に頂けたものである。若し黒から●と頂けて來たならば、白は○と抑へ、黒が○と行びた時、白は手拔きするがよい、次で黒から○と截つて來れば、白は(一)から黒●の一子を征に提る意を含んで●と斜走に打ち、兼ねて中央に勢力を加へておく、其の時黒が(一)と行びれば白又手拔である、此く迄重ねて白に手拔さるゝは黒の●の頂け●の截り等が、中邊を高く占めて居る白に酷しき感じを與へぬからで、前々圖に手拔を正當と示した理由であるのである、已に黒●の頂けが緩いとして見れば、●の走りは元より言ふ迄もない、従つて黒が七の手で●と走れば、白は關せず焉として他に着手すればよい。

△(参考丙圖) 黒●の頂けは悪い、本圖の如く六と係粘いである場合、黒から●と頂けて來れば、○と抑へ、黒●の時、○とツキアタリ、黒に●と粘がして○と係粘ぐのも中央方面に於ける白の姿勢を宏壯ならしむる上に於いて適應したよい手順である、然し是とても決してかく運ばねばならぬといふ譯ではなく、黒●の行びのまゝ、白○黒●白○の交換は遂げずに、白は全然手拔して居てもよい、要するに白六を堅く粘がうと、又は係粘がうと、其の孰れたるに論なく黒は後手で●と頂け若くは●と走るよりは、手拔して他の要所に轉する方が優つて居るのである。

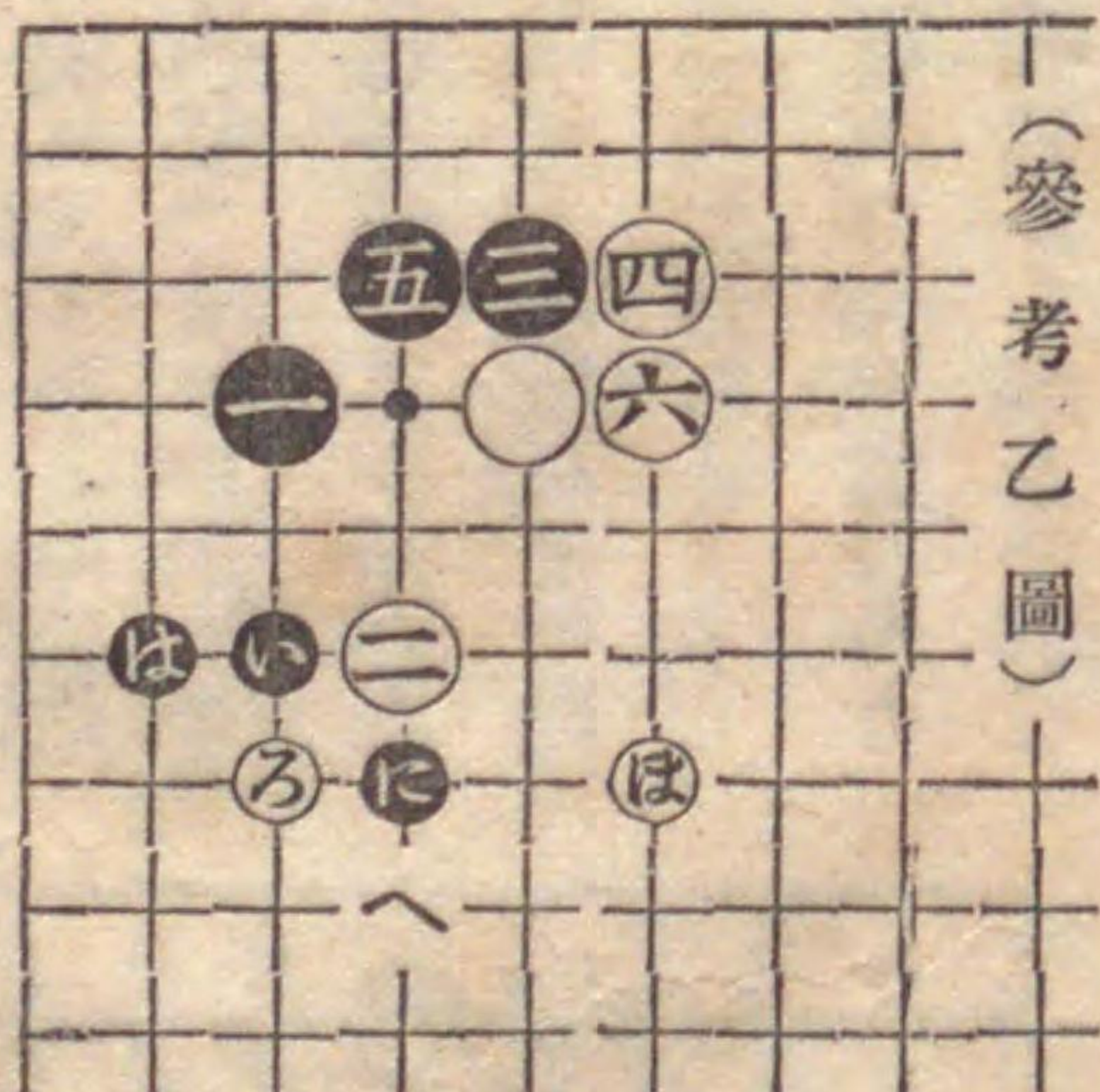
○(第貳拾四圖) 白六の下りは無論場合の手である、即ち黒に手拔さすまいといふ意である、隅の

白六ト下ル手
黒七手接る
ト不利

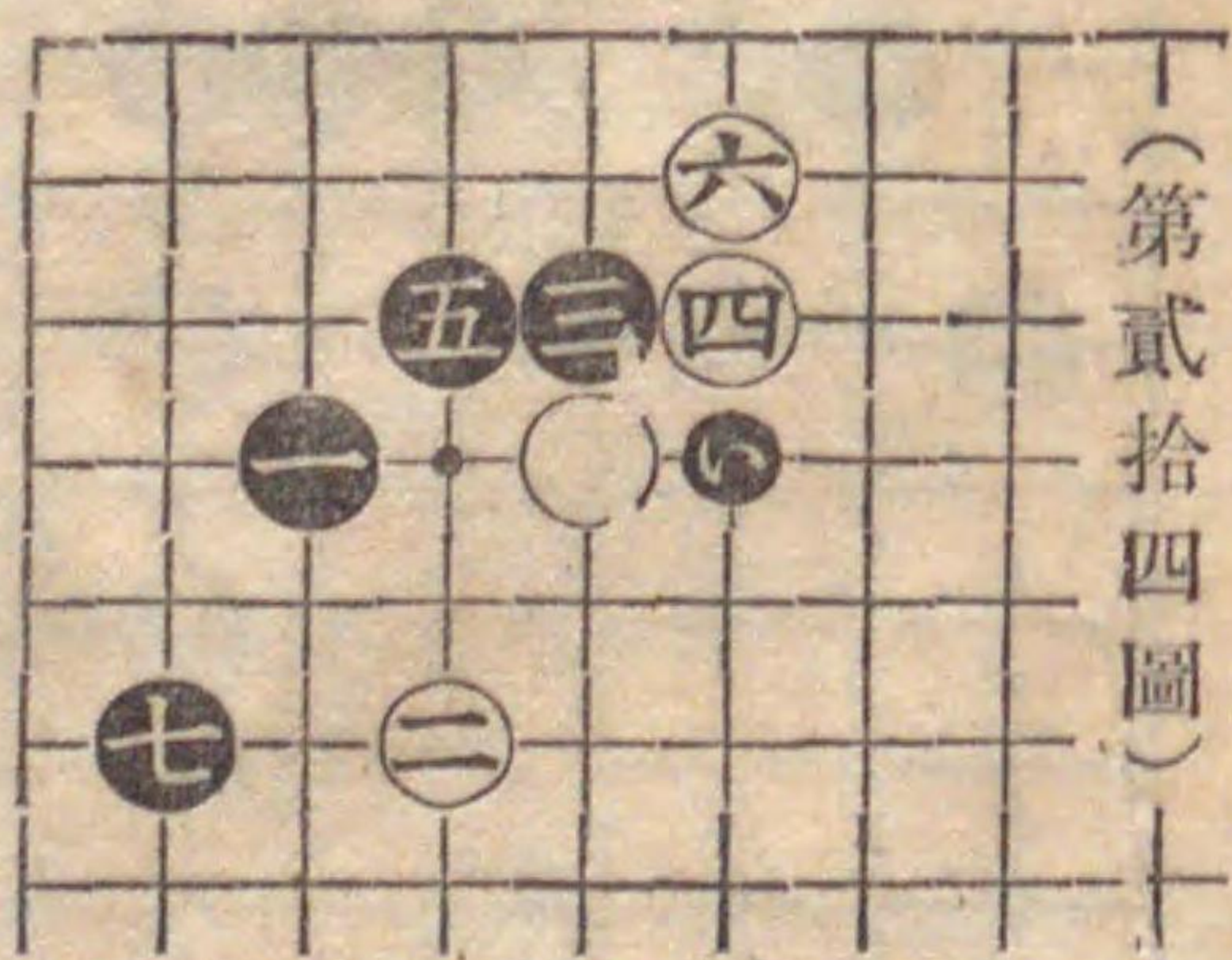
前記黒七
手接、不利
ナルヲ証

黒に響きを急にし、七と後手を引か
しめて上側右方面に着手しやうとい
ふ策と見る可き手である。黒七の手
を手拔すれば次圖の如き不利を蒙ら
ねばならぬ、黒が此く七と走つた結
果として●に截斷の味を生じたのは
又止むを得ぬ趨勢である。

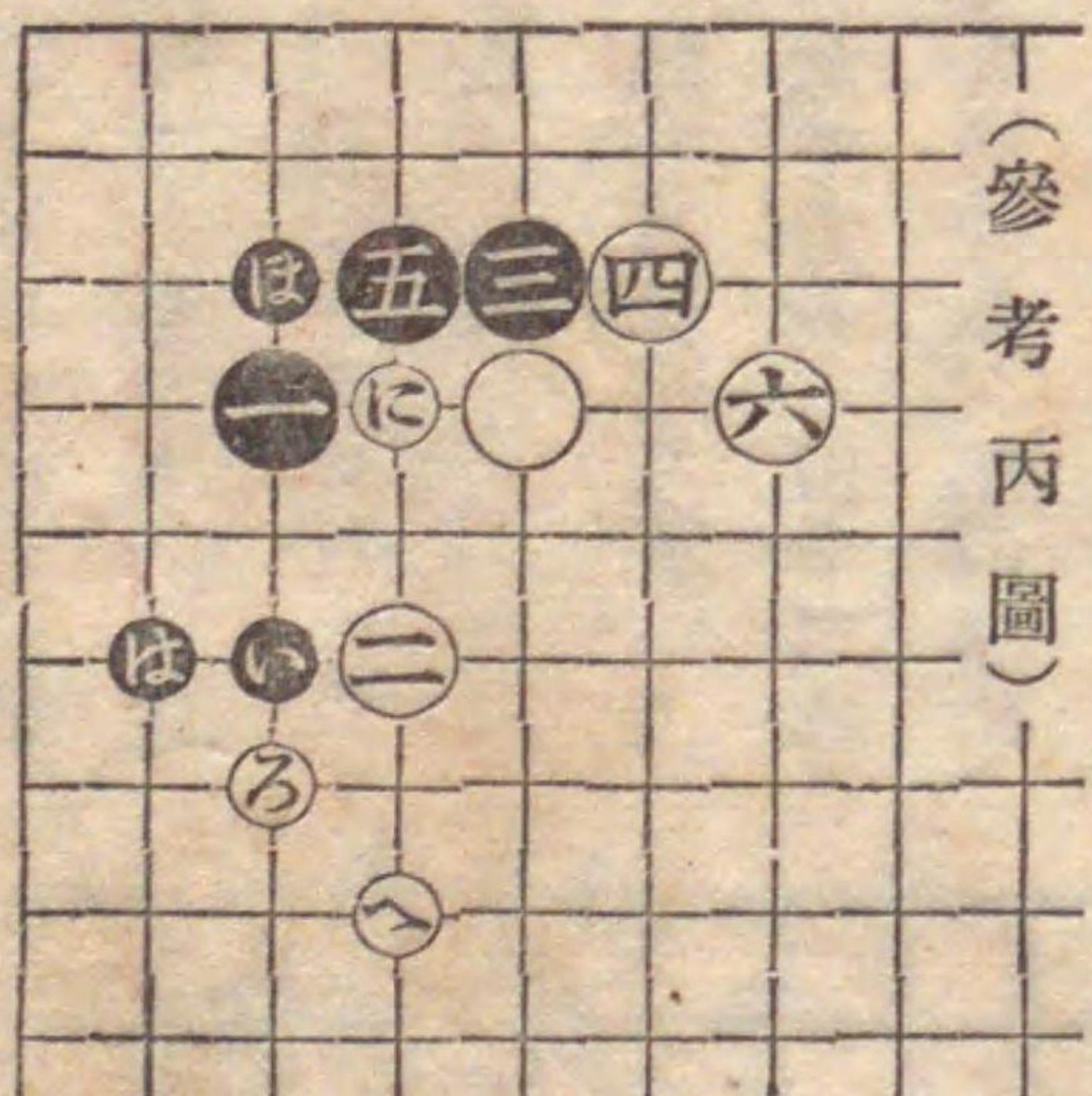
△(参考丁圖) 白が六と下つたにも
關はず黒手拔すれば白に○と迫ま
られ、黒●白○黒●白○と白に先手
で外部を閉鎖され、●の缺點も消滅
する、此際黒手拔すれば(イ)と置か
れて切の危険がある、黒は活を確に
する手段としては●と抑へるか或は
●と打つておくより外はない。



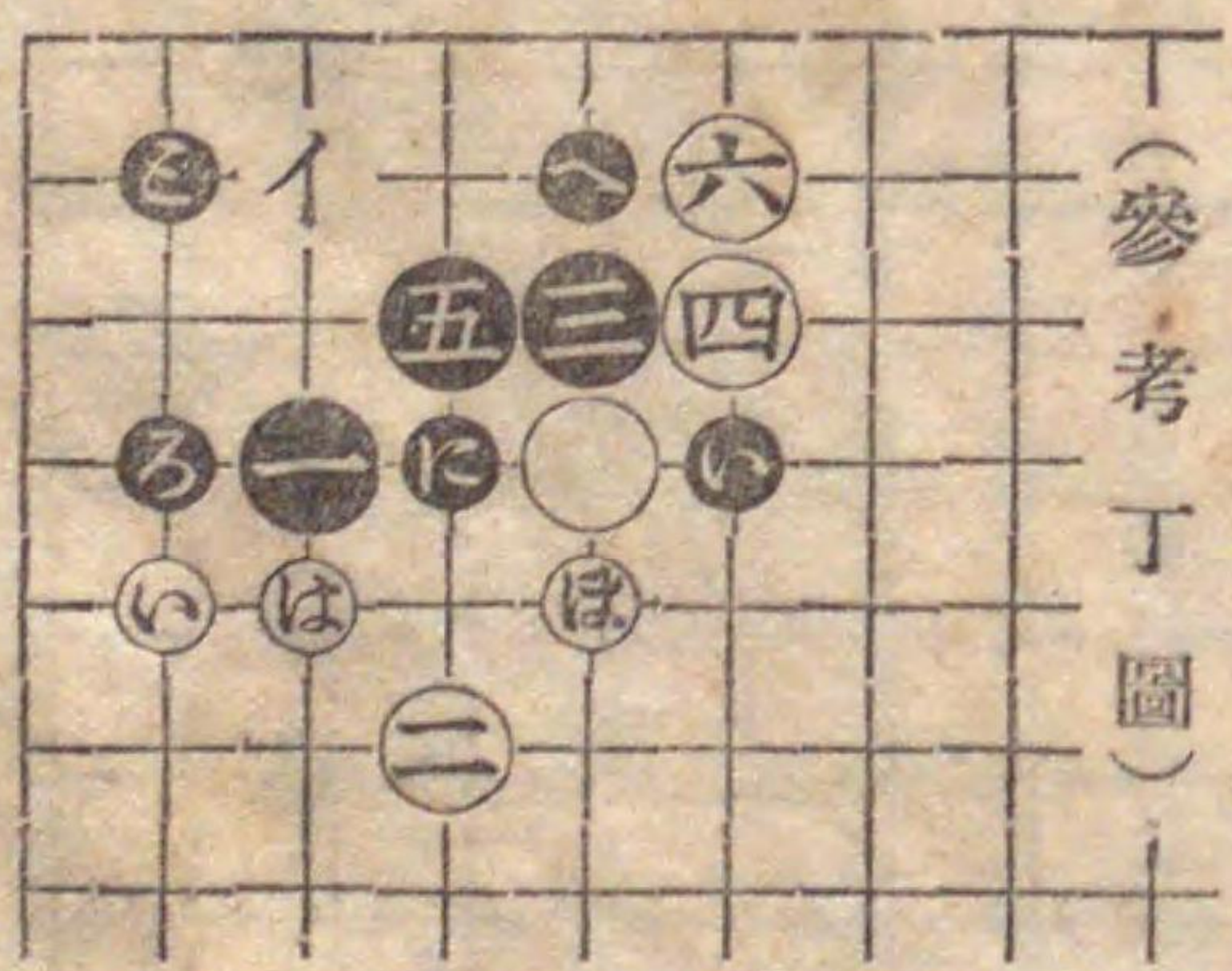
(参考乙圖)



(第貳拾四圖)



(参考丙圖)



(参考丁圖)

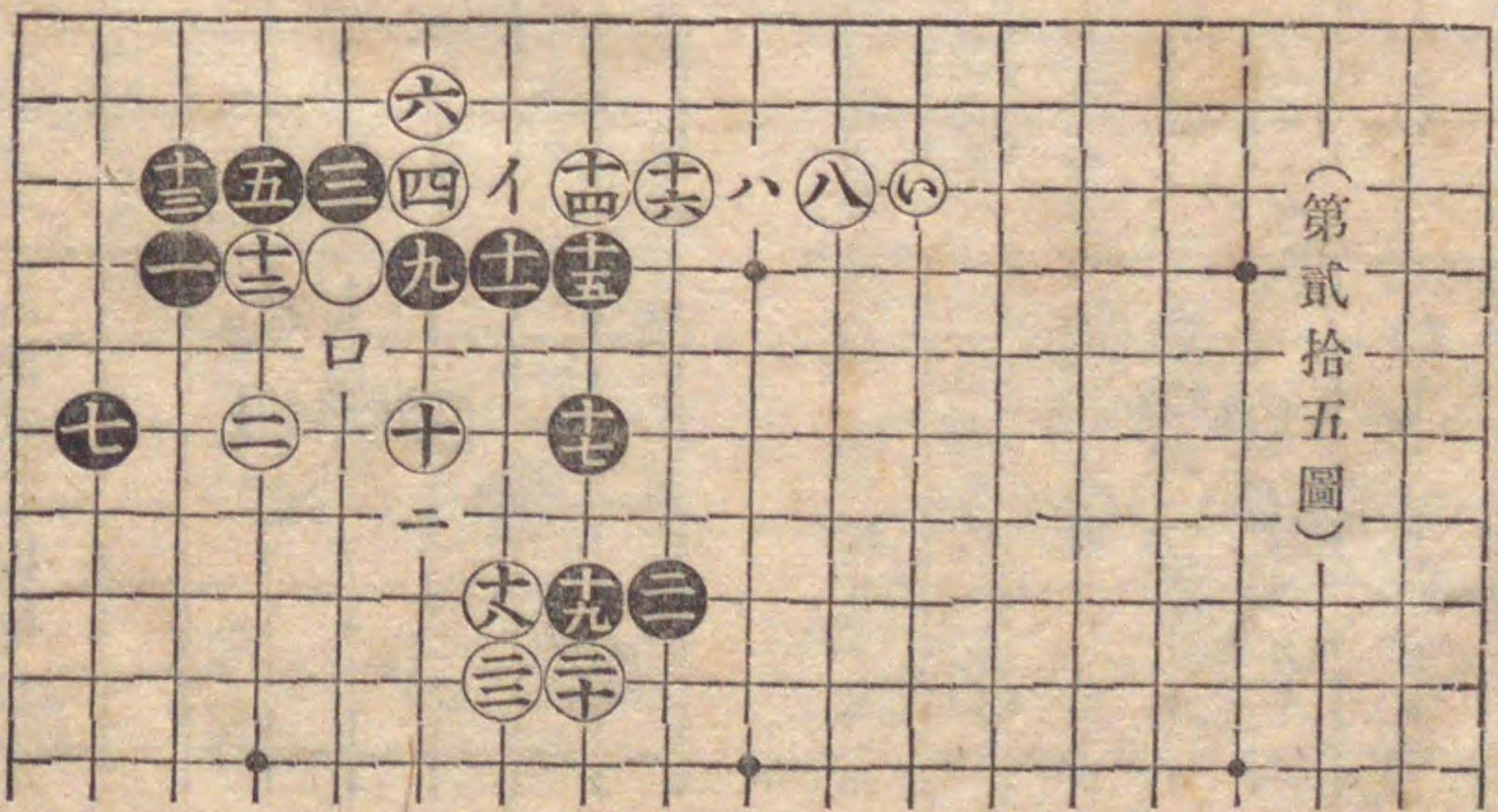
九ノ截ルイ

白ノ打方

黒十三手ニ
二種アリイ
ト曲ルハ征閉
係有利ナ時
征ニ就ラハ四百
十四百ヲ見ヨ

○(第貳拾五圖) 注意す可きは、本圖白六以下は凡て場合に屬する手で、定石ではない、白八は局勢の如何によりては(イ)と更に一路廣く拓く事もある、白が六と下つて黒に七と走られた以上は、九と截斷される手の生じる當然である。
白十は黒が若し(ロ)と抱へたならば十一の點から縛やうといふ意である、黒十一は白を上下に隔て、打つ意である、白十二は黒から(ロ)と来て左右連絡するのを妨げると同時に、隅の黒に接觸して十三の斷點を生ぜしめたのである。
黒十三は此く隅を粘ぐ手と外部から(イ)の點に曲る手との二途がある、(イ)と曲るのは征關係が黒に有利で四、六の二子を生擒し得らるゝ時である、征關係不利なる場合は黒は十三と此く隅を粘ぐより外はない、本圖の如く黒が十三と粘いだ後の應接は數字の示す手順に運び局勢の推移を待つ可きである。

「註」 黒十三の手で(イ)に曲られ征關係の白に不利な場合は、白は豫め八の手を一路窄く(ハ)と打つておくがよい。



(第貳拾五圖)

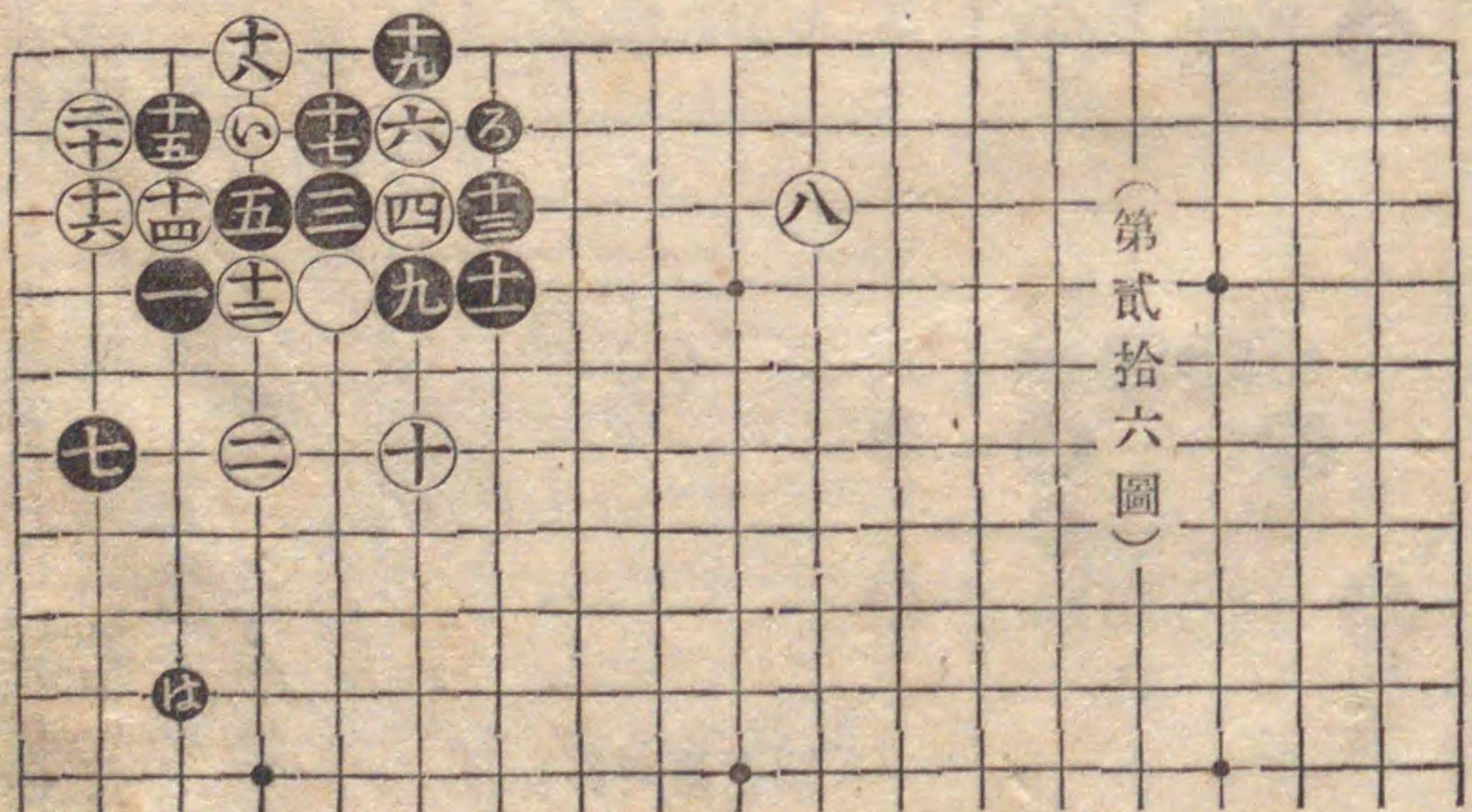
六ト下ルハハ
ト右方ノ廣
ク拓ク策

十八ノ置
點々々
考圖ヲ見ヨ

又某棋書に、白八の手を以つて(ニ)の邊に備へ、黒九の截を豫防する手として示してあるのを見たが、其は理由なき説である、何となれば、六と下るのは七と手を引かして八と右方へ廣く拓かうといふ策の時に處する手である、に關はらず今八の拓きを閉却して(ニ)に九の截に備へる程ならば、初から六の手で九の點の堅く粘るか若くは十一の點に係粘いであげば事は足るのである。

○(第貳拾六圖) 征關係黒に有利にして、黒より此く十三と曲つた時は、白は十四と截るより外致し方はない、次で黒十五、白十六の交換の後、黒が十七と押へて二子の白に迫つた時、白は十八と置いて黒の眼を奪ふと同時に隅に根據を造るが要點である、黒十九の時白は單に二十と曲つて居てもよし、或は(イ)と截り、黒に(ロ)と提らせて二十と活きておいてもよい。

本圖の如く運んだ後に於て、黒は時機を見て、(イ)方面から七の一子の活躍を計る策を講ず可きである。

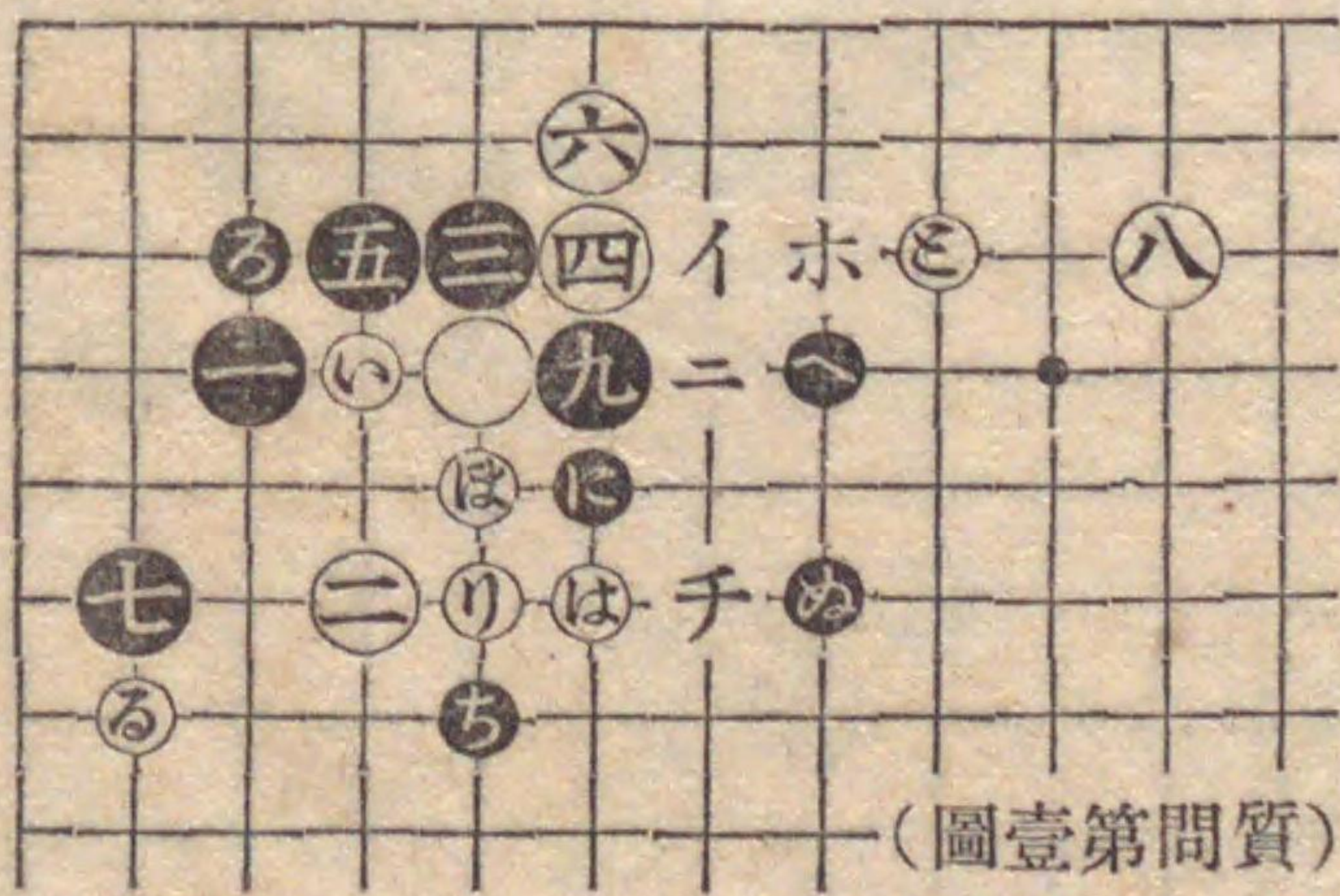
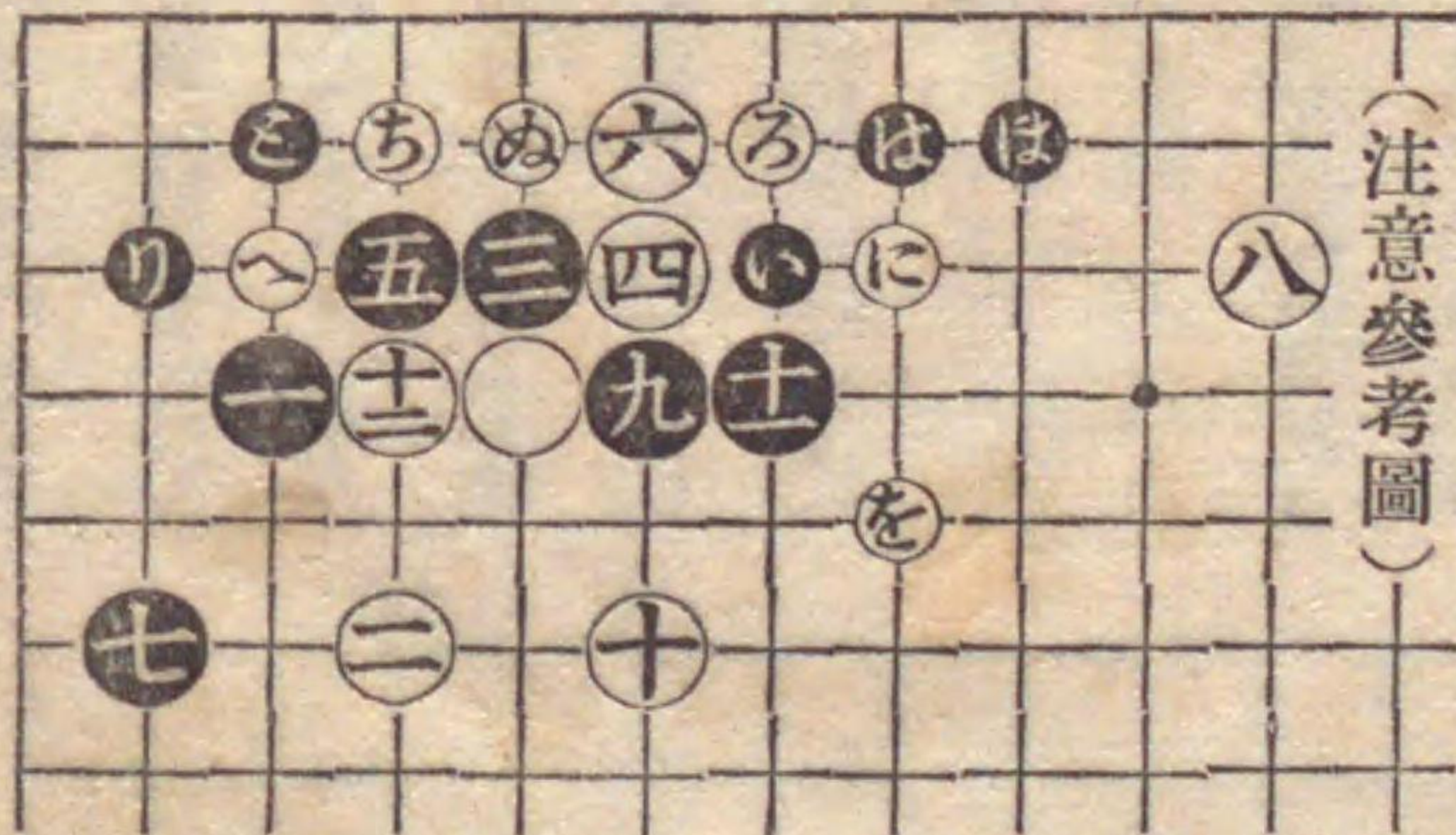


(第貳拾六圖)

△(注意参考圖) 征關係の不利なるに關せず黒が十三の手で⑥と曲れば、白⑧黒⑨白⑩の時黒は⑪と打つるより外なく、次で白に⑫と截られ、黒⑬白⑭黒⑮白⑯と絞ぼられて、黒が⑰の點に粘いだ時、白に⑱と掛けられ、三子の黒を捕獲さるゝか側の二子を捨てるかといふ運命となるのである。

△(質問第壹圖) 某碁書に「黒に十三の手で(イ)と曲りを打たれるを豫防する目的で、白は十の手の時先づ①と打ち黒を②と應ぜしめて、然る後③の點に飛べば、黒(ニ)の時(ホ)と盤る手順となりて(イ)と曲らるゝ惧がない」と説いてある、此の③に先んじて④と打つ手の可否御詳解を乞ふ。

□答 場合に依りては其ういふ手順の良い時もないとはいへぬが然し黒が白の注文通りに來るものとは限らぬ、何となれば説者の意の如く白①黒②白③の時黒が(ニ)と打つて呉れば白には好都合なる可きも、然る場合には黒は④と迫り、白を⑤と應ぜしめたる後⑥と飛ぶ可く、其の際白は⑦と上側の二子を凌ぎ黒は單に(チ)と縛ぬるか或は、⑧と覗き、白⑨の時⑩と飛ぶかの二途に出づ可く、此く運びし結果より見れば、初白①と押し黒②と粘ぎし此の交換は黒の有利である何となれば他日白より③の邊に迫らるゝとも隅の黒は何等惧るゝ處がないからである。

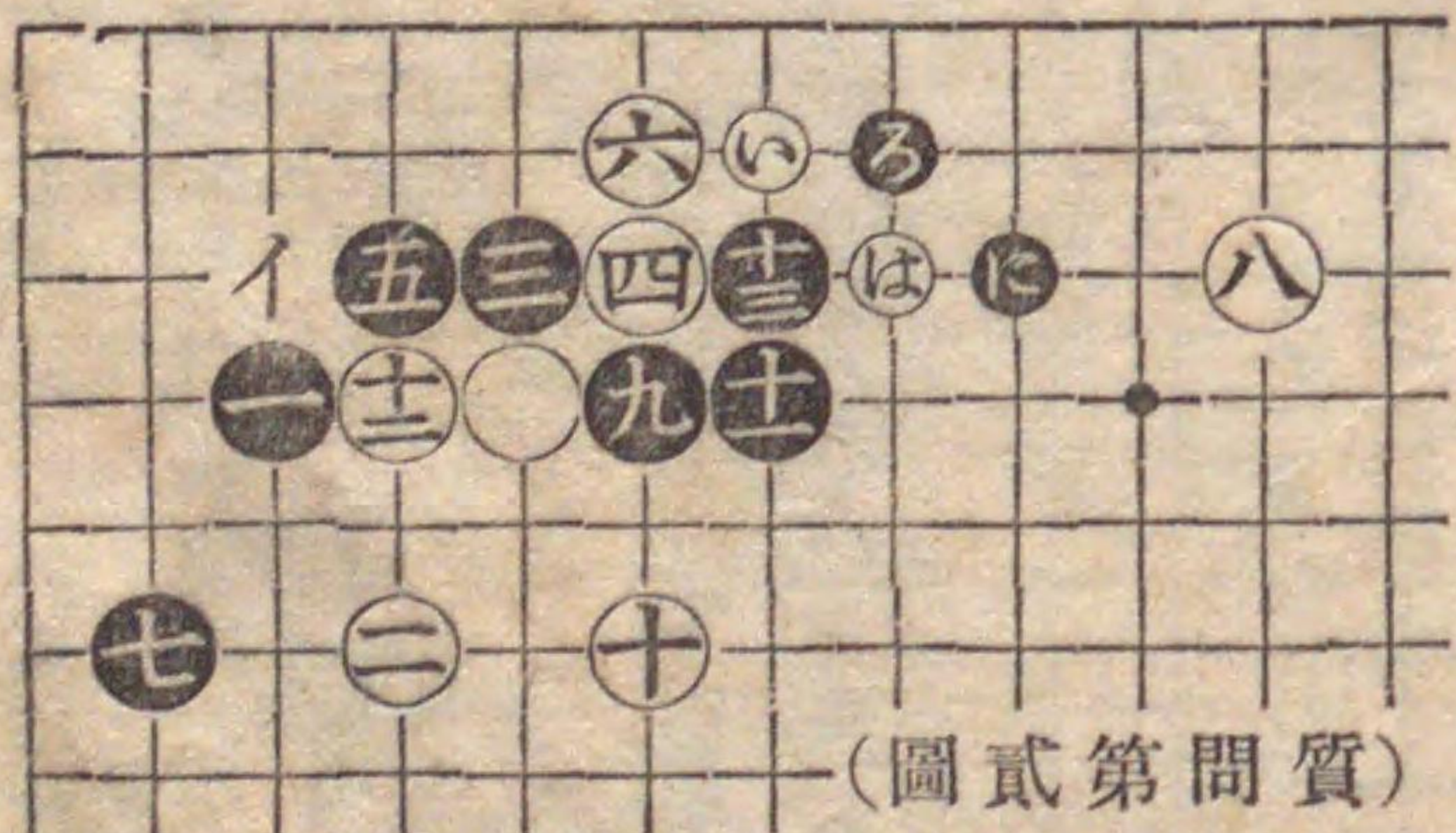
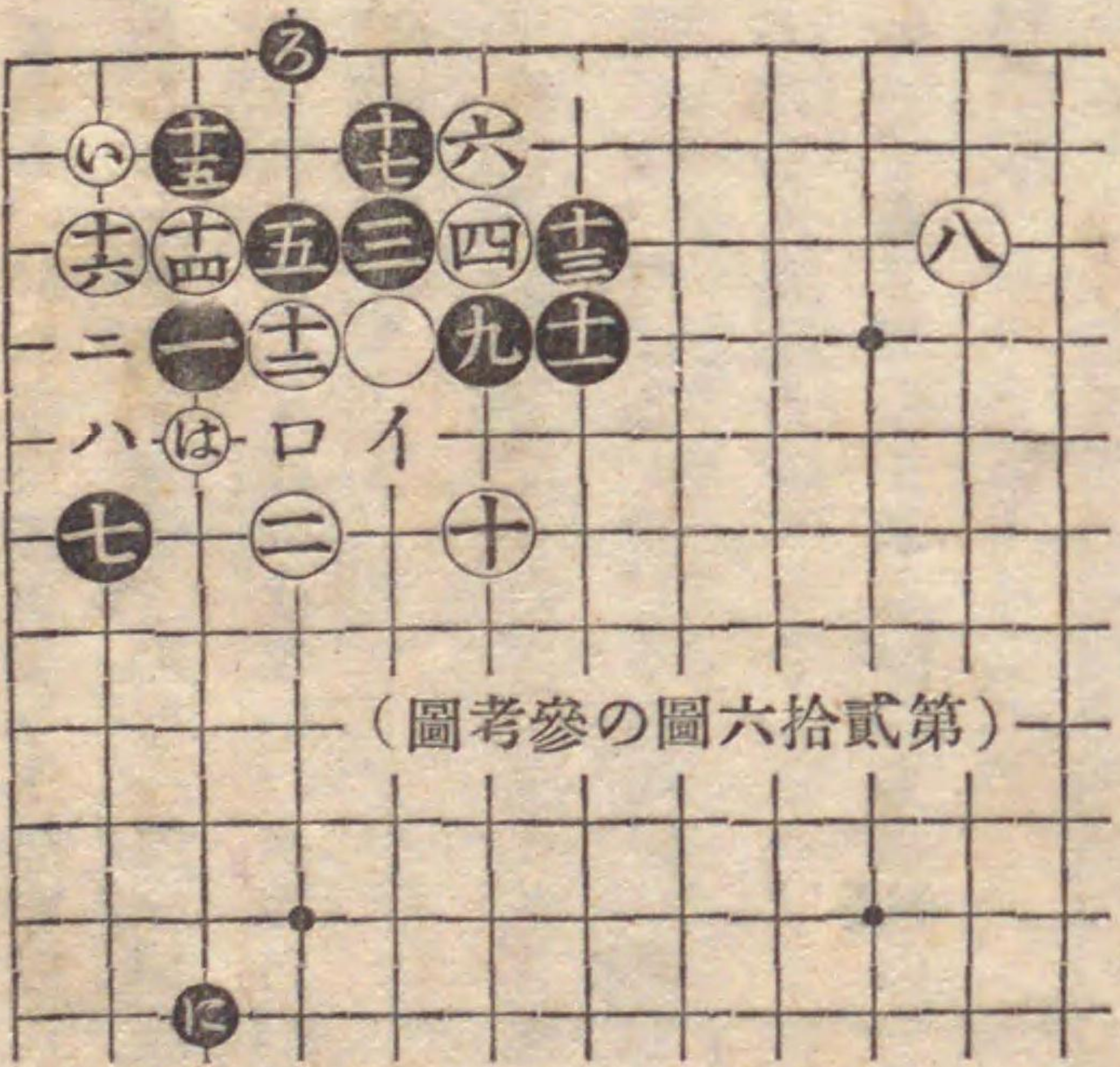


△(第貳拾六圖の参考圖) 前圖黒十七の時、白が先づ(本圖⑧の點に)黒の眼を奪ふといふのは要點であるが若し本圖の如く單に⑧と曲れば、黒に⑨と眼を持たれて白は少なからぬ不利である、即ち白は隅に活がない爲めに、⑩と打つて黒一を抱へておかねばならぬ、黒は局勢の如何によりては遙に⑪の邊から黒七の二子の活動を誘致する様な場合もあらう。

尙本圖の結果としては黒より(イ)と打たれ、白(ロ)と粘いだ時(ハ)と來られ、白は(ニ)と打ち抜いて順次に眼を奪はれる様な味も残つて居る。

△(質問第貳圖) 黒十三征關係の詳解承りたし。

□答、征關係とは黒十三の曲りに對し白①黒②白③となり、黒が④と征にかけて白⑤の一子を提り得るを指して征關係黒の有利と言ふので若し此白⑥を征として提る事が出來ぬ場合は征關係白の有利で黒の不利と言ふ可く、随つて黒は十三の手で(イ)の點に粘ぐより外はなす。



白四、板白
手大八ニテ
犠牲トシテ
黒ヲ隔閉
鎖スル目的

白四、黒ヲ兩
断シテ戰ハシ
策
黒七ニ種、
手アリ

七以下十七迄
ハ決定ノ手

十七、キミヲ
十九ト下ルハ
悪手

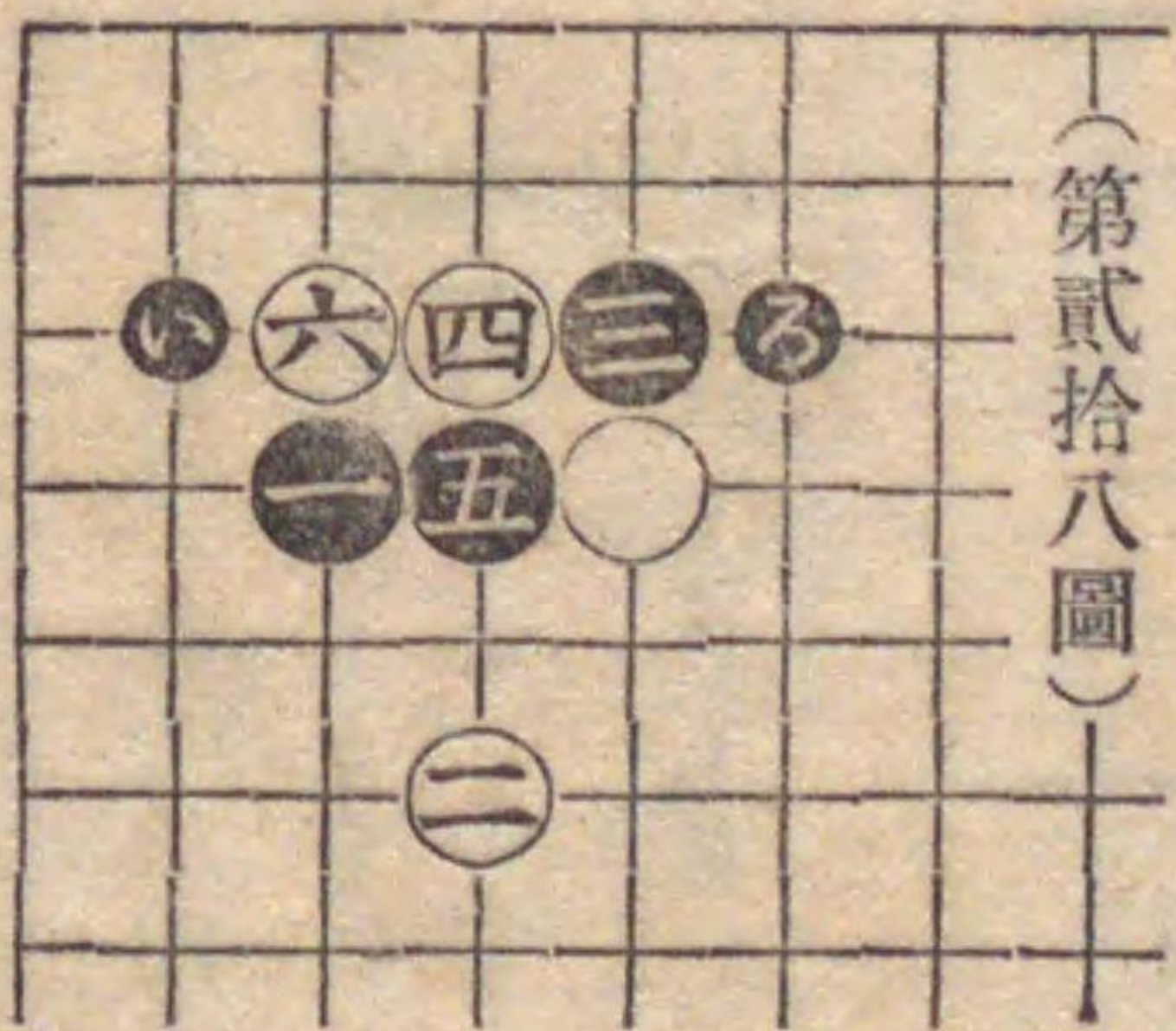
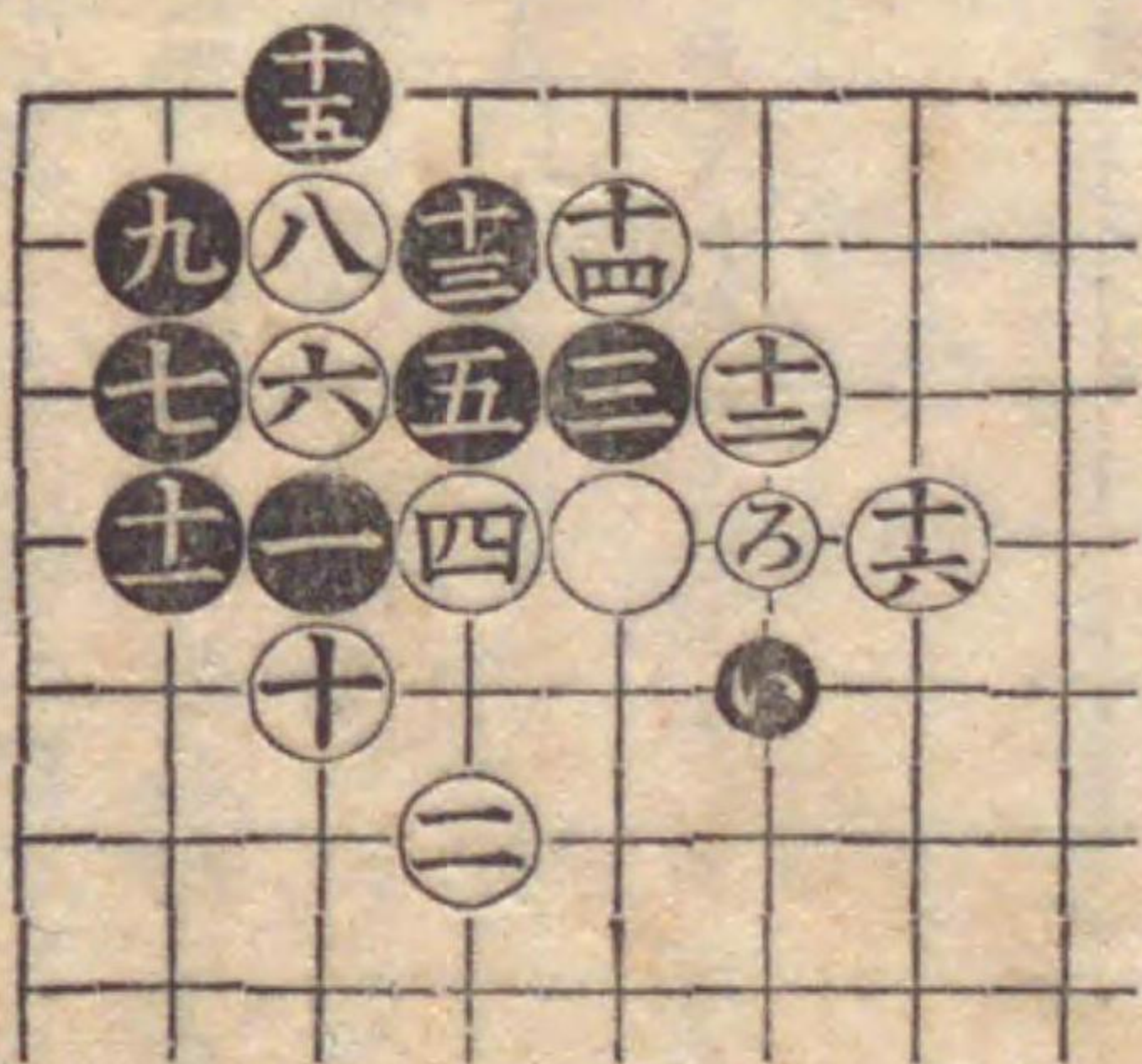
○(第貳拾七圖) 白四は趣向の手である、即ち中央方面より上側右方に大地域を造らうといふ様な策の時に此く六、八の二子を犠牲として上を塗りつけ、黒を一隅に閉鎖するのである、形勢の雄大は白の有であるが、黒が隅に占める實利は決して鮮少はない、本圖白が四、六と來た以上は十六迄相互の應接に何等の變化はない、又紛もない。

「註」本圖の後に於て黒は直ちに①と一子の覗きを打ち、白に②と應ぜしめておくがよい、早ければ白も應じるが時機が進んだ後では、白は③と應じるか如何か判らぬ、此く④と先手で打つておく一子は他日何等か利益となる場合もあらう。

假に益がないとしても害も亦無い手である、此う云ふ一着も手筋の一種である。

○(第貳拾八圖) 白四は激しい手である、黒を兩断して戦はうといふ策である、之に對して黒五、白六は決定した手順であるが、黒七の手順に至りては、隅から①と縛れて白に迫るか、或は②と行びて側の三の一子に勢力を加へるか其は一に黒の趣向次第である。

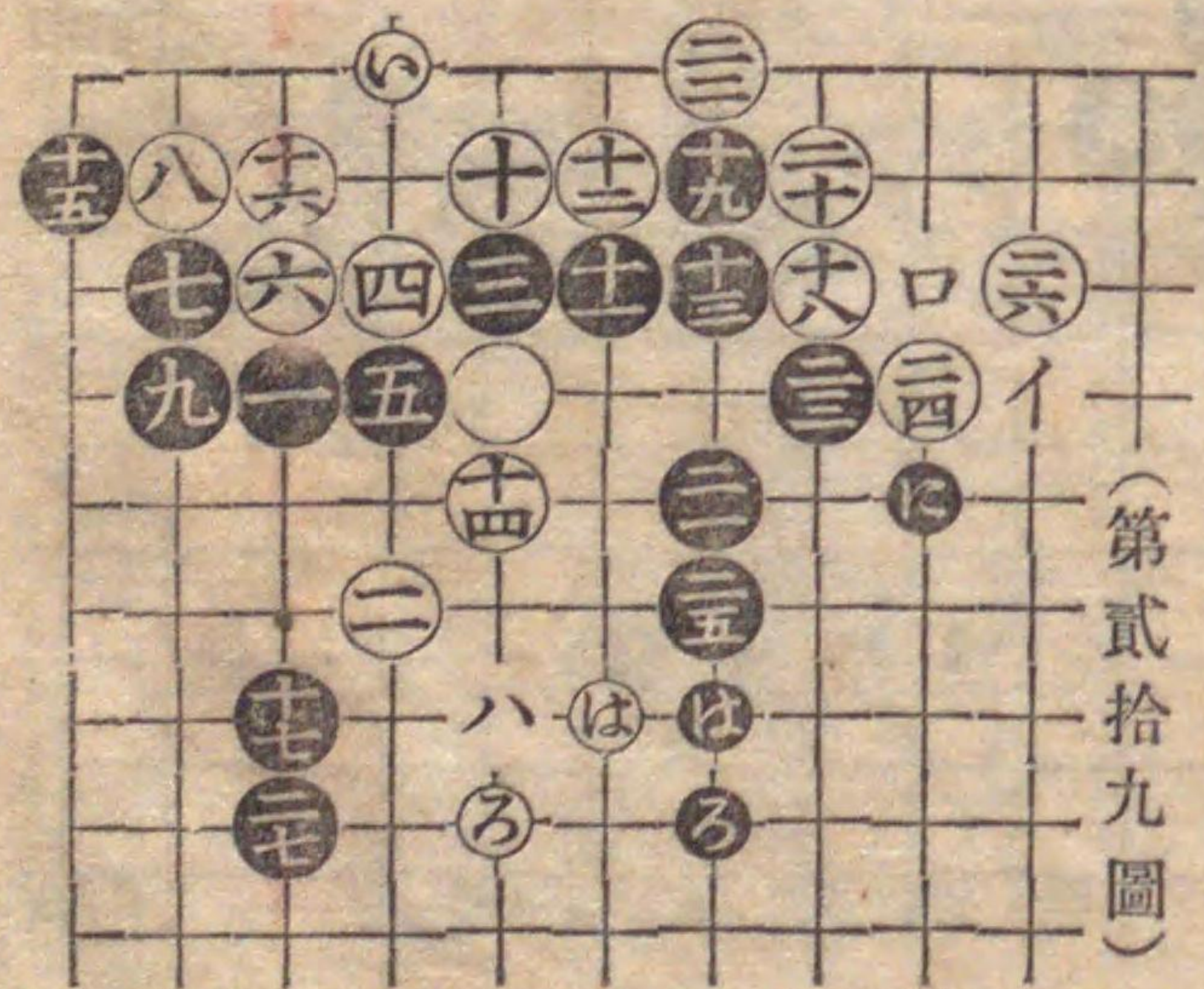
(圖七拾貳第)



(第貳拾八圖)

○(第貳拾九圖) 黒が七の手で此く隅を縛れた後の相互の應接即ち黒十七迄は決つた手であつて何等變化はない、此の手順中白十四は當初四と縛込んだ意志を繼承して黒を兩断する手である、黒十五は白の根據を奪はうといふ手である。白十八は場合によつては左側の黒に迫る策もあるが、此く十八と頂け黒の活動を制限して隅の逸出を計り二十、二十二、二十四と運ぶは巧妙な手順である。本圖に於て注意すべきは黒十七の手で十九の點に押へるの悪手である、何となれば上側は黒が二十三の點に尖んでも又は(ロ)と飛んでも隅の白に響く所であるから白の應手を見て其の變に應ずるの餘地を存し、先づ自らの備へを立て、十七と走るのは慎重な態度である、然るに今十七の手で十九の點に抑へたと假定すると、忽ち白に①と隅の活を完全にされ、次で上側に於て白より(イ)邊に迫まられると三以下の四子の黒は極めて行動の不自由を感じる事となる、サットテ之に備へて居ては左側の黒が窮地に陥る事となる、といふ不利の形勢を醸すからである。

白二十四で單に二十六に飛べば、黒は二十四の點に行びるもよい。黒二十五は五子の黒の孤弱に備へると同時に三子の白に迫つたので、白二十六は(ロ)の截を守つたのである。本圖の後白が②と走れば黒は(ハ)の頂越を覗つて③と飛ぶのもよい又白が④と來れば黒は⑤と縛れても又は⑥と押してもよい。



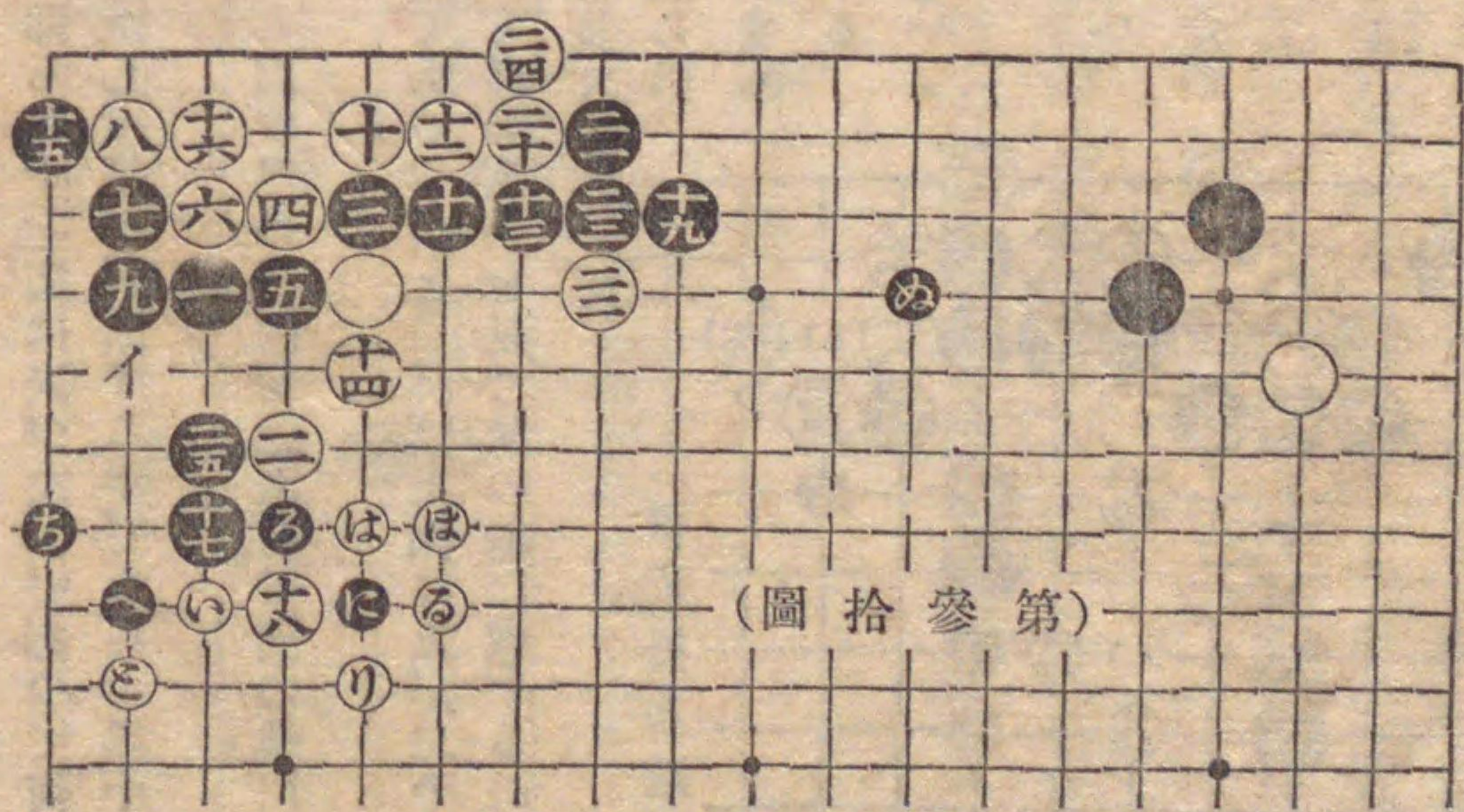
(第貳拾九圖)

三、三、四、有
利、活、方
手、筋

○(第參拾圖) 本圖の如き布石の場合に在つても白十八以下を前圖の如く運んでもよい、此く十八の手を以つて左側の黒に高壓を加へるのは中原に勢力を張るの手段である、黒十九は右上方面への連絡を兼ねて左上に響かしたのである、白二十、二十四は有利な活き方である、白二十二と先手で覗き黒に二十三と粘がしたの一種の手筋である、黒二十五を⑥の點に行びると(イ)の邊に缺陷が出来て甚だ不利である。

本圖の後白若し⑤と抑へたならば、黒は⑦と突き出し、白⑧の時黒⑨と截り、白⑩、黒⑪、白⑫、黒⑬と交換の後、白が⑭と打つて黒⑮の一子を征にかけた時、黒は⑯と上側を守り白は黒⑰の一子を⑱と抜いて居るがよい。

然しながら對隅方面の布石關係により黒⑲の一子を征として捕る事の出来ぬ時は、白は⑳と抑へる手で單に㉑と飛んでおくがよい、此の㉒は㉓の點に左側を閉鎖しやうか或は上側㉔の點から黒地を侵略しやうか、といふ二途を觀望して居る手である。

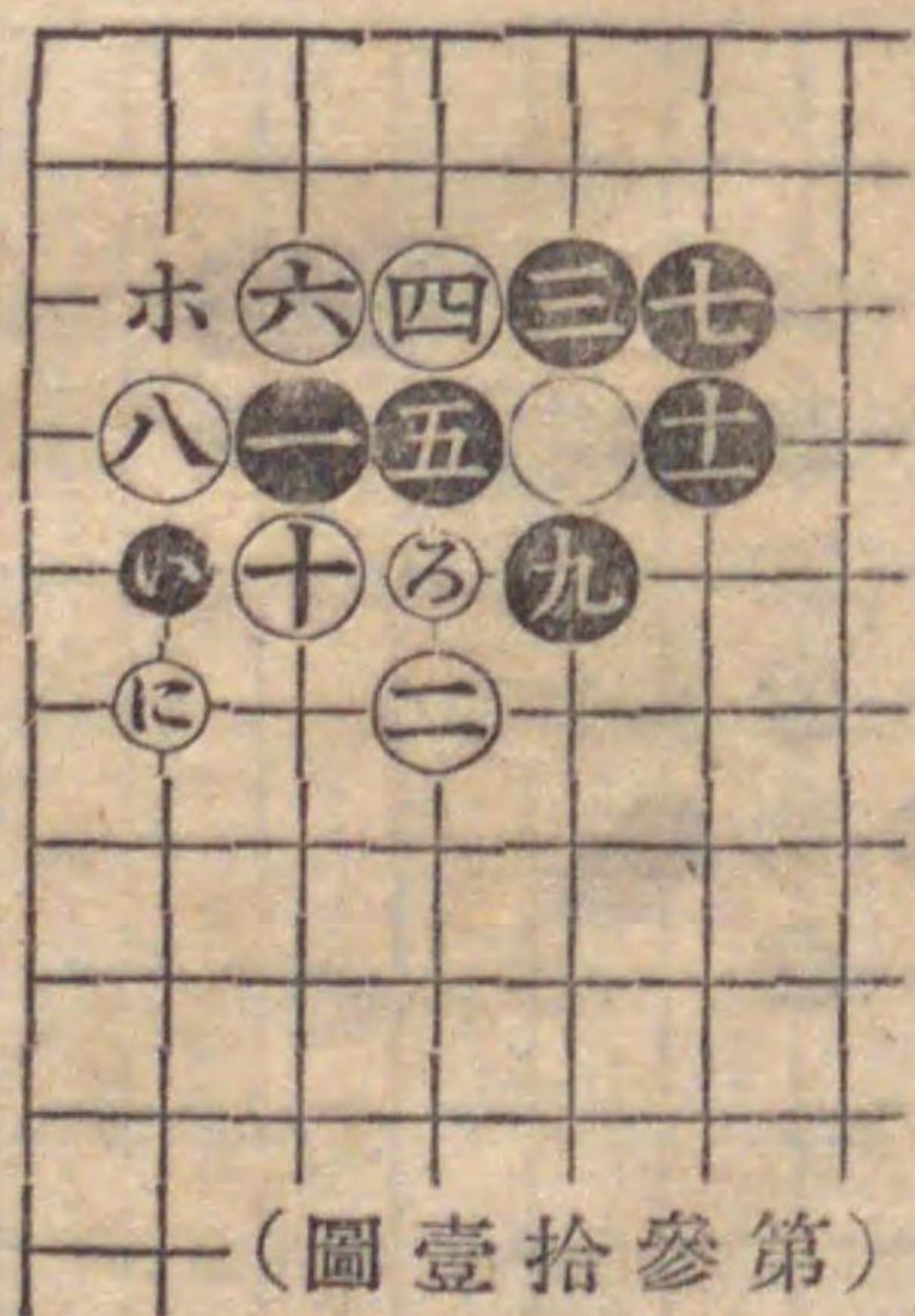
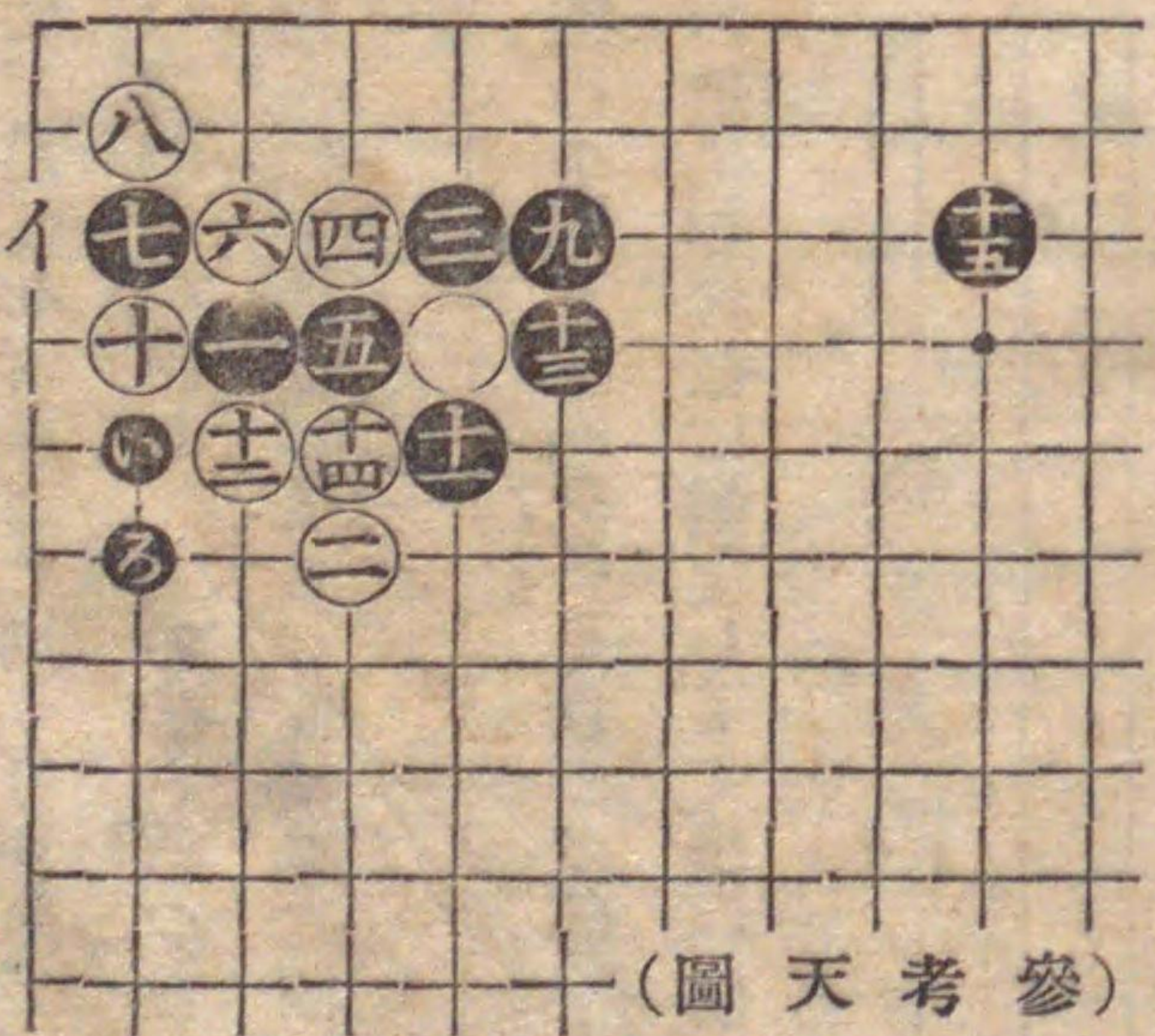


黒七、白八の
交換、手筋

○(第參拾壹圖) 前來諸圖に示した手順は複雑に陥り易いから、本圖黒七の手は其を避ける爲め、簡單に此の處を始末する策なのである、即ち九と抱へ十一と抜くのは當初に七と行ひた意を遂行した譯である、本圖の後に於て黒は①と截る手がある、其の時白は如何應じるか、②とアテ黒二子を粘がして③と抱へるか、或は單に(ホ)の點に粘ぐかは、一に白の任意である。

△(參考天圖) 問、坊間散在の棋書中、黒七白八の交換の行はれたる後十一、十三と白の一子を打抜きたる形を示せり、其の着手の可否如何。

□答、黒七白八の交換は甚だよろしくない、何となれば、前圖で説明した通り、後に黒から④と截る手があるとすれば、其の⑤と截つた時に白が若し七の點に粘ぎ黒又⑥に行ひをした場合には、白が隅へ手を引かねば活がない、然し本圖の如く既に七、八の交換の行はれた後であれば黒⑦の時白は(イ)と抜いて直に活て終ふから黒が⑧と行びる手は後手となる。

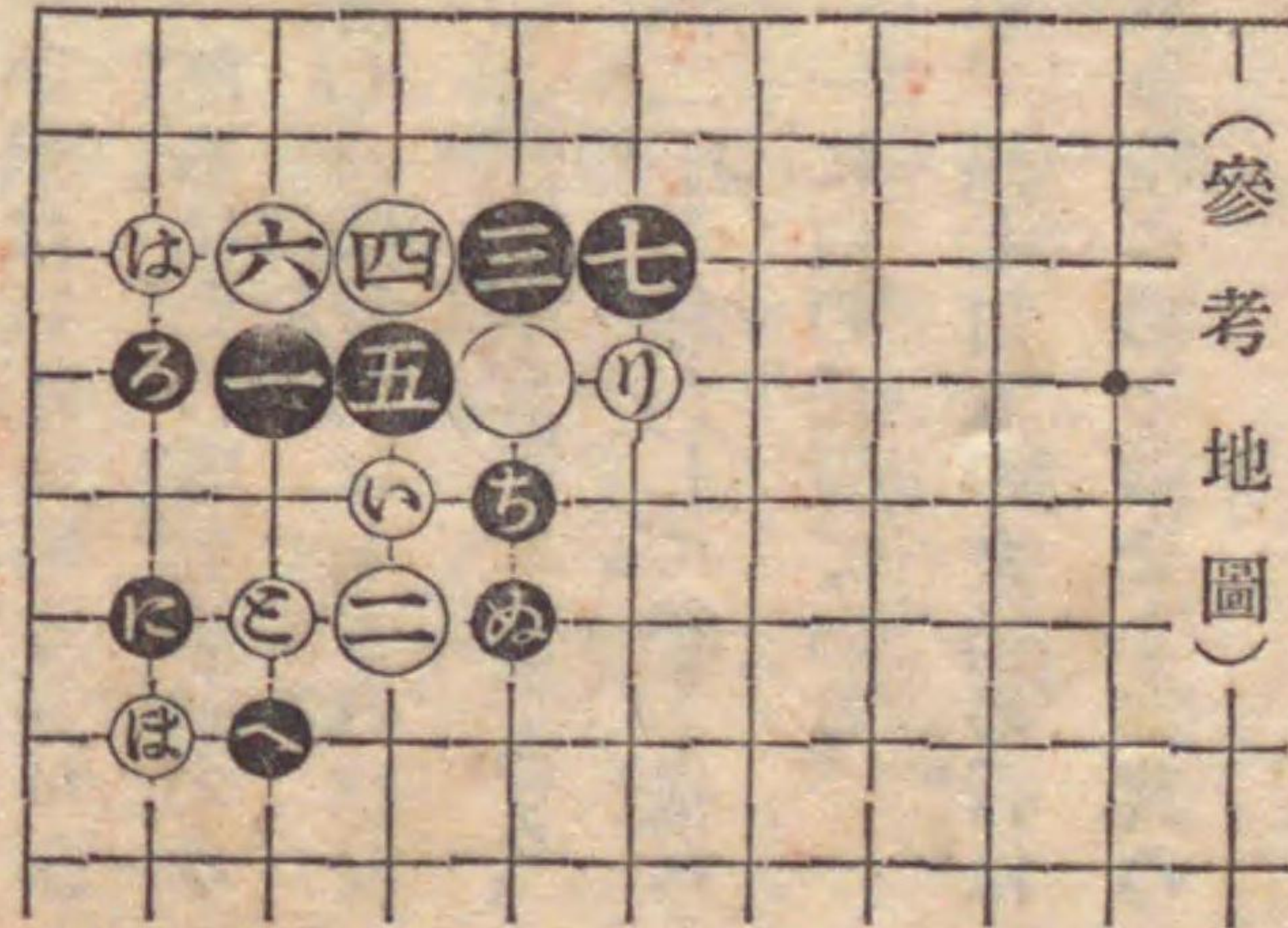


△(参考地圖) 問、黒七の行に對し、白が上から⑥と接觸した時は、黒は如何に之を捌く可きや。
□答、黒は⑦と下り、白⑧と押したる時黒⑨と飛び、白⑩と頂け、黒⑪と縛出し、白の⑫と截つた時、黒も亦⑬と截り、白⑭と行びた時黒⑮と押しして左右何れかの白を提る手順になる、或は又次圖の如く運んでもよい。

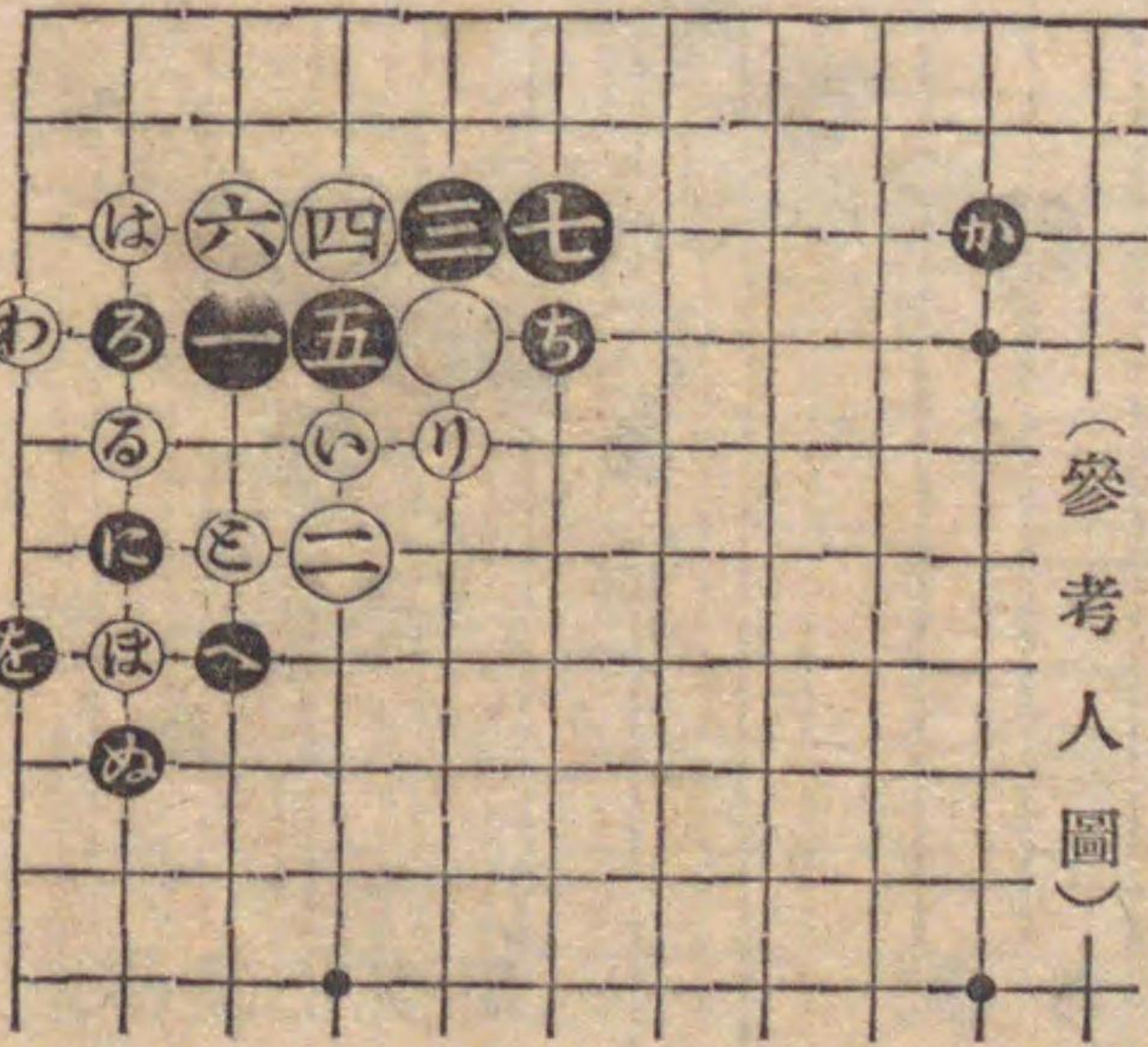
△(参考人圖) 或は局勢の如何によりて黒は⑬と外からアテ、符號の手順を履み先手を以つて⑭、⑮と白の一子を抜いて⑯と側面に地歩を占めてもよい。其の結果如何様に變化しても黒の優勢なる可きは勿論である。

○(第參拾貳圖) 黒が三と頂けるのは側を先にする手で勿論場合による手である、白四の抑へは征關係による手である、次で黒が五と截つて來た、此の五の一子を征として提る事が出來ねば、白は六と縛込む手を以つて次圖の通り運ばねばならぬ。

(參考地圖)



(參考人圖)



白四征關係

二ト斜走
前ノ注意ス

征關係詳説

若し本圖の如くして黒五を征とする事も出來ず又次圖の如く運ぶのも不利と感ずる様な場合は、溯つて二と斜走する手からして考へねばならぬ、言を換へて言ふと、白が二と斜走する當初に於て先づ黒より應じられる①の頂けと三の頂けと今一種として手拔される場合とを考慮した上でなくてはならぬのである。

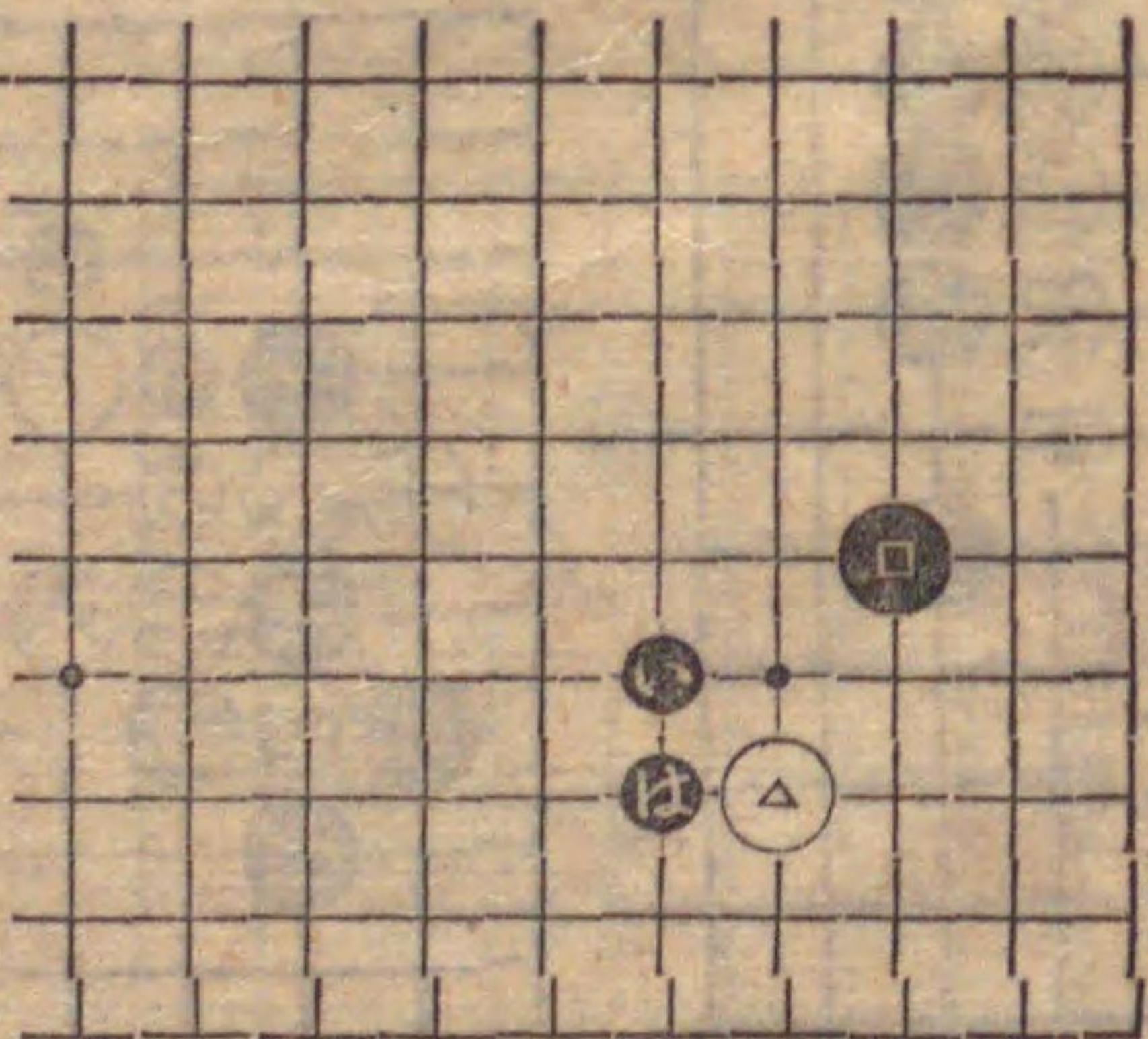
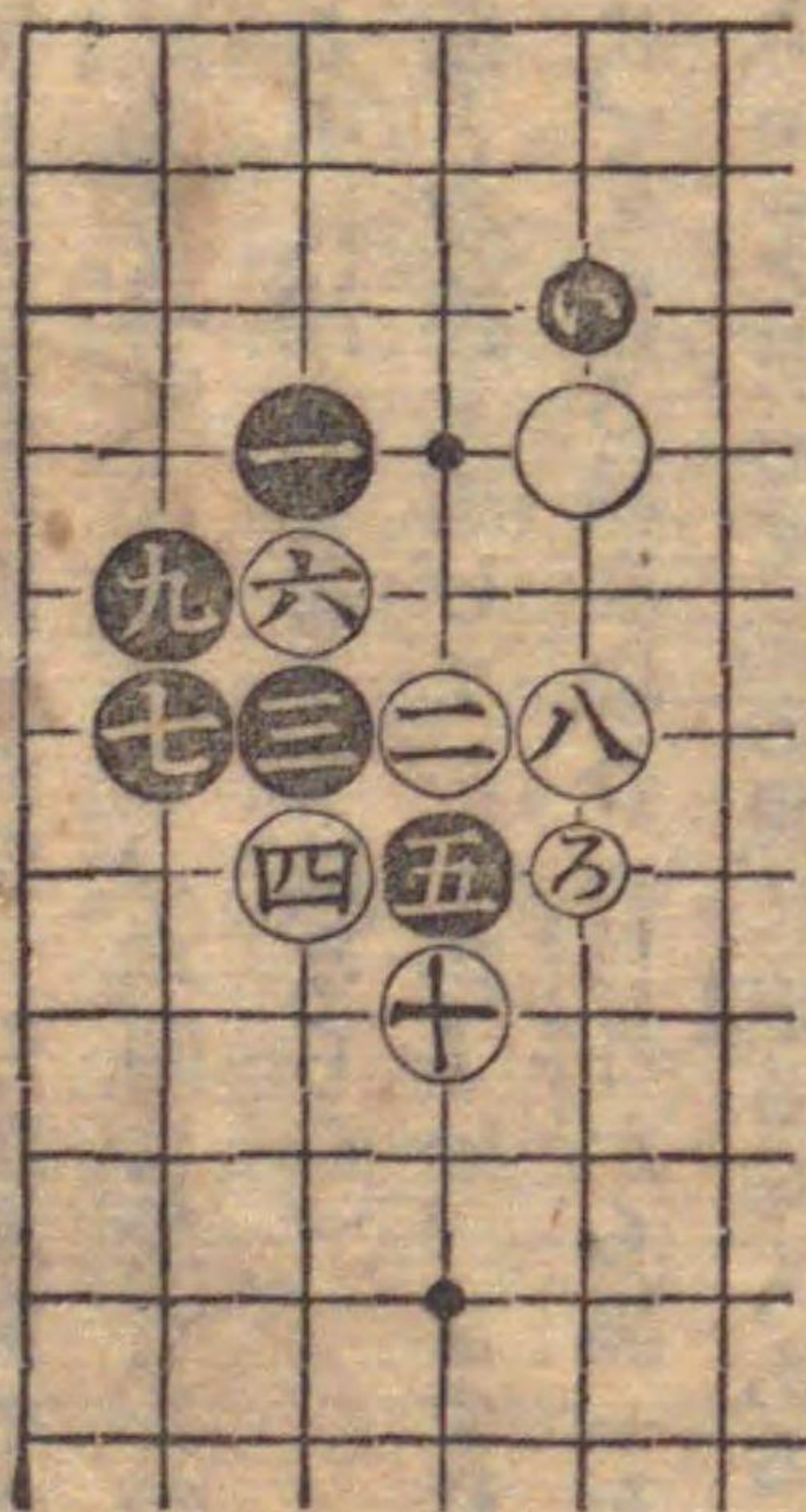
黒の立場から言ふと已に三と頂けた以上は白に四と抑へられるは、覺悟の上でなくてはならぬ、と同時に征にとられると否とに論なく五と截る可きは言ふ迄もない手である。

白の入は黒五を征に提らといふ手、乃で黒が九と盤つた時に白は十と其の目的を遂げたのである、本圖の場合に於ては黒は右下方面に征待の一子を先手に布置する權利がある。

本圖の後に於ける對隅即ち右下方隅の征關係を詳説すると、右下方隅に黒白何等の布石がない場合は黒は△印邊に一子の征待ちを打つ手がある、若し

圖の如く□印の黒に對する△印白の一子でもある様な場合は白大不利であるから白は六と縛込む手若くは二と斜走す

(圖貳拾參第)



る手の時考ふ可きで何となれば圖の如く運び黒に①と征待ちを持たれ白②の時③と押へられては白は④の一子抜きと到底比較にならぬ不利を蒙るからである。

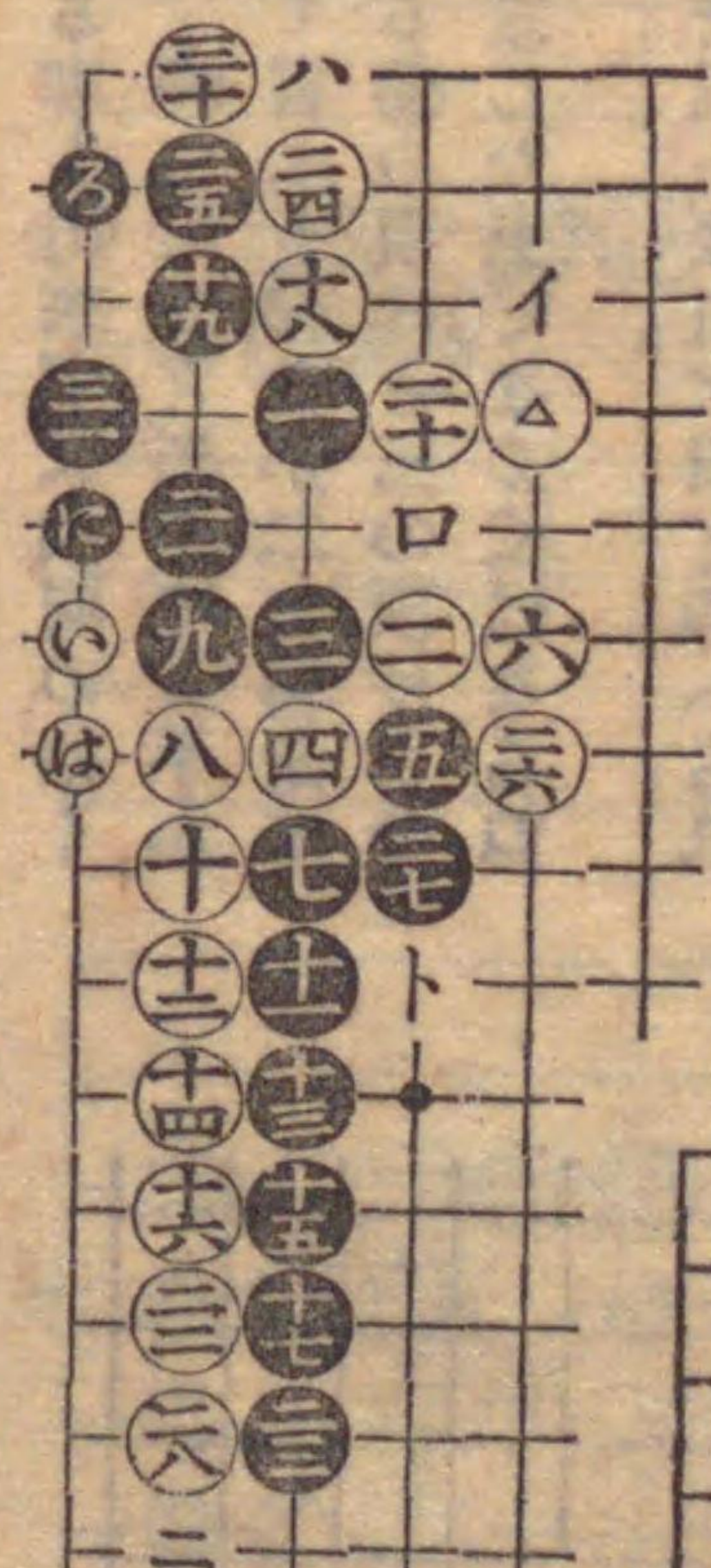
白カ黒ノ五ヲ征
ニトルノ出末
又時ノ打方
参考ノ圖ハ同
時ニ研究ス

二十九ノ手志
ハカラス

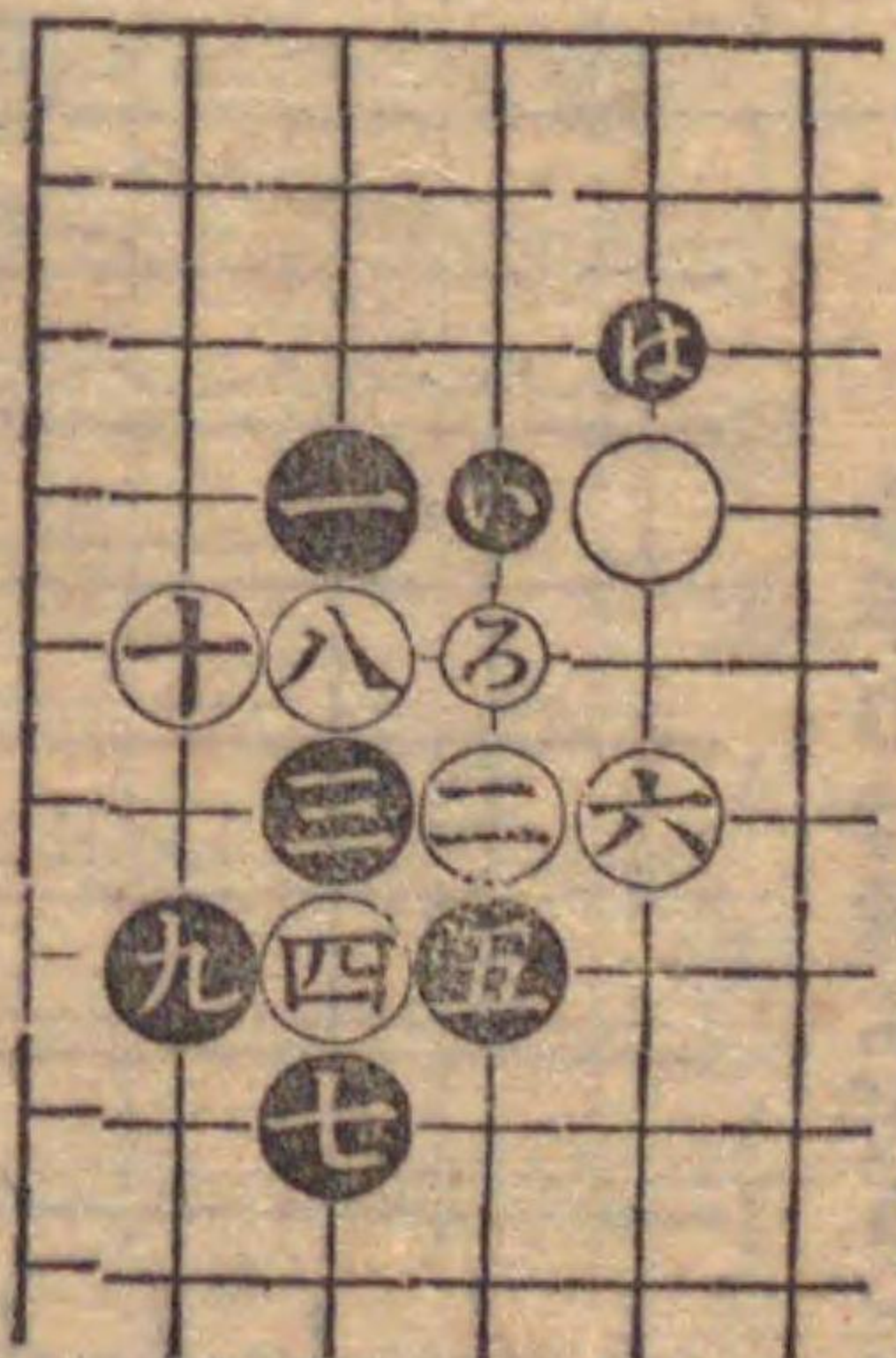
○(第參拾參圖) 前圖の如く黒五を征とする事の出来ぬ時、白は本圖の如く単に六と行び、以下圖の如く運べば、黒は白を左側低地に壓する手順にもなる。(本圖に於ても尙黒は、白に二十七の點を截られ黒廿六、白(ト)と征に運ばれる手に注意せなくてはならぬ)
白三十二の手は(イ)と打ち黒(ロ)と交換を遂げておくがよい、さすれば左下より(ニ)と抑へる手が利かぬ。△印白が若し(イ)の點にでもある様な場合(目外から黒一を大斜に掛けた後の變化の如き)であれば、白は三十と締る手で(ロ)と打つて此の黒に迫る味もある、が然し本圖の形では(ロ)と打つ手は姿勢も悪い且つ黒に(ハ)の點へ縛ねて凌がれる味がある。

本圖の手順に運ぶ可き局勢を考へると、左下方面に黒の布石のある場合白に有利である、若し左下に白があつて其の白と左側を低く這うた白と連絡する様では白甚だ不利である。

△(參考圖) 第參拾貳圖若くは第參拾參圖の如く運ぶを不利と考へた時本圖の如く白は四の一子を捨て、十と下る事も實戰の際に於ては趣向ではあるが、後に黒から●と打たれ白の黒●となる味が頗る面白くない。



(圖考参)



(第參拾參圖)

大斜掛

三三ノ手
三三ノ手

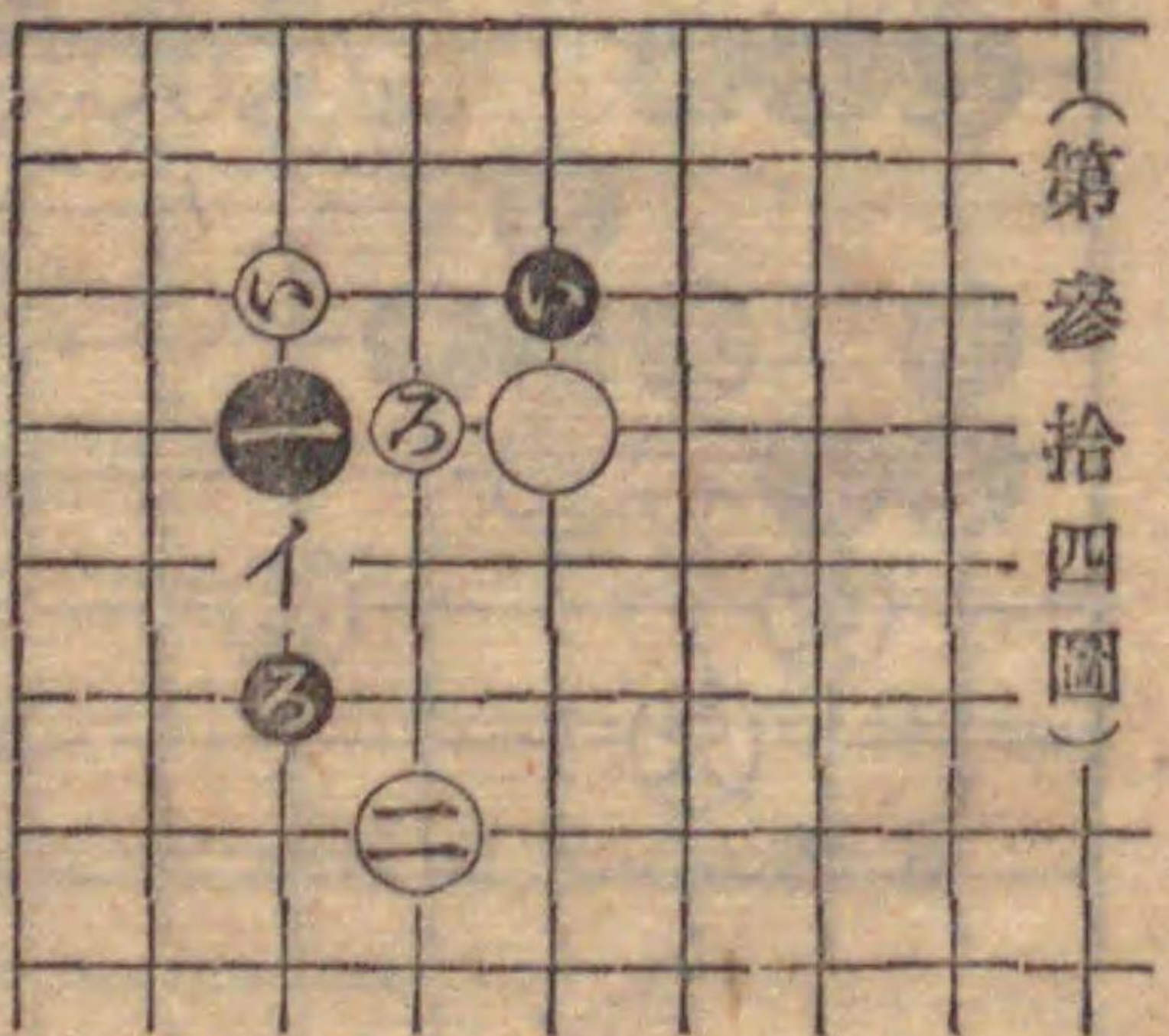
『高目大斜走掛』

○(第參拾四圖) 白二の大斜掛けは前圖の斜走掛とは少し趣を異にしてゐる、即ち二の意は黒が隅を治まらうと来れば縛込んで複雑に導かう、又側を主として来れば大きく劃して閉じ込めやうとの意である、此の意味に於て前圖斜走掛の際に於ける黒が隅から頂けた時外から抑へるが普通で縛込むのは場合の手であると説いた(第貳拾貳圖參看)のと相反對の趣がある。

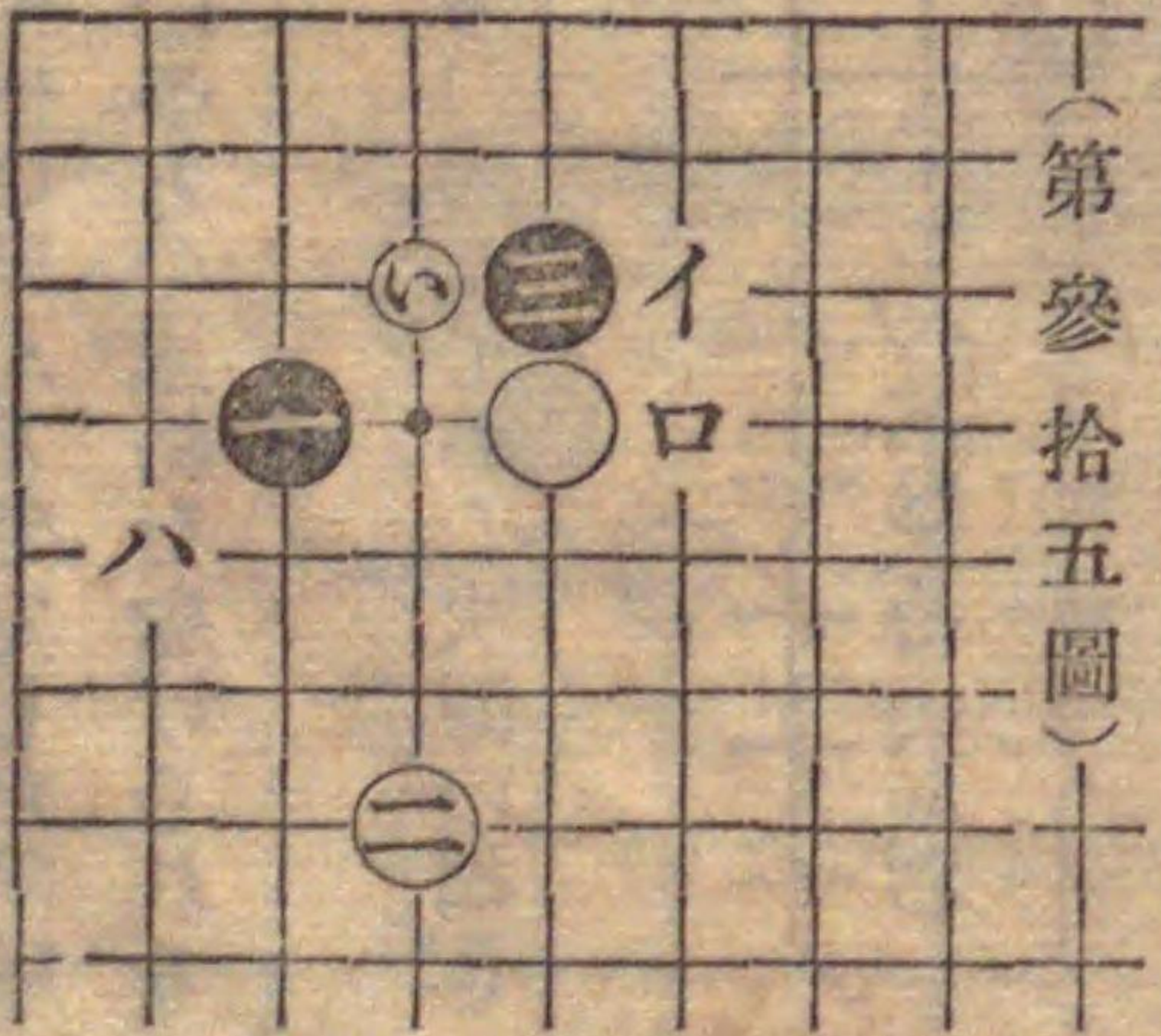
黒は三の手で●と隅から頂けるか、●と側へ飛ぶか、或は手抜くかの三種である、黒が●と頂け或は●と飛んだ後の應接は以下順次に圖解する通りであるが、若し手抜きすると白からは●と頂け、黒は尙手抜きである、其の際白が確實に黒一の死命を制さうと思へば●と衝き當る外はなく、此くても尙多少(イ)と行る味がある。

○(第參拾五圖) 黒三の頂けに對しては白は●と縛込むの一手である、此の手を以つて(イ)と外から抑へるのは甚だ面白くない、其の故は白(イ)と抑へ黒(ロ)と引き白が(ハ)と堅く粘いだ後、白二の所在點からして(ハ)と隅へ迫る手が利かぬからである、即ち白が當初二と大斜走にしたのは、黒が三と頂けて来れば●と隅へ縛込んで打たうといふ意である事が明かである。

(第參拾四圖)



(第參拾五圖)



○(第參拾六圖) 白が四と縛ね込んだ後、黒五の截り以下黒二十一迄の應接は殆んど確定した手順である。此の内黒十三の縛は、白に此の點へ行びられると、容易に二の一子との連絡を遂げられる爲めに、左右の黒が甚だしき損害を蒙らねばならぬからである。

右上布石の關係によつては白は二十二と押す手で二十三の點に(隅へ)下り、活きておく次圖の如き打方も亦一策たるを失はぬ。

黒二十三は先手を以て白の根據に迫り二十四と手を引かせたのである。

黒二十五は命令手である、即ち白をして二十六、二十八と後手を餘義なくせしめ、二十九と先鞭を着け、自から凌ぐと同時に中腹の白に迫つたのである。

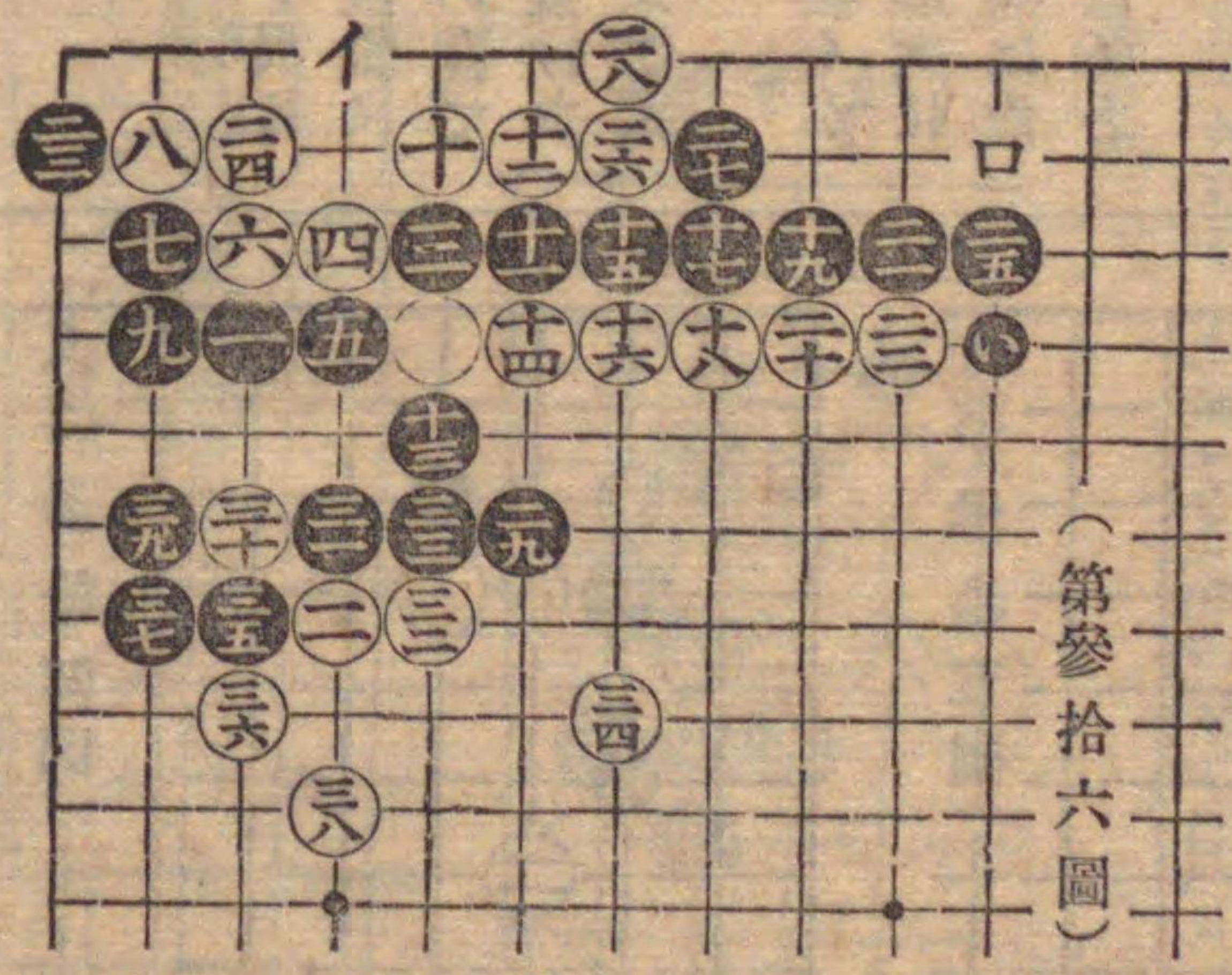
「註」 黒二十五の手で若し○と縛ねたならば白に二十五の點を截られ先手を以つて隅を活さられるの惧がある、

(參考第參圖參看)

白二十六、二十八の兩着は飽

あ迄利益る活きを講じたのである。

白三十四は中原に躍進する黒の鋒を制限したのである、或は此の手で三十八の點に飛び、黒より三十五と截られる缺點を防備するの手もある。



三十四の手
二種あり

此同答
池橋ノイ

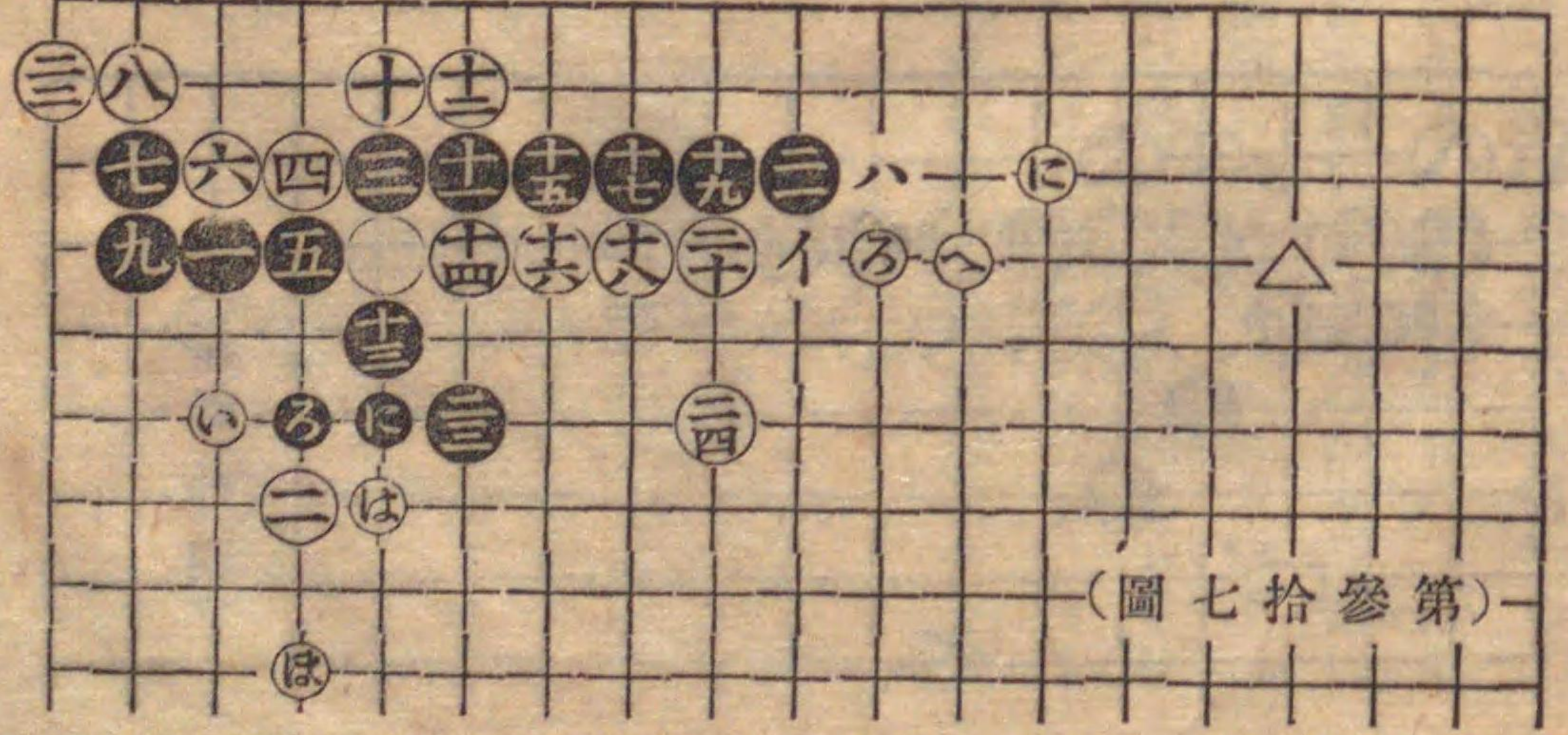
三十二の手
イノ点ニ押
ス場合

△問、黒二十五の手で(イ)と眼を奪ひ來らば如何。

「答、白二十六と行ければよい其の時黒若し二十七と抑へたならば、白に二十五の點に縛ねられ、黒(ロ)の時白は二十八の點に下つておけばよい。

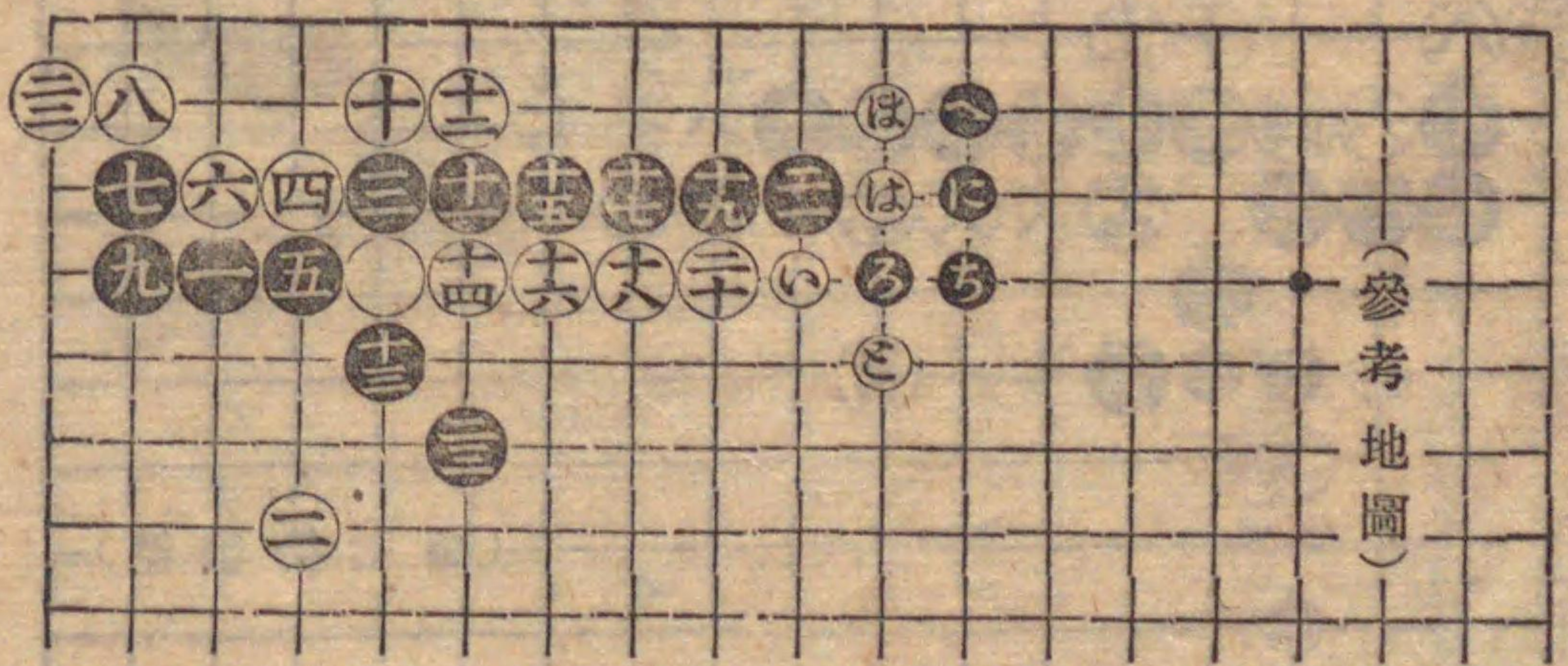
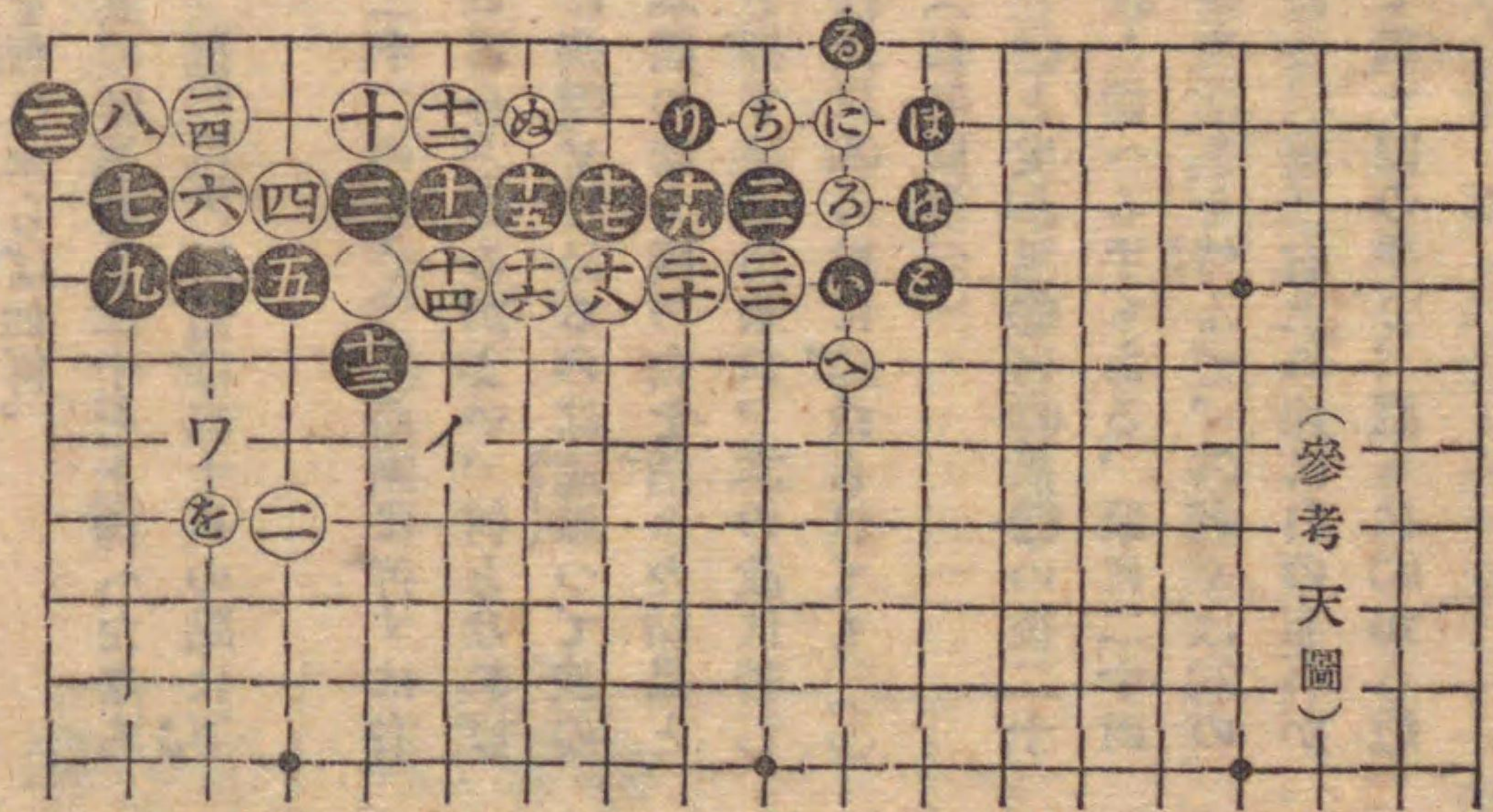
○(第參拾七圖) 前圖の如く白が二十二の手で(イ)の點に押すは右上△印方面に堅固な黒の布石のある場合と見るがよい、何となれば低く黒を這はして彼の堅固な方面に接續せしめるのは適以つて彼の勢力を重複せしめる所以である、本圖の如く隅の白を活きた結果として白は二十四の手で(イ)の點を押す事は出來ぬ、其の故は若し白が二十四の手で(イ)の點を押せば黒に○の點に縛ねられても(ハ)と截る手が悪手となるからである(參考圖參看)

本圖の如き形に於ては白二十四は、○と尖み黒○白○黒○の後二十四と打つか或は二十四と飛ばずに○と備へる手もある、單に二十四に此く中原に飛んだ上は、隅の完全な活きを恃んで、○若くは○の點から三以下六子の黒に迫る意である、或は右上△印に白の布石があれば此の方面からの拓きを兼ねて二十四の手で、直ちに○から迫る手もある。



(石定先互)

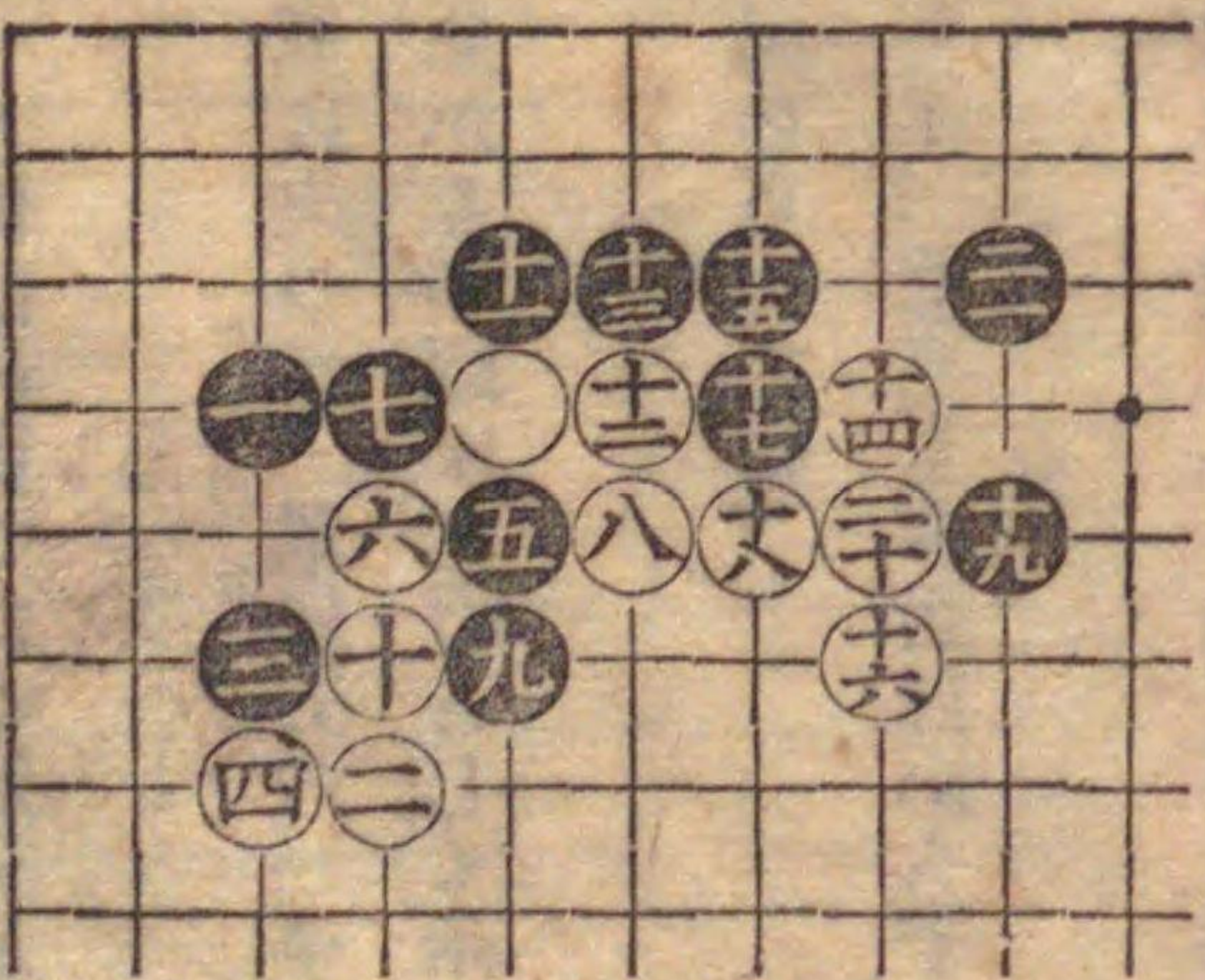
△(參考地圖) 前頁第參拾六圖
 黒第二十五の手で本圖の如く
 と縛ねたならば、忽ち白に
 截られ、黒、白、黒、白、
 黒、白、黒、白、黒、白、
 黒の手順を餘義なくされ、白
 の先手が若くは(ワ)の點に廻
 る事となつては、黒は前圖の如
 く(イ)の尖みをする暇がない爲
 め一以下六子の黒は多大の迫害
 を蒙る結果となる、乃ち黒の
 縛ねは白にの截を利用して、
 玆に牽制策を施されて隅を先手
 に活されるの大不利があるの
 である、然しながら黒の縛が
 絶對悪いといふ譯ではない左上
 の布石次第である。



△(參考地圖) 又第參拾七圖の如く白が隅を二十二と下つて居る場合は二十四の手で、本圖の點
 への押しが何故利かぬか、といへば圖の如く(イ)と押しした處で黒に(ハ)と縛ねられた時、(ハ)の截りが徒
 勞である(截れば二十二の一手が無駄になる)其の理由は天圖の場合であれば隅の白が未だ活に
 就てゐない爲め此の截を利用して活さるといふ必要もあるが、本圖では既に隅が活きて居る以上は
 (ハ)の截は畢竟無効である、のみならず若し(ハ)と截り(ハ)と下れば却つて黒を助けて益々堅固ならしむ
 るの不利がある、且つ又本圖は天圖に反して黒二十三の尖が既に行はれて居るのであるから、白は
 左側二の一子の孤弱を援はんとすれば、中邊七子の白が危殆に陥いるの患があり、中邊の七子を安
 全の域に導かんとすれば左側の孤弱を援くるの違がない、といふ窮
 境に陥らねばならぬのである。

○(第參拾八圖) 黒が側に向つて三と飛んだ時は白は之を四と押す
 より外に良着はない、此の場合黒は五と頂けて白の應手を試み、白
 が六と縛込んで來たならば七と截り白八の時九と行ひ、此の二子を
 犠牲に供して次で數字の示す手順に運び側面に出動するのである。
 白若し十六の手を以つて二十の點に並んだならば、黒は單に二十一
 の點に飛ぶが普通である。

(圖八拾參第)



「注」但し場合によつては黒は手拔するかも知れぬ。又本圖十七
 以下を黒は手拔する場合もあらう。

道院
マシキ手

△(参考図) 或碁書に本圖の如く、黒九と緯ね、白に十と抜かして十一と側面に出でたる形を示せり、前第參拾八圖と其の差如何。

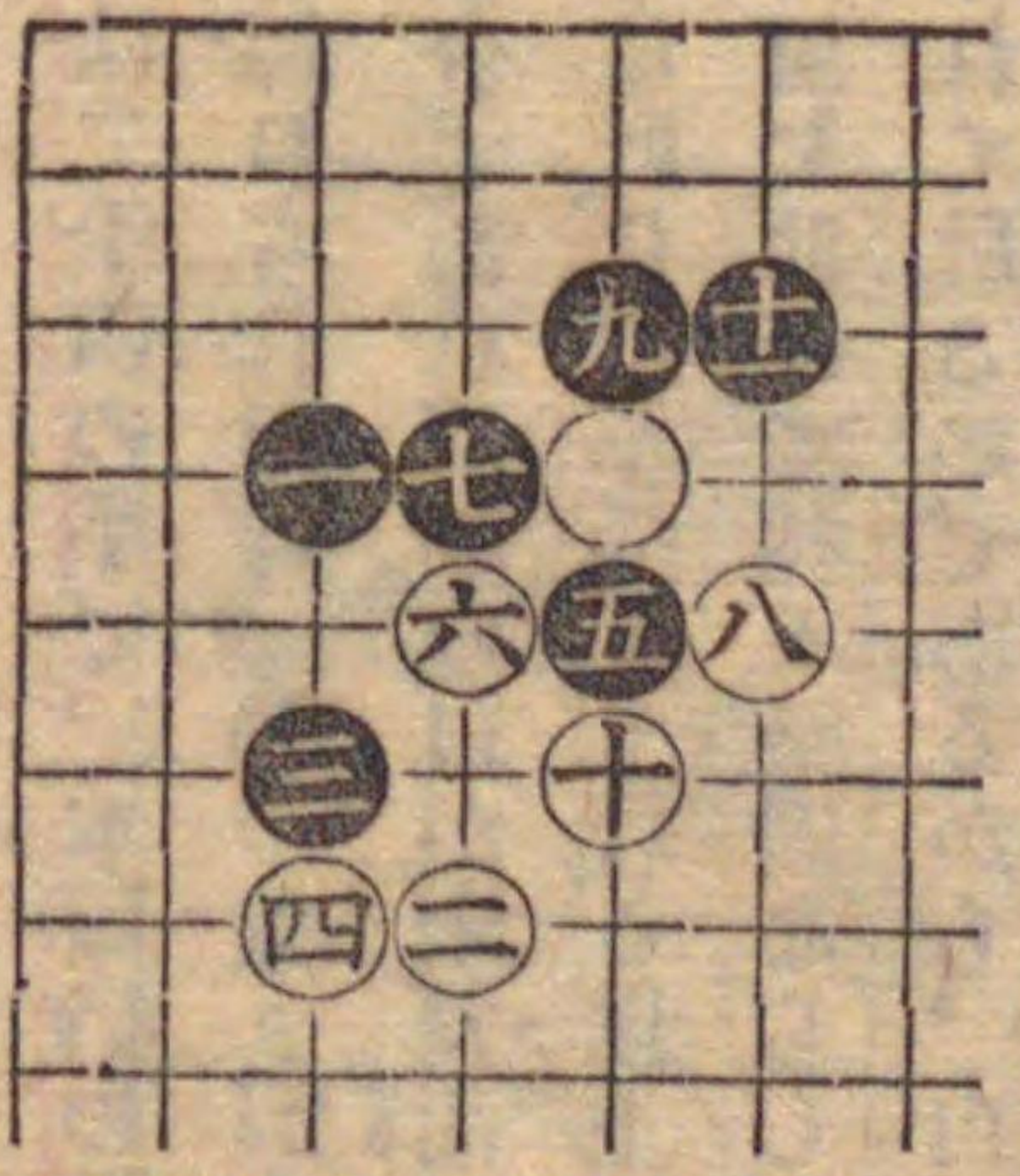
□答、實戦上何等か特殊の場合に於て、其の必要あらば兎も角、此く中原に向つて、單に五の子のみを打ち抜かしむるは、碁の道理上斷じてあるまじき手である、即ち此かる手順は定石として示す可きものではなす。

△(參考る圖) 問、同黒五の頂けに對して白六、黒七と運ぶ形を示せり其の可否如何。

□答、白六の行ひは無意味なり、尙且前圖の如く⑤の點に緯込むを最上とす、黒七も亦面白からず⑥の點に並び左右の白の勢力を削る可し。

△(注意圖) 黒は第參拾六圖以下の如く隅へ四と緯込まれるを嫌ひ、其の準備として先づ三と飛び四と應ぜしめた後五と頂ける事もある、然る場合には白は必らず外から抑へるがよい、若し本圖の如く⑤と緯込めば、黒に⑥と截られ、白⑦の時黒に⑧と側へ行ひられ白は、爲めに一隅に閉塞されて非常に不利を蒙る事となる。

△(注意地圖) 乃て黒三、白四の後黒が五と頂ければ白は六と外から抑へ、黒七の時、白は八と堅固に粘るか、或は八の手で⑨と粘るかかの二途である、黒九に對し白は十と押へるの一手である。



(圖イ参考)

ハノ掛粘
ニ対スル
黒ノ打方

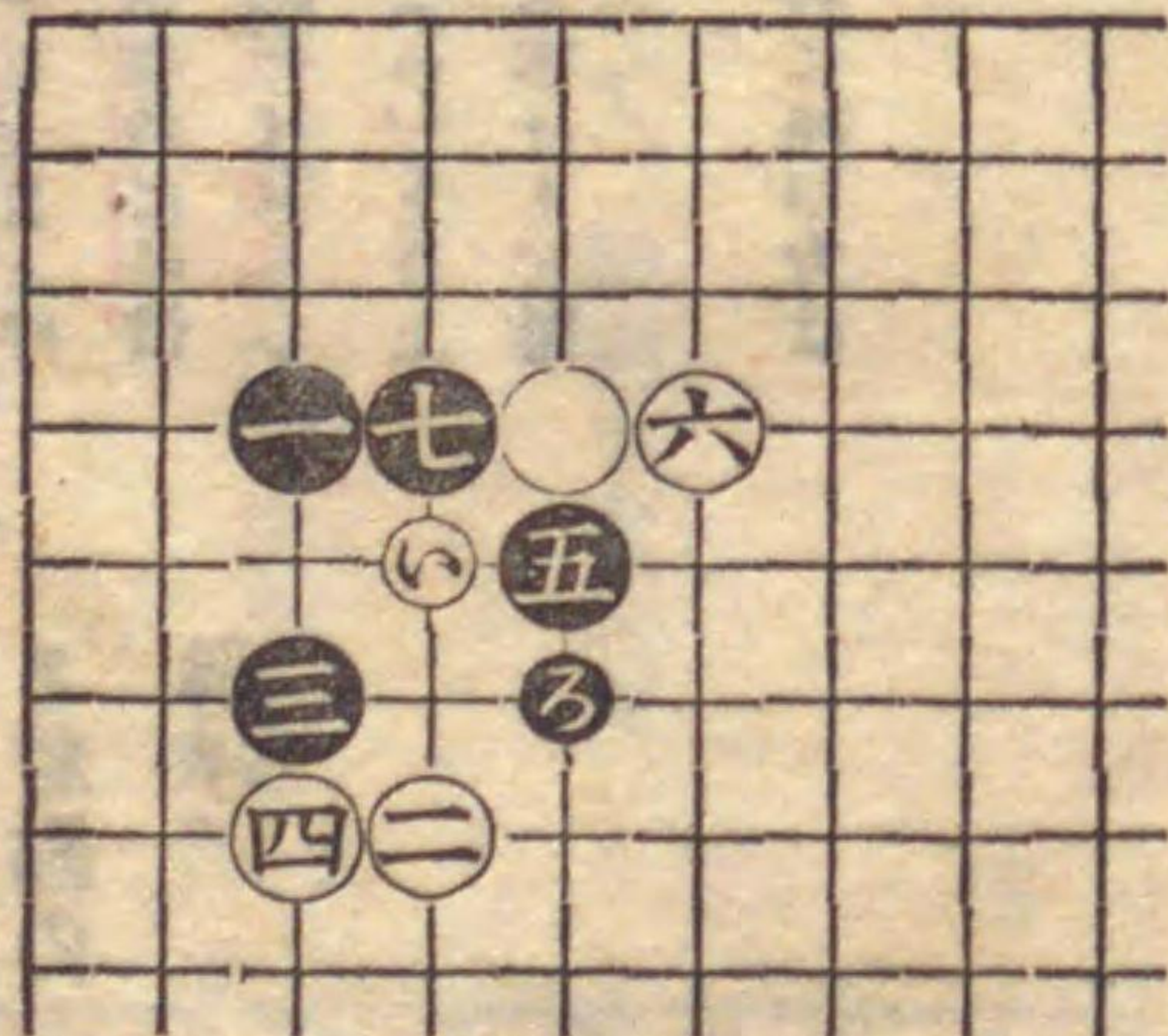
△(注意人圖) 白八の掛粘ぎに對しては、黒の打ち方は種々ある、其は主として局面の布石關係によるので、一々茲に其の是非を定める事は不可能であるが其の二、三を示すと黒は(イ)と夾むか、(ロ)と覗くか、或は(ハ)と押すかである、

黒が(イ)と夾めば白は手抜して差支ないのである。

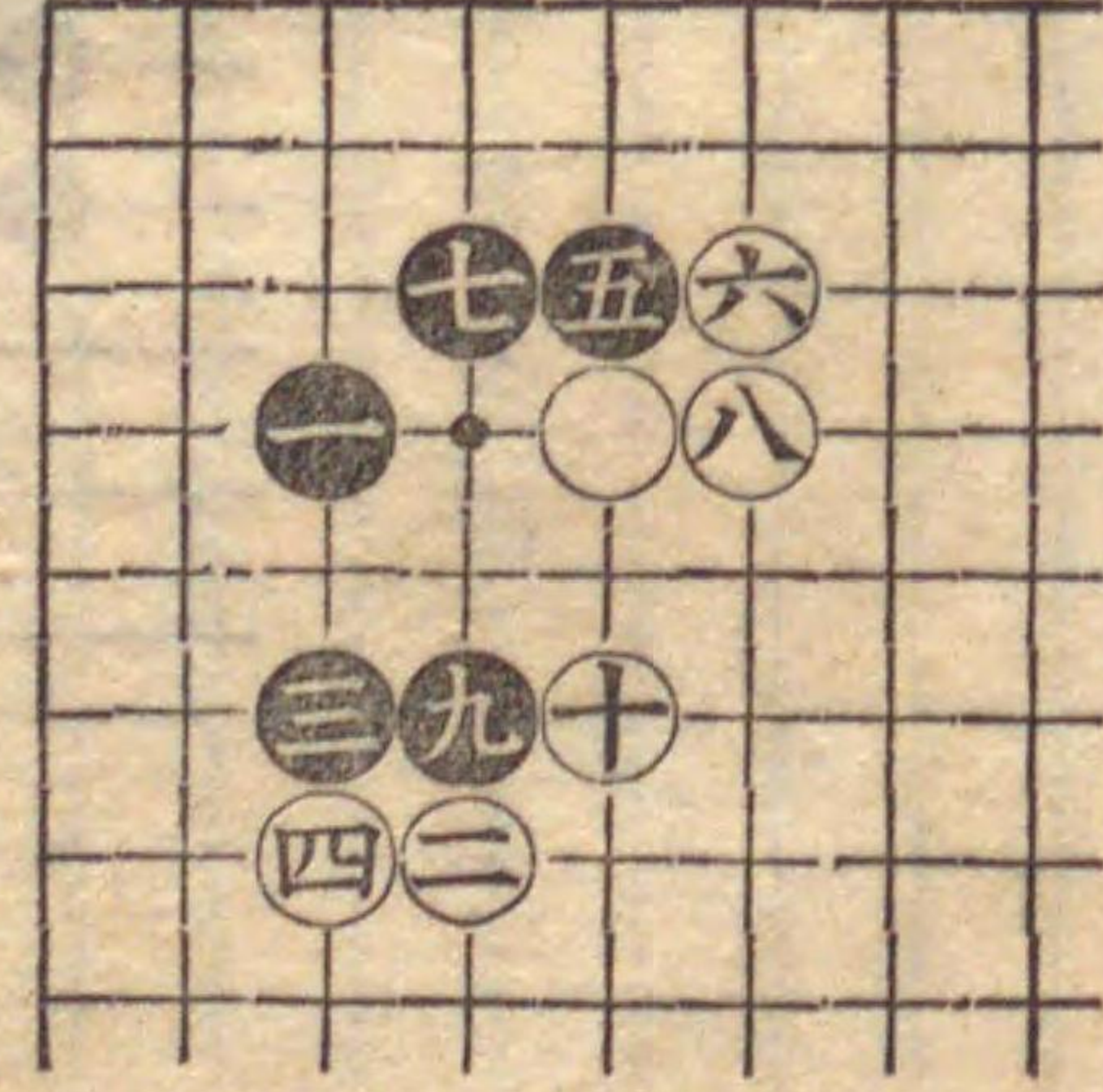
黒(ロ)の覗きに對しては白は(ニ)と粘るか、(イ)と遮斷するか、或は(ホ)と外から押すかの三方である。

黒(ハ)の押しに對しては白は(ヘ)と抑へるの一手である。

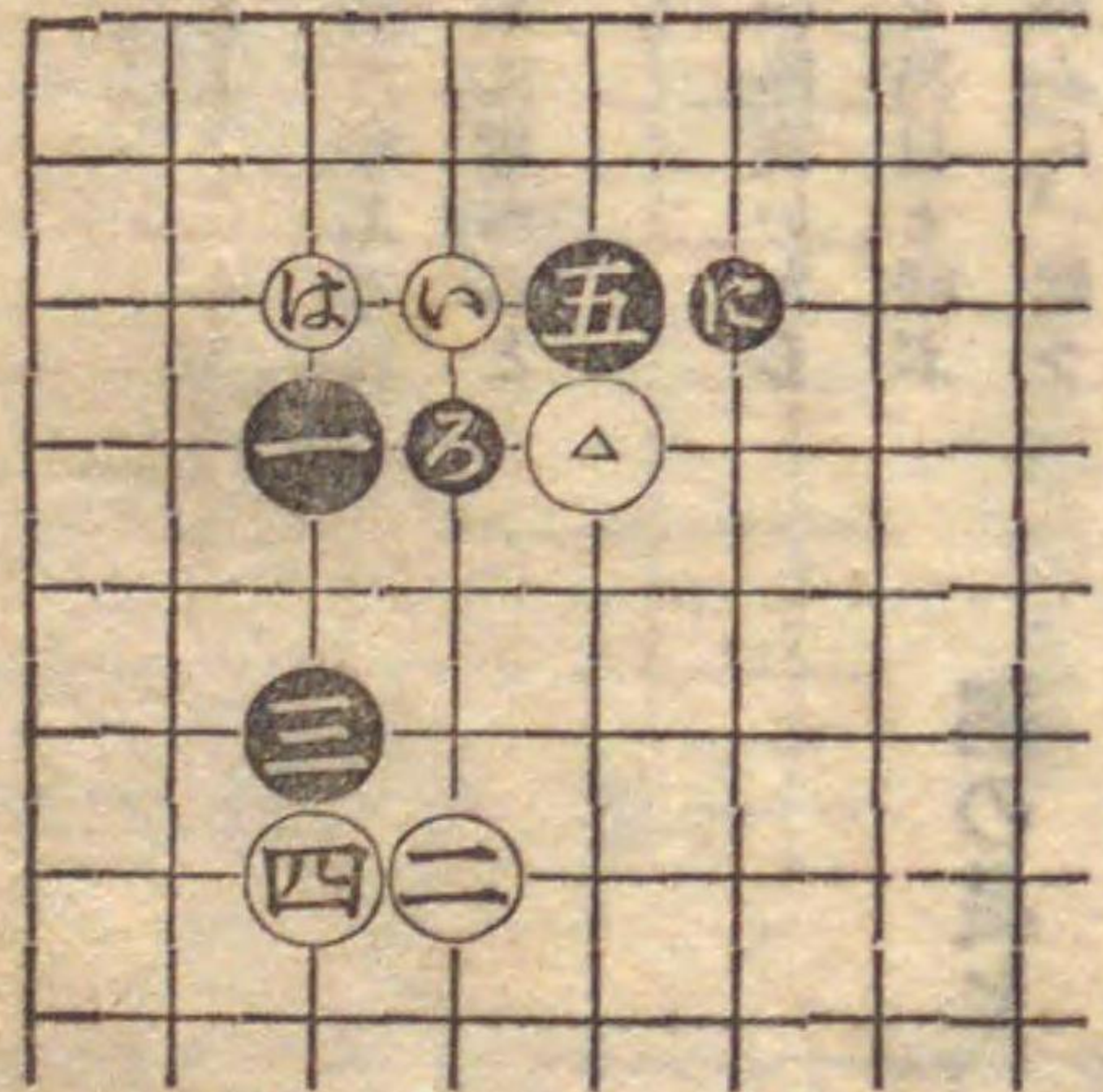
(圖ろ参考)



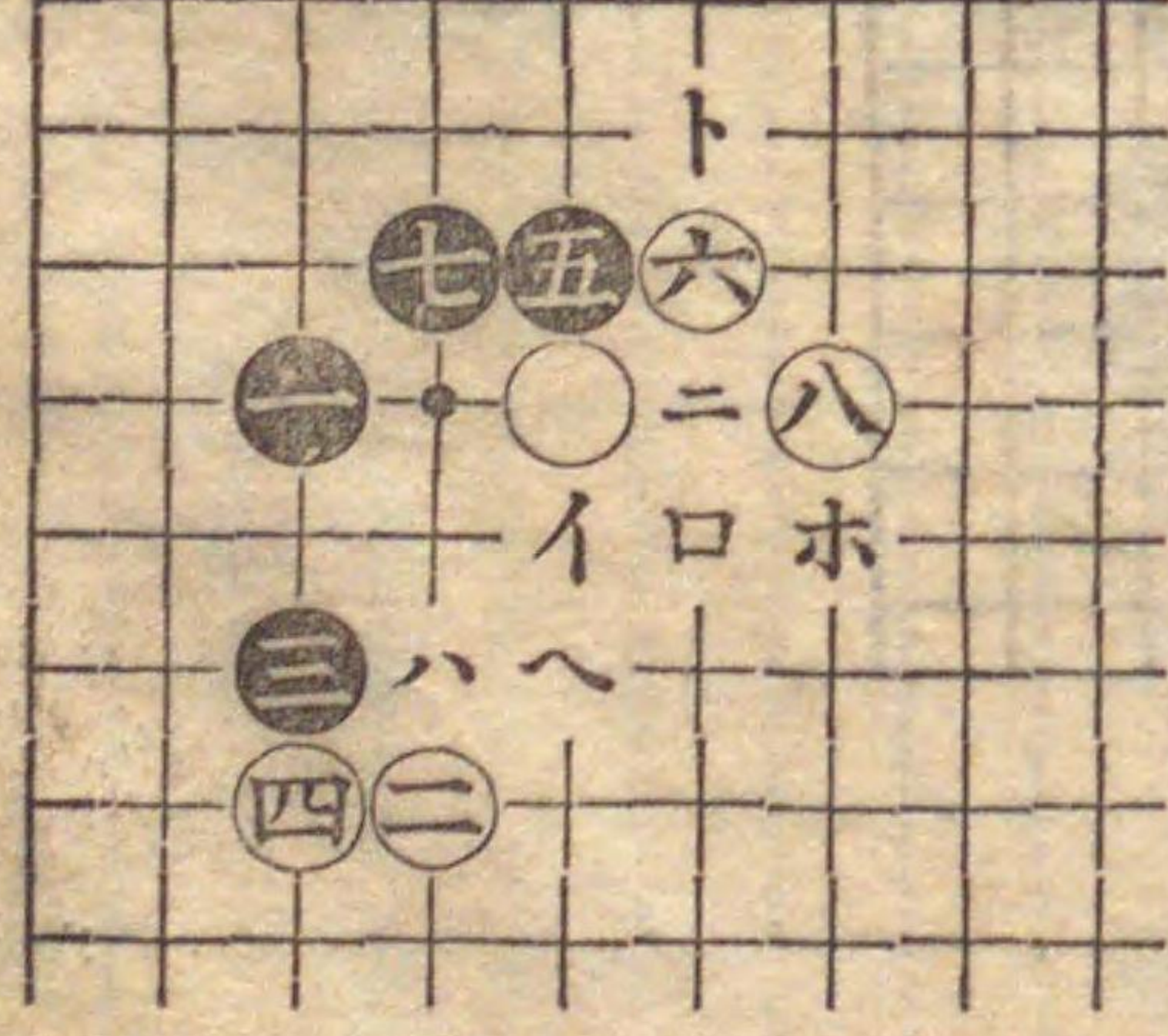
(圖地参考)



(圖天参考)



(圖人参考)



~~~~(石定先互)~~~~

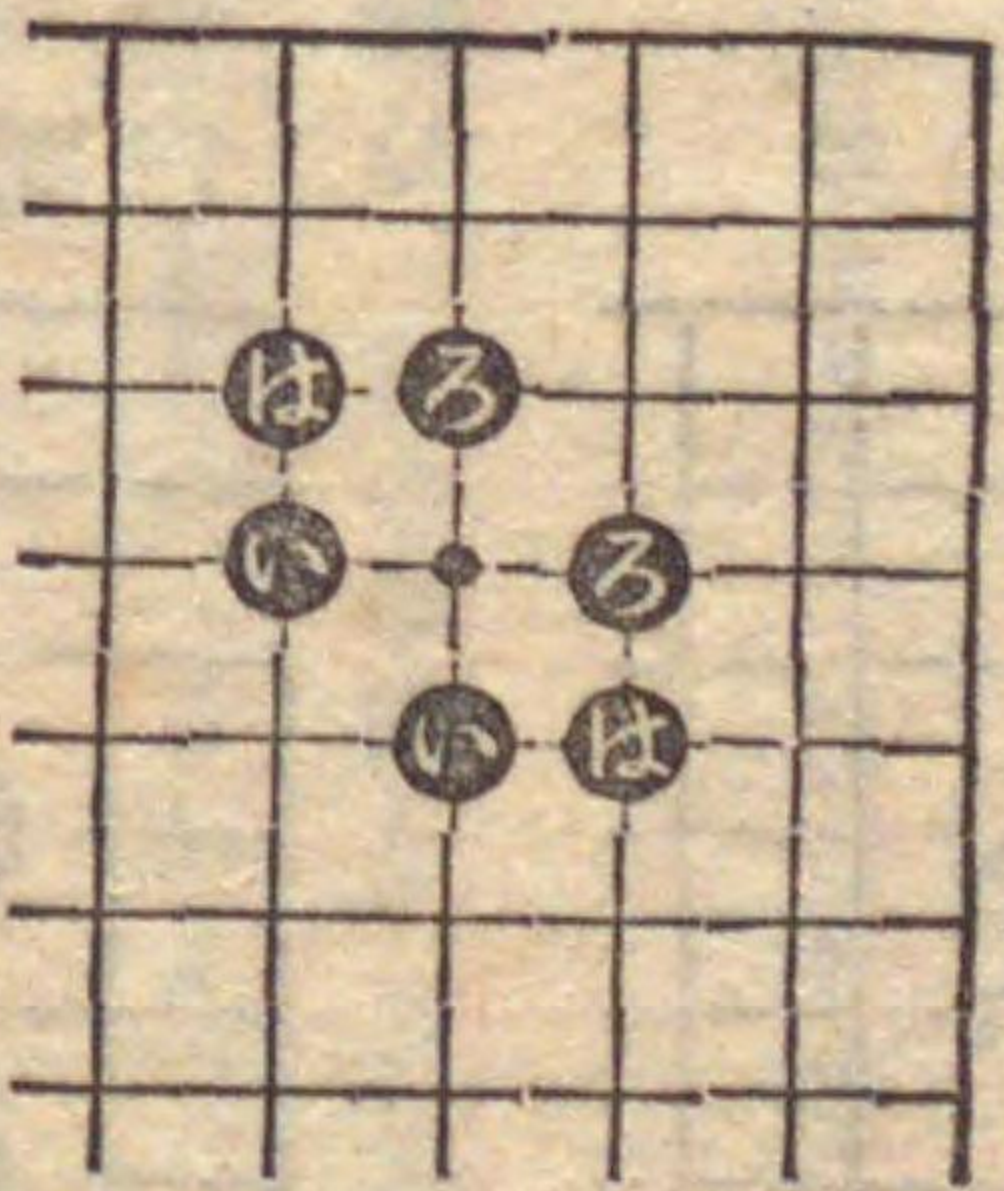


高目 大目 目下 小目

着手の位置の呼稱の如きは、多くは慣例的に呼んで居るので、別に大した理屈はない、否理詰めに考へると、ヘンなもの出来やう。

星即ち四ノ四を基點として(い)の點は一路高いから高目と呼ぶに不思議はない、然し(い)を高目と呼ぶからは(ろ)の點を低目とでも呼ぶかといふに、然らば(ろ)の點は多く小目と呼び慣はして居る(ろ)を小目とすれば(い)を大目と呼ぶに差支はないが、大目よりは高目の方が普通に呼ばれて居る、(ろ)の點を小目と呼ぶと同時に目下とも稱せられる、(ろ)を目下と呼ぶからは(い)を目上と呼ぶに差支はないが(い)を目上と呼ぶ事はまだ聞及ばぬ所である。(は)の點は目外(モクハズシ)とより外に呼び方はなや難である

隅の星を  
基點とす  
る着點の  
稱呼。



目外「モクハズシ」

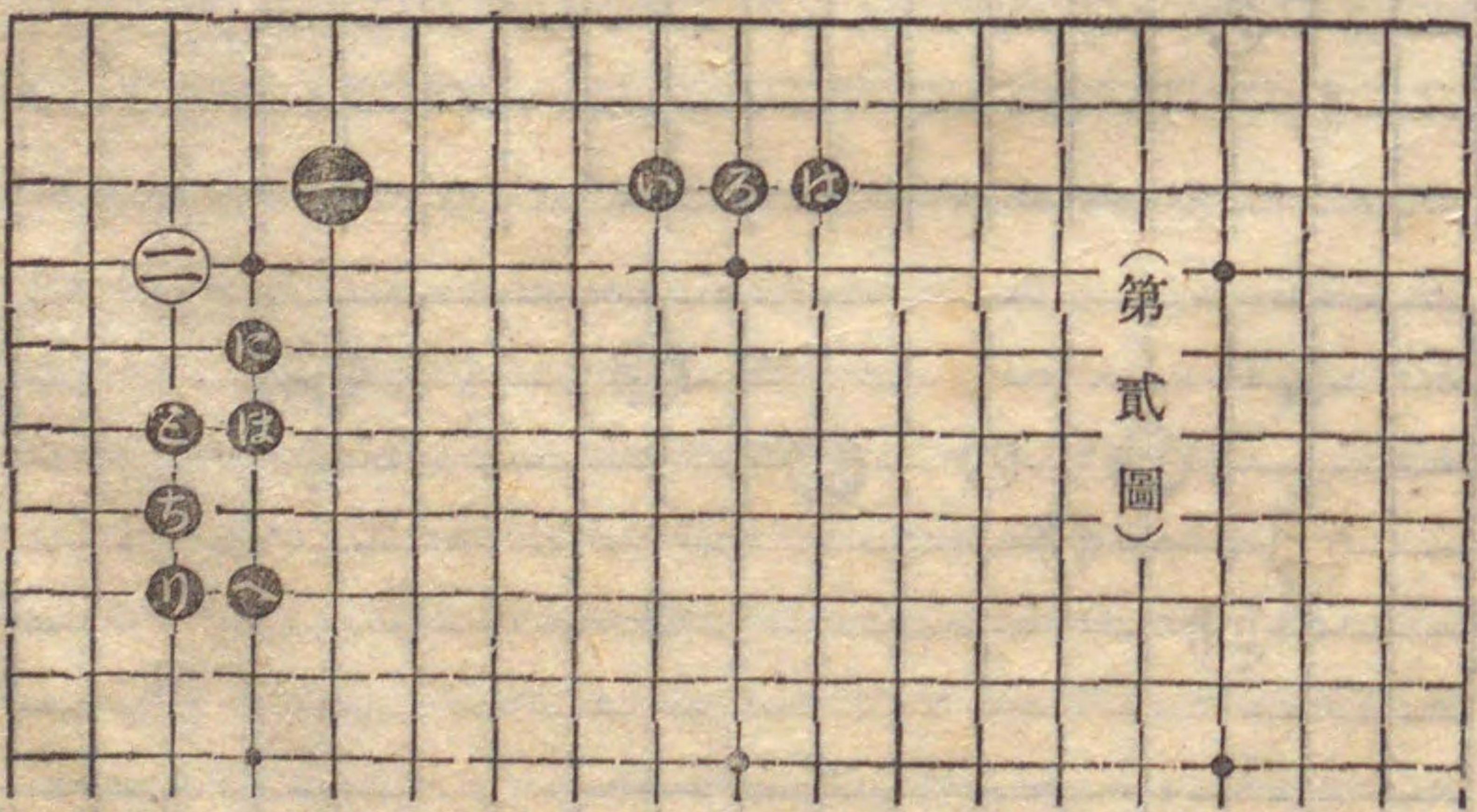
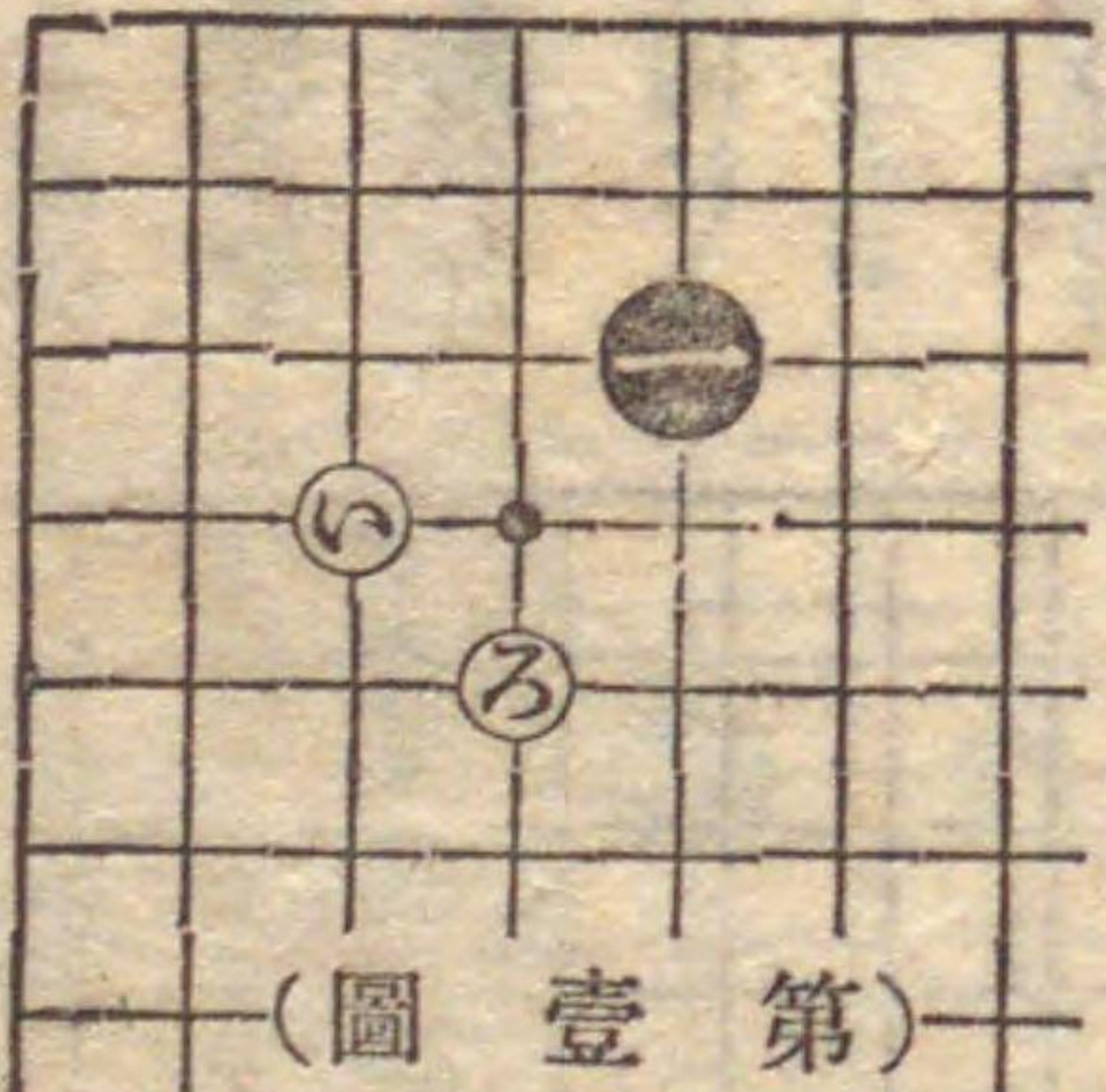
目外に對する小目掛

○(第壹圖) 黒一の目外は場合を主として、趣向を含んだ手である。

之に對する白の掛りは、(ろ)の小目が普通であるが、場合によつて(ろ)と高く掛かる事もある。

○(第貳圖) 白二の小目掛りは黒の縮りを妨げたのである、二の位置は隅の實利を占める點に於いて最も優秀なる可きは今更絮説する迄もない。

白二に對する黒の應手は、(ろ)の三間拓きの四間拓き、(ろ)の五間拓、(ろ)の斜走掛り、(ろ)の大斜走掛り、(ろ)の高三間、(ろ)の一問夾、(ろ)の二問夾、(ろ)の三問夾の九種である。



(石定先互)

白二に對する黒の應手九種



黒三より進極  
度五間を拓キテ

黒三向に拓キテ  
手抜意

白動キテ三種

白四ト尖ル意

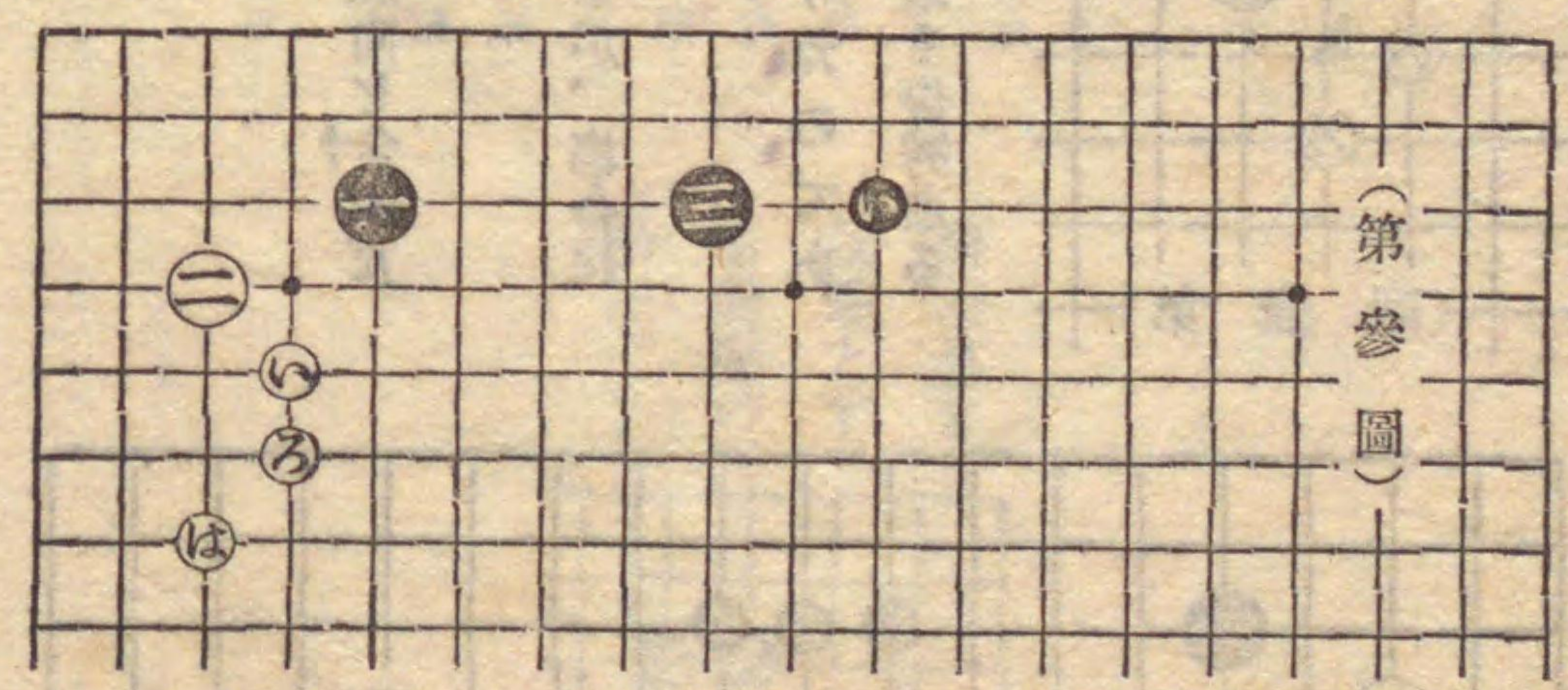
白四ト斜走  
古風

○(第參圖) 目外の位置にある黒一より側面への拓きは、極度に拓くとすれば、●と五間しても敢て差支ないのである、然るに此く三と狭く三間に拓くのは、場合若くは趣向による手である。

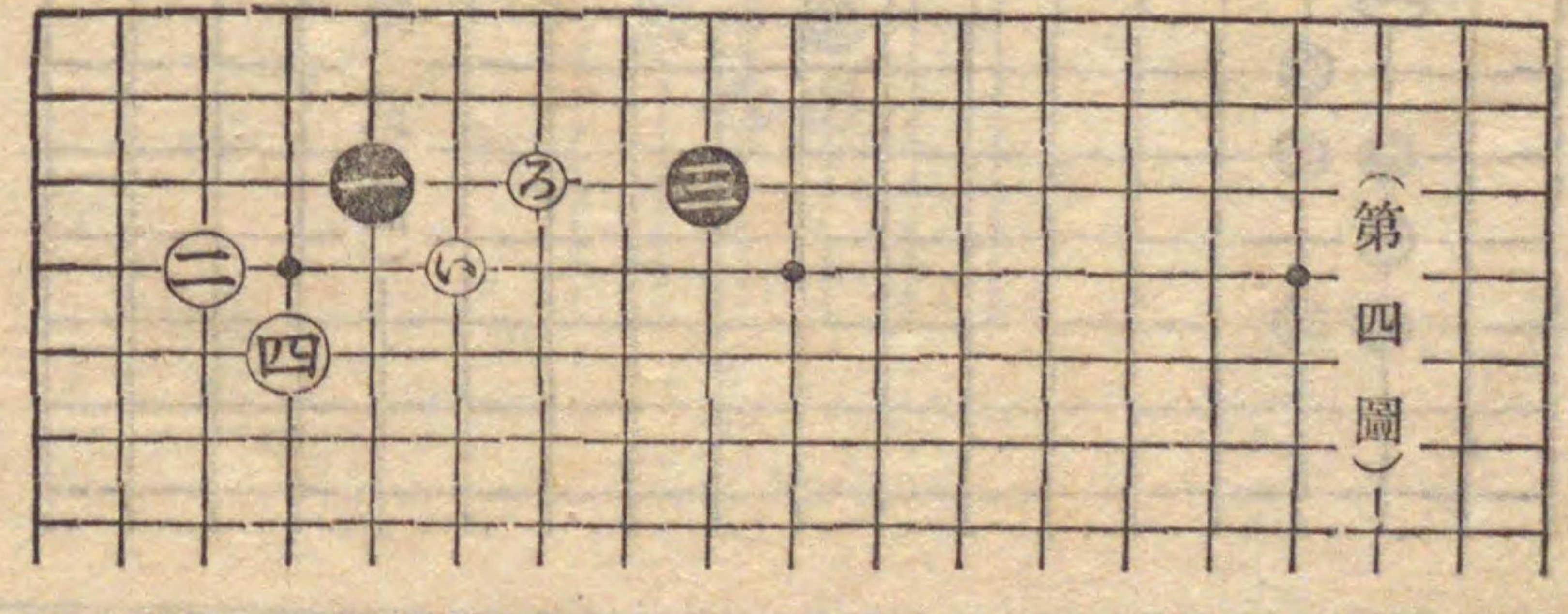
「註」 黒三の趣向とは、白二の運動の如何に關せず、玆を手抜して他の要所に着手しやうといふのである。

黒三以下は凡て場合の手であつて普通定石といふ可き手ではない。

黒が三と拓いたとして、白は敢て玆を動くの要はない、否手抜するのが普通である。若し白が何等か必要があつて玆を動かすとすれば●と尖むか、○と斜走するか、將た○と二間拓するか三途である。



(第參圖)



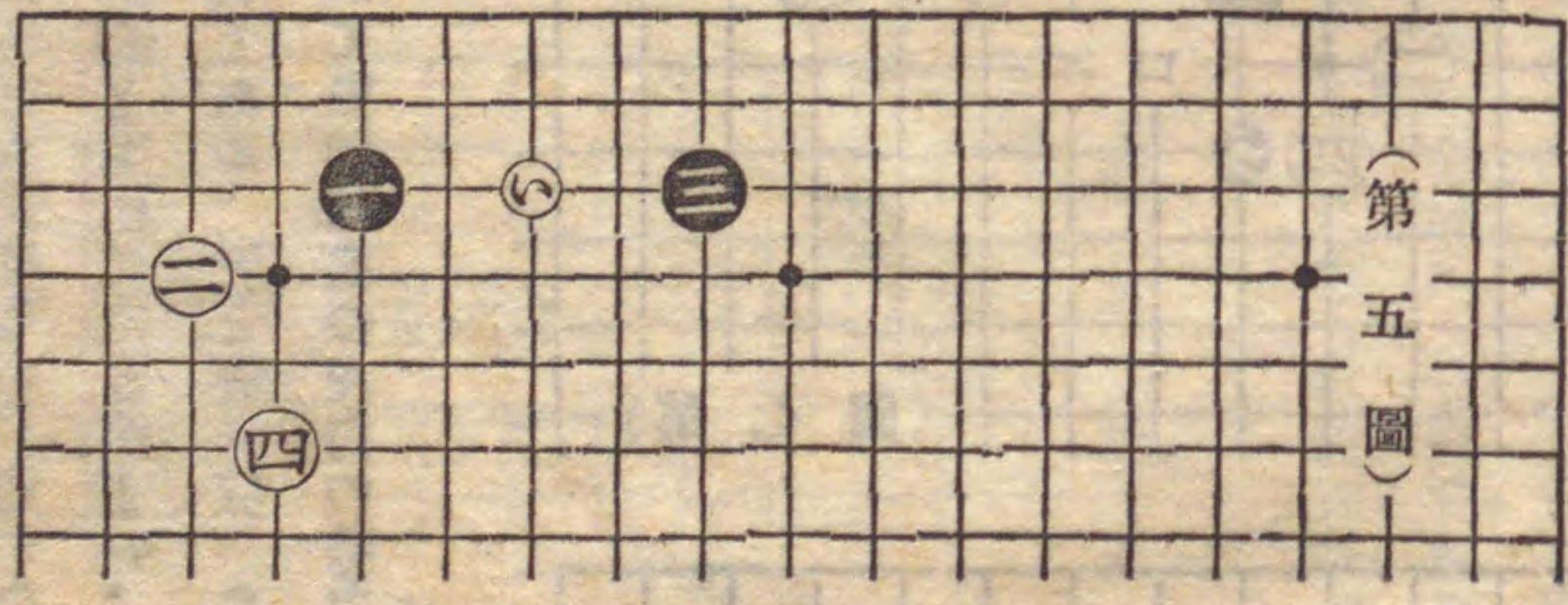
(第四圖)

○(第四圖) 白の尖みに對して黒は手抜する事無論であるが、此の四の尖みは黒一、三の拓きに對して●と掛ける手と、○と打込む手とを含んで居る。

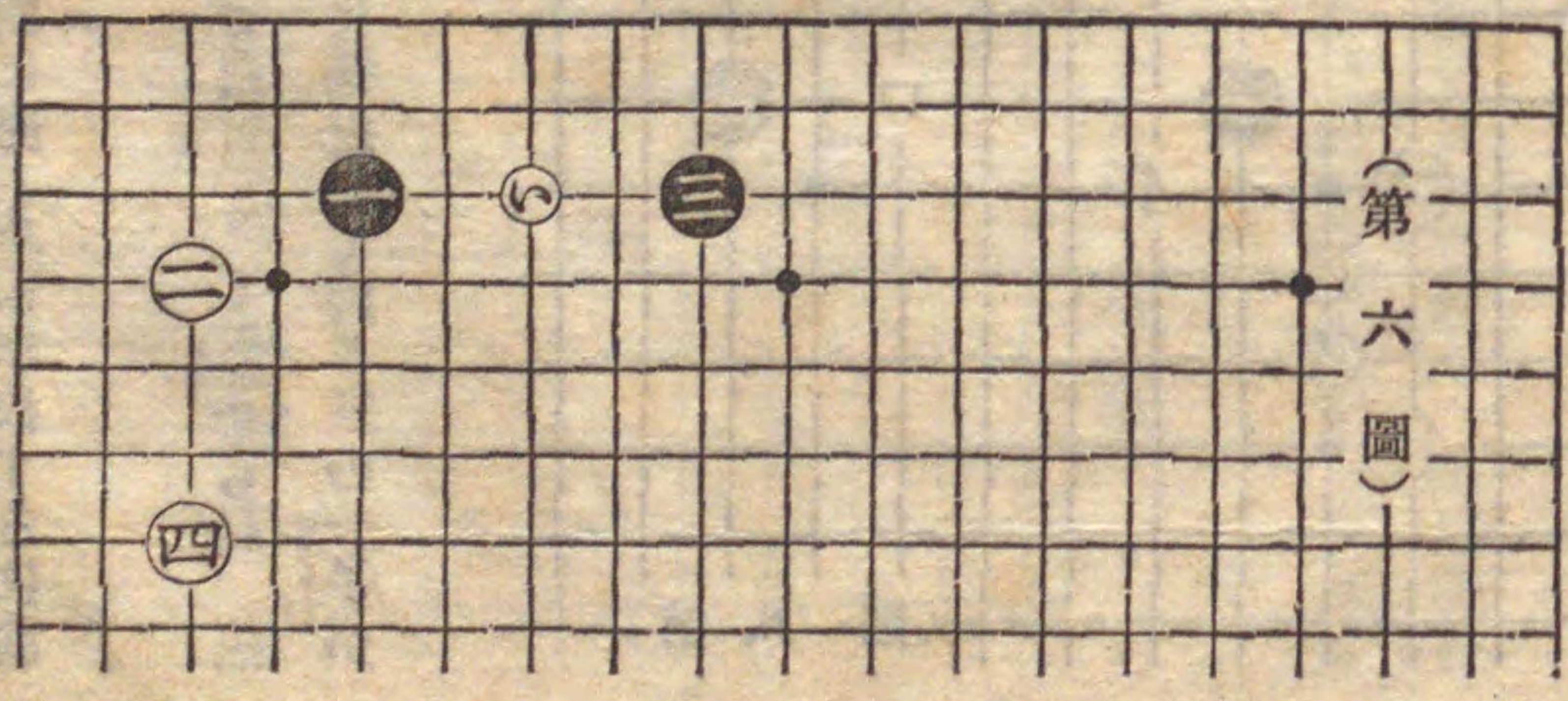
「註」 黒が五を手抜したとして、白から直に●若くは○と打つがよいといふ譯ではない、何となれば●若くは○と打たれて莫大の利を白に占めらるゝ惧があれば、溯つて黒は五を手抜する事が出来ぬ道理である。

○(第五圖) 白が四と斜走しても黒の手抜す可きは前圖と同斷である、此の四よりしては●と打込む意を含んで居る。

○(第六圖) 黒三の三間拓に對して、白が此く二間に拓くは極めて古風な定石である、此の四は同じく●の打込を含んで居る。



(第五圖)



(第六圖)

(石定先互)



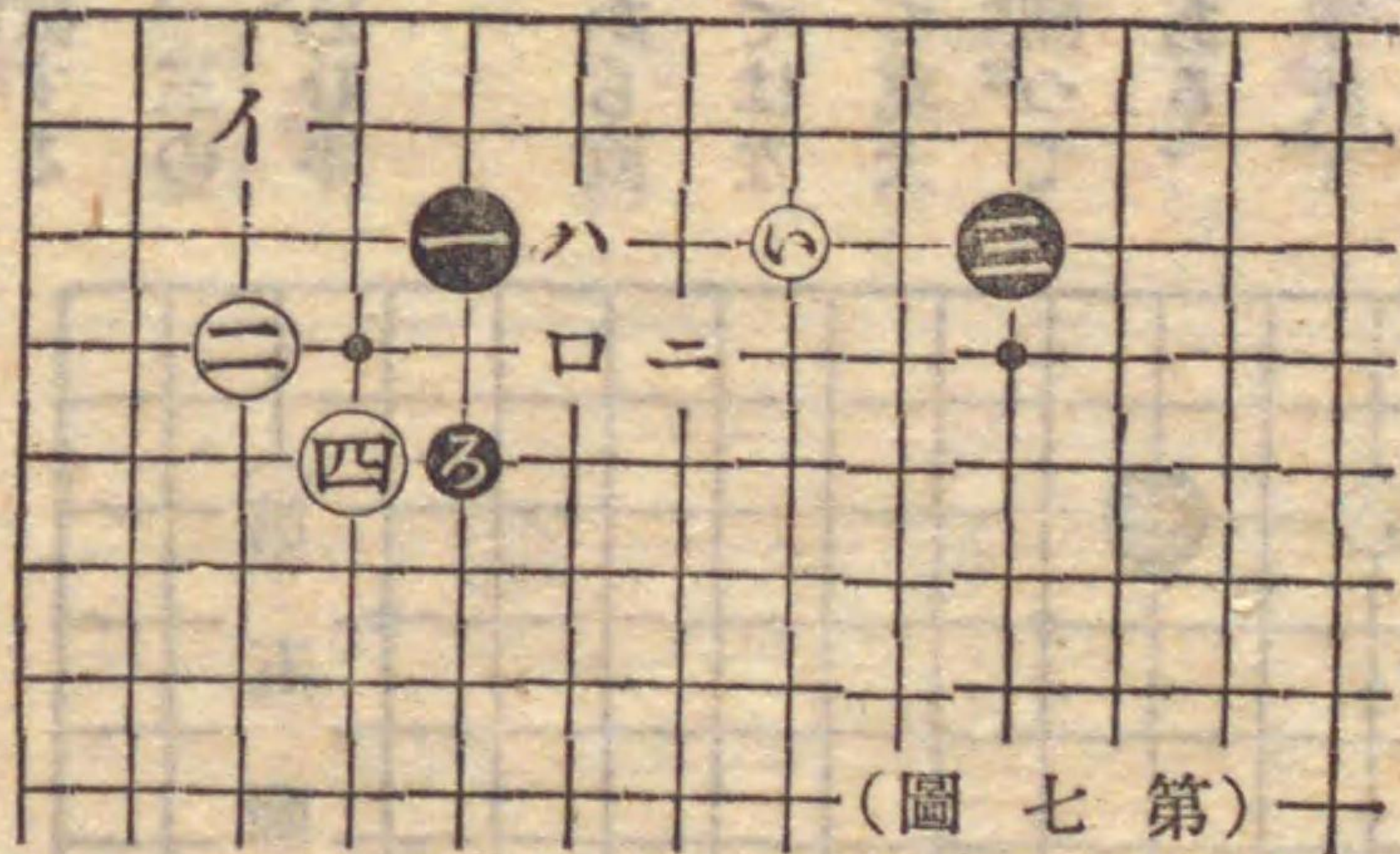
白ニハト打込  
マシテ黒ニ答  
ニ應ヌキヤ  
黒三ノ四間  
拓ニ対シ白ハ手  
ヲ抜ラフ仰ス

一、三廣キ時白  
直ニ動ク

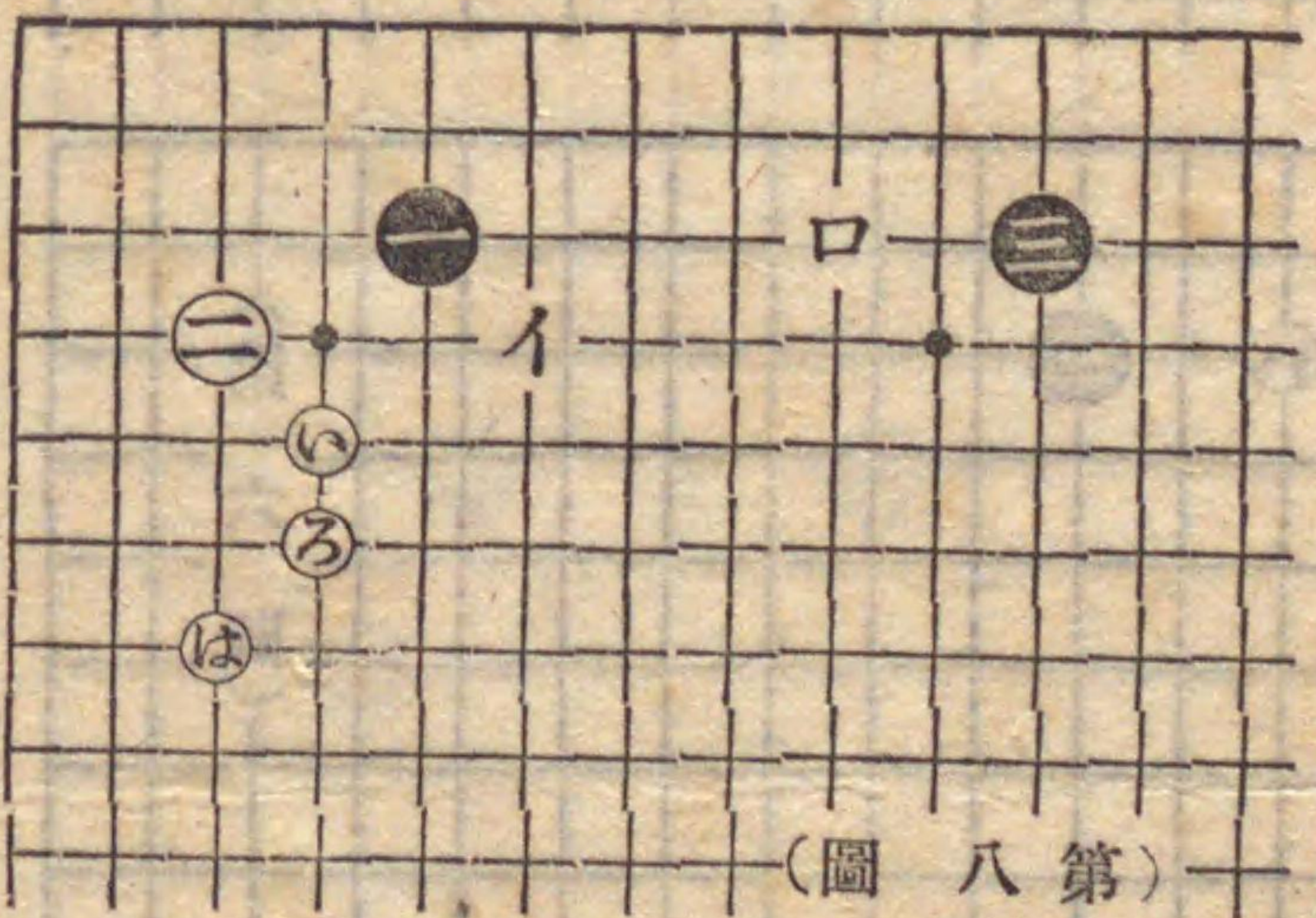
白ノ動キ方并  
ニ其意

二、三拓キ  
特殊ノ場合

○(第七圖) 黒が三と四間に拓くのも前の三間拓と大差はない、乃て白四に應じ黒が手抜するは前と同断である、白に④と打込まれた時は、黒は⑤と頂けて出るがよい。  
「註」 白④に應じ黒が(イ)と隅へ走るは不利である、何となれば、次で白に(ロ)と壓せられ、黒(ハ)白(ニ)と運んだ結果、④(ニ)(ロ)と極めて堅固になつた白の勢力に接近して居る三の一子が甚だしく孤弱に陥るからである。  
○(第八圖) 黒が此く極度に廣く三と拓いた時は白は④若くは⑤と動くのが普通である、其は黒から④の點に壓せらるゝを豫防すると同時に、一、三の廣潤なる黒の拓きに對して(イ)と高壓を加へるか、或は(ロ)と打込まうかといふ意を兼ねて居るのである。  
白は極めて稀に④と拓く手もないとは斷言も出來ぬ、が其は何等か特殊の必要ある場合である。



(圖七第)



(圖八第)

白四ニ對スル黒

ろト頂ケル手順

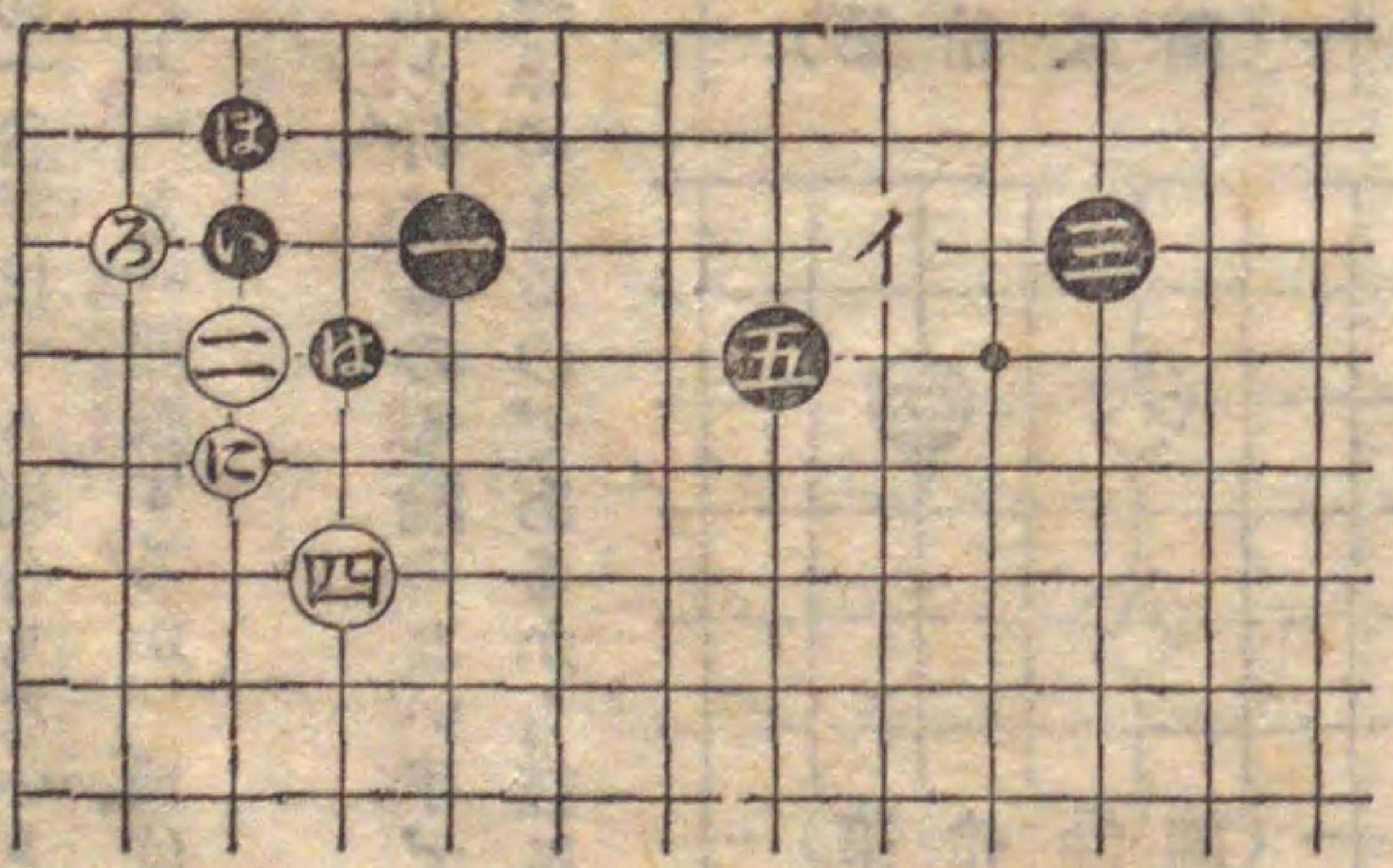
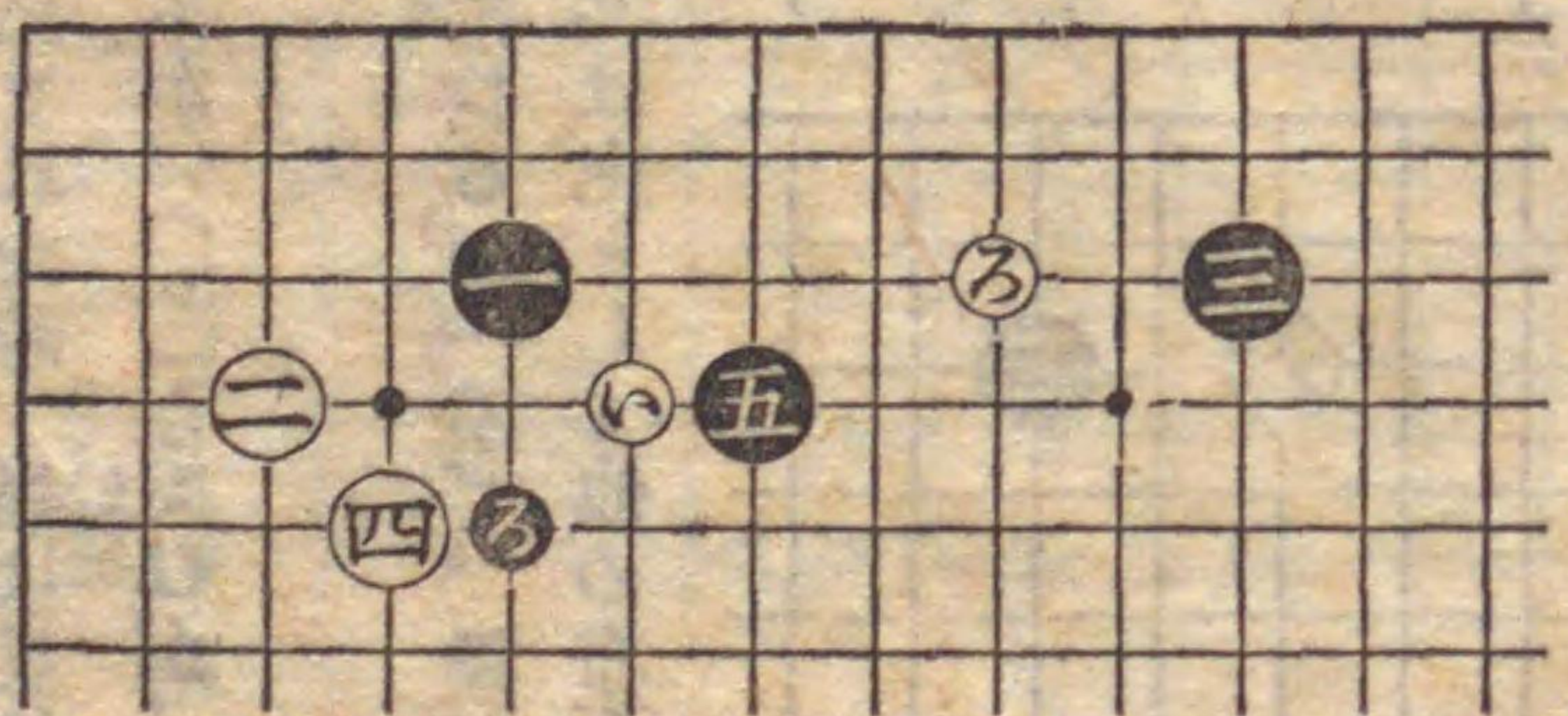
此差異ニ注  
意

○(第九圖) 白四の尖に對しては黒は五と小斜走に應ずるのが普通である。  
黒五は白より④の掛け若くは⑤の打込みに備へると同時に、我が地域を劃するのである、然し場合によつては黒は五を手拔せぬとは言へぬ、手抜して白に④と打込まれた時、尙手抜しても差支はないが④と頂けて出る手順が普通である。

(第九圖)

(第十圖)

○(第十圖) 白四の斜走の時、黒が五と大斜走に應ずるのは普通であるが、或は(イ)の打込に備へて、隅に向つて④と接觸し、白④、黒⑤、白⑥、黒⑦と凌いでおく手もある。又黒五を手抜して白より(イ)と打込まれた時は、ヤハリ黒④と頂ける手もある。  
「註」 第九圖の如く白四が堅固に尖んで居る時は、黒も之に備へて五と小斜走に應じ、本圖の如く白四が斜走して勢力に緩みある時は、黒五も亦此く大斜に應じるの差異に注意す可きである。



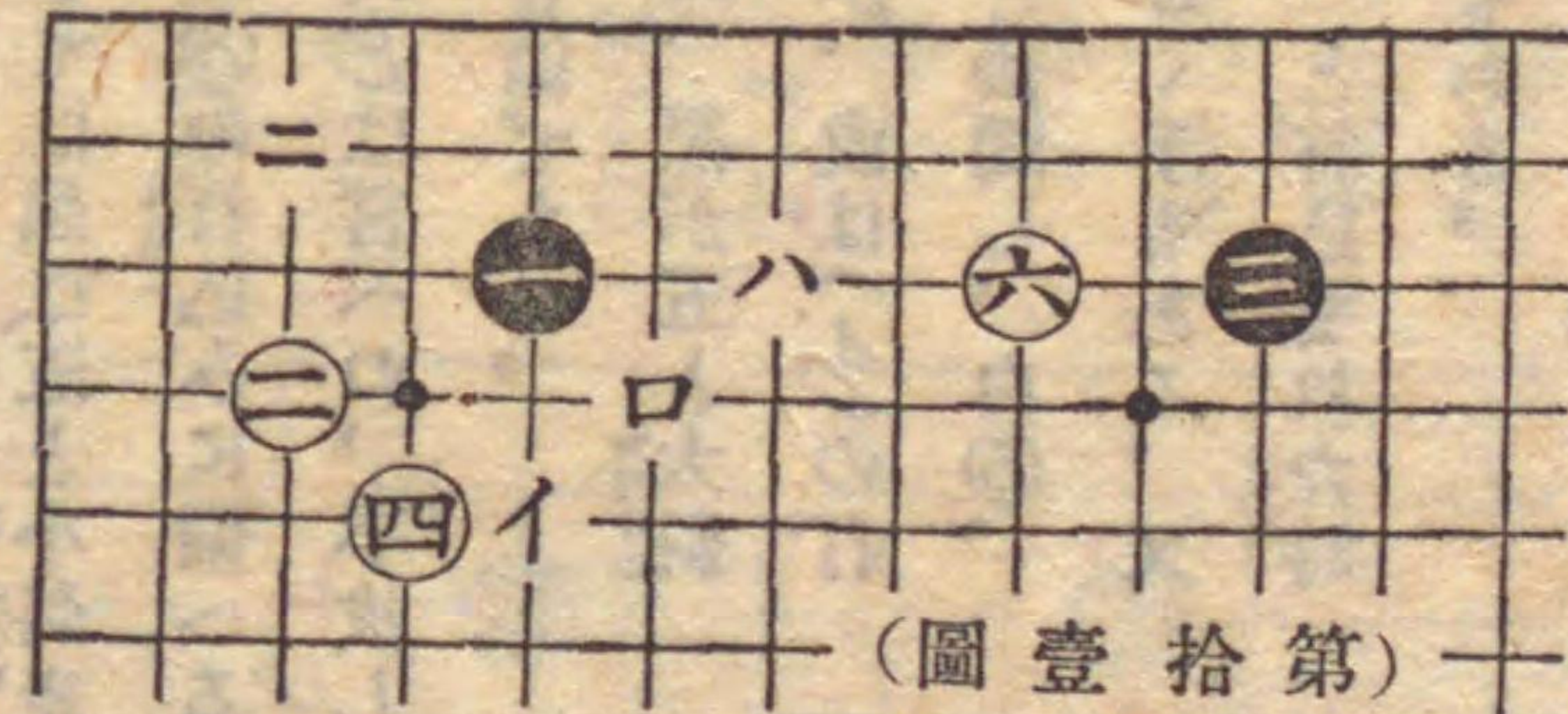


○(第拾壹圖) 黒が五を手抜して、白に六と打込まれた時、黒は更に尙一着手抜する場合もないとはいへぬが、若し應接するとせば、(イ)と頂けるか、(ロ)と尖むか、(ハ)と一間飛するか、或は(ニ)と隅へ走るかの四途である。

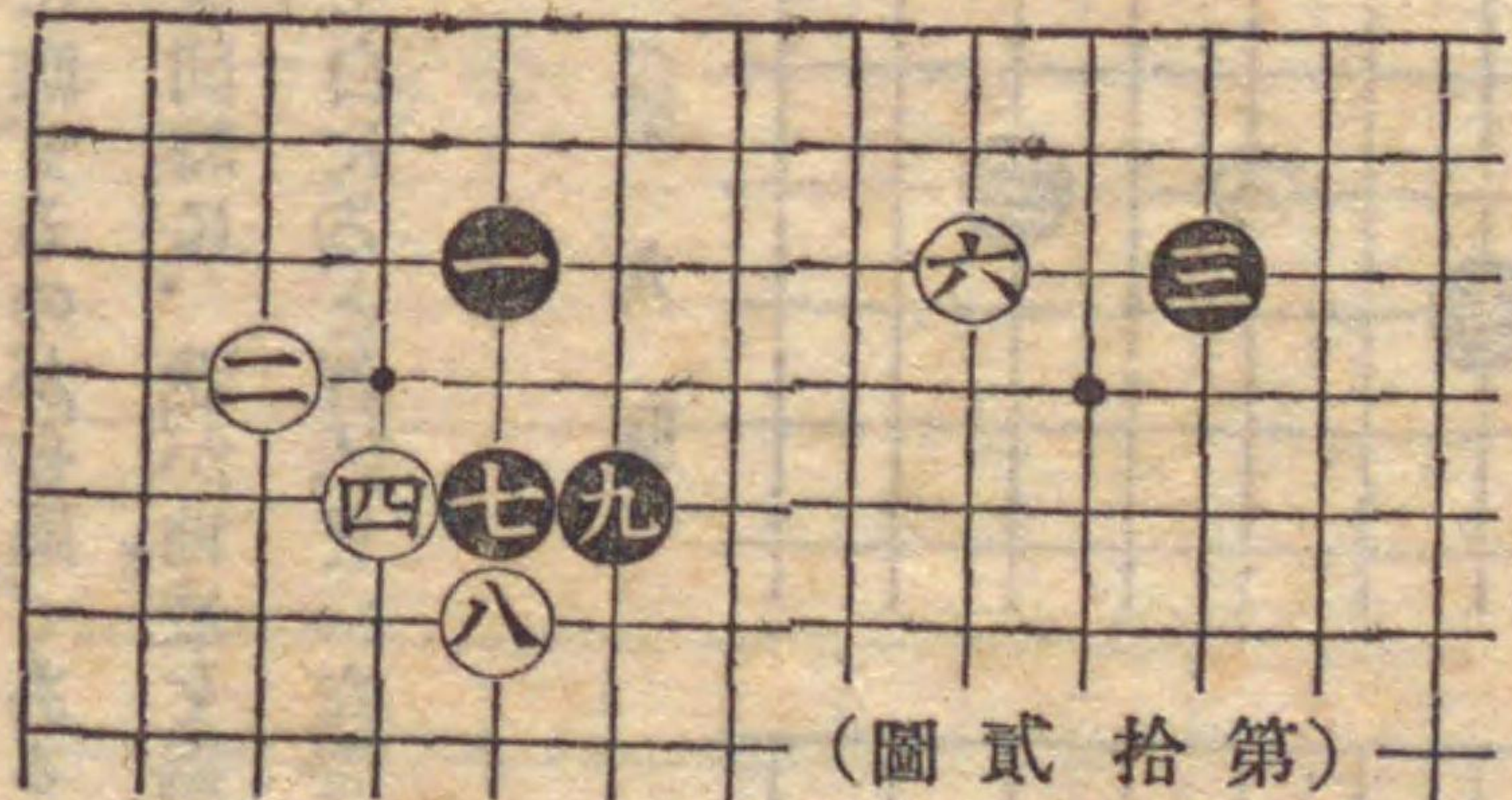
○(第拾貳圖) 黒が七と頂けた時は、白は八と縛ねるの一手で、黒が九と行びるのも論のない手である、次で白は六の一手を如何に動く可きか、其は主として他の布石關係によるのであるから茲に斷言する事は出来ぬ。

○(第拾參圖) 黒七の尖みに對しては、白は八と飛ぶの一手である。

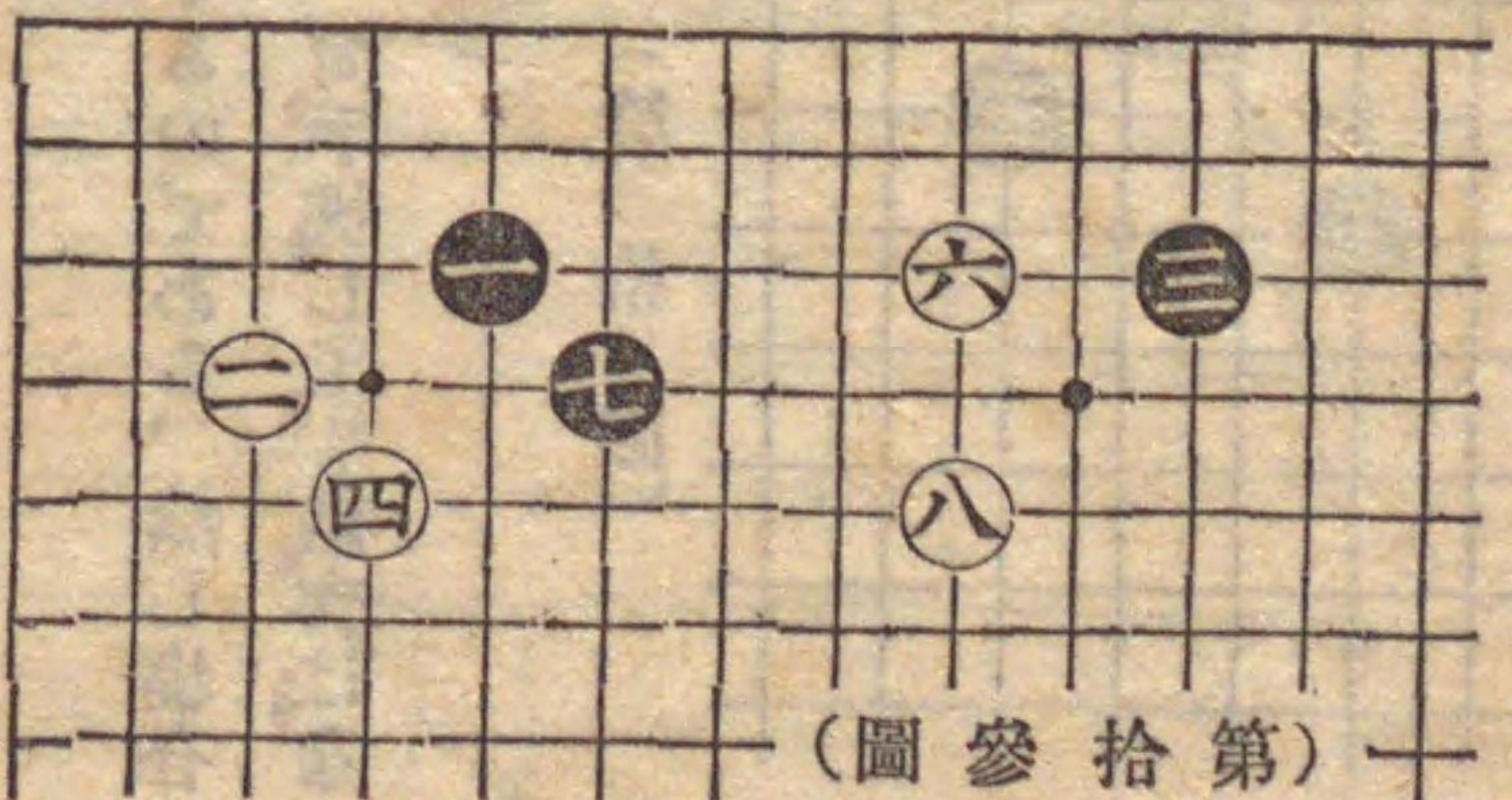
「註」凡て黒が三と廣く拓くのは右上に白の布石があるものと推測せねばならぬ、然るに更に手抜するといふ結果は非常な混亂を招かねばならぬ。



(圖壹拾第)



(圖貳拾第)

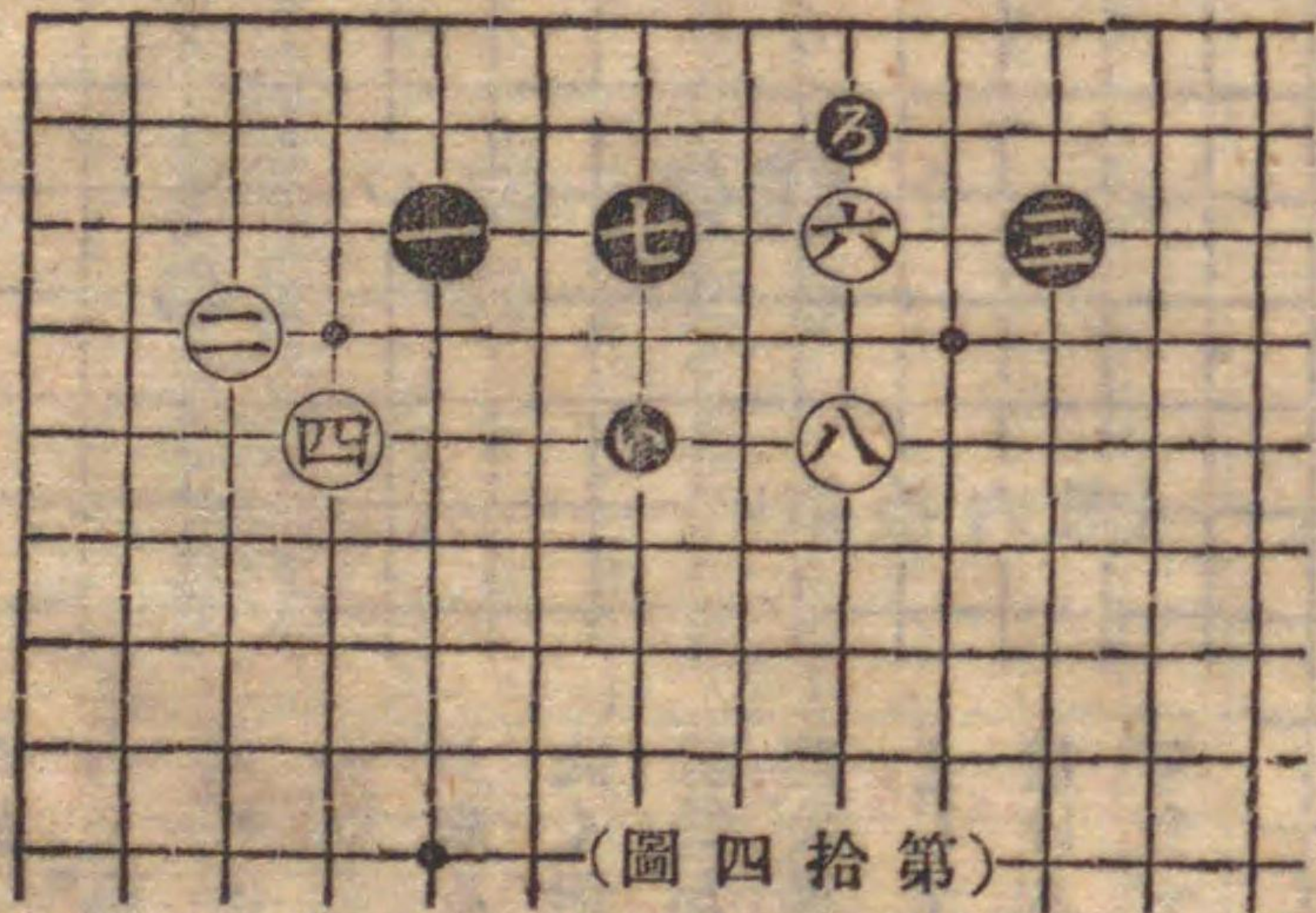


(圖參拾第)

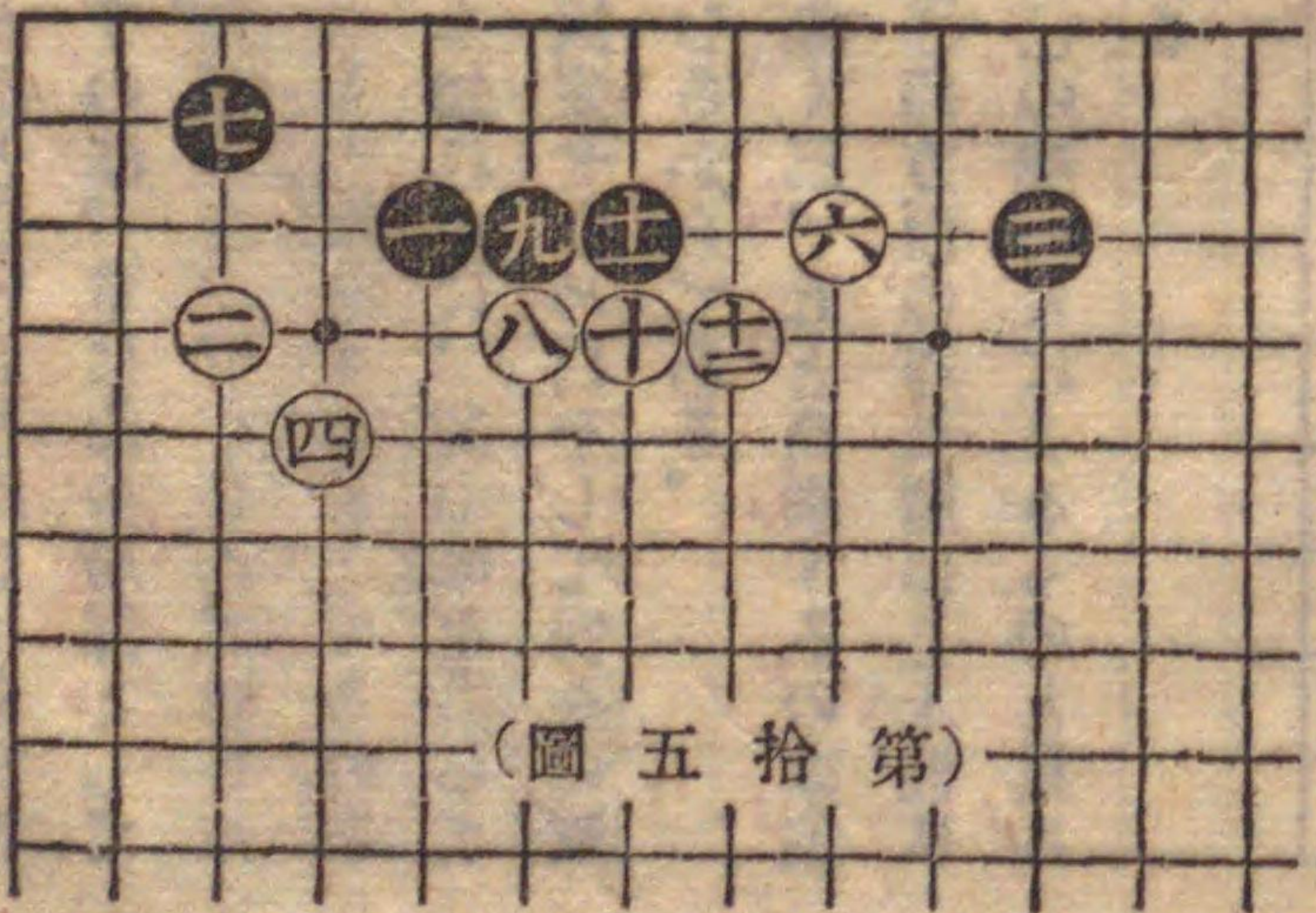
○(第拾四圖) 黒が此く七と一間に夾んだ際白が八と飛ぶ可きは殆んど論の無い手であるが、次の黒手は●と飛ぶか○と頂けるか其の他の打方は如何に運ぶ可きか、其は一に局面の關係と策戰の如何とに待つべきである。

○(第拾五圖) 黒が此く七と隅へ走つた時、白は必しも八と壓せねばならぬ事はない、白八を手抜すれば黒九も亦無論手抜である。

白が八と掛ければ、黒は必らず九と應ず可きて、此の白八以下十二迄の相互の應接は必然の手順である、本圖は前の第七圖で説明した假定の形と、稍趣を同じうして居るが、彼の圖に比較すると、黒三が白の堅きに接近して不利を蒙る結果となるといふ點は同様であるが、一、九、十一と三子押して居る隅の黒は、根據といふ意味から見ると、少しく優つて居る。「註」ツマリ手抜して先手が取れる。



(圖四拾第)



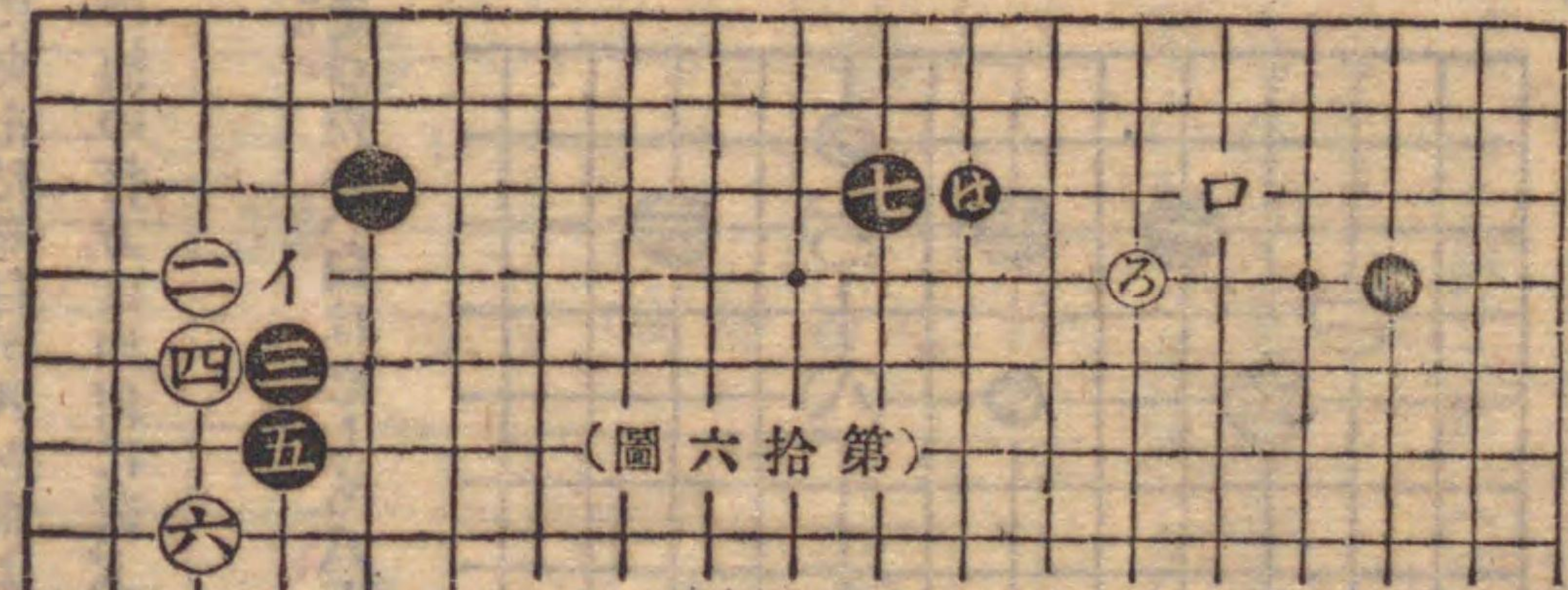
(圖五拾第)



○(第拾六圖) 黒が三と斜走に掛けた時、場合によつては白は(イ)の點に出截りを試みぬとは言へぬが、此く四と應じるのは普通である、乃ち黒が三と掛けた後、白四、黒五、白六迄は自然の手順である。

既に此く白を左側に壓して低く這はした上は、黒は此の三、五と加へた自家の勢力を利用して上側に七と極度の廣濶なる拓きを爲す可きは無論の手である。

若し右上隅に黒の小目に對する白の二間高掛でも行はれてある様な場合であれば、黒は七の一着を更に一路進めて(ロ)と打つのが良い。黒に對する白(ロ)なれば七でもよし。



(圖六拾第)

△註 黒が三と掛け五と壓して白に四、六と這はすのは、單に此の局部として見れば不利である、何となれば他日左側から白二を夾攻めるを利とする時機が來るかも知れぬに、其の味を消して此く形を固定せしめ白をして安全の活に就かしむるからである。

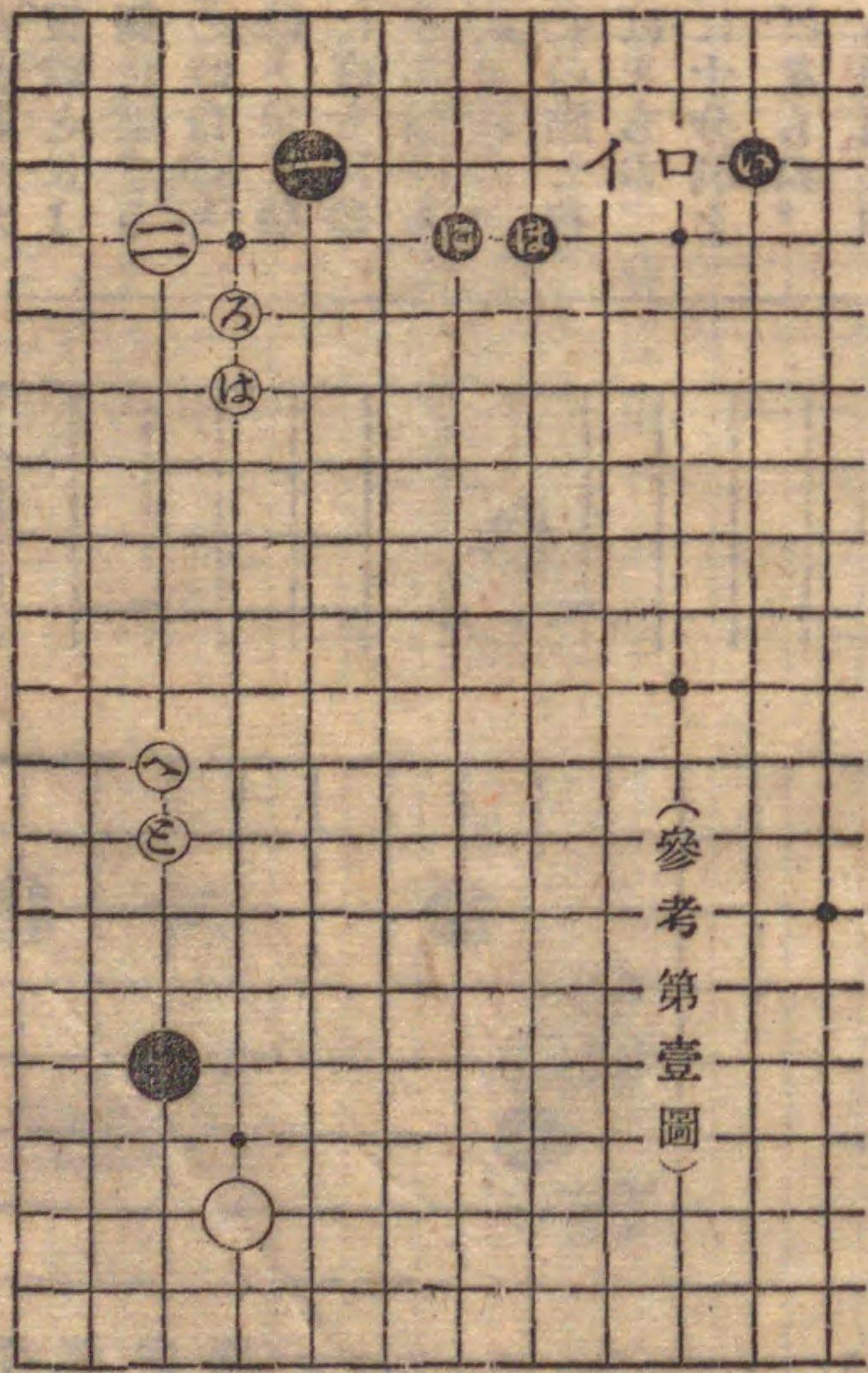
其故黒が此く三、五と高壓するのは主として(甲)印方面の布石關係と上側に於ける自己の趣向とによるものと見る可きである

甲

目外ノ位置  
ヨリ目下ノ石ヲ  
高壓スルヲ必  
要トスル隣隅  
ノ布石關係

○(參考第壹圖) 前圖の如く黒が三の手で、白二を高壓するの必要を感じる、左下側方面の布石關係は如何にといふに、本圖の如き交換の左下隅に於て已に行はれある場合であれば、黒は左側との關係上、上側は(イ)若くは(ロ)と窄く拓く可きであるが、是非共茲を、廣く極度に(イ)と拓かんとする際は、先づ前圖の如く、白二を高壓して置いて然る後、(イ)と廣く拓くがよい。

然るに若しも此の場合黒が單に(イ)と廣く拓かば、白に(ロ)若くは(ロ)と打たれ、黒が之に應じて(イ)若くは(イ)と防備した時、忽ち白に(イ)若くは(イ)と左下隅を夾まれ其と同時に左側に絶大なる形勢を造り出される、乃ち此かる場合に黒が先づ白二を(イ)、(イ)の點に壓して置いて然る後に(イ)と拓けば、左下隅を(イ)、(イ)と夾まれる患はないのである

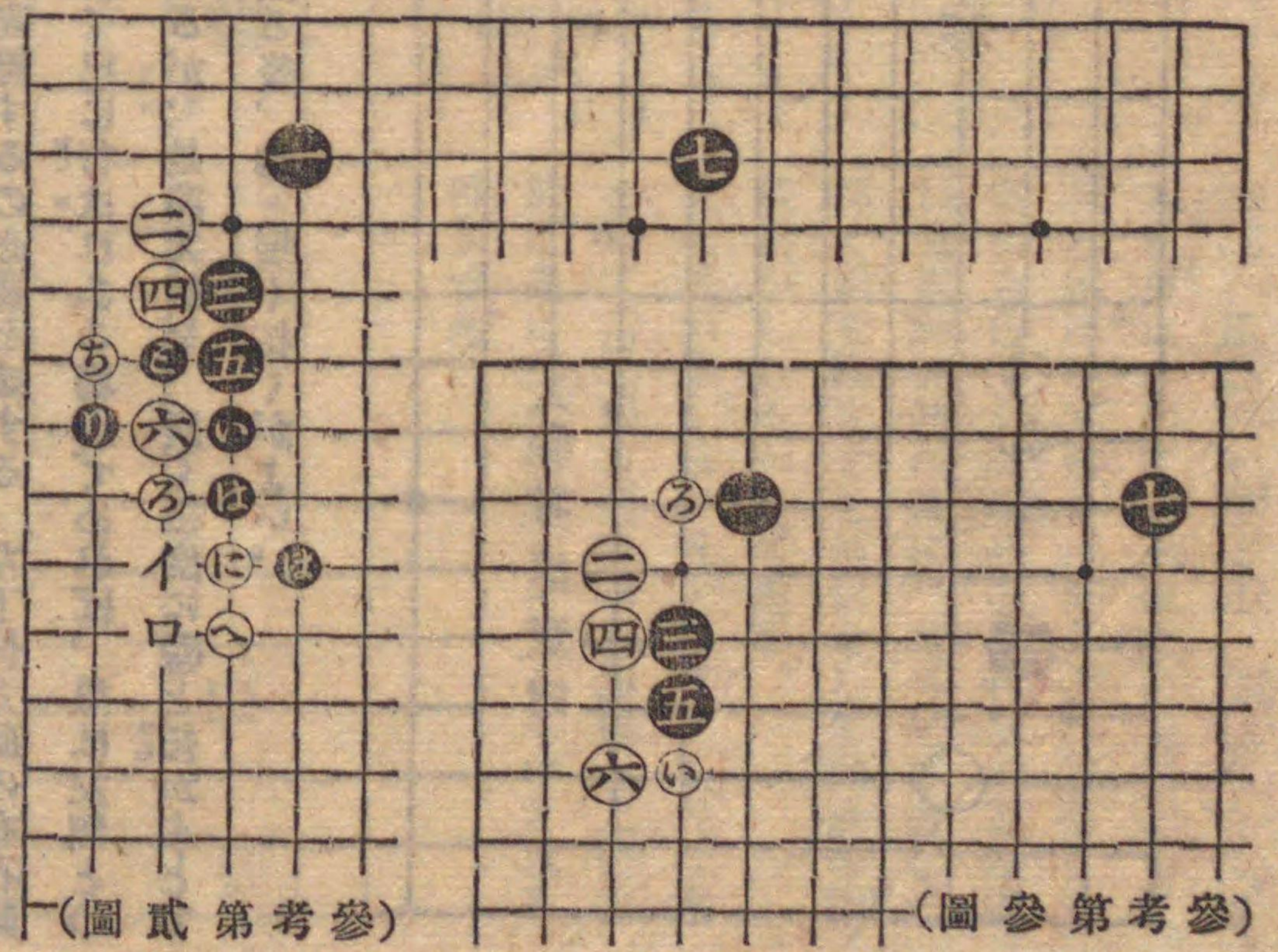


(參考第壹圖)

~~~~~(石定先互)~~~~~


△(參考第貳圖) 黒三、白四、黒五、白六、黒七と此く運んだ後、サテ此處を如何打つかといふと、其は一に局勢と相互の策戦とによるが若し黒が何處迄も此の白を左側に壓する方針を執つて、●と押し白●黒●の時白●と綽ねれば、黒は●と綽ね、白●の時●と出て●と截るか或は白●の時●と綽ねずに直ちに●と出白●の時(イ)と截るかといふ手が出来る。白若し黒に此く截られるを苦痛と感ずれば、●と綽る手で(イ)の點に行ひ黒に●の點を押しされて尙一着(ロ)と行びておかねばならぬ。但し黒が此く押しには上側方面に十分利を占め得る見込のある時でなければならぬ。

△(參考第三圖) 前圖の如く黒から壓迫を加へられるを豫防する策として白からは●と立つか或は●と尖頂けるか、といふ手もあるが、然し其の結果は、七と極度に拓いて居る黒の利益を確實ならしめるの惧があるから容易には打てぬ手である。



「一間夾」

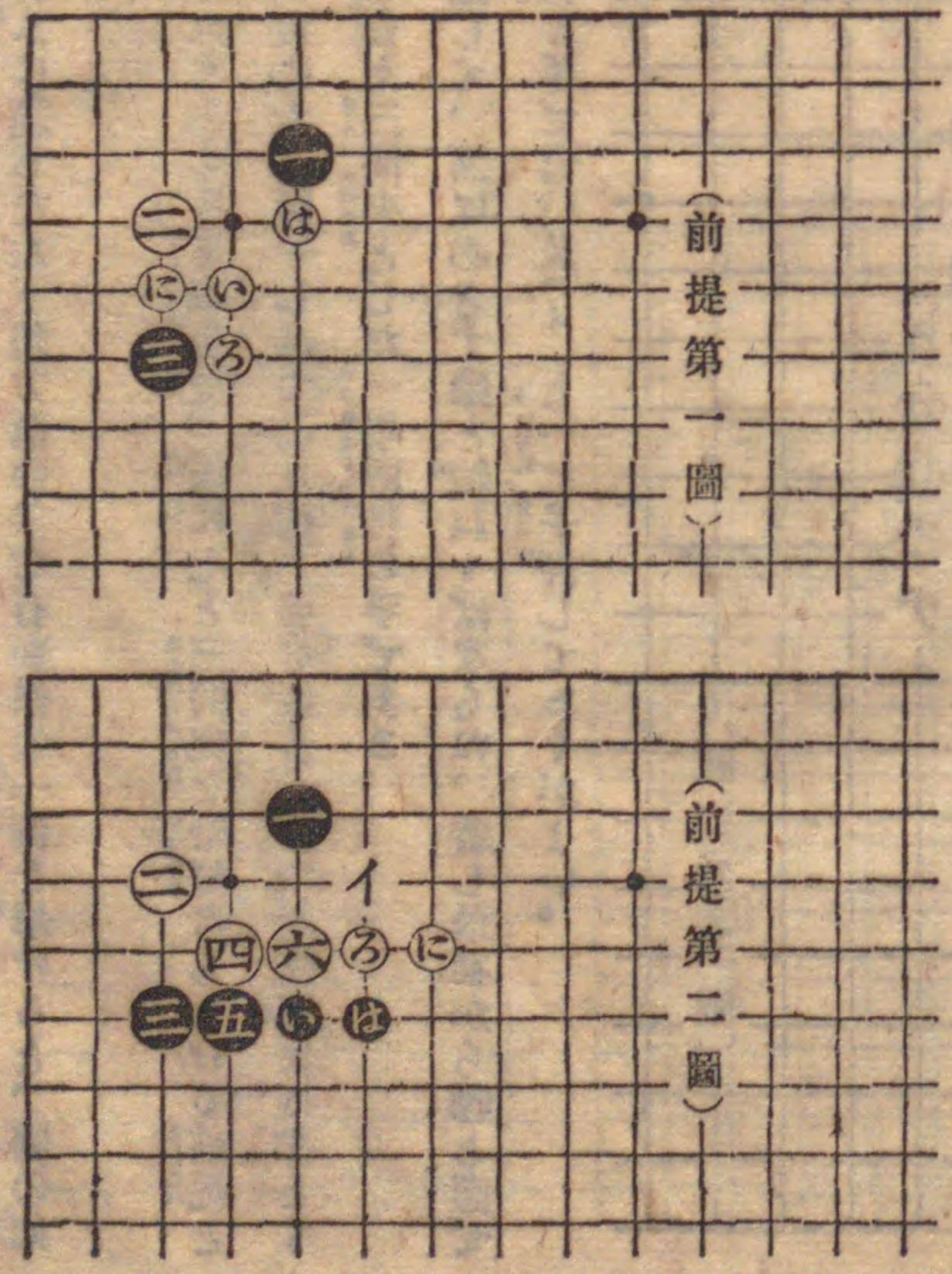
○(前提第一圖) 黒三の一間夾に對する黒の應手は、●と尖ひか、●と黒三の頭に頂けるか、●と黒一の頭に頂けるか、●と突き當るかの四通りである。

○(前提第二圖) 黒三は、白に四と尖ませて五と押し、左側に地域を劃さうといふ場合に、此く夾む事もある。

白四、黒五、白六となるのは、黒三の豫定の行動である。

白六は場合によりて●と飛ぶ手と(イ)と掛ける手とある。

黒七の手で●と押せば白は●と行ひ、黒又●と押せば、白も亦●と行びるのは言ふ迄もない手である。然し黒が●と押すか、或は●、●と押すか或は全然●と押しぬかは問題である。

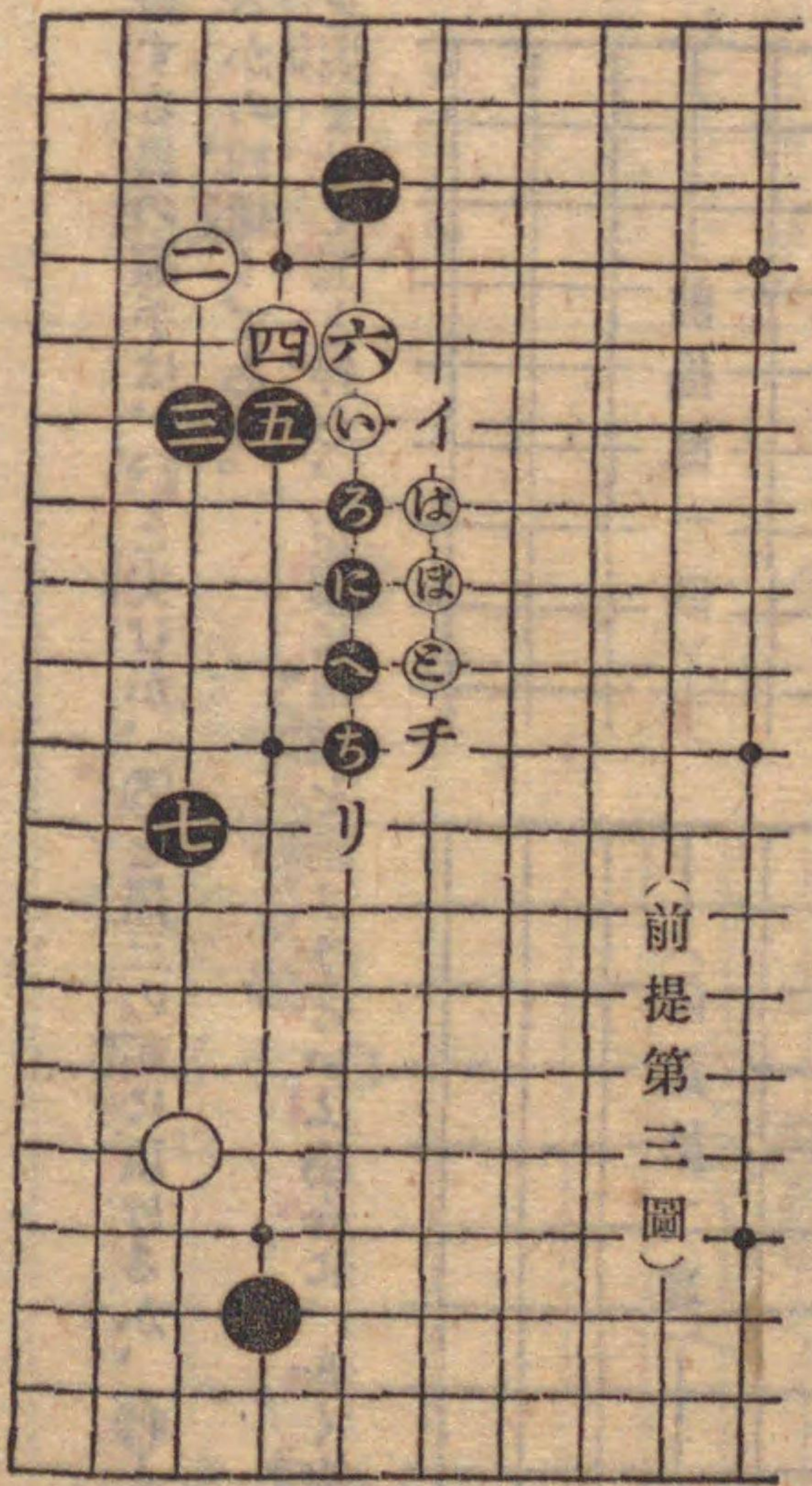


○(前提第三圖) 黒三の一間夾を行ふに適した左下隅方面の、布石關係の一例を擧げると、圖の如き場合とも想像する事が出来る。

乃ち此かる黒白の交換が左下に行はれてある様な場合は、後に七と三間夾を恰好ならしむる前提として三と夾み、白四の時五と押し、白に六と應ぜしめて七と拓くのである、此の七は三を基點とする自己の圍欄拓を兼ねて、左下隅の白を三間夾とした一舉兩得の手である。

「註」 黒七の後、白の曲りに應じて、黒は必ずらずと縛ねばならぬ、若し最初からと應ぜずして手抜する考ならば、七と拓く手で尙(イ)及(イ)と二子押ししておくがよい。

白に應じると縛ねた以上は、白、黒、白、黒は約束手といふ可きである、白の時、黒がと行びるか、或は(チ)と縛るか又は(リ)と飛ぶ可きかは、黒の趣向に待つ可きて、茲に斷言するの限りではなし。



(前提第三圖)

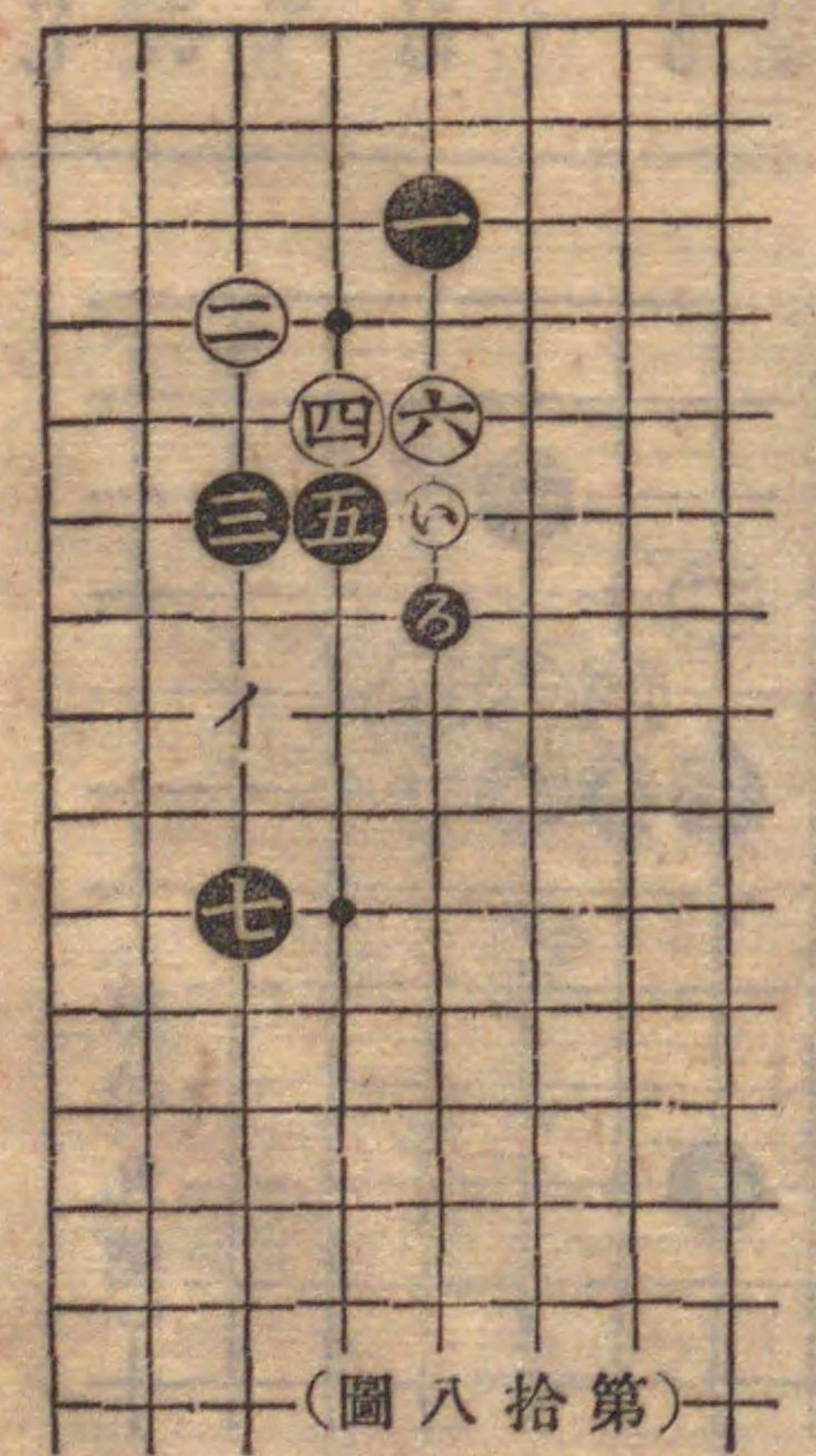
第三十四、ろ
ト共、はイ、
点は走

○(第拾七圖) 黒五に應じて白が六と行びた時、黒は七の手で單に

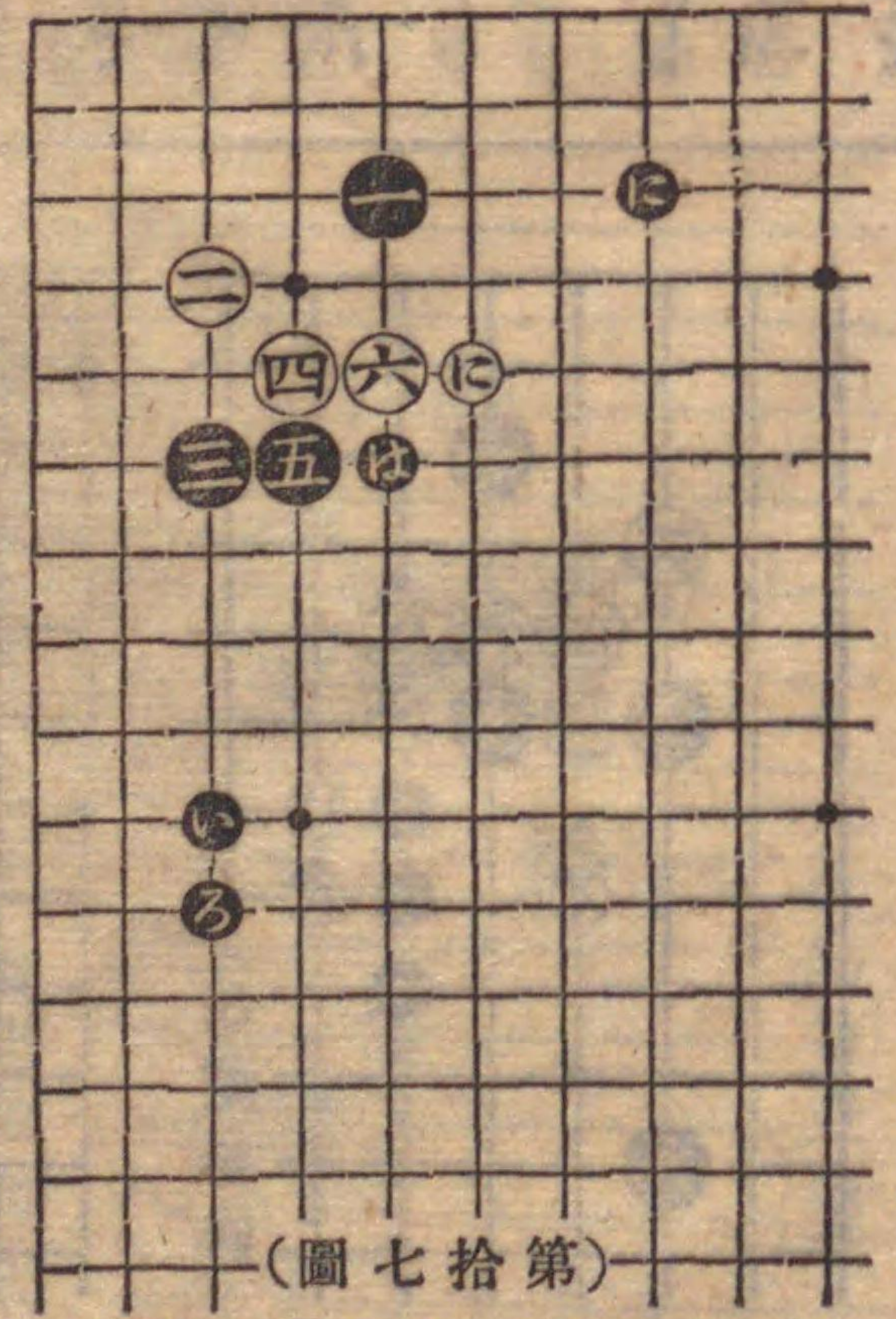
と三間に拓くか、又はと四間に拓くか、或はと押し白に應ぜしめてと拓くか、と押しした後にと廣く拓くか、七の手で單に上側をと二間に拓くか、又はと押し、白に應じたるの後に、と二間に拓くか。

以上六種の打方がある。

○(第拾八圖) 黒七の三間拓きに對し、白がと曲つた時、黒はと應じるや否やは適宜であるが、黒若しを手抜すると、白に(イ)と打込まれる事を覺悟せねばならぬ。



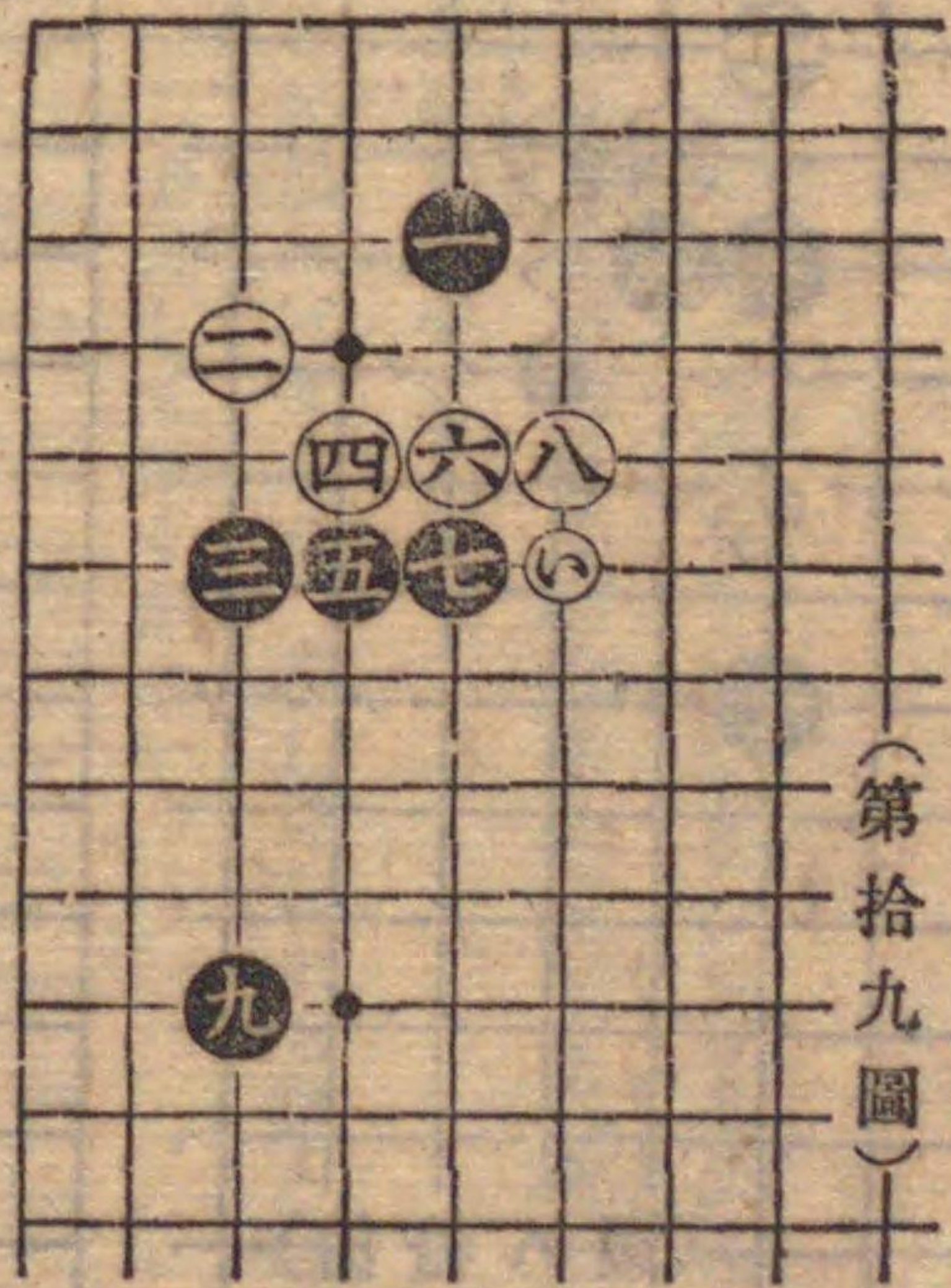
(圖八拾第)



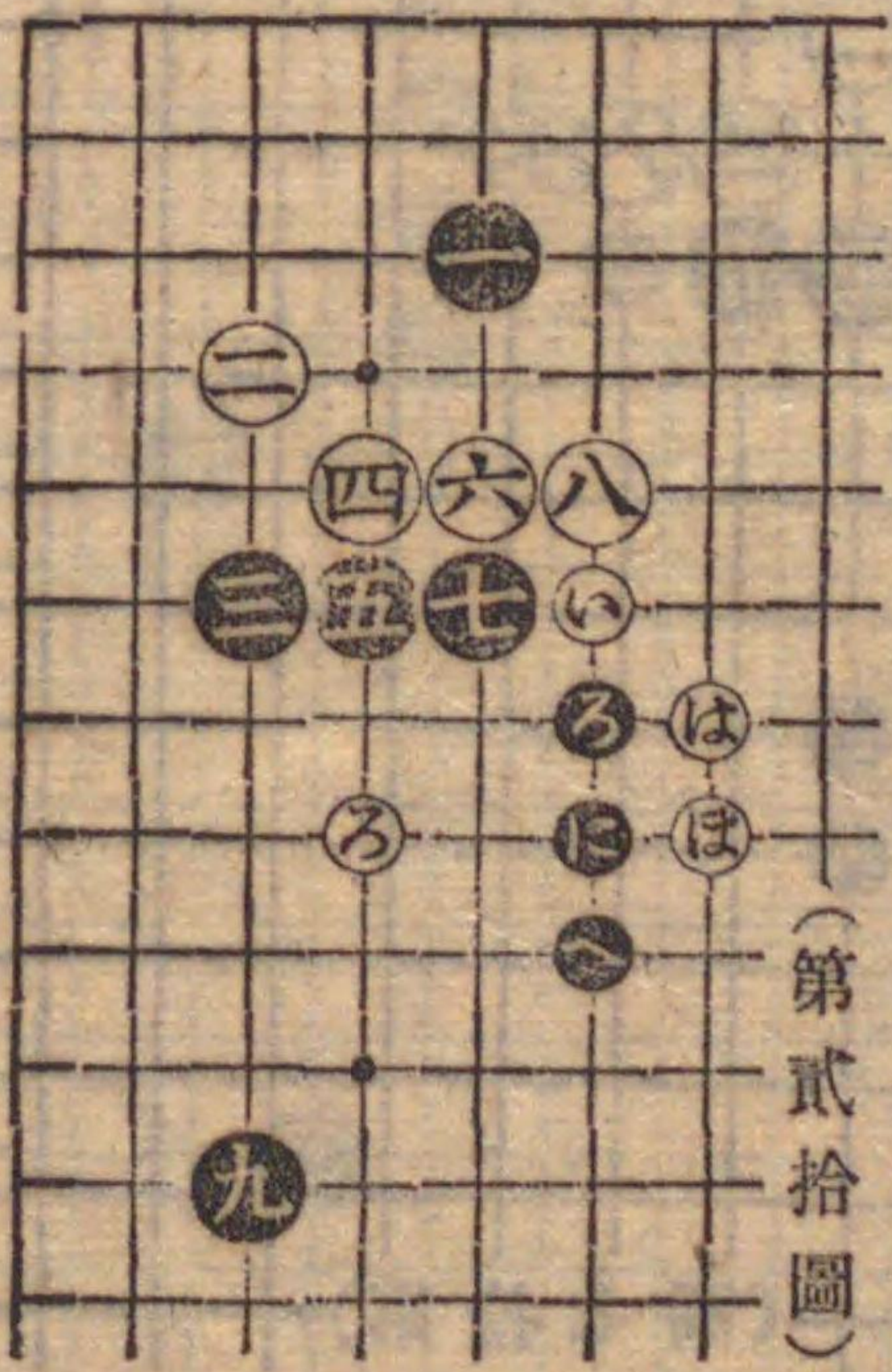
(圖七拾第)

第六回
はろと、お込
三注書

○(第拾九圖) 前圖の如く黒が三、五と二子押し
た後直ちに拓けば、其の拓きが假令三間拓きとい
ふ窄い拓きでも、白に乗ぜられる隙があるから、
黒は大抵手拔は出来ぬ、若手拔の考ならば、圖の
如く七と三子押しして、後九と窄く拓くがよい。
然らばヨシ白が○と曲つて黒七の頭を壓して來る
とも、黒は平然として手拔して差支ないのである。
○(第貳拾圖) 假令黒七を此く三子押しした場合で
も、次で黒が本圖の如く廣い四間拓きをした際は、
白○の際黒手拔すれば、直ちに白に○と打込まれ
て、紛亂を招くの懼があるから黒は必らず○と應
じ白○黒○白○黒○と運んでおくがよい。
○(第貳拾壹圖) 黒が三、五と押しして、直ちに七
と廣く拓いた時、前提第三圖の如く、左上六の一
子より曲つて九の點に黒三、五の頭を壓する手を

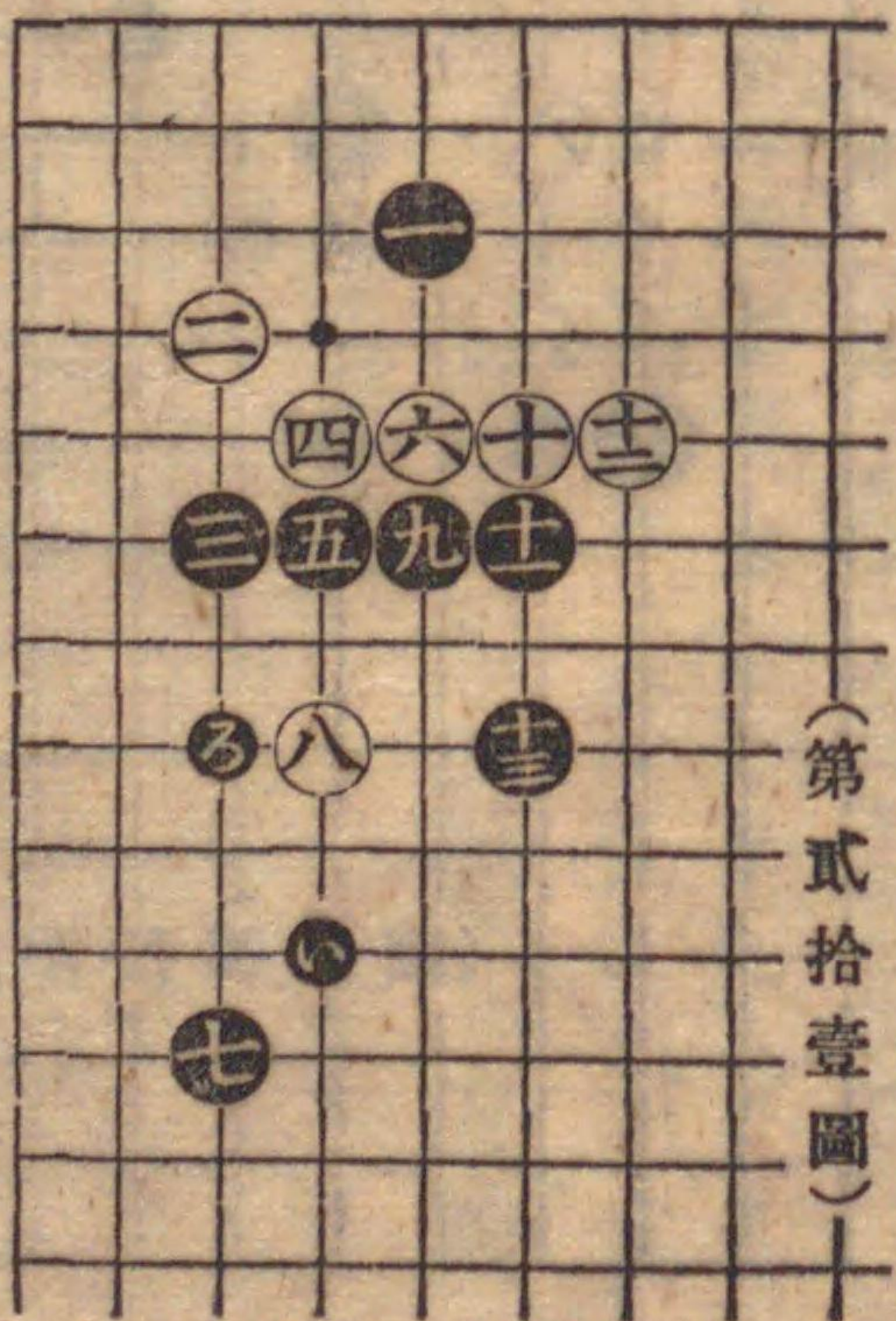


(第拾九圖)

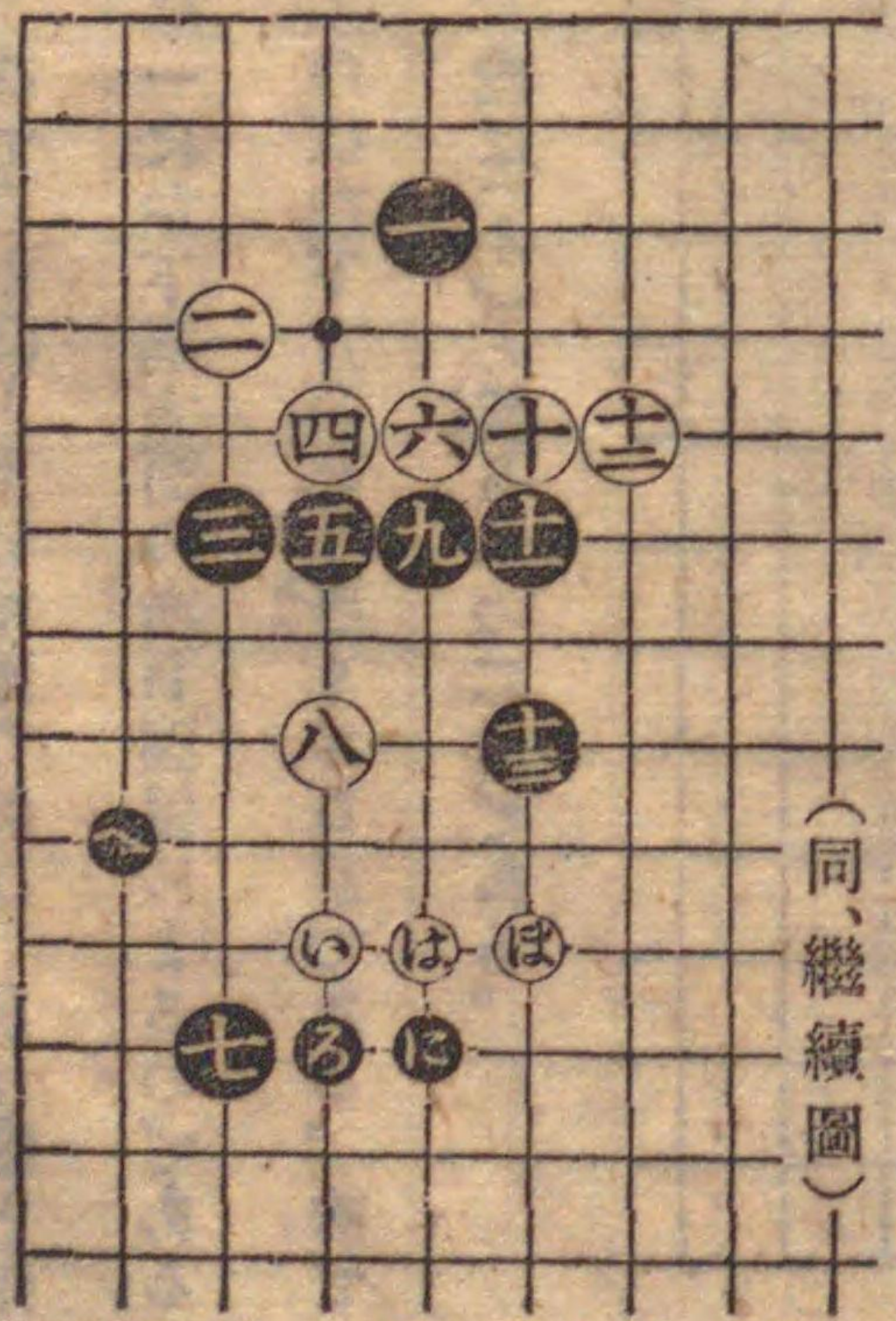


(第貳拾圖)

變じて、本圖の如く八と打込むのも亦一策である。
白八の意は黒を九、十一と誘致して十、十二と自
然的に上側に勢力を加へ、黒一の一子に迫ると同
時に、暗に八の一子に餘韻を存して左側の黒地を
削る味を保留しやうといふ手である。
白十二の時、黒は十三と高く壓するがよい、此の
手を以つて○から迫るのは緩い、○は白を十三の
點に飛ばして○と頂けやうといふ手であるが、黒
若し十三の手にて○より迫らば白は手拔して此の
處に餘韻を存しておくがよい。
○(同 繼續第一圖) 黒が十三と高壓する手には
白を○と動かして○と押し左下を手厚くしようとい
ふ意を含んでをる、次で白○、黒○、白○とな
るは自然の手順である、本圖白○の後に於て黒は
直ちに○と斜走して上下を連絡するがよい。



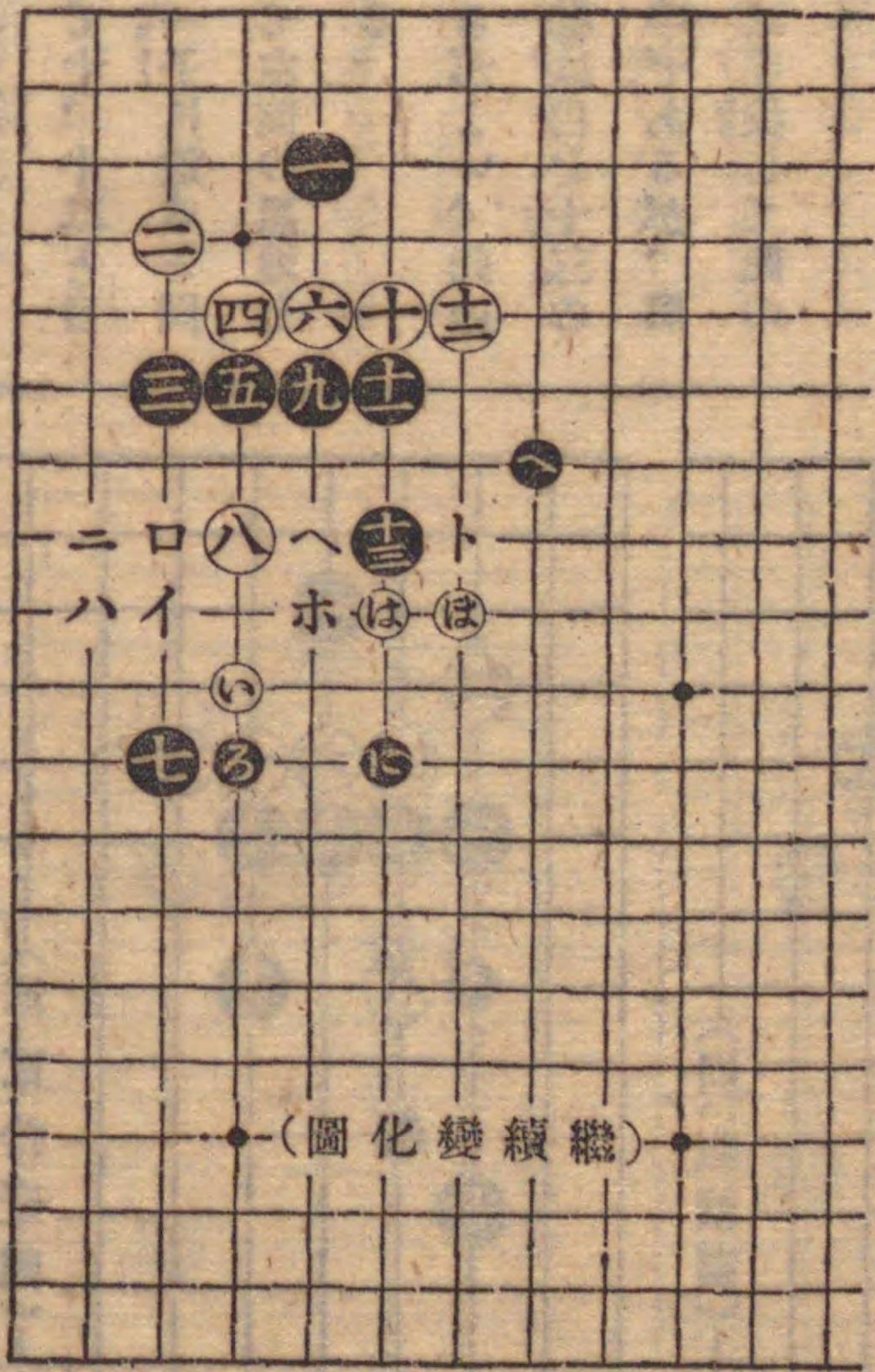
(第貳拾壹圖)



(同、繼續圖)

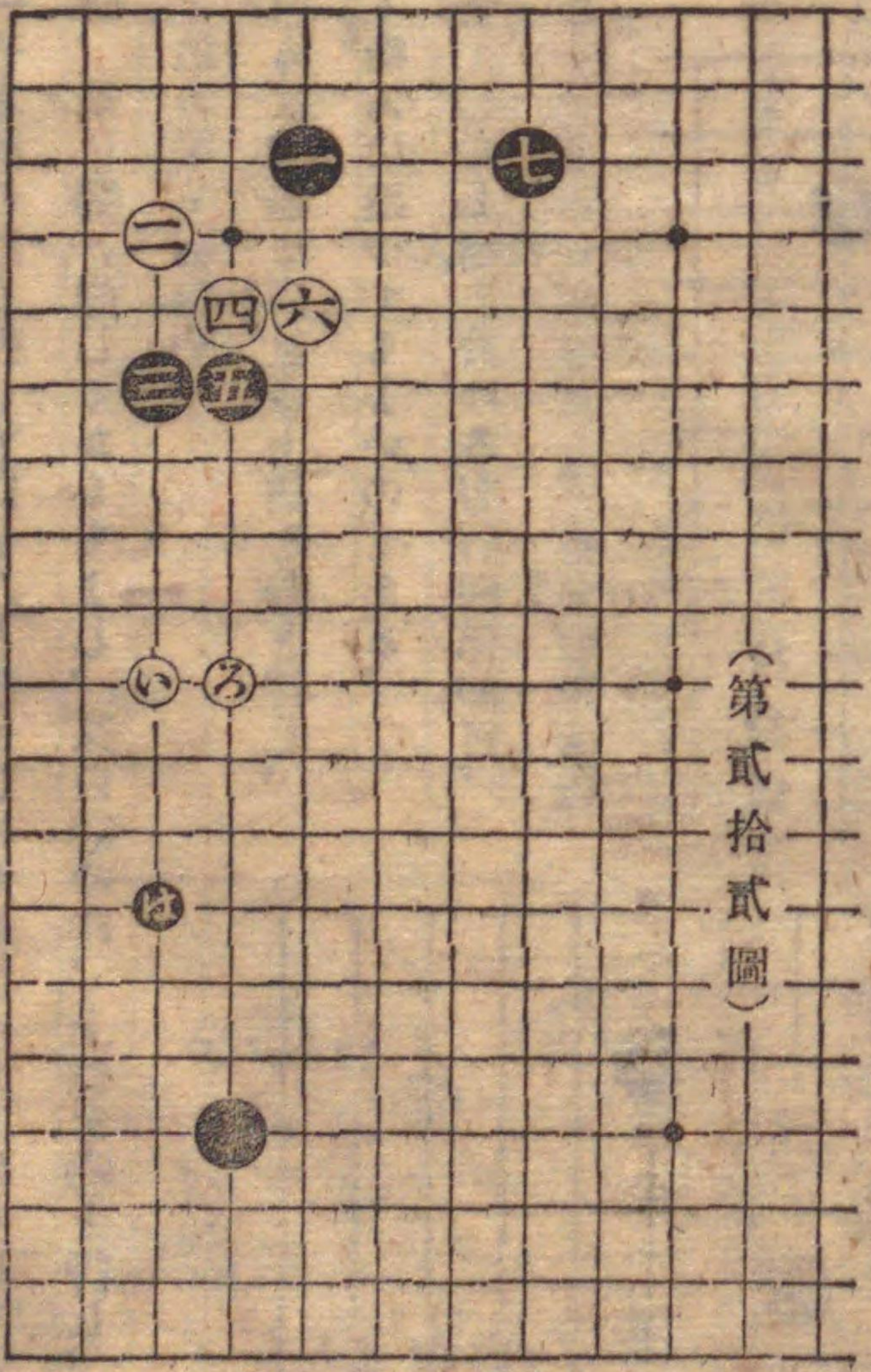
○(同、繼續變化圖) 黒十三の後、白①、黒②と運び、次で白が③と頂けて来た時は、黒は④と飛ぶが良いか、或は單に(イ)と盤つておくが良いか、其は一に左下隅方面の布石關係によるのであるから、茲に其の是非を決する譯にユカヌ、黒が⑤と飛ぶのは左下方面を手厚くする意である、次で白が⑥と行びて中原に逸した際、黒は⑦と斜走するか、或は(イ)と盤るかの二途である。

「註」 黒が(イ)と来た以上は、白は此の盤りを妨げて上下に遮断する事は不可能である、何となれば黒(イ)白(ロ)黒(ハ)白(ニ)の時黒は(ホ)と打てばよい、若し白が尙執拗に(ヘ)と截つて来たならば、黒は(ト)と行びてあげばよいのである。



○(第貳拾貳圖) 黒は五と押し、白六の時上側を七と二間拓する事もある、是は左側の場合が、⑥若くは⑦の邊から白に迫られても三、五の二子が然程苦痛を感じぬ際、黒一を援けて七と備へるの必要を感じた時である。乃ち此の手順に運ぶ左下隅方面の關係を調べると、圖の如く黒が星にでもあつて、黒七の後、白が⑧若くは⑨から三、五の黒に迫つて来た時、其の⑩、或は⑪、の白を⑫と挾撃して、自然に左下隅に實利を占めやうといふ様な策に出る時である。

「註」 要するに本圖の黒七の手段は、左上三、五の二子によつて白を牽制して上側黒一の子を(白六の鋭鋒の爲め受くる迫害より)援けて安全の地に置くと同時に、兼ねて左下隅方面には⑬と打つて、別に地歩を占めやうといふ様な手段を觀て居る時の策なのである。



○(第貳拾參圖) 黒七は或は更に一子本圖の如く押して白を八と應ぜしめたる後、九と拓く事もあ
る。次で白が○の邊に迫つて來た時、單に○と應じておくもよし、又白○の時、上側を○と押し、
白に○と應ぜしめたる後、急に○と迫る手も面白。

又白が○の手を一路低く(イ)より迫らば、黒は尙且つ上側を○と押し、
白が○と應じた後、○と左下隅より徐ろに迫つてもよいのである。

△(質問圖) 問、黒が三と夾む前提として上側に於ける布石關係如何。

●答、(イ)若くは(ロ)の邊に白がありとするも黒は此く三と夾む事もあ

る、何となれば既に説いた二

問夾若くは三問夾の一問夾返

しを、手順を逆にして打つた

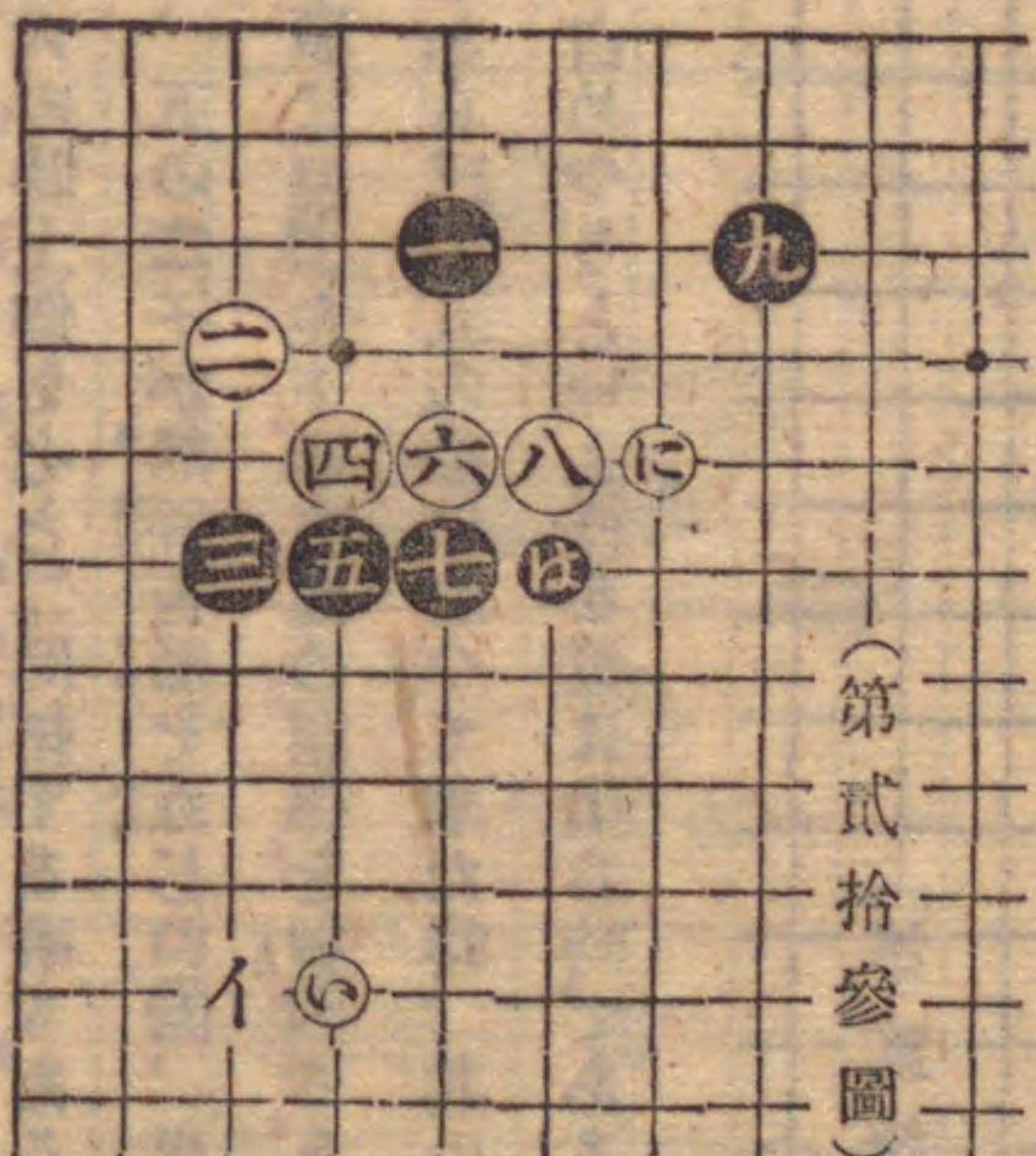
道理になるから敢て差支はな

いのである。

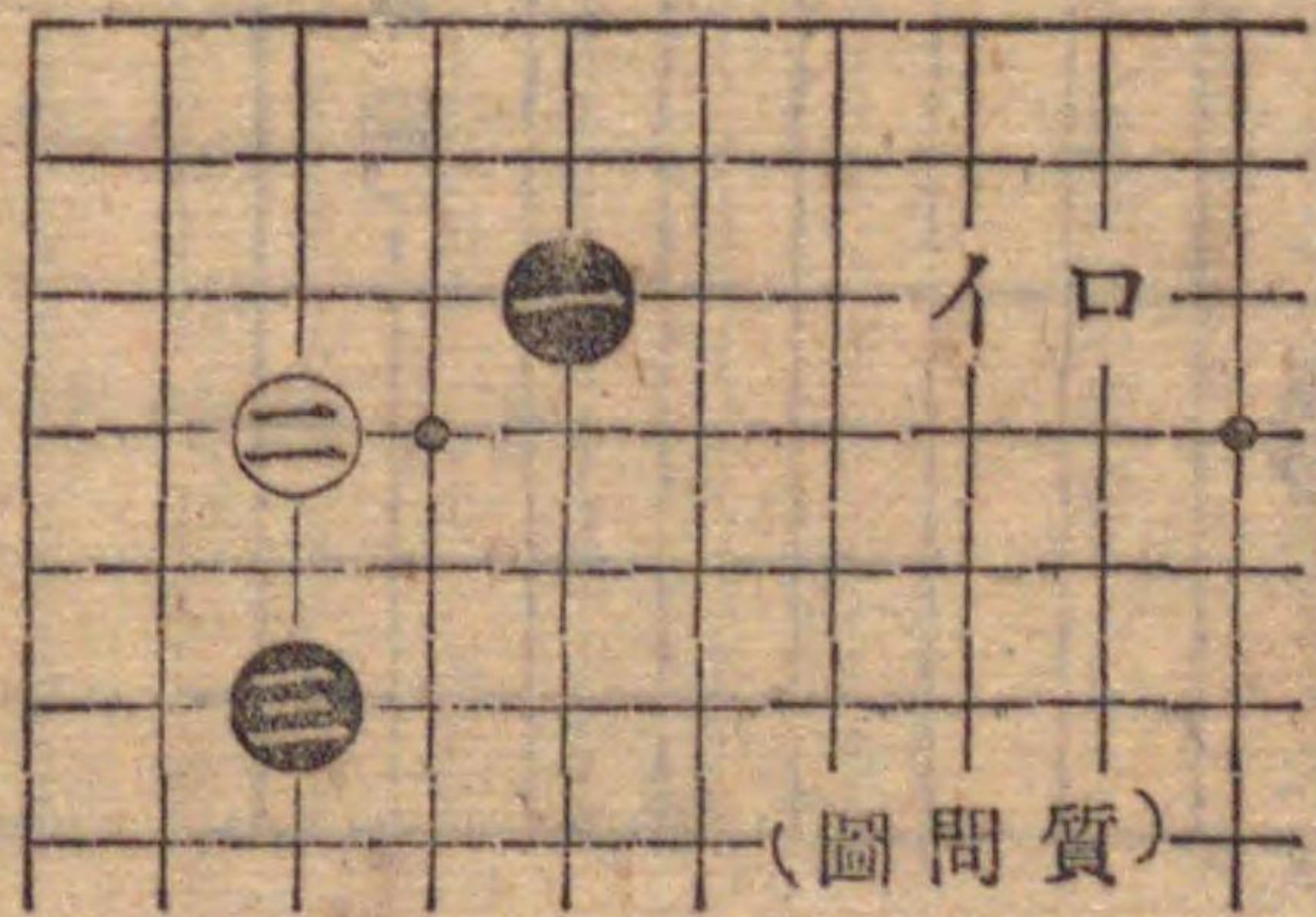
又(ロ)に黒がある場合であつ

ても、同じく黒は三と夾む手

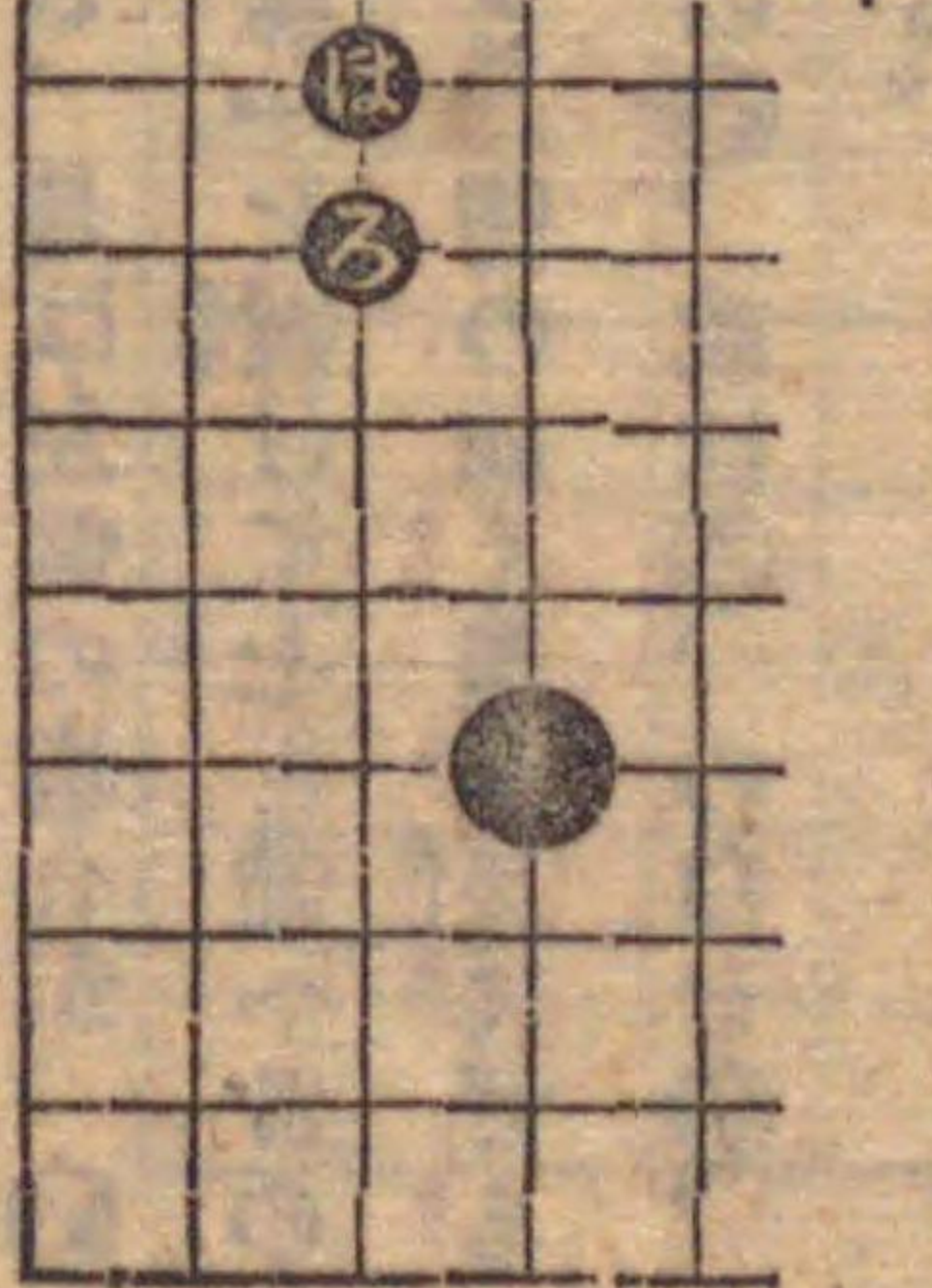
はあるのである。



(第貳拾參圖)



(圖問質)



○(第貳拾四圖) 白が六と飛ぶのは乃ち上側(イ)印邊に黒のある場合は此く飛ぶのも亦一策であ
る、白六の意は○の打込を含んで居る、黒が○と圍へば白は左側○の邊から夾む意である。

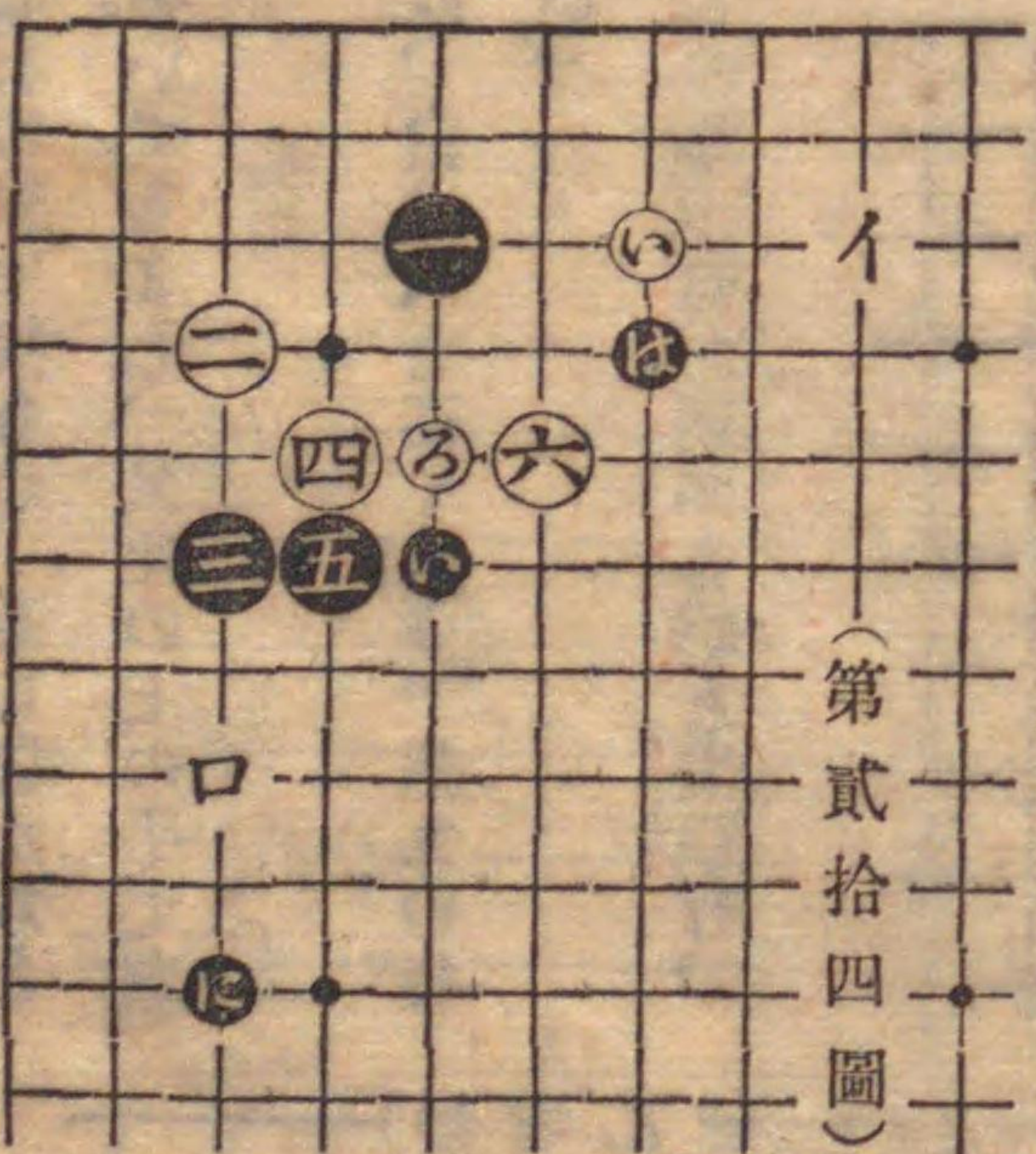
黒若し七で○と拓かば、白は直に○と打込むか、或は○の打込を保留して○の點に膨らみ(ロ)の打
込を覗つてもよい。黒七の手は先づ○と覗き、白に○と粘がして○と圍ふが普通である、黒若し○
の覗きに先立つて○と圍は、後に○と覗いても白は○に應ずるや否やは不明である。(次圖參看)

△(參考甲圖) 白六に應じ黒が七と圍うた後に於て、(白手抜の際)黒が更に○と覗いても白は必
しも(ロ)と應ずるものとは考られぬ、何となれば、或は(ハ)と押し黒(ニ)の時(ホ)と隅から尖頂け

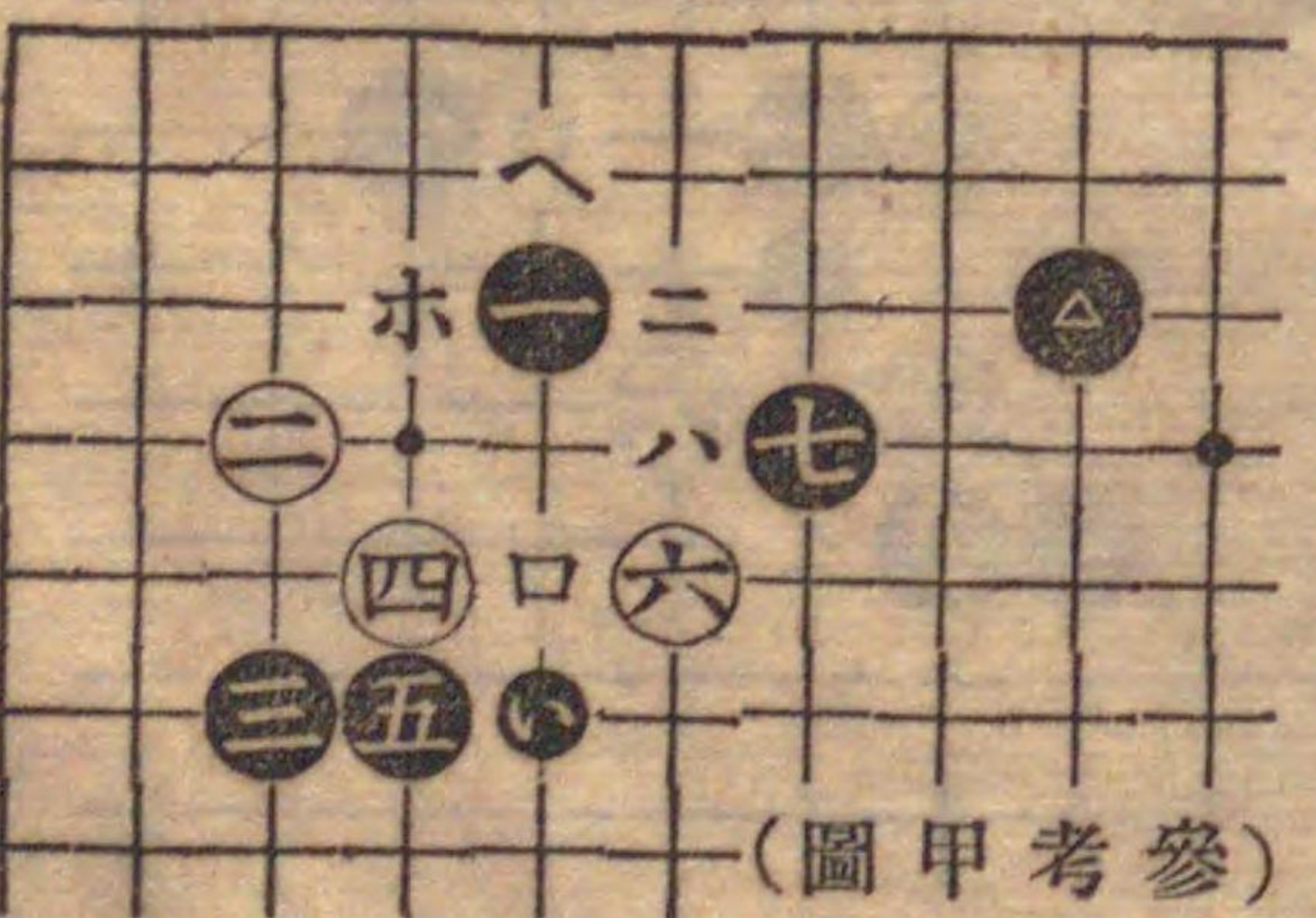
て實利を占めると同時に六との
連絡を計るかも知れぬ、或は又
單に(ホ)と尖頂け、黒が(ロ)の
點に突出した際(ヘ)と縛る手段

に出るかも知らぬ、要するに此
の三策を擇ばれるの不利がある
から、黒七は先づ○と覗いて黒

(ロ)の後七と圍ふが良し。



(第貳拾四圖)



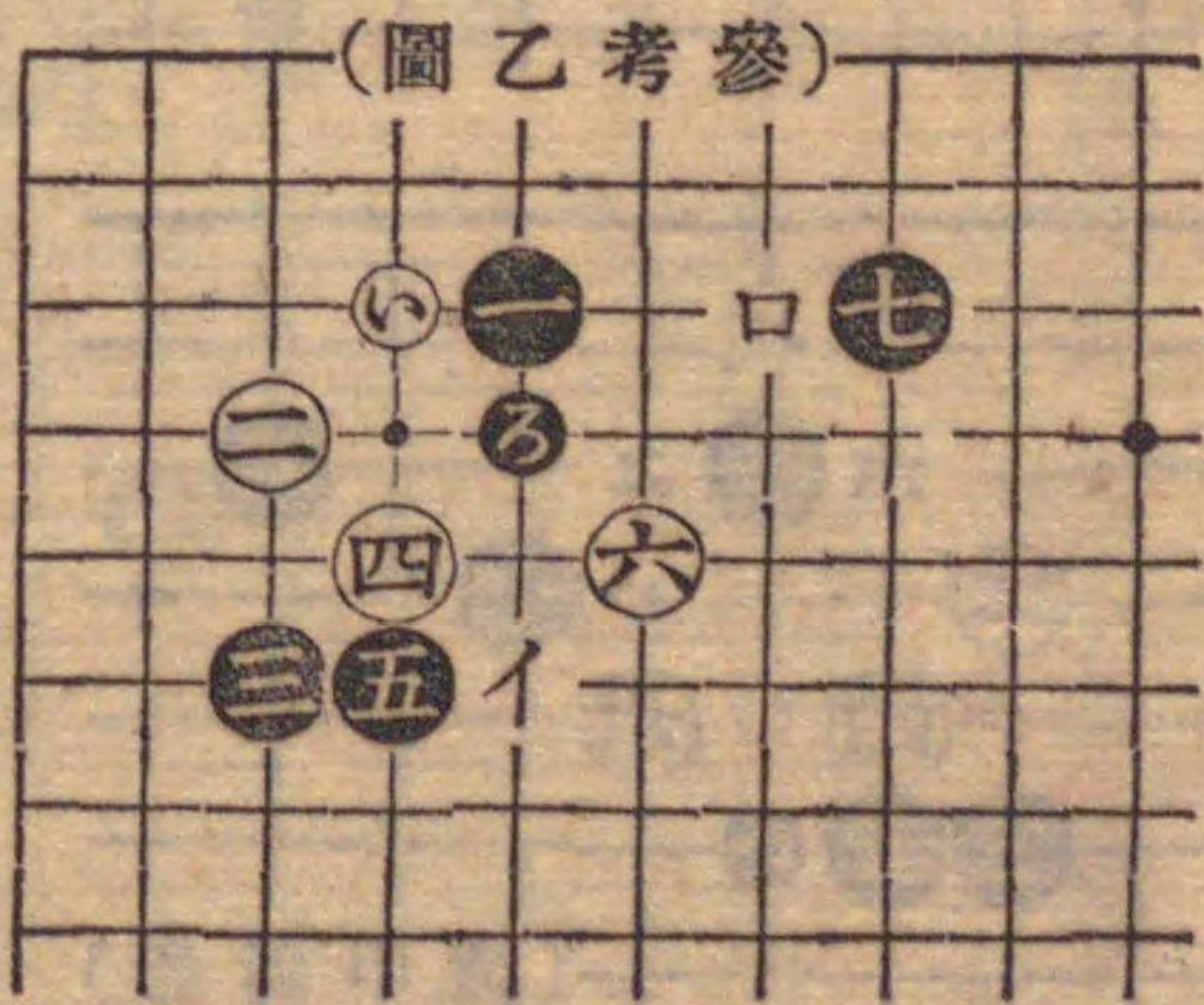
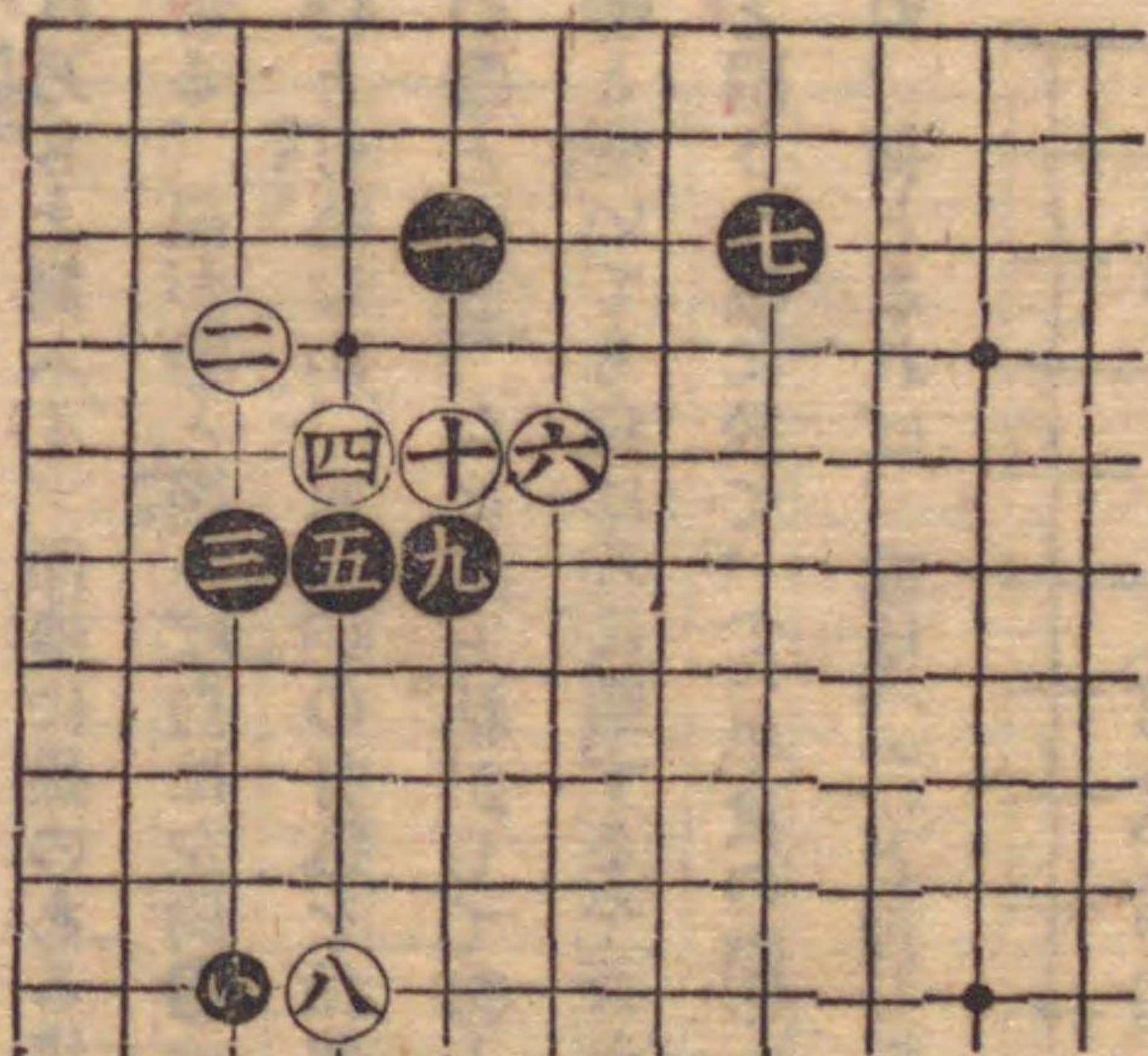
(圖甲考參)

○(第貳拾五圖) 上側に何等黒の布石の無い場合に、若し白が六と飛んだならば、黒は堅固に二間に拓いてもよし、又此の七の手で左側●の點に三間拓してもよし。

本圖の如く黒が七と二間したならば、白は八と高く迫り、黒九の行びを誘致して、十と堅く粘ぐがよし。

△問、(参考乙圖) 黒が七と二間した時、白が隅から●と尖頂け、若くは(イ)に膨らむの可否如何。

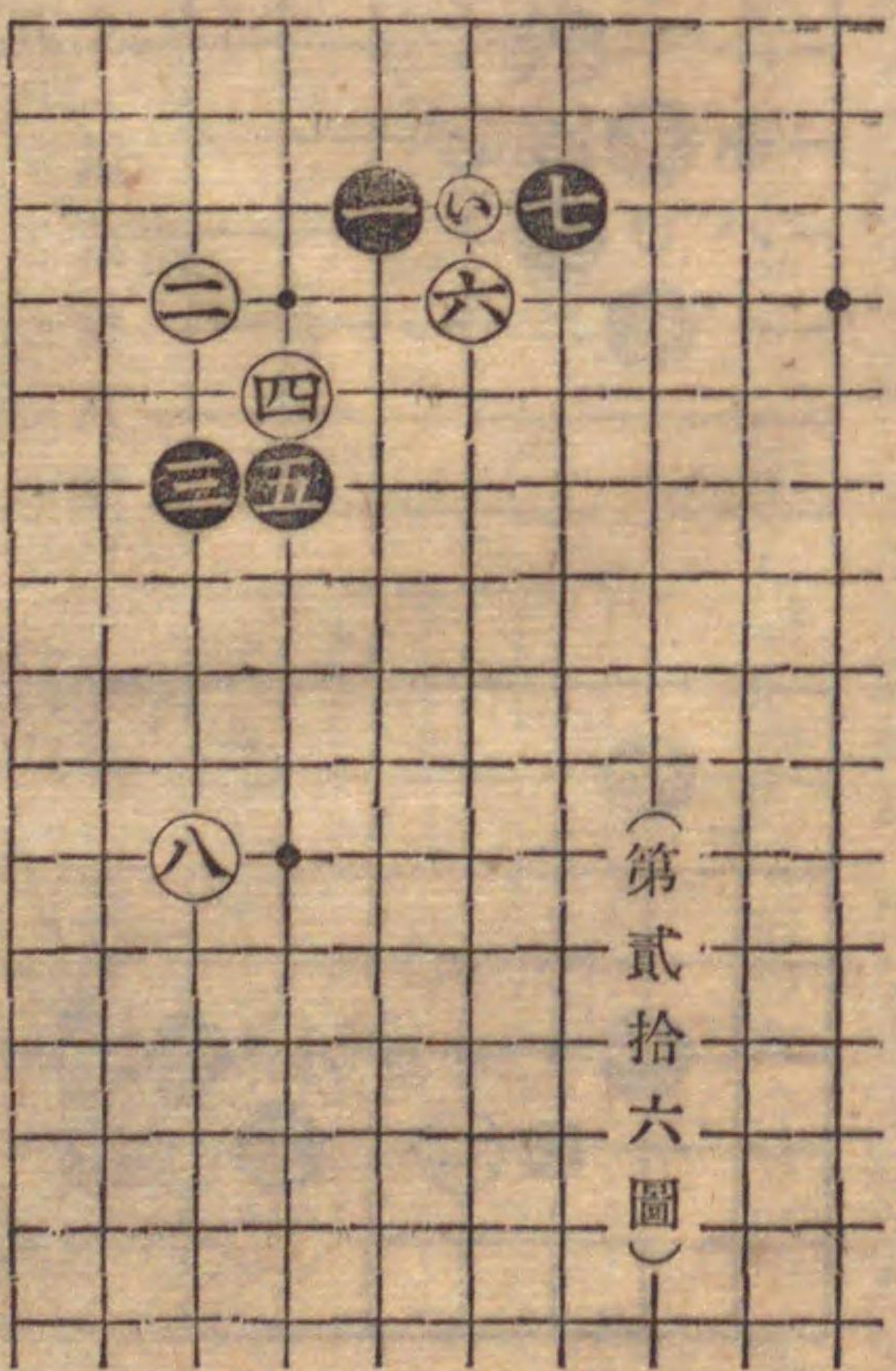
□答 黒七と二間拓の際白の●若くは(イ)は絶対に面白くない、何となれば黒に●と行び視かるゝの不利に陥るからである要するに白六は(ロ)から夾まうか、左下邊から迫まらうかといふ意であるから黒七の後●若くは(イ)と打つ道理はない。



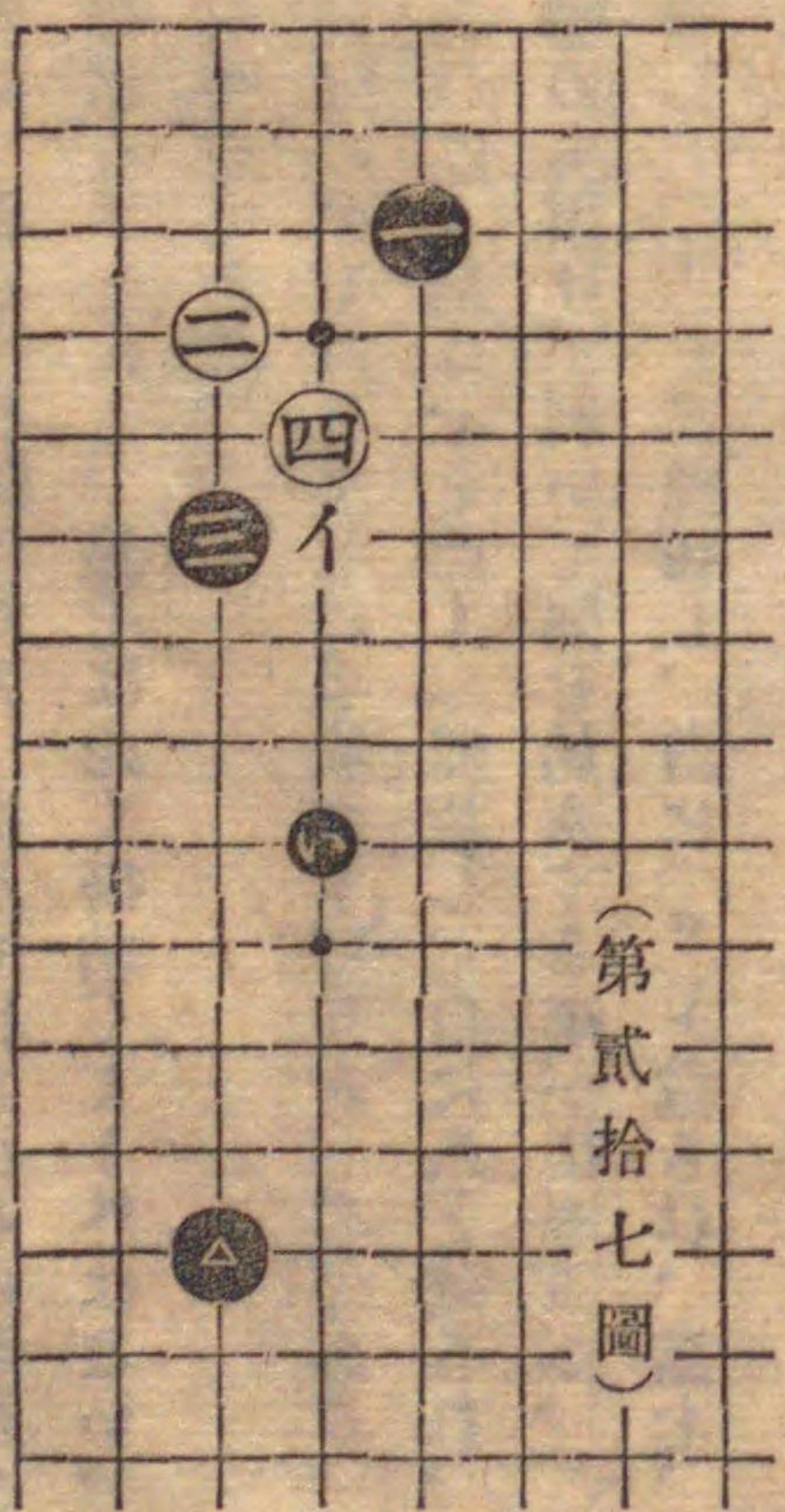
(第貳拾五圖)

○(第貳拾六圖) 白は趣向として此く酷しく、黒一に對して、六と掛る事もある、白六の意は、黒をして他を顧みるの違なからしめ、次で左側より入と迫まらうといふの策である。
黒七は此く一間飛するより外に途はない、若し此を手抜して左側八の點に拓いたならば、忽ち白に●と押へられて、非常の不利に陥らねばならぬ。

○(第貳拾七圖) 白四の尖みに對し、黒が五の手で(イ)の點に押すのは普通であるが、若し左下隅方面に、既に△印の如き布石の行はれてある様な場合であれば、黒は五の手で(イ)と押す手を以つて、圖の如く軽く外して●と大斜走に圍ふのも良い。



(第貳拾六圖)



(第貳拾七圖)

○(第貳拾八圖) 白四を此く黒三の頭に頂けるのは、從來の諸圖の様に、尖んで押されるのを嫌うたのである、白六は圖の如く引く手と⑥の點に行びる手とある、黒七は此く掛粘ぐより外はない、次で白は上側⑦の邊より徐ろに黒一に迫る手順が普通である。

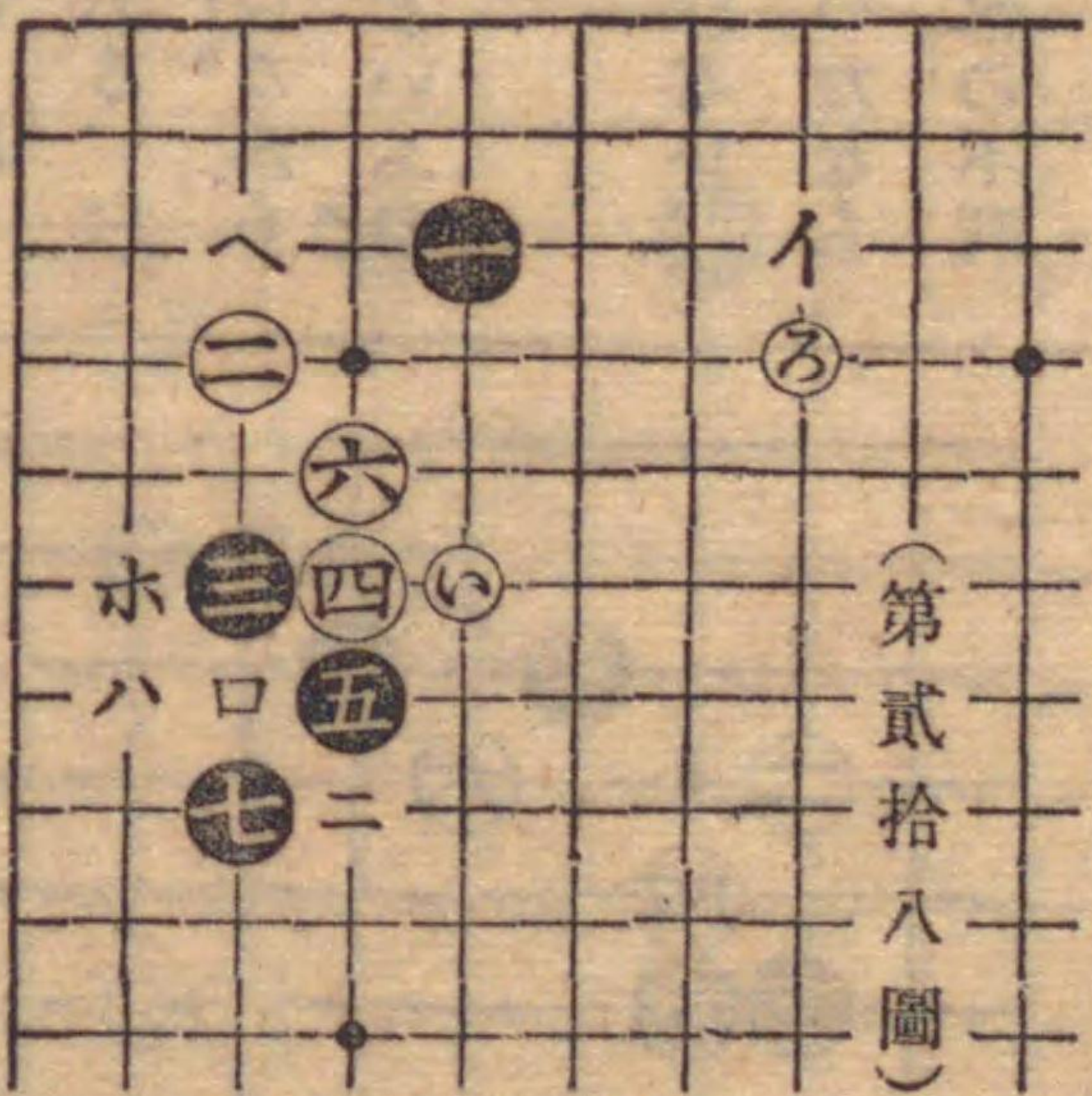
「註」 本圖の手順中で注意す可きは、小目一間夾の類型たる黒七の手抜の不可なる一事である、

△(參考圖) に示す如き小目一間夾の場合であれば、黒は七を此く二間拓して白に八と截られ、黒九、白十、黒十一、白十二と運んでも後に⑧の尖頂けが利いて隅を始末する事が出来るが、

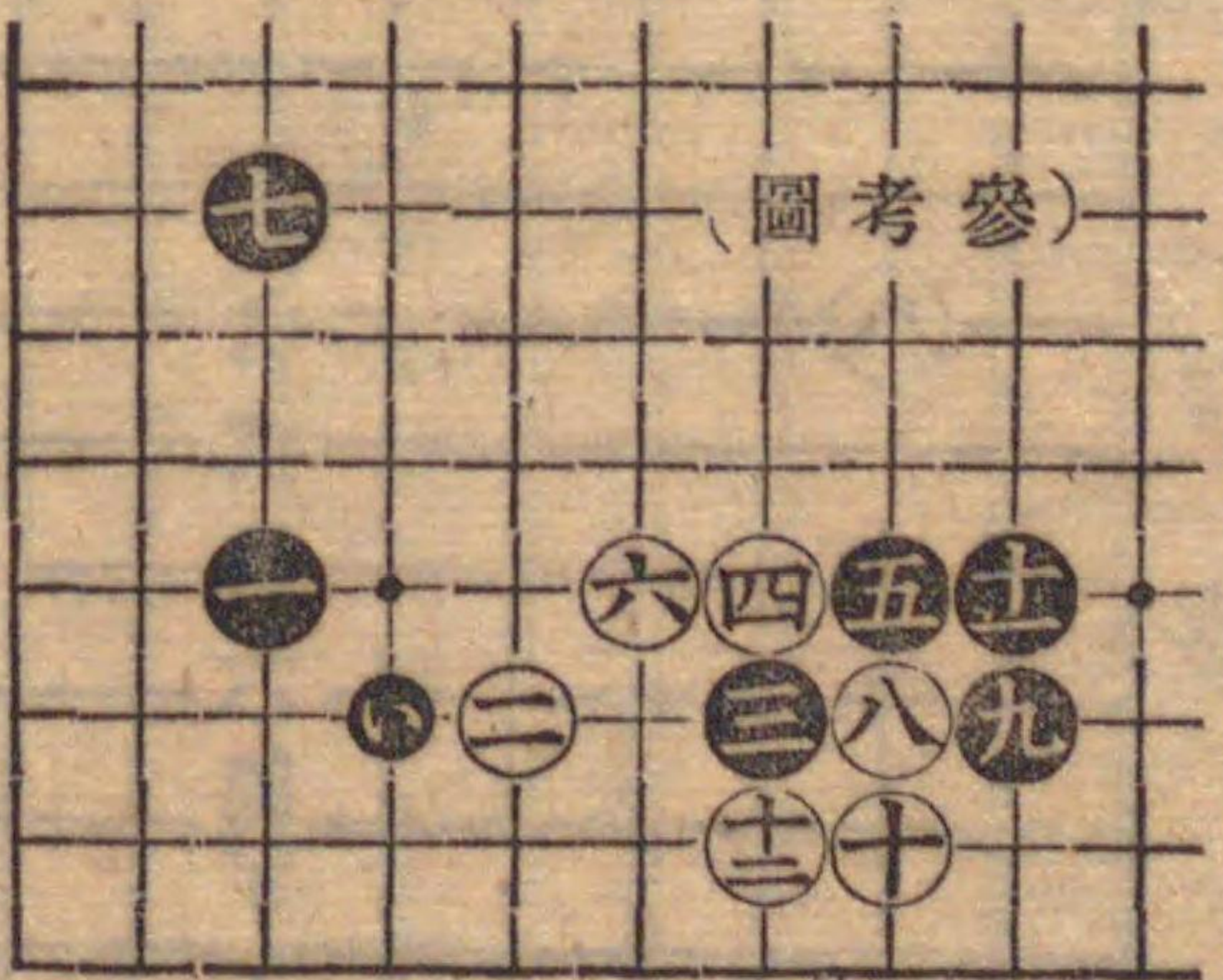
第貳拾八圖の場合にあつては、黒若し七を手抜して(イ)と二間拓し、白に(ロ)と截られ、黒七、

白(ハ)黒(ニ)白(ホ)と運んでも後に黒から隅に向つて(ヘ)に頂ける手が何等の權威を持たぬから、少からぬ不利を招くのである。

前圖迄の黒は、根據が無い爲め星下邊から白に攻められる状態であつたが、本圖の如く三、五、七と運べば、黒は堅牢無比の姿勢を呈するのである。



(第貳拾八圖)



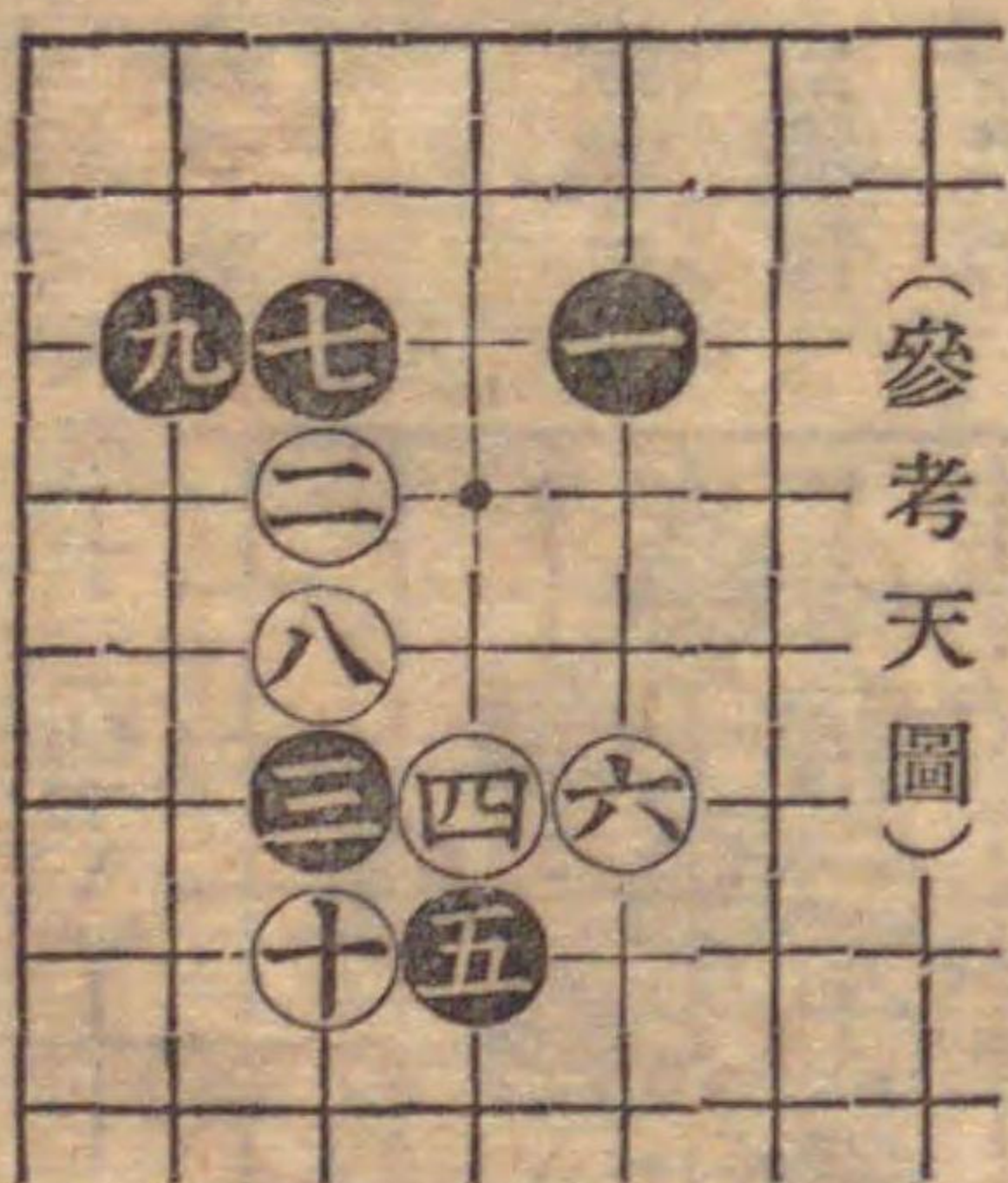
(圖考參)

○(第貳拾九圖) 白六の時黒は七と隅へ行ひ、白八の行ひに應じて九と接觸し、白を十と粘がして十一と係粘ぎ茲に左側の根據を固めたのは自然の手順である、白若し⑥の邊から迫つたならば、黒は⑥と出るか⑦と隅へ走るがよい。

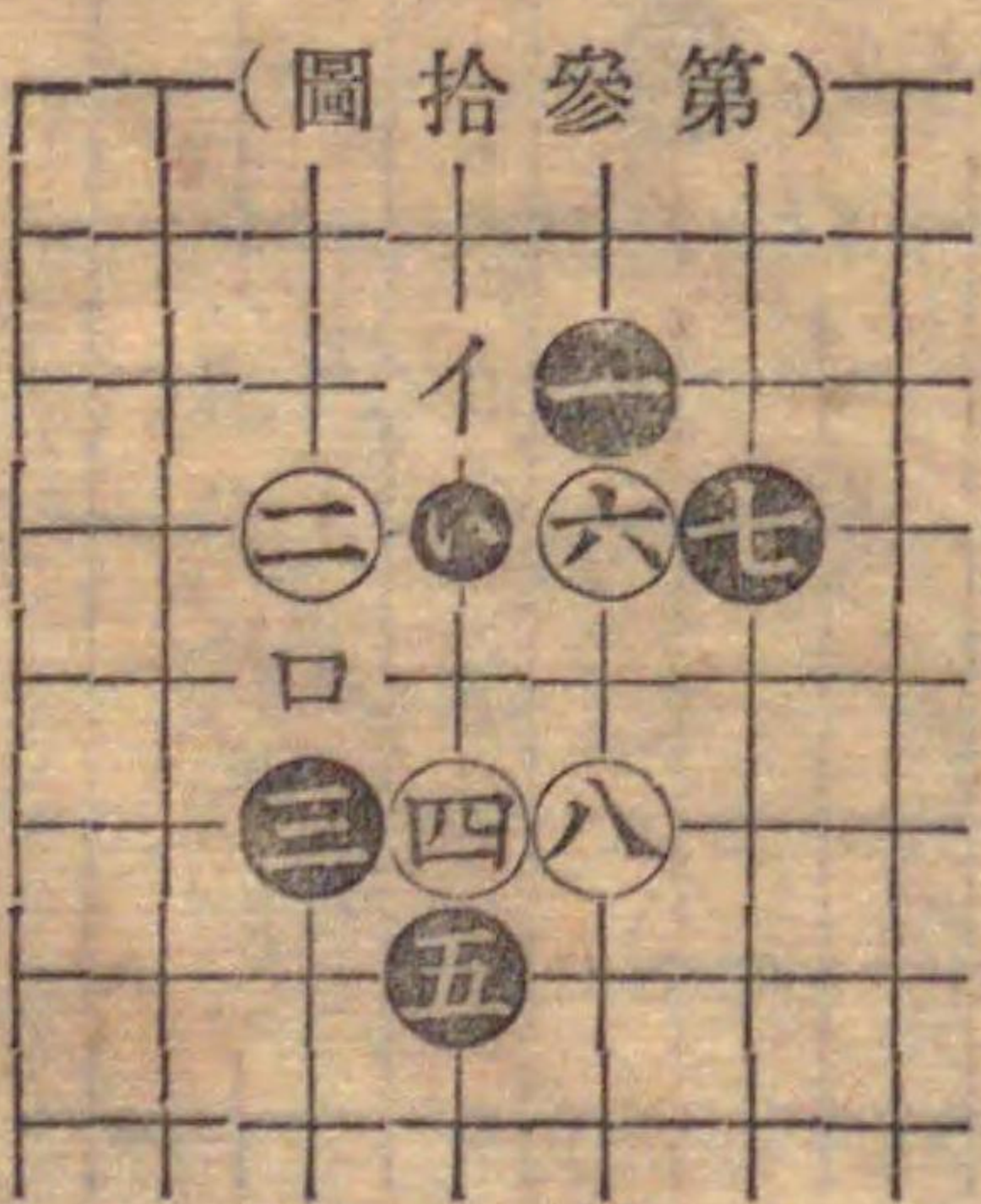
△(參考天圖) 前圖黒七の手を變じて此く隅へ頂けたならば、白は八とツキアタリ、黒が九と下つた時、白は十と截斷するがよい、本圖の如き黒の打ち方は勿論場合にもよるが、黒が七、九と隅に占め得た實利と、白より十と截斷されて三、五の二子を空に歸せしめた不利とを相殺して尙黒の不利たるは疑ひもなき事實である。

○(第參拾圖) 白が六の手で八の點に行ひずに先づ六と上側一の頭へ頂ける手もある。

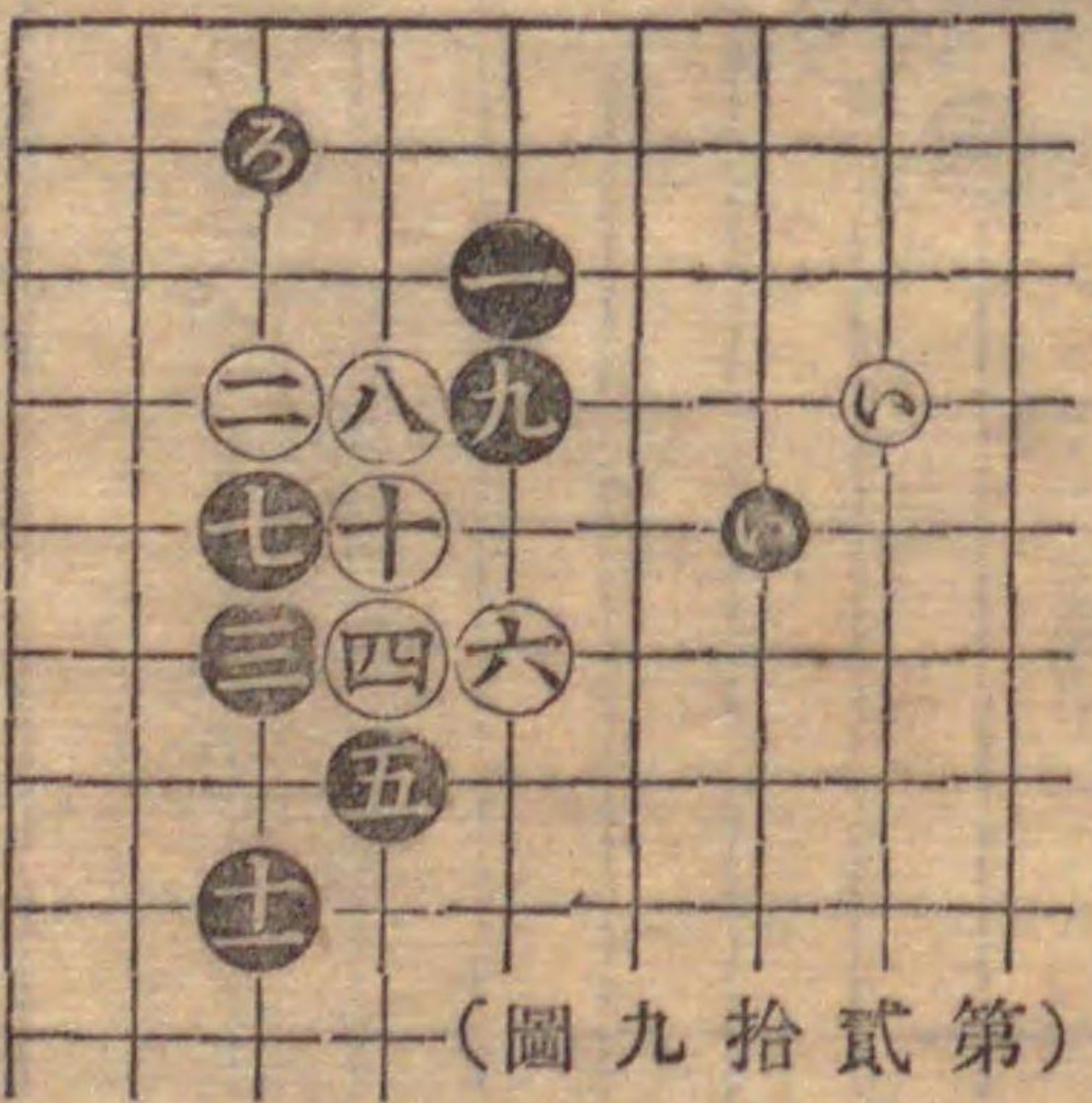
白八の行は、黒が(ロ)へ突き出さば⑥に粘がうといふ策である、此の際黒は白の策を破つて⑥と縛込むが普通である、或は上側の布石關係によりて⑥と縛込む手で(イ)と行る手なきにしも非ずである。



(參考天圖)



(圖拾參第)



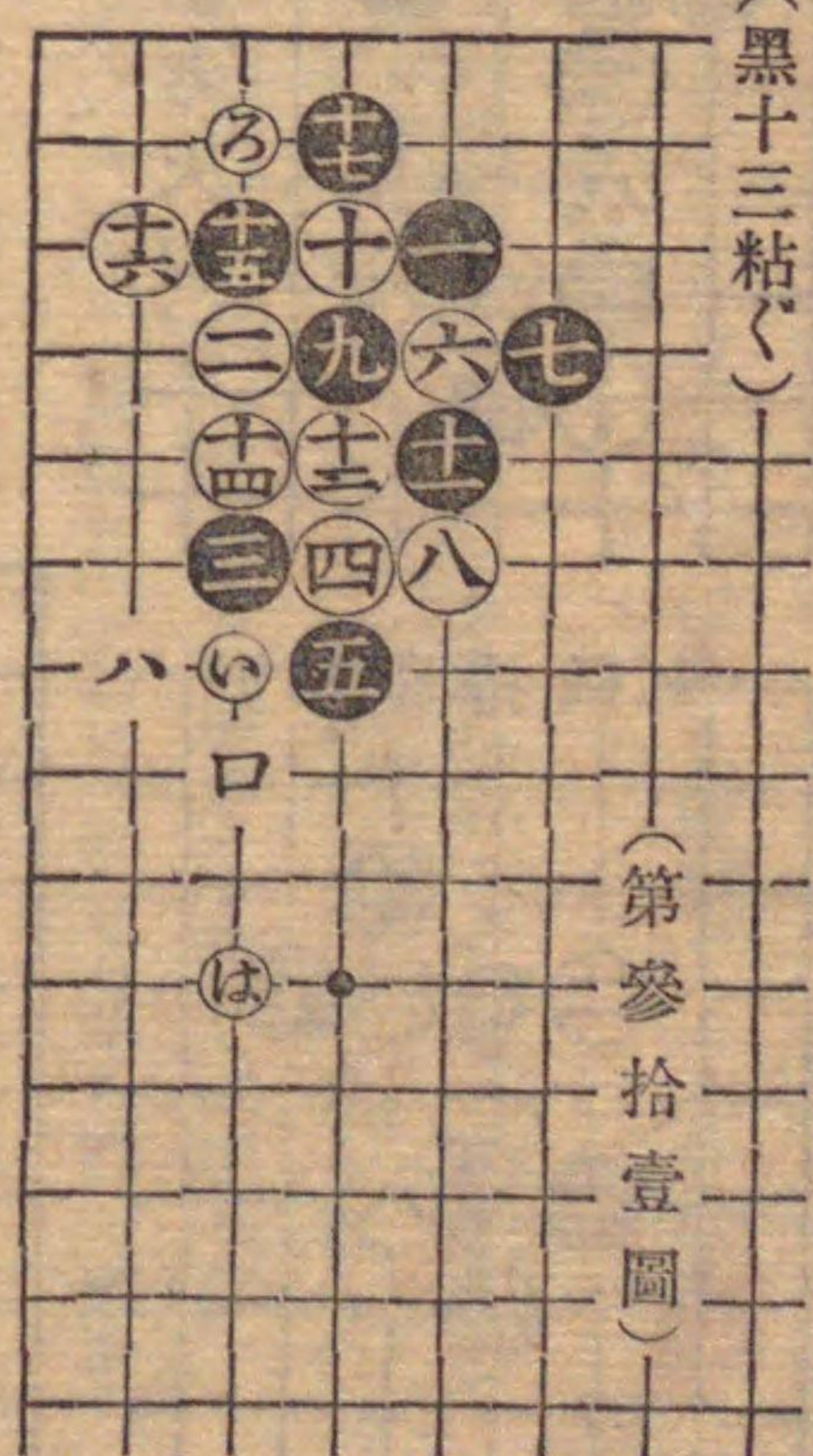
(圖九拾貳第)

○(第參拾壹圖) 黒九の緯込に對して白は十とアテて黒に十一と提らせ、十二とアテルが普通である、白十四は或は⑤の點を截つてもよい。

白が十四の手で⑥と截つたと假定し、其の際黒は(ロ)とアテ白を(ハ)と下らして十五と截るか或は(ロ)とアテずして單に十五と截るかは、一に黒の趣向次第である。

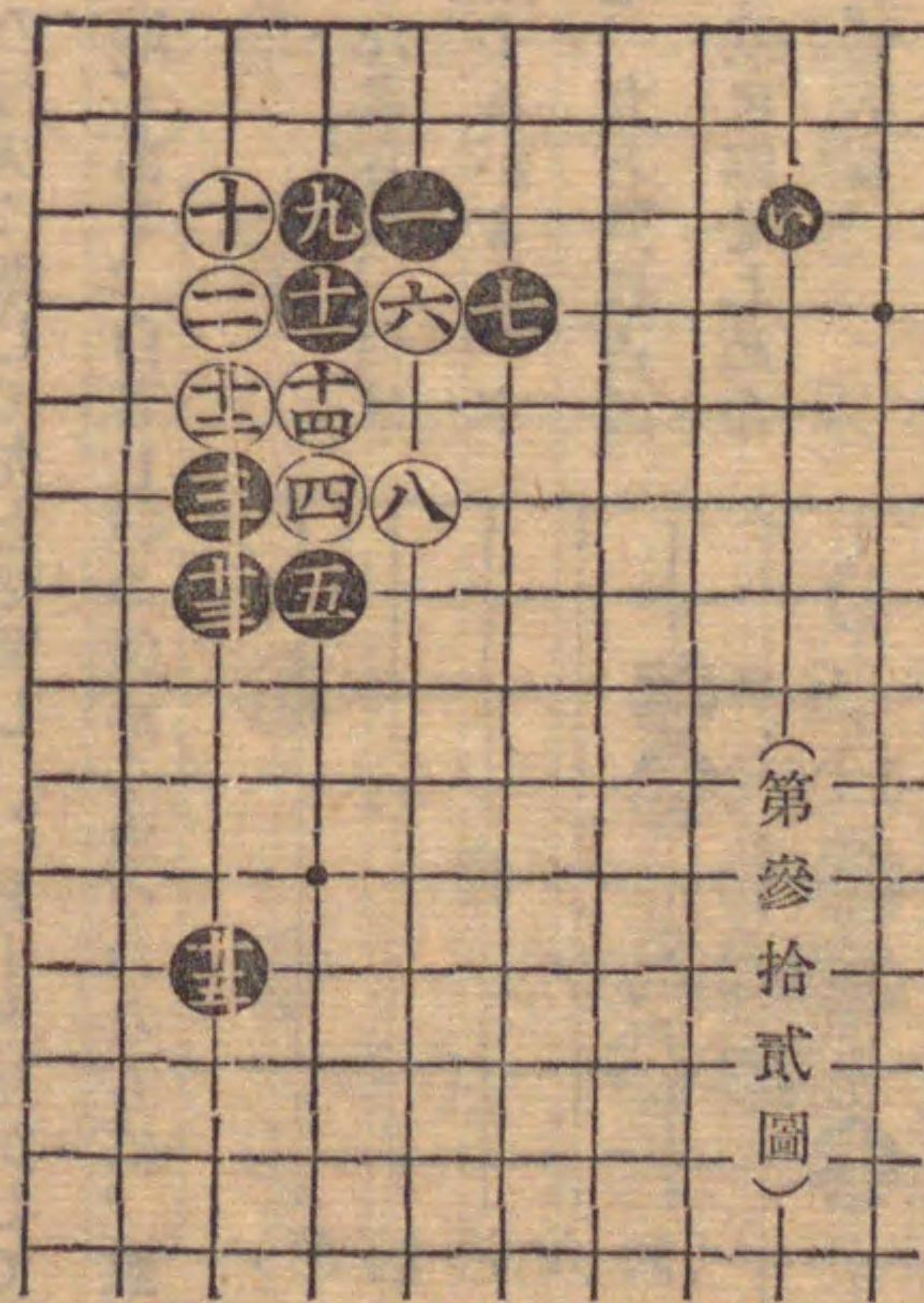
白十八の手は⑧とアテルか或は單に左側星下より⑨と詰めるかは白の策戰次第である。

○(第參拾貳圖) 上側に圖の如く⑩邊に布石がありとすれば黒九の行びも敢て悪くはない、若し⑩の布石が無くて本圖の如く九以下十四迄運んだ後、黒が上側と左側と何れか一方に備へれば他の一方を白に攻められるといふ様な場合であれば、黒九の行びは絶対に不可である。



(黒十三粘ぐ)

(第參拾壹圖)



(第參拾貳圖)

○(第參拾參圖) 白六の時黒が(イ)と緯ね白(ロ)と行び、黒が七の點へ緯込めば第參拾圖の説明と手順を殊にして同一結果である。

本圖の結果も(イ)の黒(ロ)の白が無いだけで第參拾壹圖と同型である。(黒十一粘ぐ)

○(第參拾四圖) 白八の時、黒が⑥と打ち抜いて白に九の點からアテらるゝ事を嫌はゞ、此く九と粘ぐのもよい、其の際白は十と打つて、外部より黒三を抱へておく、若し白が十の手を⑥に粘いだならば、黒十一は手抜しても可い。

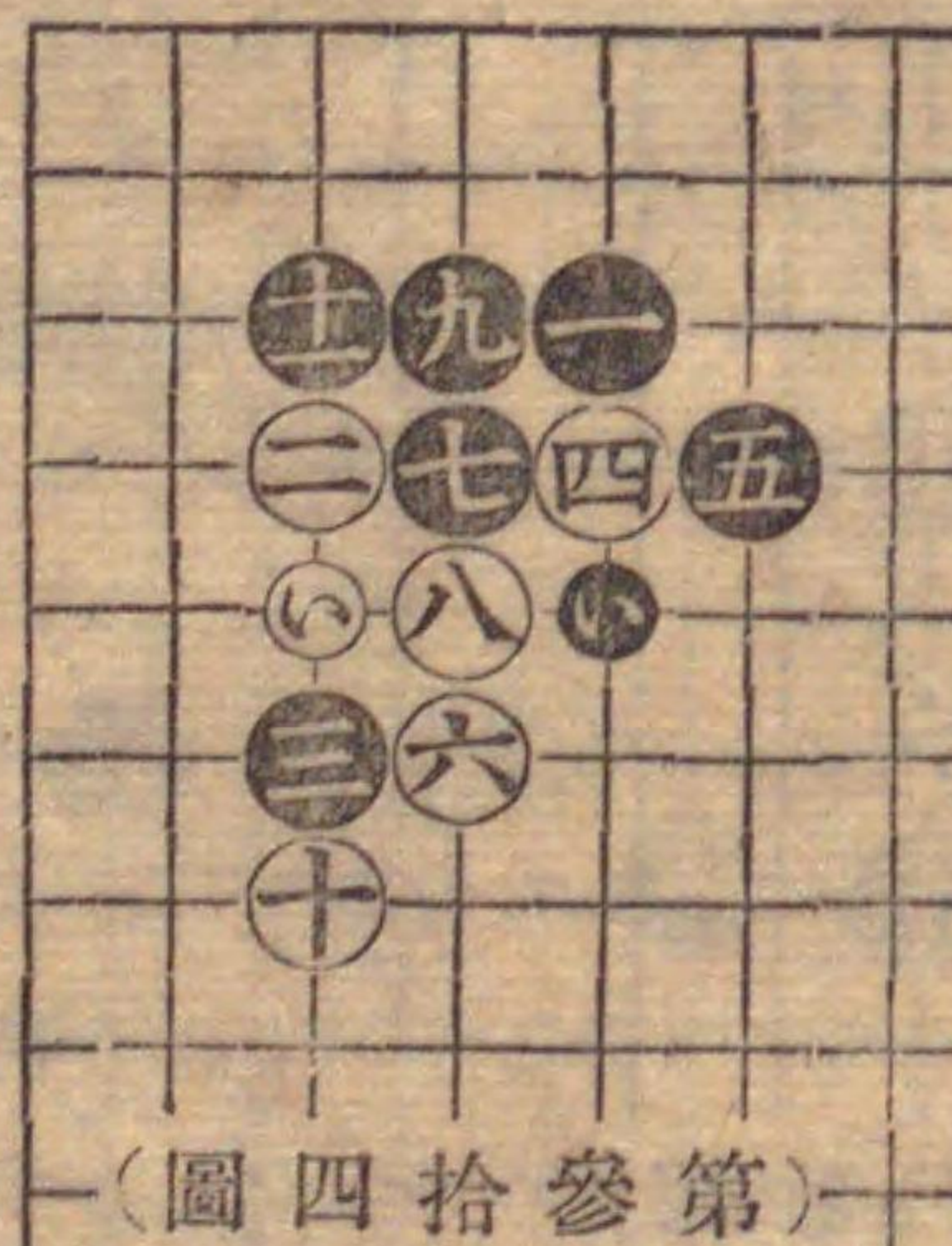
○(第參拾五圖) 白が八と打つて三の二子に接觸して來た時は、黒は九の手で⑥とさる手と、圖の如く隅へ緯する手とある、黒九に對し白は十と打つて三の二子を捕獲してあくがよい、黒九の手で⑥と來れば白⑥黒⑥白十、黒(イ)白

(ロ)黒(ハ)白(ニ)黒九、白(ホ)黒(ト)となる。

本圖の結果は白も厚壯であるが黒も亦五の緯によつて相當の優勢を呈してゐる。



(圖參拾參第)



(圖四拾參第)

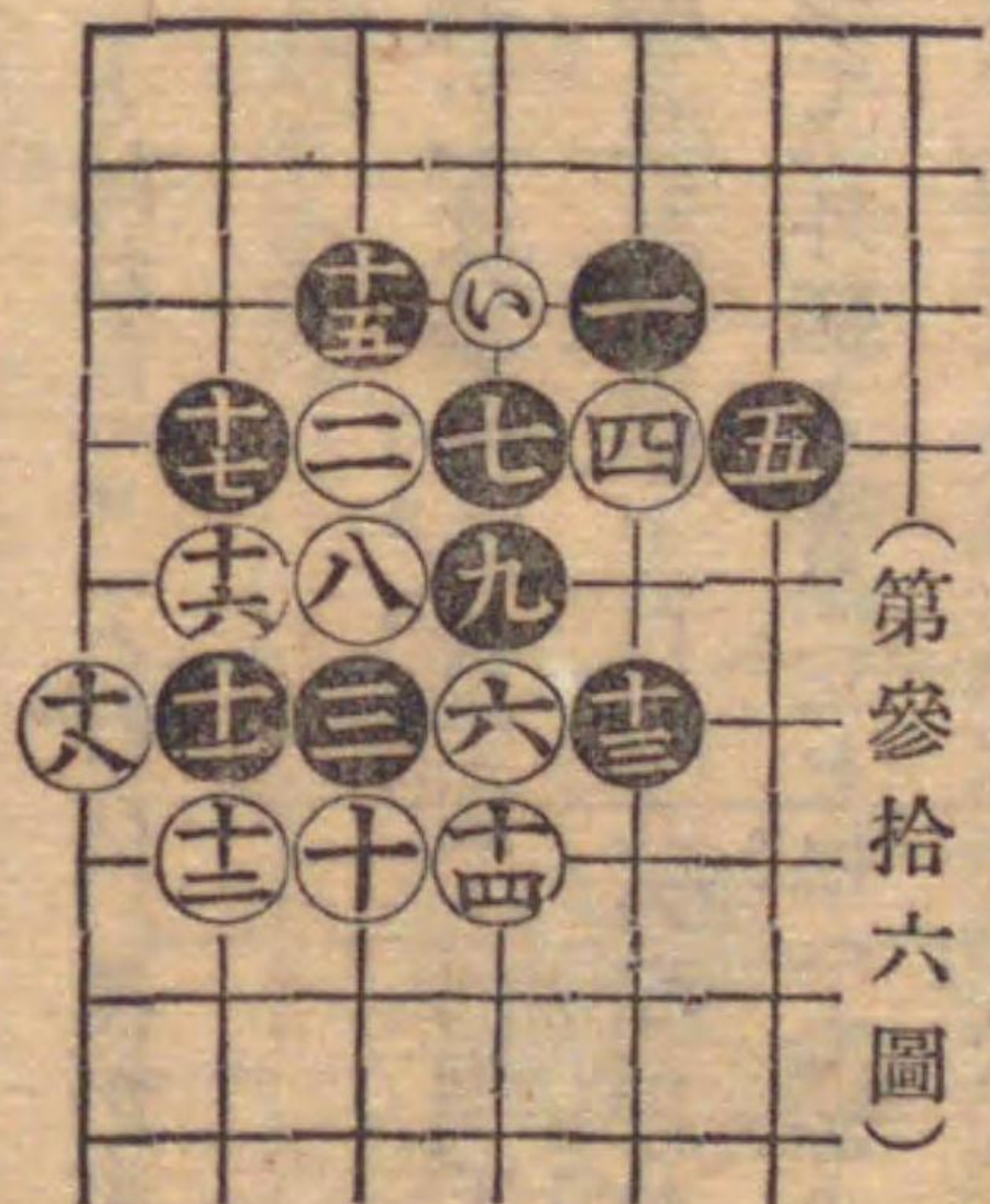


(第參拾五圖)

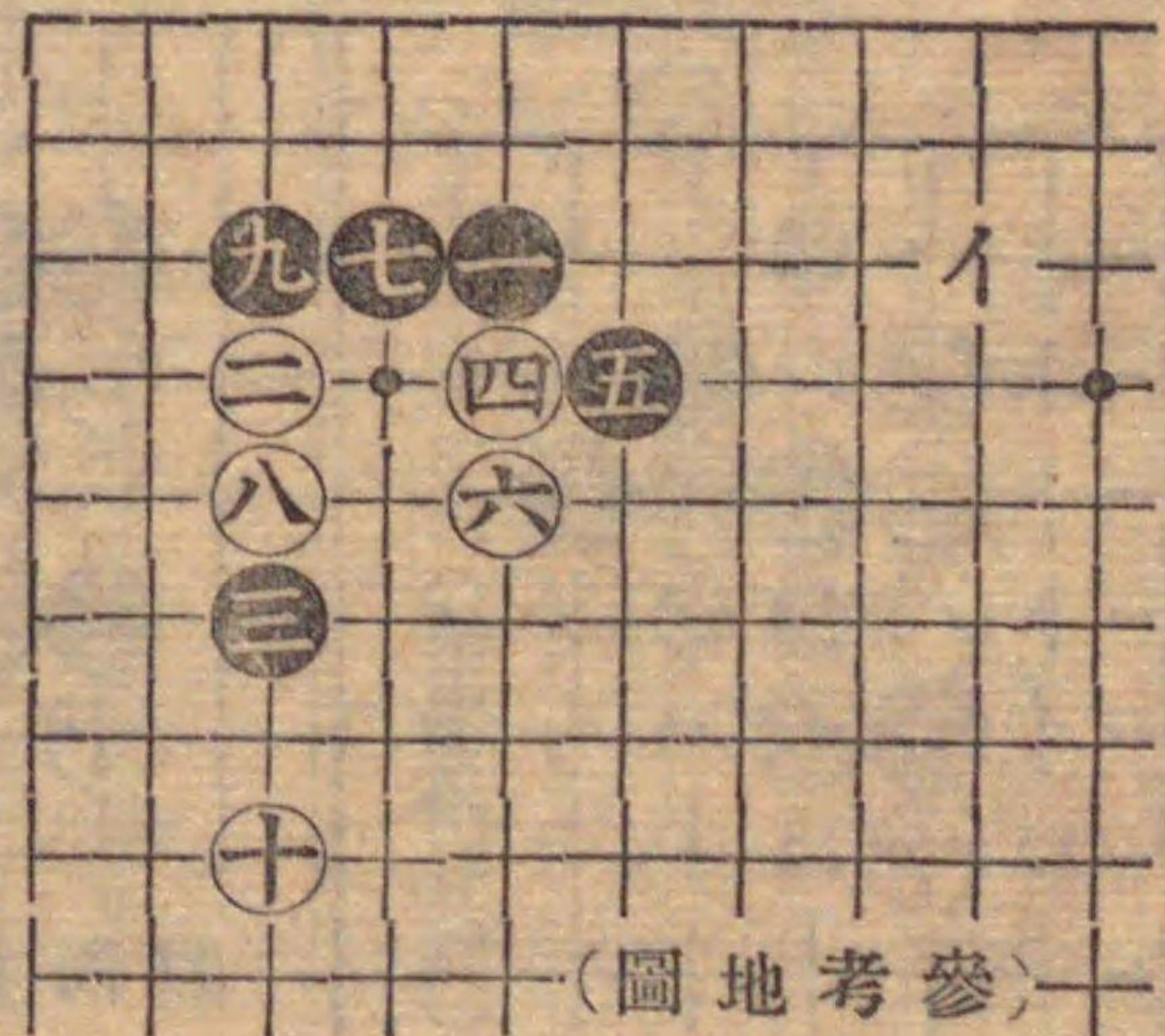
○(第參拾六圖) 黒が九と決メツケた時、白は⊙とアテずに單に十と上からアテてもよいのである。
 黒が十一と下り犠牲子を二子として、由つて以つて白を牽制し、十三のアテを利かし、十五、十七の二着を先手で利かしたのは、常用の型ではあるが一種の手筋である。

△(參考地圖) 白六の行びは考ふべき手である、既に白が六と行びた以上は、黒七の行び、白八のツキアタリ、黒九の押へ、白十の夾は論のない手順であるが、此く運ぶの可否は主として上側の布石關係から打算しなければならぬ、上側(イ)の邊に白あれば、一以下九に至る黒の堅固に接近する(イ)の白は不利を蒙る道理になる、

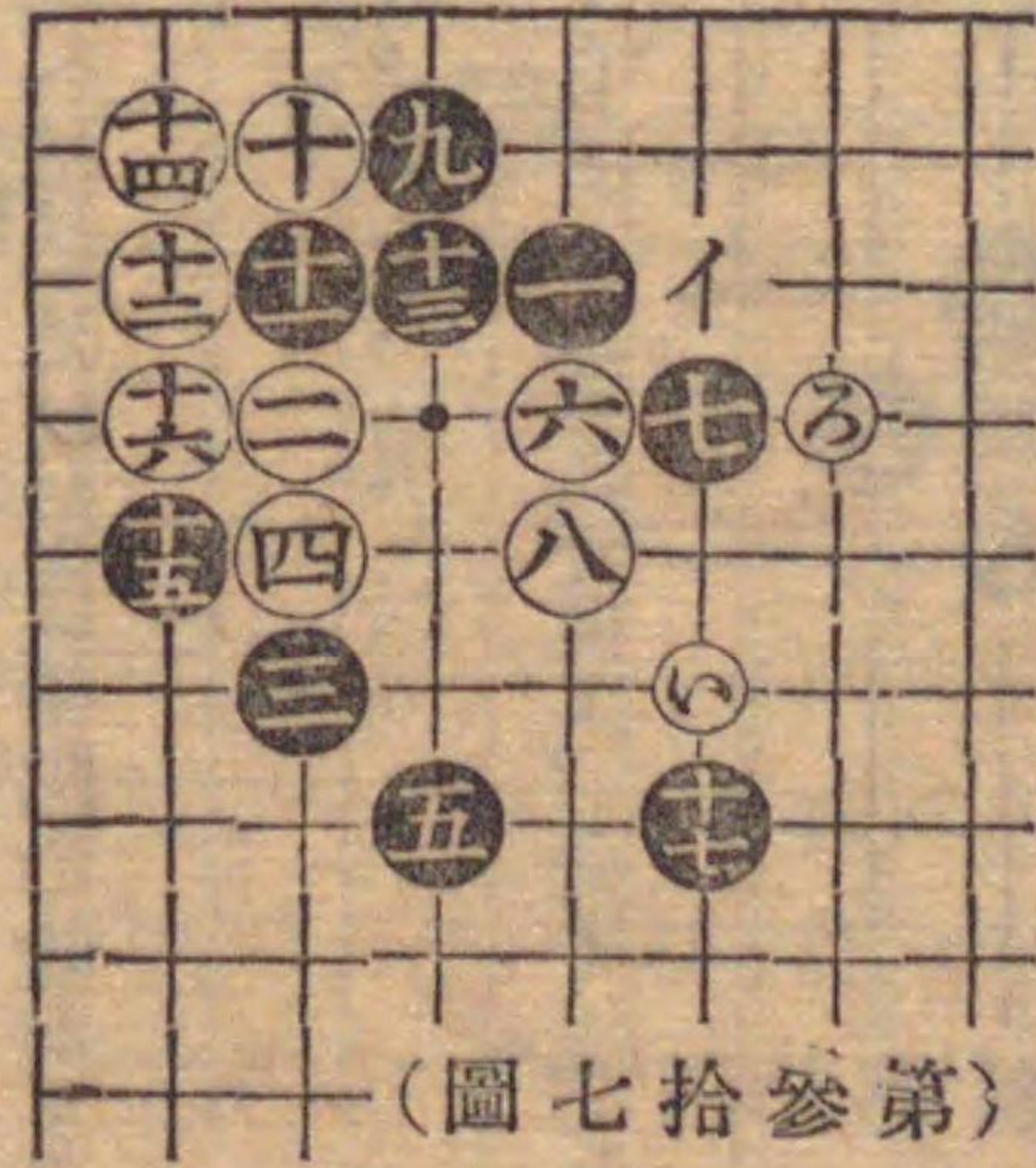
又(イ)に黒がありとすれば一以下の黒が堅固になるだけ(イ)の黒と勢力重複するから黒不利と言はなければならぬ。



(第參拾六圖)



(圖地考參)

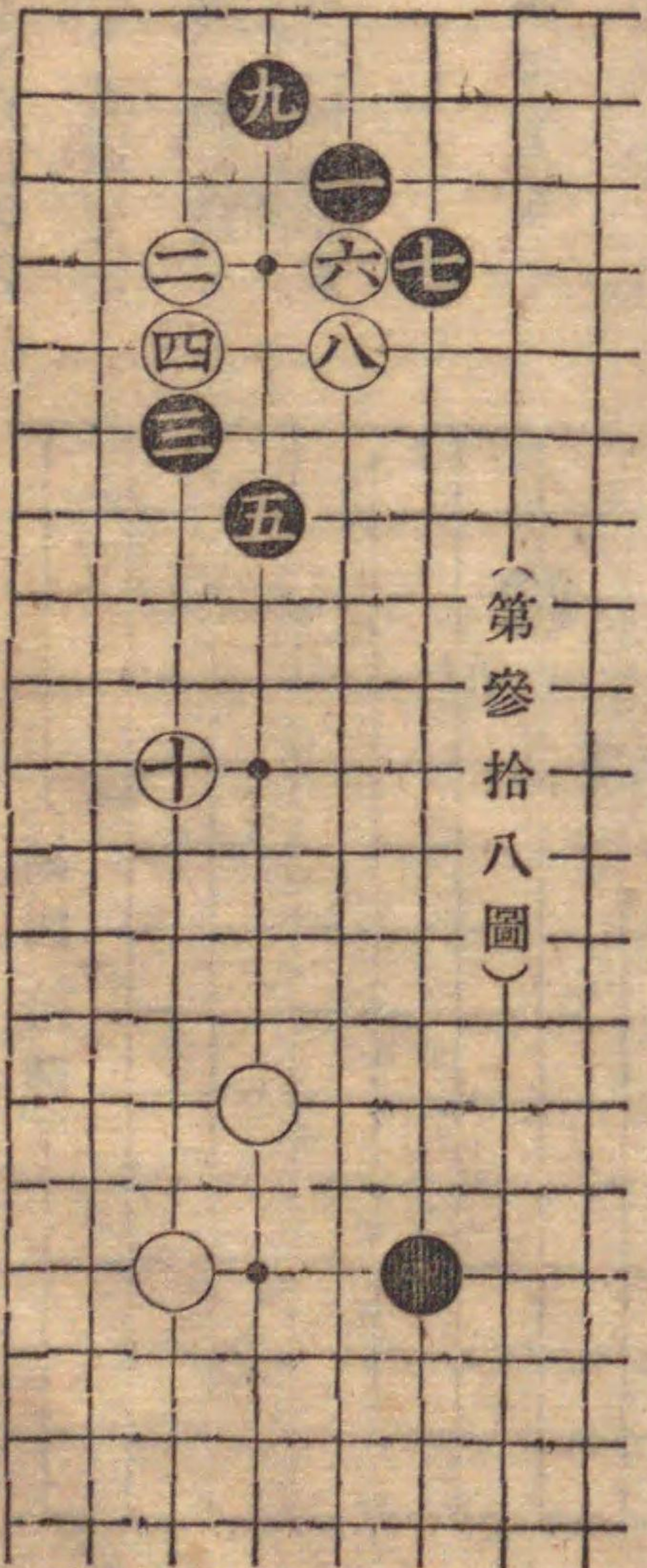


(圖七拾參第)

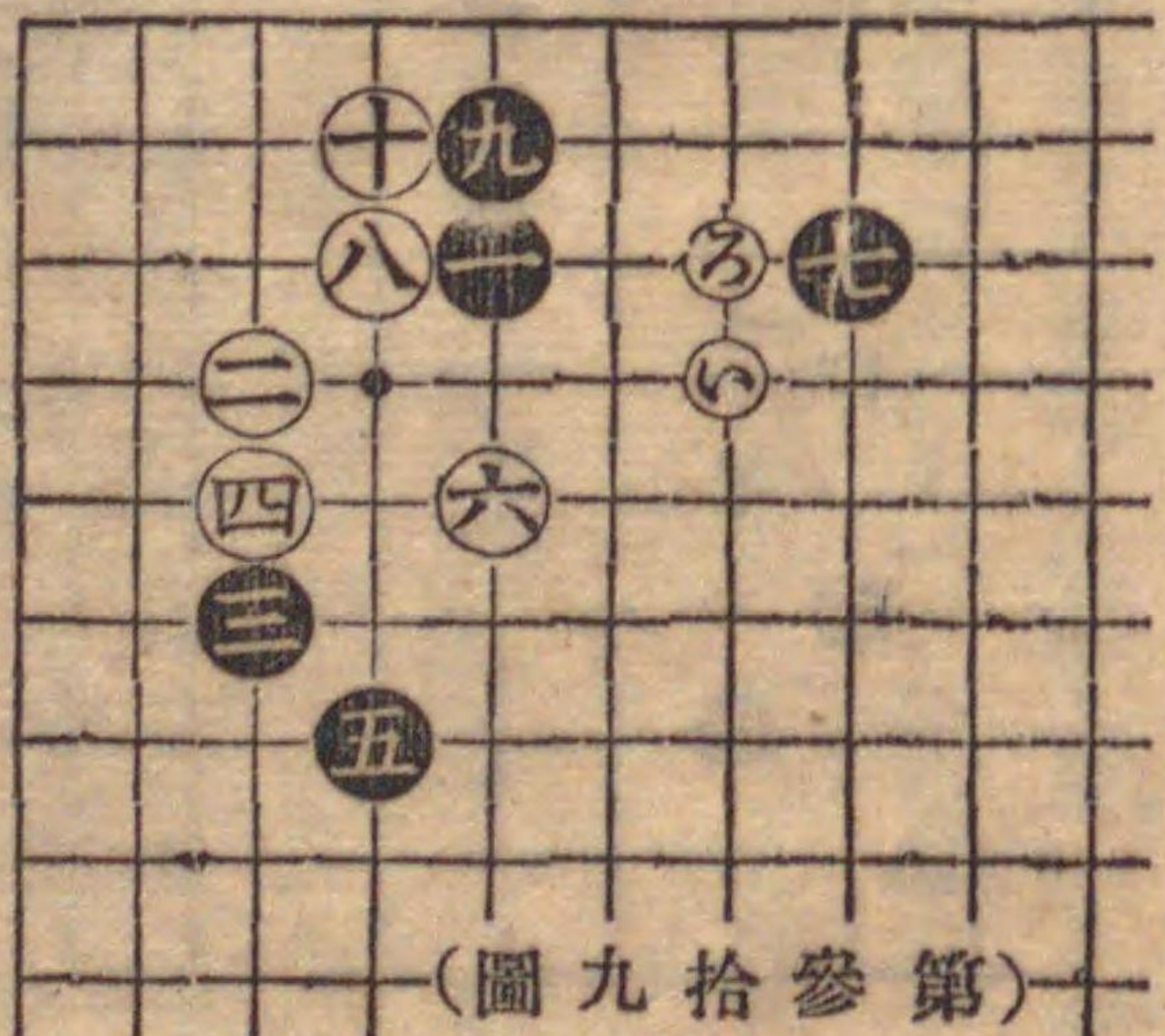
○(第參拾七圖) 白四のツキアタリに對し、黒が五と尖んだのは軽い應手である、黒九の尖は(イ)の截を拒ぎ、十三の點への行をハタラカし、兼て十一に尖つて白の眼を奪はうといふ手である。白十の頂は上側黒の根據を奪うて隅を治まる手である、黒十五は先手で白の眼形を奪つたのである、白は十八の手で(イ)の截りを覗つて、⊙と尖頂けるかと夾むかである。

○(第參拾八圖) 單に局部としては前圖が良い、然し左下隅方面に圖の如き布石あれば、其の布石との關係上、白は十の手で此く左側星下から詰めて三、五の二子に迫り、左側の地域を形造くるが良い。

○(第參拾九圖) 白六は⊙の掛若くは⊙の夾を見た手である。場合問題に關せず、本圖の如き相互の應接も亦要領を得て居る、即ち白六の飛に對し黒が堅固に七と二間拓し、白八の尖頂に對し、黒九と下り、白亦十と押へたのは孰れも堅實である。



(第參拾八圖)



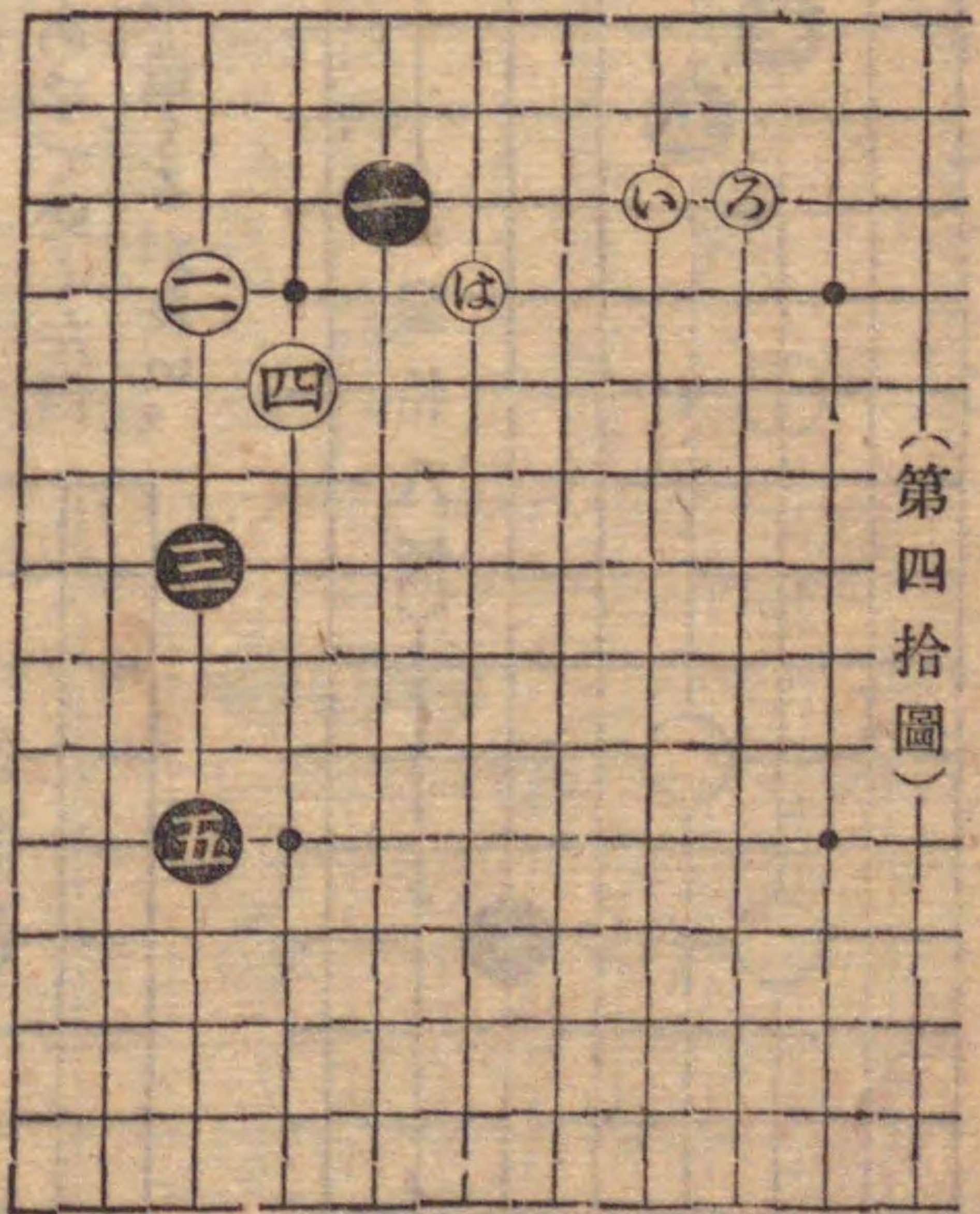
(圖九拾參第)

(石定先互)

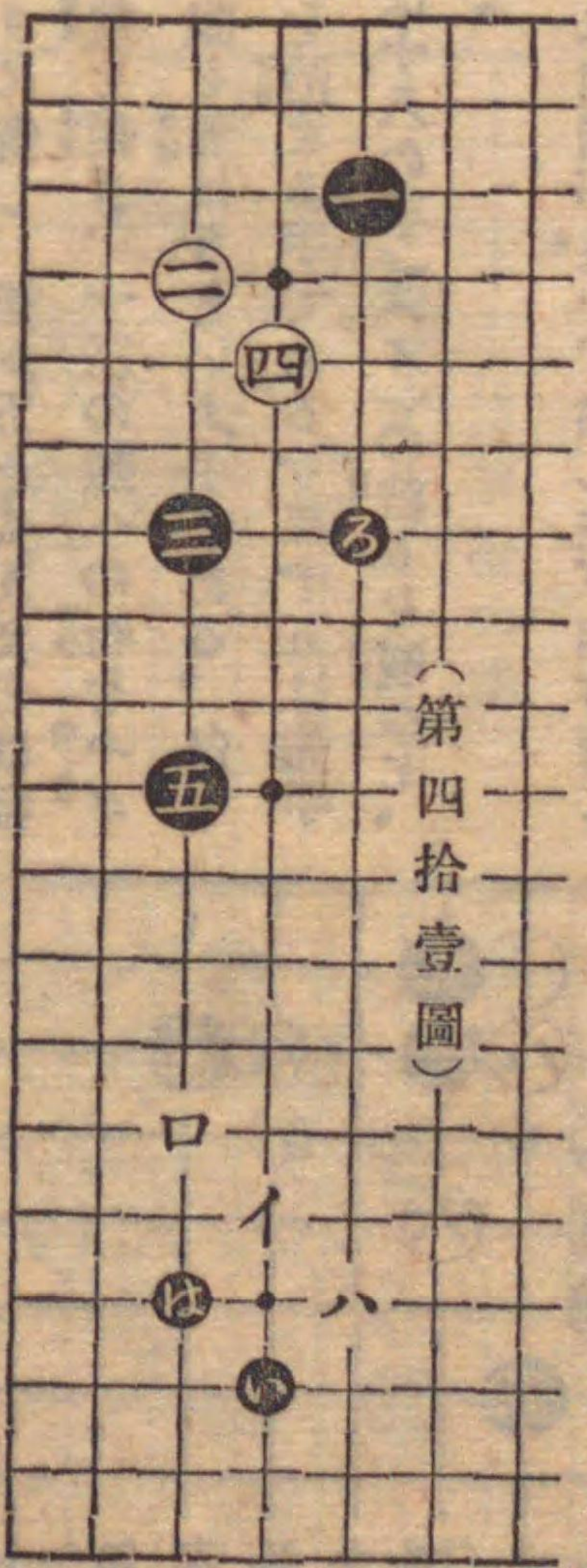
○(第四拾圖) 黒三の二間夾に應じて白は四と尖むより外はない、黒五の二間拓も普通である、次で白は手抜するが常であるが、若し玆を打つとすれば、③の二間夾か、④の三間夾か或は、⑤の掛けか、である。

○(第四拾壹圖) 左下隅布石の關係によりては、黒は五の着點を變ずる必要もある、若し左下隅に(ロ)の大斜走縮でも行はれてある様な場合は此の(ロ)と黒五とは孰れも姿勢が低くて調和せぬから黒は五の手で(イ)と一間に立つのもよし。

然し左下隅布石が(イ)若くは(ハ)の一間高縮ならば、此く五と二間に拓いて居て差支ないのである。



(第四拾圖)

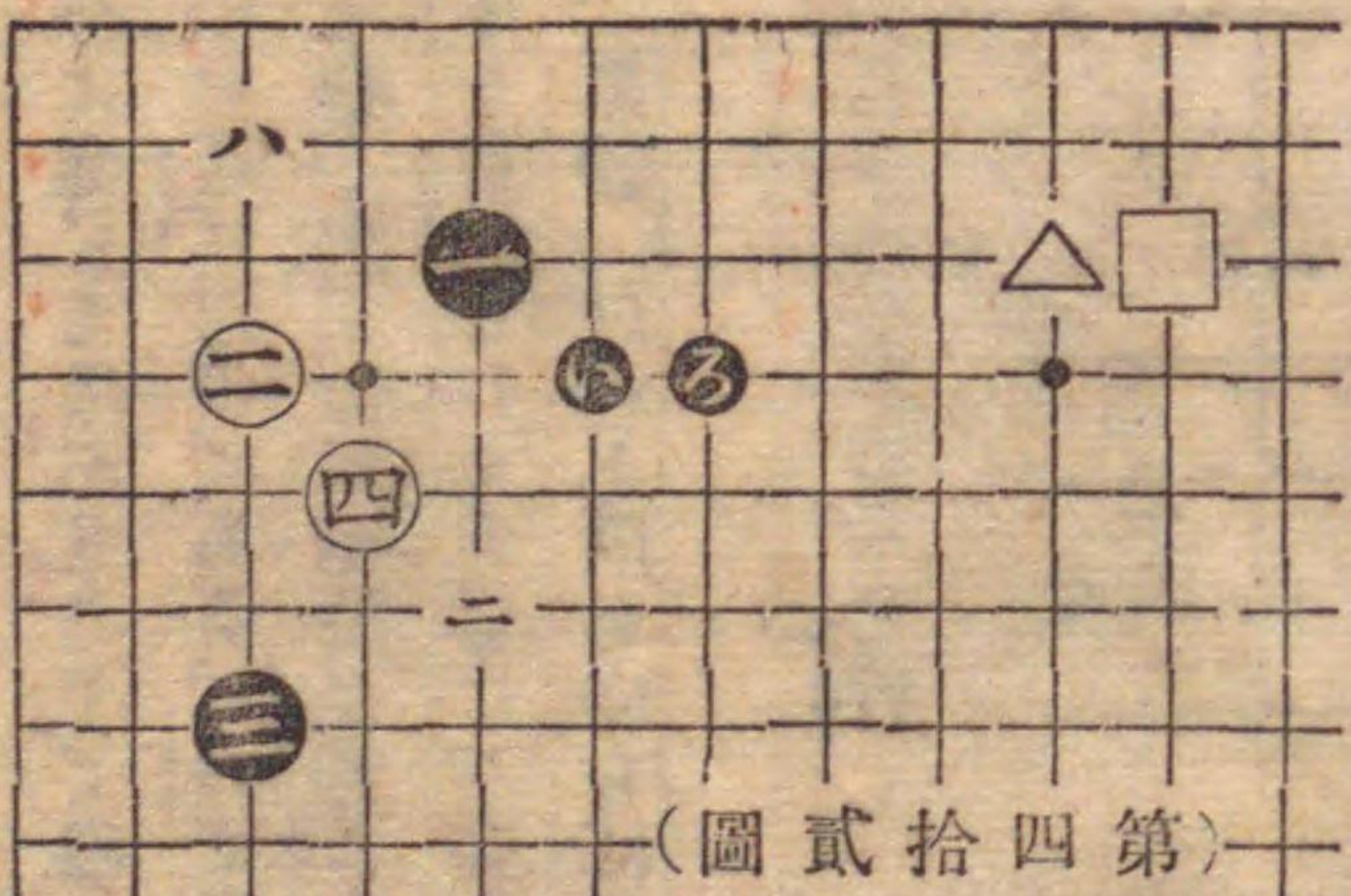


(第四拾壹圖)

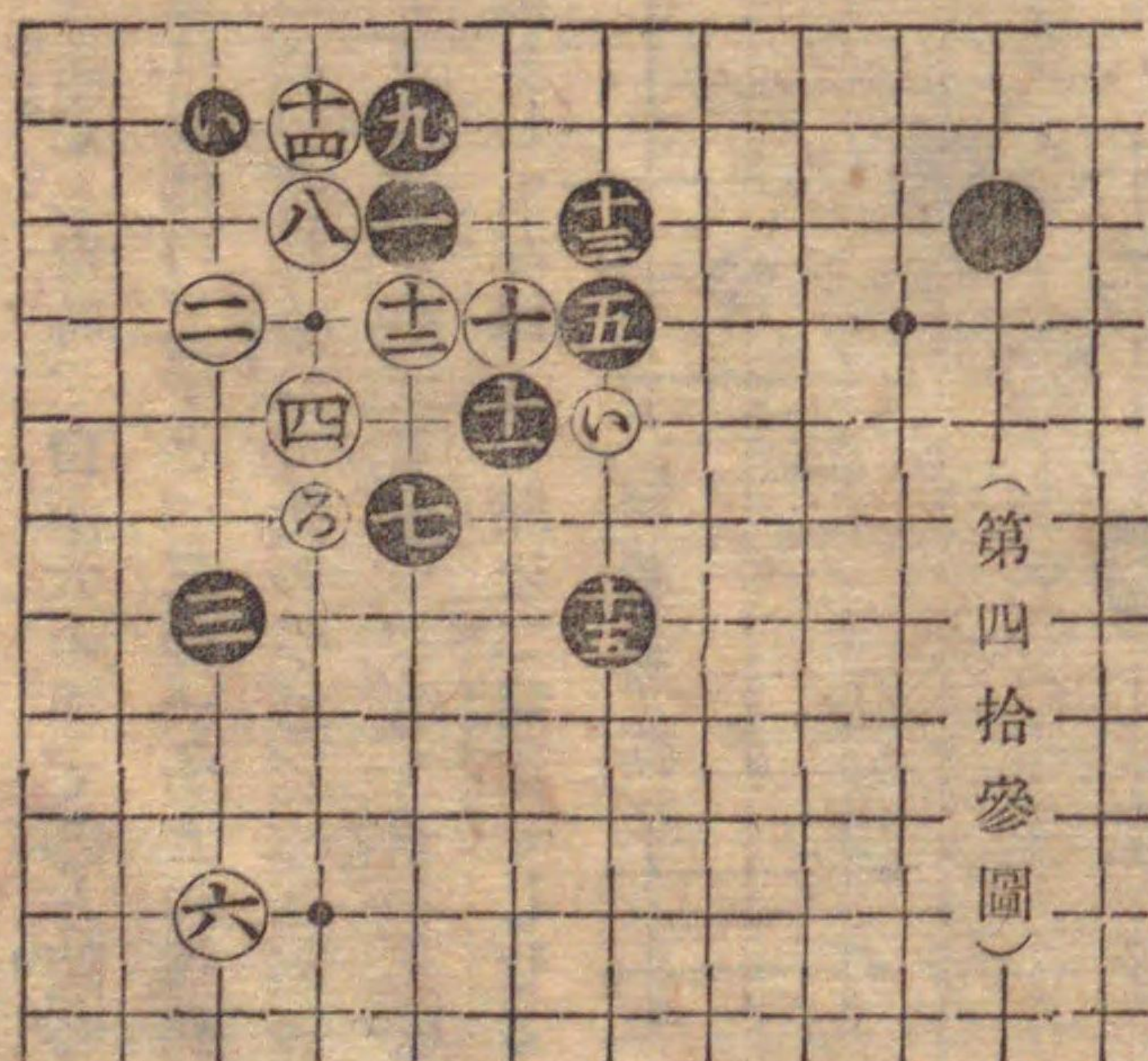
○(第四拾貳圖) 黒五の手は、上側布石の關係によりては、左側を手抜して(イ)若くは(ハ)と備へる事もある、即ち△印に黒あらば(イ)と打つ可く、□印に黒あらば(ハ)と圍ふがよい、此の(イ)若くは(ハ)と打つた手には、單に上側の我地を圍ふといふばかりではなく、左上の白に對して(ハ)と隅から根據を侵すか、或は(ニ)と上から閉鎖しやうか、といふ意を含んで居る。

○(第四拾參圖) 上側の布石關係により黒が五と斜走し、白が手抜して六と左側星下から迫つたならば、黒は七と打ち二、四の白の出路を鎖すがよい、次で白八以下十四迄は普通の應接である。黒十五は③の截りと④の出とに備へたのである。

本圖黒七以下の手順は左側星下に六の白一子あるものと前提しての運びである、が若し白六の詰めがないとすれば黒は七の手で(イ)と隅へ走り、白に七の點に尖ませて黒は六の點に二間拓す可きである。



(圖貳拾四第)

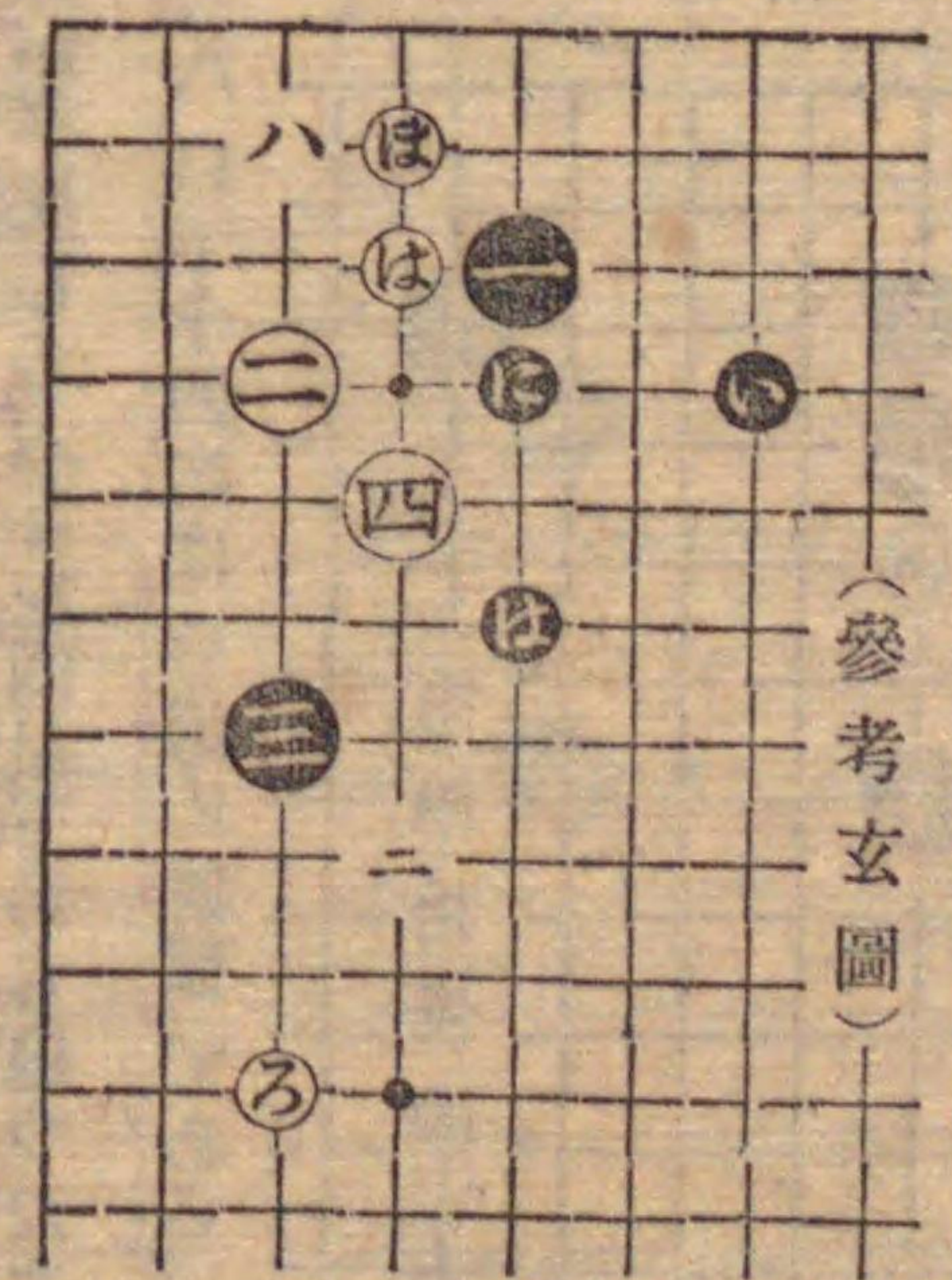
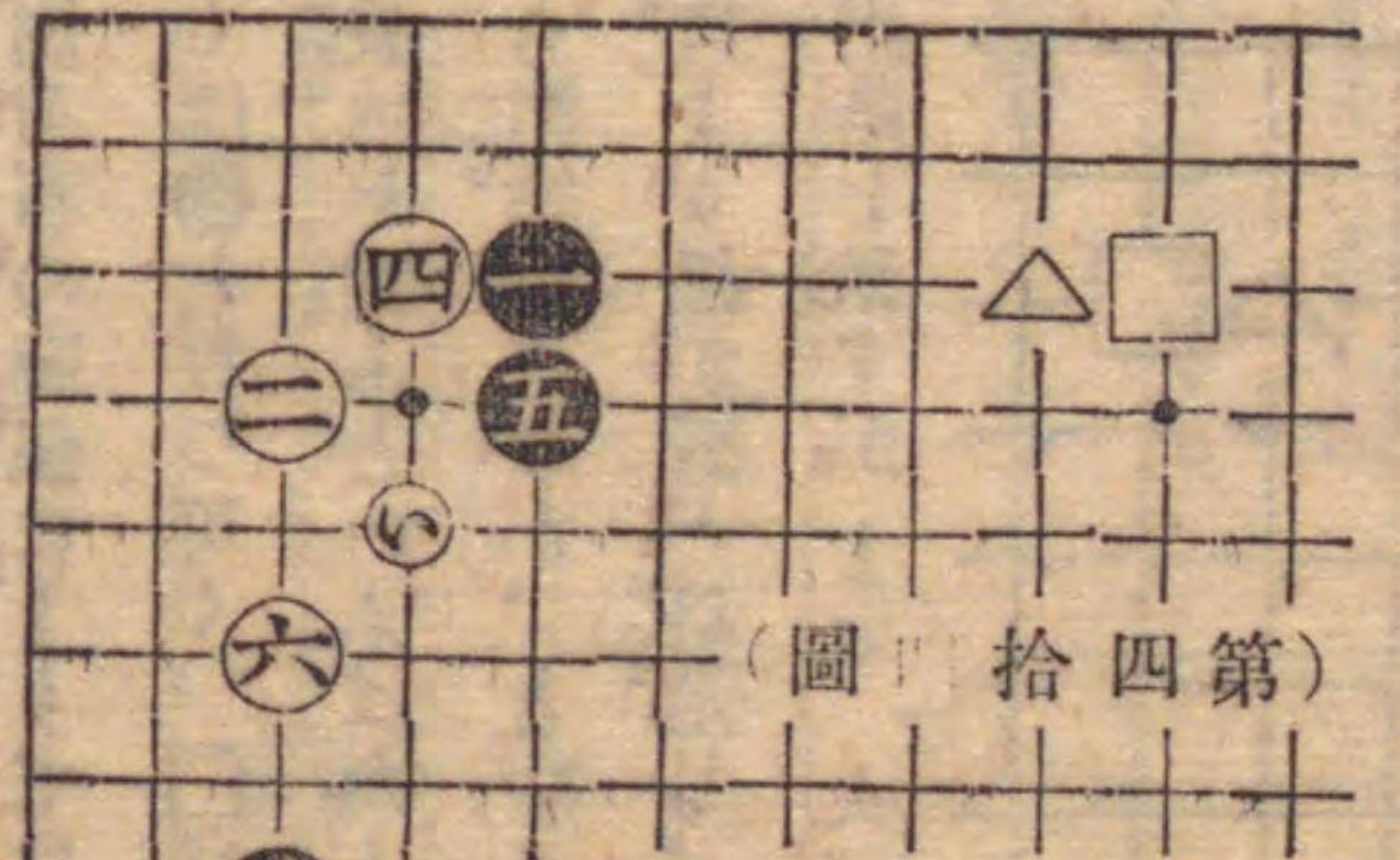


(第四拾參圖)

△(参考玄圖) 前圖上側布石の場合に應じて黒が五の手で●と斜走した時、白が六の手で○と詰めるのは黒に此の點へ二間拓されるのを妨げたのである、乃て黒は上側の三子と、三の一子との連絡を兼ねて、白を一隅に封鎖する爲め●と圍ふのが要訣であるのに、若し誤つて此の手で(○)と隅に走らば忽ち白に(○)の點に三の一子を封鎖されて非常に不利を蒙らなければならぬ、若又最初黒の時白が○と詰めず(○)と尖頂け、黒●、白○と隅を守らば黒をして左側の點に二間拓せしむるは見易き道理である。

○(第四拾四圖) 黒三の趣向は圖の如き布石が左下に行はれてある場合、白二から○と尖ませて●と拓き兼ねて左下の白を三間夾にしやうといふ策である、白は四、尖頂け五と立たして六と治まつておくがよい。

上側△印に白ある場合若くは黒が△印□印邊にある場合に於ても尙且つ四と尖頂け五と立たして六と一間飛する手段がよいのである。

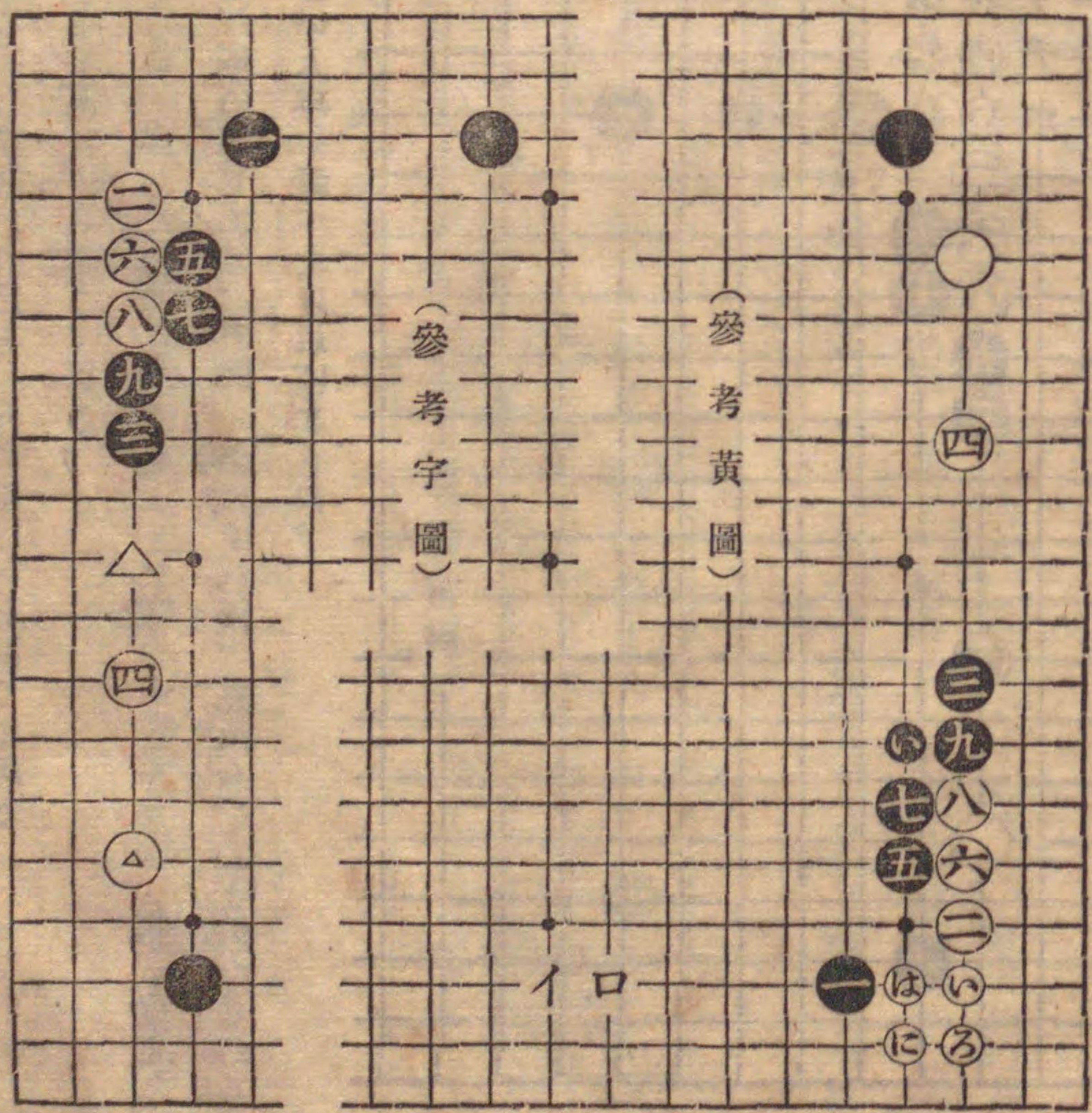


△(参考黄圖) 右上隅に圖の如き黒白の布石があり、且つ下側に(イ)若くは(ロ)の黒ある時は、白四を手抜して此く右側を二間する事もある、次で黒五の掛けに應じ白は六、八と行ひ、十の手を以つて○、○、○の三點の孰れかを擇んで治まつておくがよい。

「注」 黒九を●と緩めた時は白は○と走るがよい。

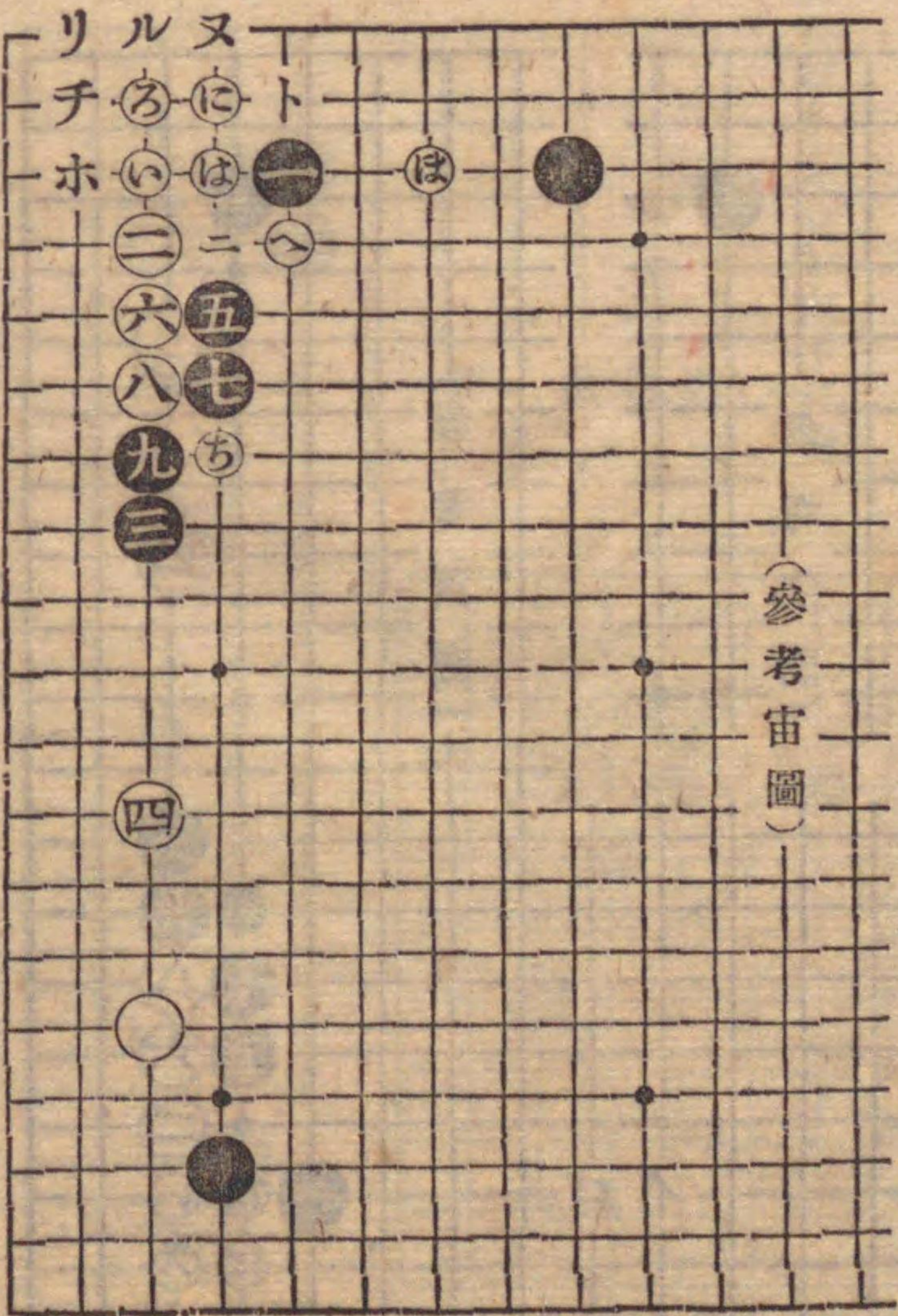
△(参考字圖) 要するに黒三が三間夾である爲め、隅の白二に與ふる感じが多少緩んで居る故此く四と打つ手も行はれる。

若し黒三が九の點に二間夾であれば、次で黒が二間拓する星下△印の一子が、左下の△印白に與ふる感じの緩慢なると、九の點の二間夾が左上白二に及ぼす感じの酷しいのと、此の二つの關係上、白は必ず左上二の一子からして動かねばならぬ。



(石定先互)

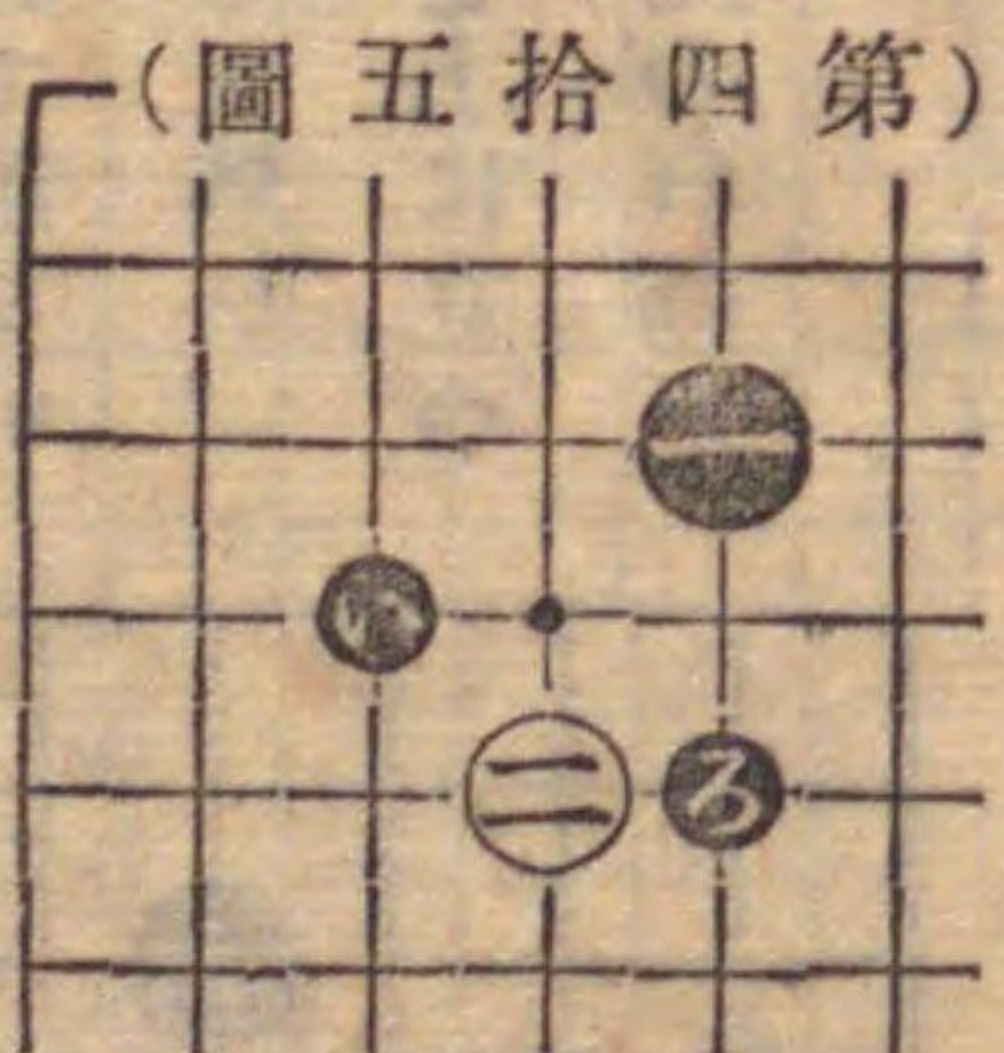
○(参考宙圖) 白が十の手で⑤と下る手には⑥の打込と、⑦の頂けとを覗つて居る。
 又⑧と飛ぶ手には⑨の上頂けと(ト)の下頂けとを覗うて居る。
 又⑩の尖頂けは、黒(ト)白⑩と運んだ後、⑪の縛出しと⑫の截りとを覗つて居る。「但し⑬の截は今直ではない⑭と縛出し黒(ニ)と截つた後の事である。『若⑮と斜走すれば、黒から(ト)と抑へられるか或は⑯の點に頂け越されるか、といふ事を考へなければならぬ。』
 乃ち白十の手で⑰の時黒に⑱の點に頂け越されると、白⑲、黒(ニ)白(ホ)黒(ト)白⑳と運び外部を先手で封鎖されて何等の意味も無い事になる。又白㉑の時、黒が(ト)と押せば白手抜であるが後に黒が㉒の一子を㉓と夾み、白(チ)黒(リ)白㉔黒(ヌ)白(ル)となつて劫争の結果となるのである。



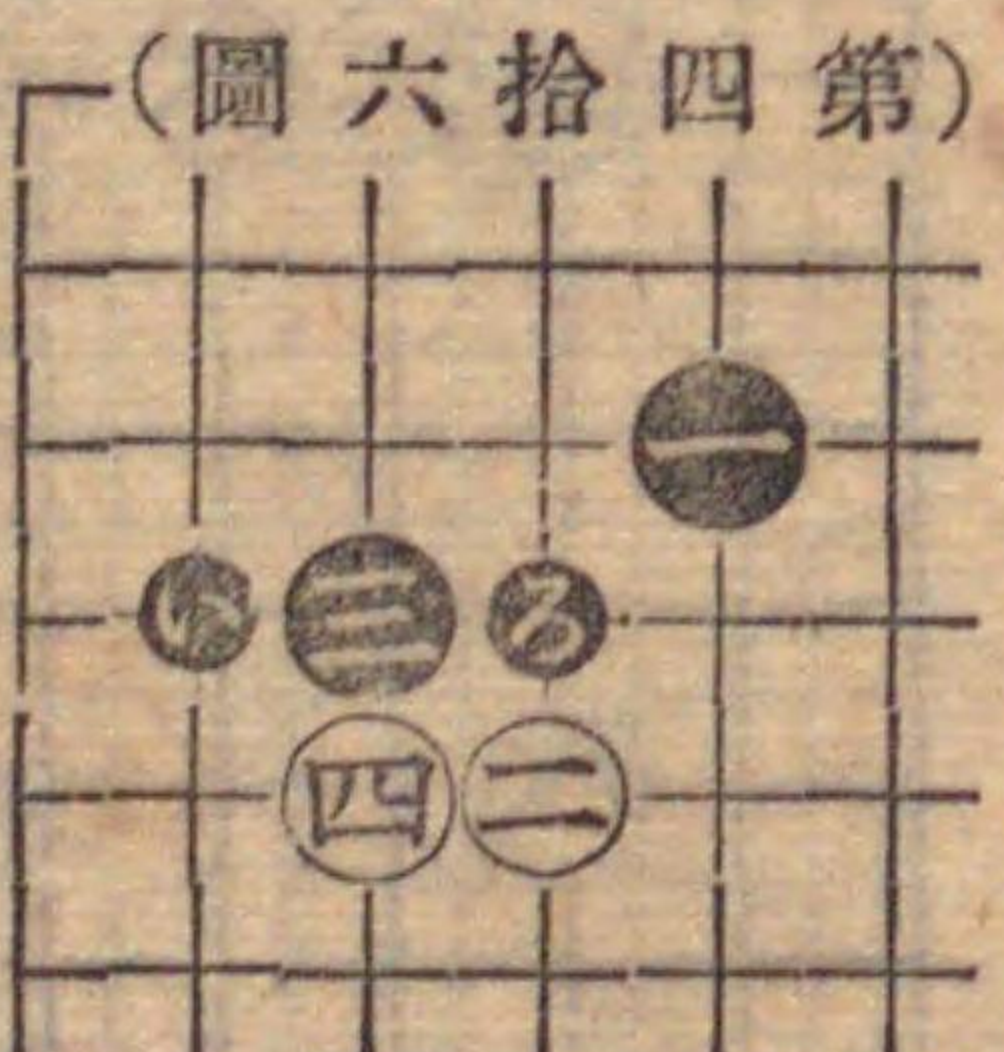
(参考宙圖)

「白二二の高掛」 (タカガカリ)

○(第四拾五圖) 白二の高掛りは局面の布石關係により策戦を含んで打つ手であつて、單に此の一局部としては不利である、黒三は④と隅の實利を占めるが普通で、趣向としては或は⑤と頂ける。
 ○(第四拾六圖) 黒三に應じ白の四と押すのは論の無い手であるが、黒は⑥と下るか、⑦と押すかである、⑧は普通の手であるが⑨は多少策を含んでをる。
 ○(第四拾七圖) 白が六と三間に拓くのは普通の手である、若し手抜して他に打つとせば、何等か他の布石關係によるものと見なければならぬ。
 又隣隅即ち左下隅の布石關係によりては、六の着點を一路進めて⑩に若くは⑪に打つ事もある、左下隅に白(イ)黒(ロ)の布石があれば白六は⑫がよ。
 又黒(ハ)(ニ)の大斜走の時白六を⑬と四間してもよ。
 又黒の締りが(イ)(ロ)若くは(イ)(ホ)とある場合は、圖の如く六と三間拓で良。



(第四拾六圖)



(第四拾七圖)



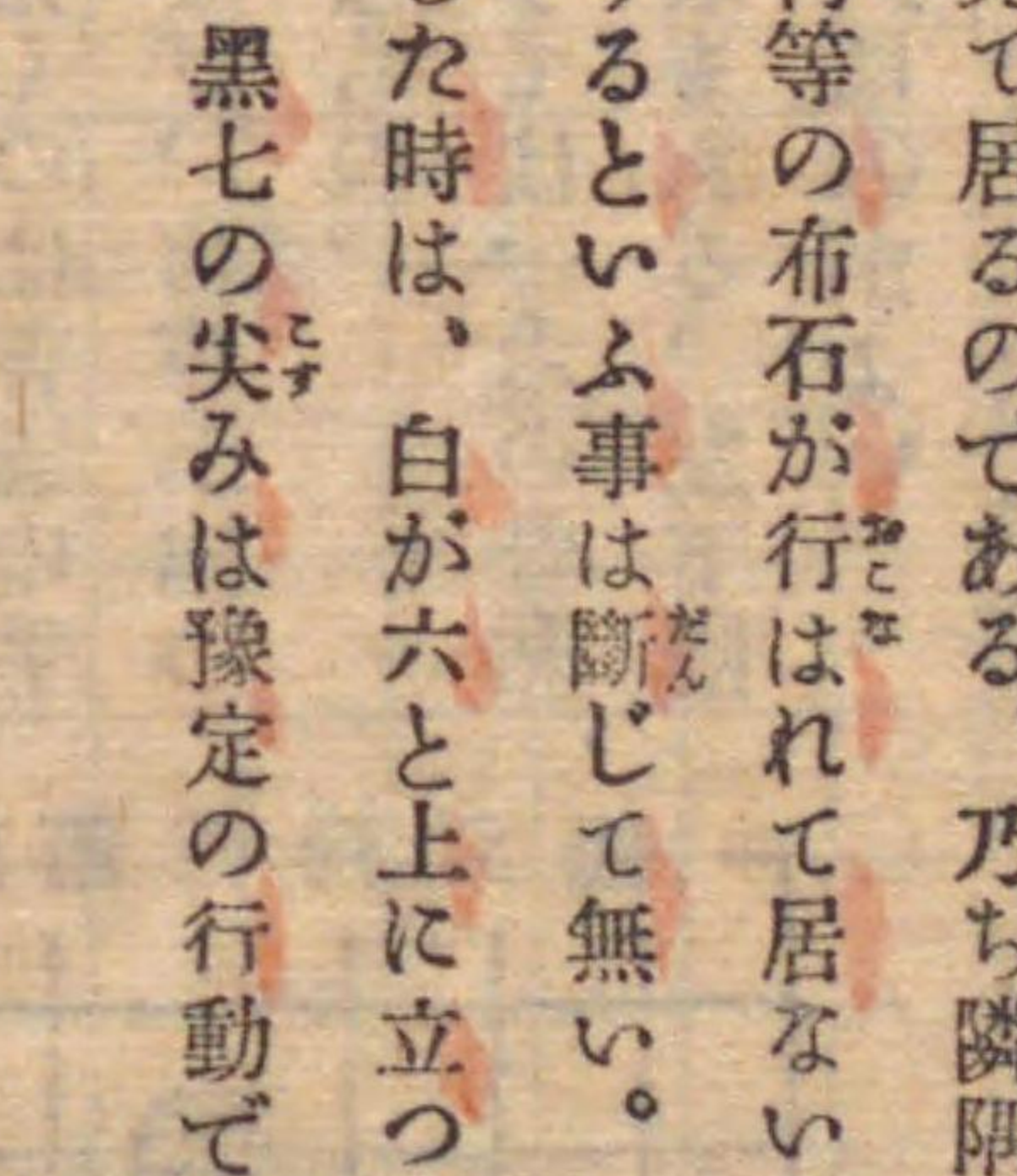
白二の着点
三種外の手抜

白六ノ手技
場合

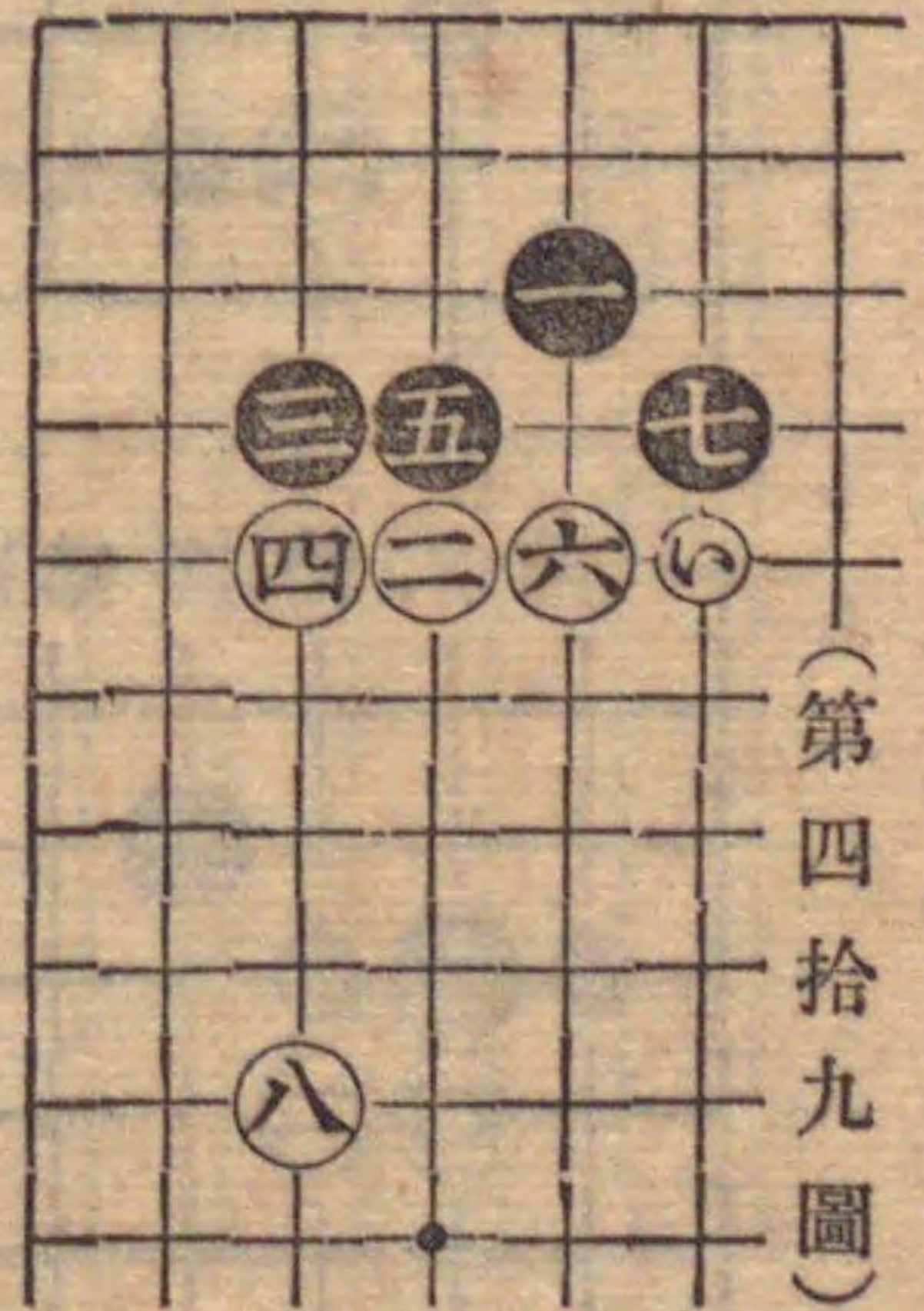
白六ノ手二種

○(第四拾八圖) 白が六の手を前圖の如く三間拓せずには如何なる場合かと言へば、隣隅即ち左下隅に何等布石の行はれて居ない場合に㊦と先鞭を着ける時、若くは既に㊦に先着の白ある場合である、㊦と先着の白ある際、白手技の理由は、若し黒が㊦と掛つて来たならば㊨と夾まうといふ策である、若又黒が㊦と掛からず(イ)若くは(ロ)の點から來れば、白は(ハ)の點に大斜して居やうといふ、此の兩つの打方を見て居るのである、乃ち隣隅(左下隅)が開放されてあつて未だ何等の布石が行はれて居ない時は、白は六の手を(イ)に三間拓するといふ事は斷じて無い。

○(第四拾九圖) 黒が五と上へ押した時は、白が六と上に立つのは普通で或は㊦と飛ぶ手もある。黒七の尖みは豫定の行動である、即ち白六を誘致して玆に調子を造り、七の尖みを以て上側を厚壯ならしめたのである、白八の三間拓之亦普通の着手である、趣向によつては手技して他に着手する事もある。



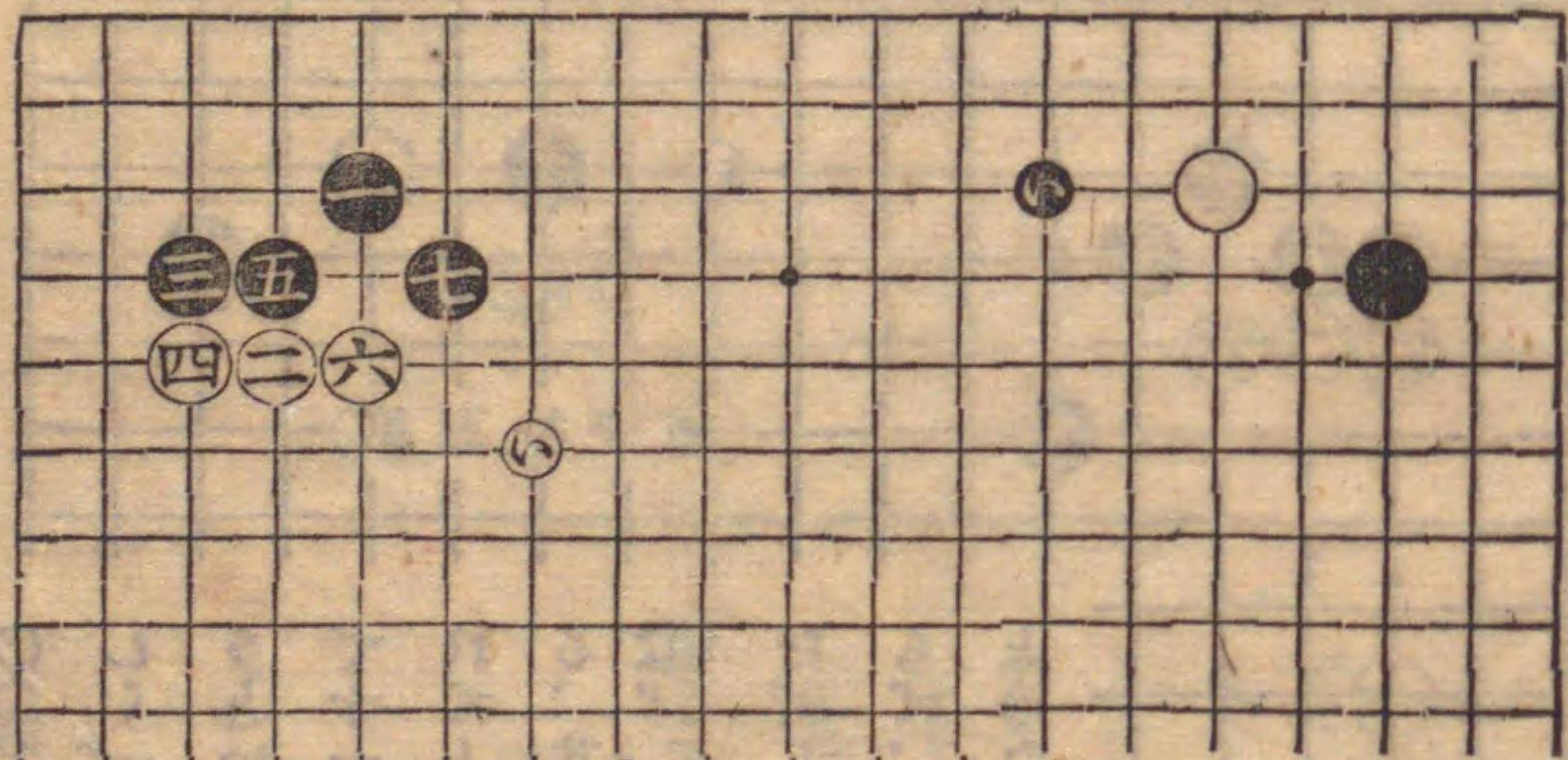
(第四拾八圖)



(第四拾九圖)

○(第五拾圖) 右上隅に圖の如き黒白の布石が行はれて居る際は、黒は趣向として五と押し、㊦の間夾を含んで七の尖みを行ふのもよい、次で白は㊦と斜走し、左側黒に備へると同時に、上側を窺ふ可きか、或は㊦と打つて左下隅の要地を占む可きかは考ふ可き所である。

「註」 前の第四拾七圖の場合に在つても黒は尖んで上側を手厚くしたい處である、然し彼の場合に於て尖むとすれば、一手後くれる事となる、其故五と上へ押して、七の尖



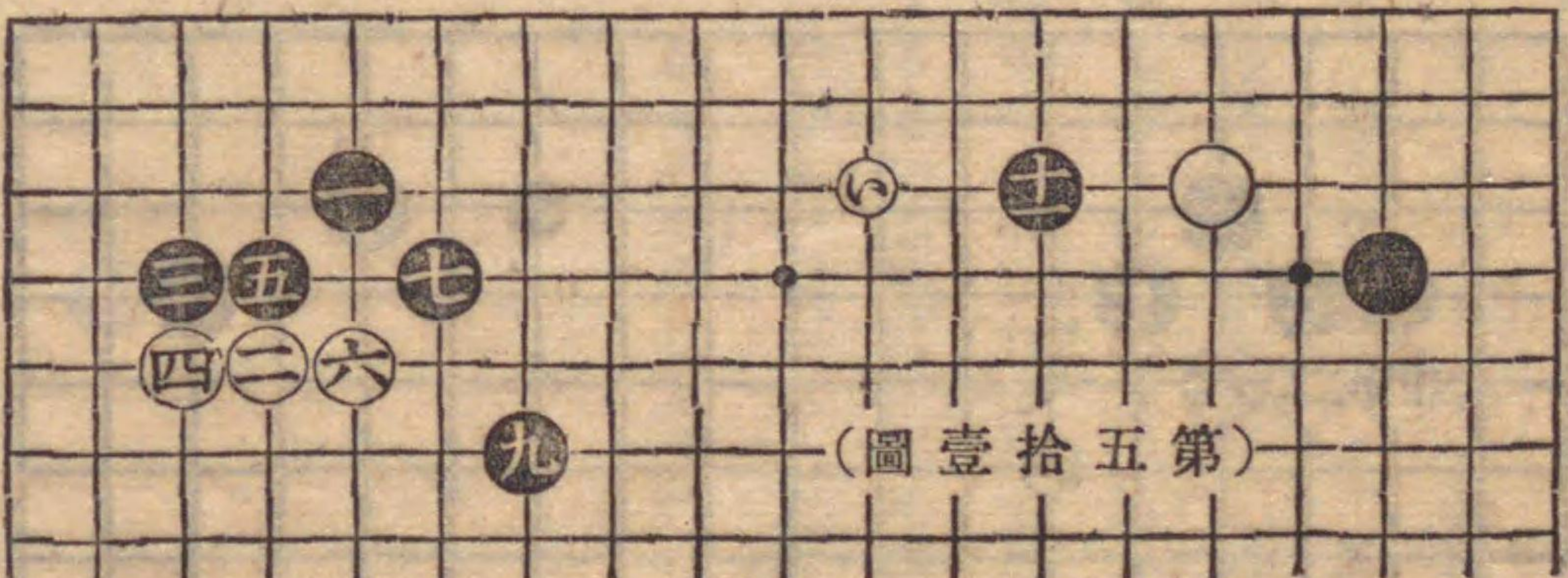
(第五拾圖)

に先鞭を着けたのである、然しながら白も亦、四、二、六と三子の勢力を加へてをるだけ第四拾七圖に比して稍優秀と言はねばならぬ。

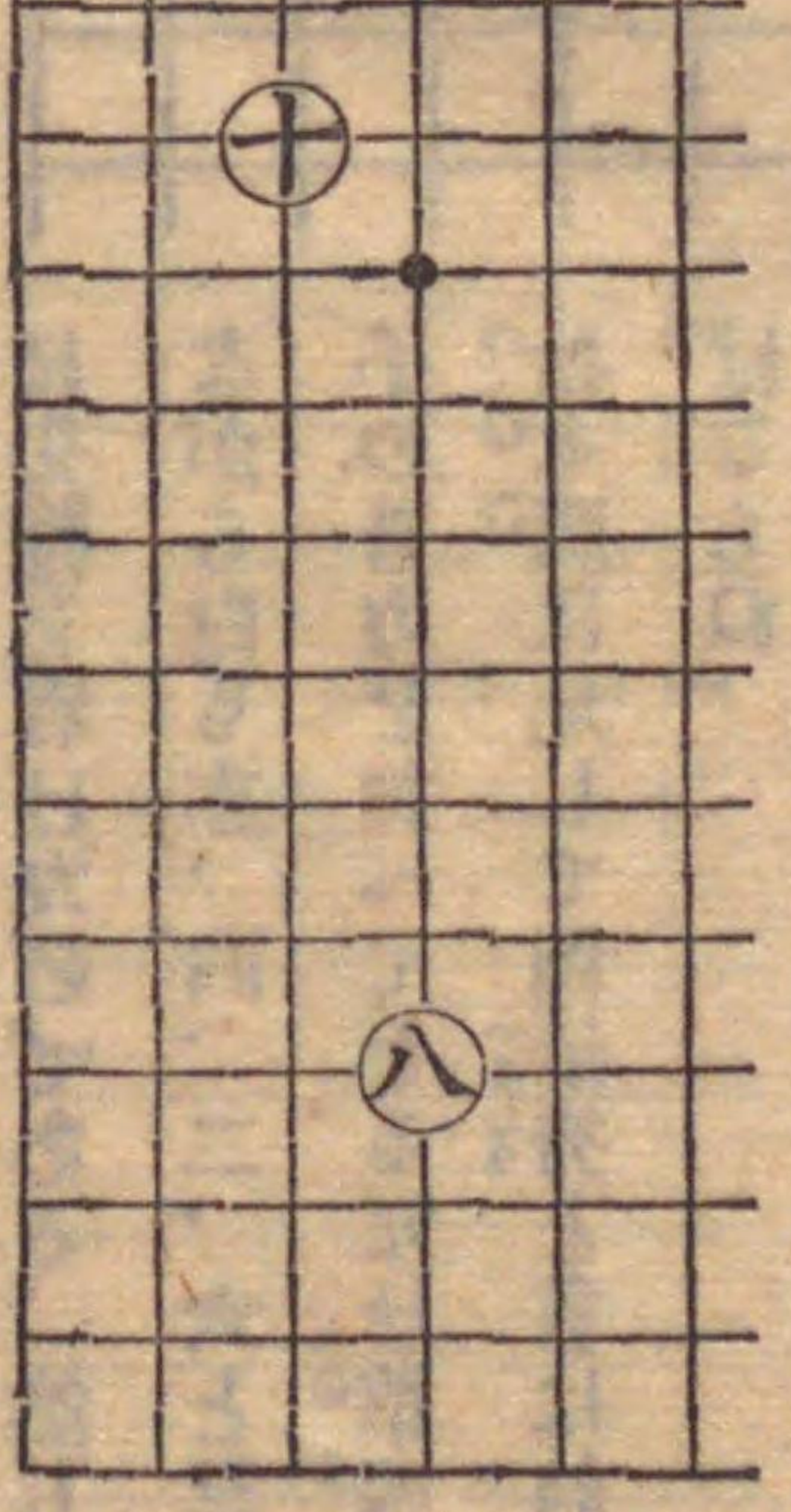
六ノ形手
七、ハノ打方

黒九ノ手并
ニ應手

○(第五拾貳圖) 白六「新らし
い形」の一間飛は、黒五の策を
幾分破つて②の尖を妨げたので
ある、黒は七と斜走するより外
はない、白八は形勝の雄大を占
めた手である。
黒九の手は③と夾むか、(イ)の
點に押すか、或は手拔するかは
不明である、黒若し③と夾まば、
白は(イ)と押し黒(ロ)白(ハ)黒
(ニ)と極力黒を上側に壓す可き
は無論である。
若又黒が(イ)と押せば、白は手
抜して上側を④と三間に拓いて
あげばよ。

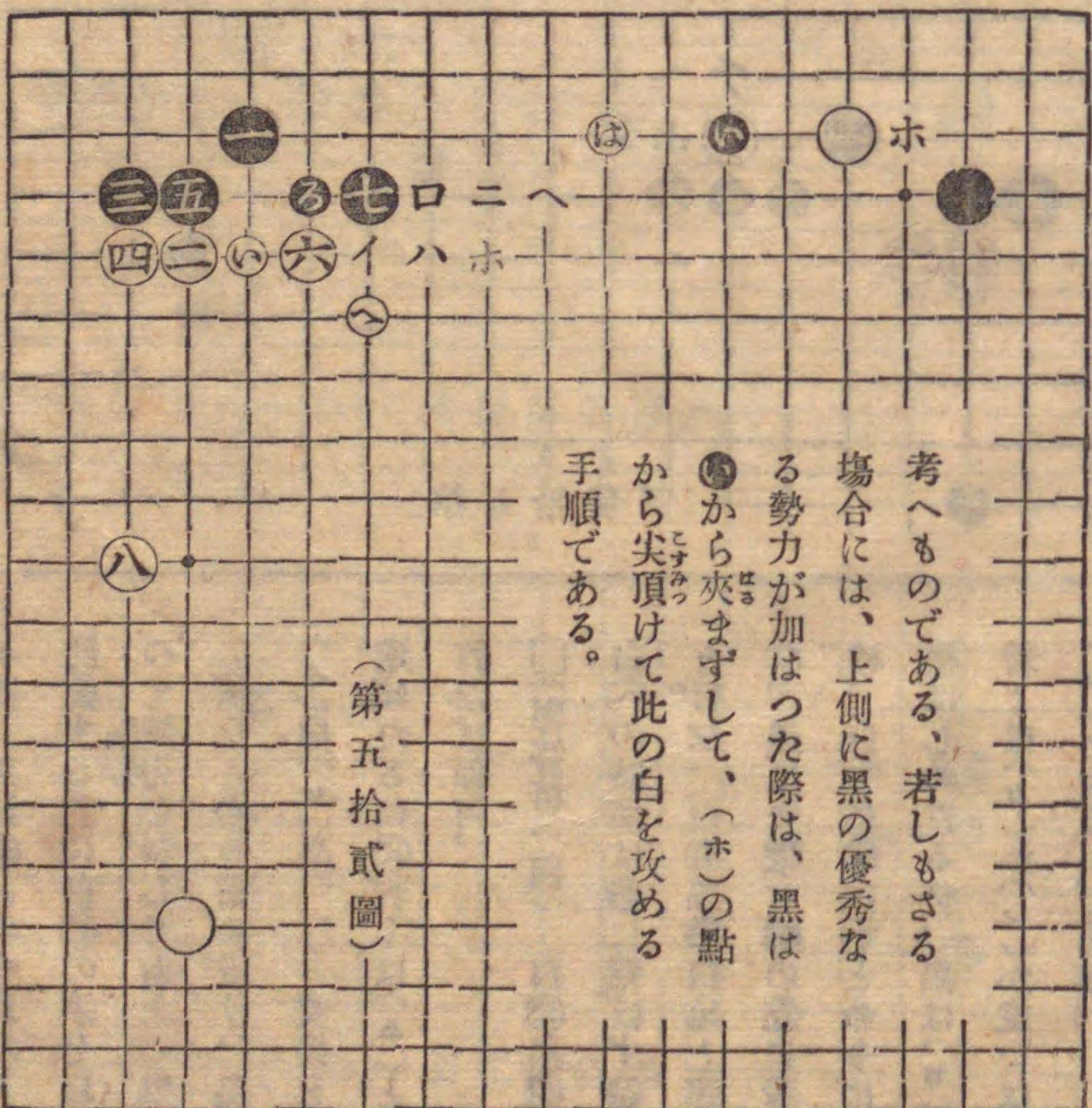


○(第五拾壹圖) 黒七は右上の白を烈
しく「一間夾に(十一の點に)夾撃しや
うといふ意である、然し露骨に九の手
で十一の點に夾むと白に九の點に臨ま
れて上側の宏壯を削られるの懼があ
る、其故先づ九と走り、左側の白地を
窺うて白の應手を問うたのである。
白若し十の手で上側⑩の點に備へたな
らば、黒は左側十の點より迫つて左
上の白三子を攻めるがよ。



前圖白六の手で⑥と行ひ、黒七
を⑦と尖んだ形の際、黒が右上
の白を⑧と一間に夾んだとし
て、次で白が⑨と斜走に臨んだ
場合と、本圖の如く白六、黒七
の後、黒⑩の夾に對し白が(イ)
(ハ)と押すのと、孰れが優つて
居るかといふと、勿論本圖の如
く(イ)(ハ)と押す方が白の有利
である。

「註」本圖黒九の手で(イ)に
押さるゝを嫌は、白は八の
手で(イ)(ハ)と押す手もあ
る、然し黒の⑩の夾がないに
拘はらず(イ)(ハ)と押すのは

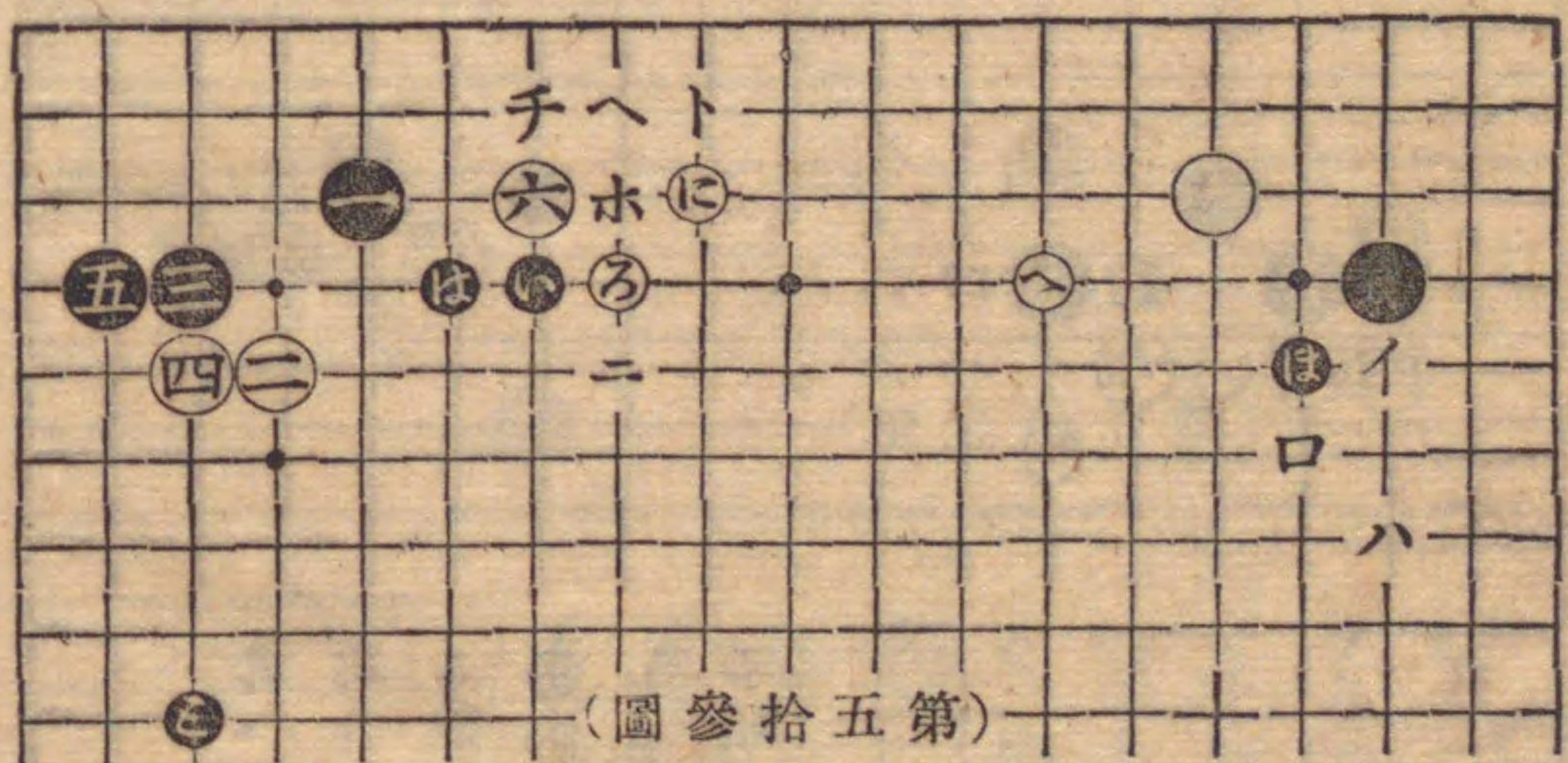


考へものである、若しもさる
場合には、上側に黒の優秀な
る勢力が加はつた際は、黒は
⑩から夾まずして、(ホ)の點
から尖頂けて此の白を攻める
手順である。

(第五拾貳圖)

白六、手
并、黒、産
し方

○(第五拾參圖) 場合により白は六の手を此く上側より夾んで打つ事もある、白六に對して黒は(ト)と頂け、白(ニ)、黒(ハ)の時、白が(ニ)と掛粘げば、黒は(ハ)と尖み、白に(ハ)と備へさせて(ニ)と左側から左上二子の白に迫る。
黒(ニ)白(ハ)の時、白が(ニ)と掛粘ぐ手を以つて(ニ)に行ければ黒は(ホ)と截る手を保留して(ニ)と尖むがよい、此の白(ニ)は左上の白二子に聲援を與ふる便宜はあるが、其の代り、黒に(ホ)と截られ、白(ニ)黒(ハ)白(ト)黒(チ)となる不利がある。



△問、黒に(ト)と尖まれ(ハ)と防備する前に白(ニ)の手を以つて機先を制して右上の黒を壓して(ニ)の點に掛け、黒(イ)白(ロ)黒(ハ)と交換を遂げたる後(ニ)若くは(ニ)と打たば如何。
□(應答第一圖) 白(ニ)黒(ハ)白(ハ)の時黒は(ハ)に飛ばず(ニ)と行び、白(ハ)黒(ニ)白(ハ)と運び、黒は先鞭を(ハ)の點に着け、白(ハ)黒(ニ)白(ハ)と命令に従はしめたる後、黒は(ヨ)若くは(タ)か(レ)か或いは(ソ)と走るかである。

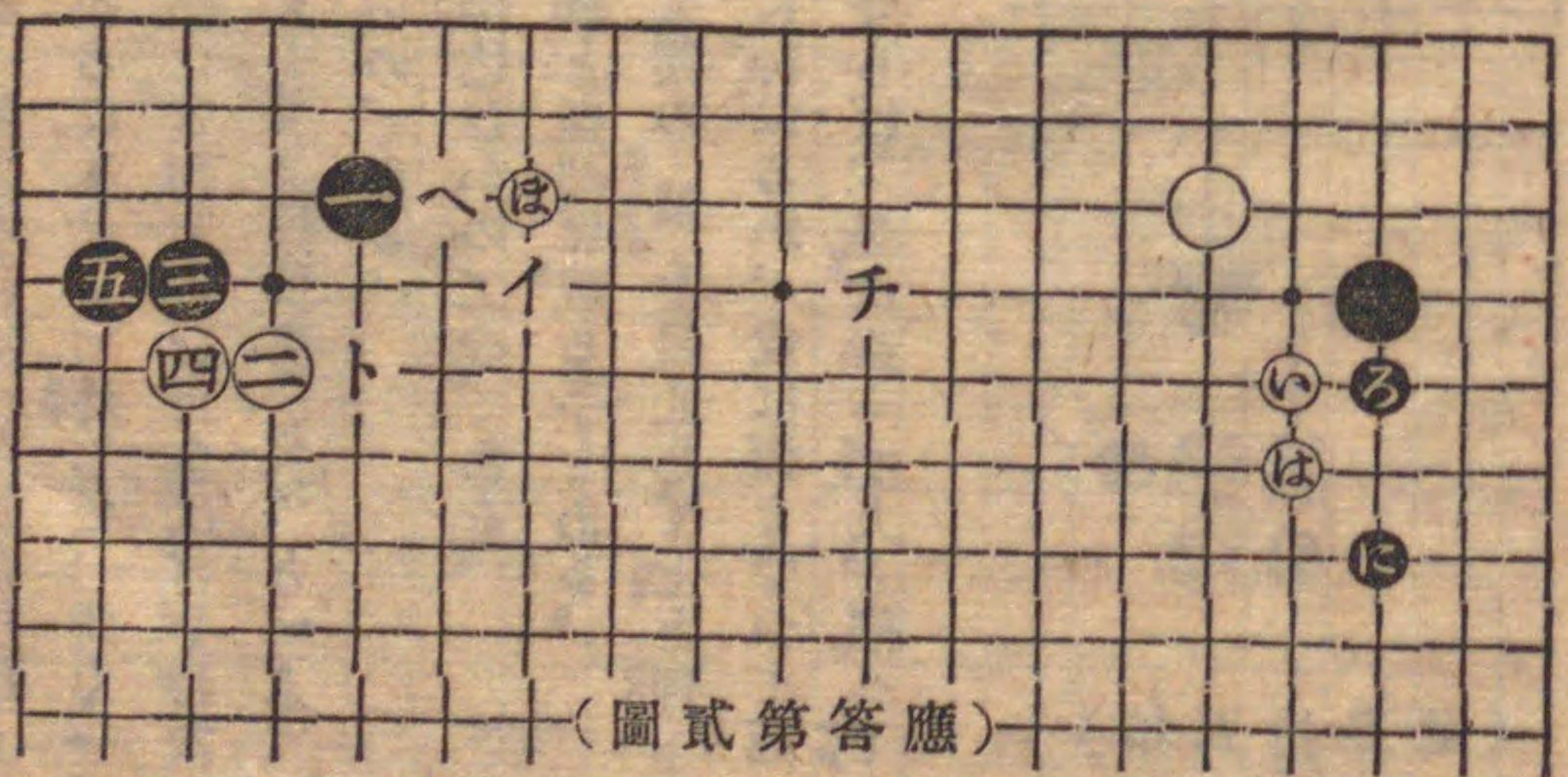
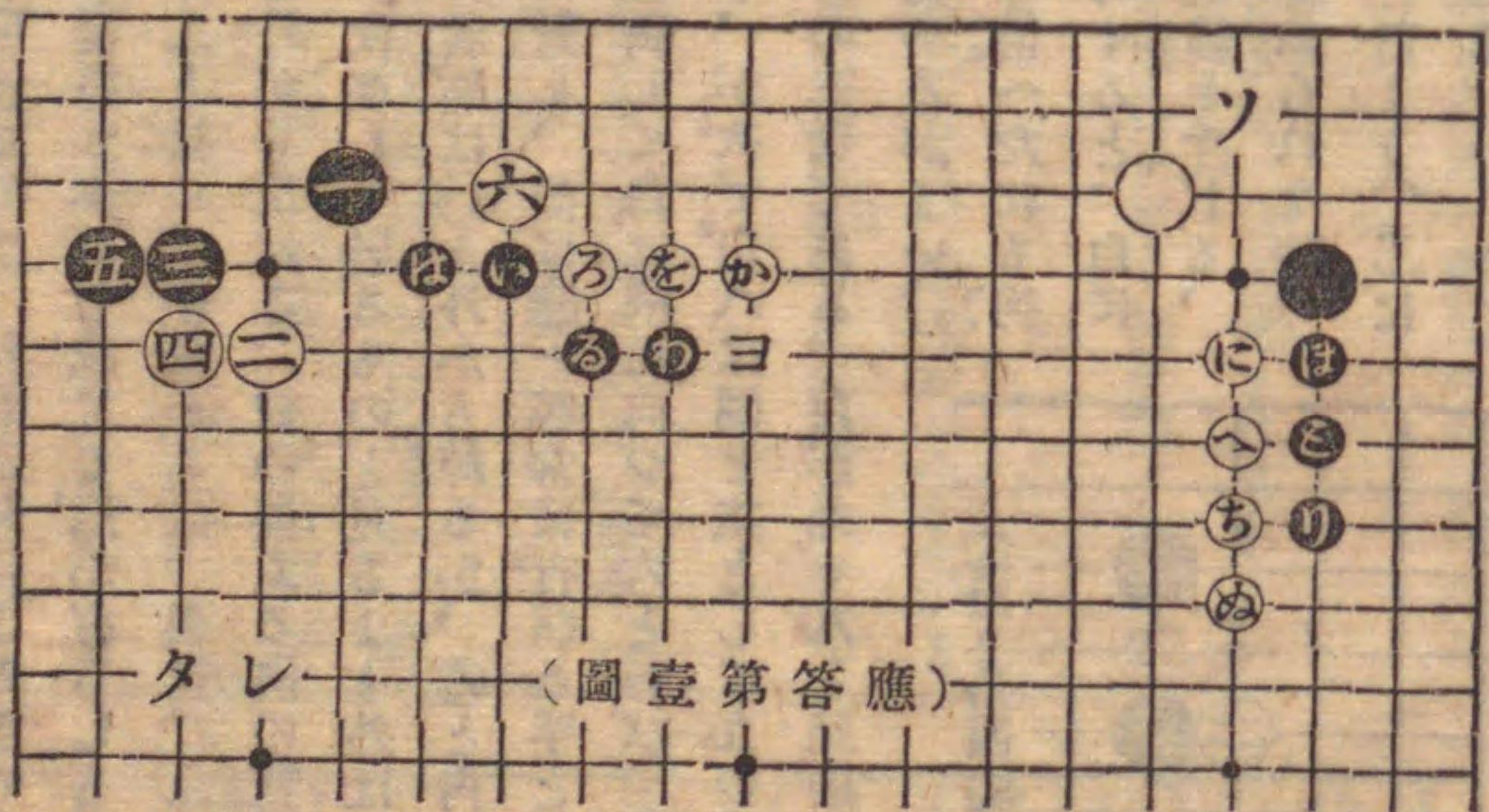
ソ、手

此二向答ハ
時々復習
味ウ、キナリ

子、打込方

△問、然らば白は最初六と夾む前に於て、先づ右上の黒に對して高壓を加へおき、然る後六と夾まば如何。

■(應答第二圖) 白六の手で先づ(ニ)と壓し、黒(ハ)、白(ハ)、黒(ニ)の後(ハ)と夾まば、黒は(イ)の點に頂けずして(ハ)とツキアタリ、白を(イ)と立たして(ト)と頂けるか、或は單に(チ)の點より上側の白模様を蹂躪するの手段に出づ可きなり。



(石定先互)

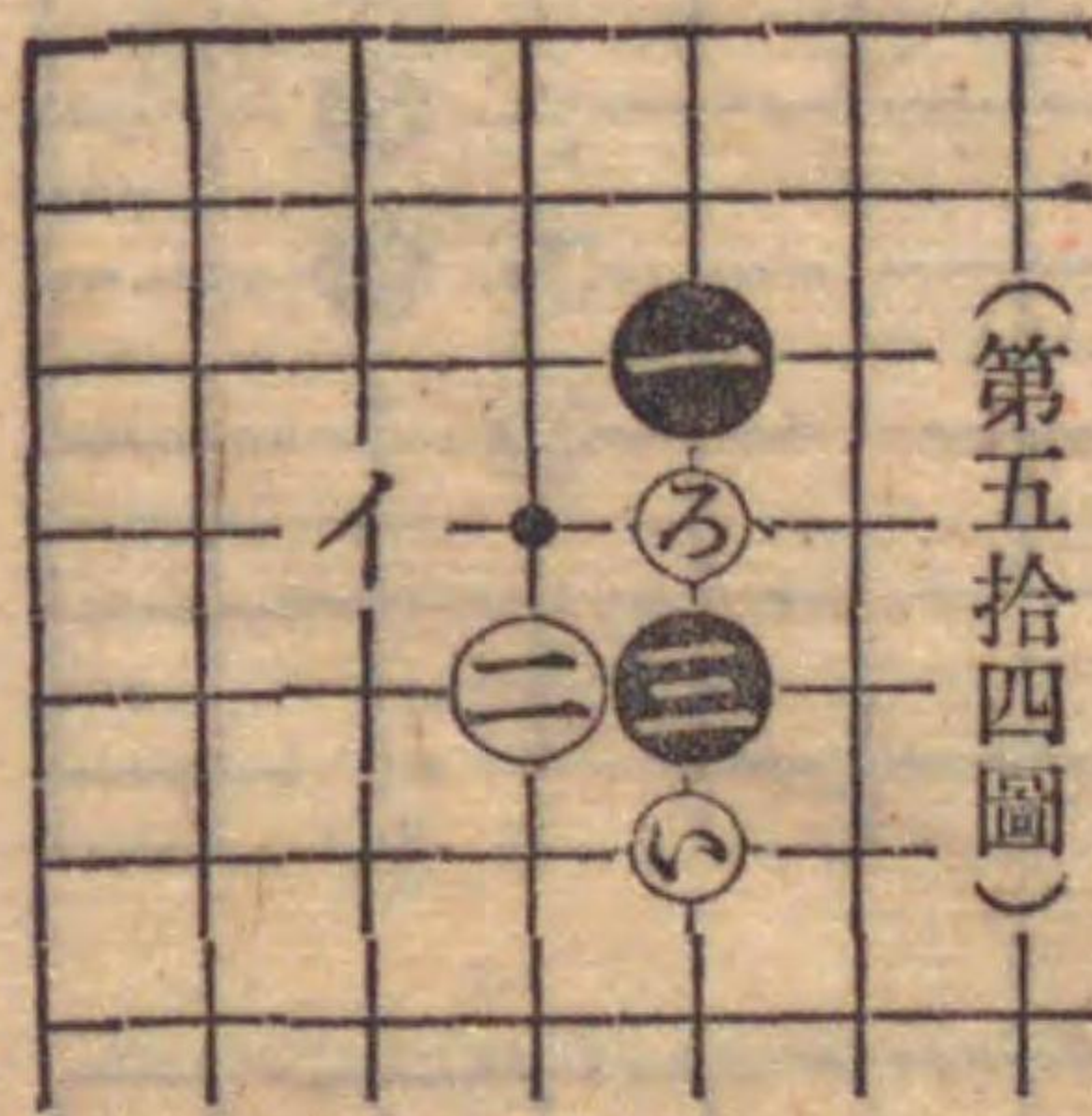
○(第五拾四圖) 黒三と外より頂けるのは、勿論趣向による手である、何となれば、白が當然掛り得可き(イ)の小目を(其は白が何等か必要を感じて然か打ちしものなるにもせよ)外して、此く一隅の實利を我に提供して、高く二と掛つて来たからは、黒は(イ)の點に實利を占む可きは言を待たぬ處である、然るに今此く三と外から頂ける、(彼の與ふる隅の實利を、自ら避けて取らぬ、といふ)のは、何等か其處に黒の策戦が伏在して居るものと見るより外はないのである。

黒に三と頂けられた際、白の打着點は(二)と外から縛るか、(三)と内へ縛込むかの二途である。

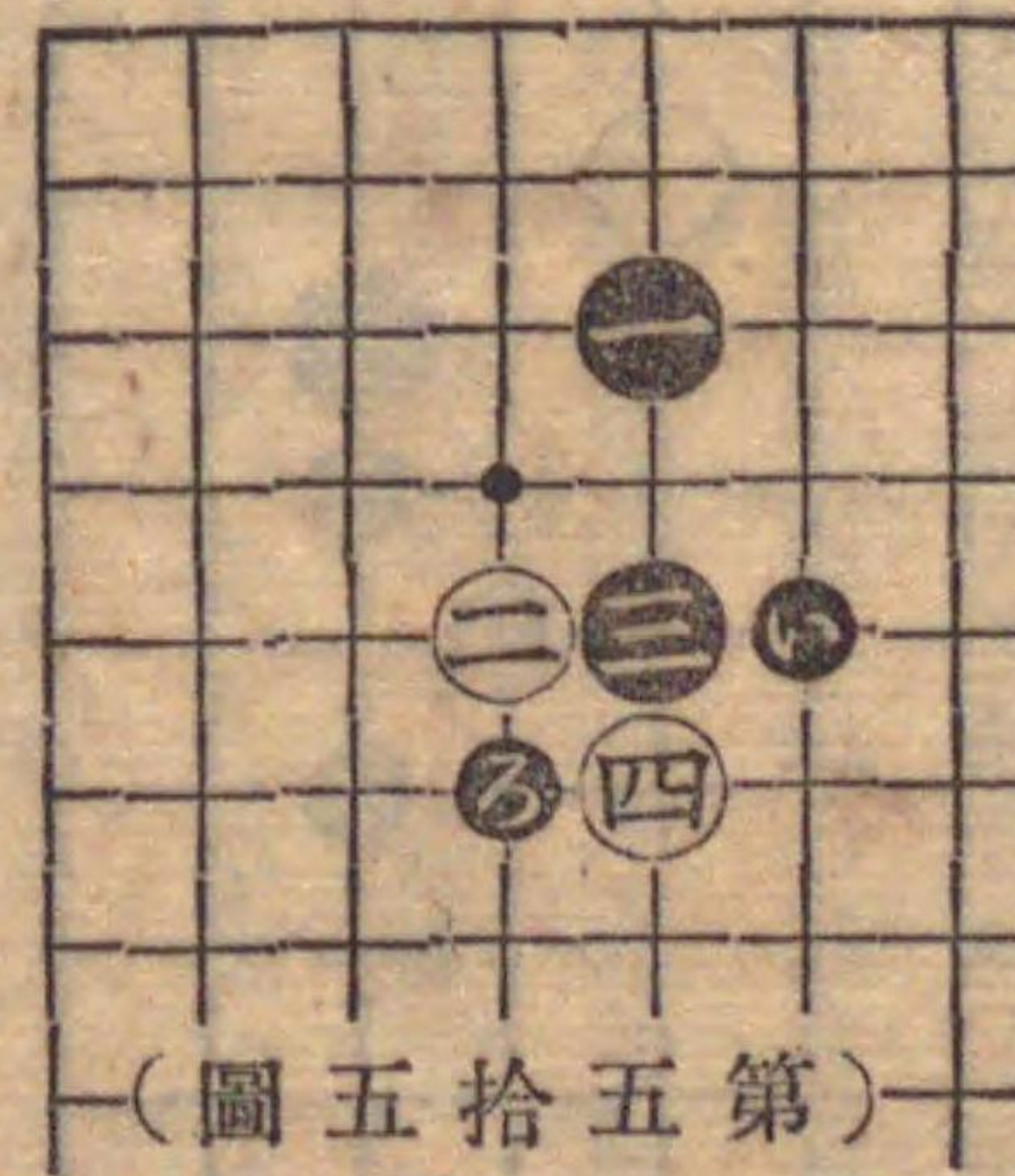
○(第五拾五圖) 白四の縛ねに對し、黒は(五)と尋常に行びる手と、(六)と猛烈に截る手とある。

○(第五拾六圖) 黒五の行ひに對して白は隅に向つて六と行ひ、黒又其の鋒を阻止して七と押へる、此の二着は決つた手である、が次で白八は隅を主として九の點に縛ねるか、或は側を守つて圖の如く掛粘るか或は(十)と飛ぶかの三途である。白が此く八と堅固に守らば、黒は必らず九と隅へ下り實利を占めて(ロ)の缺點に備へるがよい。

「註」然るに此く白が堅固に入と備へたにも拘はらず、黒が九の下りを閑却すると、白に此の點へ縛ねられて(ロ)に危険を生じる、のみならず、白に九の點へ縛ねられた時、黒が(ハ)の點に縛ね返すと白より(ニ)に二段縛ねされる様な手を生じる。



(第五拾四圖)



(圖五拾五第)

黒九の下りの爲め(イ)と覗く味も出来、側面の白の厚壯は大に減じる事となつた。

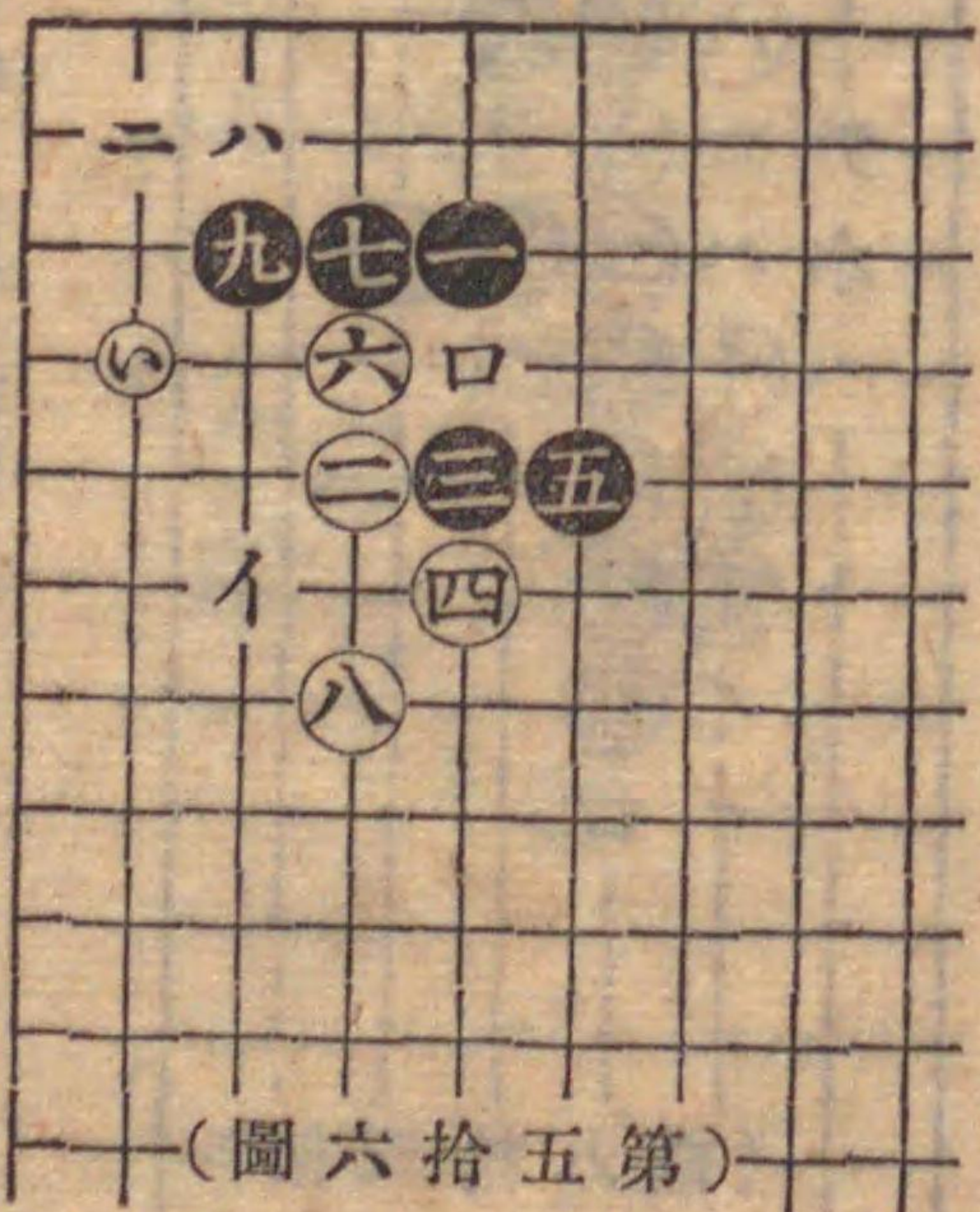
「註」此の九の一點を黒が守るか、白に侵されるかといふ事の、自他の勢力に非常な消長を來す趣を能く翫味す可きである。

○(第五拾七圖) 白八の飛に對しても、黒は九と下るがよい、若し此を手抜して、白に此の點に膨らまされると(ニ)の缺點が酷しくなる。

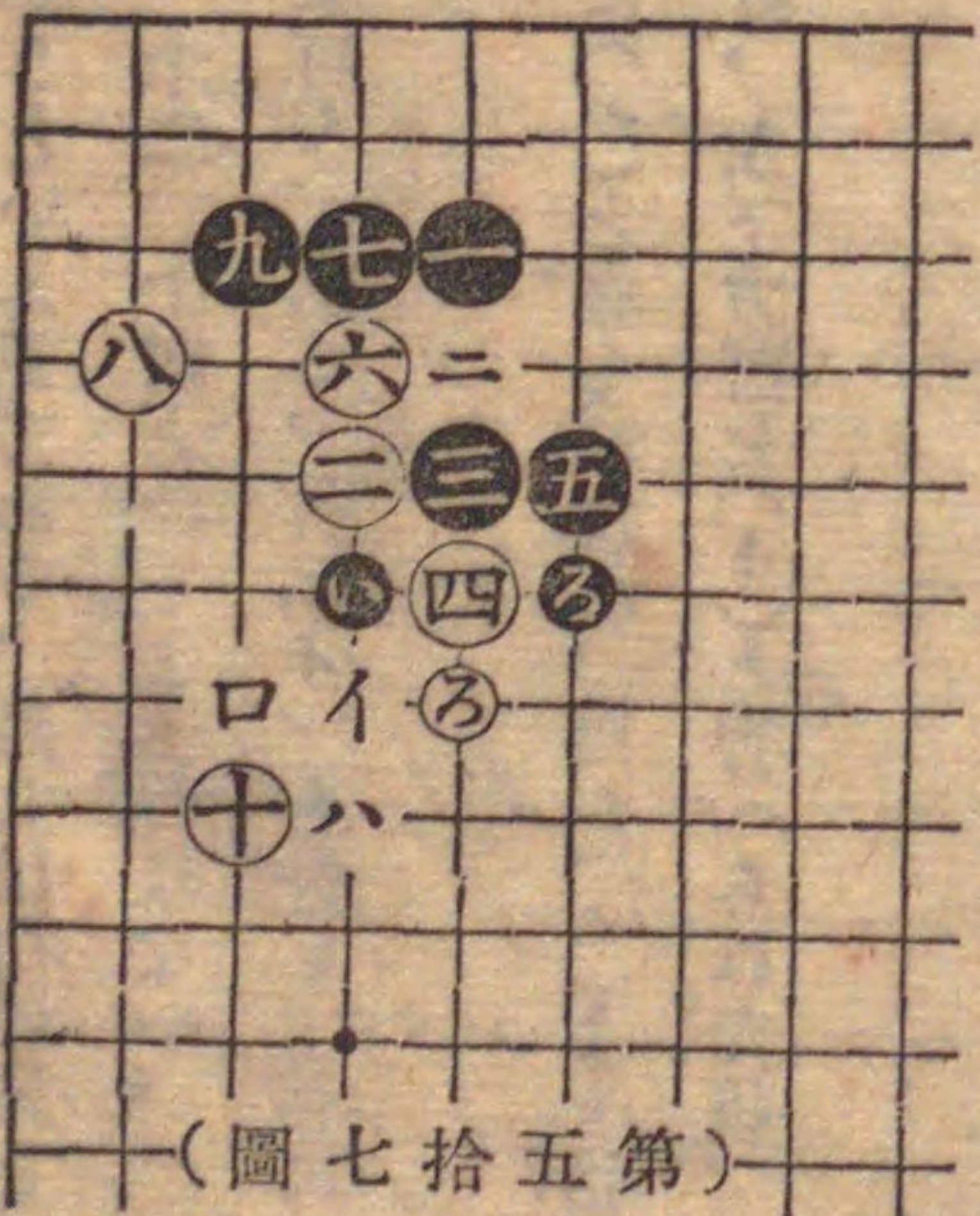
白十は(イ)の掛粘ぎを一步ハタラカシたのである、黒十一で若し此の所を打つとすれば(三)と曲る手であらう。

「註」黒若し(三)と截らば白は(四)と行ひてあげばよい、若し黒が(五)を截る考ならば(イ)の點から覗き、白(ロ)の時(六)と截る手順である、が實は打たぬ方がよい。

黒(イ)の場合によつては白は(ハ)と押す手も無いとは言へぬ、が(ロ)と下から擲うておくがよい。



(圖六拾五第)



(圖七拾五第)

○(第五拾八圖) 白は黒に㊸の點に縛ねさせて(チ)に掛け粘がうといふ意である、黒九は白の策を破つたのである、黒九の截に對しては、白は下より十と縛ね、十二、十四と泳ぐより外はない。白十六は㊸と隅へ下る可きか或は側を(イ)と押す可きかは考ふ可きである、白(イ)と押して黒に(ロ)と行ひられると益々其の外勢を宏壯ならしむる懼がある。

又白隅へ㊸と下れば、黒に(ハ)と截られる味がある、乃ち黒に(ハ)と截られた時、白が(ホ)より抱へれば(リ)の味を自ら消す事となる、サリトテ(ニ)とあてれば、左下方面を(イ)と押へられた後、黒に(ホ)と下られるの不利がある。

「註」 黒(ハ)白(ニ)黒(イ)の後、白手抜して黒に(ホ)と下られ、白(ハ)黒(ト)白(チ)となるの大利がある。

□次圖以下黒白の位置を變更して示す事とする其の理由は、元來二の高掛りに對して、三と外から頂け五と截るといふ手は紛れを好む趣があつて堅實を主とする黒の好んで打つ可き手ではない、若しそれ白の立場より言はゞ敢て非難す可き手段でもないのである。



(圖八拾五第)

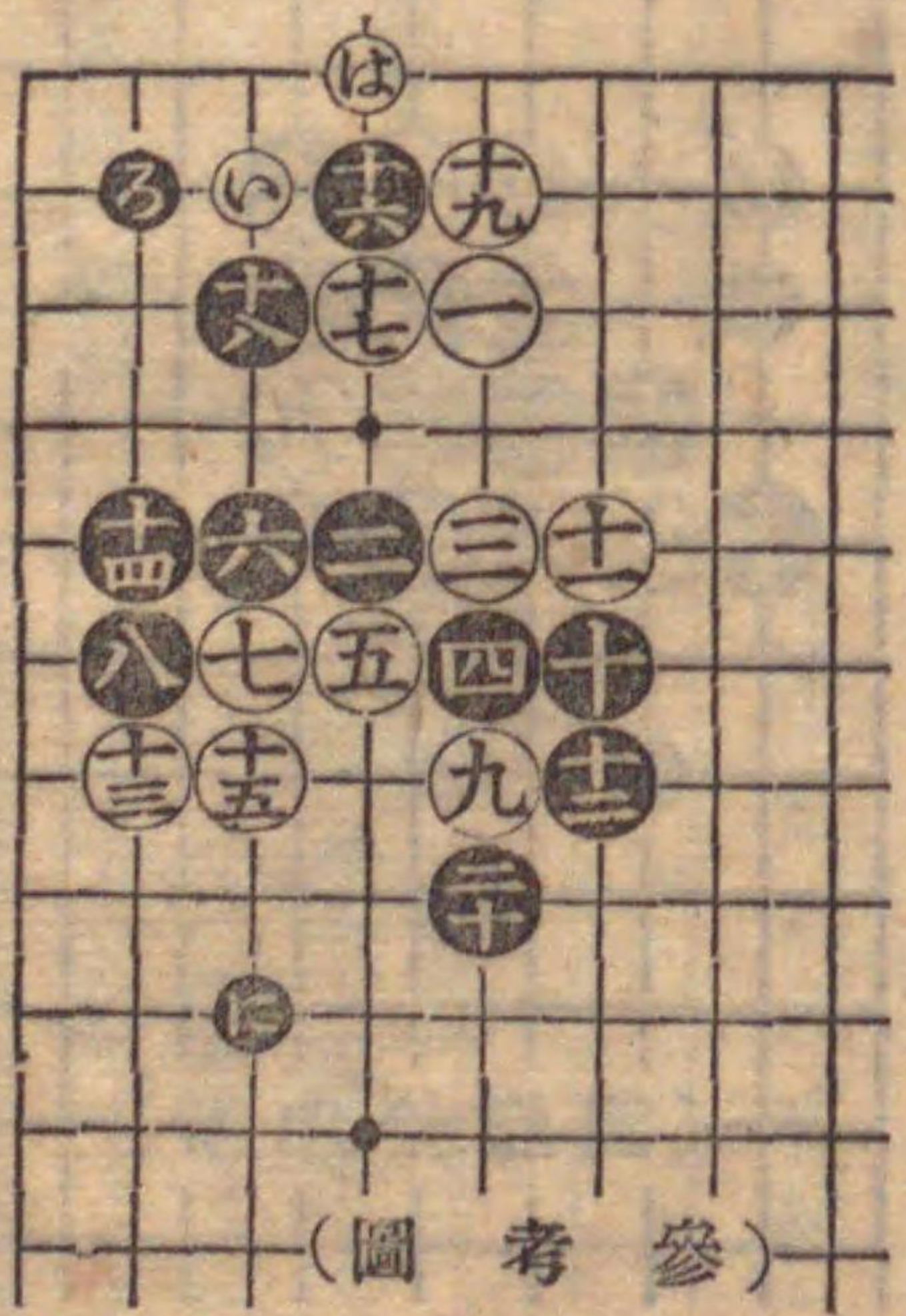
○(第五拾九圖) 白が三と頂けて五と截るのは紛争を求め手である、征關係によれば、黒四の手を(ハ)と縛込む手もある、黒六は此く下るより外はない、白が七と押し、黒が八と縛ねるのは別に議論のない手である。

黒十二の手を(イ)と行ひれば、白は十三、十四の交換を遂げた後㊸の點に係粘ぐがよい。

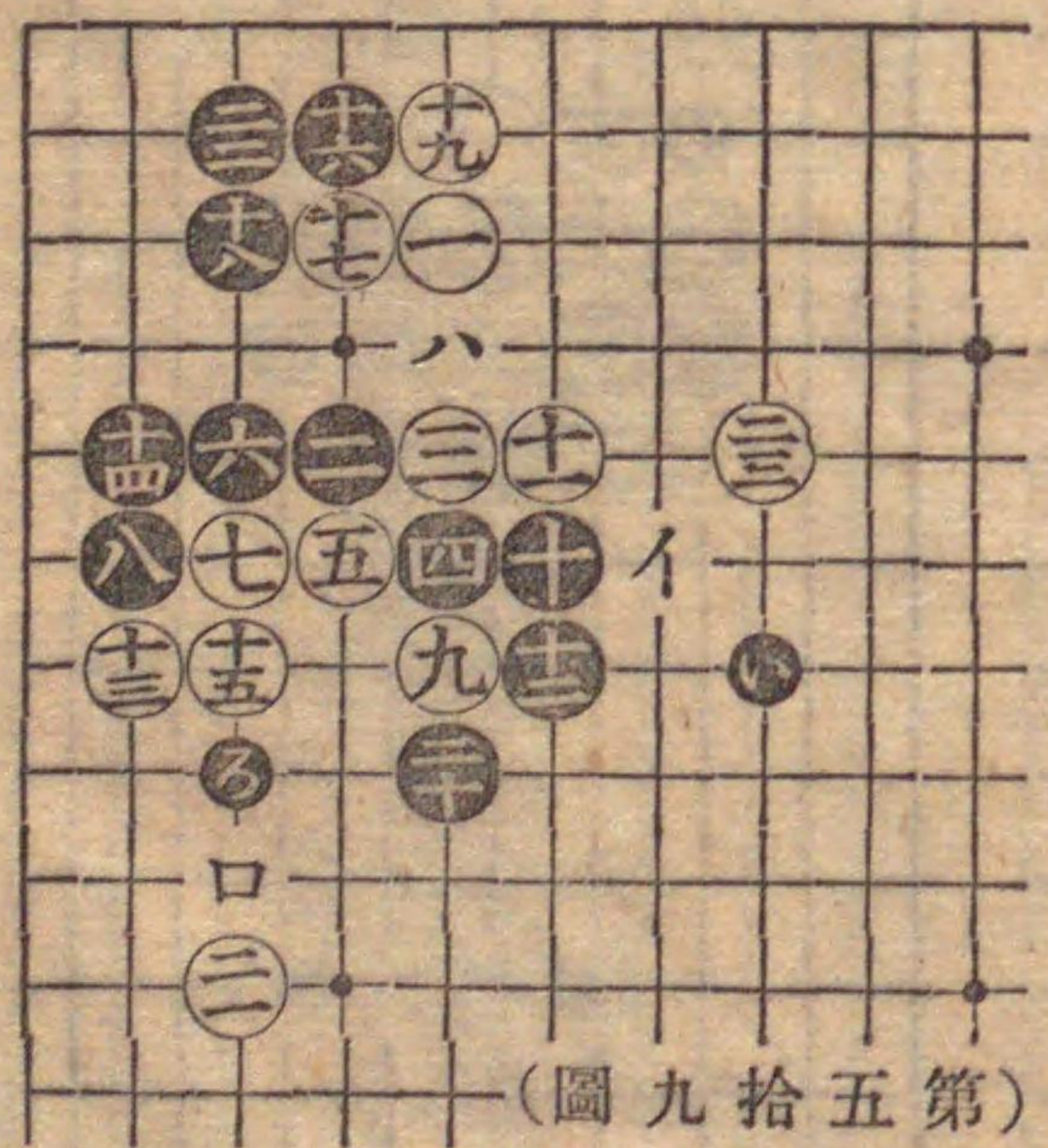
白二十一は黒に(ロ)の邊から迫られるのを拒いだのである、黒が二十二と打つて隅の活を確實にした時、白が二十三と備へて上側を守るのは自然の手順である。

「註」 元來白が五と截つた當初に於て、黒四の一子を征として提るといふ事は豫想されてあるのである、若し黒が十二を手抜しても白に(イ)から征とされる患のない時に此く運ばゞ、黒は十二の手で㊸と左側に走るがよい。

△(參考圖) 形勢次第で白若し二十一の手で㊸と打たば、黒㊸白㊸の後、黒に㊸と打たれ五子の白は捕獲される。



(圖考參)

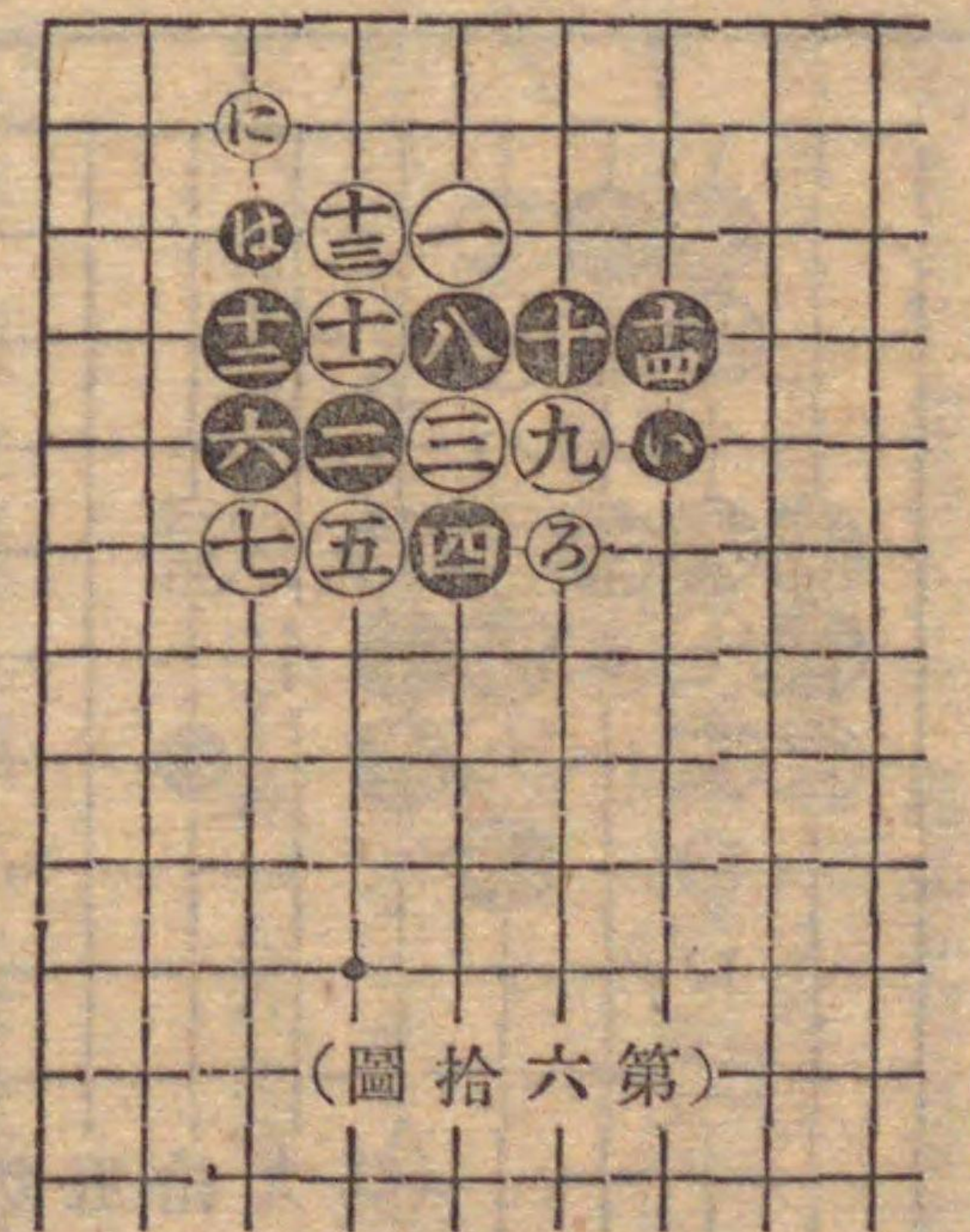


(圖九拾五第)

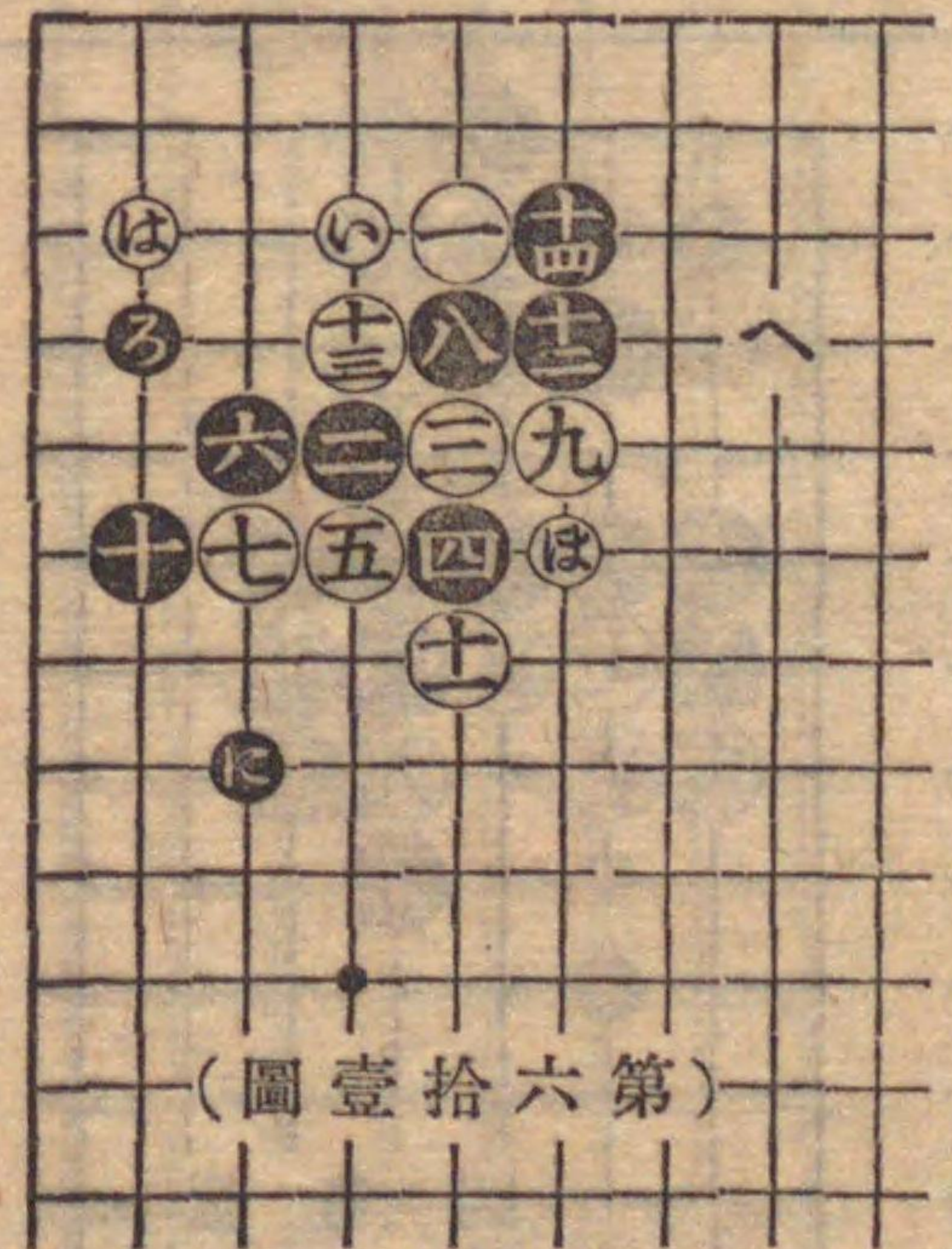
○(第六拾圖) 黒が此く八の手で縛込み十と行る手は從來未だない手である、が白先着の處であるからヤハリ白の方がよい。

本圖は三、九の二子を征とする事の出来る時、此く十四と行びるので、白に○の點に押さして隅から○と押へやうといふ意である、若し三、九の二子を征とする事が不可能ならば、黒は此の十四の手で○とアテ、白○の後隅から○と抑へる、何れにしても白は○と縛ねばならぬ。

○(第六拾壹圖) 黒が八と縛込んでゝ、後に十と縛ると、八の手で單に白七の裾を縛るとの差は、若し十の點を先きにし、白十一の時黒八と打たば、白は九とは行びて呉れぬ、必ず○と打抜かれる。黒十四の曲りの時、白十五の手で○と粘げば、黒○白○黒○白○黒(へ)となる位のものであらう。



(圖拾六第)



(圖壹拾六第)

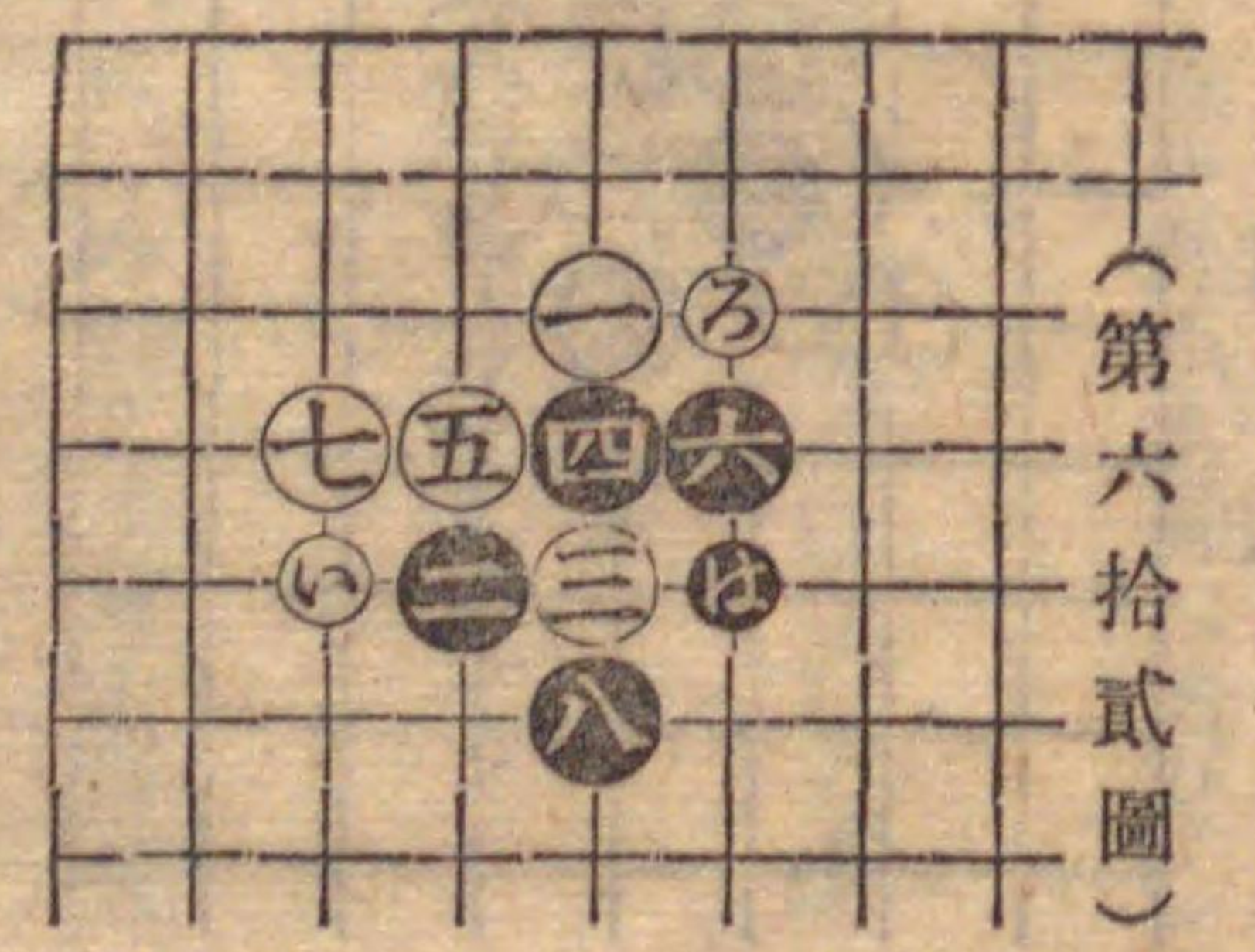
○(第六拾貳圖) 三の一子を征として提る見込のある時は、黒は四と縛込むのもよい、乃で白五の截に對して六と行び、白が七と下つた時直ちに八と抱へて白三の死命を制し、外部の勢力を占めるがよい。

「註」白が三の一子を提られまいとするには下記第六拾五圖の如く外から抑へるのである。

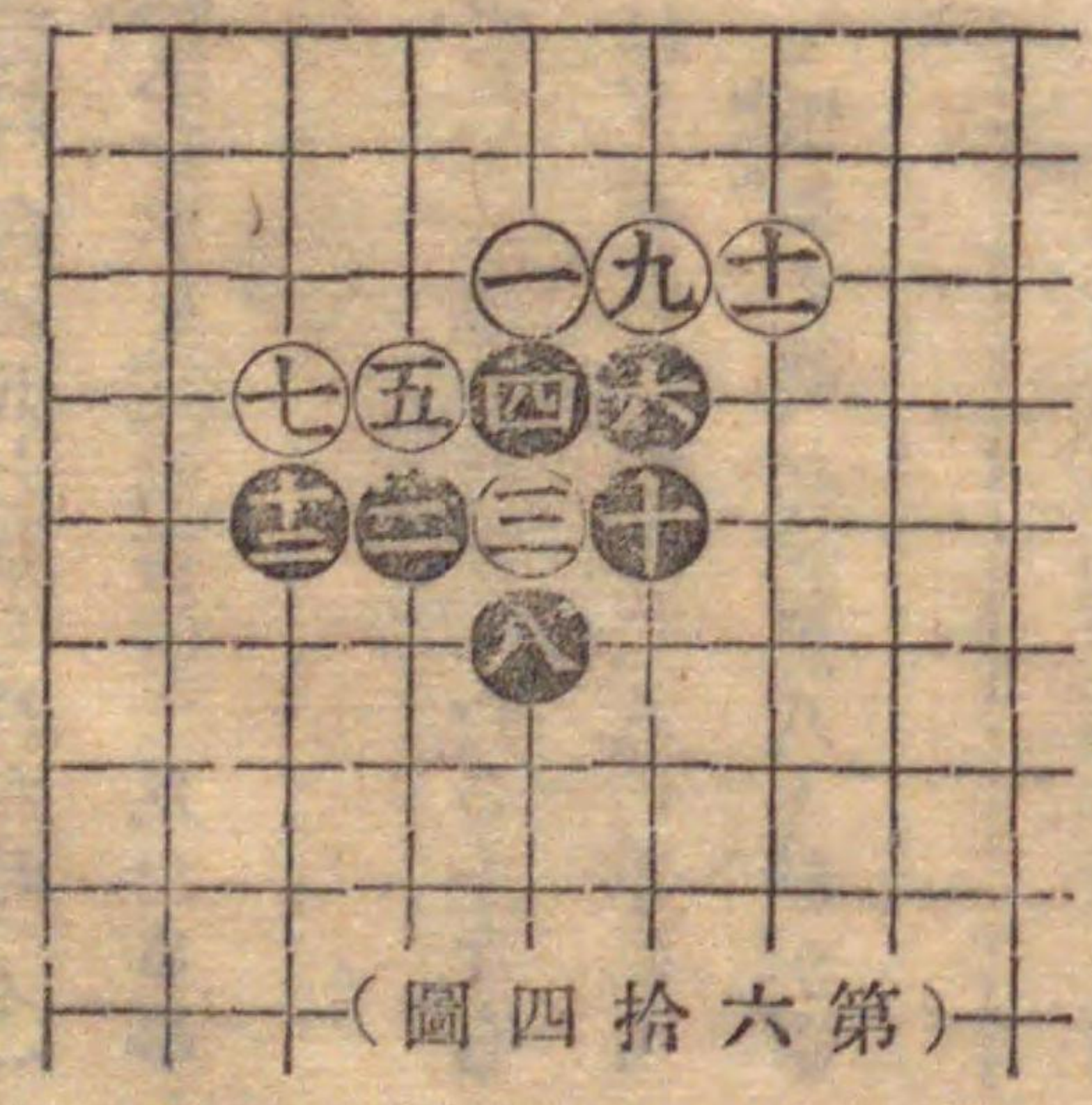
白は九の手で○と左側へ廻るか、○と上側を泳ぐかの二通りある、白が其の孰れに出るとしても黒は○と打抜くの一手である。

○(第六拾參圖) 白が左側に重をおく考ならば、九と曲つて十一と走るがよい、黒が十二の時、白十三は他に急場の無い限りは○と下つて上側の黒の厚壯を幾分削る可きである。

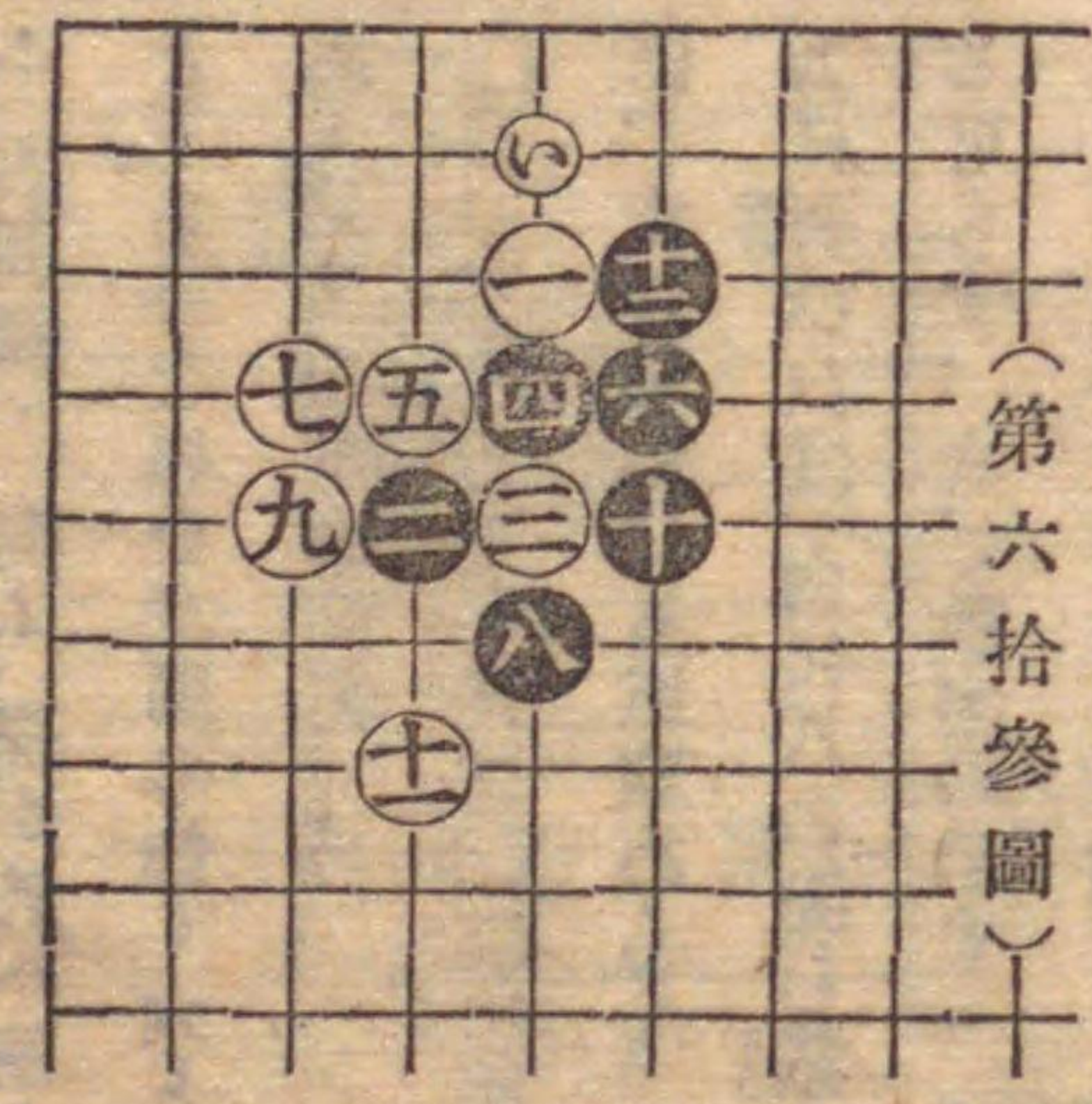
○(第六拾四圖) 本圖は前圖と正反對である。



(第六拾貳圖)



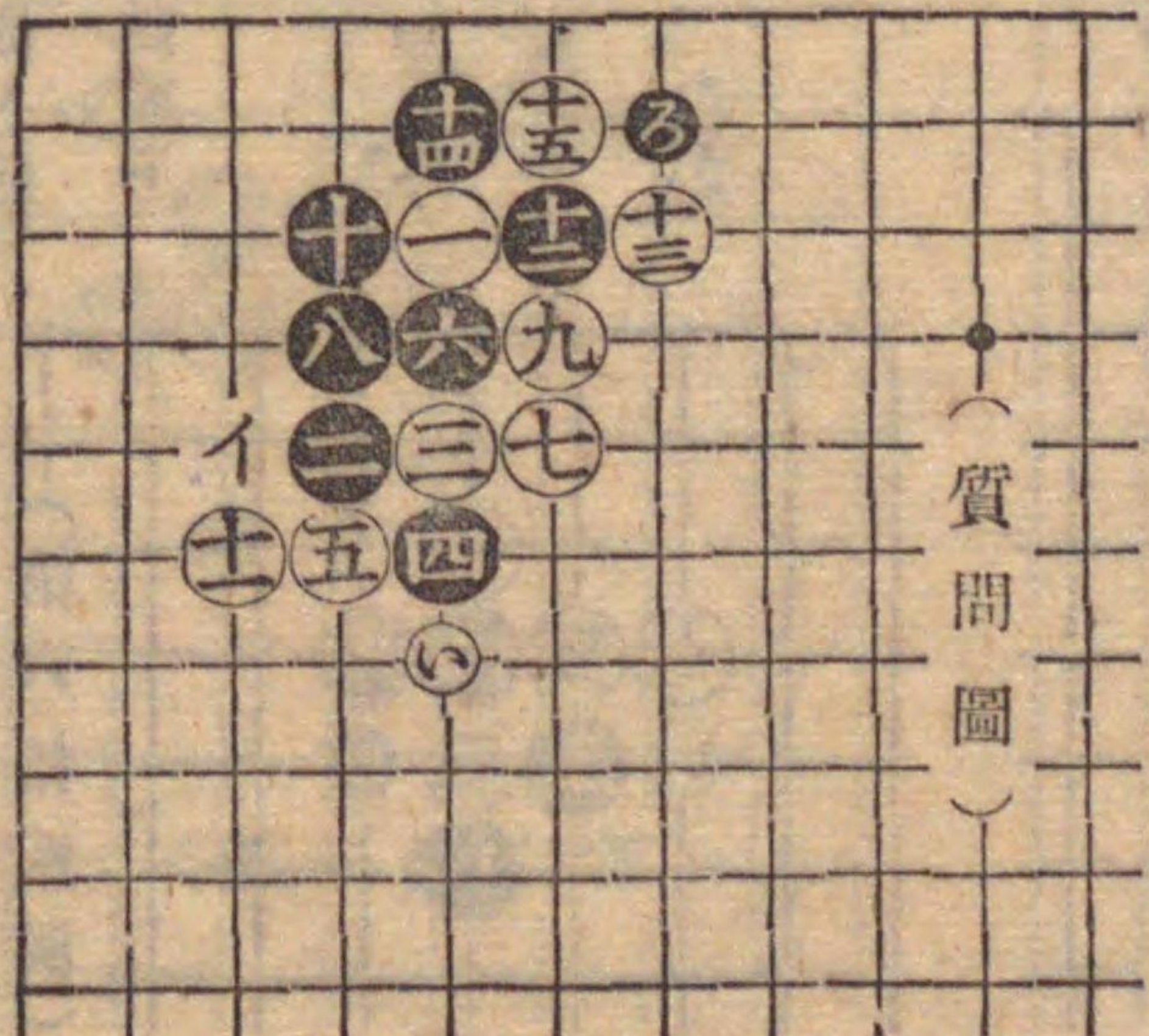
(圖四拾六第)



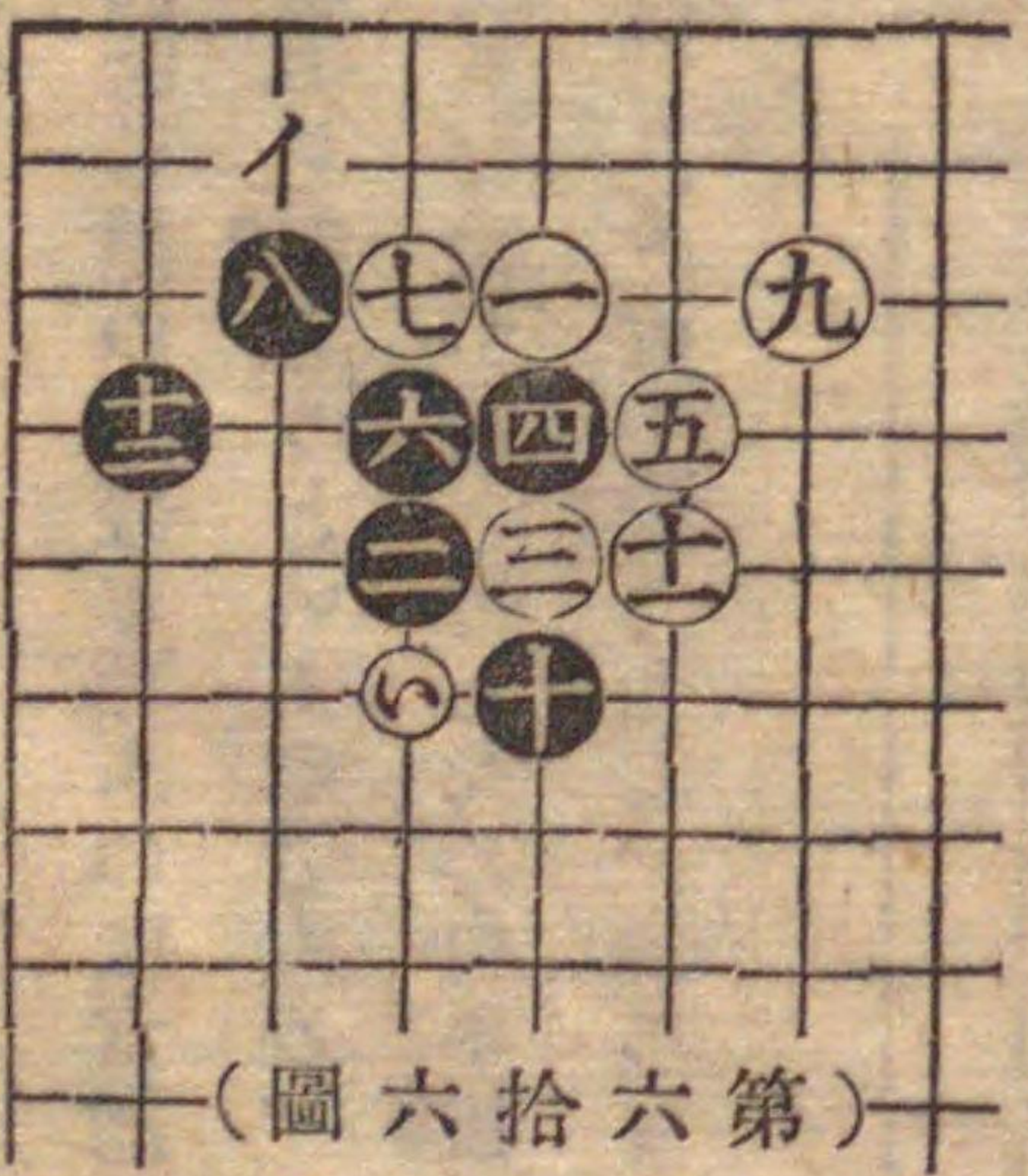
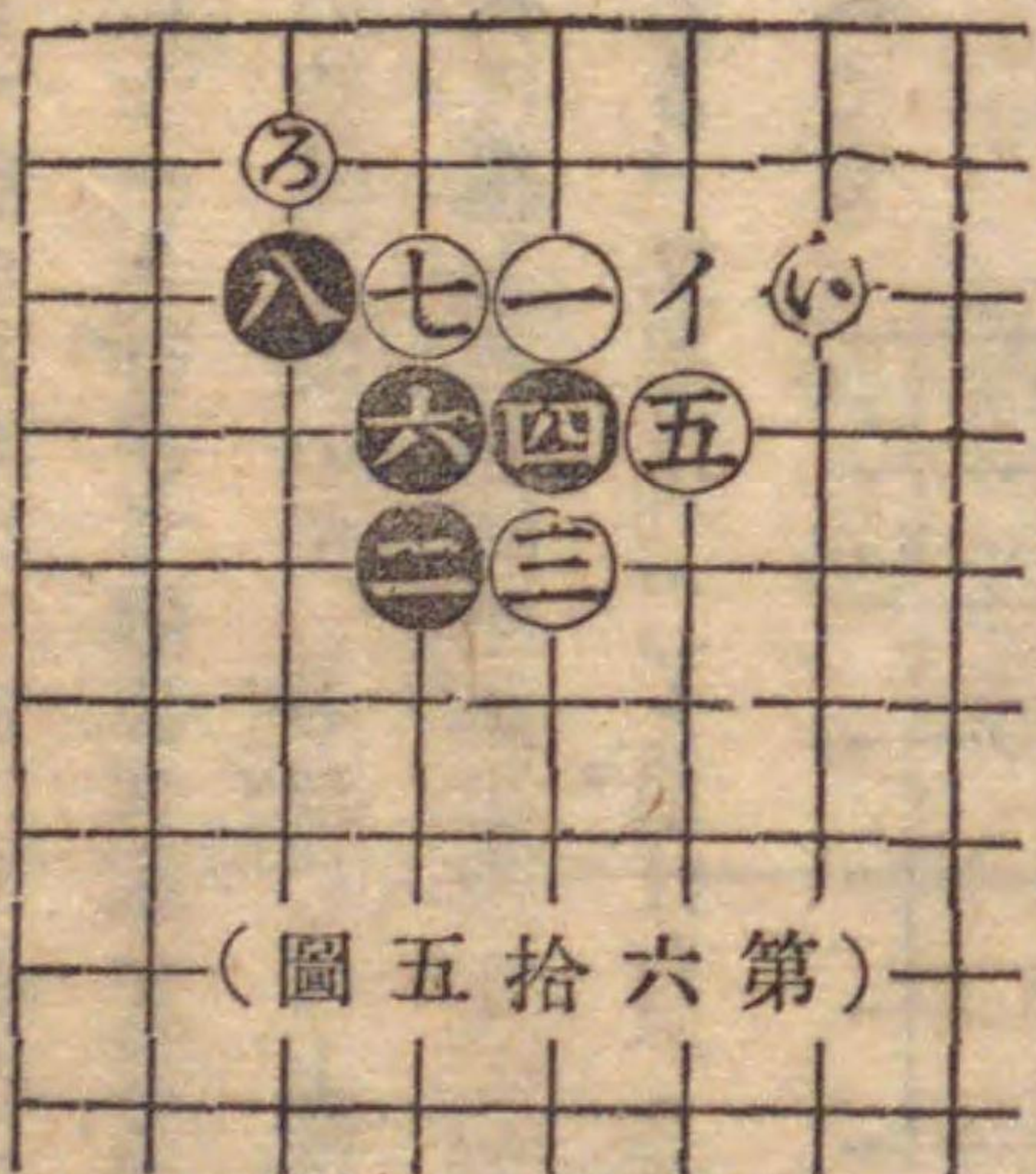
(第六拾參圖)

前記第六拾貳第六拾參第六拾四の三圖の如きは、白三の一子を征に提らうとして黒が四と縛込んだので、白五以下の手順は黒四の意を逐げしめる結果である、然らば此く運ぶのは直に以つて黒の有利で白の不利であるかといふと必しも然らうではない、局勢の如何によりては、白の此の打方も亦面白くないとは言へぬ。が若し黒四の策を破らうとするならば白は五の手で外から押へる（下記第六拾五圖及第六拾六圖）の方針を執ればよいのである。

△(質問圖) 問ふ、黒が外へ四と縛ね、白に五と截られた時(イ)と下る手を以つて圖の如く六と縛込む手を某棋書にて見たる事あり、其の可否如何。
 □答、(イ)と下り自己(二)に勢力を加へ準備を整へたる上ならば、六の縛込にも道理あらん、されど本圖の如くば、八の手にて九に行ければ、白に八の點を截る、懼ある故、必然黒八と粘がざる可らず、次で數字の示す手順に運び、一隅に閉鎖する事となつては、黒の不利莫大である。
 本圖の如き結果となつては、白十五は要點である、若し十五の手で(イ)と打てば、黒に(イ)と裾を縛られるからである。



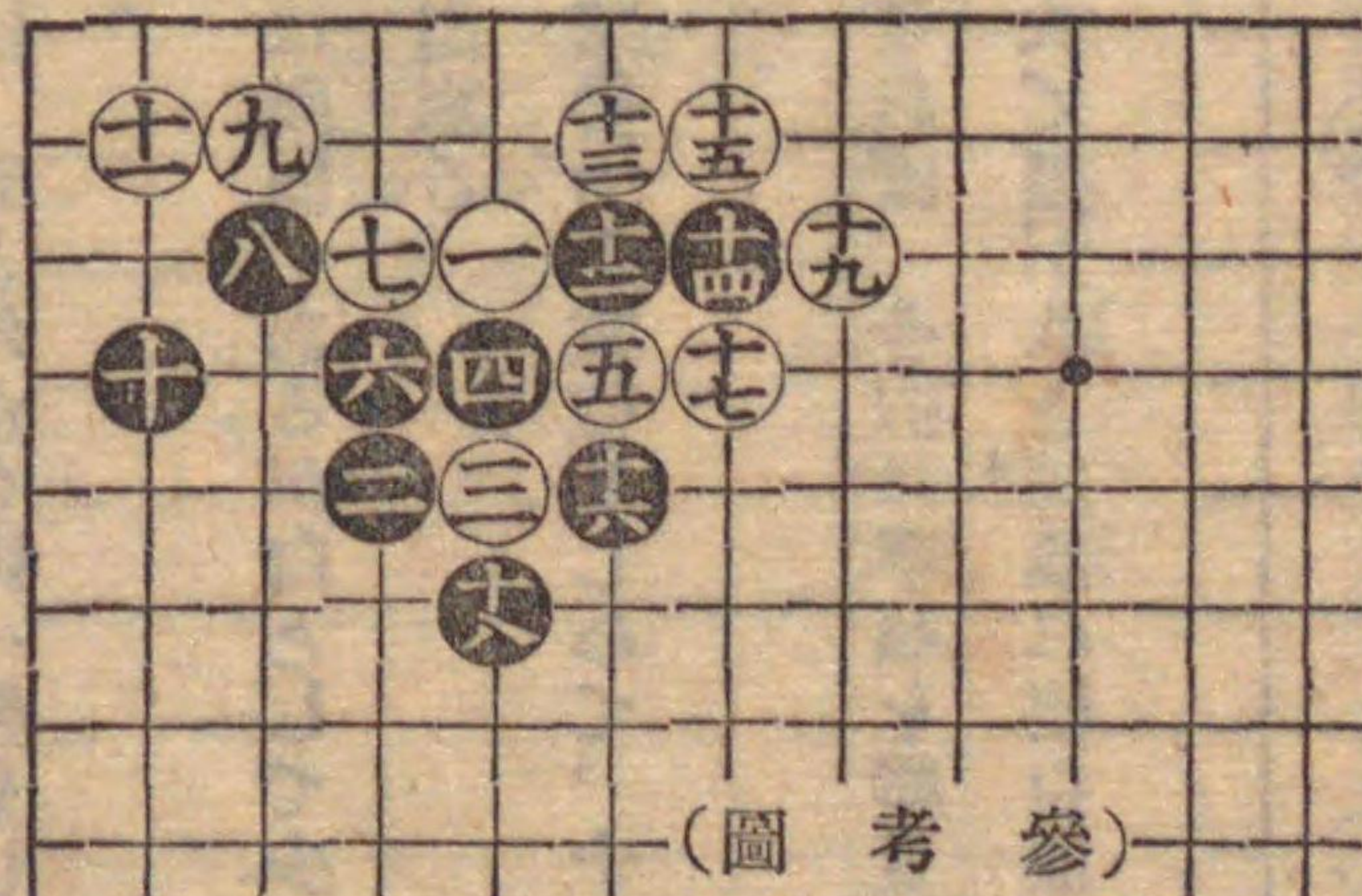
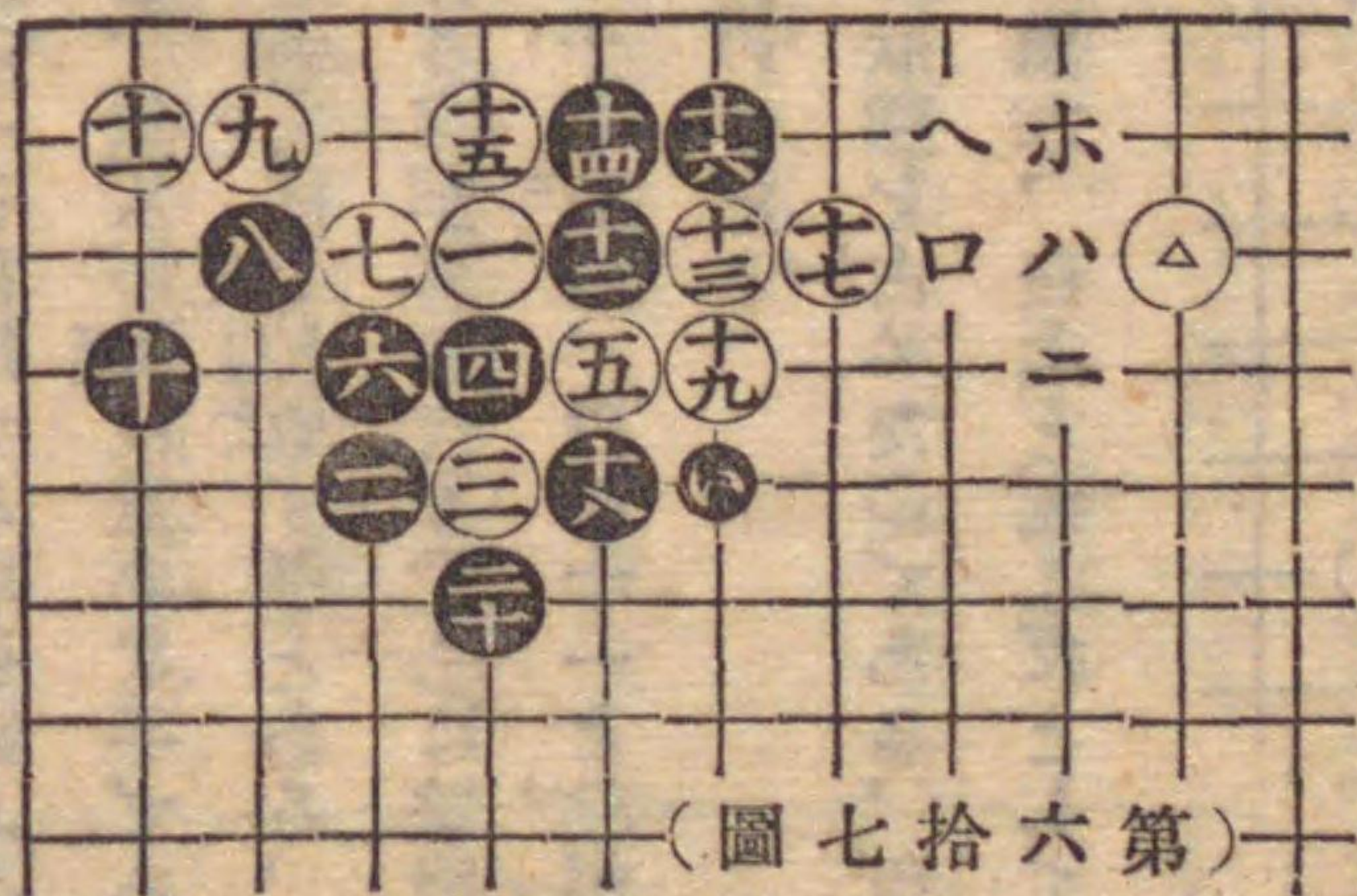
○(第六拾五圖) 黒四の縛込の際、白が三の一子を捨てる事を嫌ふならば、五と外から抑へ黒をして六と粘がしめるがよい、次で白七の押し、黒八の縛は重要な手である。黒八の縛に對し白は(イ)と控へて掛粘ぐ手と(イ)と隅を縛返す手とある、(イ)は堅固であるが白として少し緩い、(イ)の縛返しは隅には實利を占め得る、が其の代り(イ)に缺陷が出来る。
 ○(第六拾六圖) 白が九と掛粘げば、黒は十と縛ね、白に十一と粘がして勢力を重複せしめて、十二と掛粘ぎ、隅と側と兩方にハタラカしたのである。
 本圖の結果は白九が緩い爲め、黒は有利の状態を占めたのである、何となれば、今假に手順を變更して、白一、黒二、白三、黒四、白五、黒六、白七と運んだとして、次で黒が八と縛ねれば白は無論(イ)に截る可きを九と控へ、黒に十二と掛粘がれた結果となつて居るのである。
 此の手順中で黒四、白五、の二着は無論黒の不利である(ダメヅマリ)の爲め、後に(イ)と截られた時の味が違ふ。



○(第六拾七圖) 白九は隅を主として打つたので、必しも良い手とはいへぬ、此く緯ねた以上は黒十の掛粘に對し十一と行びて隅に根據を造ると同時に黒の根據を奪ふのは當然の手續である、黒十二の截は、白の缺點を衝いて、牽制して上部に勢力を張らうといふのである。黒十六の曲りは妙手である、是は後に●と押せば味が出来、何となれば黒が●と押した時白手拔すれば黒に(ロ)と頂けられる手もある、又黒は(ハ)と頂け白(ニ)の時(ロ)と打つ理もある、或は黒(ハ)の時白(ホ)と來れば(ヘ)と抑へてもよし又は(ロ)と行びてもよし。

「註」 △印の白がなければ白は十三から押へる事は出来ぬ、本圖は故中川、村瀬兩先生の擲棋に出てをる有名な手である(合本圍棋新報參看)

△(參考圖) 白が十三と下から擲うて黒の二子を捕るは大悪手である、其の理由は第四百八十頁の參考第二圖に解剖して示す事とする

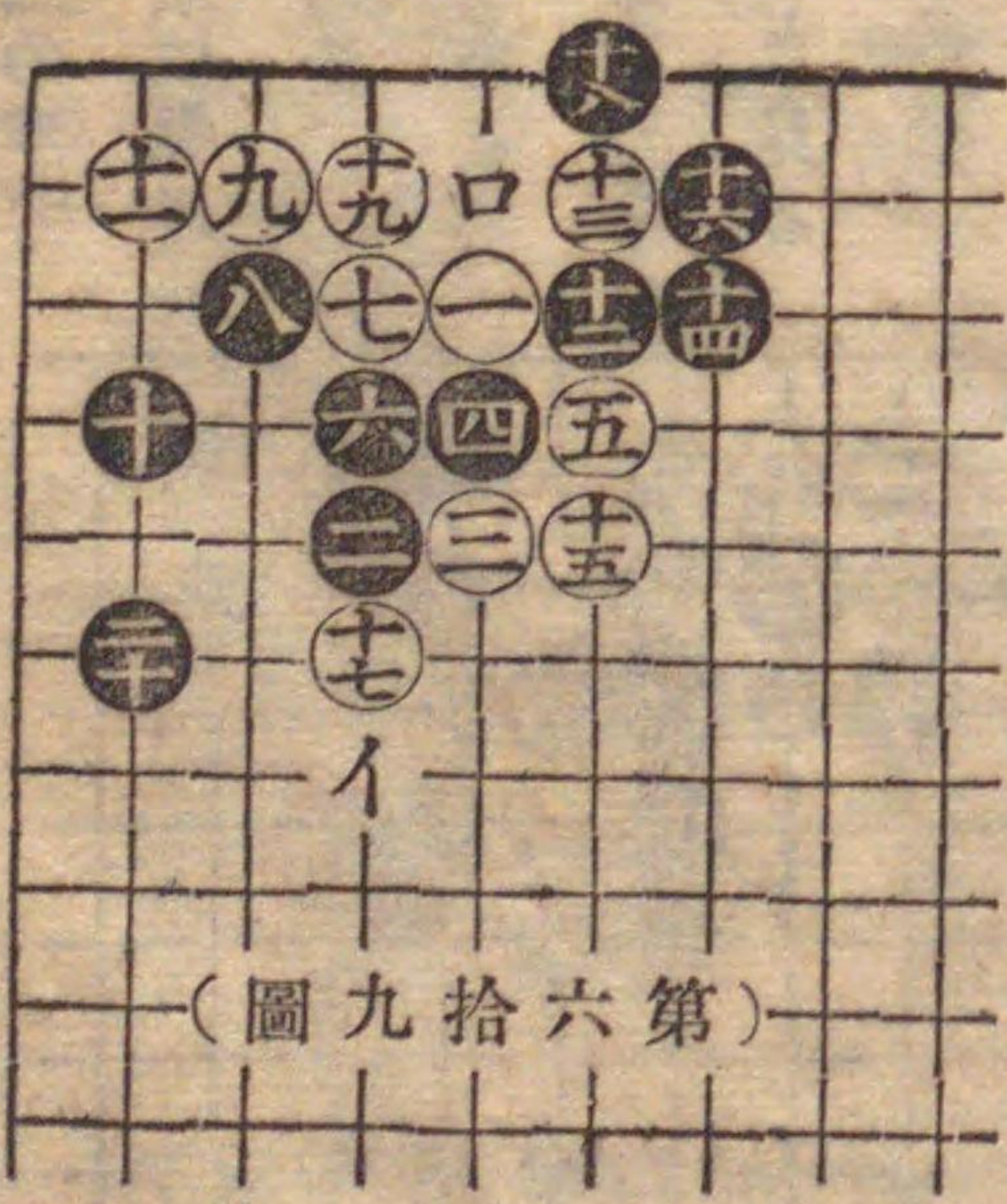
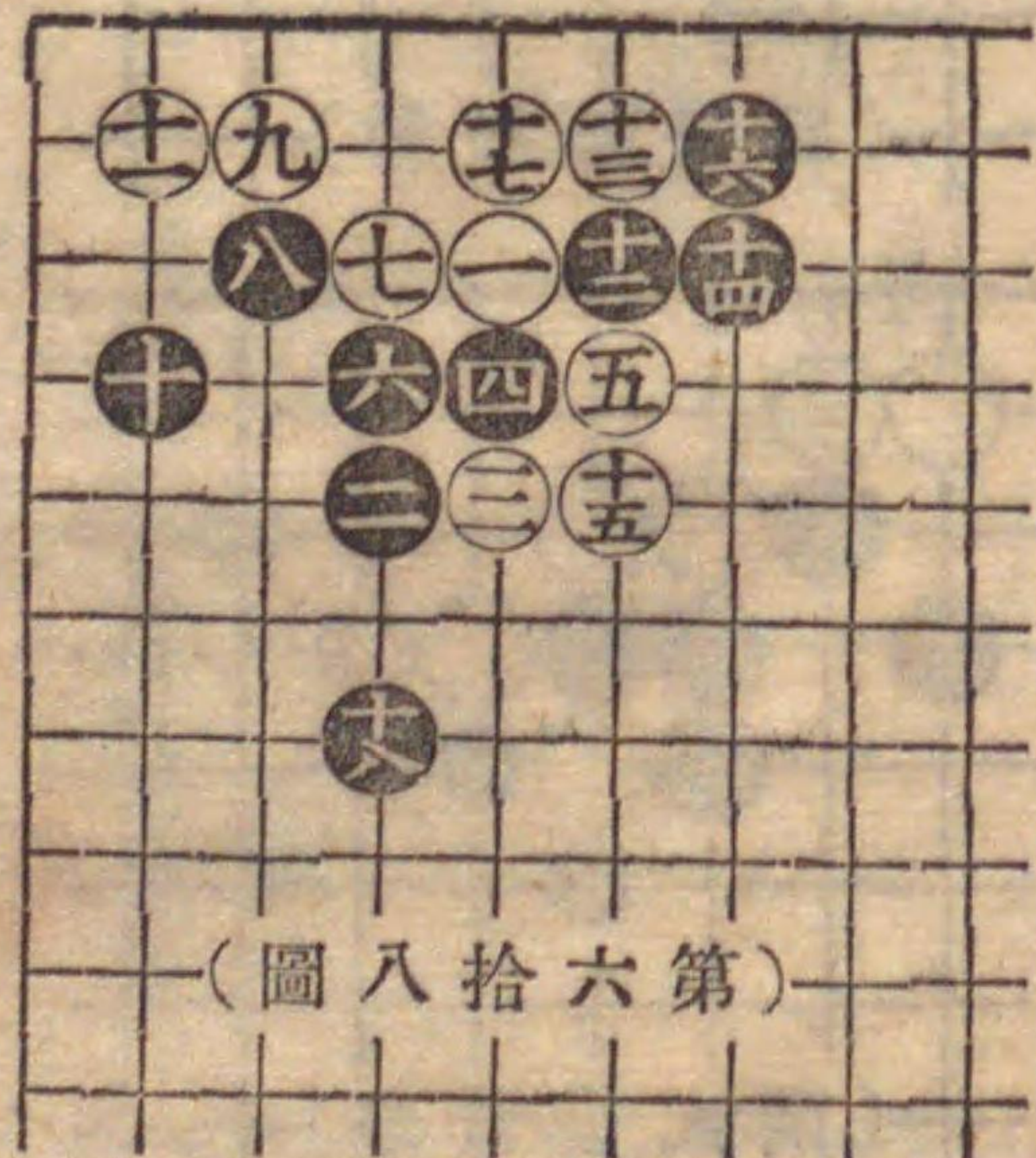


○(第六拾八圖) 白十三と下から緯ねても前圖の如く黒の二子を提る考でなければよい、乃ち黒十四の時白十五と粘ぎ、黒十六の時、白は十七と隅を活かしてあく手である。

次で黒は十八と飛で左側に大發展を策する手になる、本圖の結果は左上の黒三子と、中邊の白三子との争となるのである。

○(第六拾九圖) 白若し十七の手で此く左方に迫つたならば、黒は直ちに十八と上側より白の根據に迫るがよい、然して白を十九と粘がして、二十と低く備へてあく可きである。

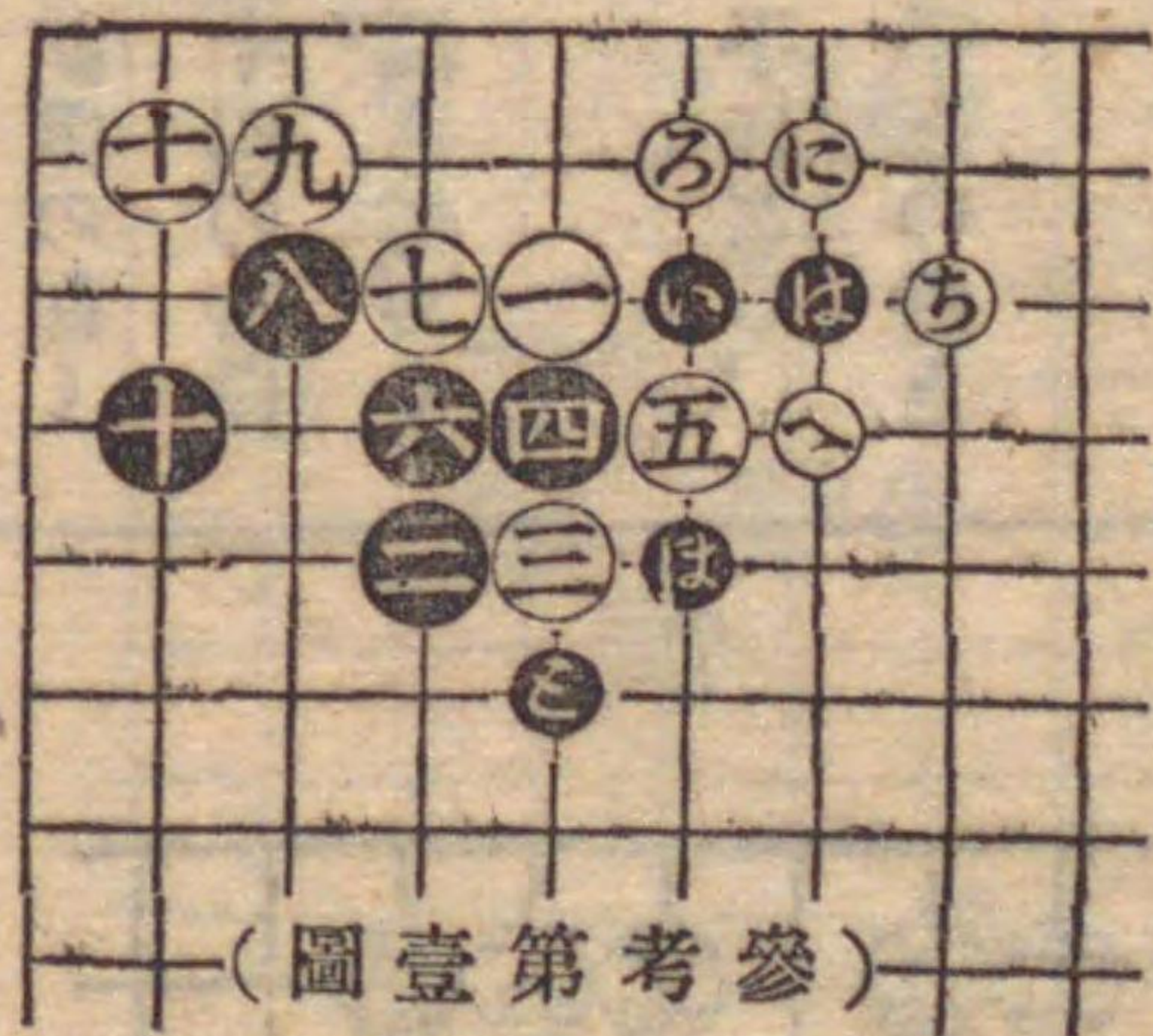
「註」即ち此く運んで見ると、白十七の緯の無理といふ事が解るのである、若し白十七の時黒が單に二十と控へ白に(ロ)と粘がせる事になると、黒は大不利である。



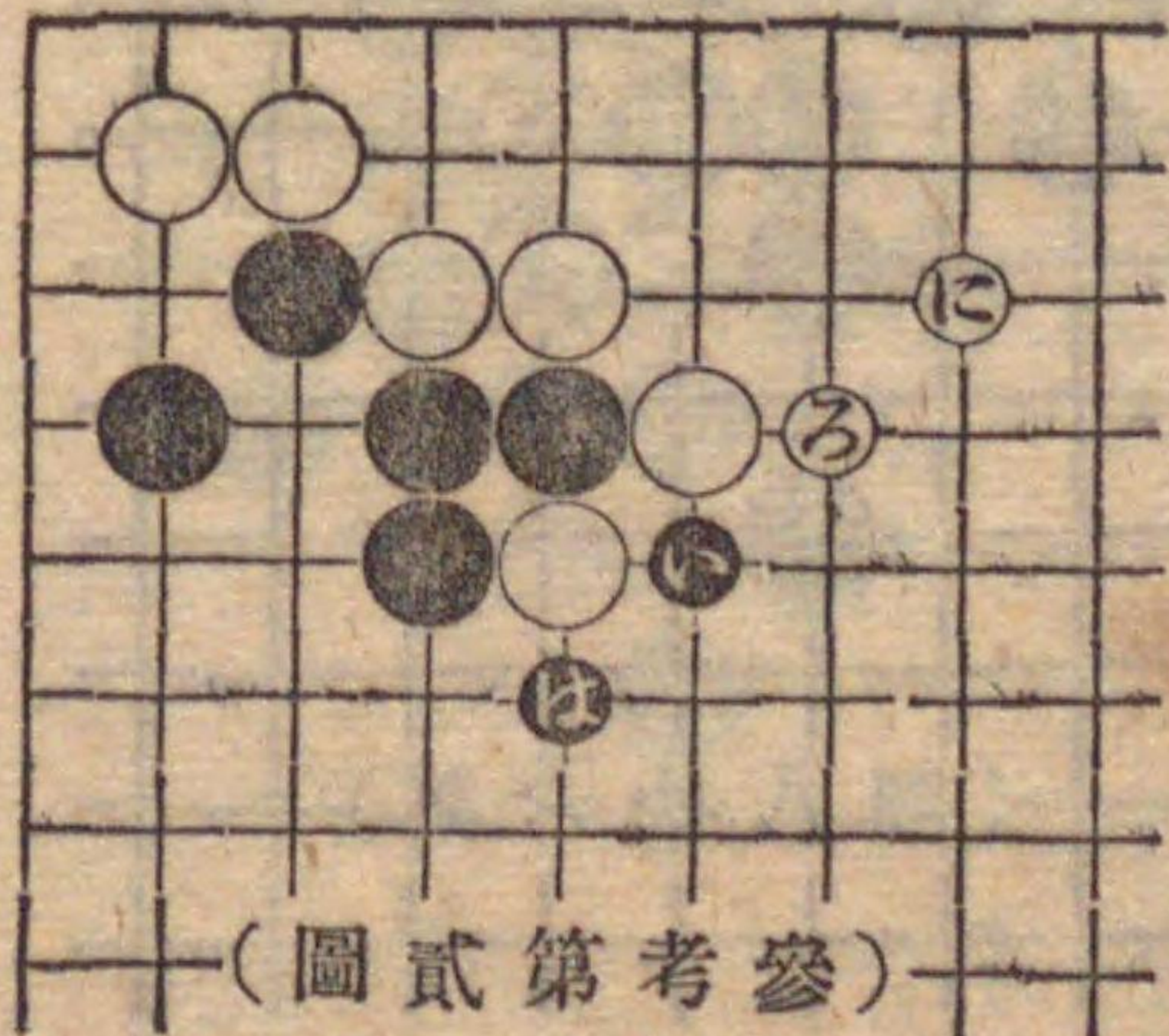
△(參考第壹圖) 是は前に掲げた参考圖の再掲である、黒十二の手で
 ●と截つた時、白が○と下から縛ね、黒●の時○と泳いだ結果は黒に
 ●と中央の大切な一子を打抜かれて○と凹んだといふ始末である。
 黒は●と打抜く手で行びる手もあれど、○の提りて十分である。
 今此の不利なる理由を解剖して見ると参考第貳圖の通りになる、乃ち
 第一圖の黒●○の二子と白○の二子とを相殺して無いものと見る
 と、第貳圖の如く黒●の截に應じ白は○の點に行ぶ可きを○と行び、
 黒に●と打抜かれて○と萎縮極まる手を下した事になる。

△(參考第參圖) 黒が若し●から截つた
 ならば、白は如何應ず可きかといふと、○
 と行るは無論の手で、次で黒●白○黒●
 白○黒●白○黒●白○の手順を経て、左
 側六子の黒には多少劫味は存して居ると
 は言へ、白の有利たる無論である。

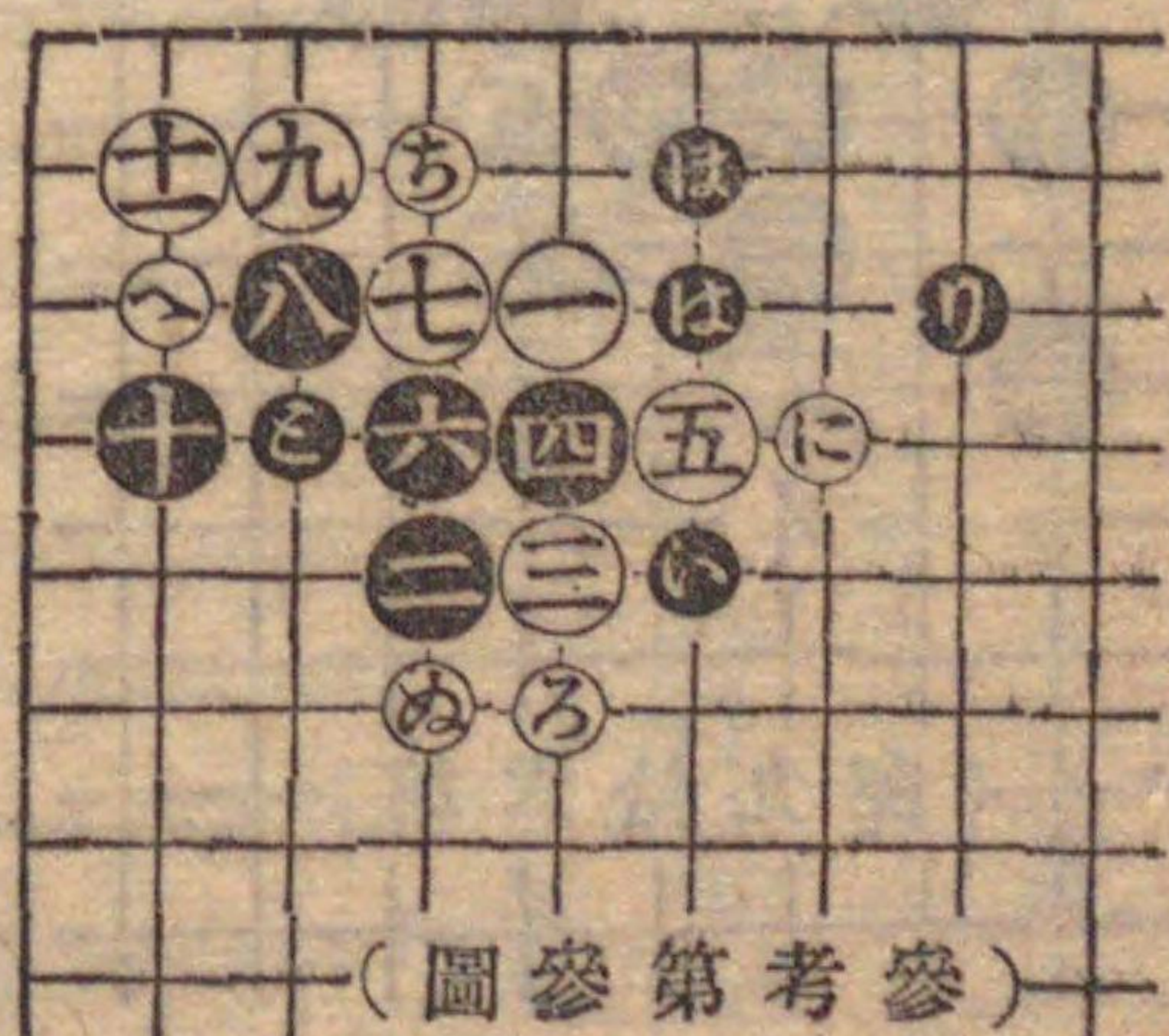
【互先定石完結】



(圖壹第考參)



(圖貳第考參)



(圖參第考參)

大正五年貳月拾貳日印刷
 大正五年貳月拾五日發行



編輯者兼

廣月凌

印刷者

高桑基次

印刷所

株式會社 秀英舍
 東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所

中央圍棋會
 東京市神田區美土代町四丁目五番地
 (振替貯金口座東京一〇五八九)

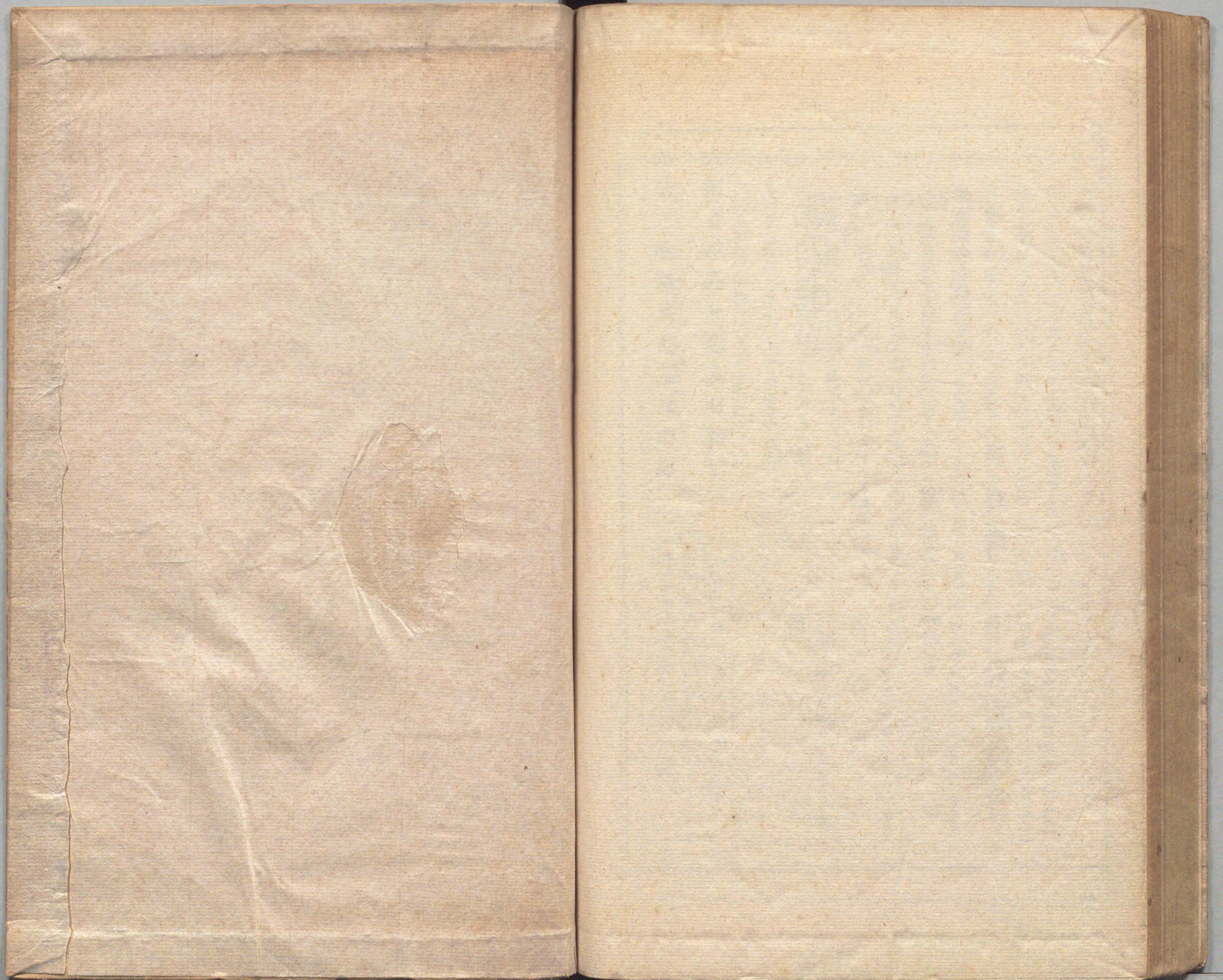
互先定石高目目外(奥付)
 正價金壹圓八拾錢

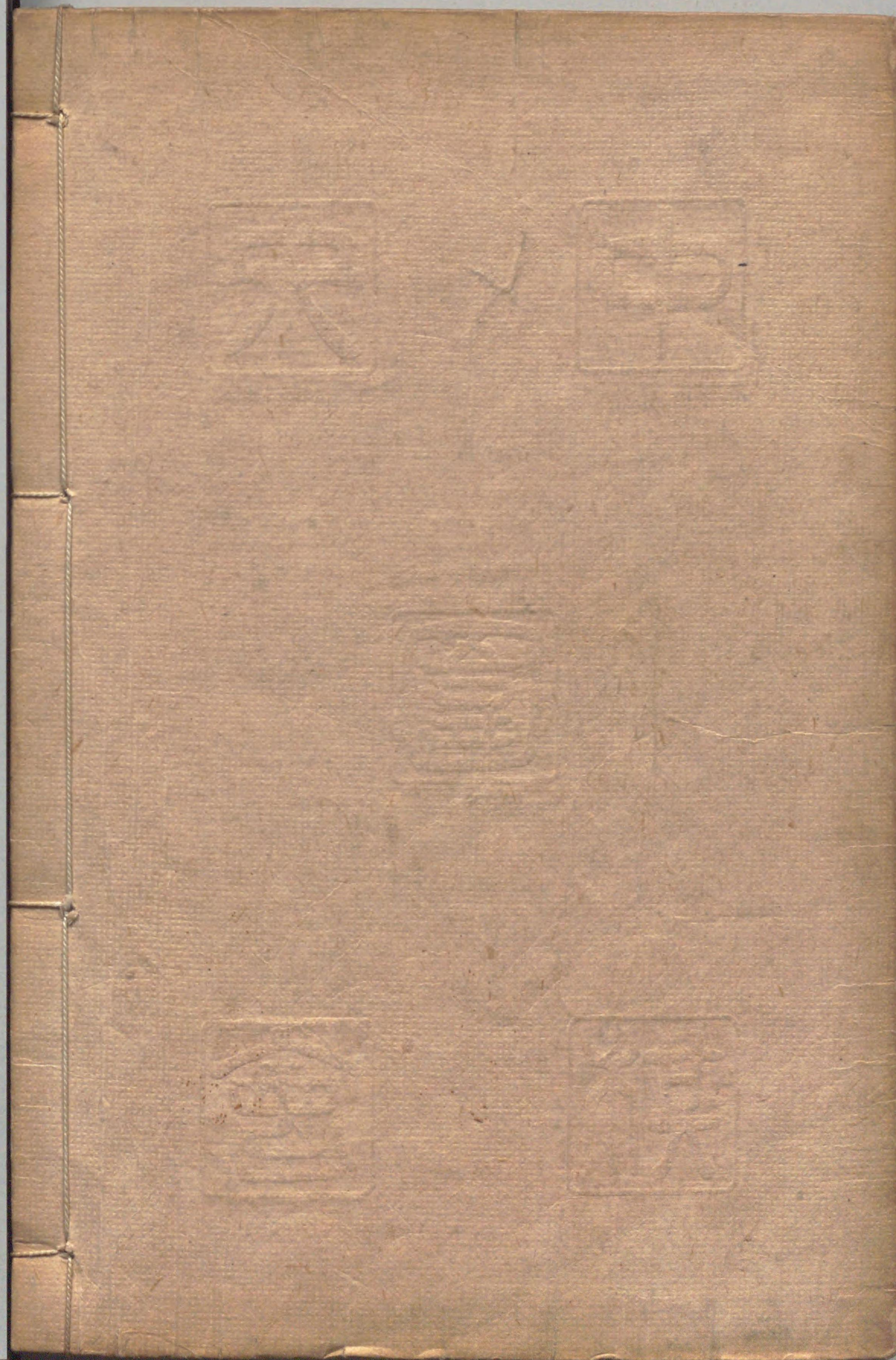
郵送料金六錢

大正五年五月五日發行
大正五年五月五日發行

大正五年五月五日發行

中央圖書館
大正五年五月五日發行





圍棋神髓

795-H633 i



1200600624015

集約済 7冊

795

H 633 v

